明治四十五年七月八日印刷
明治四十五年七月十一日發行

近松淨瑠璃集　上卷

（岡山製本）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店

同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

近松淨瑠璃集上卷索引終

ル

レ

ロ

ヨ

ユ

ム

メ

ミ

ヘ

ホ

フ

ヒ

ニ

ナ

テ

ツ

チ

タ

ソ

セ

ス

シ

サ

ケ

ク

キ

カ、クワ

オ、ヲ

エ、ヱ

ウ

イ、ヰ

近松浄瑠璃集 上巻索引

（語句の排列は凡て發音に従ひ其假名遣に拘泥せず）

ア

11廻り廻り〳〵、て輪回を離れぬ妄執の雲の句を取れり

と大將の御前に引据ゑ、猶行末は源氏の白旗、白雪の守神ぞと木綿垂の、雪を散して失せてけり。大將御喜悅淺からず、二人が頭を斬懸させ、凱歌三度三々九度。斯波細川に御盃、藤内五人に五箇國の、御加增御褒美段々に、樂車打て囃した、囃した繁つた松竹の、世よし人よし物なりよし、仕合よしの今年ぞと、祝ふ春こそ目出たけれ。

近松淨瑠璃集上卷　終

冴返りたる云々ー謠曲山姥の冬は雲行く時雨の雨の雪を誘ひて

りし働きなり。弟五郎入替り、「今迄は大炊介、今日よりは藤内五郎。四人の兄は親の躾し亂舞藝。我等は自身の才覺にて、棒を一手覺えたり。我と思はん者あらば、某が棒先に當つて見よ」と呼はつて、白銀にて線金入れし、樫の桿棒掻込んで、進み出れば四人の兄弟、「我々が一藝も揃へて軍の目を覺さん。棒に合せて囃せや鼓、吹けや横笛、打てや太鼓。討たり敵」と戯ぶれて、一聲を奏すれば、「這は花々しの者共や。討取て高名せよ」と、走井久七久八、羽根田頓藏根地大藏、栗生熊藏石坂九郎、獲物〱を提げて、討てかゝれば藤内五郎、棒の秘術の水車、横車腰車、片手輪違ひ双輪違ひ、一文字十文字、拂ひ落しかけ落し、百手を千手と術を碎き、數多の敵に駈向ふ、目覺しかりける三重 働きなり。胸板胴骨、眉間眞額打割られ、弓手馬手へぞ伏にけり。「時分は好きぞ乘取れ」と、搦手より細川勝秀、城中へ亂れ入り、堀際塀際追詰め〱、一騎も殘さず討留めしが、赤沼親子を見失ひ、此處よ彼處と尋ぬる處に、中川が亡魂は、花の吹雪の雪女一念の鬼女となつて、「あら恨めしや。如何に赤沼、假へ何處に隱るゝとも、助けはやらじ吉野山、花を尋ねて山廻り、最期の寒風又此處に、冴返りたる雪氣の雲の、雪に誘ひて山廻り、めぐり〱て輪回の恨み、思ひ知れや」と入道親子を引立て〱、「來れ〱」

三寸繩―罪人を縛る繩の法（俚言集覽）

郎四郎まで、笛鼓を習はしむ。汝は襁褓にて母に後れ、父又今死に莅む。孤兒とならんいとほしさ。路頭に棄てて養育の、又餘の親を待つ事も、誠の親の情なり。共に孝行忘る可らず。藤内五郎忠治へ、慈父藤内大夫實治判」と讀みも終らず、太郎二郎四郎も立寄り、見れば父の手蹟なり。「ありしとばかり見ず知らぬ、弟の五郎なりけるかや」五「兄々達が懷しや」と、兄弟ひしと抱き付き、慕ひ歎くぞ道理なる。城の内には聲々に、「斯とも知らば誘き入れ、疾く討て捨べきものを。あれ餘すな」と言ふ程こそあれ、我も〳〵木戸押開き、鎗先揃へて支えたり。何國よりか來りけん、藤内三郎高手小手に縛められ、陣中に跳出、「城の大將聞てたべ。先日古川が館にて、兄の二郎に搦め捕られし藤内三郎武治なり。情れなき兄奴が生けもせず殺しもせず、遣放しの放し飼、近來無念千萬なり。繩を解て給はれかし。兄二郎奴が首取て、此無念を晴したし。如何に〳〵」と呼はれば、城に籠る藤冠者、「任せて置け」と飛んで出で、冠「ヤア三郎か珍しや。大事の味方一人搦めさせては口惜し。サア働け」と解く處を、三「忝し」と腕首取り、前へ捉て引寄せ、撻と押伏せ、三「一旦の出來心、兄に背きし後悔さに、誑つたるぞ白痴者。直に此繩戴け」と、三寸繩に括り上げ、「兄弟の中直り土産にする」と廣言して、味方の陣へ押立て行く、心地好か

太郎聲を荒らげ、「情知らぬに似たれども、大事の攻口、小事に關はる暇なし。軍初めの味方に對し、涙の體は不吉なり。餘人を頼まば頼まれよ」と、愛相なげにぞ待遇ひける。「はつ」とばかりに大炊介、さてはふッつと叶はぬかと、撻と座を組み歎きしが、大「敵も味方も聞いて給べ。某程世に形きなき者はなし。誠の親は見ず知らず。捨子となつて拾はれし、名字の親の一色殿には死別れ、主君には勘氣を受け、朋輩には疎まるゝ。此身の前生は、何者が生れ變りて此身ぞや」と、諸軍勢の見る目とも、恥ず歎くぞ哀れなる。「エゝ思ひ極めたり。軍をすとも侮つて、好き敵は向ふまじ。雜兵の五騎十騎、討つとも何の益あらん。兩陣の眞中にて腹搔破り、生々の業煩惱を晴さん」と、腰刀するりと拔き、「此刀こそ生みの親より讓りの刀。是を添へて捨られしと、養ひ親の物語。二度指すべき鞘にてなし。共に冥途の供せよ」と、鞘の眞中二ッにさつと切割つたり。不思議や鞘を二重に鑿り、父の筆と覺しくて、一通の證文あり。」諸人不思議の思ひをなし、鳴を靜めて聞ければ、高らかにこそ讀たりけれ。「五番目の男子に書置く一通の事。抑我等が氏は藤原、生國は河内國、依て家名を藤内と呼ぶ。久敷浪人に沈淪して、五人の男子を設く。一藝に名ある者は、用ひられずといふ事なしといふ本文に基き、藤内太郎より、二郎三

卯の花縅—白色にて縅したる鎧

心涼しく—潔く

入亂れ、揉に揉うで三重戰ひけり。斯る處に、鐘の御嶽の方よりも若武者一騎、卯の花縅の鎧着て、大手の木戸に突立、大音上て、「城内へ申すべき事の候。我こそ入道殿に一命を救はれ參らせし、義教の奥小性一色大炊介久常、御高恩忘れ難く、命の親の御先途に鑓一本の御役にもと、御味方に參つたり。門を開き、城内へ入れて給べ」とぞ呼はつたり。斯くと聞くより新判官、塀の上に顯れ出で、「ヤァ表裏者の恩知らず、汝不義の科によつて、害せられんずる處に、父入道が情を以て、命を助け落せしに、其大恩を振捨、一大事をなど藤内には語りしぞ。犬猫の畜類も食を與ふる恩は知る。蟲同然の奴輩を、此赤沼が味方にせんずる樣はなし。疾く歸れ」と言ひすてて、城の内へぞ入にける。大炊介も詮方なく、寄手の陣を見渡せば、藤内兄弟三人陣頭に扣えたり。大炊介佶と見て、「珍らしや藤内太郎、定て沙汰にも聞給はん。某御勘氣御免の願ひ申し上たる處に、大將軍の仰には、赤沼父子が中首取つて來らば、其時御免あらんとの御諚に付、味方と僞り城に入り、誑り討たん心入れ、門外までは來れども、敵心を許さねば力なし。方々偏に頼み入る。斯波殿へも樣子を語り、御執成にて御免あり、心涼しく好き敵と引組で、討死遂げたき心底を哀れと思ひ、好き樣に披露して給べ藤内殿」と、淚を流して頼みける。

天の時云々—天時不如地利、地利不如人和（孟子）

位牌知行—諺、親譲りの祿

觸れ太鼓の、秘曲を打て祝はん」と、撥かろぐ＼と打鳴し、聲張上てふれにける。明日より、吉野の山にて大合戰、寄手の勢は三萬續き、敵役は赤沼入道。御望みの方々、明日は疾うからから＼／＼、とん＼／＼から＼／＼どんがらが、つッてん天の時至り、地の利に合へる名將の、出陣こそは三重勇々しけれ。去程に、斯波左衛門義將は、大將軍の御出に、面目開く花櫻、吉野に籠る大敵を、血潮になれと赤沼が、大手の木戸に向はる。搦手は細川勝秀、三萬餘騎を引率し、貝を吹き太鼓を鳴らし、鯨波の聲をぞ上げたりける。軍大將竹束際に駒を立て、斯「淸和天皇の後胤、足利の類葉、斯波左衛門尉源義將寄せ來る主意は、赤沼入道父子謀逆を構へ、帝都を騷し武將を弑し、四海を覆さんとする罪科據なし。誅戮せしむべき旨承つて發向す。勅命といひ武命といひ、天道爭でか免れん。速に腹切て親子首を渡せや、やつ」と呼はつて、靜々と乘入りしは、勇々しかりける武者振なり。入道門の矢切に立て、入「大將を亡し國家を望むは、弓矢取る身の定まる法、和漢其例を知らず。忠孝に托せて、位牌知行に膝を屈むる臆病者、入道一家を討んとは、鷲の巢を鼠が狙ふに異らず。誰かある、討て出追散せ」と、采押取て下知すれば、城にも鯨波を哄と揚げ、大手の木戸口押開き、切て出れば寄手の大勢、入違ひ

生媚―生意氣
づでん天下―太鼓の音より天下に言ひ續けたり

りや生媚過ぎたる奴們かな。畠山が郎黨づでん天下に隱れなき太鼓打の藤内四郎。定めて音にも聞つらん。太鼓も打たり敵も討たり、物臭い赤沼に胸が惡ふて頭も討つ。太刀も刀も要らばこそ、撥二本が干將莫耶。一曲所望かサァ來い」と、四邊を睨んで立たりけり。赤「相手になつて犬死すな。遠矢に射取れ」と差詰め引詰め、雨霰と飛來る矢を、四「樂車太鼓の曲撥見よ」と、撥押取て切拂ふは、前代未聞の二重拍子なり。矢種盡れば敵の勢、太刀拔つれて討てかゝる。大將も太刀指翳し、支え給ふ其隙に、藤内太鼓を轉ばせ寄て、天も響けどう〳〵〳〵と、打鳴らす其聲に、「すは事こそ」と三人は、我も〳〵と引返し、大勢に割て入り、斬立て薙立て追散すは、潔かりし働きなり。熊橋犬二郎滿景取て返し、藤内に討て蒐る。四「しや痴者奴、太鼓の撥の鹽梅見よ」と、目とも鼻とも言はせばこそ、無二無三に叩付け、太刀打落いて小股舁き、俯伏に取つて伏せ、軈て繩をぞかけたりける。程なく三人立歸り、「御事初めの御吉相、猶も目出度き驗しには、只今あれにて承はれば、赤沼入道吉野山の古城に楯籠り候を、斯波細川が攻寄するとの風聞、兩將が陣へ御入りあり、逆臣亡す謀、時刻を移すべからず」と、言上すれば御大將、「實にも」と同じ給ひける。藤内四郎は、犬二郎が背中に太鼓を括付け、「御出陣の武者揃へ、味方を集むる

蟷螂云々—及ばぬ所へ妄進する喩、「猶蟷螂之怒臂以當車轍」云云（莊子）

矢衾作る—各々矢を番ひて並んで射る事

敵に半死半生の深傷を負はせで置くべきか。御勘氣御免の御執成、賴み申す」とばかりにて、御前を立去りし矢竹心ぞ賴もしき。大將彼が後姿を遙に見遣給ひ、義「如何に方々、彼奴が詞は心得難し。大炊介奴が瘦腕にて、赤沼父子を討たんとは、誠に蟷螂が斧なれば、叶ふまじきと歎かんこそ、誠の心なるべきに、容易く討て參らんと、輕々しく立たるは、思へば彼奴は入道が恩を送らん爲、義教が有樣を窺ふと覺えたり。追蒐討て來るべし。疾く〳〵」と宣へば、血氣熾んの若武者共、遑るばかりに思案もなく、「討取て、御門出の一番手を祝はん」と、左足を蹈で三人は、藤内四郎相具して、揉に揉うてぞ追蒐ける。御運の成せる處なり、旅人の休らふ體にもてなし、側に寄り給へば、何處よりか來りけん、矢一つ來つて、左の袂に立たりけり。義「這は如何に」と搔投り給へど堪らばこそ、猶亂れ來る矢を凌がんと、笠を持て受け給へば、刈殘したる村薄、枯野に立てる如くなり。「今は叶はず是迄」と、此處の木蔭、彼處の草村、隱れ顯はれ遁れんと、佇む處に赤沼熊橋、弓箭の武者百騎許りが、一面に矢衾作つて哄と寄せ、赤「ヤア義教、都より尾け來るを、それと知らざる愚さよ。速かに腹を切れ。異議に及ばば、嬲り殺しにせんずる」と、鏃を竝べし其猛勢、遁れつべうは無き處に、藤内四郎取て返し、矢面に駈塞つて、「ヤアこ

壁書—御法度書

ばるゝ。斯る處に十八九なる若者、編笠脱で御前に畏り、頭を地に付け申す樣、「某は御近習に召使はれし、一色大炊介にて御座候。御壁書を背き不義の科、高眼を掠め女を相具し、欠落重罪遁るゝ方なく候へども、全く色に耽り、御成敗を恐るゝにも候はず。もと我們は一色が實子にて候はず。元來、父母もなき捨子とやらんにて候ひしを、養父一色兵衛拾取り、御目見え仰付られ、惣領に立つべき處に、段々實子出生いたし、養父兵衛尉世を去り、母にて候者、若年の弟を惣領と申し上げ、年嵩の某を末子と沙汰し、式日の御禮も、俄に末子の座に列り、御供に候六角畠山山名を始め、肩を比べし諸朋輩に、面を向んも面目なく、所詮一色が家を出、誠の親の由緣を尋ね、此面目を雪がんと存じ候折柄、心の外に御法式を背き、御所を立退き候。慈悲は上より御免を蒙り、御馬の前にて討死仕り候はば、生前の思ひ出」と涙を流し申しける。大將御立腹ましく／＼、「など以前首を斬て捨つべかりしに、入道奴が助け落したれば、をのれは入道が大恩を受し者を、召使はん樣はなし。誠あらば立歸り、赤沼入道父子の中、首取て來れ。其時は勘氣を許し召使はんず。罷立て」と御諚ある。大炊介承り、「有難き上意。赤沼父子が首取て、御憤りを安んじ奉らん。如何に朋輩達、若し仕損じて討死すとも、

薺―芹に似たる菜
さいた妻―旅杖
路の姑―ふきのたう
相撲取草―菫の事
扇の芝―平等院内にあり頼政の自害せし所

給へと、頭を傾け給ひければ、各々遙に禮拜し、君が行衛を祈念ある、御有様こそ殊勝なれ。見渡せば山の名の、朝日に氷解渡り、水や烟を槇の島、宇治の里の子打群て 唄 萠る薺摘む若菜摘む。茅花杉菜にさいた妻、妻は誰妻老ぬれば、蕗の姑〳〵。水無い川で船漕ば、其方は目籠で水を汲め。蕗の姑〳〵。あの松山の松葉をよめや。嫁菜蒲英公土筆、菫菜摘て童の、相撲取草立つ方に、勝てや勝て〳〵凱歌の、聲高無双武士の、櫓にかけて播磨投げ、上る團扇や扇の芝に、はや三番の勝相撲、名乘て過る杜鵑、待ぬに春を漏出て、弓馬の道も魁んと、漲り渡す長池や、水萍掻分け鳴く蛙。蛙軍の勝負に、お身の上の占問へば、水の源淀みなく、濁なき世に泉川、しばしが程の泡沫に、沈まば沈め頼ある、瓺の原にぞ 三重 着給ふ。さて其後に、畠山小將監進み出、「某召具し候は、藤内四郎光治と申す郎徒、太鼓の妙を得、戰場の進退、御陣の押太鼓、萬里を響かす名人ゆゑ、則ち御代々の太鼓を預け召連れ候。斯波の左衛門が家臣、藤内太郎が弟にて候へば、此者を御使として斯波が方へ内通し、一先御頼み然るべし」とぞ申し上る。義教公やゝ涙ぐみ給ひ、「我も左こそは思へども、斯波が諫めを用ひず、今斯る身となつたれば、今生にて左衛門に、いかでか面が合されん。仁義ある忠臣に見捨らるゝも、義教が運の極め」とばかりにて、御涙にぞ咽

花軍云々—旗揚の時節を待てと也

いざや白木—どうなるか知らぬにかく

鞍馬—暗き

咲いた櫻—諸國盆踊唱歌伊賀歌にあり下句花が散るを天にもとかへたり

雲雀毛—黄白交りたる毛色

よつしろ—四つの足の白き馬

梨子地—金銀の斑點ある蒔繪、無しにかく

鳶飛んで云々—道は至る所にあるを云ふ、鳶飛戻レ天魚躍二于淵一言其上下察也（中庸）

る服紗には、代々に傳はる軍配團扇、昔を匂ふ梅の鞭、畠山小將監高顯が袋に收め腰に指す。同じく郎徒藤内四郎光治、彼們もせめて攻太鼓、勝色見せて又何時か、都に歸り花軍、開かん御代の關路の鳥も、此曉を今少時、忍べや我も忍ぶぞと、門出の鴈に驚きて、笠打掩ふ人々の、世の成る末ぞ悼はしき。思ふに違ふあらましに、昨日と過ぎつ明日は又、いざや白木の弓の弦、思斷れどもおもほへず、顧らるゝ九重の、殘んの雪のほのぼのと、花に明け行く比叡の嶽、霞に籠て鞍馬山、鞍置き馬の數々を、繫がせ曳せ步ませて、折にふれたる乘心、我北山の御所櫻、春の眺めと櫻蔭。唄 咲た櫻に何故駒繫ぐヨノ。勇めば駒が、駒が勇めば、天にも上る雲雀毛や。夏は梢も青の駒、祭に加茂の瓦毛や。紅葉に通ふ小雄鹿の、鹿毛も冴えたる月毛の駒の、駒の銜さへ〳〵〳〵と、韁搔繰り〳〵栗毛に、乘た馬上はよしや蘆毛に、雪のよつしろ白覆輪や、金覆輪、今は梨子地の鞍鐙、馬はあれども此身には、徒步路越行く木幡山。弓手にみつの行先は、山梔原と聞くからは、世に隱らるゝ我々が、此身包むに賴もしく、明ずもあれな淀川の、岸にかけたる白浪を、花の網代と朝ぼらけ、鶚鵃の鳥鳶飛んで、天に沖れば魚淵に、跳る教へも上下の、道明らけき鳩の峯、正八幡の鎭座なる、我氏の神軍神、武運を守りたび

文武の花云々—此唄も例の松の落葉にあり

裸花聟云々—諺にて男は無一物なりとも女に好ばると也

立春云々—海のはて迄も恩をかけらるゝ義人公も運薄しと也

鶉衣—破れて短くなりたる衣

二番生—若き二番息子

下の巻

源義敎公道行

唄「文武の花も榮えた。初花咲いた見さいな。藤内四郎殿な、太鼓打の役で、代々の太鼓を、あそこらもとに置せて、金の撥を手に持ち、てれつくにはつッてん〳〵、てれつくにはつッてん〳〵。疾うからつとんと打惚れた。なるかならぬか、戀の中の町、なつかの〳〵中の町を通り度うはないが、七草たゝいててつへい若水。裸花聟百貫、くわん〳〵くわんとも鳴るは夜明の、鐘はつん〳〵辛いか、つッてん、天の道せばからず。立春は、鶯啼かぬ離れ島、雪の深谷の奥までも、知ればや知召されたる、御身のうへに如何なれば、御運も今は薄霞。花の晨もたゞなくに、袂は露に夕の色、赤沼父子が逆心を、防ぐ力も盡き弓の、月の都を月諸共に、落方人と漂ふ羅綾の袴、錦繍の重ね引換て、何時の間に鶉衣と綻びて、ほつれ出させ給ひける。從ひ仕ふるものとては、御側近き旅衣、狩場に馴れぬ若鷹の、鳥立も知らぬ若草や、二番生へなる若侍、六角左近太則冬、尊氏公の白旗を、守袋に護とて、疊み込みてぞ持にける。山名伊織介氏廣が、肱にかけた

はごー竿の傍に黐をつけて他鳥を捕るもの

なけれども、差當ては弟の三郎奴、首捻斬らん」と飛んで蒐る。判「三郎討すな者共」と哄と喚いて駈合せ、彼方へ追立て追捲り、三郎危く見えける時、女房賢しく、障子に張し大網外し、勇んでかゝる新判官、藤冠者が背後より、さつくと網を打かけて、「曳やつ」と引ければ、仰反に打こかされ、「これは〳〵」と手足も叶はず、はごに羅りし野末の鳥、心地よくこそ見えにけれ。此猛勢に盛治は、三郎を捕て伏せ、高手小手に縛め、寄せ來る雑兵、四方へぱつと追散らし、立かゝつて網繩を床柱に括付け、三「彼們二人は左衛門殿より舅殿への御年玉、生けるも殺すも御勝手次第。弟は拙者が正月の料理初めの初肴。これを肴に姫君を御供申して御祝言。月代剃たを幸ひに、お輿添にも女ども、侍女郎にも女ども、侍にも女ども、お侍女にも女ども」四揃花揃、きり羽子つん羽子、二役三役、笑顔つく德つく色がつく、人思ひつく知行つく。民もつく〳〵筑紫の果も、東國も靡く管領職、武家繁昌の御代に逢ふ、此の正月こそ目出度けれ。

通塗ー一と通り
鏡立云々ー以下其品々を賣りて活計の用に立つるを云ふ

巴山吹ー二人とも義仲の妾にて剛力なり

は一ッなれども、命にかはり名にかはり、幾人にならうとまゝ。これさ藤内三郎、なんと此左衛門は、其方が嫂の小晒といふ女に、能ふ似たとは思はぬか。ヲ、似たも道理。誠は藤内二郎盛治が妻、小晒といふ女房なるは。倥侗者共、女と思ひ怪我するな。並や通塗の女でない。浪人の憂難儀、針一本の力にて、夏の物を冬にしつ。鏡立を米にしたり、硯箱を味噌にする。古葛籠を忽ちに、目の前で家賃にせし神變自在の女なるぞ。去ながら、姫君の床入には、神通も叶はぬ悼はしさよ。サア此上は案じもなし。天に二ッの日なし、地に二人の殿御なし。良人の爲めに捨ん命、塵灰芥吹けば散る、煽げば飛ぶ、高の知れた浮世の中、假へをのれ們鬼神にてもあらばこそ、斬らば切らん、突かば突かふず、飛ばば飛ばん、跳ば跳ん。命限り腕限り、三ッ四ッの男首、此一ッの女首、換えば換え德。サア來い」と、身もかる〴〵早足を踏み、目の中鋭どく身は凜々しく、勇みかかれる有樣は、昔の巴山吹が、生れ變りと謂つ可し。兵「ヤア口の過たる女めかな。あれ討留めよ」と下知すれば、父權頭打物拔き、母も姫も長刀構へ、「主といひ聟といひ、親に敵對ふ大惡人。餘すまじ」と入違ひ、少時支えて 三重 斬結ぶ。其隙に盛治は、疊を上て板敷を、やす〳〵と切破り、大童になつて顯れ出、「藤内二郎とは我事よ。敵に勝劣

大義には云々―君臣の大義には父子の私親を滅す、此語左傳にあり

蟹は甲に云々―志す所各其分に相應すとの諺

に捲込ふで、思ふ樣に締殺し、心變りし女奴を、蹴殺いて死なんずものを。エヽ〳〵無念なり口惜しし」と、踏んだる板敷どう〳〵、どう〳〵〳〵と踏鳴し、血の涙をハラ〳〵ハラ、はらり〳〵と襖を切裂き牙を噛み、跳上つて怒りをなす。無念なりける有樣なり。障子の外には、女といふを姫の事と心得て、「ヤア愚かなり左衛門。敵の娘兄弟と知りながら、ゆう〳〵と聟入して、女を恨むる不覺さよ。此通りにて乾殺しに逢ひ、餓鬼道に落んより、一思ひに腹切て、修羅道に陷よかし」と、一度に哄と打笑ひ、鯨波の聲をぞ上げたりける。權頭夫婦姫君諸共走り出で、權「ヤア物に狂ふか惡人奴。仁義なる斯波殿と、緣を組で忠を盡し、身を立ん心はなく、謀反人に與し、賢人の大事の聟をも討たんとは、天魔の障碍か淺まし」と制し給へば、冠「ヤア聞ともなし。大義には親を殺す。それ搦めよ」といふ所へ、庭の一木の蔭よりも、「ヲヽ暫らく〳〵。斯波左衛門これにあり」と、夕暗照す黃金作り、五尺餘りを差貫き、搖ぎ出たる有樣は、鷗群れ居る潮干潟、蘆分け鶴のさ〳〵と、物に恐れぬ威勢なり。藤冠者驚きて、「今まで此處に聲しつるが、何處より逃出けん。それ討取れ」と呼はれば、小「ハヽア愚か〳〵。蟹は甲に似せて、穴を掘るとは汝們が事よ。天下の管領承つて、六十餘州の政道を司る斯波左衛門義將、身

鞠垣―鞠の反れぬ爲に張る網

六神通―天眼、天耳、他心、宿命、身如意、漏盡の六

七人の云々―諺、和漢古諺にあり

其日に云々―平治二年正月三日に義朝を殺し同じ三日に賴朝に殺されしより云ふ

女房は植込の數寄屋に隱れ、首尾合せ、一所に連て立退んと、手筈を取て別るれば、早暮六ツの時計の聲。一間〳〵の大蠟燭、星の下りし如くなり。喋じ合せし藤冠者、赤沼判官、藤内三郎、郎徒には走井久七、久八、根地大藏、息をも立てず拔足して、帳臺を押取卷き、鞠垣の大網をそろり〳〵と引延し、四方に張て包みしは、逃れ難なき手段なり。仕濟し顏に首肯合ひ、面々が懷中より、大釘鐵槌取出し、襖遣戸に手を揃へ、一度に打て打付たり。藤内二郎「南無三寶」と、此處よ彼處と開れども、釘付の戸の開ばこそ。障子を破り差覗けば、大網かけて軍兵ども、兵具提げ圍んだり。天へや飛ん地へや潛らん。六神通の阿羅漢も、遁れつべうはなかりけり。障子の内には大音上げ、涙を流して、二「古人の詞に僞りなし。七人の子は生すとも、女に心ゆるすなとは、今身の上に知られたり。敵は敵とも思ふべきが、をのれ女奴、此儘にて死するとも、大天狗となつて思ひ知らせん」と、戸障子叩き蹈鳴し、「敵の奴們能く聞け。昔が今に至るまで、君を弑し、父を亡みする族はあれども、主と聟とを討取て、世に立し例やある。汝知らずや、長田の庄司は、主君義朝聟の鎌田を害し、其日に其身を討れたり。因果は下れる車の如し。報はん程を思ひ知れ。せめて冠者奴か判官奴か一人討取り、雜兵の五騎も十騎も、左右の脇

重疊—此上もなき。
いはれぬ斟酌—いらぬ心配

不義か。迚も助けず白狀せよ」と、急て聲さへ慄ひけり。女房動ぜず、「アヽこれ聲が高い。不審も腹も立つは道理。去ながら不義をする妾でもなし、敵に與せん樣もなし。此處の娘御、左衞門樣を戀病の、心ゆかしの伽にとて、瞞まして斯くはなした事。それに就て琵琶の姫、大將の御判を兄の持たを奪取り、床入したらば呉れふといふ。種々思案して見れども、千日千夜案じても、女子同士の床入は、文珠の智惠にも能はぬ事。腹を立てずと御判を取る、分別したが好いはいの。コレ喘く事ではないぞや」と、事を正して言ければ、盛治聞て、「それは案の外の事、出來た〱。先其御判が取りたいが、如何したものであらう」といふ。小「これ重疊の思案がある。今宵も姫の忍ばれん、此方樣妾と入替り、暗がりに姫と寢て、賺して御判を取り給へ」二「ハテそれが何うなるものぞ。餘の分別をせい」といへば、小「ヱヽいはれぬ斟酌。妾さへ慾を離るれば、お主の爲じやないかいの」二「いやいや、終には左衞門樣御夫婦の姫君に、疵がついては後難なり。然らば某閨房に待受け、姫君忍び給はん時、仔細を語り、連て立退き參らせん。時には御判も取戻し、姫君も御夫婦と、本意を遂げさせ給ふのみか、我々が忠義も立つ。好き折柄に來合せたり。此方へ任せ案内せよ」と盛治は、上段の戸をさし廻し、臥したる體にてもてなせば、

ちんぷんかん――
譯の判らぬ事に
云ふ

立懸り、當番に近付き、二「斯波左衛門が家來にて候。主人に密と逢ひ申し度き事の候。御取次頼み存ずる」といふ。番の侍聞居け、「幸ひ廣間にお出なり。斯うお通り」二「御免あれ」と、奥に入れば上段に、器量勇々敷若侍、茫然として座したりけり。我女房の小晒に能も似たる男子かな。さもあれ、これや斯波殿ならんと、額を疊につゝしんで、「近來憚千萬ながら、藤内太郎家治が兄弟なれば、お主同然の忠義を重んじ奉る。當代のならひ、親が子を誑れば、子は親に楯を突く。況んや是れは赤沼が一族。殊に御小舅藤冠者は、君を討滅ぼさん結構と密々に承る。御運盡て不覺の事も候はば、色に溺るゝの嘲弄遁れ給はじ。とつく御供申さん爲參候仕る」とぞ申しける。顏を上げねばそれとも知らず、小「ヤア誰なればちんぷんかん。殊に此左衛門を色に溺るゝとは、宿に殘せし思ふ人の傳へ聞かんも恥かしゝ。先おのれは何者ぞ。罷立て」とぞ仰ける。二「イヤ某は御家來藤内太郎が弟、同く二郎盛治」と顏を上れば、小「なふ藤内殿か我夫か」と、走寄て縋付を、小腕捻て取て投げ、二「やれ物狂奴、大名の若君のおさし奉公と僞り、所こそあれ赤沼一家、剰へ女の身の、斯波殿と名乘つて、月代剃て其態は、唐天竺にも例を聞かず。爪一ッ髪一筋、夫に任せし身體ならずや。察する處、敵に頼まれ、斯波殿を賺し寄する計略か、但しは

復までは、寝る事無用とある上に、拔懸しては一分立たず。是非に寢よなら寢もせうが、鞘と鞘とで切合ふ樣で、齒切れがせまい」と笑ひける。姫「しや堅い事ばかり。毒藥變じて藥となる。袴なりとも解しやんせ」と、取附けば飛退きて、小「ア、譯もない。此袴の下には鬼が栖んで、いツかい口で嚙付ます。怖い事じや」とありければ、姫さめ〴〵と泣沈み、「つれもなきお心や。男に立つる心中は、珍しからぬ事ながら、みづからが兄藤冠者氏連と、叔父赤沼と心を合せ、將軍義教公の御判を以て、僞廻文を致せし所を、みづから御判を盜置、新手枕の引出物に參らせんと、兄叔父の敵となり、隱し置たる心といひ、餘り辛き我殿」と、恨み喞ちて歎かるゝ。小「御尤〳〵。御判も請取義教公へ奉り、御身の思ひも晴させたいが、肌を觸れて寢る事は、凡夫の業に叶はぬ事。何卒抱付ばかりではなるまいか」といひければ、姫「それほど寢るが嫌なもの、能ふ聟入はなされたな。今ならずば今宵の中、今宵ならずば明日明後日」小「少將程通ふても、叶はぬ間はかなはぬなり」姫「能ふ覺えてや」と喞つ目に、涙を浮べて歸らるゝ、心の内こそわりなけれ。藤内二郎盛治は、女房とは夢にも知らず、「左衞門殿聟入りの風聞あり。赤沼一家に縁を組み、心を許し給ふ事、飛んで火に入る御身の上、如何にしても氣遣はし」と、借着扮裝古川の式臺に

たうわなく―當話なくにて差當り返事せぬ事

てこそ御子ましまさず。常に冷えたる腰越より、追返されさせ給ひにし、九郎大夫の判官源の義經の、一の谷の鵯越、眞逆樣に落し子の、末葉に茂る桃園や、淸和源氏のちやく〳〵嫡流、斯波尾張守家氏、左近の大夫時氏、其子に宗氏、其子に武衞高經が三男、斯波左衞門義將とは、我們が事にて御座んす」と、口に任する系圖の巻、胡散な處を言掠め、息吐き次第に言ければ、「さても廣き御一家、舅に過たる聟殿や。三國一じや。聟に取濟いた」とぞ諂ひける。權頭夫婦の人、長物語りに女の姿、あらはれては如何と思ひ、「少と御休息候べし。我們も勝手へ罷立つ。皆々是へ」と打連て、座敷を立てぞ入給ふ。小晒は只一人、「さても浮雲や氣詰りや。眞似をするさへ術なきに、能ふ殿達は彼の樣にして、生て居さんす事じやまで」と、獨語して身を横に、手枕してぞ休み居る。琵琶の姫立歸り、さし足して寢姿の、背後に立てつく〴〵と、見れば見る程好い男。日の暮るまで待れぬと、とんと抱付臥給へば、小「なふ悲しや」と起上る、袴の相引しつかと取り、姫「こりや騷しい如何ぞいの。暮るを待ぬ新枕、御蔑みも恥かしながら、御事ゆゑに氣病して、怺え性なく落着かず。帯紐解て下さんせ。寢て見もせいで嫌はんすか」と、じろりと見たる相貌は、惚て欲しそな目元なり。小晒もたうわなく、「親達の吩咐には、彼の子が氣色本

には、顔眞赤いな他人にて、渡邊の綱こそは、茨木童子が片腕、只一太刀にうちわも内輪、叔母聟ぞや。叔母の子息の競瀧口、源三位頼政の小性立、猪隼太とは行合兄弟。近衛院の御宇かとよ、鵺といひし獸物の、帝を惱し奉る。頼政勅諚蒙つて、只んだ一矢にころ〳〵、落る處を猪隼太、九刀ぞ刺いたら畠。畠山の重忠も、緣者續きの先祖にて、三浦大介が疝氣筋、四代の末孫朝夷奈の三郎義秀は、音に聞えし大力。曾我の五郎時宗が、鎧の草摺無手と取て、引て見せんと蹈しめて、蹈んばたかつた股野の五郎、力損にて我們まで、いかな殿御もしつかとだきしめ、だけばあられの佐々木殿、土肥の二郎も從弟筋。從弟程よふ仁田の四郎、富士の御狩の高名は、末代末世記錄に載た、猪武者の爭ひに、負腹立て讒言いふ、梶原とは何でもなく、鎭西八郎爲朝の外戚腹。瓜の蔓に那須の與一、扇の的より精兵の達者。弓の傳受の家ぞとは、これぞ系圖の始めなる。それより代々に傳りて、楠多門兵衛正成が嫡子犬坊丸、二男悪源太義平、三男山邊の赤人は、今古無双の歌人にて、公家にも一門在原の、業平の中將の、妾腹の孕籠り、妻も籠れり若草に、けふはなやきそ武藏坊、辨慶が七番目の末子、七ツ道具の栓揆頭、法然上人の一の御弟子と有難き、熊谷の二郎直實に、三代の一人娘、靜御前は血の道持、さ

刺いたら畠―才太郎畠にかく

佐々木―從にかく

外戚腹―妾腹

那須―茄子

犬坊丸―工藤祐經の子

妻も籠れり―武藏野は今日はな燒きそ若草の妻も籠れり我も籠れり(伊勢物語)

光源氏―源氏物語の主人公。峰より落つる云云―みなの川を源とかへて續く

「イヤ重ねては重ねて、冠者奴も、言懸つて聽ねば一分異なものなり。是非語りともなくば、何うぞ又語らせ樣もあるべき」と、苦々しくぞ申しける。今は遁るゝ方もなく、小「然らば語つて聞かせ申さん」と、まざ〳〵しくは言けれども、夢にも知らぬ斯波の系圖。何處へ取付言ふべきやら、這は如何せんと、思ひ亂れて居たりしが、此上は力なし。古への大將兵を、思出すを幸ひに、口へ出るまゝ嘘八百、言ふてのけんと心を据へ、膝立直し息次し、左もありさうにぞ語りける。

もんさく系圖

小「抑斯波の武衞の館と申すは、代々左右の兵衞に任ず。兵衞の官の唐名なれば、家を武衞と名付たり。斯波の氏は源氏なり。惣じて源氏もしな〴〵の、清和源氏、宇多源氏、村上源氏、嵯峨源氏。中にも斯波は清和源氏、源氏〳〵が四源氏御座る。中に清和ぞ世に光る。光源氏は敷島の、歌道の傳受と聞えたる、百人一首の卷頭、天智天皇十八代の帝、陽成院筑波嶺の峰より落つる源の、頼光に胤腹一つの御弟、頼信の跡取頼義の惣領、嘘でないよの愛宕白山八幡太郎、義家に五代の後胤、上總の介義兼末葉、兵庫頭坂田公平

耆婆―天竺の名醫

諸禮―禮儀作法

父母聞かば事姦し。隨分忍べ」赤「忍ばん」と、座敷を立て判官は、土民の家に宿を借り、案内をこそ待にけれ。殿御見んとて琵琶の君、今日はハラリと氣も輕く、此頃になき笑ひ顔、男といへる妙藥に、耆婆も匙をや捨けらし。父母ばかり合點にて、深く包む事なれば、兄藤冠者家來まで、誠の斯波殿御出と、伺候の侍頭を下げ、「御通」と申し上る。女心の男の眞似、顔に紅葉の錦緣、疊障りも足浮て、舅君にも姑にも、何う挨拶を諸禮やら無禮やら、唯「應々」と禮をして、頭下げるに隙もなく、割り膝痛く兎もすれば、女子居住居しどけなく、行儀つくるもいた〲し。姫君心わくせきと、「申し左衛門樣、何がお氣に入らぬやら祝言の取遣も、渡守なき焦れ船、片破れ舟の片思ひ。能ふ煩はして下さんした」と、恨しさうに宣へば、小「焦れ船でも何船でも、手前に帆柱持合せず。本意を背く仕合」と、只禮してぞ居たりける。藤冠者、此體を心得ずや思ひけん、冠「これ〱左衛門殿、貴殿の御事は斯波の武衛のお館とて、系圖正しく是ある由。氏は何氏、何れより別れしぞ。承はらん」と申しける。南無三寶と思へども、知らずと言はば惡かりなんと、小「ムヽさては、私を誠の左衛門にてはなきと思ふ疑ひか。拙者が家の氏系圖、存ぜぬ事や候べき。末永く緩々と、御物語致しません」とぞ答へける。冠者何がな詞質にせんと思ひ、

二面云々―奈良山の兒手柏の二面にかにも角にもねぢけ人の友（萬葉集）

古川―降るにかく

笑壷―餘念なく笑み興ずる

唐辛をかつ噛り、寒風を凌いで供をせろ。先へ行くべい奴様、許さしやんせや」と口掩ふ。袂張肱のしく／＼と、歩むとすれど襠の、身癖顔癖引包む。殿御模樣の重着の、うら懐しき女肌。男女の二面、側柏や此手振れ。ふれ／＼お前を突立てろ。まかせて置る春の霜、古川館へぞ二重迎へける。花聟がねに相生の、島臺飾る座敷構、左も賑しくぞ見えにける。家の惣領藤冠者氏連は、妹の祝言と、裝束あらため居る處へ、都より赤沼判官下向の由にて案内し、密に冠者に對面し、「此頃は御飛脚、殊に斯波左衛門義將聟入との御知せ。是ぞ究竟の時節と存じ罷下り候が、して夫れは必定にて候か」と、いへば冠者小聲になつて、「中々の事。妹の琵琶の姫、左衛門を戀焦れ、病氣重り候を、父母歎きて申し遣はし候へば、左衛門も合點し、今日聟入り仕る。我們には何も知らせず。是ぞ天の與へ、手を合せて討取らんと、内通致せし處に、早速の御下り。大慶／＼」とぞ申しける。判官悦び、「さてなふ日外や、此處にて失ひし將軍の印判も、必定琵琶の君の盗みしに疑ひなし。妹とて油斷せられな。それにつき此者は、藤内太郎、二郎が弟、藤内三郎武治、兄を疎んじ我々に仕へんと申すゆゑ、召抱え候。斯る處へ聟入する左衛門奴は、死に來る同然」と、笑壷に入てぞ笑ひける、冠「ヤアこれ／＼下人共には一味もある。

斯まで談合なりし事。月代剃るが嫌ならば、三十兩を今此處へ、立て歸りや」と語りける。女房餘り可笑しくなり、「寺よりそれは優ならん。常々聞きし事もある。左衞門樣の眞似をして、合戰軍の咄でも、見事間には合せうが、みづからと姫君と、肝腎の夜討には、如何も勝負が付くまい」と、笑ふて憂さを晴しけり。老「さては合點か悦ばし」と、荷物を解き櫛道具、衣裳品々取出す。女房常に連合の、髮月代は手馴れしが、自剃自鬢の初元結、揉む黑髮を玉水の、底の玉藻と水鏡。油の梅花剃刀も、匂を惜む額際。剃れば芥の花蔓、髮置しての幾年か、見馴れし顏に我と我が、別れの涙亂れ髮、共に落來る膝の上。小枕捨て丈長も、捻元結に大髱、眉の引黛男眉、鐵漿落す磨砂。磨楊子の靑柳に、櫻咲たる二役や。女とも見え男なら、御物上りの若者と、擬ふばかりになりにけり。衣裳あらため太刀刀、衣紋繕ひ待つ處に、引馬乘物徒士侍、七ッ道具を押立て、「古川權頭濤氏より、花聟斯波左衞門義將公の御迎」と、呼はれば、小「アレ馬がでんでんうつはいの。アヽ怖や」とぞ逃にける。肝煎も氣毒さ。老「これこれ是は何事ぞ。小なまりになまつて、如何すべい斯樣すべいと、男らしう遣らうぞや」と、私語けば打首肯き、小「ムヽなんと身が方へ、舅殿よりお迎ひだといふか。ヲヽ太儀太儀。目出度いをりから、駄酒でも打飮つて、

油の梅花—香のよき水油

靑柳に云々—齒楊枝は柳の木にて作る、靑柳は男、櫻は女に喩へて云ふ

の眞似する約束は、此方や知りませぬぞ餘まりな」と、煙草を吹て顔を掉る。老「ハテ此處な人、あんまりぎし〳〵言しやるな。金遣て手形は取る。それが嫌なら、如何なりと三十兩の金立て、此處から往んで貰ひましよ。チヽ生暖い」と、上着脱ぎかけ、汗押拭ふて居たりけり。女房しく〳〵泣出し、「何事の報ひぞや。奉公の身の代が、男の身にも附く事か。三年經つは夢の中。月代剃た髪つきを、戻つて男に見せられふか、人に面を合されふか。道でさへ斯る事。猶行先が思はるゝ」と、泣けど悔めど甲斐もなく、思ひ直すも亂るゝも、心一つの涙なり。小「歎きて歸らず兎も角も、せめての事に樣子を語り、堪能させて給べかし」と、泣く〳〵いへば、肝煎悦び、老「チヽ語らねば叶はぬ事。寺と申すは僞り、心を靜め聞給へ。此國の大名、古川權頭淸氏殿の一人姫、琵琶の君とて美人あり。斯波左衞門義將殿と嫁許。されども父權頭殿は、赤沼入道幸滿と、水入らずの伯父甥とて、斯波殿の御祝言、今に延て沙汰もなし。おいとしや琵琶の君、二十歳の花は散り過ぎても、殿御の顔も見給はず。只斯波殿を戀慕ひ、思積つて氣病となり、今養生の眞最中。それゆゑ嫖致の好い人を、斯波左衞門義將と名付け、心に勇みつけたらば、自然と藥も廻らんと、醫者衆の指圖なれども、眞の男はならぬゆゑ、男らしい女中のお尋ねにて、

わや—無茶

わりなく—是非なく

道草—道中隙取る事に云ふ

玉水—掬ぶの緣、山城綴喜郡にあり

なし。其金子取て失ふ」といひければ、「請取らいで置ふか」と、小判吟味し數讀みて、皆皆京へぞ歸りける。盛治渠們を見送りて、「エヽ心ない雜人かな。盗まぬには極つたり。此歎きを見るからは、情も了簡もあるべき事。此上はわやにする。取戻いてくれんず」と、駈出るを女房、「ハテ好いはいの。金より命が大事なり。迎ひが來れば往ねばならず。三年の内逢れぬぞや。死なふも生ふも知らぬもの、迎ひの來ぬ間にツイ鳥渡、門出祝はを御座んせ」と、泣腫し目を莞爾と、涙片手の暇乞ひ、哀れわりなく 三重 別れ行く。跡は霞の八重一重、山吹の瀬を我中の、天の川瀬と又何時か、馴にし夫の盛治に、逢ふはたまさか偶々も、歩みならはぬ大和路や。涙に揉れ駕籠搖て、額重しと徒跣足、道の伽とや媒介が、咄しも今の氣に合はず、未だ春淺き御室山、花には雪を雇人が、戀知らぬやら荷も輕き、肩荷の端に烟草盆、折々休む道草の、今の悲しさ忘れ草、思ひ燻らせ思ひ消し、胸に解かせ手に掬ぶ、玉水の邊に着にけり。肝煎の老女聲作り、「これ申し御内儀樣、今宵は奈良に泊らせ、明日はお國へ着く。此處で月代剃せ、衣裳も替て袴を着せ、男の姿になしまする。用意なされ」と申しける。女房大きに仰天し、「それは嚊樣何事ぞ。寺方への奉公と、聞くも心に入らねども、それはいふて返らぬ事。月代を剃り袴着て、男

卞和が云々―和氏楚山の下にて璞玉を得て王に獻ぜしに石なりとて左右の足を切られ三度目に寶玉なりとせられし話(韓非子)

無下に―無價値に、空しく

し場へ行懸り、我盗まぬに極れども、分疏もなき首尾となり、既に牢舍の縛繩、かゝらんとせし處に、御身が情の三十兩、ふつと思出せし故、それを贖ふ約束にて、口惜ながら阿容々々と、面を拭ふて來つたり。御身が無念の心底を尤と思ひ遣る。我も生んず覺悟なかつしが、卞和が三度足切られ、本意を磨く夜光の珠、韓信は市に股を潛り、勾踐は石淋を嘗て會稽の恥を清めし例し。それ程こそはあらずとも、盗人の虚名を忍び、武功を立て一天に名を留むべき念願。繩目の恥を遁れしも誰が情ぞや。妻ながら親にも劣らぬ厚恩を、生々世々に忘れはせじ。思へば如何なる貧乏神、よしなき處へ導きて、思ひも寄らぬ難に遭ひ、情の妻の身の代を、無下になさうか口惜や。浅ましの運命や」と、男泣きにぞ泣居たる。女房はつと心暮れ、勇む心も弱々と、「さても〳〵、先の見えぬは浮世ぞや。良人の爲に捨る身は、何れも同じ道なれど、世に立て、所領の主、乘馬よ引馬よと、綺羅を研いて浪人の、萎んだ肩の怒るをも、人にも見せつ見ん爲に、添ふて間もなき女夫の中。三年といふ年限て、生別れする身の代を、寃の難に換んとは、口惜や本意なやな。金惜いとは思はねども、夫婦別るゝ三年の、月日が惜い」とばかりにて、聲も惜まず泣居たり。警固共、「遲し〳〵、金子を渡せ」と聲々にいふ。妻「ハテ渡すまでも

身だしなみ―見にかく、豫て心掛くる事

覺に涙はすゝめども、差當つて變替も、泣く〳〵判を捺ければ、價の金を讀み渡し、老「只今迎ひを連れ參らん。御亭樣とも暇乞ひ、門出祝ふて待給へ」と、忙しげにぞ出にける。斯る處へ藤内二郎、大勢が取卷て、「逃だてしたら撲据へる。撲殺せ」と哄動けば、二「逃はせぬ棒あてな」仲「逃たら撲ぞ」三「棒あつるな逃はせぬ」と、命から〴〵來る體。女房佶と見だしなみの、手鎗提げ突と出、「仔細は知らねど我良人。其處を放せ。放さずば片端に突止ん」と、突出す鎗を桿棒にて、打つ拂ふつ叩き合ひ、既に危く見えたりけり。盛治聲をかけ、「やれ女房はやまるな。此人々にも一理あり。樣子を聞け」と制すれば、小晒は齒齘をなし、「エヽ腑甲斐なや。理にもせよ非にもせよ。浪人なれども藤内二郎盛治といふ侍ではないかいの。白晝に手籠に逢ひ、其恥が立身の害にならいであるものか。良人を出世させんが爲、奉公に身を賣て、只た今手形して三十兩取たる金、皆空事になつたよな。賤しき下々相手には不足ながら、夫婦此處で討死し、名を潔ふ殘さん」と、金子を大地へばらりと捨て、杖も棒も厭はゞこそ、無二無三に突立しは、人の妻たる龜鑑なり。二郎手籠を振解き、勇んで勵む女房が鎗の柄をしつかと把、二「ヲヽ健氣なり頼母しゝ。先靜まつて仔細を聞け。さりとは武運拙きは、今日都本阿彌にて、百貫の折紙道具盜まれ

いとしぼなげ―いとほしの轉

おさしー子供のもり役

と、兩人兩手を引張れば、一人は髻を取り、四方を棒にて取圍み、「サア歩め」といふ處へ、姫玉椿走出、「やれ其人は御存じなし。いとしぼなげに何事ぞ。許してたも頼むぞ」と、泣叫べども聞入れず。先を拂つて途次、面も恥も名も晒の、宇治の里へと三重送り行く。世も微なる陽炎の、森の下庵軒荒れて、月の影さへ盛治が、妻の女房小晒は、良人の出世の物入に、我身を捨る志、あはれ優しき貞女なり。媒介の老女、供の男に財布を持せ、「内儀樣御座りますか。今日御契約の日限ゆゑ、金子も渡し手形をも、極めません」と腰懸る。小晒悦び、「何故に遲いと心待いたせしに、先此方へ」と請じ入れ、「さて良人には、大名方の若君の、おさし奉公と言聞せ、良人の判も預りしが、世間へも其通りにいふてさへ下されなば、茶屋廓の外は、何なりとも嫌はねども、先のお主の名を聞て、手形も仕度い」とありければ、小聲になつて、老「勿體ない。お山や女郎に遣るものか。先のお主は、さる御本寺の大寺の、悟開いた長老樣。寢酒のお伽にそれ樣を、三年限て置たいとの御事。此方から沙汰が仕度うても、彼方が嚴い隱密。三十兩は捨金、四季の仕着に遣ひ銀、未來も惡ふはあるまいぞいの。サア金渡さう判なされ」と、手形と共に出しける。女房はつと涙ぐみ、「如何に良人の爲なるとて、出家に思はれ、來世まで取外さん悲や」と、不

言だら〳〵脇指抜けば、あゝ身の疵物。「こりや〳〵刀の身を見よ竹の箆。さても見事なお侍。冬としならば此刀を、疊叩きに賣うもの」と、一度に哄とぞ笑ひける。藤内涙にせきくれて、「盗人とは寃罪の難。天道も晴し給ふべし。武士の刀に竹の箆、こそげても此恥を雪ぐ事のあるべきか。舌喰切ても死たし」と、我身を摑み腕に嚙付、大地を蹈み付け齒をたゝき、絞り泣くこそ道理なれ。いや〳〵少しき恥を忍んで、大功を立るは、丈夫の勇と思ひ定め、「これなふ心あらん人は聞て給べ。毛頭覺えなけれども、折惡ければ分疏なし。去ながら、一門兄弟歴々主も持たる者、我も望みある身なり。繩かゝつては一家の破滅。又後日に盗人あらはれなば、此家内、主人下人何十人あるかは知らず。犬鷄に至るまで、生て置ぬが合點ならば兎も角も。されどもそれも無益の事。願くは了簡あれ。某身上かせぎの爲、妻の女房、今明日に金子三十兩借調へると申したり。刀の折紙、幾許か知らねども、盗人の實否立つまでは、右の金子を渡し置ん。逃失せる身にもあらず、土地で人にも知られたり。繩を許して此了簡、賴み入る」とぞ申しける。家の番頭文平次、「ムヽ聞えた〳〵好い言分。折紙は百貫、町人方の賣道具、旦那の留主に失ふては、此文平次が譯立たず。三十兩あるに極らば、五兩は某まどふべし。宿へ送れ逃すな」

夕節—云ふにかけて祝の振舞をいふ
棒鞘—圓き鞘の刀、忘ずるにかく
身開—身の疑を解く事
燒付—鍍金にかく

負ふ銘の物、今日は御鏡開きにて、奥の座敷に飾られたり。立關からは人目あり。それ路次口の錠明きやや。沙汰しやんな」と夕節の、人に紛れて入にけり。藤内三郎武治は、兄が歸るさ待伏し、投げてくれんと元の道、本阿彌の門の內、奥の路次口細目に明く。何かは知らず入て見て、「叱られたら出る分」と、獨語して身を細路次の、取次の桁緣の、障子を明て床の間の、床に置れし一腰の、好き折紙の相州物の、中に取ても出來心、盜みといへば氣も後れ、前後棒鞘身は慄ひ、足もしどろに取て出、行方知らず成にけり。暫くありて家內には、「折紙道具失たり」と、家來は面々身開きに、上下騷いで共吟味、出入を穿鑿する處へ、路次より歸る盛治を、門外まで附出して、「盜人知れた」と押取卷く。二郎騷がず、「これ〱卒爾せられな。我們は宇治の邊に居住の浪人。用事あつて出京し、女中方の誘引にて、御太刀頂戴いたせし分。胡亂ならば女中衆へ尋ねられよ」と斷はれども、「吐す程晝盜賊。旦那の留守を狙ひ、女子子供を瞞し、手の好い盜人、打よ括れ」といふ處へ、外より歸る下部の男、「只た今一二の橋にて、棒鞘の刀持て、走つて下へ下つた」といふ。家來「扨こそはや同類に渡したな。大小もいで搦めよ」と、六尺仲間立蒐り、「意地張らば撲殺す」と、捻伏て大小取り、仲「いやはや見懸ばかりの金拵へ。燒付で火傷すな」と雜

老女房―六十二の年上の老女となり

米―妓にかく、八十八を合すれば米の字になる故

しよげ―間のわろき體

往來も見る―往來の人も見てゐるゆゑ恥かしからん

蚊が喰ぬと申すゆゑ、少しの間借まする。女中方の大事の物、長ふつきは致しませぬ。早ふついてのけませう。一ィ二ゥ三ィ四ゥ五ッ、七八ァ九」と口早に數ふれば、玉椿打笑ひ、「お年は其樣に往きそむないが、數はたんと取らしやんす。眞々においくつが定じやまで」と手を取れば、二「ホヽウお家程ありて好い目利。我們は恰當疵なしに二十六。羽は疾につき仕舞。是は又女共が名代に突く羽なるが、なふ此女が、私に六十二の老女房、當年八十八歲。顏の皺は漣や、志賀の山越え頭は雪。それでも八十八じやとて、我手に米とやられます。此米の八十八、一日には突れまい。數取許で仕舞ましよ。十二十三十四十五十六十七十八十、五六七八。なふ草臥や」といひければ、姫は羽を引たくり、「お內儀樣はあるまいが、いかい嘘を言しやんす。羽子突く事も上手なり。嘘つく事も上手なり。抱付く事も上手であろ。此抱付の上手奴に、抱れて見たい」と抱付けば、有繫の藤內しよげになり、扇の骨で白壁に、小坊主書てぞ居たりける。侍女共取付て、「さても小氣な往來も見る。門の內へ些と御入」と、手を取て引ければ、藤內是ぞ幸と思ひ、二「何と此家に、將軍より御預りの銘の物、數多あると承はる。武士たる者の冥加の爲、戴く事はなるまいか」と、皆までいはせず姫悅び、「おやすい事〳〵。將軍樣の御重代天國小鍛冶義光、其外名に

箆―竹の箆とへらず口とかく

唄―何もかもにかく

萬歳殿云々―戻る萬歳を呼び、鼓を貸せ汝は彼所にて見物せよといふ也

盛治」と、上は立派な鞘口に、箆を遣ふて別れける、心の裏こそ不覺なれ。二郎見送り、「弟と思ひ、甘やかす情が、却つて頭勝になりけるよ」と、呆れて立し垣越しに、とり〴〵響く羽子板の、音は娘の集りや。笑ひに春の色籠る、祝儀も籠る伊達籠る。情も何も鳴の羽、雉子の風切思ひ羽や、思ひの數を 唄一と二た三い四う、十二三まで未だ君知らず。十五六から濡鷺の、羽の數々年の數、讀む聲聞けば姿まで、左こそと思ひ遣り羽子は、正月めきし景色なり。藤内二郎も曲者にて、さても間の好い羽子板の音。姿見たしと思ふ處へ、仕舞ふて戻る 二「萬歳殿、鼓を少しかしこへ寄て見物せよ。面白い事して聞せう」と、戀も鳴手の曲鼓。垣の内には本阿彌の、一人娘の玉椿、侍女までが拍子聞き、鼓に合せてつく羽の、打合せたる如くにて、往來も留るばかりなり。しづ心なき春風の、羽を吹上げ横ぎつて、藤内が襟袖にはら〳〵と落とまる。二郎袂に拾ひ入れ、鼓を渡し萬歳に、目禮してぞ返しける。羽子板もつて玉椿、侍女諸共走出、藤内には氣も附ず、其處か此處かと梅の枝、搖りつ振ひつ尋ねける。藤内羽を取出し、扇を廣げて一二三四といふ聲に、姫振返り、「アレ彼のお人の拾ふてじや。意地の惡い。これ此方へ下さんせ」とありければ、藤内眞顔になり、「誰方の羽か存ぜねども、年の數つけば夏痩もせず。

嬉しう御座る—態と反對に云ふ
木上り—獄門

去ながら、二人の兄が主と頼まん斯波殿の大敵、赤沼に隨ふ其方に、此大切な金子與へて、敵に勢付ふとは言難し。天下の忠臣賢臣と呼るゝ斯波殿に、嫌はるゝを口惜と思ひ、手を下げ稼いで奉公し、斯波殿にも戀慕はれんと思ふ心はなく、末頼みなき佞臣の、赤沼を主に取らんとは、道に背く無分別。追付獄門の相伴せんずる瑞相。エヽ笑止な」と教訓ある。氣短き三郎ぐつと急き、「春早々から獄門の相伴とは、兄じや人嬉しう御座る。此三郎が相伴するか、賢臣の斯波左衛門を木上りさするか。今御覽ぜ」と言返す。二「ムヽ扨は斯波殿に附く我々なれば、太郎殿も、此二郎をも討べきな」三「ヲヽまさかの時は、此三郎も弟とて容赦はあるまい。すれば組んで落る一戰に及ぶ時、貴殿の首は某が討取り、兄甲斐には獄門の木を太ふして、外よりは五六寸も高ふ上てやらん」といふ。二郎腹に据兼ね、「うぬが知行になる某が首、戰場までもなし。今でも取られば取て見よ」と、脇指に手をかくる。三「イヤ此三郎が取兼ふか」二「サア討て」三「サア來い」と、柄に手を懸け睨み合ふ。目の鞘外しの下鋼、身は竹刀抜兼て、暫し挑み合けるが、三郎飛退去て、「これ二郎、好い加減に引もせず、我們が大小、眞身でなしと侮るか。組伏せて赤沼殿へ、引て行も合點なれど、兄弟のよしみ許し置く。追付大小調へて、眞劒の勝負せん。待て居れ

主旱魃云々—主取りに不足せぬ事

引きませぬ—しゆかり受合ふ事

町住居、鼓太鼓に、武士の道忘れたかと思ひしに、頼もしい心懸。然らば咄す事のある。兄の太郎家治の主君斯波殿は、近日義兵を起し、佞臣赤沼を攻滅さんとの用意と聞く。此處ぞ我們が立身の種。斯波殿の御味方に加はり、兄太郎殿諸共に、軍功を勵んと思へども、刄物とては脇指一本、斷れ具足の一領も才覺とて叶はず。如何せんと思ふ處に、これ女房は持つべきもの。黃金三十兩調へてくれふといふ。此金子では、御邊と我が軍用意は物の見事、斯波殿の御手に屬し、藤内太郎、二郎、三郎と名乘て、赤沼親子が首提げ、目覺し高名御感狀を拜受し、今の泣言止ふぞや」と語れども、三郎は少も乘らぬ顏色にて、「ヲヽ主旱魃はいかず。斯波に扶持を受んとは勿體なし。日外兄太郎殿の肝煎にて、某奉公望みしに、氣に入らぬとて在付かず。斯波に嫌はれ無念の折節、赤沼入道幸滿殿へ肝煎らんといふ人あれども、拵へに資本なく、延引に及ぶ中、犬二郎滿景より、斯波左衛門は勿論、宗徒の郎黨一人にても討來らば、三千石は相違なしと、これ慥な書中到來す。御内方の調へ給ふ金子、少々配分あれ。身の廻り大小拵へ、斯波が面打、赤沼殿に奉公し、三千石では仕好い事。二人扶持や三人扶持の御合力、兄貴其處邊は引ませぬ」とぞ廣言す。二郎勃然空笑ひ、「兄なればこそ二人扶持の合力とは先過分。

とろゝ―鳶の鳴聲ととろゝ汁とかく

人間萬事云々―世の幸不幸定めなき諺(淮南子)

香爐峯云々―遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看(白氏文集)

恵方棚―歳徳神のある方にて萬福集まると云ふ方向に吊る

本阿彌―刀劍の鑑定家なる故、ほ、こぼれ、研、目利の縁語を連ねたり

竹光―刀の身が竹なるを云ふ

春―晴にかく

呼ふ鶴の聲。此方は似あつて雀はちう／＼、烏はかァ／＼、鳶とろゝ山の諸、精のついたる妻戀猫、猫の化粧、鼠の嫁入、ちょつちつくり色をやる。戀から生れた人間萬事、塞翁が馬のうつた太鼓の撥、狸がうつた腹鼓、うつたら鳴るべい、何になるべい、知行に成るべい。なれ／＼なれ／＼、花に馴來し王城の町。其方に高山去年の雪、これ香爐峯の心なんめり。簾を捲けばお肴に、嵐が雪をもつて北山東山、西に姉里戀廓。正月買の初君の、袖を連ぬる裳裾を列ぬる。ぬる／＼ぬつと出る日影に、南枝花始て開く、梅に鶯紅葉に鹿、獅子に牡丹昆布に山椒、小粒な男も陽氣を受て、和歌を囀る一曲奏る。つる／＼つる／＼、釣た處を恵方棚、賑ひ申す榮え申す。押へ申す食申す。色めき申す時めき申す。御亭を祝つて御禮申す。ありやこりや、はつあ新玉の春ぞ長閑なる。折知り顔に白梅の、路次の垣ほに咲こぼれ、研拭ひたる玄關前。これは本阿彌の屋造と、目利したるも理りなり。藤内三郎武治、奥を見入て、「これ兄者人、本阿彌右衛門太郎清祐が居宅、此身代は羨しからず。此内に澤山な銘の物の大小を持つならば、好い主取て立身を致すもの。何をいふても此竹光、何時か此の無念さを、春といふは名ばかり、心は未だ師走じや」と、小首を投て悔みける。二郎盛治聞も敢へず、「浪人の

加賀皮—此も名高き皮
しつたん—鼓の音
佐保姫—春の神
てつかり—シツカリ
だん袋—此邊天岩戸開きによせていへり
物もう—物申さうの略、どれいは何れよりの轉（貞丈雜記）
御吉慶—輕薄にいひかく、慶庵は追從輕薄なれば云ふ
しはす—やつる、師走にかくる
素浪人—酢にかく
ふく〳〵—膨るるにかゝ

ふた鳥の懸聲聞きやいな。藤内三郎殿大鼓の上手で、しつたんにしつたん〳〵。七段作る御百姓、明年は八段じや。さ明年は十六たん〳〵、丹波の國の御百姓と、勇みうつたるはさつても打つた大鼓と、どつと褒て通した、春めく大路ぞゆたかなる。ヨイ、一夜押開けて四方の春、空の顏莞爾やかふくやか、につこりほやりの笑顏は誰だ。ア、それだか是だか、春の司の佐保姫君、霞の衣當流仕立、しやんと着こなす四尺八寸。あざを握つて押せ〳〵、押込め乘込め米俵、でつかり蹈へた大黑〳〵。大黑舞と囃されて、天の戸袋だんぶくろ、くわつと開けた初日の色、あら面白やお目出度や。草木心なしとは申せども、花實の時を違へず。實に陽春の德利燗鍋屠蘇の酒、三杯機嫌の朝ぼらけ。物もう。どれい。先當年の御吉けいはく慶庵。めつきり今歳は若うなる〳〵。成程成程、目出度い事の言種山草、穗長は白妙楪の淺翠。わつさりわさ〳〵、紙衣の袖にも春立つと、いふばかりにて金かけて、買ふた袴のしはすの氷、叩いて碎いて若水の、湯殿初め着衣初め、衣紋繕ふ若い者、藤内二郎、同く三郎、合せて五郎は曾我に劣らぬ住家にも、鱓鱠の素浪人、雜煮の上置輪ん切大根、ずんでんどう〳〵打治つた、時世に逢ふも他生の御緣、花の宴、緣から落ちたお乳の人、打た處がふく〳〵福德、千歲を

中々の事—いかにも退く

永日—春の永き日

ぼんじやり—優らしく、此歌も松の落葉卷三にあり

あかう—名ある香木の鼓の胴

左衛門横手を打て、「ハア、左樣じや過つた。君の御爲大事の命、此處は死ぬる處でなし。一先落ん。御身も退くか」勝「中々の事」斯「やれ勝秀、斯程に揃ひし忠臣に、君君たらば、唐土も靡け從へ治めんものを、無念にないか勝秀」勝「口惜いは左衛門」と、互に鎧の袖と袖、取付縋り泣居たる、忠義の涙ぞ哀れなる。勝「ヤア時刻移して益もなし。朋輩の緣盡ず」斯「また逢ふ事は命次第」と、泣く〳〵左右へ別れしが、又立歸つて斯「これ〳〵、思へば明けていまだ對面せず、これ當年の逢初め」勝「されば〳〵其通り。先新春の御吉慶」斯「此方も」勝「其方も」斯「互に目出度い御越年」勝「此春よりの御悅び」斯「充分の御仕合 珍重〳〵」勝「お盃は永日〳〵」斯「然らば春永、末永、月永、日永」年も壽命も永〳〵と、傳はる御代の時に逢ふ、春の門出を祝ひける。

中の卷

ぼんじやり咲て、匂ふた梅の花がた見さいな、藤内二郎。アリヤコリヤ。殿はな、小鼓のヤ、得意物。あかうの胴に加賀皮くれ、くれなゐの調べを、千鳥がけにかけさせ、合せ打たるはさつても打た小鼓と、上の町下の町、どつと褒て通した。ほんのり明て唄

斷金―仲善き事。二人同心其利斷金(易經)

こそ多きに御邊が此討手は、此義將が諫言を僻事と思ふ歟一ツ。但某程の弓取の首取て、高名せんと思ふ歟二ツ。まッた佞臣赤沼と一味の心歟。三ツの内明さば我も明さうず。勝秀如何に」とありければ、勝「チヽ、尤の疑ひ某が心はな、管領の其中にも、御邊と我は斷金の契りなるに、我にも知らせず都を開く心底氣遣はしく、死すとも生くとも朋友の交りを違へじと、山名に討手とありけるを、請受て某が向ふたる討手なれば、むざと腹は切らせぬぞ。サア御邊の心底承はらん」とありければ、斯「ムヽ、聞えたり。嘸あらん。此左衞門も其通り。勝秀は愚、樊噲が討手なりとて恐ろしとも思はず。諫言申すも君の御爲。死せる孔明、生る仲達を走らしむといへり。死しても忠は忘れまじ。一旦都を立去り、御邊とも内通し、悪人を退け、我君を名將と仰がんと思ひし處に、案に違ひ、御分討手とあるからは、浮世の望みも切れ果て、さて生害に及ぶなり。弓矢取る身の討手を蒙り、手を空しうは歸られまじ。介錯せよ勝秀」と、自害せんとする處を、勝「待て〳〵左衞門、實に滿足せり〳〵。日來語る朋輩の、斯程に心の合ふものか。此處は死する處でなし。筑紫方へも身を忍べ。我も本國に引籠り、世上の安否を内通し、佞臣の榮枯を窺ひ、義兵を起し討て出、悪人を攻滅し、聖賢に優る名將となさんとは思はずや」と、理を盡し諫むれば、

直兇―一同甲冑を帶する事

水魚―仲善き事

門少しも臆せず、「討手とは有難し。速に腹切て汚れ首を差上ぐべし。去ながら、討手の人は誰ならん。其相手によつて一戰の勝負を決し、討手の首を此方へ拜領いたし候べし。慮外と思召されぬ爲、御斷り申し置く。藤内太郎供をせい」と、御前を立て悠々と、顧もせず立退きしは、臣下の龜鑑弓取の、鑑とこそは三重見えにけれ。斯波左衛門義將は、腹卷に小具足固め、侍には藤内太郎家治、若黨少々、旗指一騎相具して、都を隔つる山崎や、關戸の院にぞ着にける。斯りし處に緋縅の鎧、月毛の馬に乘つたる武者、直兇五十騎許引率し、「ヤア〳〵左衛門、御暇申し捨、京都を開く慮外者、討取て參るべしと、大將軍義教公の仰を蒙り、細川右馬丞勝秀向ふたり。引返せ」とぞ呼はりける。左衛門聞もあへず「なに勝秀とや。假へ千萬騎向ふとも、打物の續ん程攻戰はんと思ひしが、勝秀と聞くからは、速に腹切らん。首取て歸れ」とて、どうと座を組居たりける。勝秀馬より飛で下り、「やれ待て左衛門。和殿が切腹に三箇條の不審あり。勝秀が武勇に恐れての切腹かこれ一ッ。日來水魚の朋輩の、討手に向ふ恨みの腹かこれ二ッ。まッた浮世を輕く見て、身を見限て切る腹か。三ッに一ッを言ふて死ね」とぞ申さるゝ。左衛門打笑み、「ホヽウ有繫勝秀程ありけるよ。問憎い事を能く問ふたり。然らば其方にも不審あり。人

汨羅—屈原の窮死せし處

聚歛—苛酷の徵稅

梟松桂の云々—荒廢の地也、梟鳴ニ松桂枝ニ狐隱ニ蘭菊叢ニ（白氏文集）

中に葬られんには如かじ。某都を開きなば、赤松細川畠山、結城長沼仁木石堂、大内今川山名京極宇都宮、凡そ名ある諸大名、頼もしげなき世を憤り、面々分國に引籠らば、民百姓は貢物を私し、地頭郡司に聚歛ありて、國を惠む糧盡ん時には、四海野心を含み、四夷八蠻一度に起つて、攻來らんは必定。其時には御寵愛の佞臣奸人、味方を捨て敵に降り、君一人敵の擒となり給ひ、元祖尊氏公の御勳功も一度に朽ち、御父義滿公の七寶八貨に、金銀を鏤め造り給ひし北山の金閣、室町殿の花の殿、三條の紅葉の殿、野原となつて梟松桂の枝に啼き、狐蘭菊に隱れ栖んで、谺山彦ならで、誰か昔を問ふ人の候べき。其時には此斯波が詞を思召出され、天を望み地に爪立て、臍を噛んで悔み給はん事、掌を指が如し。三度諫めて用ひざれば、身を報じて去るといへり。左衛門が一生の諫言も是迄なり。仲尼は炊水を受て衛の國を去り給ふ。某も其如く、宿所へも歸らず、直に他國仕る。お暇申す」と罷立つ。赤沼判官突立て、「こりや左衛門、主君に暇出す推參者、餘さじ」と飛で蒐る。藤内太郎駈隔たり、太「ヤアをのれ如きの錆刀が、主人の身に立つべきか。ま一度身悶へするならば、御前とは言はせぬ」と、はつたと睨めば義教公、「やれ待て赤沼、討手を以て左衛門が首を取る。靜まれ〳〵」と御諚ある。左衛

る石、說苑に宋人燕石を玉として藏する話あり

追從—へつらひ

莫耶—干將莫耶とて唐山の名劍

章甫—儒者の冠る尊き冠

首陽—伯夷叔齊の世を遁れし處

ひ身を破り、名を末代に損ひ給はん事、口惜の御所存や」と、拳を握り席を打ち、涙を流して敎訓ある。大將御氣色變つて、義「折こそあれ祝儀の座敷。おのれ一人智慧ありげに、愚將とは誰が事ぞ。罷立て閉門せよ」と、大きに怒つて仰せらる。左衛門突と進出、「愚將と申すは我君の事よ。愚將と申すが御耳に觸る程ならば、など佞臣忠臣の詞を聞き分給はぬ。淺ましさよ愚さよ。御祖父義詮將軍、御父鹿苑院殿義滿公、御舍兄勝定院殿義持公、御先代義量公、我君までは五代。我々は三代管領職を承つて、終に閉門の例候はず。左程過りある左衛門ならば、閉門までもなく、御指料を以て御手討になさるゝか。但御氣に入りの赤沼入道、子息新判官、此歷々に討手を仰付られ、軍勢を以て此左衛門を、など攻滅し給はぬぞや。チヽ、赤沼なんどの手に及ばぬは理り〳〵。軍といふものは、酒宴遊興に事かはり、命づくのものなれば、鯨波の聲矢叫びに怯れて、馬より落て目を廻さんより、追從言ふて世を渡るが、一段の思案ならん。エヽ、これ我君、莫耶を鈍しとし、鉛刀を銳しといひ、周の鼎を棄て、瓢簞を寶とするといひしは、御身の上と御存じなき歟。麒麟も繫れて動ねば犬猫に同じ。渴しても盜泉の水を飲ずとは、義者の恥る處。章甫の冠を沓に履れんより、首陽山に蕨餠を練り、汨羅に沈んで、江魚の腹

兩刃の劍云々―此譬徒然草に出づ

燕石―玉に似た

打折り、御咎めを恐るゝ由。夫れ程の事は、某が申譯をして遣らん。エヽ氣の狹い。左程の事、氣苦勞に召さるゝな。左衛門殿」とぞ申しける。藤内太郎飛で出、威丈高になつて、「これ入道、兩刃の劍にて人を切るに、振上さまに、我先づ切らるゝといふ譬あり。まづ其如く、人を惡に陷さんとて、身の惡を囀るか。其御笛は此藤内太郎家治が預り奉り、先日北山の御門にて一色大炊介を、をのれが頼んで切らせたを忘れたか。功ある者の心懸、誠の小水龍は庫に藏め、影を作つて持たるゆゑ、うぬが頼んで切らせたは、其影の笛なりしは侫侗者。誠の小水龍といふ御笛、天暦の帝勅筆の銘ありて、天下の大事に自然と鳴る。只今も音を出し、怪しさに馳參ず。是を見よ」と差出し、「是程大事の御寶を、何として御邊は大炊介を頼んで切折れとは言ひしぞ。笛を切るが好きならば、をのれが咽笛切折らん」と、詰寄れば義將、「ヤア藤内、御前といひ、主を差措き憚り千萬。罷退去れ推參者、赤沼入道ともあらん人が、笛を切折り、遺恨を晴すなどといふ、若輩所爲のあるべき歟。假しそれはあるにもせよ、上は天下の武將たり、御譜代忠功の斯波の武衛、笛一本に思召返られんや。とは思へども忠臣を厭ひ、侫人に心を許し、酒宴妓樂に御目眩み、枕元の太刀取らるゝ程の大愚將。山鷄を鳳凰とし、燕石を珠と見て、國を失

五常―仁義禮智信

まざ〳〵―ありのり

柱一本―一株

左衛門義將御機嫌伺ひ申す」と、高々と宣へば、「すは左衛門よ討取れ」と、赤沼親子、犬二郎、「心得たり」と出けるが、有繫五常の德備はり、威あつて猛からぬ、忠臣の威光に氣を呑まれ、「ヤア斯波殿奇特の御出」と、手を揉でこそ居たりけれ。大將、斯波と聞給ひ、寢惚髮に烏帽子引懸け出給ふ。左衛門莞爾と笑ひ、「義將は今宵珍らしき夢を見、御物語の爲伺候仕る。いやはや夢は可笑いもの。これ赤沼殿、御氣にばしかけられな。貴殿逆心の企にて、尊氏公より御相傳の御印判を賺取り、御侍女の中川を瞞し御太刀を奪はせ、罪を某に覆せて、此左衛門に切腹させんず謀と、まざ〳〵と見たる夢、覺むるとひとしく、枕元に此御太刀のあつたるは、何んと正夢とは思さぬか。夢なればこそ御仕合、若し誠にてあるならば、赤沼殿でも青沼殿でも、御前にて只中を、親子繫ぎに突拔くか。又一戰に及ぶとも、和主如きの相手に、騎馬を向るまでもなし。左衛門が足輕十騎ばかり差向けば、朝がけに擒て洛中を引渡し、何んでも柱一本の主にしてくれんもの。去ながら春の夢は合ぬもの、必ずお氣にかけられな」と、かんらからとぞ笑はるゝ。赤沼も言込められじと、入「いや是れ義將、和殿が今の言分は、其身の過り人に言せぬ前置に、冑頭から出る詞なりと此入道は聞き申した。ヲヽ思付たり。御預りの小水龍の笛を

雪女―雪の精の人に化けたるを云ふ

きけるが、俄に持せし提灯の、吹消す様に消えてけり。塀の内より白鷺の飛ぶ如く、雪渦て提灯に、映ると齊しく女の姿。白衣白髪白妙の、雪女とも謂つべし。左衛門主従、太刀の柄に手をかくれば、女「なふ見忘れ給ふか藤内殿。互ひに忍びて落合の、漏さぬ水は御身と我。思ひ二つの中川が、幽靈是まで來りたり。口惜や、赤沼親子逆心にて、君の御判を奪取、みづからには御太刀を奪はせ、左衛門様我夫にも、其科覆せて失はん、謀計と知らで盗み出る、道の前後錠下し、今宵の雪に埋れて、凍やかし殺されし。此世からの八寒の、苦患は我身一ッにて、いとし可愛の我良人、主従の御命助けたや救ひたやと、思ふ一念凝りつき、只今知らせ申すぞとよ。此御太刀義教公へ差上、御身の分疏立て給へ。名残惜の我夫や、此世の緣の薄雪も、永き契りは厚氷、結び添へ〳〵、生々世世によも解けじ。さらば〳〵」と泣く涙の、霙と消て亡せたりけり。藤内涙を押拭ひ、「をのれ入道奴、妻の敵國家の仇、首引抜いてくれんず」と跳入るを、斯「やれ待て是は一應ならず。申しても天下の大事。大將の御座といひ、御直衆に慮外せしと、いはれては理非立たず。是に控へて伺ふべし。罷出では勘當ぞ」と、宥め給へば藤内太郎、「あつ」と鎮めて控へたり。其身は衣紋引繕ひ、御太刀持て靜々と、廣間に立て、斯「お小性衆〳〵、斯波

寒苦鳥―天竺雪山に栖む、夜寒さに堪へざれば巣を作らんとするも晝になれば忘ると云ふ

戀じやもの。此處を一ツ怺えやう」と、身を抱締むれば息切るゝ。雪にて口を霑せば、身の内まで沁凍り、寒苦鳥の苦みかや。「立歸つて湯一杯」と、腰まで埋む大雪を、押分け蹈分け遣戸に縋り、押せども引けども明かばこそ。「南無三寶。誰かは錠を下せし」と、立歸れども時の間に、分來し跡を降埋み、波路を凌ぐ其風情、土戸は猶も明かばこそ。次第次第に降重なり、身も埋るゝ其苦しさ。中「エヽさては誑られたか口惜や。病に臥し刄に伏し、火水に死するはある慣ひ。殺しやうもあるべきに、雪に凍やし殺さんとは、をのれ入道奴、むざ〳〵とは死ぬまい」と、埋るゝ雪を這出れば踏沈み、這上り蹈落し、嵐は咽に吹逼り、呼はる聲も立たばこそ。手足も凍え、身も冷え渡り、「寒や冷たや苦しや。なふ藤内殿〳〵、我夫なふ。ま一度逢ふて死にたいぞ」と、雪に喰付涙の氷、眼も口も閉られて、天ぎる雪はばう〳〵〳〵。寒風しきりにさつ〳〵〳〵と、五臟六腑に刺す如く、息の保ちもあらばこそ。二十歳の春の花待敢へぬ、雪に先立ち消えけるは、敢なさ最期や。三重謡 東南に雲起つて、西北に風靜ならず。夕暗の、空も轟く雪の夜の、あら物凄の景色やな。斯波左衛門義將は、「今宵しも小水龍の、をのれと音を出す不思議さよ。君の御事氣遣はし」と、人馬も具せず、藤内一人提灯燈させ、雪蹈分て赤沼が、門の此方に着

目拔―目を拔くと刀の目貫とかく
切羽―瀨戸にかく
鮫―冷めるにかく
白雪―知らずにかく

氣遣ひなさるゝな」と、奧を差てぞ入りにける。又「そりや又彼奴も喰せたは。屋敷の内をうろつかせ、曉方に引捕へ、斯波左衛門逆心にて、家來藤内が密通の女に、御太刀を盜ませしと、證據を出す上からは、好い仕合で切腹道具。今宵は如何した夢がな見る。此方は誠の寶舟、舳先が向いた。飲め、勢へ」と、勇み頭をふる三重雪空の、雲凄じく更にけり。時分は好しと中川、義教公の枕の太刀、奪取て出けるが、思へば品こそ替つたれ。欲心ならで此太刀も、主の目拔の盜み物、生きる死ぬるの切羽ぞと、心も後れ手も顫ひ、持たる太刀の柄鮫や、鰐に追るゝ心地して、檜書院に出にけり。遣戸をそろりと明ければ、吹雪と跡の恐ろしさ。縮む心の駒下駄に、「怪しめらるな。ヱヽ儘よ」と、素足の雪に飛下るれば、劍を蹈むが如くなり。跡より赤沼尾け來り、遣戸に錠を下せども、中川それとは白雪を、打拂ひ〳〵、土戸を押せども開かねば、「さては未だ早かりつ」と、暫し待つ間のかきたれて、翻すが如く降る雪の、庭も埋れて白妙に、立寄る檐も横吹雪、袖打拂ふ蔭もなし。佐野のわたりも左のみやは、嵐は五體を劈けり。袂は捲て防げども、襟に溜りし雪解て、膚は水に浸さるゝ、足は膝まで埋るゝ、鬢の氷柱は白銀の、瑤珞かけし如くなり。「アヽ寒や苦しや」と、顫ひ上りて齒も合ず。「通路ならで是も亦、男の爲じや、

置て、何とやら密々と、妾は如何とも飲込れず。女子なれども、御臺樣よりお附けなされた此中川。サア其御判を戻さうか、戻さぬか。戻しやらねば思案がある」と、男優りの氣色なり。入道動せぬ面相にて、「ヲヽ好い處へ來召された。これにこそ仔細あれ。斯波左衛門義將諫言申すが御氣に入らず。密に諸國の軍兵を集め、左衛門滅す御催し、それを聞て笑止さに、御判をさへ取つたれば、軍兵一騎寄せる事もかなはぬゆゑ、やう〱賺し取たる御判。聞けば和女は斯波が家來、藤内太郎家治と夫婦の契約して居るげな。是に付て大事がある。藤内太郎は御預りの笛を折る。それを越度の仰にて、今宵是へ召寄せて、お手討ちになさるゝ筈。今宵さへ過しなば、明日は某御訴訟申し、藤内は助く可し。何卒お側の刃物ども、盜む事はなるまいか。如何にしても笑止な」と、誠しやかに言ければ、有繫女の一筋に、中「アヽ忝き御知せ。良人の命助くると申し、斯波殿とても良人の主人、よしなき疑ひ恥しや。上には事ない九獻にて御鼾の最中、密と御太刀を取りませう」入「ヲヽそれ〱目の覺ぬ中、片時も早ふ太刀刀奪取、高遣戸の小庭から、椿畑の妻戸を明け、松葉の口に待れよ。土戸の錠を明させん。それを合圖に密と拔け、左衛門方へ落ちられよ。飲込だか。仕損ずまいぞ」中「アヽ身にかゝつた事じやもの。其處邊に

身揚り―女郎が揚代を自辨する

もどもり―身揚りの狒の猾り

九千兩―九千歳にかく

梅法師―借を埋めるにかく

四年―妓（よね）にかく

紙はな―ぐか紙文渡して後に錢と引替る其はな

翻すと―こぼすとも

しつ客―七と濕瘡とかく

まんが直る―運が向いて來る

その宿の情事、身揚り分のおどもりも、東方朔が九千兩。それで殘らず梅法師。井戸へ釣れた大黑天も、好い客蹈まへた俵子や。蜜柑柑子大々盡、子の日の松や根引の四年。三年前の紙纒頭空纒頭、捨たふるがけ。今年はくる〳〵廓の全盛。炬燵に火を爲い、床せい、酌せい。酒は翻すと仕着は厭はじ。禿がぶんぜに駒は古さに、寶引骨牌をうつゝら王子が八千歳。女郎に口説の痞も下り、鴇婦は際の血の道なく、揚屋〳〵の賑は、二階中の間奥座敷、五客六客しつきやく入れず。さてこそ不審春の日の、長ふ要らぬは見せかけ大盡、悪業末社の、鳥渡借着に食物吸物、小言いふ人、親仁の意見に手代の始末、一ッ遣ては三度かる客、是が廓での悪魔外道。打拂ふて西の海へさらり〳〵こきやこう」とこそ拂ひけれ。大將なほ〳〵御盃の、數も睡も傾て、伺候の女に誘はれ、寢殿深く入り給ふ。入道親子見送り、入「サア熊橋してやつた。甚麼厄を拂ふとて、天下を治むる此印判、人手に渡す倥偬、滅すに思案は入らず。むづかしいは斯波細川、此判を以て義教の下知と僞り、鎌倉勢を催し、一戰に討取るべし。此年越からまんが直つた。これ熊橋、來年はめつきりと好い年取らせう。精出せ」と點頭悅ぶ折節、御侍女の中川、づか〳〵と走出、「これ赤沼殿、只今の御判はお厄落しの咒ひに、少との間お預りかと思ひしに、戻さず其處に留

西王母云々―漢武帝食桃欲留其核王母曰此桃三千年一實耳云々(列仙傳)

こきやかう―鷄の鳴聲にて厄拂を納むる時の詞

がいに―後の多きを云ふ(俚言集覽)

めなご―女子(同書)

紋日云々―節句日の多い事

「やあら目出度や。此方の御壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歳、東方朔が九千歳。西王母が桃の核、猿豆小豆、親も健鳥雛鳥の、翼重ねに寶は集る。家は治まる持丸長者の、四方に四万の藏の戸前の明け行く年から、福神達の御影向。一に市姫辨才天女、二は西の宮若惠美壽殿、三は三面大黒頭巾の襞の數々、十二箇月は無病息災、其身は鐵槌打出の小槌、打て打出す金錢銀錢。福德圓滿惡魔外道、打拂ふて西の海へ、さらり〳〵さつさこきやかう」まづ斯う祝ひ治むるは、是上方の厄拂ひ。扨また東國の果にては、斯こそ厄を拂ひけれ。「お厄拂ひ〳〵、厄つつ拂ひ申すべい。がいに目出度い此方の御壽命語るべいなら、鶴と龜奴が何打食つて、すつ百万年、のめり〳〵と死ばり外れにあやかりなされ。父們母們に爺嫗息災、めなご小忰産の儘なる餓鬼十二疋、錢金俵や小袖の中から、目玉剝出し耳朶大かく、五百八十七曲り、惡魔外道打拂つて、西の海へ打投げろ。こつきやつこう」と祝ふとかや。此處に名に立つ色廓、揚屋女郎の厄拂ひ、又珍らかに斯もなん。「あら〳〵目出度や此方樣の、御壽命申さば苦海十年。蠅がとまつて鶴は千年、龜は万年。浦島太郎が重箱肴、紋日〳〵は一歳に、かず數の子も御盛んや。何時大服の茶は挽ず。揚屋に海參煎藏鮑。幇間相客宿屋駕舁の附屆け、こそこ

お小夜—押へにかく
菅戸—縋るにかく
義教—よしにかく
うつゝ—打つにかく
四魔—蘊魔、死魔、天魔、煩惱魔（釋氏要覧）三障—皮、肉、心の三煩惱

と、豫て仕度の色揃へ、御侍女の其の中に、心意氣も風俗も、これ當流の眞中川、酒になりての名人さ。飲ずに人をお小夜の君、琴三味線の撥音は、誰も袂に菅戸かや。さて又町には、姉が小路の針屋の縫、紺屋のお染、白粉屋の艶、糸屋の房、舞子踊妓小唄の節、上手に座敷を持ければ、猶御機嫌は義教公、烏帽子の紐も直垂も、打解給ひ膝枕、足擦られつ御腰を、うつゝともなき酒宴なり。入道時分可しと思ひ、「さて節分の夜、厄拂と申して民間には行はれ、上つ方には御存じなし。」御身の大事とある物を、捨るといふて某に預られ、厄拂ひの詞をのべて咒へば、惡病邪氣を除くと申す。疾く〳〵行ひ奉らん」とぞ申しける。義教公、佞人の詞を誠と信じ給ひ、義「幸ひ是に先祖よりの印判。軍兵を集め、關所廻船、日本を治むるも此判一個。是を少時預くる」と、錦の袋に入れながら、「サア捨た」と投げ給へば、入「お厄は我們拾ひ除け、四魔三障祟りはなし。これ女子共、都の町の厄拂ひ、物は咒ひ出るまゝに拂ひ申せ」とありければ、女「あつ」と應へて口々に、厄拂ひをぞまねびける。

初春厄はらひ

挨拶―語らひ
筒拔―そのまゝ聞ゆる
奈落―どこ迄も
孟春―物申うにかく
升―増すにかく
鰯云々―節分に鰯の頭に柊の枝を添へて門口にかく、邪鬼を防ぐ爲
年男―鬼やらひの豆撒などを務むる役
通り者―通人

しに、假へお觸がないとても、お前の事を知らぬとは、エイ好い加減な事ばかり。朋輩の中川殿と、此方樣との挨拶が、大體並みの事かいの。奥の事は筒拔け、飛脚より優じやもの。知らぬとは小面憎う、打ちたいまで」と笑ひける。太「ア、音高し〱。さては赤沼奴が此笛を過たせ、我々主從越度にせんとて、御祝儀までを延引せし、一大事を承る御厚恩には、御身の上、奈落までも隱密ぞや。はや夜も明る。落ち給へ」と、別るゝ方の禮者の聲、物孟春の御年玉、取かはしたる扇子箱、日本目出度き年越や。今日から一ツ年の數、升に熬豆福は內、鬼は外面に深翠、柊に鬼も恐るゝと、鰯の頭梅が香の、解け初めたる下紐は、心ありげにつちのこまで、春めく御代こそ三重豐なれ。御大將義教公、赤沼が館に入御あつて、追儺の御祝儀行はる。年男には熊橋犬二郎滿景、御年豆を献ずれば、赤沼前司入道幸滿、子息新判官則久御前に畏り、「冥加に餘る御成、一家の面目此上や候べき。然れば、毎年御所にての御祝儀は、斯波畠山細川なんどを始め、馬鹿慇懃の頑侍、卷舌の諸禮、折目正しき正月詞、嘸御窮屈と存じ、某が御馳走には、御供の諸大名殘らず退出致させ、古流な事をサラリと止め、奥方の女中の中の通り者、其外洛中に娘子供の色好きが、御座んす詞のこなし、上覽に入れん爲、召寄せ置て候」

四職衆—侍所の所司を務むる赤松、一色、山名、京極を云ふ

隱密—内密

節分云々—追儺の夜を年取の夜と云ふ（俚言集覽）

敵對ひ、剰へ御預りの笛を切折、言語道斷の始末、白狀せば許すべし。僞らば縄をかけ、四職衆の白洲に引据え、一家一門の恥を見るか。サア分別次第」と申しける。若者憶する氣色なく、「ヲヽ藤内太郎能くしつたり。我は一色が末子、大炊介久常といふ奥小姓。此女は御臺處に紵卷といふ御侍女。阿漕が浦の脫舟も、度重りし通路の、赤沼入道幸滿に見付られ、御成敗たるべきを、直に入道が計ひにて、隱密に命を助け、御所を夜拔にせさせ、此恩賞には、御門前に藤内太郎相詰たり。お預りの笛を二ッに切折て得させよといふ。心得ずとは思ひながら、一旦の恩を受け、否といふは卑怯と思ひ、さてこそ笛を切折たれば、入道が恩は報じたり。さて是からは其方への咄。入道が根心、上へ對して其意を得ず。御分が主人左衞門にも言聽せ、必ず油斷あるべからず。某身にも望みあり。正八幡ぞ僞りなし。なんと落してくれまいか」と、理非を決して語りける。太「ヲヽ一色大炊介殿、承り及ふだ。お身柄と申し、御誓文虚言はあるまじ。さりながら、明朝は御松囃のお觸なるに、はや東雲に及べども、其沙汰なきは樣子ぞあらん。御前向を有體に承らん」といひければ、紵卷聞て、「ムヽさては御存じ候はぬか。昨夜俄に變替り、松囃は明日の晩、赤沼の方へ御成にて、節分のお年取御遊覽とのお事にて、皆々お觸れが廻り

兵亂―ヒヤウを笛の音にかけたり
御松囃―正月に行ふ儀式、笛や鼓にて囃し立つ
虎―寅の時にかく
目覺草―煙草、服部は其產地、初雛にかく
ひはだ―檜皮葺の屋根
茶宇―舶來の絹布にて輕くして薄し
媚過―ひねびるに同じくませ過ぎたる意

り。御先祖尊氏將軍より、代々に聞ふる笛の音の、ひいや兵亂治りて、寶祚百王の堅めたり。時は永享八年正月三日、將軍家の御松囃、北山の御所にてあるべしと、藤內太郎は笛の役、御預の小水龍、餘寒の風に吹反らし、未だ夜も深き五更の一點、虎の御門に着にけり。太郎挾箱に腰打懸、「御松囃は辰の刻との御觸なれば、役人伺候の諸大名、夜の中より群參あるべきに、御所の內寂寞として御門も未だ開かれず。不思議さや退屈さ」奴に持せし烟管筒、一吹詰で燻らする、目覺草は服部の、八聲も鐘も霞み行く。門のひはだを踏越ゆる、霜の振袖角前髮、取交す手もわな〳〵と、女が帶の若紫、茶宇の袴の信夫摺、亂れ逢し密通の、欠落とこそ知られけれ。咎めて無益、見ぬ顏せんと、下人等にも私語て、築地の蔭に忍ぶとは、見ずや知らずや門松を、傳ひ下りたる人も木も、連理の女松男松かや。太郎いよ〳〵身をかくす、彼の若者佶と見て、打物拔て弓手より、聲もかけず打かくる。刀の柄にて拳を打ち、太刀振落させ、二の拍子にて胴骨あて、蹈付れば女は又、右の方より打かくる。拳を打んと持たる笛、振り上るを附入つて、笛を二ツに切折たり。太「すは白物」と取て引寄せ、二人をどうと引敷て、「ヤア媚過たる奴等かな。斯波左衞門が家來、藤內太郎家治ぞ知つらん。をのれ等不義の欠落見遁しにする處に、却て

樂車云々—山車を曳いて囃し立つるを見よと也な、や、さは拍子詞、此唄松の落葉卷三にあり、藤内太郎の名は四の卷にあり

紫竹云々—笛に造る竹にて之を吹けば塵を拂ふとなり、美聲を發するを聲動ュ梁塵」と云ふ

天暦の帝—村上帝

雪女五枚羽子板

上の巻

樂車うつて囃した。樂車うつた見さいな藤内太郎。アリヤコリヤ、殿はな、笛吹のヤ、家で、紫竹寒竹、埃をさ、さつさと拂ふて、到來の〳〵、お年玉は到來の、此方からも遣いのと、合せ吹たるはさつても吹た笛吹と、哄と褒て通した。門松立て囃した、御松囃を見さいな藤内太郎。アリヤコリヤ、殿はな、斯波殿のヤ、御近習。弓矢打物お馬をさ、さつさと乘初や、蓬萊の〳〵、榧搗栗膝栗毛、熨斗昆布にかはら毛と、祝ひ乘たるは、さつても伊達なお侍と、チロシ どつと都に褒にける。主君斯波左衞門義將は、當家の管領たるに依て、藤内太郎が文武の器量、將軍義教公の上聞に達し、御直の諸武士同然に、年頭五節の御目見え。殊更笛の達人にて、小水龍といふ名管を、上より預け下さるゝ。そも此笛は、天暦の帝の御寶物。國に異しみある時は、吹ぬにをのれと音を出す神妙あ

水の哀—水の泡にかく
御法の水—池水を妙法の水として供養怠らぬ意

南に聞えた」と、谺の響きは氣も付かず、皆生玉へと走りける。見付られじと德兵衛、畠の中を西東、此處に屈み彼處に忍び、「今は嬉し、一所に」と、房が死骸を尋ね寄る、道も心も埋れ井戸、踏外してかつぱと落ち、水の哀れや汲上て、重ね井筒の心中と、御法の水をぞ湛へける。

千賀の云々ー前の近と後の焦すの縁をとつていひし泣なり

一興ー此は怪しいと也

し處へ、ハヤ道傍まで尋ね來て、間は僅か半町に、足るや足らずも因果の隔、百里も同じ如くにて、近き甲斐なき千賀の鹽竈、身を焦すこそ哀れなれ。妻のお辰は宵よりの、涙と霜に袖凍り、物言ふ力もなき中に、辰「あれ〳〵夜明も近付か、鴉がいかう啼くはいの。外の欠落走者と違ふて、明日尋ねふとはいはれぬ。死に出た心中なれば、疾に命は最う無い人。淺間しや悲しやな。女房子の無い人ならば、殺すまい死ぬまいものと、嘸や最期の悔言。お房の恨みも思ひやる、思へば妾があるゆゑに、人二人殺すよな。位牌に對ふて言譯ない。冥途の旅を連立たん」と、下人が指いたる脇差に、取付く處をもぎ放し、下人「これは一興。此子は最愛ふ御座らぬか」と、止むれば小市郎、「母樣死んで下さるな」と、嘆く聲さへ身に沁て、野邊の霜風小夜嵐。丁稚の三太もうろ〳〵涙、「心中といふものは、いかふ寒いものじや」とて、共に袖をぞ絞りける。德兵衛囁て、「月は傾く東は白む。躊躇ふて今の間に、見付られんは淺間しゝ。いざ何事も、宵よりいふた通りぞや」房「應」と首肯くばかりにて、涙に物をいはせつゝ、夫の膝をしつかと押へ、仰向き待たる口の內、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華を、一つ蓮華にと、ぐつと突貫く一刀、わつと叫びし一聲の、あはれ墓なき最期なり。辰「今のは何處じや。サア知れた」「其處か」「此處か」「いや〳〵

五逆の提婆―提婆達多の五逆罪人も天王如來となると也

龍女も成佛―八才の龍女成佛せし事法華經にあり

身を捨つる云々―子を棄つる藪はあれど身を捨つる藪なしといふ諺を含めていふ

かけし御經の、此三界の衆生は、皆是れ我子と聞く時は、親諸共に至るなりけり。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。五逆の提婆は天王如來。龍女も成佛する時は、煩惱菩提となるぞ頼母し。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。六萬九千三百八十四文字を、只此七字に納りし、大曼陀羅や曼陀羅雪、雨にも風にも詣で來て、朝は現世夕べは後世、此世彼世の二面、今宵一ッに楢の葉の、影は浮世の塵芥、共に命の捨場ぞと、大佛殿の勸進所、身を捨つる藪となりにけり。涙に迷ふ其中にも、男は有繫男にて、「なふ世間を聞けば、女先立ち、男は跡に死損ひ、見苦しき沙汰に逢ふ、無念の上の死恥ぞや。先づ我から」と脇指を、抜んとすれば抱き付き、房「なふ待つて下さんせ。今死ぬる身といひながら、大事の良人が目の前で、朱に染つた體を見ば、氣も狼狽へ日も昏て、如何してか死なれうぞ。なから死して恥さらし、此方樣の死骸の帶解き、紐解き打返やし、詮議のあるをじろ〳〵と、そもや見て居られうか。妾から先に」と手を持添へ、我身に差當忍び泣き、男は力涙に迷ひ、刄物持つ手も弱々と、女の膝に伏轉び、覆ひ重なり泣居たり。石の鳥居の彼方より、女の泣き聲、子の泣き聲。德「南無三寶我家の提灯、女房、子共、家來ども、見付られては情なし。小橋の方で死ぬまいか」と、立上らんとせ

筒井筒—此唄松の落葉卷六にあり

晨の雲云々—之は若緑卷五にあり

色駕籠—遊女の乘る駕籠

濱側—道頓堀の岸邊

七つの芝居—大の片岡仁左衛門座、山本飛驒掾の人形芝居、岩井半四郎座等をいふ

染川—名は重郎兵衛篠塚の名は次郎左衛門

菖蒲草—芳澤あやめの緣語

嵐—名は三右衛門

戀慕の云々—八百屋お七の祭文の句、松の落葉にあり

唄筒井筒、井筒の水は濁らねど、今は涙に掻濁す、月も袂に掻曇る。晨の雲夕の霜、仇しが浦の空穂船、身を無きものと知りながら、愛し憎しの戯れも、少時此岸彼岸の、假の現の假橋や、藻に埋るゝ牡蠣船の、苫の隙間の燈火の、風を待つ間の影よりも、明日まで待たぬ我命、我と失ひ二親の、育てし御恩は如何せんと、歩みもやらず泣居たり。送り迎ひの色駕籠も、少時途絶えは何國にも、馴染〱の寝入花。我身は今宵散果る、名殘盡せぬ濱側の、此處は竹田か夜は何時ぞ。五ッ六ッ四ッ千日寺の、鐘も八ッか七つの芝居。二人が噂世話狂言の、脚色の種となるならば、我を紺屋の片岡に、何とか思ひ染川は、臺詞に泣てくれよかし。包む袂の飛驒之丞、二個遣ひの手品にも、斯る姿振寫すとも、此思ひをばよも知らじ。去歳のお島の心中の、其井筒屋に我が今、重ね井筒と篠塚に、いはれ岩井の半四郎、憂ひ臺詞の菖蒲草、露のおとしも御身と我が、積る涙の雫かや。西に嵐の吹霽れて、空は冴ても我々は、戀慕の闇に暗がりに、よしなき事を仕出して、東の果に名を流す。それに劣らぬ歎きぞと、最ど思ひに吳竹の、節を習ひし淨瑠璃も、他所の事よと慰みしが、今身の上に降る霜の、一足づつに消失せて、死にに行く身の味氣なや。あれ見返れば人聲の、我を尋ねて高津の町を、急ぎ遁るゝ鰐口や。頼みを

今身より云々—日蓮宗にて常に唱ふる語

鷲の峯—釋尊の法華を說き給ひし靈鷲山

れば、嬉しい〳〵。去ながら、此處で中々思ふ樣によもなるまい。屋根傳ひに裏へ脫け、樽屋町の門へ下り、宗門なれば日進樣の御門で死なせて下さんせ」德「ヲヽ、尤〳〵、有難い心ざし。サアおじや」と立けるが、「サア和女は法華己は淨土、願ふ所が別なれば、先の往端も覺束なし。宗旨をかえて一所に行かん。今題目を授けてたも。疾く〳〵」と手を合すれば、房は不覺の涙にくれ、「妾に淨土になれとも言はず、法華になつて下さんする、さても嬉しい心やな。勿體ない事なれど、今まで每日千遍宛、五年唱へた題目の、功德で赦したび給へ」と、互ひに合掌心を鎭め、今身より佛身にいたるまで、能く保ち奉る南無妙法蓮華經。今身より佛身に至るまで、添せ給へ添せて給べ。南無妙法の力を賴みに、慥と負て上る二階や、三重屋根の棟、鷲の峯ぞと一筋に、這ふつ辿りつ傳ひ行く、道は三途の瓦葺、霜の劍の山冴えて、此處に地獄の鬼瓦、弓手も馬手もおそろしく、遁れ遁れて行末は、今ぞ冥途の門出と、これを限りの立酒や、樽屋町にぞ 三重 迷ひ行く。

下之卷

道行血汐のおぼろぞめ

お笑止―お氣の毒

懲しめの―此下に篇にしたる泣の句を入れて見るべし

咸陽宮―始皇帝の宮殿、項羽之を燒けり

のめ〳〵―おめ〳〵

笑止な。あれおか樣、火は入らぬと仰やるゝ」と身をもがく。其間に火斗は、焦るゝ紅葉葉を盛たる如き池田炭、遠慮も内儀が炬燵にうつし、「サア溫らんせ」と言捨て、臺處にぞ出らるゝ。側で見るさへ德兵衞、身も焦け渡る心地にて、「兄者人其火で熱ふは御座らぬか。寧その事に火炙にならしやれぬか。此處まで火氣が來まする。些と埋けて消ませう」と、寄らんとすれば、「其儘措や」と、止められては炬燵より、胸を焦すは德兵衞。房は淚の埋火に、燒付らるゝ身の苦しみ、蒲團の蔭より手を出し、裾に取付き堪えんとするにたえがたき、地獄もかくやと不便なり。主人も一旦懲しめの、さのみは哀と思ふにや、兄「アヽ溫まつた最う歸る。和郞も寢みや」と立歸る。德兵衞兄ながら恨しくや思ひけん、「とても事に眞黑に焦るまで、溫つてお歸りなされかし」と、いへども有繫一言も、岩木をわけぬ人心、奥の一間に入にけり。德兵衞は小腹立ち、櫓も蒲團も一ッに摑で取て擲れば、咸陽宮の烟の中に、顏も手足も紅の、房は目ばかりじろ〳〵と、物をも言はず片息の、性根も亂るゝばかりなり。漸々に抱上げ、袂に煽ぎ身を冷し、花活の水幸ひと、顏に灑ぎ口しめし、少し心も爽げり。德「サア兄貴までが知られたり。何面目にのめ〳〵と、人に頰をまぶられん。いざ此處で尋常に」と、脇指取らんとせし處を、房「左樣さへ覺悟極

空耳―聞き違へ

氣の通らぬ―氣がきかぬ

ふが不思議か女夫じやもの」房「眞に左樣じや忝い」德「嬉しふ御坐る」と抱き合ひ、聲を立てずの絞泣き、炭火も消えて凍るらん。奥へ斯とや聞えけん、兄の聲にて、「なんと德兵衞、痛みは好いか」と、ごつ〳〵急て來る音す。「やれ隱れよ」と狼狽へて、房を炬燵に押入れ、蒲團被せて德兵衞は、上に凭れ覆になり、顏もきよろ〳〵なりにけり。程なく主人立出で、「物言ふ聲の聞えたは、誰であつた」と不審顏。德「いやそれは私囈語がな申したか。但しお前が病耄けて空耳でがな御座りましよ。歸つてお寢みなされ」といへば、兄「イヤいかふ夜が寢憎い。咄さいた西國の物語して聞せう」と、炬燵にあたるうたてさよ。兄「ヤア炬燵の火が薄い。これ女房ども、火を赫とおこいて、火斗に二三杯持ておじや」と呼はれば、德兵衞悃つとして、「申し〳〵火の烈いはお毒。御無用に遊ばせ」兄「いや〳〵裾が冷える。膝節の焦る程なが此方は好い」といひければ、德「平にそれは火の用心と申し、膝の皿に火が付たらば、御身體の妨げ」と、いへども兄は懲めと思ひ、意地惡ふ、「火を早ふ持ておじや」とぞせがみける。德「ア、申し、お前は病氣で引籠つて世間を御存じ御座らぬ。此冬から何方も、火の強い炬燵廢りもの。北脇邊の好い衆は、大概炬燵に水を入れるげに御座る。重ね非筒ともいはるゝ身が氣の通らぬ。炬燵に火を入れなんどとは、さりとてはお

萬事至極―至極道理に叶ひたり

理をもつ女―お辰を指す

張良樊噲―漢高祖の功臣

手に取りは取たれども、内儀樣に見付られ、得死にもせず居る間に、此方樣の聲はする、向ひ側より呼に來る。嬉しや先で何事も談合せんと、今迄待ぼうけになつたれども、一目逢へばこれ本望。末頼みない契りなれば、これ限り〳〵と逢ふ度每の觀念、今更溜ていふ事なし。貞女を立るお辰樣の蔑みも恥しい。中好ふして下さんせ。互に生れかはつたら、本妻定めぬ其先に、早ふ女夫になりませう。言置く事は是ばかり。サア〳〵戻つて下さんせ」と、良人に犇としがみ付き、絕入るばかりに泣居たり。德「ヲヽ聞かねど萬事至極した。去ながら、其詞嬉しい樣で恨みあり。本妻あるは知れた事、同じ口で諸共に、死んでくれといふてたも。京の便を大事に思ひ、騙瞞同然の才覺にて、銀四百目借出し、一時ばかりは懷にあつたれども、兎角二人に死脈が打つ。何處も彼處も一時に、汐のさいて來る如く、ばら〳〵と首尾わるく、元來理をもつ女共、理屈を詰て恨み泣き、いかな張良樊噲でも、道理に對ふ矢先はない。銀も渡す、其場にて見す〳〵噓の空誓文。とても遁れぬ此罰。佛神を待たずとも、此方から當つて埒明けんと、道から胴は居つたり。死直しは二度ならぬ。卿ち顏は曲もなし。手に手を取て莞爾と、死ね、死なうといふてたも」と、炬燵に顏を打投て、世にあぢきなき涙の體。房「なふ左樣思ふてが定かいの」德「思

明けてものけ—明けてしまへ

大幣—大幣の引手あまたの歌よりいふ、多人數の手にかけたる蒲團

山口屋—止まぬにかく

あるにこそ—例の反語、ならぬの意

請—請人

れて冷々と、髭ほどけて身に障る。其夜の心地染々と、身に引纏ひ寝て見ても、一人轉りはヱヽ埒がない。心の内はむしやくしや枕、寧そ明ても退よかし。德「アヽ大幣の此蒲團、小六も寝つろ、小夜も寝つらん。房も寝よふ、引手數多に何處の誰奴と寝くさつた。撲たい踏たい叩きたい。ゐよ〳〵踏むな蒲團に科もない。今は踏でも叩いても、房に逢れぬ逢せぬか」と、炬燵にとんと腰も脱け、譯も涙に我身ながら、男の樣にもなかりけり。戀の寝端の屋根續き、何時か思ひは山口屋の、物干傳ひ忍び來る。餘所の戀かと羨しく、見れば雨戸の戸袋を、密と踏へる足元も、顫ひ〳〵の目も眩て、房「ヤア此處にかいの」德「房かこれは如何ぞ」とばかりにて、炬燵を中に手を取て、只泣より外の事ぞなき。涙の中にも男の顔、じろ〳〵と見て、房「アヽいとぼしや、氣を揉まんすゆゑにやら、顔にたんと痩が來た。其苦は誰がさするぞい。皆妾ゆゑと、それは〳〵忘るゝ事もあるにこそ。去ながら、最う苦にして下んすな。斯ういへば如何やら拗ていふに似たれども、微塵も左樣した心もなし。妾が京の父樣、よしない者の請に立ち、明日限りに銀立てねば、妾を遣るとの判じやげな。妾は此處へ身を賣て、先から連に來た時は、一重賣二重判、牢舍は鏡にかけた事。成らぬ事をくど〳〵と、思ふは愚痴の至りなり。先立死なんと剃刀を、

自身番―町役人の詰むる番所
あいたしこ―しこは添詞

反らさぬ顏―病氣癒つたと本氣な顏
まぎら―胡魔化し
內と外―內には兄等、外には房

今迄誰が待ものぞ。まそッと咄しや」と留められ、徳「いや鎗屋町の隱居へ齋に參る約束、是非お返し」といひけれども、兄「はて齋は明日の事。平に」といふに詮方なく、徳「女共が懐妊、何時に產致さうも知れず。お戻しなされ下され」と、いへども兄は聞入れず。徳「遁れぬかたの自身番、見舞度ふ存ずれども、是ではお返しなされまい。あ痛〳〵。あいたしこ〳〵。冷える加減か俄に疝氣が起つた。歸つて養生いたしたい」兄「はて譯もない。夜氣にあたつて猶痛まふ。藥でも遣ふか」徳「いや最う藥も通らぬ。駕籠に乘て歸りたし。あ痛あ痛」と呻けども、內儀推して外へとては出すにこそ。小座敷の炬燵に、火をたんと入れさせて、內「泊つて御座れ」と強ければ、徳「いや〳〵今年の炬燵は、いかう人にあたります。今も今女共が生姜炬燵を仕懸て、漸々詫言いたした」と、心は先へ脫殼の、何をいふやら譯もなし。內「此處になりとも寢せませ」と、蒲團打着せ表には、內儀手づから錠下し、內外の者に目配せし、徐々側へ退く樣子。徳「ムヽウ氣が付た」と反らさぬ顏、「いや〳〵寒いに往なうより、溫かにして泊つたが、先づ此方の德兵衞」と、重き心を輕口に、蒲團被つて行く振も、涙くろめし二重まぎらなり。內と外とに引合の、心の駒の諸手綱、房が思ひの通ふかや。夢とはなしに現なや。顏をならべて見る樣で、抱き付けば小夜蒲團、涙に濡

といへば、倥氣た顏付にて、「誰じや房か。際の商跡をつめや」と餘所〳〵しう、口にはいひて魂は、一つ駕籠なる番鳥、飛立つばかりに見えにける。色を覺りて女房、「これは夜更て御大儀な。先づお上りなされませ。酷ふ冷える酒一つ。それ燗つきやや」とありければ、徳「アヽ措や〳〵最う歸る。此頃酒があたつて、今も今女共、生姜酒を飲させうと、手づから生姜研すやら、それが嫌さに漸々と、これへ逃て參つたに、又酒を飲めとや。やれ逃ん」と、出る處を女房飛下り、立塞り、「何んの無理に進ぜませう。茶でも一ッ參りませ」徳「いや〳〵此頃は茶があたります。今も今或方で生姜茶をくれたを、漸々と逃延た。是非歸して」といふ處へ、兄の主人寢間より出、「ヤア德兵衞能うぞ〳〵。夜が寢られぬに夜と共に咄さう。サア此處へ」と呼びかくれば、病人といひ兄の命、異議も言はれず不返事に、もぢ〳〵してぞ上りける。兄「なんと中橋架たの。欄干渡すばつかり。春は町中渡り初め。氣色も次第に快し。寒明たら本服せう。これといふが此夏の、西國の御利生。ヤ三十三所の風景一々語つて聞せん。サア碌に寬りと居や」と、果しも知れぬ長咄し。德兵衞心もだ〳〵と、可哀や房を今まで待せ、又宿屋でも憧れん。早ふ立ちたさ氣は喘て、「いや申し、今宵は我們伊勢講、講中待て居らるべし。罷歸る」と立んとす。兄「先づ待ちや。

際の商云々―節季の商賣故忘つかりせよ

能うぞ〳〵―能く來たの意

夜と共に―一夜中

なんと中橋云々―中橋をかけたとやら

人ごと言はば云云―諺、噂をすれば陰に同じ

とひもせぬ云々―問ひもせぬ客の事を言立てての催促

道じや云々―汝の歸る道なれば駕籠屋へ寄つてくれと也

け、必ず泣せてたもんな」と、涙も聲もしめぐ\と、殘る方なき恩の程、房は顏を上もせず、只「あいく\」としやくり泣き、延紙の幾重を絞りけり。客かあらぬか表にて、「能ふ入來りました」といふ聲す。「誰樣じや」と澄して聞けば、「いかふ冷えるが、兄貴の氣色變る事もないか」と云ふ。内「ハア丶人ごと言はば莚敷け。德兵衛樣さうな」と、聞くより胸もさはさはと、飛も下りたき心なり。時に、丁稚が門口より、「向ひの肥後屋から、房樣ちやつと迯らつしやれ。お客は堺の。早ふく\」と呼はれば、料理人不審を立て、「とひもせぬお客の斷り、合點が往かぬ。房樣はお暇が入る、成らぬ」といふを房聞いて、「あれは何故に」と問ひければ、内「ヲ丶さればいの。彼の宿で德兵衛樣に逢やつたゆゑ、それで遣るなと吩咐た」房「エ丶内儀樣の譯もない、それはあつて過た事。今は挨拶切れた上、德樣は此處になり、何んの氣遣ひ。堺の客は正月を賴まねばならぬ人。平に遣て下さんせ」と、いふも誠と思はねども、内「ヲ丶それも左樣。これなふ房を迯ろぞや」と呼ばはれば、下にて料理人「そんなら道じや。駕籠へも鳥渡寄てくれ」「心得太郞べの婆々樣」と、喚いて使は歸りける。内「サア身仕舞して早ふ行きや」房「いや夜もいかふ更まする。ツイ此儘」と、連立ち二階を下りる間に、駕籠を庭にぞ舁寄せける。房「德兵衛樣遊んでお歸りなされませ」

それやーそれしや
無下なふ云々ー無茶に妨ぐる
思ひばか云々ー思ふやうにはかゆかぬ
身のひしー身の災難

怖さ彌増して、更に別ちもなかりけり。有繫それやの女房とて、世間咄しに氣をゆるませ、素人の言ふ事と一つに聞けば曲がない。心鎭めて聞てたも。曲輪や此處の奉公は、樂みなふては勤まらず。無下なふせくではなけれども、それにさへ猶懸引あり。必ず妻子ある人と、末の約束せぬ事ぞ。男の密夫同然にて、思ひばかいかぬ物ぞとよ。德兵衞樣とも今は挨拶きつたとある。チヽ〳〵仕合せ〳〵目出度い事。お辰樣を離別させ、添ふて和女の本望ならず。最愛しい人の身のひし、一門中の憎しみ受け、和女を鬼よ蛇よといふ。又圍はれて世を忍び、後家同然に暮しても、これが何の手柄ぞや。若木の花は一盛り、老木の枯葉色失せて、變るは男の心ぞや。餘のお山衆と違ふて、十チの年から子飼にて、豆腐取て來い、八百屋へ走れ、駕籠呼でおじや、掃掃除、戸棚の鍵まで預けしは、小さいからの馴染だけ、我子の樣に思はれて、好い客もがな出世させ、下女の一人も連させたふ、思ふは此方とばかりかは、皆親方は同じ事。譯もない事仕出して、慘い目見せてたもんなや。爲の好い事あるならば、今でも暇をくれといや。欲を離れた是證據、損といふて僅の事、不便な目を見やうかと、案じ過しがせらるゝぞや。思ひも寄らぬ憂ひをか

さしこみ―さしがね

格子祝―客引・の爲の出歩き

額たれう―額剃らう

肩がつかへた―肩凝る

の。定し今に來ふ程に、まそつとしてから來て下され」飛「いや最早來られませぬ。來てから今夜は出されませぬ」と、言捨てこそ歸りけれ。房は一人とほんとして、「今夜の首尾を違へては、一代京へ繋れて、連添ふ事も限りとは、根堀知ての上なれば、如才のあらふ筈もなし。皆おか樣のさしこみと、思ふも地體此方の無理。身一ッ胸を据えたれば、寧そ悲しい事もなし」と、內へ歸れば主人の內儀、「房は今まで門にか。此寒いに物好きな。惣じて此中浮々しやる。些と心をしめやゝ」とありければ、房「されば餘り餘所が賑かさに、格子祝ひに出ました」と、言捨て二階へ上る體、氣懸りなれば目を放さず。折々心をつけたるが、房はそれとも白紙の、障子の月を明りにて、剃刀出し合せ砥に、かゝらましかば斯とだに、ま一度顏見て死たいと、思へば引るゝ後髮、手も戰慄〳〵とぞ顫ひける。主人見付て背後より、「房それは何しやる」はつと驚き振返り、房「ハア內儀樣の何じややら、喫驚としました。あんまり好い月影に、額たれうと思ふて」と、紛らかせば打笑ひ、內「ヲヲ好い處へ來て仕合せや。幸ひ旦那殿髭そつてくれとある。些と其剃刀貸してたも」と、引たくり押包み、暫しは顏を打守り居たりしが、「アヽ一昨日の煤掃に、たんと肩がつかへた。そろ〳〵揉でたもらぬか」房「あい」と後に廻しも、扨は氣色を見取られしと、悲しさ

ひらのや云々—涅槃の名
火屋—火葬場
灰寄—骨拾ひ
四つ云々—四つの鐘（午後十時）にかく
思ふたつぼ—思ひし通り
いかふ—よほど

「柄杓」「緋緞子」「蟆」「平の蒟蒻」「菱紬」「ひらのやゑきやう」「肥後ずいき」妓「サア〳〵紙燭が皆になる。なんと房様、サア如何じや。如何じや〳〵」と詰かけられ、房「ア、姦しい息が出ぬ。物がいはれぬ赦してたも」妓「息が出ずば火屋へやれ」「そんなら火箸で燒て退け」「南無三寶火が消えた。サア房様の灰寄せじや」と、哄と笑ひし戯言も、明日の哀れとなりにけり。火廻し半ばへ飛脚屋が、「何も御用は御座りませぬか。ヤア房様、京へ上す銀もあり、御狀もあるとの御事。遣はされませぬか」と問ひければ、房「ア、能ふ寄つて下んした。未だ文を書かせぬ。ま少時してから來て下され」飛「それなら明日の便になされませ。今宵は仕舞で御座る」といふ。房「尤もなれども、今夜登して明日の間に合せねば、嚴う叶はぬ大事の用。無心ながら最そつとして、最一度寄て下さんせ。頼みまする」と詫れども、返事もせずに出にける。房は心も心ならず、日の暮までの約束が、初夜過ぎ四ツのかねてより、思ふたつぼへあたりしと、門に出て北を見つ、濱まで歩み西東、足も冷て鐵釘を、胸に打るゝ幾瀬の思ひ。房「ヤア北から人が走つて來る。そりや德様よ」と走り寄る。見れば以前の飛脚屋なり。「お房さまか、どれ〳〵御狀は。舟が出ます」房「ヲ、道理〳〵。此銀は京の妾が親里へ、明日の日中に渡さねば、いかふ詰らぬ銀なれども、今に先から來ぬはい

生姜—擂ようにかく

二ツ—貳身にかく

色の徳云々—德不孤必有隣に通はす

よすが—便

はらみく—孕句即ち腹薬の句、含むにかく

火廻し—倭訓栞に、紙捻に火を點じ衆人廻して戯とす云々

丙午—丙午生れの女は男を殺すと云ふ俗說

ふたせ—二瀬、下女兼帶の妓

ら生姜研したる志も不便なり」と、辻を越えては又戻り、辻に立たり冑匐ふたり、行も歸るも定まらず。如何せうか斯樣生姜酒、熬つく樣に氣がなつて、胸搔廻す雞卵酒、心二ツに打破て、君が方へと走り行く、後は涙の玉子酒、霜の白みに　三重

中之巻

月は早、渡り初して中橋や、六軒町の小夜格子、唐土の聖人の曰はく、色の德には隣あり、向ひ兩側輝す、軒の燈火目印に、昨日も今日も明日の夜も、重ね井筒の釣瓶繩、手繰來いとのよすがかや。中に不便や、房は憂身の種々を、心一つにはらみくの、脇が勇めば力なく、片目で笑ひ片目には、涙を包む火鉢の下、人待つ宵の火𤏐や。小夜も小六も浮きくと、引裂紙の捻り元結で火廻しを、妓「火斗」「日野絹」「房樣なんと」房「妾は獨寢」妓「アヽ忌々し」妓「緋無垢」「冷酒」「引舟」「火桶」「雲雀」「鵯」「比叡の山の檜の枝に」「そりや鳥指が」房「鳥でないぞや身は丙午」妓「又房樣の忌々し。男殺そといふ事か。此方は祝ふて姫小松」緋縮緬解く人日の隙に、鬼も來なと柊や、「雛子」「ひしこ」「ひともじ」「エヽ洒落臭い」ふたせ仲居も小差出で、炊婦は來て「火吹竹」、料理人まで「冷し物」駕籠の彥兵衛「膝頭」

後房とは通路せぬ。今迄心を無下にした、恨みも辛みも赦してたも。さりとては此德兵衛、女房の罰が當つた。罪を赦してくれよ」とて、手を合せてぞ泣き居たる。女房莞爾と打笑ひ、「エヽ忝ない〳〵。挨拶切た捨たのと、幾度か聞たれども、銀まで見せての誓文。とんと心も落着て、今日から眞の夫婦。皆悦んでたもや」とて、嬉し涙を流せしが、「迚の事に年寄て、一夜の心もやすめたし。太儀ながら隱居へ往て、今の誓文一通聞せまして下されかし。これは妾が御無心、御恩に受ふ」とありければ、德「何がさて讓り受れば、我爲にも親同然。ツイ鳥渡往て來ふ」妻「そんなら左樣して下さんせ。生姜酒して待ませう。それ生姜研しや釜の下」竹は手樽を振て見る、酒の通ひ路引換て、夫は北へと出けるが、辻にてふつと思出し、「南無三寳、義理に詰つた女房の臺詞、尤もと胸に應へしより、房が大事をはつたりと忘れたり。入相限りに待て、待ふ。此手筈が違ふては、生死の出來る銀。いや〳〵、親父は明日の事。鳥渡逢ふて」と立戻る。「アヽ左樣もなるまいか。只今誓文立、殊に銀も手放したり。先づ此方を仕舞ふて退ふか。ハア可哀や、房がどうぞ銀の首尾なつて、雞卵酒飲む樣に仕度い事じやと歎きしを、氣遣ひすなと勇めしが、氣の弱い女なり、此方は儘よ」と又立歸り、「思へば〳〵女共、生姜酒して待ますと、手づか

研しや―研せよ
竹―樊けにかく

首尾なつて―都合がてきて

けばくしい—目立ちたる
まぶられて—注目せられて

一念發起—善心に立返るをいふ

伊勢の御縁日—伊勢講、十二月十六日
人置—雇人の口入
一角—一歩

房一人を大事にかけ、此處邊で心底見せ顔に、けば〳〵しい仕方共、側に居るは知た衆、此方より妾が顔、阿呆らしう見えたやら、まぶられて歸りしぞや。それに餘り踏付た。先刻に房を連て來て、女共の女房の、印判までを引探し、納戸戸棚も見せ曝し、これが嬉しからうか。男男の恥よりも、隱しても隱したい、女同士に恥を見せ、男は寢取られ、寢間帳臺は見探され、阿呆の數々讀盡され、これでも男の可愛ひは、さても如何なる因果ぞや。今日の事が隱居へ聞え、妾は親に叱られながら、科を負ふて居る心。人間らしい氣があらば、三十日の一月を、せめて三日は碌々に、寢物語もあれかし」と、心一杯理をせめて、情も深く口説き泣く、千々の思ひぞ哀れなる。徳兵衛一念發起して、「ハツアあゝ過つた〳〵。惡人とも業人とも、盜人とも騙瞞とも、我ながら重罪人、今迄も和女に恥。止ふ〳〵と思ひしが、是程の瀨戸がなふて浮々と盡した。我一人思ひ切れば、和女、子供、隱居の爲、兄の身上、我身の爲、房めが後の爲も好い。其處を知らぬ身でもなし。明日は伊勢の御縁日、今宵の月に蹴殺され、三世の諸佛の御罰を受け、二人の親に冥途から、睨み殺さるゝ法もあれ。ふッつと思ひ切たぞ。今日の女も房ではない。人置きの娘を一角で頼んだ。證據には其銀此處にあり」と取り出し、「明日直に返辨し、向

第、門口に聞て居た。留守のおれを寢て居ると、親父の手前は男をかばふ樣なれど、職人に似合ぬ鬢付な男を、身が代りに寢させたは念が入て忝ない。入聟の事なれば家屋敷家財にも罌粟程も疵は付まいが、うぬが命に疵付る。只今密夫を引摺出して見せうぞ」と、奥に飛込み、何かは知らず「わつ」と叫ぶを胸倉摑み、宙に引提げ躍出、どうと引すへ能く見れば、這は如何に坊主天窓の小市郎。盆に買ふたる踊の鬘、奴天窓を掉りながら、「母樣怖い」と泣居たり。德兵衞も仕舞付ず、詞なければ女房は、宵より積る憂涙、一度にわつと叫び伏し、消え入るばかりに泣けるが、「なふ德兵衞殿。惨ふ御座る辛いぞや。不義せう者と見すゑたら、何故附張ても居もせいで、元日から元日まで、能ふ往き處もある事ぞ。此方の留守の言譯に、ふつつりと事は缺く。隱居樣の聲と聞き、側にあつたを幸ひに、此子に着せて間を渡したも、妾が智慧ではあるまい。氏神樣のなされたと有難ふ思へども、恨み受れば是非もなし。女房の口から推參ながら、言はば此方は人でなし。女房と挨拶切れぬげな。餘所外でもある事か。兄御の内の奉公人、躾異見もすべき身が、客衆とやらのかいになり、身代の妨と、嫂御のねすり言、聞辛や聞憎や。アヽそれも道理。又跡の月の騷動に、一家が寺へ退ての時、見舞に往て見屆た。餘のお山衆は押退て、

間を渡し—間に合す
推參—出洒張る
かい—妨げ
ねすり言—あてこすり

千里萬里云々―餘程な手違

まくし出しや―追出せと也

もがり―物干

實事―役者の寫る事

し、殊に兄御は病中なり、妾等が判では貸す人あるとの頼み様。銀こそは成まいし、判捺く程は一門がひ。殊に妾と他人なれば、猶しも義理はかゝれず。又用無心もあるものと、それで判を押ました。内外の者も聞ぞかし。千里萬里も違ふたか。餘りな親父様」と、陳ずる心の優しさよ。徳兵衛は女房の歸らぬ先にと足早く、門口に立けるが、内には舅の喚き聲。「南無三寶」と入りもせず、暫く樣子を伺ひける。舅猶も納得せず。「ヲヽ女夫が言合せ、親を瞞して身代潰せ、寢て居るも嘘じや。何處へ失せた」と穿鑿す。妻「ハテ何んの留守なら留守と言はいでは。あれ暖簾の彼方へ」と指させば、宗徳は暖簾打上げ、孫の事は氣も付ず、老眼の何見てか、「ムヽウ先づ職人には似合ぬ彼の鬢付が氣に入らぬ。頭痛のする寢やうでない。又喰ひ醉ふたか。春は早々まくし出しや。彼の樣な聟なら、二十人や三十人は今の間に取て見しよ。三日と一人寢させはせぬ」と呟き／＼雪駄穿く。内の者共、「最うお歸りなされますか。送りませう」といひければ、宗「ヤア道なら些と送つて、それ言立に夜食喰ふといふ事か」と、門の戸明れば徳兵衛、もがりの蔭に隱れしを、それとも知らで歸りしは、危かりける次第なり。入違ふて徳兵衛、突と通つて羽織を背後へひらりと投げ、實事の格は見覺えたり。女房の膝元に無手と居て、「こりや最前からの次

談議參―說教聞きに行く
疊算―疊の目を數へて吉凶を占ふ
鹽の長次郎―手品師の名

方のそうぶつ物、内外の者の手は足らず。今朝早々から仕事して、風引いて頭痛すると て、奥に寢て居られます。お前は何しにお出」といへば、宗「イヤコレ徒は來ぬ。只今和女が歸つた其跡へ、堀江の口入れ治右衞門といふものじや。此方の娘御婿殿兩判で、銀四百目貸ました。若い人の事なれば、後日の念に鳥渡知らせて置ます。と言置て歸られた。聞くとおれは眼が眩暈て、一服の藥を呑さいて來た。四百目といふ銀を、何にするとて借たぞ。喰込だか、へこんだか。女夫の中の榮耀使ひか。エヽおとましや。身代は得持まい。おれらが談義參りして、一文投る賽錢さへ、進ぜうか進ぜまいかと疊算置て見て、假へ算が合ふても五度に三度は投げずに仕舞ふ。側に居る同行衆がぐはらぐ投る時には、錢を一文摘んで、片手を斯う振上げ、投る顏で鹽の長次郎、錢は手にとまつた。斯う氣轉を利せねば過にくい身代。四百目は何にした。行端を聞かふ」ときめらるゝ。女房さては丁稚奴が咄しに違ひなしと、思ひあたれば妬ましさ。寧そ言ふて退ふか。いやいやそれも慘い事。如何か斯かと喘來る間に、先づ先立つは良人の可愛さ、「アヽ親父樣なんぞと思へば仰山な。妾ら女夫が何に借錢しませうぞ。其銀はな、南の兄御の方に、曲輪から出た好い奉公人を抱へて、手附銀が遣度いが、世間共に銀詰り、彼の邊りは利も高

法界の男―無茶な男

しこだめ云々―どつさり貰はん

鋸商―兩方から取る故云ふ

額に絕えし―額に毛拔をあつるは若者のする事故いふ

燈心を云々―土器より燈心を出せば油が要るゆゑ引〳〵にかけたり

惡性―放蕩

歸りしが、問ひもせぬに三太郎、「旦那樣は只た今湯屋へ」といへば、妻「チヽ〳〵どうで湯か茶か呑にであろ。法界の男じやと思へば濟む」と、恨みながら、小市郎が目覺すを、暖簾の奥の小座敷に、漸々賺し寢入らせて、我も着物着換んと、押入明ればこりや何んじや、掛硯明廣げ、夫婦の印判取散らせり。これは〳〵と言はんとせしが、四邊を見廻し押沈め、「こりや三太郎、其方に大事の物遣らふ。火を灯して奥へ來い」と、いふより早く、三「應い〳〵、さらばしこだめ參らふ」と、小行燈提げて入る有樣、下女手間取は見送りて、「內儀樣と旦那の中、彼方へさゝゑ、此方へ言ひ、兩方で物を摑居る。彼奴は鋸商ひ」と、鋸屑の言甲斐なき、猜みも下のやくぞかし。此家の隱居吉文字屋の宗德、代代傳はる紺屋の形と、共に兀たる頭を剃し、額に絕えし古毛拔、喰兼ぬ世も算用づく。此家屋敷家職をば、妹娘に鎗屋町、姉にかゝりて隱居分、薪の始末燈心を、日暮て一人によつと來る。內の者共、「あれお辰樣、鎗屋町の隱居樣のお出」といふ聲に、妻「應」といふて立出る。宗德尖り聲にて、「入聟殿は何處へぞ。節季師走內を明て、出るとても出すものか。これ二人目の聟じやぞや。彼の孫の小市郎に、父親三人持たしやんな」と、いふ顏の不興なれば、優しくも女房は、良人の惡性押包み、「何んの餘所へ往やりましよ。方

ふかしい云々―こみいりたる事はいはねどと也
口入れ―世話人
丁銀―形長き銀貨にて百目が金一兩二分餘にあたる
口をとめたる云云―留の縁に糊、糊の縁に徳(解)と續けたり

治「御免」といひて通りける。徳「あれ女房共、内々の治右衛門様、和女の判なら銀貸さうと仰やる。お目にかゝつて置や」といへば、喋合せてや彼の女、「これは先ア〳〵御懇親な。尤も家も商賣も、私の物とは申しながら、子なか産した中なれば、最う今では屋財家財、皆主の物で御座ります。斯うお目にかゝる上からは、妾が請合。ふかしい事こそ、此家屋敷相應に、三貫目や三十兩は貸てやつて下さいやせ」と、褄々合せる辯舌に、口入れ喰ふた顔相にて、治「ア、〳〵これには及ばぬ事ながら、徳兵衛殿は入家と聞く。斯う致せば後の爲、又も用を聞かふ爲。サア判をなされよ」と、手形を出せば徳兵衛、掛硯引寄せ、「これ和女の判」「さらば先づ私」と、互に印判明白なり。治「丁銀四百目包の通り、吟味なされ」と受取渡し、「最う暮まするお暇申そ」徳「些とお盃いたしましよ」治「重ねて〳〵、預けます。さらば」といひてぞ歸りける。徳「ざつと濟んだ目出度し」と、銀懐に押入れ、「これ三太、此女衆を送つて鳥渡往て來る程に、門もしめて火も灯せ。其中お辰が戻つたら、湯屋へ往たと瞞して置け。必ず何んにも叶すな」と、口をとめたる紺屋糊、女「徳樣早ふ」と、出にけり。所帶持ても色は猶、捨ぬぞ道理紺屋の妻、月も冴え行く夜嵐に、妻「あゝ提灯も好いはいの」宵寝まどひの小市郎、竹が脊中にふら〳〵と、「寝風ひかすな大事の子」萬年町に

顔見世―十一月に行ふ顔見せ芝居

遣らるゝ―自分の事を他人の樣に云ふ

豆板―小粒銀

やる粋云々―金を遣る人より貰ふ三太が通人

らして日元が悧發に見えまする。なんと顔見世見やつたか。札買やる錢遣ふか。但し何んぞ餘の物が欲いかいの」といひければ、三「否へ〳〵私等芝居が見たけりや、六軒町の兄御様から何程往ふと儘じや。私や銀が欲い」といふ。女「ムヽ銀持て何買やる」三「アノ銀貰ふてか。銀貰ふてから其銀で、餘所〳〵のお妓が一ッ買ふて見度いと遣らるゝじや」と身を縮む。女「これは出來いた。容易い事〳〵。して誰ぞ惚たのがあるか。サア言へ〳〵」と訊ひかけられて恥しがり、「私が惚たのは、いろはの中にある」といふ。女「ヤアそんならいろは茶屋か」三「否へ〳〵太左衛門橋筋に」女「何んじや太左衛門橋にいろはとはちりぬるをわか、よたれそつねな」と吟じ返せば、三「それ〳〵其次の、らむうけんだ」とぞ答へける。「これは上物上日利」と、豆板一粒はつとはづみ、德「ヤイ今此處へ銀持て來る人がある。此女衆をお内儀樣かと言はふ程に、必ず否やと言ふなへ。さて此事を、女共にも朋輩にも微塵も言ふ事ならぬぞ。合點か」といひければ、三太郎首肯き、「勿體なや〳〵、言ふ事では御座りませぬ。若も重ねて言度い心が出來た時々に、お前へ密と斷りませう程に、又銀を下さりませ」と、阿呆な顔でも損をせぬ、遣る粋よりは粋ならん。時に表に、「頼みましよ。紺屋の德兵衛殿は此方か」と、年ばいなる仁體なり。德「ヤア治右衛門樣かお入りなされ」

そうぶつ―賄物

水も飲れぬ―生計が立たぬ

すつきり―とんと

は、軈て身代は木賊色で、研す様になつて除ふ」と笑ひける。酒漬に、水もつくかや我宿へ、歸り紺屋の德兵衞、忙しげに立歸り、「これ庄助、喜兵衞、埒が明ぬの〳〵。これに未だかゝつてか。何時じやと思ふ。今日は師走の十五日、中の島のそうぶつ物も昨日限の約束。谷町の蒲團も未だ持て往くまいな。兄貴から誂への、重ね井筒の暖簾も遲いといふて腹立じや。女房共は何處へ往た。エヽどんげな。一言おれが言はねば最うそれほど間が明く。吩咐も見廻しも、口は一ッ目は二ッ、これでは水も飲れぬ」と、いふた處は見事なり。下人共は平常の事、「お内儀樣は鎗屋町の姉樣へ、鳥渡往て來ふ程に、お前に問ふて蒲團地も持て往けとの事」といへば、德「そんなら喜兵衞持て往きや。庄助は提灯持て女房共を迎ひに往け。それ坊主奴に怪我さすな。負ふて歸れ」と吩咐れば、「あい〳〵」いふもそこ〳〵ながら、皆々表に出にける。亭主も辻まで行くかと見えしが、三十許の女房と、何やら囁き呟きて、連立ち內に入りければ、女は亭主と座を組て、おいゐ樣顏して居たりける。年季の三太すつきりと合點せず。じろ〳〵視るを德兵衞、「これ三太此處へ來い。突と寄れ」と膝元に呼付け、「此奴はずんど悧口者で、言ふなといふ事いはぬ奴。それで人が可愛がる。近付になるしるしに何ぞ遣てたも」といへば、彼の女、「左樣や

おふさ 徳兵衛 重井筒

上之卷

唄夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に淸十郎と寐た處、裾に淸十郎と鼠色、京の吉岡紙子染、やぼてりがきか、うすがきか。三「正月前の際々に、旦那殿は外が內。御神酒過してうか〳〵と、山衆といへば目が見えず。內に居やんす內儀樣、此方とばかりに打任せ、誂物も節季をも、如何仕舞はんす事じややら。下心の惡い旦那殿」喜「やい三太、そりや何んじや。茶屋へ往きやろが、山衆を買やろが、旦那は旦那、此方とは紺屋の手間取。何事もさらりつと淺黃にいふて居よいやい」三「オヽ、喜兵衛の言やる事なれど、我身は元を知るまいが、地體旦那の下染はの、重ね井筒屋といふ南の茶屋の弟で、是へは入婿。乳吞子紋を持ながら、人のみる茶も構ふにこそ。お內儀は結構者、柳煤竹にやつてじやが、隱居の親父が來ると、家內はしみこほり山染になるはいの。彼の樣にほついて

夜さ來い—夜來いと云ふ意を歌の節にしたり
鼠色—寢にかけて紺屋に因みたる染色を顯す
やぼてりがき云云—濃き紺色、薄柹は淡色
外が內—茶屋酒に耽りて內に居らぬ
山衆—お山
淺黃—以下又例の懸詞
下染—素性
みる茶—茶褐色にて見るにかく
柳煤竹—夫に逆はず立働く事にかけて云ふ
志み氷る—郡山にかく

見付られ—見極められ

華陀—支那三國時代の魏の名醫

受取たりや云々—保證したりとなり、千年を受けて松風と續けたり

懐を達せしとは九州に隱れなきものを、何故尋ねては下されぬ。但し今零落て、諛ふまいとの身の卑下か。但し又拙者が、昔の恩を忘れて見ぬ顔しさうな三五兵衛と見付られたか、恥しい。さりとは聞えぬ。恨めしい。せめて好い折對面して、詞を替して滿足した。後に聞て三五兵衛に追腹切れといふ事か。さりとては曲もない。其筈じやない源五殿」と、抱付て泣ければ、今際のおまんも眼を開き、じろりと見たる眼は涙。源五兵衛も手を合せ、「忝い」とばかりにて、各々わつと泣く涙、落て流れて紅の、朱の血潮も洗ひけり。源「アヽ三五殿、御夫婦の御禮は來世で〳〵。とてもの情に御介錯早ふ〳〵」と苦む聲、三「エヽ腑甲斐ない、氣遣ひすな。最も深手といひながら、本國長崎に黄陳といふ南蠻外科。昔の華陀が仙方を傳へ、斷れたる筋、折れたる骨、落たる首も繼ぐ名人。此療治にかけたらば夫婦が命も恙なく、千年までは千石取が、受取たりや松の風。風に當つるな身を揉むな。とり〴〵さま〴〵取繕ひ乘物に乘せ、三味線に乘て謠ふは源五兵衛、何處へ往やるぞ薩摩の山の、山は寶の山とかや。

風體千石—身装が千石も取る樣なる

息をはかり—息を限り

比翼の盃—夫婦の盃

悟。人を斬れば死ぬるは覺悟。嘘か實かこれ見よ」と、左の肋に刀を突立て、「ゑいやっ」と引廻し、返す刀を喉笛に、立ては立てて刳りしが、腹を深く切たれば、腕先弱り仰向に反り、半死半生哀れなり。斯る處に風體千石ばかりなる武士夫婦、供廻り華美に、親新兵衛に案内させ、息をはかりに駈付け、「未だ死切らぬは嬉しや」と、夫婦の手負を看病し、耳に口寄せ大音上げ、「エヽ言甲斐ない源五殿。先年京都で參會した、林と申した侍女、今は笹野三五兵衛。是は我妻、其時の小まん見忘れたか。不慮の縁によつて親の敵の在處、別名まで聞たるゆゑ、翌年敵を討おほせ、數年の本望遺恨を晴し、此小まんと夫婦となり、本國本地に歸參して、會稽の恥辱を雪ぎ、武門の美名を輝すも源五殿の御情。御恩は海山報じても猶報じがたし。先づ御自分の行衛を尋ね、拙者が主人を頼み入り、お國を廣ふ彼のおまんと、比翼の盃取結ばせんと、心の限り尋ねても、今日まで行方知らず。その内にあのおまん、外に縁に付させては、恩を報ずる甲斐もなし。先づ外の手を止むるため、我等が方へ呼取て、靜に貴殿を尋ねんと、我々夫婦が思案にて、媒介頼み作り名して、言入れの結納送つたは此三五兵衛であつたぞや。殘り多や殘念や。さりながら曲がない。よし此方こそ知らずとも、笹野三五兵衛こそは親の敵を討おほせ、本

しやまだるい—しやは罵聲、手ぬるき

曲合—釣合

衛合點せず。「イヤ明日戻さば戻しもせん。今日一日は、此源五が戻さぬといふ一言、首になつても言通す」と、さら〳〵戻す氣色はなし。母は名に負ふ我武者もの、「ヤアヽしやまだるい男ども、おまんを引立て連て來い」「畏つた」と下男、床の上へ駈上る。源五兵衛駈塞り、「武士の女房に指でもさゝば片端に、泥鱗斬て斬すへん。寄て見よ」と睨めまはす。薩摩一國名取の男、源五兵衛に睨付られ、左右なく寄付ものもなし。母事ともせず打笑ひ、「臆病な奴等かな。昔が今に至るまで、白眼れて死んだ者はない。おまんおじや、手を引ふ」と、立寄る處を抜打に、頬先かけてずつぱと斬る。斬られながらに刀の刄にしがみ付ば、手の中くられ朱になつて逃廻る。おまんは母を斬らせじと、立掩ひ立隔り、抜刀の下へと廻りける。男はおまんを除ん〳〵としけれども、喘に急たる手も伸で、見込の曲合外れしけん、おまんが左の肩先より、前は乳房を袈裟がけに、兩へさつと斬下られ、既に最後と見えにける。母は怯まず大聲上げ、「やれ人殺し、切た〳〵」と呼はる聲に、當町隣町驚き騒ぎ、我も〳〵と駈集り、手負を勞り、「源五兵衛取逃すな」とぞ犇きける。衛源五騒ぐ色もなく、大肌脱ではつたと白眼、「やかましい町人共、逃すなとは誰が事。術によつて此源五が、立退かば退きもせん。逃るといふ字が聞憎い。刀を拔くは人斬る覺

あのゝものゝ―何のかの

祝ひ、屹度仕立て送りませう。新兵衛心も其通り。其證據に今日は、祝ふて餅を搗まする。鳥渡戻して下さりませ。善哉餅祝ふて戻しませう。サアおまん、起ておじや。サアおじやいの。アヽ志太い子や」と言ひければ、おまんは中にうろ〳〵と、「情なや疎ましや。あのゝものゝが喧しい。鳥渡戻つてさらりつと、埒明て來ませうか」源「何處へ〳〵。母めが言分皆僞り、騙して瞞して連歸り、頼みを取た聟の方へ送らんといふ心底、面相に顯れた。門より外へ一寸も出しはせぬぞ。動くな。母めも今日が明日になり、千日なりとも居たくば居よ。おまんに於ては戻さぬ」と、既に顏色變りけり。母は元來尋常者ならず、「アヽ町人の淺ましさ。お武士の作法は知らず。是非に及ばぬ何とせう。駈落人のお尋ねもの、それでも武士が立つならば、いはれぬ肝精やかふより、町所家主を頼んで連て歸りませう。手間も暇も入らぬ事、皆來い」と起たんとす。おまん取付き、「先ア待て下さんせ。町所へ斷つて、源五樣を今の間に牢へ入れふといふ事か。連立て歸りましよ。先づ靜まつて下さんせ。これ源五樣、萬事人に逆らはず身の愼みと申した事、必ず忘れさんすな。大事のお身じやが合點か。何も妾が胸にある。鳥渡戻つて親達を、宥めて歸ればさらりと濟む。私次第にして居なさんせ。つい戻りましよ」といひけれども、源五兵

著々—平治物語なる義平源氏の嫡嫡の句より出づ、立派なる武士の意

取つて着く—取りつく島なし

物仕—物になれたる分別者

て、誰に甘へる者がない。妾や此方樣に甘へる。あまやかして下さんせ」と、頰杖枕身を横に互に足を打靠せ、來し方語るぞ盡しなき。斯る處へ母親は、下女下男引連れ、案内もなく突と入り、「ハア、おまん此處にか。左樣あらふと思ふた。來るなら來ると、二人の親に何故知らさぬ。人も連れず、着の儘で、親の外分構はぬ氣か。言ふ事いふて仕舞ふたら、きり／＼戻りや迎ひに來た」と、前後もなく言捨けり。おまん挨拶言はんとするを、源五兵衞押止め、突と出で、「われ／＼昨日までは、其方へ出入奉公下人分の事介。今日より元の菱川源五兵衞。一錢持ねど武士の著々。十萬貫目持やつても琉球屋の新兵衞。詞も違ひ座も違ふ。推參至極な案内もなく踏込で、歸れといふは誰が事。此おまんは身が女房。武士の妻女は夫の心次第にて、親の儘にはならぬ事。をのれが宿にて新兵衞を廻いた格とは違ふたぞ。其方ばかり早や歸れ。長居をせば引摺出す」と、烟草引寄せ烟吹き、取て着くべき方ぞなき。女房さすが物仕にて、詞を柔げ、「御尤々々。連て往んだら戻すまいと惡ふお心廻つたそうな。親が千萬嫌ふても、主が心に好たもの、戻さぬとても彼の子が戻らずに居やるまじ。親も何しに留ませう。さりながら、琉球屋ともいはるゝ我々、娘一人を躾かね、長持一箇送らぬと、外聞惡い沙汰も嫌。第一彼の子が身

久しうて―久し振にて

氣が草臥てとろ〳〵と、船梱に手枕して、寢るとも思はぬ其間に、まざ〳〵しい夢を見ました。妾や此方樣に斬らるゝ。此方樣は又腹切て、夫婦刄の死人の爲と、流れ灌頂七流れ、殊勝らしい坊樣が、鉦をはつてお念佛。妾や悲ふて〳〵、何やら泣て口說たが、言ふた事は覺えねども、我手に我身の回向して、念佛申すが耳に入り、ふつと目が覺め恍惚と、今のは夢であつたげな。サア徒事ではあるまい。此方樣の怪我過ちか。但し浮世を見限つて、例の短氣が起たか。早ふ逢たや聞たやと、胸も心もわくせきして、帆掛船さへ間緩ふて、手繰つく程氣が急た。此樣に無事な顏見まいかと思ふたに、妾やがつくりとなりました。善いにつけ惡いにつけ、夢は三日が大事のもの。必ず人に逆らはず、身を愼んで下さんせ。これ此袖見さんせ。夢に泣た淚で、今に濡てあるはいの。思へば思へば夢の間の悲しさが、眞の事なら如何せうぞ。夢が合ふたら如何せう」と、夫の膝に凭伏し、聲を上てぞ歎きける。源五は男氣打笑ひ、「チヽ氣がくたびれては、いろ〳〵の仔細もない夢見るもの。身に金が入るとて斬らるゝが上夢。おれも去年怖い夢、天狗の鼻に取付て、女護の島へ渡ると見た。其明る日、餘所から松茸と赤貝を貰ふた」と、語ればおまんも吹出して、「エイ好い加減な事ばかり。アヽ久しうて笑ふた。家では親の氣を兼

夢違しつ—夢を判じかふる事

雄波—大波
雌波—小波

・甲が舍利—甲蟲の如き堅き物が骨になるともと也（難波土產）

とけしない—待遠し

り。おまんは驚く楫枕、我身は元の我身にて、覺ても覺めぬ夢心地。淺瀬の波に下り浸り、歎きの聲に舟人が、舵取直す面楫の、回想せば夢なりけり。「心許なや我夫に、怪我過ちの知せの夢」と、かつぱと轉ぶ兩袖に、涙も潮も滿にけり。夢違へしつ轉じ反へ、心も浪も立騒ぎ、痞は上る山颪、吹や追風のそよ〳〵と、風のいろはに帆を上て、走り行衞は薩摩潟、沖の雄波に憧れて、便り渚に立つ雌波、身を碎くこそ三重不便なれ。尋巡るやはう〳〵の津、鹽の辻なる裏貸屋、豫て聞置く目標あり。萬「嬉しや此處ぞ」と走込み、「ヤア、これは源五樣、死なずに健康で御座んすか。先のが眞か是が夢か。何れが夢やら誠やら。息が切れた水一ッ、先づ飲せて下さんせ」とどうと伏てぞ泣居たる。源五抱上水含ませ、「能ふこそ〳〵。心底屆いた滿足した。此上からは親里の、首尾は兎もあれ角もあれ。首は首、胴は胴、甲が舍利になるとても、親の手へは渡すまい。落着て氣を沈めや」と、背中を擦り撫下す。おまんも少し笑ひ顏、「此方樣の顏見たりや、胸も大方沈まつた。氣遣して下さんすな。さて〳〵憂い目辛い目や、身の一代に覺えぬ事。裏の高塀飛損ひ、堀へ落て死ぬる場を、お蘭比丘尼は命の親結ぶの神。眞實奇特な介抱ゆゑ、鰐の口を遁れ出、やう〳〵と福山の船に乗り、九里の渡も千里の如く、とけしないやら怖いやら、

流灌頂—無縁の水死者を供養する、之よりおまんの夢の話

結ぶは有漏路—心一つを惱ます間は煩惱を脱せず

方も近くなれ。潮滿來れば水馴棹、長き日影もほの曇り、心盡しや氣盡しに、暮ぬ先より我心、夕暮の關眺めやり、睡る鷗に誘はれて、轉睡のふら〳〵と、船に搖れて睡るらん。舟人も睡り漕れ行く、そも一睡の假枕、皆一心の欝結、夢を結びて有磯海、夢か現か幻か、更に分ちも七流れ、流灌頂血の上の、亡者浮ぶる法の水、哀れにも亦不思議なり。導師のお僧鉦打鳴し、釋迦は去り、彌勒は未だ世に出ず。彌陀の彼岸を頼まずば、何時か火宅を出船、乘遲れては誰か渡さん。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀南無阿彌陀南無阿彌陀、南無阿彌陀佛南無阿彌陀。如何なる人の何故に、刄の上の往生か。産のあら血か世の中は、餘所の事とも思はれず。語り給へと尋ぬれば、誰がいふとも浪の音。弔ふ人は琉球屋、おまんと申す姿の花。夫源五の手にかゝり、消て散たる血刀の、法の誓も淺ましや。其おまんとは我身の上。娑婆か冥途か如何にとも、覺束涙せきかぬる、浮世の恨み葛の葉の、返す刀に腹掻破り、男は晨女は宵、一夜ばかりは隔つれど、末の逢瀬は一筋に、流れ寄邊の水施餓鬼、語るも我身聞くも我、心一つをいろ〳〵に、結ぶは有漏路、解れば無漏。萬事は夢の戯れの、手にも取られぬ沖津風、濱風潮風颯々、さつとして覺行く夢の痕見れば、ありしは浪の音饕々として、海上空しく渺々た

妻を都鳥―業平の歌をとりたり　妻は夫の事

ひらき、―地名、一樣に開くをかけたり

足四本―共寢の事

流され人―平康賴を指す

雨の杜―日向の名所（國花萬葉記）

よんじり、嫁御云々―柴崎勘六の歌、唐金の茂右衛門が女房はよい嫁御あれ見さいな筑波山の横雲よと雲の下こそわしらが親里の作り替

の高野に逃れ來て、遊ぶ野雁や鷺鷗。筑紫の妻を都鳥、ありやと問へどいかにとも、牧の野馬の馬の耳、風福山の渡守、我が思ひはしらずげに、舟も潮も引く方に、下り行く濱ははや日のきし。高千穗の嶽高けれど、高い聲せぬ二人が中の、契は此世後世山、隱すほど猶世に漏て、誰ひらきょの、神の氏子の神謠や。「俺們は知らぬが子供等が咄す。おまん寢處に足や四本となんしよばへ。寢處におまん、おまん寢處に足や四本となんしよばへ」謠ふ一節舵の音、蜑の友呼ぶ聲までも、此方が浮名の噂かと、餘所の僻言焚付の、硫黄が島は一霞。流され人の彼の島で、流す卒塔婆も立波に、寄來る〳〵綜くる糸は、くまの三筋が流れちりつる、ちんりちりつる三味線の、渡初にし國とかや。琉球國に打續き、薩摩や、三が國に、霧雨が降らばよな。それぞ立名の憂き雲の、雨のもりとて濡て行く、袖は嵐の吹乾して、顏は涙の水鏡。アヽあれ、あれ〳〵、眉の引墨紅臙落て、髮はばら〳〵海藻和布に、縺れ亂れて何時櫛の齒の「櫛になりたや。ヤレサテ薩摩の櫛に、諸國娘の、ヤレサテ手に渡ろ」「どうがねの、よんぢり嫁御は好い嫁御。此なんなんこの好い嫁。あれ見さいな霧島山の横雲。此なん〳〵此横雲。横雲の下こそ俺們が親里。此なん〳〵此親里。妻里が夜の間に近くなれかし。此なん〳〵此なれかし」戀しき

生平―近江の產にて赤檮の筋にて作る、着るにかく
織留―おえまひにかく
源五兵衛云々―當時の流行唄にてお萬が男を慕うて櫻津に下る時の思を含めたり
高い山から―諸國盆踊唱歌甲斐二にある歌
姿は四季の云々―源五は花の如き美男にて數多の女に思はるゝ故お萬の戀が叶はぬ述懐
鰈川―親を睨めば鰈になるといふより續けたり
大隅姶良郡にあり

萬「ヲヽ此方樣松葉の相生まで。妾や一人寢の芭蕉布。御恩生平の目も詰る。涙に袖は半晒。今ぞ一期の織留」と、互の心太布の、名殘は一反裁切て、二丈六尺五尺の身、戀に晒すぞ 三重 哀れなる。

下之卷

源五兵衛おまん夢分船

唄 源五兵衛何處へ往やる。薩摩の山へ。後はおまんが、涙の海よ。船も押れず、櫓櫂も立たず、寄邊尋ねてうか〱、うか〱焦るゝ、源五兵焦るゝ。高い山から谷底見れば、布を晒すは、夏こそよけれ。おまん心は冱寒の冬か。雪の俤ちら〱、ちら〱忘れぬ、源五兵俤、姿は四季の花なれや、時折り〱に流行行く、山ぞ伊達者の山葛、引手數々かずならぬ、心の種の小舟に、情の上荷はねられて、思ひは沈む。ヤッサ、やつさ〱の空櫓の音も、耳に悲しく遠ざかる、彼の故鄕へ此儘で、又歸らじと思ふにも、これが此世を出船ぞと、親を恨みの目は涙、何に生れん鰈川、松の叢立夏樹立、櫻島人打群て、サンサ沖に、網引釣垂るゝ波の雄波を、かきわけ〱走る兎の名所ぞや。よゝ

嘘には何としてがなせまじと來た證據、死なせはせまひ。聲高に暇取て見付られては一大事。此方らは此木で留て置く。是を手繰れば樂々じや」と、石を錘に結付け、投ても如何屆くべき。力の程も白布の、松にかゝるぞ仕合せなる。おまん嬉しさ「恥しや。疑ひは御免あれ」と、伏拜み〳〵、布引絞り松の木に、慥と括り付ければ、此方は尼が締付て、しつくりの木に留てけり。おまんは片手に布を取り、片手を廻し松の木に、かゝりし帶を引放し、左右に手繰る布引の、瀧津心の胸跳り、目眩氣も消え絶えぐ〳〵の、雲の通路天津風、尼がせくまゝひく〳〵の、聲を力にやう〳〵と、對ふの岸に手繰着く。蘭「サアしてやつた。あぶなや」と抱下せば夢心地、萬「アヽ正眞の生如來、これが誠の善の綱。お禮は何と申さう」と、泣拜むこそ道理なれ。蘭「禮をいふ間に夜が明る。所の人に敎へるは、釋迦に經か知らねども、陸を往けば遠ふて追手の氣遣ひ。九里の渡が近いげな。一足なりとも早いが好し。此尼は今生で逢ふ事は是まで。一所不住の出家の身、互ひに便も是限り。早ふ〳〵」と別れ行く。萬「仇を御恩の情人、名殘は盡ず上方で、芭蕉の布を見る時は、形見と思ふて下さんせ」

してやつた―甘くいつた
九里の渡―大隅の福山より棒の津に渡る航路

底知れず。幅一丈の堀切にて、下るゝに足手のかゝりなく、飛ぶことかたき石垣なり。此上は思案もなし、思切て飛で退ふ。水に溺れて死んだらまゝ。千に一つも神佛の、力もあらばと思ひきり、ひらりと飛べば南無三寶、帶を松に引かけて、宙に下つて是も彼の、罠に罹りし野邊の雉子、夫ゆゑにこそ苦しみけれ。斯る處に如何はしけん、お蘭比丘尼は紛れ來て、締たる門口見世格子、覗き歩き、裏へ廻つて此姿、一目見るよりはつと驚き、怖氣立ち念佛申して居たりけり。おまんそれと見るよりも、萬「ヤアをのれは又來たか。思ふ夫に添ふからは言分はあるまいが、我に恨みが遺つて殺さん爲に來たよな。口惜や。これを見よ。内は忍出たれども、兎角男に縁ないしるし、其方が手にかけいでも、暫しの知死期を松が枝の折るまでの命ぞや。定めて源五樣も同道と覺えた。槍はあるまい、竹の先に小刀でも結付て、夫の手にかけさせて殺してくれよ。エヽ苦しや。身がしまつて息斷れして、アヽ苦しや」と悶えしは、目も當られぬ風情なり。蘭「なふ勿體なや。我等に左樣な惡心なし。素より源五樣に露心遺さぬ上、今日御二人の深い中、そもやそも此尼が、半時も男の側に居ては女の道立たず。三衣の罰も恐しく、此世では源五樣に、逢ふまい見まいと鉦を打ち、明日の夜明に上方へ、幸ひ出船の件もある。夜の中に港ま

知死期—生年月を干支にて繰りて死を豫知するゝ

三衣—大衣、七條、五條、僧尼の服

棒の津―薩摩川邊郡にあり

薩男―獵夫にかく

用心精しき―用心周到

の毒」と、いへばおまん縋付き、「とてもお慈悲の上からは、妾も源五樣、一所にやつて下さんせ。拜みまする」と泣叫ぶ。母は彌々腹を立て、「おのれが一所に出て往んで、賴みを取た聟殿へ此方とは死んで見せうか。それ親父殿、奧へ連て往つしやれ。事が延れば尾鰭がつく。男共は居らぬか。此奴が宿は棒の津にあるげな。家主へ渡して來い」下男「心得ました」と引立る。おまんはわつと聲を上げ、「なふ源五樣、お蘭と連立ち御座んすの。アア羨しい。腹の立つ」と、恨み歎けば源五兵衞、「往き度ふては往きませぬ。今此庭でさつぱりと、死にたいわいの」とばかりにて、撞と伏て泣沈む。手荒き薩男の無意氣もの、「死にたくば我宿で、撲殺してくれふぞ。コリヤこれを見よ」と、振上て振廻したる棒の津や、棒づくめにて三重送りける。何時の間に、日の暮るゝとも夜の更るとも、おまんは分も性體も、泣續けなる孀鳥、親の柵む背戸門に、人目の網の繁ければ、魂ばかり飛鳥の、翼折れたる如くにて、屋敷の内を此處彼處、逃出る隙間もがなと尋ね廻れど、常々に用心精しき屋造の、風の通もなかりけり。「見付られたらそれまで」と、布織る下機取組て、庭木の松に凭せ架け、我身ながらも恐ろしき、智慧の梯子を上るにも、盜みする氣の斯くやらん、顫ひ〳〵もやう〳〵と、枝に取付き、塀の上へは上りしが、廻りは用水

合木—撥棒

わんざん—和讒、冗談口

衛駈出、「四邊隣家もあるぞかし。兩方默れ沈まれ」と、制すれども聞入れず。母親始終を聞濟し、水汲合木押取延べ、競合ふ中を容赦もなく、「沈れ〱片端に、撲すへてくれるぞ」と、敲き廻りし猛勢は、只山姥の山廻り、舞損ふたる如くなり。銅鑼の樣なる聲荒らげ、「エヽ親父殿が生緩い。縛し上て置もせず、彼奴等が口說の揚屋の亭主になる氣か。やい事介、おのれはお尋ねの源五兵衛、大事の娘を敎唆し、塞りの此國へ、前髮落して態を變え、又彼の子に惡氣を付け、人の目を暗ますは、人買よりも野太い奴。徒さへお國は人改め、をのれゆゑに此內は、月に一度の判をする。見知らぬとて是非もない。手前に平常飼置て、外から上へ聞えては、同罪といふ一筆の身拔がならふと思ふか。御吟味所へ引渡し、牢へ入るゝは安けれど、おまんが心底量つて、腹を借さぬ母ゆゑに、世間內證、義理一ッで沙汰なしに往なするぞ。尼めも共に出て失ふ」と、常わんざんとは事替り、道理至極に返答なく、おまん淚に性體なく、源五は手を突き頭を下げ、「元に落度ある上に、重ね〲の過り、如何樣になるとても御恨みとは存ぜず。只御夫婦、娘御の御難儀のなきやうに兎も角も御計ひ」と、差俯伏て居たりけり。情ある新兵衛も、私ならねば詮方なく、「疾にも斯と打明て仰せられれば、何とぞ思案も致さうもの。近頃殘念氣

萬人妨なし―萬人ゐても差支なし
いはれぬ處―要らざる處

其如く、此胸一ッすゐたらば、源五兵衛殿で御座らうが、業平殿で御座らふが、戀の絆に繫ぎ留め、物の見事に添ふて見しよ。されども國のおまんゆゑ、斯うなつたとの物語。我身の事は思斷り、和女に早ふ逢せたく、路銀まで取しつらひ、其上にも其中は、何とか成しと氣懸りにて、迚も捨たる此身の果、修行がてらに餘所ながら、戀には味方の欲いもの、役には立たずと力にもやと、八重の汐路を越渡る、都女の戀の仕樣、見習ふて手本にしや。それに刄物を投討して、欺し討に殺そうや。コレ和女の手では得死ぬまい。サァ源五兵衛殿、尋常にお手に罹れば身の本望」と、脇指拔て手に持せ、泣喚いて武者振付く。おまん引退け、「これ姦しい、しち諄い。都の、上方の、聞ともない置てたも。西國の、筑紫のとて、情の道に替りはない。和女の樣に言ふならば、西國はまだしも、唐には戀はあるまいか。これ斯う竝んだ妹背の中、和女の樣な女房が、千人萬人妨なし、杆を入れても離れはせぬ。何が邪魔で殺さうぞ。怪我にあたるは其身の不運。言れぬ處のお見舞がら、都衆の戀には手傳ひが入さうな。薩摩の戀に味方は要らぬ。早ふ出て往ね。腰が起たずば綱つけて、引ずり出すが失せまいか」萬「いや張合になつたれば、斯う居た處を動きはせぬ」萬「チ、動かずとも動かせう」と競合ひ捻合ひ立騷ぐ。新兵

そでないと—ぉ關でないと

木の端—法師を木の端の如き不用物に譬ふ(枕草紙)

ひて、常々疎み憎まるゝ。袈裟まで憎い世の譬、今日は年忌の佛まで、憎まするは我戀ゆゑ、多くの罪を爲りしも、皆徒らに成果た。死だ跡では彼のお蘭と、心安ふ添しやんせ。妾や死にます」と、事介が脇指拔て我胸に、突通さんとする處を、源「これは短氣」と飛蒐り、柄に取付き、「これ〳〵今日の日天御照覽、少しも隔つる所存なし。思ひがけなき處へ來て、我も當惑したる上、氣にかけさせて無益と思ひ、先づそでないといふた分。隱し遂げる心でなし。前後の聞分なふ、氣が短い」と挐取れば、萬「ヲヽ氣が短かふて鈍な事、見ながら生ては居られぬ」と、又取著いつ挐取つ、競合ふ中に母親は、戸外まで歸りしが、内の騒ぎに心を注け、暖簾の蔭より覗くとも、更に白刃を奪合ふて、やう〳〵男挐手奪り、手許に置じと力に任せ、投る拔刀が一はづみ、二階の比丘尼が小腕に、鍔はづれにずつぱと立つ。狙ふてはよも當るまじ。障子にさつと生血引て、朱に染れば兩人の、口說も傍へ與覺て、「これは〳〵」と騒ぎしが、されども淺瘡甲斐〴〵しく、二階の梯子蹈轟かし、聞「これ源五兵衛殿、おまんどの、有繫は田舍夷よなふ。男に執心引されて、尋ね來たとの悪推か。執心殘る程ならば、可惜姿を慘たらしう、木の端と窶さいでも、人は情の心の花、花の匂ひに引れては、深山谷の奥までも、離れ難なふ慕ひ來る。戀路とても

い。さらばお布施を包まふ」と、奥の間にこそ入りにけれ。二階を瞰上て事介、「エヽ打見には殊勝らしく、咄を聞けば淫奔者。信心が覺たれど、非時をせよとの吩咐。豆腐でも取て來ふ」と、起たんとすればおまん取付き、「コレ待つしやれ。彼の尼は、内々咄に言しやんした、小まん樣の侍女お蘭であらふが、何故默止て隱さんす。但妾があのお蘭を取て噛ふと言ましたか。如何いふ心で御座んす」と、問詰られて顏を赤め、事「ムヽ今の尼の咄が蘭が噂に似たゆゑに、其處を以ての惡推か。イヤ是はいかひおはまり。彼のお蘭があの尼ほど見えれば、薩摩へ戻らず京に居る。床から出た顏見せたかつた。頭は赤熊、猫背中、鳩胸に顏は猿、ま些とで鵺になる。思出すもなふ嫌や。暗がりの商ひはせうもので御座らぬ」と、紛らかし出れば、萬「いや〳〵〳〵言しやんすな。それなら何故門口で、咳拂して首肯合ひ、何もいふまい〳〵とは何んの事で御座んした。命をかけ身を捨て、親に見返る男なれば、鼻息にも氣を付ける。低ふ言ふたら聞まいと思はしやんすが不覺の至り。過にし事を輪廻深く言ふ氣はさら〳〵無いものを、問はれても未だ隱さしやんす。左程に隔て心を置き、未來までとは能ふ言れた。お蘭が來たも皆あいけん。積られた、騙された。逢染し時の誓文を、金輪際と思ひ詰め、男を大事にかけるゆゑ、今の母に逆

惡推—わるく推量す

あいけん—合筆、グルになる

苦は色替ゐ—苦は何處へ〳〵も附纏はる

石上樹下—佛の難行苦行

非時—佛家にて午後の食事

れ内方から志がしたいとある此方へ〳〵」と案内す。顚「ハア御免なりませ」と、笠を脫で腰懸る。おまん茶を汲み饗應て、「若いお人の上方から、筑紫の果まで修行して、發心の因緣は如何した事か知らねども、今其身には苦もなふて羨しふ御座んす。眞に此世の佛じや」といひければ、顚「あのおしやんす事はいの。苦は色替ゐ松風、通り風の吹く樣に、身にも染まぬ一時戀、物言ふ間もない仇し男と、假初臥の轉寢、後も前もない戀なれど、お前樣も姫御前、女の果敢い心から、二人に枕替すまいと、思初たが善智識。髮容つくつてさへ高の知れた妾が縹緻、衣を墨に天窓を圓め、戀慕はれふと思はねば、寧そ氣樂で、何れ佛では御座んする。されば佛の石上樹下とて、石の上、樹の下陰の宿も厭ひ給はねば、岩が根枕氣散じながら、寢覺々々に如何やらすれば、彼の仇臥の因果めが、煩惱を起させます」と、餘所に語りて事介を、尻目に睨むぞ氣味惡き。事介も迷惑さ、「ヱヽ此處な佛殿、問はず語りせぬものじや。近頃佛とも覺えぬ人じや」といやがれども、新兵衞氣も付ず、「菩提の緣は種々、殊勝にこそ存ずれ。今日は我們が先妻の忌日。彼の中二階の持佛に薰譽蓮淸と申す位牌、あれにて念佛御回向賴みます」顚「それなら彼れへ通りましよ」父「いざ〳〵あれへお通り」と、二階へ上れば新兵衞、「事介賴む、何ぞ一種で非時をせ

跡も結ばぬ—末のをさまりもつけずに
針道違ひ—契約違にかく
手づゝ—拙き
せき縫—障り
かたあけ—うちあけ
伏縫—伏すにいひかく
雷—八釜敷妻の事

は長き糸巻を、繰返しては繰返し、縷れつ縺れつ合せ糸、六道の縫目に待針して、手は遲くとも待ぬべし」源「アヽ跡も結ばぬ糸筋の、一筋先へ拔んとや。一人殘りてまだ〳〵と、誰を相手に裾合せ」萬「針道違ひ着憎しと、手づゝの浮名は取るまいとよ。さては賴もし憖に、まだ着替なき此生は、五尺に足らぬ襟落し、狹き浮世は何かせん。戀にさはりのせき縫の、積る思ひをかたあけて、同じ刀に裁違へ、一ッ枕に伏縫して、三途の川の脊筋にて、結留ましよ縫留ましよ」留てとまらぬ涙の糸、裾を引合ひ褄を引き、二人が歎き諸共に、疊み込めつゝ泣沈む、世に便りなき戀路なり。時しも戸外に念佛も、鉦の響きも哀れげに、細々と女の聲、「これは上方より諸國を巡る修行の尼。草鞋の價賴みます」と、聲付賤しからざりけり。新兵衛起上り、「ヤア事介來たか。あれ一錢取らせ」といひければ、萬「なふ父樣、母樣のお位牌に念佛一言手向の爲、彼の修行者を持佛堂へ呼入ても大事ない事か」父「ヲヽ氣が付た奇特々々。殊に比丘尼の事といひ、雷奴が戻つても大事ない事。これ事介呼入れよ」事「唯」といふより戸外に出、見れば京の屋敷にて、假の契のお蘭なり。互にはつと驚く顏、事介ちやつと我身を蔭に、頭を掉て口の内、「何も言ふまひ言ふまひぞ。ゐへん〳〵」と知らすれば、心得首肯く目元にも、浮ぶ涙ぞ至極なる。事「こ

行丈—意氣込
袖下—人不知
袖形—戀の道
はづしの絲—初心
縫當—橋渡し
小褄—妻
逆衽—[illegible]

も出入の門の事、其方に知せ、取持て貰はずば、殘多く腹も立ち、無念も嘸と思遣り、種々心碎きても、先づ一旦は緣付に遁れ難なふ極りし。嫁入する日は死扮裝、葬禮の儀式と聞く。此方の用意は死用意。嫁入の供をしてたもらば、其方も定て死扮裝。此誂への縫物も、其心得に仕立れども、心の底の行丈は、昔も今も替らぬが、彼の袖下の言換し、いよ〳〵一尺一寸も、引かぬ合點か聞たい」と、縫物に言托せて、問へば答へも返し縫ひ、心通はす端縫の、詞の緣こそ哀れなれ。萬「我もそもじも缺腋の、其袖形の行肩も、何も彼も未だはづしの絲の、愛しとまでに思わくの、針の本末覺え初め、互ひに心懸糸の、緣に綜糸括袖、針目人目も思はねば、親の躾も假や只、解な解じと仕立しに、綻び易き習ひとて、誰がみょづに聞傳へ、さがない浮世の袖口に、かけて裂れて形きなや。文の音信言傳も、誰れ繼當ず中絕て、何時染々と久振り、行丈逢た夜半もなし。果敢なきものは女の身。親の詞に內襟の、餘所の小褄に綴られて、辛や悲しや忍び泣き、涙小針にしく〳〵と、まばら〳〵に縫こぼす。實に道理や、とても肩身ばかりが浮々と、存命果る身巾なし。縫込廣き身でもなし。かたの惡さに裾切れて、人を恨みん道もなし。思ふた事、言ふた事、今は仇なる逆衽、三寸落しに裁切て、此世の契麻糸なれど、來世

ばしー助辭、はに同じ
やあゑいーヤッコラシヨ
神に誓を云々ー以下縫物の事に色々の名をかけたり
指貫ー指切にみだけ絲ー亂れたるに
絣込ー包むに
急爾所ー給仕と急所とかく

ぬ。必ず〳〵苦に持て、煩ふてばし下さんすな」と、親子手を取り縋合ひ、泣叫ぶこそ道理なれ。父「こりや〳〵戻つて見をれば喧ましい。縫物でもして居や。酒の上に泣いたれば、ア、いかふふらつく。やあゑい」と手枕すれば、萬「少ととろ〳〵となされませ。妾も其間に、事介の頼みやつた洗濯物、つい仕立てやりましよ」と、取出す我も其人も、互に思ひ替らじと、神に誓を掛針や、此血を染し指貫なりと、思へば心みだけ絲、過し其夜を忘れかね、思ひ切かね捨かねて、心の底に包み綿、落る涙の糸筋に、戀を絣込む哀れさよ。事介は頼みの使ありと聞くより堪り兼ね、嗜む一腰ほつこんで、覺悟極めし顏色、門に駈入り、「おまん樣これ來ました」とばかりにて、おろ〳〵涙で立居たり。おまん嬉しく、「ハアおじやつたか、先づ上りや。母樣は留守、父樣は寢轉んだばかりで、碌に寢入はなされぬぞ。物を言やらば密といや。お眼が覺れば惡いぞ」と、眼まぜ頷き知らせける。事介聽て合點し、「今日は御縁付の極めがあると承り、お出入申す私が、お前の嫁入をおめ〳〵と、知らぬと申すは一分立たず。御心底を聞屆け、其日出度いお座敷の、お茶の給仕を、これ急爾所をまづ此樣に、お給仕でも致さんと、脇指さして參つたが、はや御祝儀は相濟み、御縁付は極たか。早ふ聞たい〳〵」と、胸撫擦るばかりなり。萬「いかに

逆らはず—下にそなたをの四字を入れて見よ

かりに歎きしが、「育てし恩があればとて、緣の道は格別ぞや。殊更今日は大事の年忌、弔ふ者は妾ばかり。眞に無緣の佛の日、出家の一人も供養せず、お墓の花も枯次第、持佛の香も消え次第。ざょんざ所じや御座んすまい。但今の母樣の、仕樣が好いと思ふてか。嫁入は思ひも寄らぬ事。重ねていふても下さんすな。寧そ死ねなら死にます」と、聲を上て泣ければ、新兵衞も涙にくれ、「我子の心底恥しい。今の母に目がくれて、死んだ母を忘れたと、思ふ恨みが恨めしや。今日は往なさん追出さんと、幾度筆は執たれども、堪忍せしも子の可愛さ。七歲から馴染たる渠めさへ彼の辛さ、跡に呼ぶは猶以て、馴染は薄く氣兼して、互に隔もある時は、苦勞に苦勞を重ぬべし。世話の譬にいふ如く、眞の母の折檻より、隣の人の扱ひが、痛いといふは誠ぞや。如何なる賢女貞女でも、乳房の母には似もつかぬ。斯ういふ我も其通り、若い時分は色もある、頭に雪を頂いて、寢覺强なる夜な〳〵は、稚馴染の子の親を、忘るゝ事はなきぞとよ。此度の緣付も一旦心に隨ふて、三日なりとも居て戻れ。其上では如何樣とも、望みの通り違へはせじ。さら〳〵彼めが贔屓でなし、兎角心に逆らはず、可愛がらせう爲ばかり。今日の佛が不便やな。預て往んだ此娘、何とて粗末に思はん」と、縋付て泣きければ、萬「それなら是非に及びませ

鰑—擂るにかく
わざくれ—マヽヨ燒くそ
千秋樂云々—謠曲高砂にある句
肝精—盡力
雪駄—寫よにかく

いやざつと薄味噌を、鰑灸れ」とやかましく、連立ち奥にぞ入にける。おまんは胸もせきかへり、サア頼みを取ては最う遁れぬ。わざくれ燒けじや。破て出て、忍男の構がある と、とんといふて捨ふか。寧そ内を走らふか。いや〳〵源五兵衞樣も日蔭の身、其上に苦を持せては愛しい人の身の大事。談合もするものを、今日は如何して見えぬぞ。父樣を呼立て變替して貰はふか。内の者は身にならず、心の合た友はなし。何とせうやら彼とせうやら、遣瀨涙に氣も欝り、座敷の内をうろ〳〵と、起たり居たり泣くばかり。時刻移れば奥の間に、「千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風、さつさお暇〳〵」と、好い機嫌にて媒人は、足もひよろ〳〵立出る。新兵衞も送つて出、媒「兎角目出たいお目出たい。おまん樣追付好い殿持せます。お内儀樣と申します。兎角目出たいお目出たい」と、管を卷てぞ歸りける。母は酒氣に猶氣強く、「何んとおまん見やつたか。安ふ積つて百兩足。何程四の五のいやつても、我身の細工で、彼れ程の男は些と持憎かろ。皆媒人の肝精。親父殿の名代に、媒人へ禮に往て、氏神へも參つて來ふ。何れぞ暇な女子共、供を雪駄よ綿帽子よ」と、引繕ふてぞ出にける。おまんは母の町内を出離るゝまで見送て、門口より走入り、「父樣これは如何ぞいの」と、膝の上にかつぱと伏し、絕入るば

鹽目―折目

附紙臺―貢金一枚などと書きたる包紙を臺に糊にて張付けたるもの（貞丈雜記）折紙―目錄書

龜―下女の名にかむをかく

吹き―拭きにかく

淨盤臺―走りにかく

醬油―爲ようにかく

のものなれど、緣の道ばかりは押付所爲には成らぬ事。賴み取たか取らしやんせ。妾や嫁入はしませぬ。せめて十ヲに一ツは父樣にも問はしやんせ。母に對ふて口過すも、皆此方樣が言さしやんす。あんまり氣強ふ御座んす」と、袂を顏に押當て、恨み歎きの其中にも、今日命日の亡母を、慕ふ淚ぞ優りける。母「ヲ、泣く程嫁入がしともなくば爲せまい。一期男持ずに居やるか。何れ顏見やう。ヲ、嫌さうな顏じや。俺身の好やる男はおれが嫌、親の許すは和女が嫌ひ、押付所爲はしますまい。追付け賴みが來る筈。なげかやいて見せうぞ」と、喚き散す折、下袴に媒人が、袷羽織も鹽目好き、大鯛、昆布、柳樽、五色の縮緬、紅眞綿、附紙臺、折紙臺、三荷に擔はせ、「先づ萬事首尾なつて、私まで大慶」と舁込めば、女房今まで夜叉の忽に、愛敬柔和の高笑ひ、「まア〳〵是は〳〵夥しい。何故に留ては下されぬ。去ながら貴方も代が一度の事。皆お媒人のお世話ゆゑ。これ姉、お禮申しやいの。彼の子も今朝から悅んで、待受て居ましたが、恥しいと見えました。良人の新兵衞奥に待受居られます。先づ彼へお通り。供の衆は端の間へ。男共は何處へ往た。事介はうせぬか。これおまん、目を拭ふて鼻でも龜や玉よ、此進上物持て來い。それ茶の下を、吹はちやつと酒屋へ、淨盤臺に水がなさそふな。吸物に何を醬油か。

世話かく―世話やく

ぎろつく―きらつく、目の前にゐる

いつも事―例の事、母の慈張は珍らしくなしと也

精進すなゝら―精進すなといふ事ならば

の頼みの使ひ來る筈で、此中夫婦が用意して、餅よ杵よと世話かくが、和女の日には見えぬか。産落した母御前も七歳の年まで養育、それから以來十何年といふものは、誰が世話で其樣に背丈伸たと思やる。十月の宿こそ貸はせね、恩較べをして見たい。本の母御前から剩を取る。地獄にやら何處にやら、見えぬ孝行せうよりも、これ鼻の先にぎろつく此母に孝行なら、寺も精進も取措て、今日は莞爾笑ふて、生臭物で祝ふてたも。其代りに來年は祖父樣の三十三年忌。それと一度に荷ふて、和女の母御は十四年忌、一年でも多ければ弔はるゝ佛も德。此方も雜作は少い」と、差手引手に算用なり。何時も事なり親ながら、おまんも餘り堪へかね、「最う好い加減に默らんせ。他人でさへ、恩ある方親い中は精進して、寺道場へも參るのが、先づ道さうに御座んする。腹を借た母樣の、十三年忌の墓參りが、それ程科になりますか。第一は此方樣の外聞冥加もあるものと、寺へ上るお布施も、皆此方樣の芳志に書付をしました。噓なら風呂敷見さしやんせ。死んだ人への回向は此方樣への孝行、此方樣への孝行は佛への奉公。母といふ字は同じ事、妾や別隔はせぬものを。又してはく〱、左してもない事苦口言ふて、我も嗔恚を燃したり、人にも惡氣附さんす。精進すなら爲ますまい。寺が嫌なら參るまい。子は親次第

苧売—苧を取りたる後の屑
念佛講云々—念佛宗の講中に當れば豆を煎るが例、庚申祭に信者は夜を明す例也（嬉遊笑覽）
二月堂の午王—次の如きお護札

南無頂上佛面除疾病
二月堂
南無最上佛面願滿足

ぼつとり者—愛嬌ある美人
御座りませ—御出でなされ

使はるゝ。正月の飾が釣瓶繩になるやら、七月の苧売が壁下地になるやら、念佛講に當れば、熬豆次でに灸して、來月の庚申も取越たいとの呟き。それに奇特な如來樣が欲いとて、佛師を呼ふでの好み事。右の御手に錫杖、左の御手に縛の繩、腰から下に緋の袴、御頭には烏帽子着せ、蓮華の代りに米俵、御面さうを眞赤いに、御口をくわつと大髭。阿彌陀如來一體で、不動、地藏、聖德太子、惠美須、大黑、閻魔大王しまふて、胴の中を空洞に鑿て、二月堂の午王と、お伊勢樣の御祓入る樣にとの誂へ。佛にさへ油斷させず責使ふ和郎じやもの、衆生を責るは道理じや」と、口々誹りて歸りける。琉球と家名を聞けば唐めきて、君は和國のぼつとりもの。おまんは千々の物思ひ。七歲で離れた母樣は、十三年忌が二度はなし、お墓へ鳥渡と加賀笠に、小風呂敷には手向草。露も涙も押包み、「なふ竹、太儀ながら是持て、お寺まで供してたも。參つて來たい」と言ひければ、竹「お袋樣に問はしやんしたか。妾や喚かれたら何んとせう。今にお前の氣に入りの事介がおじやりましよ。事介連て御座りませ」萬「いや事介は少とお寺に障す事ある。母樣の今藏に御座る間に、早ふ出たい」といふ處へ、母「アヽこれ〳〵母は今藏から出た。動く事はなるまい」と、笠風呂敷も取て投げ、「參らして好けりや參らする。今日は和女の嫁入

茶の子―茶うけに食ふ團子
物さへ―物は金をいふ
一色―一品
帷子時―上にあふれば帷子下に垂るれば前垂
砂糖桶―小さき故柄杓の代りにする
仕入れ―教育して

の十三年忌。茶の子一つ配る事か。おまん様が最愛い言ふても一人の娘御、彼の名の立た源五兵衛とやら尋出し、物さへ入れれば成る事。方々首尾を繕ひ、聟に取て世を渡いたが先順といふもの。定て頼みの來る方も、大分取れる見込で奉公分といふであらふ。其跡へ銀持て來る男の子を養ふて、又銀の付く嫁を取り、結局に主の連合も追出し、銀持て來る亭主を入れ、惡ふしたらば內との者も置替え、銀持て來る奉公人、敷銀する手間取を尋ねられふも知れまい。傳兵衛のお方如何思やる」と、哄と笑へば、傳「ヲヽそれ〳〵、お蝶の父の言やる通り、一を打て萬を知れ。琉球屋の新兵衛樣といつては、お國は愚か、筑紫九箇國隱れない分限者に、餅搗く臼杵持ずに、晒臼を兼る程な吝嗇。彼の心で餅搗やるは不思議でないか、事介「いや臼ばかりに限らぬ。萬の物を一色で、二色三色に兼はらるゝ。先づ主の身から新兵衛樣を押除け、父母の二役。帷子時も前垂で上下共に仕舞るゝ。入相時分に膳立して、夕飯夜食を引張、火搔が直に塵取。砂糖桶に柄を付て柄杓を終に買れず、小狗仕入て鼠捕らせ、盜人の用心と一疋で埒明け、冬は時々蒲團代り。欠伸も卒にせまいとて、口開き次でに念佛。精進日には和物一ッ。其和物の擂木の、頭の圓いを長老の代僧で仕舞るゝ。慈悲ある者の眞似はせず、吝嗇者を手本に、杓子を定規に

中之卷

川下に布搗く晨來て見れば、寒ずる夜半の、霜と見るもの〳〵。椿々、谷川の椿編笠形に開いたら好かろ。猶好かろ。さつさ薩摩の芭蕉布、晒すも織も上方で、學びも奈良や玉川や、宇治より育ちなりけらし。無慙やな源五兵衞、京も東も足留らず、戀に心の不敵なく、又故鄕に立歸り、見付られたらそれまでと、おまんに命捨杵の、浮名晒しの其日過ぎ、奉公人やら手間取やら、出入仕事の事介と名を替え、見つ見らるゝを取得にて、語る夜なきぞせう事なき。晒搗の女子男ども、「ヤア事介今か。銀が出來たやら寬りとやりやる。羨い」といふ處へ、内より下女が走出て、「なふ是れ〳〵。今日は内方のおまん樣へ、御祝言の賴みが來る。それで餅を搗つしやる。臼も杵も要る程に、先ア仕舞ふて歸らしやれ。今日の働き、半日拂ひにせうけれど、惣半手間取ふより、賴みの祝ひに皆進上にさつしやれと、お內儀樣の言渡し」と、言捨入れば、皆々呆れて、「何と事介聞たか。其方が出入の旦那じやが、あんまりな慾面。おまん樣の賴みが來るなら、祝儀は上から給る筈、其日過の半手間を貪つて何程じや。それに今日はおまん樣、本の母御

編笠形—當時の若者常に被るものなれば戀の意を含めて云ふ

不敵なく—なくは甚の意、甚だ不敵にて

手間取—一時賃を得て雇はるゝ者

賴み—結納

二歩の取替―前に取替へて渡しておきたる金

其方も人の大事―源五も己の親の敵を知らせて呉れたる恩は忘れぬと也

私の―私の物

饂飩―小萬にかけて云ふ

與茂太夫頑い者、「何も奥のお道具に見えぬ物は御座らぬか。能ふ吟味なされたか」三「イヤ何もお道具揃ふて胡散な事は御座らぬ」と、言へども猶顔顰め、與「をのれは好ぬ奴じや。第一鼻が高ふて合點の往ぬ頬。屹度詮議の仕様はあれど、傍へ障れば喧しい。これ四十平、直に大坂へ連下り、薩摩宿へ渡して、舟に乗るまで見届け歸れ。渡した二歩の取替、返して失ふ。早ふ〱」と睨付る。源「ハテかしましい返します。おれが鼻が高けりや、此方が睨る筈か。一歩は其方の一歩、鼻は俺が鼻。それ返す」と投出す。三五兵衛も我身さへ、世を忍ぶ身は詮方なく、「これ其處な者、其方も人の大事、詞の役にも立たであらう。先の人が侍ならば、其恩は忘れまい」と、心を含む言こなし。お蘭は奥より走出、「これ待ちや〱。此鼻紙入鼻紙、中にお錢もあるさうな。お庭に落てあつたが其方のであらう。持て往きや」と、仇の契も仇にせず、心の底に結び置く、露の情ぞ哀れなる。源五兵衛もほろりとなり、「是は如何にも私の。お芳志は薩摩でも、一生忘れは致すまい」と、お寢間の方をじろりと見て、「ほんに切麥でさへ此お情、此な事なら箸次でに、饂飩も一膳食ましよもの、お殘り多や」と 二重 出にけり。

三五兵衞は云々―聽と反對に云へり

うせた―來よつた

ありつべしう―尤もらしう

道理なれ。夜もしらく〳〵と白む頃、家のおとな磯部與茂太夫、寄親の四十平、中間四五人引連れ、路次口敲いて、「これ〳〵林殿、お部屋の方に男の聲が聽える。錠明さつしやれ。穿鑿いたす林殿、林殿」とぞ動搖めきける。三「そりや爺父めが來をつた」と、周章騒いで三五兵衞は奴振る、源五兵衞は女子の眞似、「先小まん樣隱しませ」と、蚊帳へ入るやら駈出るやら、更に差別はなかりけり。中にも源五物巧者、「騒ぐまい〳〵、渡り奉公した御庇、我等次第に遊ばせ。私お家に居ぬばかり何の氣遣ない事」と、いふ内にも戸を敲き、下々喚けば詮方なく、土戸の錠を明るとひとしく、與茂太夫突と入り、「さてこそ新參め、縛れ縊れ」と取廻す。源五兵衞少しも怯まず、「いや縛らるゝ科は持ませぬ。夜前始て拍子木役。奥とも口とも存ぜず、戸の明てあるからはと、而も念入れ廻る處、女子衆が見付て、此處へうせれば曲者。夜明迄留置ておとな殿へ渡すとて、錠を下して動かせず。蚊に喰れて居ましたが、それでも縛らばお縛りなされ」と、左もありつべしう言ければ、三五兵衞合點して、「いかにも彼がいふ通り、わしが麁相で錠を忘れた其間に、お庭に來て居ました。勝手知らぬといひながら、後で知れては奥の者の過り。夜明て此方へ渡さうと、錠下して留ました。何の別儀も無い事」と、何れも武士の一疋共、最もらしうぞ言成しける。

けりやう—假令の字音

是式—是位

勝軍地藏—相手に勝つを祈る佛

五兵衛樣、泣かずに言ふと思へども、如何も涙がとめられぬ。出來た仕樣じや御座んすまい。私し明暮れ戀慕ひ、泣悲むを見て居ながら、能ふも默止て見て居られしたなふ。去年の春の大煩ひも、此方樣ゆゑといふ事は、看病なされたお前が證據。男は松、女子は藤と元から譬があるげな。松の力で藤も這ふ。男頼みに女も立つ。十二の年から十九まで、人の盛を捨置て、けりやう道を守ればこそ、若し氣が反れて淫らしたら、此方樣斬て捨さんすか。さりとては情ない人。女房可愛がつたとて、負になるか恥辱になるか、武士が廢るか。八年の月日は取返しはなるまい」と、思ひの限り息限り、縋付て泣ければ、二人の男も理に迫り、泣より外の事ぞなき。三五兵衛涙を押へ、「理とも非とも、是ばかりは一言も返答なし。それはよし夫婦の中。源五殿への申譯、腹切ふと申すとも、よも切せはなされまい。すれば要らぬ化粧業、何とも違却千萬」と、いへば源五、「これ〳〵、お詞の中なれども、親の敵狙ふ身は、盜みをしても許しある。何の是式、お心に懸られな。さて彼の石子久彌といふ者は、只今名波道愚と申す雲水の身となり、或時は勢州に仕居、又は濃州、信州、折々は京東山、勝軍地藏の隱遁者に因み、詩文など作る由、草履仲間の咄なり」といひければ、三「有難き御物語り、御恩の上のお情」と、悦び合ふこそ

はまつた—歎かれた

物が出來—瘡物が出來たるなり

切麥—素麪

衛様であらふとは、尤も氣のつく筈もなく、妾やはまつたは是非もなや。餘の侍女は半季でも、季を重ぬれば打解て、冬は同じ夜の物、夏は同じ蚊帳の內、女子と女子の主從は、肌を合せて寢る程に、洒落戯業も言慰む。それに五年の馴染といひ、お果なされた母様の、鐵漿親にならせられ、おれとは姉妹同然に、一寸側を放さぬに、如何なる事か夜に入れば、唯寢姿を隱したがり、終に側に寢た事なく、小風呂に入れば風邪引いたの、物が出來るの何のとて、伽に小風呂へ入る事なく、胸へ障るも嫌がつて、兎角乳を隱したがる。萬づ起居に心を付け、見れば見るほど男じやが、さては此小まんに執心かける奴さうな。悋氣するか試しの爲と、態と今夜彼の人を、閨房へ呼ふだは是れゆゑ。されども佛に誓を立た道筋は歪むまいと、暗がりに附聲して寢させたは外の者。源五兵衛殿を騙した此詑言は幾重にも、身の明かな證據を」と蚊帳を打上げ、手を取て引出す。お蘭といふお櫛上げ、髮も解けて所體なく、顏を赤めて、蘭「源五兵衛様許して下さんせ。ア丶恥かし」と袖掩ふ。三五兵衛は詞なく手持無沙汰に赤面する。源五兵衛も胸衝しが、「些とも苦しからぬ事。小まん様も女子、此方も女子、人間の身に替りなし。譬へば饂飩と切麥、汁は同じ醬油。何方でもお振舞は同然なり」とぞ和ぐる。小まん取付わつと泣き、「これ三

無念を歇―立派な男にしてやらん

童しい―子供らし

正銘―本性

ぐめん―工夫

くれん。エヽうぬ等風情と太刀打は、武運に盡た口惜い」と、齒嚙をなして歎きしは、道理せまつて哀れなり。源五兵衛莞爾笑ひながら、「ヤレ假令王の子息でも、今草履取するからは、下郎と言れて構はぬ事。併し下郎を相手にするが無念ならば、其無念を歇めて遣ろ。コリヤ音にも聞たか。薩摩の鹿兒島菱川源吾兵衛、雀の餌程な米を取り、馬の脊骨も跨たもの。其方も昔は誰にもせい、當分女子で居るからは、お侍女の林殿。女の相手にならぬといひたい者じやが、それも口眞似童しい。但女敵といふ惡名。髮斷た後家女に女敵とは不理屈ながら、是も調べて益ない事。女敵ならば女敵、如何にとしてもお手前が、親の敵に身を碎く、此處が如何も仕掛れぬ。脇差に手もかけまい。女敵討て門出祝ひ、親の敵を討めされ。それとても是非抜けならば抜ふが、身が國の慣ひで、抜くと鞘を敲破り、再び指さず死ぬるが、是が薩摩の正銘。時には二人討死して、親の敵久彌只た一人の仕合。何の役にも立たぬ事。これ御侍女、女子衆、女敵の首斬しやんせ。サア首斬て取らんせ」と、人を人とも思はぬ顏、有繫に薩摩者なりけり。三「いやさく武士の喧嘩にぐめんは入らぬ。鞘割ば割れ、碎かば碎け。サア抜け」と詰寄る。小まん隔り押留て、小「さては三五兵衛様かいな。此方を男といふことは、三年前から見たれども、三五兵

弓矢八幡—神に誓ひの詞、決して

女敵—間男

三五左衛門は武州の遊所にて、石子久彌といふ者に討れしを、幼少なれば夢にも知らず。四歳で母に後れ、一門の介抱にて十四の年跡目を繼ぎ、お手前と緣を組み、迎へ取るべき用意最中、毎日門に貼紙して、狂歌俳諧種々の樂書を立て、家中指して嘲哢する。如何なる故と聞合すれば、親の敵があるといふ。弓矢八幡知らぬ事は力なし。敵石子を討取り、此恥を清めずば本國へ歸るまいと、譜代の下人に心を合せ、頼みし寺と内談しめ、三五兵衛病死と披露し、鯨魚といふ魚をもつて火葬を欺き、十六歳で國を出、髮を延し女となり、十九歳の九月より今茲二十三歳まで、五年の春秋附添ひ見るに、顔も知らぬ夫の爲、下尼の身となり、まだ〳〵側に居るとも知らず、朝夕我に香花採り、精進回向歎きの樣子、嬉しいやら不便なやら、部屋に入りては泣暮し、名乘て聞せて、嬉しがる顔見たいとは思ふたが、いや〳〵本望達するまでと、胸に包んで數々は、船車にも餘るべし。日頃にも似ず今夜しも、彼の下郎を閨屋へ入れ、見苦しき態は何事ぞ。あれ體の下司奴を、三五兵衛が女敵といふも口惜い。況んや大事の敵を討までは、無念も恥も怺えふと、心誓文立たれども、凡心の慣ひ、目の前の怒り止み難く、斯う破つて出るからは、討とも無ふても討ねばならぬ。一本指せばうぬめも男。サア拔け。對手にして

ひよんな—變な

ほてくろし—熱くろし

淫奔者云々—夫なき故不義にあらず、只淫奔といはるゝ迄也

も同然、和女も往て早ふ寢や、明日逢ふぞ」といひければ、しゆん「さればいの、今日ひよんな草紙を見て、氣が騒いで寢られぬ。何時もの樣に夫婦事して寢ませう、今宵は此方さんお内儀にならしやんすか。但、男にならしやんすか」林「アヽ何方になつても思ひの種、男とも女子とも見立次第」といふて居る、下心こそわりなけれ、しゆん「いや／＼如何でも女子が好い、實可愛らしい女房じや。ならば男と生れて、貴樣と一夜寢て見たい、何うもならぬ」と懐に、手を差入て抱付ば、林「アヽほてくろし放さんせ。女子同士寢やうより、一人寢て本の事、夢に見たのに德がある」と、洒落に紛らし逃入れば、しゆん「妾も夢の相伴」と、追へてこそは這入にけれ、此人音に源五兵衞、「露顯ては身の落度、お暇申す」と駈出る、小まん押留め、「覺悟あつてするからは、其方に難儀かけはせぬ。ハテ高が後家の身。淫奔者といはるゝまで。思案がある待てたも」といへども、源「否／＼、お屋敷は如何もあれ、生國薩摩は人改め強く、我等は今にお尋ねもの。此事國へ聞えては、召返されて罪科に遇ひ、一門の恥おまんが歎き。塀を乗越え夜の中に、大津までも」といふ處へ、林は嗜む長刀裾端折て捲上げ、「奴殿動くまい」と、緣端に跳出たるは、狂氣とならでは見えざりけり。林「こゝよ些と合點が參るまい。これ小まん、我こそ肥州熊本笹野三五兵衞。我十一歳の時、親

去やなら〳〵ーシナ〳〵と
つやつくろひー艶白粉
不覺ー不覺悟、輕卒
氣疎げー粗相つかしい
嗜めー愼め

迄が皆倥偬の沙汰、一家一門武門の名折れ、堪忍の場、思案の場、默止れ〳〵人や見る」と、舊の女でしやなら〳〵と立歸る。お寢間は彌々聲高く、今ぞ別れの私語言、ヱ、妬ましく口惜きに、下部の持たる拍子木あり。「ム、ウ忍び男は下郎よな。假へ望み遂たりとも、三五兵衛が女房を下郎に偸まれ、目前の女敵見遁しにならふか。日頃塗たる艶白粉の、つやつくろひも入らばこそ」と、裾捻上て足頸も、人に見せずと包みたる、紅衣地袋の色も出る。腓太股最と黑く、女の爲なる緋縮緬、足纏ひぞと高褰げ、男の下紐顯はなる。常に嗜む紅皿も、今宵血潮の膝の皿、鐵漿壺の鐵も、心を鋼銹おとし、引寄せ引寄せ一刀、挿櫛笄、こん小枕、小微塵になれと髪掻撫、左足を蹈で駈出しが、南無三寶、刀は部屋の長持に、取に歸るは手延なり。無刀でかゝるは不覺なり。夜中はんじの時計の聲、心せかするばかりなり。「ハア、彼の廊下を來る人は朋輩のおしゆんじや。此奴は饒舌の轉婆め。見付られては大事ぞ」と、褰げ下して前搔合せ、所體つくれば目の前に、元の林と奈良團扇、空睡りこそゆたかなれ。おしゆんは何の氣も注ず、「林殿、此處に何してぞ」といへば、態と喫驚して、「ア、何んぞいの氣疎げな。お寢間が近ひ嗜めや。明日は月の十五日、鐵漿つけて寢やうか。寢て待つ男もあらばこそ。氣散じな獨寢、此處で寢る

惡性―不義を働く

の様な咄を聞く度に罪つくられ、當座にしやんと嫁入て退れば好いものを、阿呆な斟酌仕過いて、湯の辭儀は水になる。吸ても見せず心から、煮こじけの若後家。一字違ふて名も能ふ似た、三五兵衞樣と思ふて、其方をおまんに借たいが、なんと一夜は貸す氣か。おまんに請やつた五十相傳、此小まんに授てたも。手を合せて拜みます。サア南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、これなふ南無阿彌陀じや」と身を揉し、笑止悼はし恥しゝ。源五も困り狼狽て、「おまんが五十相傳は丸裸で受ました。夜は蚊が喰ふ明日」と、逃んとすれば引留め、小「氣が注なんだ蚊が喰ふ。蚊帳へおじや」と抱入るゝ。いやじや／＼もお主の威光。蚊帳打上る煽風、有明消て、「これ／＼、これが安養極樂世界」何國も戀の闇ぞかし。お氣に入の林は宵より茶の間に寢たりしが、土戸に錠を忘れしと、手燭挑げてお寢間の次、御用もやと立窺へば、有明消えし襖の彼方、しめやかな男の聲、合點いかぬ、蚊の鳴く聲か、いや／＼人に紛れないと、縁先見れば男の草履。林「サア惡性に極た。男は何者。襖破り飛入て、一二つ胴に斬重ねん」と跳出しが、「アヽ左樣でない／＼。笹野三五兵衞とゝ言るる身が、世間は病死と披露して、葬禮まで取行ひ、あらぬ女の眞似をして、五年七年辛氣を碎くも大事を思ひ立たる故。念願遂げず、本名顯はし、小事に大事を忘れては、今

諸譯―色の道

十方世界―佛語、單に諸國の意にいふ

後紐―子供の時

若い女子云々―おまんの後家を憫む

と相撲を望むと覺えた。投てくれふと存じて、或時墓へ參つた處、私は裸體になり、長老樣の緞子の袈裟腰にきつと締付、さア御座れと抱付た。彼方も拔らず四ッ手にくみ、汗水流して組合ふとて、何やら囁き呟いて、互に因果を晒屋の、臼から杵とは此事。まんまと法然上人が、彼方の十念授り、諸譯の五十相傳受け、四十八夜の常念佛、互に忍び忍ばれて、物三年は夜晝なし、千日の囘向まで一日懈怠も仕らず。是が知れいであるものか。沙彌が聞けば長老が聞く。兒が知れば親が知り、髮を剃さぬ其内に、縛首打るゝ沙汰。如何も國に堪られず、おまんと後の契約して、十九の年に薩摩を出で、十方世界を駈廻り、お尋ねなれば身の上の、願以此功德氣の毒な、お咄しなり」とぞ語りける。

小「さても〳〵可笑い樣で悲い咄。其人はおまん、をれは小まん。身に擬へて涙が飜るゝ。國泣びの事なれば、若は聞やつた事もあろ。おれは肥後の熊本、笹野三五兵衛樣といふ人と、後紐から緣組あり。無事で御座れば疾に肥後へ嫁入する。八年前に彼のお人、病死なされた便宜あり。一門衆も親達も、盃はせず顏は見ず、方々貰手ある內に、はや片附ふとあつたれども、頑是なしに道を立て、十二で小癪な髮を斷り、今で後家は立れども、若い女子の可愛と思や。妻戀ふ犬猫鳥翼、蟲にも劣て男の肌知らずに死ぬる。今

むざ—うつかり

濡れ—男女の情事

參るにこそ—參らぬ

戸の開くまゝに突と入り、庭の隅々拍子木打ち、爪立て蚊帳の中、好もしさうに見る間に、密と廻つて戸を引立て、錠さす音に膽潰し、津「申し〳〵未だ私が出まする。錠開て下されませ」小「いや〳〵此處に鎰はない。むざと男の來ぬ處へ來たが不祥。明日まで待や」津「ヤア、それでは私首がない。是れ四十平殿お助け」と、拍子木鳴すを、小「エイ囂い〳〵。拍子木置て貰はふ」と、取て擲つて、手を把て、「コレ些とも大事ない苦にするな。おれは此處の姉娘小萬といふ者。其方は濡れゆゑ薩摩を出て、賤しい奉公するといふ。大名衆の標揃へ聞たふも何ともない。薩摩の戀の一通り、根から葉から聞ねば氣にかゝつて夜が寢られず。ひよんな咄しを聞さいて、睡たふて眼がうづく。嘘なしに咄きうか。言ねばこれじや」と抓らるゝ。津「あいた〳〵、申ませう。私は鹿兒島で菱川源五兵衞と申て、親兄共は小知を取り、我等末子の是非もなく、來迎院と申す知行寺へ後住の約束、十三の秋から豆腐、蒟蒻、念佛の外、魚類女類は口にもかけず、善導か法念の化身であらふと申した。又寺の旦那に濱の町といふ處、芭蕉布屋のおまんと申すは筑紫一番、和泉式部か小式部の化身と褒た小娘。彼奴が我等を見たびに、齋に參れば抱付き、墓へ參れば抱付き、滅多無性に抱付ども、此方合點參るにこそ。和泉式部の化身めが、此法然の化身

おとな―一番家老

切米―扶持米を錢に替へて與ふ

實盛―負盛を蝗と云ふ故（柳亭記）

とほん―茫然と

の城主。白猪の丸筒裾膨、同じく筆鞘、駕籠は淺黃に山道こそ、代々肥後の御國主。劍形は日向大名。十文字は對馬の縣。黑熊の片鎌は高麗迄も隱れなき、大隅薩摩の御大將。其外諸國の御大名。數も限もあら慮外、申すも長柄の御鑓標、概略斯く」と述ければ、簾の內外ざは〳〵、「能ふ〳〵云たり申たり。扨も〳〵」と漸暫し、手を拍てぞ褒らるゝ。林「やれ幸ひの奉公人、此者に極よ」と、四十平を召出され、「おとな殿へ申て取かえ渡し、吉日なれば今日中に請判極め、今宵からお屋敷に泊らせよ。薩摩者とあるからは、さの字を除て津摩藏とお付なさるゝ。彼へ立て休みませい」津「ない〳〵」と立ければ、四十平小隅に招き「して切米は何程欲い」津「半季に二兩二分下され」四十平興覺し、「それでは一年五兩か」津「いかにも〳〵近年五兩取まする」四「すれば其方は實盛じや。道理で女中の氣に入た」と、連て入日も三重短夜や、秋の初夜過ぎ早夜中、「蒸くり熱ふ寢憎や」と、小萬の君の夜半起き、庭にとほんと風受て、「アヽ生熱や、此方が樣に肥たものは猶熱い。男持て痩たいぞ」と獨言して、「これは〳〵、土戶の錠が下ずにある。林が麁相で忘れたか。誰ぞ來いやい」と召す處へ、屋敷廻りの拍子木の音。月に近寄る影見れば、新參の津摩藏、小「ヤア是は好い慰み」と、ツィ立寄るも女松の蔭、男氣入らぬお部屋なり。新參は勝手知らず、

倉の御城主。栗色の敲鞘、筆形の中締は、江州彦根の御大將。黑熊の如意寶珠、駕籠は輪拔に角の棒、美濃の加納の主なり。青貝柄に切立鞘、信濃の松代。白柄に白鞘兜巾頭、駕籠は束木丹後の宮津。裾膨の對のお道具出雲の松江。駕籠の紋は丸に蔦の葉のきませ、退け〱と退け〱、鳥取鳥毛大鳥毛、因幡伯耆のお國取。播磨の同國印も似たり、姫路は赤し明石は黑し。何れも素鑓の中締にて、分銅形の一對は備前の岡山。鉤鑓に白獅子の摘毛の棒は備中松山。駕籠の紋は丸に虎の尾、ぴんと跳ねたる備後の福山。獨樂形の白鳥毛、駕籠は紺に斷りの染拔き、袋鞘は安藝の廣島。扨又四國の御大名熊の皮の投鞘は讃州高松。同く伊豫の松山は、黑熊の唐盃に、お道具持が醉ふたとさ、醉ふたとさ。とさ〱土佐の高知は中膨。お駕籠は紺に香の圖なり。阿波、淡路の兩國主、撞木鞘と丸十文字。六尺は繋ぎ菱。繋げや〱永樂錢の駕籠印。黑鳥の末廣は、周防長門の萩の殿。さて九州に到つては、御紋も石餅、圓丸鳥毛は、筑前福岡の御城主。蠟燭鞘と鎌鑓は筑後の久留米。天目鳥毛は同國柳川。白熊のすみ袋、杉形の中締は、豐前の小倉。中津の主。白分銅は豐後の杵築。萌黃羅紗の袋鞘、白滑皮の裾膨、銀杏の丸の駕籠の紋、肥前佐賀の御居城。大袋は同國唐津。ずん切鞘に銀の笠、手杵は島原平戸

「武家繁昌の御威勢、我らが口に掛巻も、勿體波風治りし、お江戸は貴賤群集の中、御どうほうを連らるゝは、外に數なき類なき、お家の是がしるしなり。重ね盛羽の大鳥毛、對のお道具突立て、お駕籠の者は裏菊の、裾に藩籬染たるは、名にし奥州五十四郡の旗頭、旗は白旗黑羅紗の、杉形鞘に羽織着て、お駕籠舁のは是ばかり。同國若松の主ぞと、誰白河の大身の鎗。駕籠の紋は松皮菱、鱗形の腰替り、白頭の振禿、二本松の城主とかや。素鎗の鉤の枝垂糸、さつと枝垂て、枝垂鳥毛の大小は、是れ南部殿、津輕殿。奥大名の長道中、奴が首も投鞘に、紺に手杵をつく、つく〳〵岩槻の御城主と、名乘て出羽の米澤は、摘鳥毛の唐人笠。六尺は重千斤。白鳥の笠鉾鞘、煤竹羅紗の袋鞘、大广木打たる印こそ、庄内の主ぞと、白熊の天目鞘、これが秋田の佐竹殿。劍鋩の中締に、六尺模樣はぐる〳〵。御紋も車は越後の村上。黑羅紗の粒子鞘、同く桔梗十文字、紺に無紋の六尺は、加賀に梅鉢百二十萬石に、續くものなし似たるものなし。御紋ばかりは越中も、似たりや似たり杜若花。花菖蒲、菖蒲皮の角十文字、白頭の大禿、これ越前家六角の、筒鞘の二本道具は若狹の小濱。劍鋩粒子の鉤鎗素鎗は、伊賀伊勢の津の御城主。花色羅紗の巾着鞘、輪違の六尺は相州小田原。兜巾頭と大身の鎗は、下總の國佐

ごき―椀
末白雪―謡曲鉢木にある句
供先―殿の先に立つ供

布子一つでお供先、ふろか信濃のく、ハッア冷たいな。實に雪國で身を寒晒し唐辛。天目にごきしゆせん酒、一兩二歩の取替を、春めきながら借越して、末白雪の買がかり。首だけ積る借錢の、深田に馬を欠落いたし、木曾を走つて參りし」と、いへば各々打笑ひ、「左樣な者を抱えては、此方の算用粟津の原」と、哄と興をば催しける。林「お庭の隅に目をもつて、碁盤格子の染帶を、骨牌結びや年配も、二十二三四五六七、押せく振て出ませい。在所故鄕は何國にて、小姓廻しの一通り、お江戸の勝手覺えてか。供先き、乘打ち、下馬前に、大名方の目標も、知るや如何に」とありければ、奴「悴九州薩摩者。推參ながら古へは、大小刀もさそふ水。叶はぬ濡れに身を浸し、廣い薩摩を狹められ、近い朝鮮琉球より、遠い東都は日本の地、命菜種に油の涙、摑み奉公いたしても、戀しい奴めに先一度と、江戸に三年都に二年。公家、武家方のお小姓髮、結立は持ませず。六十餘州の大名樣、お馬標、鑓標、お駕籠をさへの紋印、諳に覺へて罷在る。御奉公は緣の者。これを取得に召置れば、常江戸、脇城、國脇まで、申せば事も長い事。先一國名に高き、城主樣方概略」と、口拍子にて連ねけり。

諸國鑓標

升かけを切米—切ると切米とかく、米登る枡かけの竹を切れば長命すと云ふ
町人參—町人
香附子—武士
川芎—疝氣
當歸—當期
半夏—半期
茯苓—腹立
麥門冬—問答
莪蒁—我意
木香—春
地黃、大根—精分を増す藥
定齋—大阪の藥種屋、如才にいく
天鵞絨—尾⿰
はい吹—金を吹分る
京者云々—金は京都が一番良き故
分銅—鉛を混じたる挺銀
生き憎い—通用せぬ
鉢鬢—はけ長くたてかけと云ふ
中剃あり（我衣）

ぬ」と答へける。林「きやうとや怖や。其樣な目出たい若衆に、升かけをきり米望み次第ぞや。次なは何うぞ〳〵」奴「拙者は悴の時分より醫者衆に相勤め、町人參や香附子方の奉公は不案内。地體我們は川芎持ち、同じ處に當歸まで、半夏〳〵と季を重ね、罷在し朋輩の、中居に烏渡甘草の、甘うまい事仕り、旦那茯苓いたされ、詮議區々麥門冬、季中に其處を追出し藥。それより心に莪蒁を張り、假しや浮世は陳皮の皮、肩に木香かたげても、地黃に大根しらがまで、斯ては果じとこんのだいなし薑一片。腰に一本藥研鐫、頰に鍋墨髭人參、煎じ詰たる奉公人、誓文白蒁和中散、身を粉藥に御奉公、定齋なし」とぞ答へける。林「實に氣の藥なものなれど、女中の前の長口上。近頃天鵞絨の半襟かけた、次の男は町の風、武士の勝手は合點か」奴「さてもお目利今極め、黑印打て私儀は、銀座に長々使はれ、駕籠乘物のはい〳〵ぶき。京者の正眞。お屋敷方は新分銅、聲に鉛は混らねど、少と生き憎いと申す故、歩を引れても奉公の、種替へます」といひければ、林「それでは此方に使はれぬ。末の季までは包みの儘、宿に居やや」と笑はるゝ。林「後な奴が國處。あもと麓の赤松を、打割り松の油烟髭。氣味好い頭のすり鉢鬢、江戸すりがらしと見えたよな」奴「御意の通に丁稚奴は、信州木曾の山家者。嚴く冷る寒國の、髭に氷柱の朝嵐。

言成とは云々―取成とは云ふもの、

振りませい―鎗を振らつしやい

頭八分―頭より少し高く（松屋筆記）

花かいらぎ―蝶鮫の皮の鞘

絲鬢―頂を多く剃下げたる狭き鬢

志からせ―よく慣るゝ

高野六十―紙の數なるを近松は六十、八十にてまだ小姓を勸むる意に用ふ

に。御若年の若旦那、氣を知た上方者を抱えてやらんと仰せられ、小まんさまと申ず姉御樣、お部屋のお庭へ召出され、簾越に御覽あり、女中寄ての御極め。女中多いといふ中にも、背のすらりと眉目の好い、二十餘りの女中が受返答を召れふ。林殿とて姉御樣の御氣に入り。第一此人の言成しとはいひつ、緣次第仕合次第」といふ處に、小庭へ廻る車戸の、懸鎰外す女の聲、「これ四十平、奉公人揃ふたら、一人づつお庭へ廻しや」と、言捨て立歸る。四「それ〳〵彼が林どの、簾の內は姉姫樣。御前が近い競合ず、下馬前をして振ませい」「ない」と應へて振出す、手先上りの頭八分、腰の捻りに足取に、すつ〳〵、すつ〳〵砂地に膝をする。花かいらぎと散る花と、ざんざめいたる掃庭の、緣の上には腰元衆、簾に挾みしおはな紙、姉御樣ぞと奥床し。中にも林は手を突て、簾の中より何事か御意なさるれば「あい〳〵」と、お返事申して尋ねける。林「これ〳〵前な糸鬢の、鬢かりつけた鎌髭奴、今迄は何處に居て、在所は京か田舍か。お小姓方の奉公は、髮月代にお好みある。手覺えあるか」と尋ぬれば。奴「私が生國陸奥の國。七ッ道具の一通り、お馬の湯洗ひ伏せ起し、武家の奉公しからせば、糠味噌汁の花散て、近年高野に相勤め、小姓廻しはいたせしが、高野六十那智八十、きんか頭の若衆にて、遂に月代剃た事、ごはりませ

鴈、燕、蛙—皆奉行人に譬ふ
跡を濁さぬ—立鳥も跡を濁さぬの諺
這出の云々—ポット出の奉公人は一日二合半を貰ふ故に云ふ
繁藏—中間の名に残るを掛く
花鳥—出替る事、出替時は三月五日（近代世事談）
少しよめ云々—顔よき女の自慢顔する事

源五兵衛 おまん 薩摩歌

上之巻

櫻咲く、彌生は鴈の出かはりに、新參の燕置つけて、跡を濁さぬ水の面、這出の蛙二合半、首にかけたる杜鵑、木々の梢も繁藏と、誰が呼子鳥草履取、一季半季の花鳥も、兎角は御縁次第なり。流行小唄も時につれ、時の昔と何處へ往ぐ。寛文年の頃かとよ。御城本は但馬國、京の屋敷は千本通、千本立の植込も、若葉の錦見掛から、長者町をば押廻し、出水通の長屋門。此大屋敷を預り、京、江戸、御國の御用等一人に承る、御留守居平鹿の何某殿にこそ、中途に奴草履取、召置るれど力々より、引を求めて目見えする。此頃五人三人宛、毎日吟味なさるれど、好い男さへ稀なれば、すこしよめなる女房の、ぴかしやかぶるは科ならず。中間頭寄親の四十平下見をして、「ム、何れも好い奉公人衆、さて御家の若旦那、殿樣よりお小性に召出され、親旦那御同道で只今は御江戸

德「我とても後れうか。息は一度に引取らん」と、剃刀取つて咽喉に突立、柄も折れよ刃も碎けと、えぐりくりくり目も眩めき、苦しむ息も曉の、知死期につれて絶果たり。誰が告ぐるとは曾根崎の森の下風音に聞え、取傳へ、貴賤群集の回向の種、未來成佛疑ひなき戀の、手本となりにけり。

初秋の—初秋にて夫より後は逢はぬにの意

流涕憧るゝ云々—泣悲む心の内は餘程な道理也

斷末魔—臨終の苦

れ、叔父といひ親方の苦勞となりて人となり、恩を送らず此儘に、亡き跡までも兎や角と、御難儀かけん勿體なや。罪を許して下されかし。冥土に在す父母には、追付御目にかゝるべし。迎へ玉へ」と泣ければ、お初も同じく手を合せ、「此方樣は羨しや、冥土の親御に逢んとある。妾が父樣母樣は、健で此世の人なれば、何時逢ふ事のあるべきぞ。便は此春聞たれども、逢たは去年の初秋の、初が心中取沙汰の、明日は在所へ聞えなば、幾許かは歎きをかけん。親達へも兄弟へも、是から此世の暇乞。せめて心が通じなば、夢にも見えてくれよかし。懷しの母さまや。名殘惜の父樣や」と、しやくり上げ〱、聲も惜まず泣ければ、夫もわつと叫び入り、流涕憧るゝ心意氣、ことわりせめて哀れなれ。初「何時まで言ふて詮もなし。はやく〱殺して〱」と、最後を急げば「心得たり」と、脇差するりと拔放し、德「サア只今ぞ。南無阿彌陀々々々々」と、いへども有繫此年月、愛し可愛と締て寢し、肌に刄があてられふかと、眼も暗み手も顫ひ、弱る心を引直し、取直しても猶顫ひ、突くとはすれど切先は、彼方へ外れ此方へ反れ、二三度閃く劒の刄、「あつ」とばかりに喉笛に、ぐつと通るか、南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛とくり通し、繰通す腕先も、弱るを見れば兩手を伸べ、斷末魔の四苦八苦、哀れといふも餘りあり。

魂の所在—魂の所在を一つに定めん
一樹の相生—根一つにて二本出てゐる
徳兵衛—解くにかく
浮名は云々—心中の名は殘さん
かゝれとて云々—心中せん爲に締めて來たる抱帶にあらず

魂よ」初「なに喃ふ二人の魂とや。はや我々は死したる身か」德「ヲヽ、常ならば、結びとめん繋ぎとめんと歎かまし。今は最期を急ぐ身の、魂の所在を一所に栖まん。道を迷ふな違ふな」と、抱き寄せ肌を寄せ、かつぱと伏て泣居たる、二人の心不便なる。涙の糸の結び松、椶櫚の一樹の相生を、連理の契に擬へ、露の憂身の置處、「サア此處に極めん」と、上着の帶を徳兵衛も、初も涙の染小袖、脫で懸たる椶櫚の葉の、其玉箒今ぞ實に、浮世の塵を掃ふらん。初は袖より剃刀出し、「若も道にて追手のかゝり、割れ〳〵になるとても、浮名は棄じと心懸け、剃刀用意いたせしが、望みの通り一所で死ぬる此嬉しさ」といひければ、德「ヲヽ、神妙頼母し。左程に心落付からは、最期も案ずる事はなし。さりながら今際の時の苦患にて、死姿見苦しといはれんも口惜し。此二本の連理の木に身體をきつと結ひつけ、潔う死ぬまいか。世に類なき死樣の手本とならん」初「如何にも」と、淺ましや淺黃染かゝれとてやは抱え帶、兩方へ引張て、剃刀取てサラ〳〵と、帶は裂けても主樣と、妾が間はよもさけじと、どうど座を組み二重三重、動がぬ樣に慥と締め、德「能ふ締つたか」初「ヲヲ締ました」と、女は夫の姿を見、男は女の體を見て、「這は情なき身の果ぞや」と、わつと泣入るばかりなり。「アヽ、歎じ」と、德兵衛顏振上て手を合せ、「我幼少にて誠の父母に離

平時は左もあれ—いつもは兎もあれ今宵に限つて
心も夏—心もなしにかく
命追ゆる—鷄の聲が命を追うて死を促す如し

ぞ手にかけて、殺して置て行んせな。放ちはやらじと泣ければ」「唄も多きに彼の唄を、時こそあれ今宵しも、謠ふは誰そや聞くは我。過にし人も我々も、一ツ思ひ」と縋付き、聲も惜まず泣居たり。平常は左もあれ此夜半は、せめて暫は長からで、心も夏の夜のならひ、命追ゆる雞の聲。明なばうしや天神の、森で死んと手を引て、梅田堤の小夜鴉、明日は我身を餌食ぞや。初「誠に今歳は此方樣も、二十五歳の厄の年、妾も十九の厄年とて、思ひ合ふたる厄祟り、緣の深さの驗しかや。神や佛にかけ置し、現世の願を今此處で、未來へ回向し後の世も、猶しも一ツ蓮ぞや」と、爪繰る珠數の百八に、淚の玉の數添て、盡せぬ哀れ盡る道、心も空も影暗く、風しんくたる曾根崎の、森にぞ辿り着にける。彼處にか此處にかと、拂へば草に散る露の、我より先にまづ消て、定めなき世は稻妻か、それかあらぬか。初「ア、怖、今のは何といふものやらん」德「ヲヽあれこそは人魂よ、今宵死するは、我のみとこそ思ひしに、先立つ人もありしよな。誰にもせよ、死出の山の伴ひぞや。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」の聲の中、「あはれ悲しや、又こそ魂の世を去りしは。南無阿彌陀佛」と稱ふれば、女は愚に淚ぐみ、「今宵は人の死ぬる夜かや。淺ましさよ」と淚ぐむ。男淚を潸然と流し、「二ツ連飛ぶ人魂を、餘所の上と思ふかや。正しう御身と我

仇しが原―墓場

雲心なき云々―苦しき二人は雲の無心なるを羨み牽牛織女の千歳迄契るを羨みて泣く（難波土産）

どうで女房云々―松の落葉巻五にある唄

そ 三重 短かけれ。

道行血死期の霜

此世の名残夜も名殘、死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づつに消て行く、夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて、殘る一ツが今生の、鐘の響きの聞納め、寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と瞰上れば、雲心なき水の面、北斗は冴て影映る、星の妹脊の天の川、梅田の橋を鵲の橋と契りて何時までも、我と和女は夫婦星、必ず添ふと縋寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩も增るべし。向ふの二階は何屋とも、覺束情最中にて、未だ寢ぬ火影聲高く、今茲の心中善惡の言の葉草や繁るらん。聞くに心も呉織、綾なや昨日今日までも、餘所に言ひしが明日よりは、我も噂の數に入り、世に謠はれん。謠はば謠へ、謠ふを聞けば、「どうで女房にや持やさんすまい。いらぬものじやと思へども、實に思へども歎けども、身も世も思ふ儘ならず。何時を今日とて今日が日まで、心の舒し夜半もなく、思はぬ色に苦しみに、如何した事の緣じややら。忘るゝ暇はないわいな。それに振捨て行ふとは、遣やしませぬ

額に毛拔ー男をつくる

それともにーそれと共に

賴む身ー德兵衞の事

此方ー主人

盜人に甥ー甥に負錢をかけたり

して、人中へは出られぬ筈。戻らぬこそ道理なれ。自害をしたか、淵川へ身を投たには極つた。命の敵金の仇。憎いとも無念ともおのれが頭のぎり〳〵から、爪先まで斬刻んでも、是が腹が癒るものか」と、掴付き搔しやなぐり、撲ど叩けど世の中の、理に勝つ力あらざれば、兎角うも言はず九平次は、うぢ〳〵してこそ居たりけれ。亭主は見兼ね立寄て、「成程お前の御尤。併ながら、德樣のお聲を最前聞ました。お初も此處へ出ぬからは、未だ御座るに極た。御機嫌直しに呼ませ」と、小座敷、奥の間、彼處、此處、尋ねても居ず。二階から下女の玉は走下り、「お二人ともに見えませぬ。お初樣の寢所に書た物が御座んした。これ見たまへ」と差出せば、亭主取上げ「南無三寶、二人の者が書置じや、もはや心中に出たものぞ。やれ男ども、女ども、手別をして追蒐よ。未だ其處らには居ぬ事か。ふところ探せ棚探せ。探せ〳〵」と聲々に、騷ぎ惑へば久右衞門、九平次を引捕へ、「德兵衞が敵、おのれをば代官殿へ連て行き、只今思ひ知らすべし。それともに先づ各々は、片時も早く駈付て、最後を留て給はれ」と、賴む身よりも賴まるゝ、此方は大事の奉公人、殺すといふは正眞の、生た金をば盜人に、甥御恨めしつれなしと、互ひに泣いつ泣惑ひ、其方彼方へ走行く、哀れさ辛さ淺ましさ。後に燧火の石の火の、命の末こ

それをば云々—丁稚の言を聞けば此の九平次がとなり

欲しか—欲しくば

ひがいす—尫弱
くはびら—鍬枚の義、大なる足

二貫目の銀をば密と懐中し、此處へ來りてお初に逢ひ、咄を聞けば九平次めが、今日生玉にて德兵衞を、散々に打擲したるよし。はら腸が煮返り、二三度も駈出しを、お初がたつて袖に縋り、兎角に一應德兵衞に逢せんといはれしゆゑ、うつら〳〵と小座敷に、ねぶりをとぎに居たりしに、非道は天命、只今彼奴が駈來り、九平次に咄した事、後の證據に各〳〵も、篤くと聞て居て下され。月次の判形に、懸硯の二重目の印判持て參りしに、お宿老殿が此判は、先月二十五日に紛失したといふ判が、内にあるのは訝しいと、人橋かけて呼に來ると、サアおのれ斯うは言はなんだか」茂「イヤ〳〵左樣は言ひませぬ」久「ナント實正言はぬか」と、合口を差付れば、茂「アヽ成程左樣に言ひました」久「それをば聞くと此和郎が、顏色が違ふて、其印判を落したといふたばかりに德兵衞めに、二貫目といふ銀をまんまと砂にしてのけたと、先づ此樣に吐さぬか」と、合口喉に閃せば、茂「はて左樣言ふたにして欲しか、左樣いふにしてやろ」と、そろ〳〵立て退く處を、久右衞門大聲上げ、「やれ盜人め生掬め。假し二貫目の銀子にて、おのれが身代立たぬなら、成程銀はおのれに遣る。彼のひがいすな小男を、おのれが大きなくはびらで、能ふも〳〵踏居たな。殊に所も所柄、彼の生玉のでんどにて、額に毛拔も當る身が、頰恥掻て何んと

合口―刀

たまか―細かに心を用ふる（俚言集覽）

げじいた―着服する

に、此の合口を振舞ん」と、ずばと抜けば二人の者、「やれ狼藉者、人殺し」と聲々に呼はれば、亭主、女房、男共、駈寄て取捲けば、久右衛門聲を沈め、「卒爾召されな各々、全く狼藉者ならず」と、彼處にどうと押直り、久「コリヤ兩人の奴輩、久右衛門が暇やるまで、一寸でもにじつたら胴腹を剜るぞ」と、睨つけられて二人の者、もじ〳〵として居たりけり。

久右衛門亭主に對ひ、久「身共は平野屋久右衛門とて、徳兵衛が親方、誠は叔父と甥との中、商賣方にも精を出し、心ざまもたまかなゆゑ、身共は子とて持ませず、女房が姪と嫁せ、後繼せんと相談極め、敷銀として二貫目を、はや親里へ遣はせしに、徳兵衛めは此内の初と、兎や角契約の義理が立たぬといふ事か、さし極りし談合を打破りて得心せず。其處も身共が料簡して、若氣は誰しもあるならひ、それ程思ふ中ならば、行々は我思案にて夫婦にせんと心底に、思ふも甥の不便さゆゑ。女房は姪を嫌はれしと、やけ腹立に打當て、二貫目の銀取て來い。戻せ〳〵とせつかれて、此程在所へ參りしが、二貫目の銀在所から、成程取て歸りしを、陰から聞けば女房へは一錢も戻さぬゆゑ、遣ひ捨たの、げじいたのと、わすらるゝのを苦にしてか、今朝町へ出て暮るまで、待てども〳〵歸らぬゆゑ、面目なさに家出をも、したかと思ふ不便さに、一分立て取らせん爲、女房に隠し、

町次云々—町内にて毎月家々の印を検査す

お宿老—町内の取締

砂—無駄

屋九平次様、急用ありて手代茂兵衛が参つた。言次で給はれ」と呼はる聲、九平次が寐耳へ入て打驚き、梯子忙しく下けるを、後に續いて久右衛門、聞くとも知らず戸を押開け、九「ム丶茂兵衛か。何の用にて周章だしい。何うぞ〳〵」といひければ、茂「サレバ今日、町次の判形觸れて參りしゆゑ、お前のお歸り知れぬと思ひ、懸硯の二重目な印判持て參りしに、お宿老殿が仰せられしは、此印判は、先月の二十五日に落したとて、町々に貼紙せし其印判が、懸硯にあつたとは呑込まぬ。何分にも九平次に、逢ふて容子を聞かんまゝ、急いで呼に遣はせと、内へ人橋かゝるゆゑ、方々尋ね參りし」と、いへば九平次聲顫はし、「ヤレ行過た出洒張者。おのれにかゝり九平次が、最う一分が廢つたり。其印判を失ふたと、いふばつかりで德兵衛めに預つた二貫目を、とう〳〵砂に仕おほせたに、内にあつたと知られては、銀を取らるゝのみならず、如何も言譯立たぬ事。こりやマア何としたもの」と頭掻ても濟ぬ事。九「道々思案して見よ」と、出んとするを久右衛門、腕を取て引戻し、「九平次待れい用がある。遣らぬ〳〵」とせりかける。九平次恟としたりしが、騷がぬ振にて、「これや久右殿飲つけぬ茶屋酒過ての醉狂か。さもあれ男の利腕を取るは、如何ぞ」と突除くれば、久右衛門聲を上げ、「ア丶いふまい〳〵。樣子は篤と聞拔た。甥を踏だる返報

有明―夜明迄灯しておく行燈

苦しき―葛の縁繰るとかけたり

槇の戸―巻にかけ又待詫る意あり(難波土産)

何はせんと案ぜしが、棕櫚箒に扇子を付け、箱梯子の二つ目より、煽ぎ消せども消えかぬる、身も手も伸しはたと消せば、梯子よりどうと落ち、行燈消えて暗がりに、下女はうんと寝返りし、二人は胴を慄はして、尋ね廻る危さよ。亭主奥にて目を覚し、「今のは何じや。女子ども、有明の火も消えた。起て燈せ」と起されて、下女は睡そに目を擦く〳〵、素裸體にて起出、「燧火箱が見えぬ」と、探り歩くを障らじと、彼方此方へ這絆はるゝ玉葛、苦しき闇のうつゝなや。やう〳〵二人手を取合せ、門口まで密と出、懸鎰外せしが車戸の音訝しく開兼し折から、下女は燧火をはた〳〵と、打つ音に紛らかし、丁と打ば密と開け、かち〳〵打てばそろ〳〵開け、合せ〳〵て身を縮め、袖と袖とを槇の戸や、虎の尾を踏む心地して、二人續いて突と出、顔を見合せ、「アヽ嬉し」と、互ひに息をほつとつき、

初「さるにても九平治めを殺して退きよと思ふたに、此方らに心の急くまゝに、生て置たが悔しさよ」と、お初は涙に振返れば、德「アヽなふそれも迷ひなり。斯う死ぬる身の約束ぞ。人にも世にも恨みなし。急ぎ給へ」と手を引て、彼處を走り出て行く。斯とは知らずやうやうと、下女は火燈し、「これはさて、門の戸が開てある。皆氣の注かぬ」と懸鎰を、しめて寝間へぞ入にける。少時くあつて男一人、驚忙しく走り來り、天滿屋の戸を打敲き、「油

よからふ。ア、懐が重たうて歩きにくい」と、惡口だらけ言散し、喚いて外へ出けるを、お初は如何も堪られず、「死にに行く身の道連れに、おのれ瞞して殺さう」と、心一つに思案して、ずつと立て引留め、初「只今言ふた惡口は、勤めする身の義理なれば、左のみ心にかけなさんすな。有樣いへば憎うない。こな男め」と纏るれば、九平次は振返り、「こりや又味な挨拶じやが、そんなら我們に逢ふ心か」初「ハテさて愚鈍な男や」と、手を取り行けば連共は、「九平次此處は引れまい。今宵も明日も明後日も、揚詰の大々盡、お船がすはつた。我々は氣を通すぞ」と聲々に惡口いふて歸りける。亭主夫婦は悦びて、「サア九平次樣一時もはや〳〵二階へお越あれ。初もお側へはいつて寢や。早ふ寢やや」といひければ、初「そんなら旦那樣、內儀樣、最うお目にはかゝりますまい。さらばで御座んす。內衆もさらば〳〵」と餘所ながら、暇乞して閨に入る。これ一生の別れとは、後にこそ知れ氣も注かぬ、愚の心不便さよ。主「それ竈の下に念を入れ、肴を鼠に引するな」と、見世をあげつ門鎖つ、寢より早く高鼾。如何なる夢も短夜の、八つになるのは程もなし。初は白無垢死扮裝、戀路の闇の黑小袖、上に打かけさし足し、二階の口より差覗けば、男は下屋に顏出し、招き頷き指さして、心に物をいはすれば、梯子の下に下女寢たり。吊行燈の火は明し、如

身のひし―身の災難

忝くなかろ―有難くもなし

相場が悪い―雲行が悪し

ける。初は涙にくれながら、「左のみ利根にいはぬもの。徳様の御事、幾年馴染心根を、明し明せし中なるが、それは〳〵いとしぼげに、微塵譯は悪うなし。頼もし達が身のひしで、瞞されさんしたものなれども、證據なければ理も立たず。此上は徳様も、死なねばならぬしなるが、死ぬる覺悟が聞たい」と、獨語に擬へて、足で問へば打頷き、足首取て咽笛撫で、自害をするとぞ知らせける。初「チヽ其筈〳〵。何時まで生ても同じ事、死で恥を雪がいでは」と、いへば九平次恟として、「お初は何を言るゝぞ。何の徳兵衛が死ぬるものぞ。若亦死んだら其後は、おれが懇してやらふ。和女も俺に惚てじやげな」といへば、初「こりや忝かろはいの。妾と懇さあんすと、此方も殺すが合點か。徳様に離れて片時も生て居やうか。其處な九平次のどうずりめ。阿呆口を叩いて人が聞ても不審が立つ。どうで徳様一所に死ぬる。妾も一所に死ぬるぞやいの」と、足にて突けば、緣の下には涙を流し、足を取て押戴き、膝に抱付き焦れ泣き、女も色に包みかね、互ひに物は言ねども、膽と膽とに應へつゝ、しめり泣にぞ泣居たる。人知らぬこそ哀れなれ。九平次も氣味悪く、「相場が悪いおぢやいなふ。此處な妓衆は異な事で、俺們が樣に金遣ふ大盡は嫌ひさうな。阿佐屋へ寄て一杯して、ぐわら〳〵一分を撒散し、そしていんだら寝

言ふ程おれが非に落る。其内四方八方の、首尾はぐわらりと違ふて來る。最早今宵は過されず。とんと覺悟を極めた」と囁けば、内よりも、「世間に惡い取沙汰ある。初樣内へ入らんせ」と、聲々に呼入る。初「ヲ、〳〵あれじや。何も咄されぬ。妾が爲るやうに成んせ」と、裲襠の裾に隱し入れ、はふ〳〵仲戸の沓脫より忍ばせて、緣の下屋に密と入れ、上り口に腰打懸け、烟草引寄せ吸付て、素知らぬ顏して居たりけり。斯る處へ九平次は、惡口仲間二三人、座頭まじくらどつと來り、「ヤア妓樣達、淋しさうに御座る。何と客になつてやらうかい。何と亭主久しいの」と、のさばり上れば、主人「それ煙草盆、お盃」と、ありべかゝりに立騷ぐ。九「イヤ酒は置や、飮で來た。扨咄す事がある。これの初が一客平野屋の德兵衞めが、身が落した印判拾ひ、二貫目の僞手形で騙ふとしたれども、理屈に詰つて上句には、死なず甲斐な目に遭ふて一分は廢つた。向後此處らへ來るとも油斷しやるな。皆に斯う語るのも德兵衞めがうせ、まつかい樣にいふとても、必ず誠にしやるな。寄る事も要らぬもの。何うで野江か飛田もの」と、誠しやかにいひちらす。緣の下には齒を喰しばり、身を慄はして腹を立るを、初は是を知らせじと、足の先にて押沈め、押へ沈めし神妙さ。亭主は久しい客の事、是非の返答なく、主「さらば何ぞお吸物」と、紛かしてぞ立に

まじくら—交りて
ありべかゝり—常の通りに
野江、飛田—仕置場
押沈め—足にて踏いてなだむる

先には—九平次の方にては

夜の編笠—人目を忍ぶ體

おうへ—入口の圍爐裏のある所

やくたい—惡たれ

せつなき—切なるにて甚だしき事

逢ますまい。是から直に九平次が宿へ踏込み、おのれ先づ摑付ても喰付ても、存分言で置うか」と、走り行くを引留め、初「お腹の立のは御尤。併し先には巧んだ事。此上麁相のある時は御損の上の恥になる。何の道にも、徳様が追付け是へ見える筈、逢ふて共々談合して、往て下さんせ」と言ひければ、久「ムヽ、すれば是非とも徳兵衛が、是へ來るに極つたか。然らば逢ての上の事。少時此處を貸給へ」と、見世の先に腰懸れば、初「イヤノウ此處は商ひ見世、内へ入つて待しやんせ。お妻さま、お吉さま、此御客をば小座敷へ通しまして」と聞よりも、「あい」と答へて二人の妓、「さア御座んせ」と取付けば、久「サア參れなら參らふが、これお初殿、構へて身共は金は拂はぬぞや。必ず念をつかふた」と、言捨て奥にぞ入りにける。お初は見世につく〴〵と、物打案じ居る處へ、表を見れば夜の編笠徳兵衛、思ひ詫たる忍び姿、ちらと見るより飛立ばかり。走り出んと思へども、おうへには亭主夫婦、上り口に料理人、庭では下女がやくたいの、目が繁ければ左もならず。初「アヽいかう氣が盡た。門見て來ふ」と密と出、初「なふこれは如何ぞいの。此方様の評判いろ〳〵に聞たゆゑ、其氣遣ひさく〳〵、狂氣の樣になつて居たはいのう」と、笠の内に顔さし入れ、聲を立ずの隱し泣き、あはれせつなき涙なり。男も涙にくれながら、「聞きやる通のたくみなれば、

水の様に、夜々通ふのみならず、今日は晝から得意衆へ、商ひに廻るといふて内を出て、今になりても歸らぬゆゑ、久右衛門が引ずりに參つた。好い加減にして戻されよ。左なくばお爲が悪からふ」と、苦々しく言ければ、お初はじつと聲を沈め、「さてはお前は旦那様か。内方の入譯も咄で聞て居ますれば、妾が憎いはお道理。それ程の事辨へぬ妾でもなけれども、思ひ切るにもきられぬは、二人が因果と思召し、堪忍して下さんせ。左様した中の事なれば、再々見えはしますれど、よしない金は遣はせませぬ。必ず恨みて下んすな。それに就ては、お前へ立る二貫目の銀も、御手にありしをば友達の義理合にて、油屋の九平次めに用に達てやらんしたを、今日生玉で逢んして、戻してくれとあつたれば、借らぬと諍ふのみならず、言懸するの、騙瞞のと、德様一人を四五人して、撲たり踏だり仕居たを、妾もお客と行合せ、喰付たうは思へども、お客の手前を憚りて、様子を見さして戻りしが、若や怪我は無つたかと、是のみ案じ居まする」と、泣く泣く語れば、久右衛門大きに急て、「ナニ九平次めが德兵衛を踏たるとや。德兵衛事は久右衛門が家來ながらも甥じやとは、誰知らぬ者ない處に、假し理にもせよ非にもせよ、彼の生玉のでんどにて、九平次めに踏せては、此久右衛門が立ものか。最う德兵衛にも

のけたい—仕舞ひたい

ぼつとりもの—丸顔の愛嬌もの

ぬつぺり—容貌の奇麗なる

な。聞けば聞くほど胸痛み、妾から先へ死さうな、寧そ死でのけたい」と、泣より外の事ぞなき。かゝる處へ此里馴れぬ人體に、家來に提灯燈させて、此處か其處かと立覗く。下女の玉立寄て、「これ親父様。どんなお顔が物好きぞ。若い衆と同じ様にうろ〳〵せずと、先ア此方へ入らしやんせ」と、引留れば、「ム、天滿屋といふ茶屋は、此處ではないか」と尋ぬれば、玉「アヽ成程々々お尋ねの天滿屋。十四五から三十までの、圓顔面長望み次第。戀知りの初様とて、町一番のぼつとり者。お目にかけん」と縋付く。客「されば其初といふ女に用の事ある間、鳥渡呼出して」といふや否、玉「ムヽさては最うお馴染か。幸ひ只今お暇あり。いざお入り」といひければ、客「イヤ〳〵左様の者でなし。逢ふて一言いふ事あり。頼む」といへば、玉「さてはお客のお連様か。そんなら疾から言ふたが好い。コレお初様、客様のお連様が」と傳へれば、初は彼處に立出て、「誰さんじや」と差覗けば、客「ム、お初とはお身の事な。和女が内に居るからは、德兵衞めも來て居る筈。此處へ早う呼で下されい」初「イヽエ德様は未だ見えませぬが、先づ此方様は誰様じや」客「ヲヽ身共は德兵衞めが叔父親方平野屋久右衞門といふもの、和女を見るも恨めしい。彼の正直な德兵衞めをば、ぬつぺりとした顔をして、何の様に瞞したやら。今日此頃は平生の魂が入替り、錢金を湯

逆ねだれ—逆ねぢくはす

笑止—氣の毒

蜆川—染むと川の名とかく

空背貝云々—肉なき貝の如く本心を女に奪はる

に落せしと町内へ披露して、却て今の逆ねだれ。口惜や無念やな。此如く踏叩かれ、男も立たず身もたゝず。エヽ最前に攫付き、喰付てなりとも死なんものを」と、大地を叩き切歯をなし、拳を握り歎きしは、道理とも笑止とも、思ひやられて哀れなり。徳「ハテ斯ういふても無益の事。此徳兵衛が正直の心の底の涼しさは、三日を過さず、大阪中へ申譯はして見せう」と、後に知らるゝ詞の端、「何れも御苦勞かけました。御免あれ」と一禮述べ、破れし編笠拾ひ着て、顔も傾く日影さへ、曇る涙に掻暮れ〱、悄然歸る有様は、目もあてられぬ　三重　戀風の、身に蜆川流れては、其空背貝現なき、色の闇路を照せとて、夜毎に燈す燈火は、四季の螢よ雨夜の星か。夏も花見る梅田橋。旅の鄙人、地の思ひ人、心々の譯の道、知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑はしゝ。無慙やな、天滿屋のお初は、内へ歸りても今日の事のみ氣にかゝり、酒も飲れず氣も濟ず、しく〱泣て居る處へ、隣りの娼や朋輩の鳥渡來ては、甲「なふ初樣、何も聞んせぬか。徳樣は何やら仔細の惡い事ありて、たんと撲れさんしたと、聞たが眞か」といふもあり。乙「ヤイ儕が客樣の咄ぢやが、踏れて死んしたげな」といふもあり。騙りをいふて縛られての、僞判して括られてのと、碌な事は一ッも言はず、問ふに辛さの見舞なり。初「アヽいや最う言ふて下んす

てんどー公儀

洒落なー生意氣な

杯食ふたか無念やな。ハテ何んとせう。此銀をのめ〳〵と、只己に取られうか。斯う巧んだ事なれば、でんどへ出ても俺が負け。腕前で取て見せう。コリャ平野屋の德兵衞じや。男ぢやが合點か。おのれが樣に友達を騙つて倒す男じやない。サア來い」と摑付く。九「ヤア洒落な丁稚上りめ、投てくれん」と胸倉取り、撲合ひ捻合ひ敲き合ふ。お初は跣で飛で下り、「あれ皆樣賴みます。妾が知たお人じやが、駕籠の衆は居やらぬか。あれ德樣じや」と身をもがく。詮方なくも哀れなり。客は素より田舍者、「怪我があつてはならぬぞ」と無體に駕籠に押入るゝ。初「いや先づ待て下さんせ。なふ悲しや」と泣聲ばかり、急げ〳〵と一散に駕籠を早めて歸りけり。德兵衞は只一人、九平次は五人連れ、四邊の茶屋より棒ずくめ、蓮池まで追出し、誰が蹈やら叩くやら、更に分ちは無りけり。髮も解かれ帶も解け、彼方此方へ伏轉び、德「やれ九平次め畜生め。おのれ生て置ふか」と、よろぼひ尋ね廻れども、逃て行衞も見えばこそ。其儘其處にどうと居り、大聲上て淚を流し、「孰れもの手前も面目なし恥しゝ。全く此德兵衞が言かけしたるで更になし。日頃兄弟同前に語りし奴が事といひ、一生の恩と歎きしゆゑ、明日七日此銀がなければ、我等も死ねばならぬ命がはりの銀なれども、互の事と役に立ち、手形を我等が手で書せ、印判捺て其判を、前方

聊爾—粗忽

手形—證文

八日—廿八日の略

けんによ云々—吃驚したる風にて平氣を裝ふ

錢借た覺えもなし。聊爾な事を言懸け、後悔するな」と振放せば、連も笠をはらりと脫ぐ。德兵衞はつと色を變へ、「言ふな〳〵九平次。身が此度の大難儀、如何もならぬ銀なれども、晦日只た一日で、身代立ぬと歎いたゆゑ、日來語るは此處らと思ひ、男づくで貸たぞよ。手形も要らぬといふたれば、念の爲じや判しやうとおれに證文書かせ、お主が捺た判がある。左樣いふな九平次」と、血眼になつて責薨る。九「ム、ウ何んじや。判とは何れ見たい」德「ヲ、見せいで置ふか」と、懷中の鼻紙入より取出し、「お町衆なら見知もあらふ。コリヤ是でも爭ふか」と、披いて見すれば、九平次横手を打ち、「成程判はおれが判。エ、德兵衞、土に食付死ぬるとても、斯樣な事は爲ぬものじや。此九平次は後の月の二十五日に、鼻紙袋を落して、印判共に失なふた。方々に張紙して尋ぬれども知れぬゆゑ、此月からコレ此お町衆へもことはり、印判を替たはやい。二十五日に落した判を八日に捺れうか。さては其方が拾ふて、手形を書て判を捺ゑ、おれを強請て銀取ふとは、謀判よりも大罪人。こんな事をせうよりも盜みをせい德兵衞。エ、首を斬せる奴なれど懇意甲斐に許して置く。銀になるなら仕て見よ」と、手形を顏へ打付け、はつたと白眼む顏付は、けんによもなげにしら〳〵し。德兵衞くわつと胸急て大聲上げ、「扨巧んだり〳〵。一

後の月―先月

男磨く―俠氣者

初瀬云々―謡曲三井寺の句にて後句は德兵衞來て見ればにかく

せかるゝ人もあるまい」と、氣強う勇む詞の中、涙に咽て言させり。お初重ねて、「七日といふても明日の事。とても渡す金なれば、早ふ戻して親方樣の、機嫌をも取らんせ」といへば、德「ヲヽ左樣思ふて氣が急くが、和女も知た彼の油屋の九平次が、後の月の晦日、只た一日要る事あり。三日の朝は返さうと、一命かけて頼むにより、七日までは要らぬ金。兄弟同士の友達の爲を思ひて、時貸に貸たるが、三日四日に便宜せず。昨日は留守で逢もせず。今朝尋ねふと思ひしが、明日限に商ひの勘定も仕舞はんと、得意廻りで打過たり。晩には行て埒明ふ。彼奴も男磨く奴。おれが難儀も知て居る。如才はあるまい。氣遣しやるな。ヤアお初」謡初瀬も遠し難波寺。名所多き鐘の音、つきぬや法の聲ならん。山寺の春の夕暮來て見れば、先なは德「これ九平次、アヽ不敵千萬な。身共方へ不屈して遊山どころであるまいぞ。サア今日埒明ふ」と、手を取て引留れば、九平次興覺顔になつて、九「何んの事ぞ德兵衞、此連衆は町の衆。上鹽町へ伊勢講にて只今歸るが、酒も少し飲で居る。利腕把て如何する事ぞ。麁相をするな」と笠を取れば、德「イヤ此德兵衞は麁相はせぬ。後の月の二十八日、銀子二貫目時貸に此三日切に貸たる銀、それを返せといふ事」と、言せも果てず九平次、つらか〱と笑ひ、「氣が違ふたか德兵衞。われと數年語れども、一

機嫌取り、此德兵衞が立ものか。嫌といふからは、死だ親父が蘇生り申すとあつても否で御座ると、詞を過す返答に、親方も立腹せられ、おれが夫れも知て居る。蜆川の天滿屋の初めとやらと腐り合ひ、嚊が姪を嫌ふよな。好い此上は最う娘は遣ぬ。遣ぬからは金を立。四月七日までに屹度立て。商ひの勘定せよ。まくり出して大阪の地はふませぬと怒らるゝ。それがしも男の我。ヲヽソレ畏つたと在所へ走る。又此母といふ人が、此世が彼の世へ歸つても、握た銀を放さばこそ。京の五條の醬油問屋、常々金の取遣すれば、これを賴みに上つて見ても、折しも惡う銀もなし。引返して在所へ行き、一在所の詫言にて、母より金を請取たり。追付返し勘定仕舞ひ、さらりと埒が明くは明く。されども大阪に置れまい時には如何して逢れふぞ。假へば骨を碎かれて、身はしやれ貝の蜆川、底の水屑とならば成れ。汝が身に放れ如何せう」と、咽び入てぞ泣居たる。お初も共に喘ぐ涙、力をつけて押留め、「さてさていかい御苦勞。皆妾故と思ふから、嬉し悲しう忝し。さりながら、心慥に思召せ。大阪を堰れさんしても、盜み家燒の身ではなし。如何してなりとも置く分は、妾が心にあることなり。逢ふに逢れぬ其時は、此世ばかりの約束か。左樣した例しの無ではなし。死ぬるをたかの死出の山。三途の川は堰く人も、

金を立て―金を出せ
しやれ貝―肉のとれたる貝
家燒―放火罪
左樣した―心中した

もじひらがな—字一字假名一つ
取りあへもせぬ—相手にせぬ
侘倆—まぬけ
もやくりだし—騒ぎ立つる

譯は京へも上つて來る。能ふも〳〵德兵衛が命は續きの狂言に、したらば哀にあらふぞ」と、溜息ほつとつくばかり。初「ハテ輕口の段かいの。それ程に無い事をさへ妾にはなぜ言んせぬ。隱さんしたは仔細があろ。何故打明て下んせぬ」と、膝に凭れてさめ〴〵と、淚は延紙を浸しけり。德「ハアテ泣やんな、恨みやるな。隱すではなけれども、言ふても埓の明ぬ事。さりながら大概先づ濟よつたが、一伍一什を聞てたも。おれが旦那は主ながら現在の叔父甥なれば、懇切にも預る、又身共も、奉公にこれほども油斷せず。商ひ物ももじひらがな違へた事のあらばこそ。此頃袷を仕樣と思ひ、堺筋で加賀一疋、旦那の名代でかひがかる。是が一期に只た一度。此金もすはと言へば、著替賣ても損かけぬ、此正直を見て取て、內儀の姪に二貫目附て夫婦にし、商賣させうといふ談合。去年からの事なれど、和女といふ人持て、何の心が移らうぞ。取りあへもせぬ其内に、在所の母は繼母なるが、我に隱して親方と談合極め、二貫目の金を握て歸られしを、此侘倆が夢にも知らず。後の月からもやくり出し、押て祝言させうとある。其處で俺も勃として、やあら聞えぬ旦那殿、私合點いたさぬを、老母を賺したゝきつけ、餘りな成されやう。お內儀樣も聞えませぬ。今迄、樣に樣を付け崇まへた娘御に、金を付て申受け、一生女房の

取やや―取れよ

酒にする云々―酒のむと聲澤いふ

梨も礫―沙汰なき事(諺)

つんと―とんと

やみらみつちや―無茶苦茶の義
皮袋にはさせる意なし

其方は寺町の久本寺樣、長久寺樣、上町から屋敷方廻つて而して内へ往や。德兵衞も早戻ると言や。それ忘れずとも、安土町の紺屋へ寄て錢取やや。道頓堀へ寄やんなや」と、影見ゆるまで見送り〳〵、簾を上て、德「コレお初じやないか。是は如何じや」と編笠を脱んとすれば、初「アヽ先づ矢張被て居さんせ。今日は田舍の客で、三十三番の觀音樣を廻りまし、此處で晩まで日暮しに、酒にするじやと贅言て、物眞似聞にそれ其處へ。戻つて見ればむづかしい。駕籠も皆知んした衆。矢張笠を被て居さんせ。それは左樣じやが此頃は、梨も礫もうたんせぬ。氣遣ひなれど内方の、首尾を知らねば便宜もならず。丹波屋まではお百度ほど訪ぬれど、彼處へも音信もないとある。ハア誰やらがヲヽそれよ。座頭の太市が友達衆に聞けば、在所へ往んしたといへども、つんと誠にならず。ほんに又餘りな。妾は如何ならふとも聞たうもないかいの。此方樣それでも濟もぞいの。妾は病ひになるはいの。嘘なら是れ此痞を見さんせ」と、手を取て懷の、うち怨みたる口說泣。ほんの夫婦にかはらじな。男も泣て、「ヲヽ道理々々〳〵。去ながら言ふて苦にさせ、何せうぞいの。此中おれが憂苦勞、盆と正月其上に、十夜お祓ひ煤掃を、一度にするとも斯うはあるまい。心の内はむしやくしやと、やみらみつちやの皮袋。銀事やら何じややら、

通る烟管—風が通ると烟管の通るとかく

相思草—烟草

道草—道にて手間とる

ばくらう—獏は夢を食ふ故續けたり

佛神水波—佛神はもと一つ

平野屋—火をかく

雛男—美男

桃の酒—德兵衞は酒も少しのめる

萬燈院に灯す火は、影も耀く蠟燭の、しん清水にしばしとて、軈て休らふ逢坂の、關の清水を汲上つ、手に掬び上げ口嗽ぎ、無明の酒の醉さます、木々の下風ひや〳〵と、右の袖口左の袖へ、通る烟管に燻る火も、道の慰み熱からず。吹て亂るゝ薄烟、空に消えては是も亦、行衞も知らぬ相思草、人忍ぶ草道草に、日も傾きぬ急がんと、又立出る雲の脚。時雨の松の下寺町に、信心深き眞光寺。覺らぬ身さへ大覺寺。さて金臺寺大蓮寺。廻り〳〵て是ぞはや、三十番にみつ寺の、大慈大悲の賴みにて、かくる佛の御手の糸。白髮町とよ黑髮は、戀に亂るゝ妄執の、夢を覺さんばくらうの、此處も稻荷の神社。佛神水波のしるしとて、甍竝べし新御靈に、拜みおさまるさしもぐさ。草のはす花世にまじり、三十三に御身をかえ、色で導き情で敎へ、戀を菩提の橋となし、渡して救ふ觀世音。誓ひは妙に二重有難し。立迷ふ浮名を餘所に漏さじと、包む心の内本町。焦るゝ胸の平野屋に、春を重ねし雛男。一ッなる口桃の酒、柳の髮もとく〳〵と、呼れて粹の名取川。今は手代と埋木の、生醬油の袖したゝるき、戀の奴に荷はせて、得意を廻り生玉の、社にこそは著にけれ。出茶屋の床より女の聲、「ありや德さまではないかいの。コレ德樣〻」と手をたゝけば、德兵衞合點して打頷き、「コレ長藏、おれは後から往のほどに、

りぞと、仇の悋氣や法界寺。東は如何に大鏡寺。草の若芽も春過て、遲れ咲なる菜種や罌粟の、露に憔るゝ夏の蟲。おのが妻戀ひ優しやすしや。彼地へ飛つれ、此地へ飛連れ、彼地やこち風ひた〳〵、羽と羽とを袷の袖、染た模樣を花かとて、肩にとまればおのづから、紋に揚羽の超泉寺。さて善道寺栗東寺。天滿の札所殘りなく、其方にめぐる夕立の、雲の羽衣蟬の羽の、薄き手拭暑き日に、貫く汗の玉造。稻荷の宮にまよふとの、闇はことはり御佛も、衆生の爲の親なれば、是ぞ小長谷の興德寺。四方に眺めの果しなく、西に船路の海深く、波の淡路に消えずも通ふ、沖の潮風身に染む鷗、汝も無常の烟に咽ぶ。色に焦れて死ふなら、しんぞ此身は成次第。さて實に好いけいでん寺。緣に引れて又何時か、此處に高津の遍妙院。菩提の種や上寺町の、長安寺より誓安寺。上りやすな〳〵、下りやちよこ〳〵、上りつ下りつ谷町筋を、歩みならはず行きならはねば、所體くづをれァ、恥しの、森で裳裾がはら〳〵〳〵、はつと飜るを打搔合せ、ゆるみし帶を引締め〳〵、しめて絆はれ藤の棚。十七番に重願寺。これからいくつ生玉の、本誓寺ぞと伏拜む。珠數に繫がん菩提寺や。はや天王寺に六時堂、七千餘卷の經堂に、經讀む鳥のときぞとて、餘所の待宵きぬ〴〵も、思はで辛き鐘の聲。こんこん金堂に講堂や、

法界寺―戀の祈りと法界悋氣とかく

すしや―粹にてはてなる事

小長谷―伯母にかく

けいてん寺―好い景色と慶傳寺とかく

上りや云々―上りは辛いが下りは樂

所體―身裝

菩提寺―菩提樹にて珠數を作る故にいふ

きぬ〴〵―男女の朝の別れ

曾根崎心中（お初天神記）

實にや云々―謠曲田村にある句
三ツづつ云々―大阪三十三番の觀音
をりは―下りるに双六の事をかく
乞目―投欲する賽の目、三六も餘と賽の目とかく
顏世花―蕣子花なれどもお初のみめよきに譬ふ
氣のとほる―左大臣融が鹽竈の景を模せし庭を取りていへり
鳥も一番―二番鳥唄ふ時とかけたり
振のよしあし―姿の良否

實にや安樂世界より、今此娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐも高し高き屋に、登りて民の賑ひを、契りおきてし難波津や、三ツづつ十ウと三ツの里、札所々々の靈地靈佛、廻れば罪も夏の雲、熱くろしとて駕籠をはや、をりはの乞目三六の、十八九なる顏世花、今咲出しの初花に、傘は被ずとも召さずとも、照日の神も男神、除けて日負はよもあらじ。賴みありける巡禮道、西國三十三所にも向ふと聞ぞ有難き。一番に天滿の大融寺。此御寺の名も古りし、昔の人も氣のとほるの、大臣の君が鹽竈の、浦を都に堀江漕ぐ、汐汲舟の跡絶えず、今も弘誓の櫓拍子に、法の玉鉾ゐい〳〵。大阪巡禮胸に木札の普陀落や、大江の岸に打つ波に、白む夜明の、鳥も一番に長福寺。空に眩き久方の、光に映る我影の、あれ〳〵走れば走る。これ〳〵又留れば留る。振のよしあし見る如く、心も嘸や神佛、照す鏡の神明宮。拜み廻りて法住寺。人の願ひも我如く、誰をか戀の祈

上野や云々―かみづけぬさぬの舟橋取り放し親はさくれどわはさかれがへ(萬葉集)

さて國々の諸軍勢、皆お暇賜りて、故郷へとてぞ歸りける。謡 其中に常世は、其中に女房は、悦びの眉を開きつゝ、今こそ勇め、此馬に打乗りて、上野や佐野の船橋、取放れし本領に安堵して、歸るぞ嬉しかりける、歸るぞ嬉しかりける。

りし時、彼の者落人となつて隱れしを、房州の探題に申し付け、成敗を遂させたり」と、御詞の下よりも、獄舍の雜色、首級桶持て常世が前に差置たり。常世餘りの有難さに、蓋を取れば、源藤太が首級なりけり。常「這は忝き御高恩、冥途の父が悅び、現世の我們が本望。何時の世に何を以て、此御恩を報ぜん」と、手を合せ淚を流し、大床に額をつけ、仰ぎ居るこそ道理なれ。猶々仰出さるゝ旨あり。「近ふ參れ」と御膝近く召され、最「いで汝佐野にて女房が申せしよな。今にてもあれ、鎌倉に御大事あるとならば、斷れたりとも其具足取て投懸け、銹たりとも其長刀を持、瘦たりとも彼の馬に乘り、一番に馳參るべき由申つる、詞の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。先〳〵沙汰の始には、常世が本領佐野の莊、三十餘鄕還し與ふる處なり。又何よりも切なりしは、大雪降て寒かりしを、女房が情に、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚あてたりし志をば、何時の世にかは忘るべき。さらば女房に引出物せん。いで其時の鉢の木は、梅、櫻、松にてありしよな。其返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、合せて三箇の莊、子々孫々に至るまで、相違あらざる自筆の狀」安堵に取副へ賜びければ、常世は是を賜りて、三度頂戴仕り、「これ見給へや人々よ。始め笑ひし儕輩も、是程の御氣色、嘸羨しかるらん」

引出物―進物

安堵―本領に安堵せよとの御欽書

大床―廣廂の事
早打―早飛脚

へ召さるゝとや。あら思ひよらずや。人違ひにても候歟。今一度御伺ひあるべうもや」とありけれ共、息女「いや〳〵、如何にも見苦しき扮装の武者一騎、女房に痩馬引せたる者あるべし。召連れ參れとの御諚の上は、左樣の者は外になし。はや〳〵參られ候可し」常「何がさて此上は違背申さん樣はなし。實に〳〵女房、某が敵又讒訴申し上、召出されて頭を刎られん爲と覺えたり。如何あらん」といひければ、妻「チ、よし〳〵。それも力なし。假へ夫婦が御前にて生首を打るゝとも、一度鎌倉殿を拜し奉る悦び、一念は潔く親の敵讒人を、三日が内に取殺し、此世の妄執晴すべし。いざさせ給へ」と打笑ひ、大床さして見渡せば、今度の早打に上り集る兵、綺羅星の如く竝居たり。さて御前には諸侍其外數人竝居つゝ、目を曳き指をさして笑ひあへる其中に、横縫の斷れたる古腹卷に、錆刀女房にかたげさせ、戰慄たる氣色もなく、參りて御前に畏る。最「ヤア〳〵彼なるは佐野源左衞門常世よな。如何に女房、これこそ日外の大雪に宿借し修行者よ。見忘れてあるか。其夜の情忘れ難く、召出してありつるは」と宣へば、夫婦の者長刀からりと投棄て、「あつ」とばかりに頭を下げ、感涙袖をぞ浸しける。重て仰出さるゝは、「汝が叔父源藤太常景、父政常を討て、剰へ累世の知行を押領したる罪科紛れなく、我安房國を巡

勢づかひ—軍勢備し
腹卷—鎧の一種、草摺七枚ありて袖なし

御所の此方に駒を控えて見渡せば、東八ヶ國より集つたる、數萬の軍兵これを見て、「如何なる者ぞ見苦しや。彼の態で此中へ出頰は何事」と、一度に哄と笑ふ聲、鯨波をつくるが如くなり。此音奥に聞えしかば、御臺所御悅喜あり。「自から女の身にて此度の勢揃へ、斯樣に從ひ集まる事、これ皆殿の御威光目出度きゆゑ。若も重ねて如何なる大事あるとても、先づ此如く馳來らば、即時に敵を追散し、鎌倉は千代萬代、心安や目出度やな。いで軍兵に一禮して歸さばや」と、宣ふ處に、裏の門より最明寺殿、旅に窶れし御有樣。御臺所これはと驚き給ひ、「さては座禪を御出かや。目出度上の目出度さよ」と、悅び給へば、若君も立出て、御對面こそ賑しけれ。最「我此度座禪禁足と僞り、誠は廻國行脚して、民の安危を窺ひし、其隙間を見て冠者奴が惡逆、天の責目前たり。又天女丸が武功末頼もしく、北の方の勢づかひ、彼是以て入道が妻子ぞや」と、御悅びは限りなし。「さて此諸軍勢の中に、横縫の斷れたる腹卷して、銹長刀を持、瘦たる馬に女房の轡取たる武者一騎ある可し。夫婦共に召連れ來れ」と御諚あれば、佐々木が息女承り、軈て御門に立出る。大勢とは言ながら、花紅葉と扮裝中、見まがふべくもあらばこそ。つか〳〵と立寄て、息女「これ〳〵上意なるぞ。男女とも御前へ罷出られよ」常世驚き、「何と某夫婦御前

お振—娘の著る振袖にかく、詰袖の年增の著物にかく
大友—大きいに
大納戸—衣服調度を納れ置く所
平禮—帶劍せざる平侍
白丁—白き袍を著る奴僕
退紅丁—桃色の狩衣を着たる下侍
らい地—晶地と書く、餘地の義（俚言集覽）
足弱車—乘りがひなきに喩ふ

振といふも脇詰の、年は往ねど格好の、大友太夫のお内儀おさち御前、思ひ〳〵の太刀狩衣、大納戸小納戸、進物所御膳番、役所々々に著座ある。さて其外御臺所の彌惣が女房、圍爐裏の間の加藤が女房おはい、おこん、料理人の三太が女房お鍋の前、油奉行蠟燭奉行、酒奉行の彌吉兵衛が女房おたるの前、おかんの前、茶道坊主の珍齋が妻、おちや〳〵の前に至るまで、其品々の男扮裝、直垂狩衣布衣素袍、長袴切袴、平禮白丁退紅丁、袖を列ねし粧ひは、女護の島とも謂つ可し。賑はよしとも愚なり。中にも佐々木入道が息女、今日の著到承り、中門の扉押開けば、東八箇國の諸軍勢、召に從ひ參上ある。當國には伊藤の一黨、長野淸原曾我山越、河津大場竹の下、櫻井岩永土肥岡崎、三崎三浦佐原田原、小笠原小山平山宇都宮、手勢々々を引率し、旗標馬標兜の星を輝し、中門の廣庭より、大名小路の極樂橋、錐を立つ可き埓もなく、人馬滿々並居たり。晴がましくぞ三重見えにける。佐野源左衛門常世は、「今度の出陣望む處の本望」と、斷れ具足に銹刀、瘦馬に繩轡、女房は長刀擔げ、馬の口に引添ふて、「物其數にあらざる氣色、嘸笑ふらん。笑はば笑へ。所存は誰にか劣るべき」と、心ばかりは急げども、弱きに弱き柳の糸の、よれによれたる瘦馬なれば、打てども障泥れども、先へは進まぬ足弱車の、

信夫—忍ぶにかく

目結—四つ目結の模樣を白くして他を染むる

子持筋—子持にかく、之は嫁娶の時衣服に大小の筋を引いて祝とす（倭訓栞）

磯邊—五十にかく

善知鳥安方—奥州外ヶ濱に栖む鳥、うとふと鳴けば子は安方と答ふといふ

何某の中將殿の季娘。烏帽子馴れたる黛に、戀を染込む狩衣の、露長々と結び下げ、裏紫の藤袴、男染たる摺足も、爪先反てぞ見えにける。是も同じ風折に、卷繪の飾太刀佩たるは、足利左馬頭の御内室お吉の君。此春嫁入て人中を、信夫文字摺信夫布、折目正しく着翫せし、素袍袴ののり立も、やは〳〵とせし挨拶の、「いづれも是はお早ふ」と、物靜にぞ伺候ある。次は佐々木隱岐の入道の息女お百の姫。目結の直垂、五色の絲にて菊綴し、嫁入盛りの花盡し、袖の襲ねに匂はせて、大人くろしき懸烏帽子、行儀正しき割膝に、袴の襠の高ければ、嘸紅の下紐の、裾や分れん心憎さよ。同じく續いて四條藏人の奥、左近のお方。金紋紗の狩衣、薄色の奴袴、白銀造の太刀横たへ、寺社奉行の座にぞ著れける。大目付は宿谷の左衛門が女房おつけの前。是も二人の子持筋に、鶴龜染たる素袍袴、打刀差彫し、四邊近所を見廻して、目を働かす顏に、お役は左ぞと知られける。是は名越金吾の後家、熊千代が母おきいといふは、年ばいも磯部の善知鳥安方の子を後見て身を捨ず、髮は切ても何のその、我子の末も君が代も、萬歲烏帽子引冠で、御披露所に著座ある。顏も艶々ほや〳〵と、老て再び若後家や、昔の蝶の吸殘す、花の露浮くばかりなり。次は山名の惣領娘、おらくは今年十八歲、土岐の二郎が妹、お

劣らぬ美々しい事かな。唯一刻も御急ぎ候へ。最早悉く御參り候。我們は先へ罷歸り、各々鎌倉へ御着ある由、申上ふと存ずる。皆々聞れ候へ。關東八州の諸軍勢、是まで御着候ぞ。其分心得候へ〳〵」と、觸て通りし猛勢は、勇々敷も亦 三重 華々し。

女勢揃へ

古へ秦の朱序が母、千餘人の女武者を領じて、襄陽に城を築き、賊敵を防ぎ、夫人城と名けしは、上代異朝の賢婦ぞかし。鎌倉の御臺所、先妣松下禪尼の風を慕ひ、自ら執權の與奪ぞと、烏帽子際氣高く、水干の衣紋かき繕ひ、美精好の長絹、黃金造の御佩刀、式目所の上段に、悠々と坐し給へば、左右に白齒の御侍女、島田解いて若衆髷。廊下傳ひの長袴、花を竝べし如くにて、御太刀の役、調度掛、作法正しき廣庇、諸大名の御前方、何れも男の扮裝にて、面々殿御の役々の、座並亂さず伺候ある。都六波羅陸奥守繁時の北の方、お蓮の前、連理の若松若竹に、比翼の鳳凰、唐草の繡したる直垂、萌黃裾濃の袴越し、橫幅廣く結ばれしは、此月帶の御祝義と、言のはもじさつゝましさ、袖かき合せ着座ある。次は秋田の城之介義景の御簾中お隆御前は、成人の子の親なれど、

與奪—其職に代るを云ふ、以賢代賢謂之與奪。（孔子家語）

精好の長絹—經緯糸緯生糸なる衣、長絹は袖括ある直垂

調度掛—弓矢を預る役即ち弓六張矢六手（弘安禮節）

帶の祝義—姙娠五ヶ月になればする祝

言のは—言葉に恥かしさをかく

牝鷄が云々―牝雞之晨惟家之索也(書經)

に柱なく、饂飩に汁なく、鱠に酢の無きが如しとあつて、忝くも御臺所、座禪をお出なさるゝまでは、最明寺殿御名代との御事にて、女中の御身に執權職の裝束を召され、御側には諸大名の奧方、何れも男の扮裝にて、非番當番隙もなく、政道執行ひ給ふ事、古の尼將軍に相も替らず候。左は申しながら、人の口には戶が立られず。牝鷄が時を爲るか。鎌倉殿は鷄母じやなどと嘲つて、鷲破大事といふ時に、勢が附くか附かぬか。物は試しに集て見よと、阪東八ヶ國の諸侍、悉く物の具して、急ぎ鎌倉へ御參あれ。仰付けらるゝ事ありと觸させられて候が、餘りに諸軍勢遲く候程に、何とて遲はるぞ、催促いたせとのお使を承つて候程に、急がばやと存じ候。やア〳〵何と申すぞ。それへ御參あるは、武藏相模の御人衆と申すか。先は速き事、急いで御參り候へ。彼へ見えたるは上總下總の御人衆じや。やれ〳〵端麗なる扮裝かな。遲いとの御事、御急ぎ候へ。いや是へ見えたるが常陸の御人衆か。道理で眞先な武者が、黃楊の棒を提げたは常陸坊といふ心か。一段と華麗な扮裝。何れを何れと申されぬ。此國々へは最早參るには及ばぬ。足を助つた。ヤア未だ上野下野の御人衆がお見えない。先づ上野へ參らふ。何といふ、是へお出あるが上野の御人衆じや。やれ〳〵嬉しや參るに及ばぬ。今までの扮裝に

ざうぞー に候ふぞの約

只頼めー只頼めしめぢが原のさしも草我世の中にあらん限りは（新古今集）

公方の縁ー將軍へ取次ぐ縁

御沙汰ー訴訟事

ともにー朧にかく

んず身の、エヽ口惜や、此儘ならば徒に、飢寒に逼り死なん命、なんぼう無念の事ざうぞ」と、姉妹瓦破と伏沈み、泣きくどくこそ道理なり。旅僧も至極の理に、衣の袖をぞ絞らるゝ。最「假しや浮世の浮沈み、斯ては果じ只頼め、我世の中にあらん限りは」の誓を願ひ給へや」と、言葉を殘し殘る夜も、明方近く隙白く、雪も小止めば「左らば」とて、暇申して出給ふ。姉妹「假の宿ながら、これも御縁と思召し、春お下りの折柄は、立寄り夫にも逢ひ給へ。命のあらば我々も」と、さらば／＼の御名殘。最「自然鎌倉にお上りあらばお尋あれ。甲斐々々しくはなけれども、公方の縁になり申さん。御沙汰捨させ給ふな」と、言捨て出船の、ともに名殘や 三重 惜むらん。既に今年も臘月下旬、最明寺殿の御臺所松下御寮の仰として、俄に稀有の御觸あり。晝夜の早打隙もなく、近國殘らず觸にけり。使者「なふ忙しや／＼。只今我們當國へ下る事餘の儀にあらず。さても最明寺殿、天下の政道を考へなされん爲、座禪觀法の方丈に閉籠り、近習外樣の侍は申すに及ばず、御臺の君へも御對面なく、禁足なされ御座候。此隙間を幸とや思はれけん、御舍弟式部冠者殿、佐野の源藤太を語ひ、謀反を起し、終に其身も亡び、源藤太は落失せ、漸々事治つて候。斯樣の騷の出來するも、最明寺殿館に御座なき故、國に執權なきは、人に魂なく家

御着到—將士の到着を記す文書

は、取て返し下向の時、一族の讒によつて、鎌倉へも入れられず、道より直に御勘氣とて、所領莊園召上られ、常世親子が累代の知行、一所も殘らず、叔父源藤太常景に押領せられ、生甲斐もなき此有様。親の敵も大概は、推量に紛ひなけれども、實否を糺し討ん爲、折々他國に身を扮し、跡ふり隱す雪の庵、雪は春にも消え殘る、夕べも知らぬ武士の、身の上憐み給へや」と、さめ〴〵とこそ泣居たる。最「實に〳〵それは聞及びたる物語り。何とて鎌倉に上り、其御沙汰は候はぬぞ」妻「さればとよ。夫婦も左は存ずれども、運の盡とて、最明寺殿法華堂の座禪に籠らせ給ひ、萬機をいろはせ給はねば、天照神の岩戸に籠り、月日の光かくれし如く、理非の分れん樣もなし。去ながら、斯く零落て候へども、取傳へたる梓弓、矢竹心は張詰て、あれ御覽候へ、是に武具一領、長刀一枝、又彼れに、馬をも一疋繫いで持て候。常世常々申せしは、只今にてもあれ、鎌倉に御大事ありと聞かば、此具足取て投懸け、銹たりとも長刀搔込み、痩たりとも彼の馬に、懸鞍置てふはと乘り、女房に口取らせ、一番に馳參じ、御着到に列つて、さて合戰始まらば、敵何萬騎ありとても、一番に割て入り、手に立つ軍兵寄合ひ打合ひ、分捕高名譽れを現し、一方を攻破り、君の御馬の眞先駈け、思ふ敵の大將と、無手と組んで刺違へ、死な

窓の梅云々—池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒（朗詠集）
見じといふ—山里の折かけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらん（菅家後集）
かゝり—蹴鞠の場の四隅に松、櫻、楓、柳を植う、その木になれとの意
燻—焼を云
御垣守—見るにかく、詞花集の歌をとる
面伏—不面目

我も身を捨て人の爲、鉢の木伐るともよしや惜からじ」と、雪打拂ひて見れば、「面白や如何にせん。先冬木より咲初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木より先立てば、梅を伐りや初むべき。見じといふ人こそ憂けれ山里の、折掛垣の梅をだに、情なしと惜みしに、今更薪に爲す可しと豫て思ひきや。櫻を見れば春毎に、花少し遲ければ、此木や佗ると心を盡し育てしに、今は我のみ佗て住む、家櫻伐燻て、火櫻になすぞ悲しき。さて松はさしもげに、枝を撓め葉を隙して、かゝりあれと植置し、其甲斐今は嵐吹く、松は元より烟にて、薪となるも道理や。伐燻て今ぞ御垣守、衞士の焚火はお爲なり。能く寄て煖り給へや」最「等閑ならぬ御親切、寒さを忘れ、肌は彌生如月の、暖氣にあたる梅櫻、花見る心地候ぞや。さてしも如何なる御行末。男主人の假名實名、字は何とか申し候ぞ。自然の時のお爲にも、何か苦しう候べき。聞まほしし」と仰せける。妻「アヽ人がましやな。古へを名乘るも遉面伏せ。去ながら、此上は何をか左のみ包むべき。是こそ佐野源左衞門常世が成る果。哀れと御覽候へや。さても過にし仁治二年、鎌倉は當最明寺殿の御兒君、經時公の御裁斷。夫の常世は將軍の御供して、在京の其跡の事。常世が父、我爲には舅、佐野兵衞正常、故もなく人知れず闇打に討れ給ひしを、聞とひとしく我夫

盧生―邯鄲の旅舍にて粟飯炊く間に五十年の榮花の夢を見たり（枕中記）

雪山―釋尊の仙人に仕へし山

嬉しや。せめては何も奇麗に」と、秋の折箸土器も、よしあり氣なる待遇なり。妻「恥かしやお僧樣。此粟と申す物、古へ我夫世にありし時は、歌に詠み、詩に作りたるとこそ承れ。今は此粟を以て、命をつぎ候ふぞや。實にや盧生が見し榮華の夢は五十年、其邯鄲の假枕、一睡の夢の覺しも、粟飯炊ぐ程ぞかし。哀れや實に我々も、打も寢て夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なう御覽候へ。住うかれたる故鄕の、松風寒き終夜、寢られねば夢も見ず。何思ひ出のあるべき」と、不覺に涙を浮べける。旅僧も哀れを催ふされ、墨の袂を絞らるゝ。「更行くまゝに夜寒さまさり冷え渡る。妻「何をか焚火に燒てあて參らせん。や、思ひ付いたり。我良人世にありし時、鉢の木を好き、數多の木を集め持れ候ひしを、斯樣の樣に衰へ、言れぬ貧の花好きと、皆人々に參らせて、今はやう〳〵三本殘つて、彼の雪を持たる梅櫻松、別て良人の祕藏なれども、今宵の待遇に、是を焚火」と立んとすれば、最「暫く〳〵。これは思ひも寄らぬ事。御志は有難けれども、重て世に出給ひての御慰み、無用になして給はれとよ」妻「いや迚も此身は埋木の、何時の盛に何時の花、何時の時をか待べきぞ。只徒なる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、是ぞ採菜汲水の、法の薪と思召せ。然も誠に雪降りて、仙人に仕へし雪山の薪、斯くこそあらめ。

駒留て云々—定家卿の歌（新古今集）

さもし—見苦し

旅にしあれば—家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる（萬葉集）

醍醐味—五味の内最上の美味（涅槃經）

世様の武運も開け、後世の爲にも悪い事なされた様にはよもあるまじ。泊てさへ進ぜませば、別に馳走は要まいと、妾や思ひます」といひければ、妻「ヲヽ優しや。能ふぞ氣が付た。これほどの大雪に、遠くはよもや」と、戸前に出で、「なふ〳〵旅人、お宿參らせよなう。餘りの大雪に申す事も聞えぬよの。悼しの有樣やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一ツ所に佇みて、袖なる雪を打拂ひ〳〵し給ふ景色、古歌の心に似るぞや。駒留て袖打拂ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮、斯樣に詠しは大和路や、三輪が崎なる佐野の渡り。是は東路の佐野の渡りの雪の暮に、迷ひ疲れ給はんより、見苦く候へども、一夜は泊り給へや。なふ旅の僧、旅のお僧」と招かれて、最「それは嬉しき志、假の浮世に借の宿、假初ながら値遇の緣。一樹の蔭の宿も、此世ならぬ契なり」二女「それは雨の木蔭、これは雪の軒古て、憂寝ながらの草枕。是へ」とこそは請じけれ。妻「いや是れ玉章、折角お宿申しても、供養致さん物もなし。お淋しからうが如何せうぞ」玉「姉樣幸ひ粟の飯。さもしけれどもお慰み」と、櫃取出せば、妻「アヽ、其樣な物何んのいの。折節悪ふ九獻もなし。お菓子はないか」と夕霜の、置ぬ棚をや探すらん。最「これ兩人、旅にしあれば椎の葉に盛るとかや。粟の飯とは日本一の醍醐味、御馳走に預りたし」と宣へば、妻「やれ〳〵それはお

雪は鵞毛―此句白氏文集にあり、鶴氅は鶴の毛衣

陸奥のけふ―陸奥の狹布の里にかく、幅狹き布の産地

曲もなや―情なし

持て、歸る山路の白妙に、妻「ア、降たる雪かな。甚麼世にある人の、嘸面白ふ見給ふらむ。それ雪は鵞毛に似て飛で散亂し、人は鶴氅を着て立て徘徊すと云り。されば今降る雪も、元見し雪に變らねど、我は鶴氅を着て立つて徘徊すべき、袂も朽て袖狹き細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな」最明寺殿、これこそは以前の女が姉ならめと、最「なふ〳〵主の御方にて候か。御覽の如く旅僧の身。お宿の御無心申せしかど、主人のお留守とありしゆゑ、待もうけたる御歸り。前後を忘ずる大雪、今宵ばかりの御惠み、頼み入る」とぞ仰ける。妻「實に〳〵易き御事ながら、見苦しき賤が伏屋、何とてお宿と申すべき」最「いや〳〵旅といひ、三界の家を出たる世捨人。草の筵も我爲の、玉の臺と有難し。是非に一夜」と宣へども、妻「あれ御覽ぜ。我々夫婦兄弟さへ、住居かねたる體なれば、留め申さん樣もなし。是より十八町彼方に山本の里と申して、好き泊りの候へば、暮ぬ間に一足も急がせ給へ」と言捨て、庵の内へぞ入にける。最「あら曲もなや。よしなき人を待つるよ。浮世の人の情なきも、我過り」と省て、歩み疲るゝばかりなり。妹の玉章涙ぐみ、「悼はしや御出家樣、最前お宿とありしかども、姉樣の心如何と存じ、戸外に立せ置ませし。斯く零落しも前世の因果、せめて出家に値遇せば、常

佐野の臺云々—菜の臺なり、「霞原や佐野のくゝたち肴にて旅行く人を強ひとゞめばや」（夫木集）

三五—瑠璃にかく

檀林—寺

江口の君—遊女妙、西行に宿貸さぬ時よめる、「世を厭ふ人としきけば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ」（新古今集）

木の端—僧を無用物に譬ふ（枕草紙）

盃の、佐野の臺肴にて、强止めんと詠置し、古歌を吟じて凌げども、雪の寒さの左のみやは、佐野の渡りに着給ふ。宿もがなと夕顔の、それにはあらぬ小家の檐、垂木疎らに傾きし、雪折竹の上簀戸や。主人は貧女と覺しきが、年も三五の玉箒、庇の雪を掻落し、落せば襟に袖口に、首筋元にひや〳〵〳〵。「アヽ冷たや」と手を吹くも、下司近ふして猶優し。最明寺殿籬に佇み、「申し〳〵お女郎、越後より下總の檀林へ通る所化の僧。今日の大雪、前へも後へも參り難し。簀子の端に只一夜、賴みまする」とありければ、女「ハア、お安い事ながら、主人の留守に、妾が泊まするも如何なり。側をお賴みなされませ。おいとし樣や」と愛嬌ある。最「ムヽウ主人のお留守とは、さては和女は御內衆か」女「否へ〳〵主人は妾が姉婿。此頃他國致されて、主人といふは姉樣」最「ヲヽ然れば和女も主人同然。江口の君が假の宿に心留むなと申したは、それは色ある優法師。炭の折れか、木の端かといふ樣な此坊主。色事の用心ならば、氣遣ひあるな」と宣へば、娘は莞爾と打笑ひ、「尤色といふものは眉目容色とはいひながら、何うやら時の機會では、鼻缺でも兎口でも、油斷がならぬ」と走込む。天下を裁斷く御身にも、此返答はゆきくれて、佇み給ふぞ殊勝なる。世の中は、何か常世が留守住居、妻は手足も土大根、蕪、青菜も摘

大井山—多いにかく

山姫—山神、木の葉をば衣、錦と見立てたり

深山—見るにかく

兎馬—玉兎白駒によせたり

頼みあり。幾重越しても信濃路は、未だ谷峯の大井山、人里遠く離れ坂、千隈の川に渡し呼ぶ、聲も嵐に埋れて、笠で招けば笠の端に、霰たばしる、氷柱から〳〵輕井澤。瞰上れば朝ぼらけ、淺間の嶽に立烟、其一筋を樣々に、霞に詠じ雲に見て、歌人は思ひを述るとかや。我は烟の起居にも、民の竈の賑ひを、天に祈りの千早振る、雪を袂に幣とれば、雪は五穀の精たりと、唐人も豐年を、祝ふ兆のあれ〳〵。地下も在所も賑々福々福島の、賤の妹脊の妹は籾磨る、兄は米搗く麥搗く、餅搗く〳〵望月の、里と詠むまでゐいとん〳〵。サアとん〳〵。サアとん〳〵と杵の音、碓氷峠に差懸り、上れば下る谷川の、凍らぬ程は聲立て、春も近しと岩間水。木々の木の葉を吹溜て、今日山姫の衣配り、物裁よしといろ〳〵の、錦裁なる板鼻の、宿を麓の坂本や。諏訪の湖水猶冴て、鴨や鷗や、鴛鴦の番も雁金も、下り居る程はをしなべて、皆白鷺と深山颪がさら〳〵〳〵、さつと吹てはばつと群立、拂ふ翼に、己がとり〴〵色品を、分て見せたる雪の空、殘んの月は浮めども、兎は馴睦む厚氷、驛路の馬ぞ波走る。馬にも鞭鐙、武藏も近き秩父山、八王子山の山樵も、外山の爪木樵つくし、雪を燻らす炭竈や。深谷の宿の深々と、冬籠せし一枝も、春待顏に初花の、咲きかけんとや一二の影、熊谷村に

は、家の紋付旗の手の、優々とかゝらせ給ひけり。若君三拜恭敬して、戴き納め歸るさの、道の用心。佐々木は馬上に先を打ば、後を押えて宇都宮、「君判官の再誕なれば、二階堂は辨慶」と、敵の捨たる槍長刀、鐵杷刺叉熊手を押取打擔げ、夜は白らく\と七つ道具、明け六ッ五ッ五代の北條家、四ッ世の中三ッ鱗、尾鰭を付てぞ語りける。

下之卷

最明寺殿道行

唄 行衛定めぬ道なればく\、來し方も何處ならまし。僧「これは一所不住の沙門にて候。我此程は信濃國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、先づ此度は鎌倉に上り座禪に籠り、春になり修行に出ばやと思ひ候」蝶の翅の白粉を、草に翻して梢には、露の霜毛を脱ぎかくる、雪は花より花多き、木曾の三坂の谷風は、吹けども袖に寒からで、名も妬しき風越の、峯の吹雪ぞ身には沁む。身は墨染の墨衣、宛ら雪の一筆鴉、尾羽打枯れし修行の旅。佛恩報謝の爲にもあらず、始終菩提の道にもあらず、浮世の民におほふかな。覆へど漏る竹の笠、似合ぬ身にも引締て、しやんと召したる御有樣、有難しとも

七道具—七つ時にかく

行衛定めぬ—以下謠曲鉢の木の文を大方とりたり

蝶の翅云々—有名の句、雪の詩に蝶遺粉翼輕、雛拾鵝霜毛散、末轉圓機活法

一筆鴉—時賴一人雪中に立てる形容

尾羽打枯—身窄らしき

浮世の民—慈圓大僧正のおふけなく云々の歌をとる

鬼一が云々—鬼一法眼が義經に三略虎の卷を授けしを云ふ

拔手—兩手を交互に水上に出して泳ぐ

肝の束—肝二つのつけもと

術無双の義經の、靈氣を感ぜし天女丸、忽地自然の妙を得て、浪も潮も事ともせず。巖の嶮岨にひらりと飛び、磯の松が枝躍越え、大勢に駈向ひ、天狗に授る飛行の術、鬼一が傳へし一卷の、太刀風騷ぐ虎の卷、獅子奮迅虎亂入、前を拂へば後にあり、地を薙れば霞に入り、陽炎稻妻水の月、宛がら飛鳥の三重如くなり。さしもの大勢一人に切立られ、冠者も數箇所の痛手を負ひ、命ばかりを遁れんと、水練は心得たり、海へどうと飛入て、伊豆の三崎を志し、拔手を切て泳ぎける。沖の浮洲に控えたる佐々木の廣綱、對ふ樣に駒乘入れ、「天道を守る廣綱は、天女丸の味方ぞや。尋常に腹を切給へ。左なくば佐々木が矢先にかけて、後世弔はん」といひければ、冠者大聲上て泣出し、「それは餘り慘い仕樣。甚麼に水を得たればとて、三里五里は泳がれず。今の間に鰐の餌食となる我身。少しの命を助てたも。佐々木殿、廣綱殿」と、立泳して拜みける。佐々木返答にも及ばず、中差取てからりと番ひ、兵と切て放つ矢に、肝の束ねを射通され、まつかい樣に跳返し、底の水屑と沈むを見て、殘る軍兵うら崩れして、皆散り〲に逃散りける。時に海上漣立て、月淸々たる波間より、紫金色の耳ある蛇、潮を卷き來る其音は、和琴の調の如くにて、磯部の松に攀上り〲、梢を啌へ尾を垂れて、鱗の衣をはら〱〱、拂ひ殘すや三枚

火刑云々―葛は命、黒白鼠は日月、龍は無常に譬へたり（佛説譬喩經）

安房―抱にかく

返さば討んとのゝめきしは、火刑に陥し罪人の取付く葛を、黒白の鼠嚙つて、悪龍舌を振るといふ、苦海の譬に異らず。遁れつべうは無りけり。然つし處に二階堂入道、旅裝束にて息を量りに驅付け、「暫く〳〵。事の仔細は存ぜねども、是は大事の御使、私の儀にあらず。干戈をとゞめ聞給へ。今度某大殿の仰を蒙り、奥州高館に下り、判官殿の御墓を祀淨め、同じく頼朝より御勘當の御教書を取歸り、仰に任せ只今燒捨申すからは、御勘當の罪消て、義經の靈魂妄執晴れ、若君の御身の上、武運の御祈禱たる可し」と、御教書の封を切り、下人に持せし淸火を把て打かくれば、火焰炎々と天に通じて、名將の俊逸精智、悦び給ふ其驗し、白銀の翼ある白鳩、虚空に舞下り、天女丸の懐に、納まり入るぞ不思議なる。判官の虚名晴れければ、讒者の猛勢力も弱り、梶原が亡魂は冥々として失てけり。常景心茫然と、夢か現か空蟬の、藻脱の殼の如くにて、手綱取る手も覺えなく、平首に抱き付く。馬も足を立てかねて、波に漾ひ、浮ぬ沈みぬ泡沫の、安房の浦路に流れ行く。冠者焦つて、「ヤア物々し。假へ生れぬ前生は、判官にもせよ、辨慶にもせよ、現在にては我甥なり。叔父に對つて逆心構へ、國を損ひ家を破る惡黨征伐、何の憚りあらん。船を浮べ熊手にかけ、搦め捕れ」と駈廻り、どつと蘆邊に下浸る。兵

荒磯―あらずにかく

子、波打際に下浸り、片唾を呑で控えしは、前代未聞と謂つ可し。斯る處に式部冠者時定、百騎許引率し、喚いて來り、「やア〱兩人、天女丸こそ宇都宮を語ひ、何處ともなく落失たり。方々が猛勢は如何なる故ぞ」と呼はつたり。常景馬上ながら、「さては只今此海を泳ぎ越す者候ゆゑ、兩人斯の如く追蒐候。疑ひもなく天女丸、追詰提げ參らん」と、駒の頭を立直せば、時「やれ待て〱。年に足らぬ小丁稚。彼奴們が分にて泳ぎ越す事思ひも寄らず。それは必定水練を入れて、其身は此磯山に隱れ居るに極つたり。我々山を狩出し、濱端へ追出さん。兩人海に下立て、射取れや射取れ」と下知すれば、「承はる」と常景、弓と矢取て打番ふ。佐々木も「あつ」と應へながら、過つ振にて冠者奴が眞中を、一筋と思ひ込ふてぞ控えける。時「時を移すな狩出せ」と、打物拔つれ松明振り、谷よ峰よと三重狩立る。朝平、「今は是迄なり。濱の手へ落給へ」と、暫し支ゆる其隙に、若君磯邊に走り着き、背後を見れば時定、片手矢はげて追蒐る。今は詮方荒磯に、沈まば沈めとざんぶと入り、渡るともなく行くともなく、陸地に立る如くにて、四五町沖に浮み出、足下を見れば不思議やな。蜑に與へし上の衣、浪の上に漂漾して、若君を救ひ立たるは、宛がら筏の如くなり。沖には常景鏃を磨き、寄せば射留ん其猛勢、陸には人數鋩揃へ、

三頭―馬の尻上の三骨、李緒相馬經には三封

韉―したぐら

篦撓型―篦を矯むるに用ふる型

草分―草暎の事、胸部(倭訓栞)

鞦―胸より鞍に繫る組緒、叶邊

宇治川先陣の作りかへ

切拂ひ、三頭にどうと乘下り、手綱繰上げ聲をかけ、馬に力を添へたりけり。冬も半ばの浦吹く風、磯打つ波を卷上て、水や空〳〵搔曇り、天も凍りて霰散り、雲の脚さへ急潮に、底の岩稜巍々として、海上遙にくわい〳〵たり。これは一騎當千の高綱が嫡々なり。彼は文武二道の武者、梶原が魂魄なり。孰れに勝劣あらばこそ。廣綱進めば常景續き、常景進めば廣綱續き、轡を引揃へ、押竝べて渡すとすれば、韉太腹どう〳〵〳〵、波鞍壺に打越て、篦撓型に突流され、半月に乘處もあり。馬の草分鞦づくし、さら〳〵さら〳〵、さつと乘分け乘割て、一文字に行く所もあり。高き波には一鞭くれて、ゑいゑい聲に跳越え、低き波にはしつとと當て、韁を繰て乘下し、渦く浪の右巴、左巴にくる〳〵〳〵、くるり〳〵の輪乘に潮を卷解し、卷戾し、卷崩し、蹄に蹴立る潮烟、隔ての霧と立塞つて、山さへ見えぬ海の面。星を目當の雙鐙、息も續せず蹈もためず、負じ劣らじ我先にと、喚き叫んで渡したり。常景馬や劣りけん、馬上にや疎かりけん、三反許乘り遲れし、淺處に駒を駈寄て、漂ふ浮木に手をかけて、一息ほつと吻たれば、佐々木は沖の流れ淵に、駒を控へて鞍蓋に突立上り、「惡ふ候常景殿、伯父盛綱が藤戶の一流、海をば斯うぞ渡すもの。お先へ參る御免あれ」と、韁搔繰り乘出す。陸には兩家の郞黨組

て心を寄せしゆゑ、きかぬ顔にて控へしが、常景が打立つよし、共に防ぐ風情にて、「しやつ妨げん」と馬鎧華麗にこそ扮装けれ。常景其夜の装束は、木蘭地の直垂、白銀の摺付小札、白糸にて菱縫したる斑白縅の鎧を着、玄ほろの矢の二十四さいたる箙搔負、本重籐の弓持て、雨夜と云つしさび月毛の、聞ゆる名馬に乗たりけり。佐々木が扮装物の具は、紅裾濃に所々四目結摺たる直垂、卯の花を黄に返して袖標付たる鎧、筋切斑に塗篦の矢、吹寄籐の弓持て、長月といふ黒栗毛の馬にぞ乗たりける。二人互ひに劣らじと、引かけ〳〵打たりしが、常景は佐々木に一反ばかり進んで、海へざつとぞ打入れける。廣綱先を越されじと、聲をかけて、「常景殿、冬海は潮急し。腹帯が延びて見えさうぞ。深海に乗て鞍返さん。締給はぬか」と呼はれば、常景さもとや思ひけん、手綱を鞍の歪に捨て、左右の鐙を踏隙し、弓弦を啣へ、腹帯を解て、引締め〳〵締る間に、廣綱ずつと乗抜て、「佐々木が家の骨法、御免あれ」といふまゝに、ざんぶと打入り、半町ばかり先に進んで泳がせける。常「ねつたい佐々木殿、高名せうとて不覚ばし仕給ふな。此頃蜑のかづきも絶え、和布目繁つて見え候。馬の足纏はせて、過あらん笑止さよ。心得られよ」と誑れば、佐「オウ親にて候高綱が傳へし習ひあんなる」と、太刀を抜て水底を切拂ひ

木蘭地—黄橡也、黄赤に黒を帯ぶ（平義器談）
菱縫—鎧の裾板
玄ほろ—鳥の両翼の下に連りたる黒羽
本重籐—握の上え二所籐にするもの（貞丈雑記）
鴾月毛—月毛の黒みがゝりたるもの
紅裾濃—上をぼかして裾に至る程紅を濃くせる
卯の花云々—白き卯の花の外皆藍に染めたる革を又一面に黄に染めたるもの（平義器談）
塗篦—矢竹を漆にて塗りたるもの（同書）
吹寄籐—籐を二所づつ押寄せて巻く（貞丈雑記）
ねつたい—嫉ましい
あんなる—あるなる

ひやう紋―紋の内を色々に彩りたるもの（安齋隨筆）

叔母君―辨才天をさす

九萬九千―龍の鱗の數

白波―知らずにかく

に打笑て、「左こそは見付參らせたり。誠に賤しき蜑の子の、お情とは憚りあり。鱗形の御紋付の御肌着一重下されば、世の思ひ出に肌に着け、千里萬里の荒海なりとも、浪を潛り水を分くるも蜑の業。奪返して奉らん」と申せば、若君宇都宮、「それ安い事。是なりとも」と、ひやう紋の唐衣に、唐縫したる柳裏、ひらりと脱で給びければ、蜑は戴き打被き、岩頭に駈上り、「自は小袋坂、金龍水の池の邊に年經て栖むものなるが、江の島の叔母君より、賜つたる肌の產着を惡人に奪はれ、五體の力盡果しに、今北條家の活鱗、九萬九千の飾となつて、神變神通自在を得、刹那が間に彼の旗を奪取て參らせん」と、逆渦く波に飛入て、分行く潮八重百重、百の媚ある顏に、叉尾は二十尋の金の鱗、月に映じて泳ぎ行く。辨才天の眷屬の、旗を守りの神體と、思ひ白波走りしは、帆かけし船の三重如くなり。波の音に眼を覺し、「番所騷げば惡かりなん」と、朝平若君身を潛め、磯山蔭に忍ばるゝ。源藤太常景木戸を開かせ突と出、「風もなきに浪の音、千鳥鷗の亂るゝは、天女丸が方より水練の忍びを入れたるに疑ひなし。驚破々々沖に物こそ見ゆれ。仙術魔法の者なりとも、我馬上に及ばんや。元來武勇第一の梶原が生靈入替りたる其驗。弓箭の本意此秋」と、軈て物の具堅めける。此處に佐々木廣綱は、相番ながら、若君に豫

御座んなれ—こそあるなれ
三段—一段は二丈六尺
もゝよ—百夜と股とかく

潮、双潮、雌雄潮、投潮、涌潮なんどと申し、潮合を見て、かづきの蜑の龍宮城へ入るなれば、適はぬ事とも申し難し。あれ〳〵月影の二ッに破れて一筋に、尾花の靡く如くなる、浪の別れの末こそは、蜑の通ひの潮路なれ」と、指差してぞ教へける。若君も朝平も、「今は案内御座んなれ」と、裾裹げてざんぶ〳〵と入給ふ。女「なふ〳〵設へ潮路覺えても、蜑ならぬ身で危險い事。怪我遊ばすな、先後へ」と、いへども耳に聽入れず。三段ばかりは足も立つ。次第々々に波は高し底深し。有繫の朝平力なく、「先々後へ」と御手を取り、元の磯邊に打上り、朝「お腰の物に水入らぬか。やれまづ、お足を拭ふて進ぜてくれ。賴む〳〵」と捲手に、袴を絞るばかりなり。女「それ〳〵人のいふ事聞分けなふ、情の剛いはお身の損。若衆樣のお足拭ふにも手拭はなし。妾が鹽燒衣御慮外」と、上着下着揉くさにして、足の甲から足頸まで、「ム、〳〵柔なお膚やな。此處はお膝、此處は太股、内股の、此もゝよなら妾や小町。お前は四位の少將で、車の榻に」と抱き付。若君飛退き、「慮外者奴」と、柄に手をかけ給ひしを、朝平「暫し」と留め參らせ、「これ女、彼方は鎌倉殿の若君。今度の騷ぎ隱れなければ知つらん。汝が力に海を超え、御旗を奪ひ參らせなば、財寶の願は言ふに及ばず、例へ一夜のお情でも相違あらじ」と申さるゝ。蜑嬉しげ

つがもない—わけもない

只は通さぬ—何か苦情を申込む

濱へ往—惣嫁の栖所なる故

八、「こりや女め、必定此番所へ呼れし傾城じやな。我々此處にある體を、番の者に知らする振と見えた。是から直におのれが宿へ歸ればよし。番所へなど入ならば、海へ切てつつぱめん。サア如何じや」と威しける。女「アヽ、つがもない。何の其樣妾們であろ。此浦のかづきの海士。此頃御法度嚴しう、若和布一本、海松一株採る事ならねば、朝夕の迷惑さ。夜は番衆の隙間もと密と見に來たばつかり。眞に男に手を捉られた、一期の始めにあだ胴慾な。痕がひり〳〵ひり〳〵する。彼の若衆樣、柔はりと締直して貰ひたい」と、浦の蜑さへ當代は、只は通さぬならはしなり。朝平是は屈竟、彼奴を賺して海の淺瀬を問はんと思ひ、朝「ヲヽ、許せ〳〵、知らなんだ。其方に問ひ度い事がある。返禮には錢遣ふ。隙は取るまい。サア彼の濱へ鳥渡來い」と手を捉れば、女「エイ錢取て濱へ往く樣なものじや御座んせん」とてぴんとする。若君見兼て、天「これ〳〵蜑人、我々は念願あつて對岸の三崎へ忍ぶもの。此本望達すれば、蜑のかづきも獵船も、前の通に自由なり。此灘を越す樣あらば、如何ぞ指南はなるまいか。わりない事よ」と宣へば、推量やしたりけん、女「何がさてお尋ねといひ世上の爲、包ん樣はなけれども、昔より此入海、徒歩渡りは沙汰にも聞かず。去ながら如何なる千尋の大海にも、潮頭、潮別れ、上り潮、落潮、片

みるめー手々拱きて見るに海松をかく

利潤ー利益

親に離れ云々ー若年の某早く親に離れし上は相談するものあるまじと人の嘲

き、渡海の船さへ停止あれば、漁村の賤も松魚釣り、鯛釣りかねて網の手を、餘所にみるめをかづきする、海士も逆手を打休み、波の遊魚も飛鳥も、通ふ方なき要害なり。折しも夜更け浪靜に、番所の篝火濕りゆけば、天女丸は漸々に、圍を免れ忍び出、宇都宮只一人語ひ、湊に紛れ着給ひ、天「サア時分は好きぞ朝平、兩番所も靜まつて海上は退潮なり。命限りに渡り越し、向ふへさへ着たらば、番の奴等切散し、旗を奪ひ返すべし。假し仕損じて死するとも、取返さでは生甲斐なし。死ぬるに極めていざ來い」と、飛入らんと仕給ふを、宇都宮抱留め、「如何に退潮なればとて、思召しても御覽ぜよ。三里に餘りし海の面、徒歩わたり人間業に叶ふ可き樣候はず。潮に溺れし御死骸を、雜人們に引摸され、恥辱といひ、讒者に利潤付といひ、旁々粗忽の御振舞。御思案の要る處」と、制すれば齒噛を爲し、天「エヽ口惜し。是式の事を治めかね、父最明寺殿へ言上し、座禪の妨げ、御大願を破らんは、後代までの譏の種。親に離れし我ならば、冥途へ問ひにやらるゝかと、嘲は歷然たり。翼もがな鰭もがな」と、平砂に兩足蹈込んで、拳を握りはら〳〵と、無念涙は堰敢ず。友まどはせる小夜千鳥、驚く方の一足や、年の比十八九、初夜の月さへ早西東、溕漂ふ振にて人々をちらりと見付、足早に逃んとす。宇都宮走寄、無手と捕

加番―本職の外の兼務

鰭を云々―色をつけたるに同じ

時「ヲヽ〱神妙の注進、大慶々々。傍からさへ齒痒きに、我に油斷ある物か。ぬからぬ證據を見せ申さん」と、首に懸たる錦の袋を取出し、是ぞ辨才天先祖に授け賜はりし、三鱗の家の旗。先此主に成からは北條家の大將なり。御分は急ぎ此御旗を、伊豆の三崎へ守り奉り、宇賀の社に籠置、湊の船場に關を据え、渡海の船をとゞむ可し。追付跡より加番として、佐々木十藏廣綱を遣さん。我鎌倉を持堅め、安藤宇都宮に閉門させさせ、天女丸を押籠め置かん。兄貴の坊主が咎めなば、靜謐の世を騷する謀反人と訴ふ可し。我願ひ叶ひなば、屋敷などは輕い事。一箇國は極つて、其外の兼國望次第。辨才天も照覽あれ。噓言なし」とぞ語りける。常景思ふ圖に讒言し、「これ殿、とてもの事に其兄貴の坊ん樣ぐるめに仕て遣ふとは思さぬか」時「ヤレそれを高ふは言ぬ事。心にばかり持て居よ。向後御邊は一方の大將と賴むからは、威勢をつくる褒美として、一家となつて北條の家の定紋讓るぞ」と、鰭をつけたる鱗形。北條殿や庖丁殿に、かゝらん末こそ 三重 危けれ。去程に式部冠者時定は天女丸時宗を無體に押え、謀反人と號し、松が岡の彌勒堂に捕て押籠め、重代の赤旗を伊豆の三崎に隱し置き、山手には、二重三重の柵をふり、海手に數箇所の物見の番。龍禪が崎の船場には、佐野源藤太常景、佐々木十藏廣綱役所を構へ、干潟遠く逆茂木引

阿呆拂―武士の兩刀を奪ひて追放する事

鼻を明く―あてを外す

まつかい樣―出鱈目

鐙の端にて蹴殺し退んず面色なり。常景土に蹲踞き、「御咎め至極仕る。去ながら、些か慮外に候はず。直に注進申上る儀候ゆゑ、人目を忍び右の仕合。眞平御免蒙る可し。さて御注進の趣は、先づ某が兄佐野の兵衞正常、先年人知れず闇討に討れ、其子源左衞門常世は、阿呆拂に仰付られ、兄正常が遺蹟佐野の庄、此常景に賜て奉公の忠を勵み候。然るに紅が谷常世が屋敷、某望み申せども、御用の場所とて吝惜あり。此度故もなき者にさへ、彌が上に屋敷地を賜り、多年懇望の我們には、換地の御沙汰にも及ばず。常世が屋敷を若君のお花畠に成し、拙者は鼻を明くばかり。國を有つものは、一歩の地も功ある武士に與へ、弓馬の用に立てこそ。何ぞや、若君のまだ乳哺ふ飯食ふを、義經の再誕と、はとのかいの僧正に誑され、鎌倉の御家督とて、大分の地を花畠に費し、若もの時に、草木の花が鎗一本の役には立ず。當家に於て、天下の執權には、誰あらふ冠者公と諸人擧つて申す所、殿の嗣せ給はんに、誰がぐつとも申すべき。さればこそ天女丸、殿をけぶたく思はれ、最明寺殿座禪の内に、攻亡さん催しにて、則ち物讀の師匠宇都宮朝平、安藤左衞門光成以下を語らひ、合戰の用意事急に候。旁々御油斷ある可らず」と、まつかいさまにぞ譏しける。冠者は彼に物が付て言することは夢にも知らず、馬より飛んで下り、

をかけ給ひる。當「ヤア最明寺殿より外大將軍はなきものを、御身も我も同然。鮟鱇とも河豚黨とも、いふて見せん」と詈合ふ。天「チヽ鮟鱇武者の鋩請て見よ」と、拔放し給へば、土肥佐々木なんどいふ一騎當千の嫡子ども、一度に小太刀をばらりと拔き、眞中に押取籠め、「我討取らん」と犇く處を、朝平縋つて、「アヽ〱勿體なし。大軍の前の御愼み、最明寺殿思召も穩便ならず」と、御佩刀を收めさせ、朝「罷立て常景。鎭り候へ少人達」と、館に御供ありければ、光成の使者、常景が小腕捉て引出す。逆櫓の遺恨留つて、今魂に入替り、身は空船の梶原が、心となるこそ二重淺ましき。寶治二年十一月、霙まじりの玉霰、雪の下の廣小路、一ぱいにふる黑羽織、奴が髭に氷柱ゐて、奧齒に嚙る唐辛、赤熊の馬標、御馬北風に嘶かせ、討て出たる大名こそ、最明寺殿の御舍弟式部冠者時定公と、勢猛なる供前を、いかつらしき頬冠、若黨二三輩引具し、押割て通らんとす。徒士の者共引捕へ、「こりや盲目奴、冠者殿を見知らぬか」と、頬冠引攫れば、佐野源藤太常景なり。馬上より聲をかけ、時「ヤア常景か。時定直に訊ぬべし。突と是へ」と呼付け、はつたと睨み、「御分は身代不相應に、輕々敷忍ぶ體は訝し。兄最明寺座禪に籠りおはする内は、此冠者が執權なるに、供前張るは緩怠者。申し分に依て、屹度過怠に吩咐ん」と、返答惡くば

此時宗が云々｜先陣後陣も時宗居らずばせよ我あるうちはならぬと也、爰は逆櫓の作りかへ

常景が賜つて、眞先懸ふずるにて候。仰付られ候へ」とこそ望みけれ。若君聞も敢ず、「いやさ、先陣も後陣も此時宗がなくばこそ。先陣は某よ」常「いや〱殿は大將軍。是非先陣は常景に賜はれかし」と詞を返せば、天「否とよ。大將軍とは父最明寺殿より外になし。我も汝們同然よ。高名は仕勝ぞよ。親にも子にも遠慮なし。急げや急げ。速ければ待事あつて靜なり、遲くて走る道は物憂しと、名將の讀しぞかし」と、口吟み出給へば、源藤太御袖を控え「然らば今度の御舟には、阿蘭櫓を立申すべし」天「ム、ウ阿蘭櫓とは何ぞ」常「さん候。馬は乘人の心に任せ、退くも駈るも自由なれども、すはや退んと思ふ時、船押廻すに儘ならず、不覺の負を取るもの候。艫邊に櫓を立違へ、傍梶を入れ、何方へも廻し易い樣に」と言せも敢ず、天「エ、門出惡し忌々し。一足も退じと思ふさへ、退は軍の慣ひなり。豫て左樣の逃用意、臆病神の末社殿」と笑ひ給へば、同學の十四、十五の輩まで、手を叩いてぞ笑ひける。藤太大きに赤面し、常「惣じて武士は進退を辨へ、命を全ふして敵を滅すを以て、良き弓取とは名付たり。和殿の樣に口廣い癖に、尾の細い鮟鱇武者とて何の役に立ぬもの。近頃笑止々々」といへば、若君腹に据兼ね、「汝は只た今まで梶原を誹りながら、梶原同然の惡口、我に對つて推參千萬。サァ今一言いふて見よ」と、太刀に手

勸請―神靈を旗に移して祀る

かとこそは噛付けれ。されども人目に見えざれば、其身はさしも猶知らず。心も元の心ながら、氣は逆上し、酩酊と酒に醉るが如くなり。斯る處に、安藤左衞門光成方より、「急々の御注進、使者を走らせ候」と、大息吐て伺候する。若君驚き、「其使者是へ、急々の注進とは何事やらん」と宣へば、使「さん候。御叔父式部冠者時定殿、御家の重寶、三鱗の御旗を奪ひ取り、本國伊豆の三崎へ押渡り給ひ候。勢ひ全く逆心の御企てと見え候。大殿坐禪に御籠の内と申し、延引にては御大事たる可し。佶と御征伐然る可しとの注進なり」とぞ申しける。天女丸横手を拍て、「這は什麼。其旗といつぱ、先祖時政に、江の島の辨才天、直に與へ賜つたる三枚の鱗を旗の紋と勸請し、守とも寶とも、是で立たる北條家。叔父は一家と言ながら、庶子へ渡さん樣はなし。しや何事かあらん。伊豆の三崎は扨置ぬ。鬼界高麗契丹國、雲の極海の端、陸ならば駒の蹄の立つ限り、海ならば櫓櫂の立んず處まで、攻寄せ〳〵。取返さで置べきか。天女丸時宗が鎧初の初陣に、叔父の首引提ずんば、鎌倉へは歸るまじ。山路を廻つて人馬の足を疲らすな。由井の濱より兵船出し、只一時に揉潰せ。馬に鞍置け。物の具せよ」と、勇み進みし御有樣、實に義經の再誕と、札を打ざるばかりなり。梶原が死靈に侵されし源藤太進出、「此度の先陣は、此

顋骨―ロ

靭―箙の梅といふより梅枝を洒落れて云へり

賞の餘慶によつて、此梶原屋敷を今度某拜領し、土砂あらため候へども、彼に候紅梅の早咲こそ、景時が二度の駈の箙の梅の名殘とて、植置たると承る。末の世の記念に引殘し候が、折々雨の夕暮などは、梶原が一念の火、梅の梢に來る由、下女下郎などが申し觸し候へども、某は終に見ず。爭で左樣の事あらん」と、語り給へば、人々も「あつ」と感じておはします。佐野源藤太常景、次の間より罷出、「好き時分に御供いたし、若君のお庇によつて、御講釋承り、我們の仕合一代の德。さて〳〵梶原奴は武士たる者の風上にも忌みたる者。其時節常景生れ合せあるならば、讒言吐出す舌引拔き、顋骨引裂き、踏蹂躙て退んずもの。エ、四十年遲ふ生れたなア。彼の紅梅が梶原梅か。何の彼奴が箙の梅、二度の駈も半分噓。輕薄らしい花の色、憎い梶原奴がしやつ頰踏でくれんず」と、廣庭に飛で下り、股立摑んで古木の梅の、枝も折れよ、根も碎けよ、どう〳〵〳〵どうと踏付、拳を擧て撲や靭のほつきと折れて、落花頗る狼藉たる。常「ヲ、左もさうず景時」と、雜言吐て立歸れば、挨拶なくも人々は、苦笑ひにぞなりにける。時しも冴え行く時雨の雲の、雪を催す空凄まじく、山風落葉を吹立て〳〵吹上れば、紅葉天に翩飜して、火焰の渦く如くなるに、梶原が骸骨虛空に閃き、舞下り舞上り、源藤太が髻にしつ

星月の云々—星月夜は鎌倉の枕詞なる故續けたり

射垜—土を積上げて的をかくる所

平題箭—弓術を學ぶ時に用ふる鏃、形小く鉾平なり、かけては其鏃の所迄なり

押付—鎧の後方逆板の上

をちこち—遠近、落にかく

十餘箇條、連判の訴狀を認め、因幡の守廣元を以て頼家公へ奉り、既に誅せらるべきに極つしかば、猛威を振ふ梶原が、日來の辯舌辯口も、矢筈の紋の矢も楯も、大勢に堪らばこそ。星月の編笠や、鎌倉山を夜脫にして、相模國一の宮へ、ほう〳〵逃て隱れしが、逸りに逸る我武者共、餘さじものと在々所々、手酷く嚴しく押探され、鵜川の小鮎鷹に雉子、猫に逐れし野の鼠、あな淺ましや梶原父子、郎等下人も散り〴〵に、馬に乘ても舍人なく、鞍は置ども鐙はさゝず、都の方へと志し、駿河の國を駈通る。代々我等が本國なり。父彌三郎朝綱、一族集め小的射て、勝負を樂む射垜の前、御免も請ず乘打す。朝綱弓と矢取て打番ひ、大音上て、梶原殿と見かけたり。徒立にて通るにも、的場には故實の添ふ。禮儀もなしに乘打は、斯いふを宇都宮と知らずになせる慮外か。假し知らば知るにもせよ。朋輩の情に、人と人は許もあり。弓矢に對つて乘打は、正八幡の神罰の矢、請て見よと、白木の弓、大中黑の的矢、平題箭かけて引絞り、駈行く駒に拳を付、絃音高く切つて放せば過たず、後に乘たる嫡子源太景季が押付を、胸板へぐつと射拔て餘る矢が、親平三景時が耳の根を肩先迄、咽笛かけて射通され、親子一所に馬上より、左手右手へをちこちの、人の欝憤世の遺恨、此時にこそ晴てけれ。父朝綱が其時の御恩

會稽―勾踐會稽山にて吳王を討ち前の恥を雪ぎしより云ふ

尼將軍―平政子

子を擒り京鎌倉を渡し、源氏會稽の恥辱を雪ぐと雖、梶原が讒言に依て、空しく莫大の軍功を默止され、親しき兄弟を、僅の侍一人に思召替らるゝこと、只是不運と存ず。將亦、前世の業因を感ずるに似り。仰願はくは、梶原父子が首を刎ね、義經に手向られば、今生後生の恨みある可らず。萬端筆紙に盡し難し。恐々敬て白す。文治五年閏四月二十八日、謹上鎌倉右大將殿、源義經」と、讀も終らず若君、涙に咽び給へば、同學御供の少年まで、皆々袖をぞ濡しける。朝平涙を押え、「誠に義經の御遺物ばかりにあらず、末世の敎へになるべきもの。其仔細といつぱ、賴朝程の御大將、梶原が奸曲に誑され、實否を糺さず、御舍弟を亡し給ふ事、火の中にある寶に愛て、片手を燒くに異ならず。されば、大將としては先づ能く人を知るべき敎へならずや。また梶原は、君の寵に誇つて己を忘れ、一旦の利に眼眩み人を害すと思へども、却つて我身を害する事、天に向つて唾すと、四十二章經にて說れたり。さてこそ、賴朝公御逝去の後、安達の景盛を賴家公へ讒言し、結城の朝光を尼將軍へ讒訴申しける程に、賴朝御存命の間こそ、諸人敬ひ恐れけめ、年來恨む梶原父子、何に心を措くべきと、和田小山畠山、三浦義村千葉之介、矢田小笠原藤九郎盛長、以下の御家人六十六人、鶴が岡に參會し、景時が罪五

服仕―従ふ事

鯨鯢の腮―鯨の口、危険の場所に臨んで敵を斬る義

味はふを、弓矢取身の學問とは申すなれ。大江僧正廣辨が三世明鑑を考へ、九郎判官義經の生變りと申されしに、努々疑ひ候はず。末頼母しき御器量、彌々文武の御嗜みこそ肝要なれ。それに就て、先づ物讀みの始めには、實語經童子經、和漢朗詠菅家往來、判官殿の腰越狀、御家の式目、是等は諸人存じの書。爰に未だ流布せざる祕傳の一巻、是を御傳授致さん」と、簞笥の底より取出し、「是は君の前生判官殿、高館にて御生害の時、一期の遺恨を書著し、口に銜んで失せ給ひし銜狀と申す物。文法柔に候へども、無點の物に候へば、一遍教へ奉らん」と、押開けば天女丸、「さては我生れぬ先の筆蹟か」と、見ぬ世の昔懷しく、涙を聲に浮めながら、同音にこそ讀れけれ。

義經銜狀

「抑義經末期に謹んで曰す。苟くも淸和の臺を出、多田の滿仲の家を嗣しより以來、繼父淸盛に隔てられ、邊土遠國を住家とし、土民百姓等に服仕せらる。然といへども、當家の御運を開き勅宣の其一ッに選ばれ、或時は、野に臥し山に臥し、又或時は、漫々たる海上に風波の難を凌ぎ、敵徒の首を斬て鯨鯢の腮に曝し、三年三月に攻靡け、大臣殿父

さすが―小刀
百八云々―菩提樹の實にて作れる數珠
憲清―西行
歪を云々―邪を矯正する
月―杖をつきにかく
錦繡段―詩集、二卷あり、文明年中五山の僧天隱の撰
司馬法―兵書、齊威王太夫をして作らしむ三卷あり

たり。來年彌生の末つ方立歸るまでは、我此處に在ると沙汰し給へや」と、内より扉押排く。花の袂を旅衣、笠より外は宿りなく、苔を敷寢の平包み、金軸の普門品、紫檀のさすが矢立の筆、百八の菩提樹ならで、御身に添ふる物はなし。憲清法師が世を遁れし、修行の肩に懸たるは、優しき縞の肩袋。是は浮世の人心、歪みを撓て竹の杖、月諸共に我も亦、世上の闇を照さんと、慈悲の眼の衣手や、民の草葉に窶れ給ふ、御有樣ぞ（三重）有難き。大學の道、明德を炳かに生民を享し天女丸、御同學には佐々木が嫡子花市、土肥の乙鶴、金子の十丸、皆物讀のお伽にて、朝は武藝定つて、晝の時計を宇都宮の邸に通ひ給ひける。今日の御供は、上野國の住人佐野源藤太常景、「若君の御出なり」と案內す。朝平立出、學問所へ伴ひ參らすれば、若君を始め、何れも行儀繕ひて、面々書物控えらる。朝平、若君を熟々と打目戍り、「さて〳〵御器用千萬。誠の聰明叡智とは若君の御事。それに依て御伽の子供衆まで、我劣らじと覺え強く、小學入りより日數もなきに、四書古文三體詩、錦繡段。此上に遊ばされんは、五經文選其外聖賢の經書、詩文の書、限りなく候得共、それまでに及ばず。弓馬の家には孫子呉子三略六韜、司馬法など申して、合戰勝負の理非を述たる七書を、能々御得心あり、兼ては史記を御覽あり、古人の心を

大祖皇帝―宋の大祖趙匡胤

上宮太子―聖德太子

夢殿―大和法隆寺の側にあり

貞永式目―泰時の撰にて北條氏の天下に行へる式目

て方々に申し渡す仔細あり、近ふ寄て聞き候へ。そも我先祖北條四郎時政より、義時、泰時打續き、六十餘州の執權、今此御影の照覽にかけ、政道私なしといへども、遠國波濤の末々、民の盛衰國守の邪正は、見るに難く聞く事遠し。唐土の大祖皇帝は、韓王堂に一人御幸の例もあり。頭陀修行の身ともなり、諸國の安危を見まほしく思へども、斯と世上に披露せば、諸人僞り阿りて、誠の善惡知り難し。されば此方丈の牀をしつらふ事、餘の儀にあらず。上宮太子の身は夢殿にありながら、魂は震旦の天台山に逍遙ある。我も年月學びたる、座禪三昧の力によつて、此方丈に閉籠り、觀念を凝し、身は鎌倉の法華堂、一心は秋津洲の浦々里々巡見すべし。其間は式部冠者、天女丸と心を合せ、貞永の式目を守つて、政道怠る可らず。僧正の外此處案内禁制。座禪終りて僧正の便次第に迎ひに來れ。追付目出度く對面せん」と、禪場の戸を引立て、入るさの月の影暗く、寂寞として音もなし。若君を始め諸大名、「國家の爲とある上は、兎角う申し上難し。去ながら、給仕へ申す者もなし。萬事貴僧を頼み存じ候」と、始終の約束こまぐヽと、皆々本所に歸らるゝ。豫て僧正唯一人に示し置き給ふゆゑ、旅の物の具取賄ひ、僧「何も歸宅候て、はや夕霧の暗紛れ、御旅立あれかし」と、音信給へば、最「あら嬉しや、數年の望み達し

帥―乾より七つ目の卦

三世命鑑―過去未來現在をよく見とはす

の中不和にして、恨みあるとの御示し。是に付て、愚僧常々考へ置しに、疑ひなく天女丸殿こそは、九郎判官義經の再誕候。其謂れは、判官殿は丁丑の生れ、本卦師の卦に當つて、軍術に妙を得、中秋半ばの誕生。敵を制するけい官、向歯反て猿眼、鬢の髪縮みしとや。若君の本卦支干、御誕生の年月刻限、面體骨柄、寸分相違なき上に、只今御影の御怒、彼是以て考ふれば、若君の前生は義經に極つたり。猶其驗し末々御覽合すべし」と、三世命鑑、理を照し鏡にかけて説給へば、思ひ合せて人々は、「あつ」と手を打ち給ひけり。僧正重ねて、「承れば奥州田夫者、鎌倉殿の御勘氣よ、謀反人よなんどとて、義經の御墓を、馬の飼場と踏荒し、剰へ頼朝公より錦戸に賜りし判官誅伐の御教書、國中に口吟み、御骸を恥かしむ。早く御使者を遣され、彼の御判を燒捨、御墓を清め尊みなば、御勘當のしるしも失せ、判官殿の魂魄に、天然自在の御威光、今若君の御身に現れ、智謀計略軍術劒術、輕業早業武勇の達者となり給はん。其時こそ義經の生れがはりと著るく、愚僧が繰たる命鑑の易、御疑ひも晴れ申さん」と、見通す如く述らるれば、最「實に〳〵左樣の例多し。然らば二階堂入道は奥州に下向し、義經の御墓を祀り、同じく誅伐の御教書も召返して燒捨べし」と、仰を受てぞ退出す。斯て最明寺殿、御影の前に進み出、「さ

前司—前の國司

政道連署—政道に携はる連中

豆を煮て云々—兄弟相爭ふ事、煮レ豆燒二豆萁一豆在二釜中一泣云々（世說）

烟絶えざる—爭たえぬ事

までも、色を上げたる紅が谷。佐野の源左衛門常世が屋敷は、花好き者の跡ぞとて、若君の御花畠、御休息所に賜てけり。筋違橋の秩父屋敷、赤橋左衛門所望の所。蟇が谷の土佐坊屋敷は金田の賴繼。松葉が谷の佐竹屋敷は、城之介安盛。藤が谷の大友屋敷、豫て足利望みに應ず。天神山の荏柄屋敷は、仁科前司。小林鄕の朝比奈屋敷、伊井島の景正屋敷は三浦光村、泰村に賜つたり。袖の浦の志津が屋敷、月影の阿佛屋敷、稻村崎の大介屋敷は、平宣時、秀時、安藤左衛門光成。其外祖流二男まで、分に應じ功により、住宅の地を安堵ある。「實に廉直の法制や」と、各從ひ靡きける。最明寺殿悅び給ひ、「甚麼に天女丸、來春よりは汝をも政道連署に加ふ可し。御影に御禮仕れ」畏つて引繕ひ、寶前に坐し對へば、慄と身の毛も戰慄て、忍辱柔和の佛眼も、睨ませ給ふ御影の御顏、二目とも拜まれず。頭の上に大盤石、落懸つたる如くにて、眼も眩み俯伏に瓦破と伏し給ふ。人々周章抱き退け、看病すれば氣も爽ぎ、顏色元の如くにて、不思議々々々とばかりなり。最明寺殿驚き給ひ、「さては神君の御內性に適はぬと覺えたり。御籤に伺ひ奉れ」と、僧正聽て神咒を唱へ、御筥を振上げ振立て、御籤の文を拜誦あれば、「豆を煮て、豆の豆萁を燒く。烟絶えざる事、日月の千廻」と讀も終らず、僧「あら不思議や。此文は、兄弟

君—頼朝
上り屋敷—沒收せられし屋敷

祝詞奏り、御籤の御筥押戴いて、千早振る正直正路の御籤の文、讀上てこそ請じけれ。「それ千里の地を得るは、一賢臣を得るには如ず、千金を連るは、一賢人をもとむるには如ずと云々。此文の心は、譬へば、大國を從へ、萬寶を需めんと思はば、先づ臣下の賢者をもとむべしとの御知せ。目出度き御籤候」と考へらるれば、最明寺殿聞給ひ、「我も豫て存ずる處、臣等が心、君の冥慮に相適へり。然らば建暦以來、御勘氣、謀反の輩の、上り屋敷の明地多し。當代忠勤の方々へ分ち與へん。それ〳〵」と、中原大外記執筆にて、仰に隨ひ記しける。先切通しの梶原屋敷は、海を見晴し山に沿ひ、境内分には過たれども、宇都宮新庄司朝平に恩賜ある。是れはこれ父朝綱が、梶原を射留たる舊功、且は其身も學問好み、記錄を集め、文武の嗜み、行跡道を守る由、外を勵まし、德を勸むる御褒美として、向後若君天女丸殿、御師範にこそさゝれけれ。葛西が谷の佐々木屋敷、其も此佐々木兄弟は、高名諸人に獨歩すと雖、讒者の爲に沒收せられし分地なれば、先祖の忠節御感に堪えず、佐々木十藏廣綱に賜けるは、故郷に飾る唐錦。絹張山の文覺屋敷、遠藤四郎に賜る處。天輪の盛長屋敷は結城の友繁。妹脊川の蒲殿屋敷は稲毛彌五郎。雪の下の長明屋敷、當代和歌に名を得たる河内守光行が、光源氏の講釋場。今ぞ風雅の道

最明寺殿百人上臈

上之巻

周書に曰、國を治むるに三常あり。一つには君賢を擧るを以て常とし、二つには官賢に任ずるを以て常とし、士賢を敬ふを以て常とし、合せて三つの鱗形、北條五代の鎌倉や。時の時たる時頼の執權の代ぞ私なき。德を隱して權貴に誇らず。祝髮して最明寺殿道崇と號し、名越が谷の法華堂に、故右大將頼朝卿の尊影を木像に刻み奉り、大江の僧正廣辨を別當に請じ居ゑ、莊嚴靈殿在すが如く、神易と名け、六十四本の御籤を籠め、凡國家の政道に、過りありや無しやとて、我身を御籤に試みて、糺し給へる賞罰に、天地自然に僞りの、無き世なりけり村時雨、冬至の日を吉例にて、翌年の政所始め、御嫡子天女丸時宗十六歳、御舍弟式部の冠者時定二十三歳、其外連署昵近の歷々、法華堂に群參あり。錦の戸帳開くれば、各「はつ」と頭を垂れ、生るに仕ふる如くなり。大江の僧正太

三つの鱗形―北條家の紋形

別當―長官

六十四本―六十四卦。昔、伏羲八卦を作り周の文王廣めて六十四とす

僞りのなき世云云―續後拾遺の僞のなき世なりけり神無月云々の句に基づく

太祝詞―太は美稱

輪寶—輪轉王の寶器

胞衣—胎兒を包む膜

廿五有—三界總舉則六道分乃二十五有（翻譯名義集）

修多羅の聲—讀經の聲

小車の輪の、輪寶に刻み付、かうべにかづけ給ふとかや。彌勒菩薩の受取なり。八月めに及んでは、阿閦菩薩の守護にて、輪寶變じて胞衣と成。九月には成長し、意念ある故、法界の惡魔惡靈、毒氣を吹き入れ吹きかけ吹きこみ、此界に出生せば、己が魔道へ引入れんと、隙間を狙ひ窺ふなり。父母の所行所念に引れ、善をなせば善人、惡をなせば惡人と成り、極樂地獄の堺ぞとて、産神を定めおき、勢至菩薩の守護なり。當る十月は愛染明王。されば六道四生、二十五有の其中に、人よりも尊きなく、皆佛性を備へたり。彼も此も一佛一體、汝が怨念消除みぢん、もとの佛果に至りたまへ。おんあびらうんけんたら、たかんまん急〳〵如律令」と誠精をぬきんでし、修多羅の聲も川風も、天にひびきて有がたし。時に不思議や、神木の松の木の間に、北の方の幽靈影の如くに現はれ、

北「此御經にひかれて、五逆の達多八歳の龍女、共に佛果を受けしぞや。恨を晴れて今よりは、護持の佛と成るべし」と、の給ふ聲も芳しく、如意觀音と現れ、光りをはなつて失せ給ふ。此光明に照されて、蟬丸の御兩眼、くわつと開けて、「是は〳〵」との給へば、君臣上下をしなべて、悦びさゞめき給ひけり。扨小聖に御禮あつく、御夫婦うちつれ還御ある。御子孫繁昌國繁昌、千秋萬歳萬々歳、つきせぬやどこそ久しけれ。

十月の十相―十月の變化のさま
あたかー恰も也
獨鈷―佛法にて疑を絕つ行道具、之に三鈷五鈷の別あり
地水火風―空を略せり

らし給へ」と、懷胎十月の十相を、語り 三重 給ふぞ殊勝なる。「先づ初月は一氣體中に孕まれ、其形あたかも鷄卵の如し。これ本來一とくの精水。かたちに取ては混沌未分、名にとつては大元大素、神道にては國常立の尊と申し奉り、漢儒は天の生民を降すと云ふ。佛法にては本有の毘盧遮那、不動明王の請取たまひて、本來の空の一物是とかや。二月めには陰陽の二氣相和して一氣と成り、獨鈷の形とあらはるゝ。是を胎子と名付けて、形のはじめ、りのつぎにて、藥師如來の受取なり。三月めに至つて、人倫の本心わたくしなく、始めて一念きざす。天竺の釋迦牟尼如來は佛といひ、唐土の聖人は明德と名付、我朝にては神慮と仰ぐ。名づくる所はへだたれど、三教一致は、やこの〳〵ハツア〳〵このく〳〵、三鈷の形文殊菩薩の受取なり。はや四月めは地水火風の五輪悉く連なりて、仁義五常の五鈷の形、普賢菩薩の守護なり。扨五月に及んで、六根手足をさいしき、五體殘らず連續す。此時よりその體に、守護本尊定まりて、付添ひめぐる腹帶や。地藏菩薩の受取なり。六月になれば好む所欲する所自然に生じ、母の乳房にくひつきて、親の乳を吸取る事、およそ三石六斗なり。則大悲觀世音是をまもらせ給ふとぞ。扨七月に至つては、忝なくも御佛は、三世の因緣壽命をかんがみ、扨こそ人間一生にめぐる因果の

日を重ね―氷魚にかく、壇場を網代木と見立てたり

胎金兩部―胎藏界（理）金剛界（智慧）の兩部

七寶云々―淸淨なる山伏の上衣

知行―知識と行

無漏―悟りを開きたる聖

水留らねば―足利尊氏の異母千代野の歌に、兎に角に賴みし桶の底拔けて水溜らねば月も宿らず（國花萬葉記）

阿字本不生―眞言宗にて阿は根本の意之を一切に及ぼして諸法の不生を悟る

懷胎十月の由來

宇治の網代木日をかさね、今日滿願の大法事。宮御夫婦は願主にて、壇の左右に着座あり。大君御幸なりければ、洛中近國かくれなく、信心の參詣は、老若男女貴賤都鄙、袖を列ねておびたゞし。斯くて安居院の小聖は、役の行者の跡をつぎ、胎金兩部の峰をわけ、七寶の露を祓ひし篠掛に、不淨をへだつる忍辱の袈裟。知行おとらぬ御弟子達、左手右手に相具し、壇上に差かゝり、先づ加持の讃をぞ誦せられける。小「謹上再拜々々敬つて申す魂しづめ。それ無漏無上の法界には、自他の念更になし。悟るときんば十方空、迷ふがゆゑに三界城、喜怒みだりに起つて、哀樂是が爲に止む事なし。花と見よ雪と見よ、龍田の錦吉野の雲。うつゝなければ夢も結ばず、水たまらねば月もやどらず。今ひるがへす幣帛に、阿字本不生の風を招きて、瞑朦の闇を晴さん。そも〳〵行者が修法と云つぱ、初七日は曼陀羅供、二七日は放生供、三七日には龍女成佛水施餓鬼、四七日は光明供、五七日には妙なれや法華讖法、六七日は法ようのしゆり三昧、今月今日七々日の、大結願と申すには、姙婦安平子安の法。今の御法に怨を忘れて、擁護の眦をめぐ

一念通じたる、親子の値遇の有難さよ。斯有べきとは存ぜず、御顏面を拜せんと、勇み歸りし甲斐もなき、定めがたなの世の中や」と、人目も別ず聲を上、口說立てぞ泣居たり。「實に道理ことはりや」と、各袖をぞ絞らるゝ。良有つて千手太郎、「ア、歎くまじや候。親兄弟が命を捨しも、君を御代に立ん爲。敵を討て候上は、只父母の孝養には、君御出世の御訴訟こそ、有ま欲う候」と、涙を止め申しければ、淸貫聞も敢ず、「我々も左は存ずれ共、先々月より直姬御懷姙の萌し候故、取紛れ延引せし。いざ急に奏聞せん」と、評議區々成所へ、姉宮搖出給ひ、「千手太郎とは御身の事か。忠義感じ入てこそ候へ。妾は逆髮迚蟬丸の姉成るが、因果の不具に髮倒さまに生し故、父帝にも嫌れて、斯る侘き住居乍ら、是は過去の因果なれば祈るべき方なし。又蟬丸の盲目は、嫉妬に命を失ひし、北の方の一念現世の報ばかりなり。殊に直姬懷姙とや。彼恨みにて生るゝ子も、不具ならんは必定。もと北の方に怨もなければ科もなし。安居院の小聖を請じ、宇治川にて七々日魂しづめの法事をなし、彼亡魂を宥めなば、蟬丸の目も開け、直姬の平產も氣質美麗の男子ならん。とく〳〵」と宣へば、皆「尤」と同じつゝ、小聖に御使者有り。都の辰巳思ひ立つ日を吉日とぞ　三重　開闢ある。

定めがたな—定め方なき

開闢—發表

堪へず岸破と伏す。早廣下り立「心得たり」と、太刀を合せて防ぎしが、一念の鋒先岩を劈く勢に、左の肋を貫かれ、仰氣に返せばつつと入り、取つて引伏馬乘にどうと乘り、「親の敵諸人の仇、年來の恨み思ひ知れ」と、三刀四刀差通し、「エヽ嬉しゝ心地よし」と、嬉し泣に泣居たり。「先母上に悦ばせ奉らん」と、首掻落し槍に貫ぬき振傾げ、蟬丸の在ます一條大宮逆髮の館へ、飛が如くに急ぎける、心の中こそ三重嬉しけれ。案内にも及ばず、「千手太郎忠光、敵早廣が首取て參りし」と、大音揚て呼はれば、希世清貫宮御夫婦、「是は是は」と走出、「扨もお手柄〳〵」と、勇み悦び給ひける。此年月の難行、又下り松にて餓に及びし時、亡者に供へし供物にて、餓を凌ぎし有樣具に語り、「母に申して悦ばせん。早早逢せて給べ」と申せば、人々は涙ぐみ、兎角の事も宣はず。忠「こは心得ず如何成仔細ぞ。聞させ給へ」希世涙を止め、「今更語るも便なき乍ら、御老母の御事は、廿日程以前より、風の心地と候ひしを、醫療手を盡せし甲斐もなく、一昨日の暮方に、終に果敢なく成給ふ。只今の物語り、亡者の供物を食せしとは、それこそ御老母の供物よ」と、語も敢ぬに忠光は、「はつ」と計りに伏轉び、聲も惜まず泣居たり。心の中こそ無慙なれ。最ど涙に昊乍ら、「偖は亡母の供物にて、我渴命を繫ぎ本望を達せしかや。草の蔭迄子を思ふ、母の

不退快樂—常住の極樂
四頓八辯—辯舌よく
けしとみ—膽を消し飛ぶ（俚言集覽）
願人奴—願人坊といふ一種の乞丐
下り松—名木の名
枕付—團子の類

十方偏照の光明を放ち、金色の蓮臺に駕せられ、一瞬刹那が其間に、忽まち安養無垢世界、不退快樂の都に至らん。何疑ひの有べき」と、四頓八辯流るゝ如く、語り給へば往來は、皆々禮して通けり。右大辨早廣は、丹波の方へ落行んと、編笠引こみ驛馬に乘り、白川越に來りしが、傘にや恐れけん。早廣が乘たる馬俄にけしとみ跳上り、鞍を放れてどうど落る。早廣怒つて、「是願人奴、馬上にも用捨せず傘をひらめかし、落馬させつる奇怪」と、傘取たるを吃度見て、忠「ヤア親の敵早廣か。千手太郎知つらん」と傘の轆轤を拔けば、長柄に槍を仕込だり。忠「餘さじ」と飛掛れば、「南無三寶」と馬引寄せ打乘、鞭を當て歩ませる。忠「卑怯者臆病者、返せ〳〵」と聲を掛け、息をも續ず追駈しは、只韋駄天の如く也。半道計追かけしが、馬の足並早廣に、十四五丁下り松の木蔭につつ立、又駈出んとしけれ共、こは如何に足立ず、野山に伏したる千手太郎、二三日五穀を食せず。咽渇して蹌蹌と、一足も引ればこそ。「エヽ冥加に盡きたり。口惜し」と、齒咬を爲して立たる所に、誠に天の與かや。死人に供し枕付の供物、松の下に棄て有。「有難し幸」と、一口にぐつと喰、一ゆり搖て力足を踏だれば、金剛力士の如く也。「さあ千里萬里も一飛」と、又駈出し三重行水の、神屋川にて程なく追付き聲を掛け、馬の鞦鞍壺掛て突ければ、馬は

上□□—下手に郎泣にて說法す
一生增惡—一生絕えず罪を造る
妻子珍寶云々—妻子より王位に至る迄死ぬる時は伴はず（大集經）
一息云々—息がきるゝ
焦熱—焦熱地獄の薪
化城喩品—法華經卷三にあり
己身—自己の心
唯心—唯一の心

そ殊勝なれ。思誠に淺ましいかな歎かしいかな。今日の衆生一生增惡不斷煩惱の塵に交はり、朝に怒り夕に悦び、貪嗔痴慢の色香に迷ひ、假にも佛法と云ふ事を知らぬ。愚成かな妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者と申して、現世にて寶の山を築せ、子孫奴に侍かれ、花に詠じ月に嘯ぶき、無上の榮花を究むるといへ共、一息切斷臨終の嵐に、貪慾私欲の火の車、業障の雲に轟ろき誘ひ行ときんば、日比の下人も從がはず、金銀衣服も身につかず、無間奈落に眞倒顚に墮落事、三つ羽の征矢より最早し。財寶は地獄の家產、名聞は焦熱の爪木共譬へたり。扨如何がして各〻我等佛には成ぞと申せば、有難い事の、化城喩品に曰く、大通智勝佛、十劫坐道場 佛法不現前、不得成佛道。此文の心は一心の外に佛法なし。一心の外に成佛なし。去れば愚痴無智の凡夫、心の外に佛を求め、穢土の外に淨土を求め、却つて迷ひの種と爲す。是を和らげ傳教大師の御歌に、悟とて外に求むる心こそ、迷ひ初ける始成らん。又天台の釋文にも、法華彌陀眼目の異名迚、釋迦と阿彌陀は譬へば目と云ひ眼と云が如くにて、一佛異名同一體、心の外に來迎なし。坐がら爰も蓮華道場。寢ても佛覺ても佛、立ても佛居ても佛。行住坐臥一心不亂に念佛せば、己身の彌陀唯心の淨土なれば、心外無別法 卽心成佛。取も直さず居も直らず、

すゞし—心地よし
逆髮—髮逆に生ふるより名付く
三衣—僧衣にて大衣、七條、五條
乾坤—天地
花は三芳野—諺、人は武士柱は檜木魚は鯛小袖は紅梅花は三芳野（一休）
世の中云々—蟬丸の歌、世の中はとても角ても過してん宮も藁屋も果しなければより出づ

貫聞きも敢ず、「ヲ、淸し勇しよ。御老母は我々預り、都一條大宮に、逆髮の姫宮迚、蟬丸の御姉宮在ます。君諸共に此方へ、伴忍ばせ奉らん。是此袈裟衣は、某が着用して君に巡り逢奉りし、吉左右目出度き三衣也。貴殿に讓り申べし。修行者に體を變へ、狙ひ寄て本望遂、目出度歸洛せられよ」と、各門出祝るれば、忠「ヲ、有難し忝なし。此衣を給はつて、姿を墨に扮す共、心計は染殘し、彌陀の利劍を提さげて、譬ば敵翼を生じ、梢を走り波を潛つて、新羅百濟高麗國、支那天竺に至る共、乾坤を出ずんば、よしや五年が十年も、命終らば一念の、魂殘つて本望遂げ、目出度歸つて母者人、御笑ひ顔見申ん」母「ヲ、御身が笑ひも見せて給べ」忠「お暇申す若君樣。暇申て母上樣。各には老母が事、賴存ずる」皆「ヲ、〱〱をさらば」忠「さらば」と出て行。花は三芳野人は武士、譽は雲井に薰りける。

第五

世の中は、兎にも角にも假の宿。笠一本に起臥も、身の程隱す我庵と、墨の袂に墨頭巾。經論少々懷中し、父の敵を狙ひゆく、嗔恚に我は迷へ共、人を導く六道の、辻談議こ

百歳に云々―百歳に一歳足らぬつくも髮我を戀ふらし俤に見ゆ（伊勢物語）
持扱―持餘す

さん候―然に候

姫故と樂しみしに、情も戀も覺果し。天魔の所爲か冥罰か」と、御愁歎こそ道理なれ。老母は聲を聞覺へ、御顔面をも思ひ付、老「なふ宮樣か。お懷かしや床しや」と、縋り付ば、蟬「アア煩さ。免せ〱」と彼方へ迯、此方へ隱れ百歳に、一歳足らぬ九十髮、持扱かはせ給ひけり。老「テヽ、御尤〱。名を申さずば御見忘れ候べし。妾こそ君が爲め早廣に討れし、千手入道が後家忠光が母にて候」と、件の有增語らるれば、蟬「實に〱夫れよ珍らしや。是は是は」と手を打て、一先不審は晴しかど、直姫の行方なし。最前の騷動に、敵や奪ひ取つると、未だ氣遣堪へぬ所に、清貫喜藤太姫君を誘引し、「宮に出逢ひ奉つらぬは、道こそ違つらめ」とて、舊の庵へ歸らるれば、蟬「こは清貫か我君か」「夫よ」「彼よ」と寄集り、泣つ笑ふつ取り〲に、語らひ哄み給ひけり。然りし所へ千手太郎、薄手少々受乍ら、大汗に成て馳歸り、人々を見るよりも、「はつ」と驚き嬉しさに、左右の言句も出ばこそ。夢かと思ふ氣色也。各々一度に「やれ〱千手か忠光か。事の首尾は御老母の物語にて承る。して先敵は討止めしか」忠「さん候敵は大勢と申し、長追に力盡き候を、火水の底もと存ぜしかど、母が有樣氣遣しく、無念乍らも打漏し、とつて返し候。幸哉此上は、恐れ乍ら母を君に預け參らせ、心身輕くし罷り出、敵を討て歸るべし。はやお暇」とぞ申しける。清

ほつこむ—踏込

みつわぐむ—いたく老いたる貌、年ふれば我黑髮も白河のみづはぐむ迄老にけるかな（後撰集）

知ぬ迄—迄は助辭

此上は腕限り太刀限り」と、身繕ひする所へ早廣主從七人にて、「博雅の三位が庵とは是ならめ。ほつこんで討取れ」と云ふ程こそあれ、我先にと亂れ入る。忠光戸口に立塞がり、「千手太郎見忘れたか。己れをこそ尋しに、神佛の宛がひ能も爰へ來りしな。親の敵覺へたか」と、無二無三に切て懸れば、先を取れて動顚し、おびへて颯と退きしが、踏止れば打かけ、取て返せば切かけ、打かけ〳〵息をも續ず、遁る敵に追縋ひ、粟津が原へぞ追駈ける。斯とは知で、博雅の三位蟬丸の御供して、淸貫とは道違ひ、麓の田面下向道、己が庵に歸りける。蟬丸仰せけるは、「誠に師弟の緣とて、此度の忠節淺からず」と宣ふにぞ、博「斯る御用に立事生前の本望。先は姫君嘸ぞ御淋しく、御心も盡ぬべし」と、佛壇の戸を開、御手を採引出せば、「ヤア是何じや」七十有餘の老女、頭の雪もみつわぐむ、老皺ひて出てける。三位「はつ」と飛退けば、宮も驚き、「やれ何事ぞ氣遣し」博「さん候姫君、俄に白髮の姥と成給ふ。今の間に年の寄るは合點參らず。是御覽ぜ」と御手を採り、肌へを撫れば骨荒て、老の波立身の皺に、痩て色香も無りけり。宮も呆れて坐ませば、三位彌當惑し、「今朝程宿を出さまに、確姫君を入置いたりと存ずるが、取違へたか知ぬ迄」と、眉を顰めて居たりける。痛はしや蟬丸は、御淚をはら〳〵と流し、「我此姿と成事も、彼の

坂本—叡山の麓、山王は日吉權現

仕合—所爲

鳰の海—琵琶湖

付出—尋ね出す

屈强—丁度適當

る故、扨妾諸共、是に忍び坐ます」と語り給へば、清貫悦び、「宮は何所に渡らせ給ふ。御目見得致たし」直「チヽ、宮は御出世の御祈誓に、坂本の山王へ日參遊ばし、今日も三位を御供にて、御參詣候が、追付歸らせ給ふべし」と、宣ふ所へ喜藤太立歸り、清貫を急度見て、「彼奴も盗人の同類か。油斷は爲ぬ」と鎌取直すを、姫君御覽じ、「やれ喜藤太、彼れは宮の御乳人清貫と云ふ人なり。汝は氣ばし違たるか」と宣へば、喜「ム、扨はそうか御免々々。拙者は山にて强盗に逢し故、扨只今の仕合」と、有し次第を語りける。清貫倩々聞給ひ、「否々是は盗人ならじ。早廣に疑ひ無。大勢催し此處へ押掛んは必定。垣一重の庵室に、長袖足弱過ち有ば後悔せん、いで山王迄姫君をも御供し、宮をも誘ひ奉り、一先都へ登べし。それ喜藤太御手を引け。暮ぬ先に」と夕浪の、鳰の海邊を濱傳に、坂本差てぞ三重急ぎける。爰に又千手太郎忠光は、父入道を早廣に討せ、其無念晴やらず。老たる母を肩に掛け、親の敵早廣を、是非一太刀と心懸け、野山に起臥し付狙ふ、所存の程こそ理りなれ。時しもあれ志賀の里にて早廣を付出し、忠「さあ今ぞ日比の運試し。天の與へあら嬉しや」と逸れ共、見れば敵は大勢にて群り來る。「老母を何處に置べきぞ。エヽ屈强の庵室。御免」と言ひ捨つつと入、持佛の下段の戸を押開、母を忍ばせ奉り、「あら心安や。

持經云々―常に用ふる御經和讃など其儘にて本尊佛も昔床しく思はる

化生―化物

ござめり―御座るめり

や、志賀の浦にぞ着給ふ。古き都の所がら、花散里の藁圍ひ、檜垣透垣小やかに、最ゆゑづける庵有。立入見れ共主人はなし。持佛の香華細かに、持經禮讃繕はず、本尊も昔し覺へたり。如何成遁世者の住家ぞや。世を厭ふ身は誰とても、斯こそあらま欲しけれ。住持の歸さを待請け、一夜語りて通らばやと思ひ、緣に腰掛待居たり。時に佛壇の下より、女の聲にて「申々」と呼かくる。清「はつ」と驚き見てあれば、忍やかに戸を開て、雪の樣なる手を出し、女「やよ是水一つ給べ」と云ふ。大道心の清貫も「是ぞ化生の業ならめ」と、膝濡慄と震ひしが、「エヽ、不便や餓鬼道に迷ひし幽靈ござめり。是ぞ出家の役」と觀じ、器物に水を入れ、「求給三途飢渇飽滿、南無阿彌陀佛」と差出し、ちやくと手を引退りしが、又恐々立寄て密と覗ば、弓矢八幡艶か成女房なり。「ム、扨は御坊の梵妻よな。いやはや浮世に拔目はなし。誰かは知ねど此庵の濡坊主。所こそ有れ佛壇に、女寢させて私事」思ひ囘せば可笑て、獨笑ふて居たりしが、又聲立て、女「あら心能や。今一ッ」と差出す。清貫も滑稽者。「綿持の梵妻殿、些拜み奉らん」と、其手を取て引出し、能々見れば直姬なり。女「扨は御身は清貫か」清「なふ姬君か」と手を打て、互に呆れ在ます。去共清貫不審晴ず、「何とて爰には御入」と、問ば直姬聞給ひ、「去ばとよ此所は、博雅の三位とて宮御琵琶の弟子成

かさをかけ―威勢に任せて
氣色―厳めしき顔する

す人の一僕喜藤太と云柴刈成が、主君博雅の三位殿は、蟬丸樣の琵琶の弟子。其由緒にて此間、蟬丸樣御夫婦共に、旦那が庵に入給へば、捧申すに是非々々所望」と云ひければ、樵「扨はそうか。持ても用なし勿體なし」と、與へて皆々通りけり。早廣篤くと聞濟し、郎等に目配せ、喜藤太を四方よりばら〱と取圍み、早「是々汝が主人、三位の庵に蟬丸の坐るとや。さあ案内して連て行け。否と云ば蹈殺さん」と、かさを掛てぞ申ける。喜藤太ぎよッとせしが打頷づき、「ム、聞た、己奴等は强盜よな。ヤイサ己等氣色すればとて、主の家へ盜人の引入が成物か。下郎と思ひ侮るな。四も五も食男でなし。足手息災な内、早々歸れ」と怒ける。早廣怒つて、「夫引立て案内爲せよ」「承はる」と下人共、飛懸れば取て投げ、取付ば踏倒し、拐取伸打て懸る。早廣も拔合せ、二打三打働きしが、山路に馴たる荒男、岩共谷共言せばこそ、猿より輕く駈廻れば、さしもの早廣詮方なく、轉び轉んで逃落ける。喜藤太も是迄と、元の所に立返り、「エ、何でも無い奴等に逢ひ、あつたら汗を流せし」と、柴に棒さしかき荷ひ、鼻歌謠ひ悠々と、志賀の里へと歸ける。左衛門督淸貫は、宣旨とは云乍ら、御幼少より仕にし、宮を山野に捨參らせ、無情世に墨染の、袂に扮し國々を、修行念佛他事もなし。去れば古鄕忘じ難し。宮の御上如何ぞと、都に歸る漣

末廣―扇

涙袖を潤ほして、「扨直姫に逢事も、神の授くる緣ぞ」と、各々夢かと辿られて、猶信心の和歌の道、古き例に踏分て、打連山路に歸らるゝ。夫婦不思議の契とて、二度巡り逢坂山の、名歌は今に殘りける。

第四

右大辨早廣は、千手入道を打滅し、都の住居も成難く、遠國に彷徨しが、「兎角我身上の敵は蟬丸なり。是非に恨を晴さん」と、下人等一兩輩召連、逢坂山の谷峯を、草を分て尋れ共、宮の行衞は無りけり。後は小關藤の尾や、斯る山家も住めば住む、奥の柴人友呼替し、「是々逢坂山にて不思議の物を拾ふたり。抑何と云物ぞ。さあ推當に言て見よ」と、琵琶の撥をぞ出しける。樵夫共集りて、甲「姿は銀杏の葉の形にて、偖も合點ゆかぬ物。是は猿の末廣か」乙「否々天狗の笄ならめ」と、樣々見立笑ひける。時に向ふの岡邊より若き樵夫の是を見て、「やれ各々、夫れは此山に捨られ坐せし、蟬丸樣の琵琶の撥と云物ぞ。賤き者の用には立ず。我に呉よ」と云ければ、「ムヽして又汝は何にか爲る。樣子に由て遣ん」と云ふ。彼男聞きも敢ず、「ヲヽ某は彼の志賀の里に世を免れ住給ふ、博雅の三位と申

雨降らば云々―有漏路より無漏路へ歸る一宿り雨ふらばふれ風吹かばふけ（一休）

たをやぎて―和ぎて

汝月明―月は眞如の月

「明日に別れ夕暮に、逢坂山の旅人の、往來も夢のすさみぞや。雨降ば降れ風吹ば吹け。山の奧こそ住能れ。ヱ、浮世の無常今ぞ悟の花開けし」と、走り出んと仕給へば、人々岸より飛で下り、直「是直姫よ」と縋り付。宮も「是は」と計にて、互に手を採袖を取、戀し床しの物語、盡せぬ物は涙なり。心ぞ思ひ遣れたる。時に兩人の稚兒達、詞を揃へ「如何に蟬丸、御身色を重んじ、思ひに絆され情に沈み、餘多の女を迷せし、因果の霞心を暗まし、盲目と成給へ共、今の悟の詠歌面白し〱。三十一文字の面に旅の姿を列ね、内には則會者定離、哀別離苦の理り。逢は別れの始と示し、一首に三世を顯せり。神も心をたをやぎて、佛の教に逢坂の、あの關寺の鐘の聲、煩惱の夢を覺すや。法の聲も靜に、先初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞時は、是生滅法と響くなり。晨鐘の響きは生滅々已、薄暮は寂滅爲樂と響きて、菩提の道も暗からず。悟の夜半も明渡る。兩眼は暗く共、汝月明かなり。和歌の妙を授けん爲、我は人丸我は赤人、二人の魂魄顯れ出、共に成佛得脱の、都卒に生れん嬉しき」と、言ふ聲計は逢坂山。言ふかと思へば逢坂山の杉の嵐に、立紛れてぞ失にける。蟬丸「あつ」と感歎あり、「夫れ日の本は神國の、和歌を以て道とせり。歌仙の靈魂顯れ出、詞を交す其奇特、未天道捨給はず」と、感

一夜泊り云々—謠曲關寺小町にある句、かけ戸にかけをかく

是や此—此歌の意は會者定離なれどつまり一つに歸すとなり

し」と、撥をあげ給ひし時、風が持て來る村雨の、紅葉遲しと夕時雨、一むら颯と降來れば、蟬丸琵琶を濡さじと、此所の木の下彼所の木蔭、濡ても寢んと詠ぜしは、花に戲れし歌のさま。我は又賤の夫がく、擔く袖笠肱笠の、雨に木の葉も亂るゝ初時雨、彼方へ走り、此方へ走り、さらり〱さらり〱颯と、駈り彷徨ひ身は濡衣。木蔭なければ雨も溜らず。人々見る目も痛しく、少小高き岨蔭より、笠を密と招懸れば、宮御耳を欹てて、「不思議や雨は降乍ら、身に掛らぬは木蔭よな。口惜や古へは、一夜泊りし宿迄も、錦の座褥綾の床。垣に金花をかけ、戸には水晶を列ねつゝ、鑾輿屬車の玉衣の、隙間の風も厭ひしに、斯淺ましき苔席、敷とも敷じ世の中よ。思ふ人とし片敷ば、玉の臺も愚しき。斯とは知らで直姬が、哀何とか暮すらん。戀しの昔や。忍ばしの直姬や」と、盲目の悲しさは、傍に有共知り給はず、獨言たき聲を上、歎き慕はせ給ふにぞ、今は堪兼心消へ、直姬爰にと云はんとすれど、稚兒達「暫し」と留むれば、絶入り消入り伏轉び、身を悶へてぞ憧るゝ、神ならぬ身は是非もなし。良有て蟬丸琵琶も撥もからりと捨、「南無三寳叶はぬ事に迷ふたり。逢は別れの始、獨止まる道ならず。色も匂ひも一盛り。アヽ思ふまじ歎かじ」と、一首の歌に斯計、「是や此行も歸るも別れては、知も知ぬも逢坂の關」

索々—消え絶なん歟

疎韻落—物寂しき響を發す、此句和漢朗詠集にあり第三第四絃を宮の上に轉じたり

四の折柄—四つの緒（琵琶）にかく、折にあひて哀を催す意

正木の葛—眞析と書く、常盤なる蔓草、此句平家物語にあり

盤渉平調—調子の名

ず聲ばし立給ふな。只御姿を見る迄ならば、いで〳〵案内申さん」と、夕の雨にさす笠や、空も涙も定めなき山路成らん。三面第一第二の絃は索々として秋の風、松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮は、我蟬丸が調べも、四の折柄なりける村雨かな。流るゝ水の哀世の、其理も日に見ぬ、月の入さも知ざれば、夜晝わかん方もなく、谷の梟閑子鳥、梢を渡る鼯や。何を恨みて猿鳴く。落葉衣に露重く、月を擔に肩痩たり。移れば變る哀さよ。去ればにや、夕日の巡る方をこそ、都の友と招く手に、其方の嵐懐しく、又森々たる、野分に琵琶を彈じては、過し寢覺の忘られず。鹿の妻こふ聲迄も、御身の上と無情なし。正木の蔓青葛藟、來人有共知り給はず、槇や柏を押分けて、杖が枝折の岨傳ひ、蹤ひ辿らせ給ひける。姫は彼れよと見るからに、「契りし人か淺ましや」と、縋り寄らんとせし所を、稚兒達押へて、「アヽ音高し。人音すれば逃隱れ給ふ故、物言事は叶はずと社、最前より申つれ。只音せで」と有ければ、姫は詮方涙に曇る、鏡の影か我戀は、逢とはすれど物云はぬ、我山梔の色香をも、見ずや知らずや淺ましやと、聲をも立ず忍び音に、噎返りてぞ泣給ふ。宮は斯共白糸の琵琶取出し、盤渉を平調に調べ換へ、「やよや待て天津雁金言傳ん。古郷の秋は如何ならん。我は深山に住佗て、琵琶より外は友な

桂—月の桂、十五夜に光のますをみのると云へる也

三瀬川—死して三途川にて宮に逢はんと也

切て、涙乍らに歸らるゝ。王子は跡に只獨り、琵琶を抱きて竹の杖、伏轉び〱、「去らば〱〱」の聲計り、梢の木魂山彦を、せめて夫かと力草、分て山路に 三重 入給ふ。桂はみのる三五の暮、名高き月に逢坂の、關の淸水と聞へしは、江州一の名水なり。されば關寺の稚兒達も、是を佛の閼伽桶や。柄杓の露の玉襷、月を汲んと秋に澄む、淸水が元に出らるゝ。時に柳の木隱より、若き女の走出、石を袂に拾ひ入、「南無阿彌陀佛」と云ひ捨、既に淸水に飛入る所を、稚兒達引留め、「放生第一の靈水にて、捨身思ひもよらず」と有ば、女「いや迚も存命果ぬ身ぞ。御慈悲に見逃して死なせて給」と振放す。稚「是々、左程思ひ詰しには仔細こそあらめ。品に依て兎も角も、先鎭靜て語られよ。平に〱」と申さるゝ。彼の女顏打赧め、「恥し乍ら自らは、此山に捨られ在します、蟬丸樣の思ひ者、直姬と申す者成るが、御行方の懷しく、是迄彷徨候へ共、御在所も定かならず。人に尋て候へば、御身の不具を羞合て、人に面を合せじと山深く入給ひ、今は生死も知らざると、聞くより浮世の賴みも切れ、此淸水をば三瀬川、逢瀬を急ぎ候ぞ。早々死せ給かし」と、又潸然とぞ泣居たる。稚兒達聞き給ひ、「扨痛はしや我々は、淸閑寺の稚兒成が、山踏の行法に、御在所は存じたり。餘所乍ら見せ申さん。去乍ら、人音すれば逃隱れ給ふ間、必

諸羽―宮の名、脆きにかく

とけしなき―遲鈍

たばつけん―東ねつけん

五味子―蔓草、名にしおはゞ逢坂山の五味子の歌による

雨による―雨による田簑の島をけふ行けばなには隠れぬものにぞありける（古今集）

みさむらひ―みさむらひみ笠と申せ宮城野の木の下露に雨は增れり（同上）

突からに―千早振神のきりけんつくからに千年の坂も越えぬべらなり（同上）

と伏拜み、登り下りの旅人も、心々に今宵しも、誰が誰と、伏見の山見へて、彼の黄昏の私言、今日に浮ぶ種ぞかし。急ぐとすれどとけしなき、牛の玉鋒遲く共、心の駒は日に千度、戀しき方に走井の、水櫛の齒もよしやよし、何時を頼みにたばつけん、我黒髮の五味子、逢坂山にぞ着給ふ。淸貫希世兩卿は、宮を木蔭におろし參らせ、「宣旨默止難く、是迄供奉せしめ候へ共、何處に捨置申すべき。去るにても我君は、堯舜以來の賢王とは申せ共、現在御子を捨給ふ、叡慮如何成事やらん」と、淚にくれて申しけり。蟬丸聞召、「あら愚や人々よ。前世の戒行拙なくて盲目と成し故、去れば父帝の御情なきには似たれ共、此世にて因果を果し、後世を助けん御計策。是こそは親の慈悲。捨置歸れ」と宣へば、二人は彌々淚を流し、「此御有樣にては盜人の恐れあり。御衣を給はつて簑を參らせ候はん」蟬「ム丶是は雨による、田簑の島と詠ぜし簑か」二人「さん候雨露の爲なれば、同じく笠をも參らする」蟬「是は御侍三笠と詠し物よなふ」二人「又此杖は御道案內」蟬「實に〳〵是も突からに、千歳の坂も越なんと、彼の遍昭が詠し杖か。夫は千歳の榮ゆく杖。爰は所も逢坂山、關の藁屋の竹柱。斯る浮世にあふ坂の、知るも知らぬも是見よや。延喜の王子の成行果て、こは抑も如何成る例ぞ」と、聲を上て泣き給ふ。宣旨なれば人々も、名殘の袂振

水鳥―見ずにかく
粟田口―泡にかく
歌の中山―歌の中の句は五字なる故云ふ、此山は清閑寺の上にあり
天の帝―天智天皇にて御廟野は其陵
民を惠みの―秋の田の苅穗の庵の歌
ないそ云々―無と泣とかく、なきその音便、松の葉にある唄
東風菜―虎杖

の車引かへて、野飼に扮す綱手縄。御身に添ふる物とては、玄上の琵琶一面。清貫希世御供にて、三重萎れ出させ給ひける、御有樣こそ哀なれ。秋されば〳〵、月の障碍と泣き歎きつる、東の山を超へ行ど、今盲目の御身には、何の光りも水鳥の、加茂の河岸波越へて、契りも末の松坂と、消ばや爰に粟田口。秋末若き山々に、忍び〳〵の初紅葉誰に着よとか錦織らん。折々に、花鳥風月の戯れも、共に散行花の山。鐘こう〳〵と仄聞へ、御心細き時しもあれ、己が夕べの床急ぐ、妻こひ烏二つ三つ。供人「なふ四ツ五ツ五文字は、歌の中山清閑寺、彼の神垣の年古し、天の帝の御廟野よ。左手の山の岡の邊」と、御手を取て教ゆれば、宮は左右の言もなく、「世々の日繼の天津君、民を惠みの言の葉の、露の流れを汲乍ら、成行果の淺ましや」と、御涙せきあへさせ給はねば、清貫希世心なき、牛も尾を伏せ角を伏せ、涙を流す有樣に、草木も哀催せり。秋の田の、刈穗の藁屋風落て、賤が手枕寢亂れし、紙干す布干す又稻も刈干す。我は袂の乾く間も、ないそないそ澤邊の蛙、斯る思ひはよも知じ。紫竹交りの藪の下、春の緣の東風菜。小笹姬笹行く袖に、唄蓑着て通へ。笠着て又通へ。涙の雫雨勝り、雨にはあらで、や是の、木々の、木々の木の葉が、はらりほろり、はら〳〵〳〵と風に諸葉の宮所、今日を限り

戀慕の闇云々—八百屋の娘お七とて戀路の闇の暗がりに云々と松の落葉にある歌をとる

暗がりに牛—あやめもわかぬ諺

玄上—村上帝此琵琶を彈じて仙人に逢ひ玉ひし事盛衰記に見えたり

ふ「よし〱此世にて、諸人に恥を懺悔して、業障を果たし後世を助くるいとなみ、逢坂山に捨置べし」と、綸言有こそ哀なれ。兩卿詞を揃へ、「宣旨にては候へ共、しづ樵夫さへ不具なる子は愛憐し。況んや一天の若君を、山野に捨てさせ給はん事、且ば仁心薄きに似たり」と、恐れ入て申さるれば、帝「いやとよ、生とし生る物子を憐れまぬはなきものを、況てや我が親心、身にも換まく思へ共、過去遠々の惡業は、十善王位も脱れずと萬民に知らしめて、天下の民を悉く、佛の道にいれん事、廣大の慈悲ならずや。子の愛憐きは盡せねど、國を育む我なれば、國民には換難し。構て汝ら露程もいたはらば、返つて仇と成べきぞ。疾〱山に捨置べし。果敢なの浮世や淺ましの人界や」と、御冠の巾子を傾ぶけて、御涙せきあへさせ給はねば、八省百官諸共に、各々袖をぞ絞らるゝ。清貫希世兩卿も、力なく〱退出ある、世のならわしぞ三重定めなき。

蟬丸あふさか山入道行

結ぶの神も僞りや。何時の月日に結び初め、寢初し夜半の夢消て、緣さへ薄き唐衣。御悼はしや蟬丸は、何の報か浮世の闇、戀慕の闇の暗がりに、引出す牛は昨日かも、御幸

父父たり云々―父が父なれば子も子なり(論語)

十善―前世にて十惡を犯さぬもの今世に王と生る

たりしが、早廣は行方なし。忠「エヽ、無念口惜し。己れ天地を出ずんば、討て父に手向ん」と、僅に殘る雜人共、木の葉の嵐磯打波、むら〳〵ばつと追散し、父が死骸の薄煙、霞の谷へと分入し。父父たれば子も子たり、天晴由々し頼母しし、前代未聞の勇士やと、扨は文にも殘し留めつる。

第三

早廣が惡逆故、宮は虎口の御命脱がれ、淸貫が計ひにて、中納言希世の館にお坐せしが、或時淸貫希世參內あり。「扨も蟬丸の宮、往時皐月の頃より御眼病例ならず。唐の大和の藥を以て、醫療手を盡し候へ共、元來宮の御事は、美男目出度ましますて故、數々の女の思ひ、嫉妬の恨み御一身に逼り、醫術の及ぶ所ならず。終に御兩眼盲させ給ひ、蒼天に月日の光りなく、闇夜に灯火影暗き、盲目の御容體力及ず候」と、詞を揃へ奏せらる。天皇はつと御氣色換り、御落淚坐ませしが、「誠に朕が第四の宮と生れ、十善の位をも知るべき身が、生れもつかぬ盲目と成し事、能く前世の惡業深きゆゑ。五體不具にして佛には成難し。況んや此世さへ暗きに迷ふ盲目の、未來の闇も痛はしや」と、良御淚にくれ給

軍神云々―出陣の時獸を屠り血を手向くる例

とめ―突留め

拜打―眞向に振翳して打つ

蜘手―縱横に

差當て、「さあ返事は如何に」と、聲々に喚き叫んで呼はりける。忠光親子淸貫も、人質に倦み果て、左右なく切ても出難く、如何はせんと犇きて、兎角時刻延行ば、早「エヽ緩慢し軍神の手向草。夫突殺して切入れ」と、痛はしや御老母二歲の若君諸共に、只一太刀に害せしは、目も當られぬ次第なり。「エヽ天道知ずの人畜奴。一人も脫さじ」と、枕長刀追取仲べ、四十餘人を左手に請、右手に支へて三重戰ひける。千手太郎が手に懸て、十六人とめければ、入道が長刀に、八人懸てぞ捨てける。殘る者も深手を負ひ、颯と引ては又駈入り、二三度四五度揉立しに、千手親子聲を掛け、「淸貫は在ぬか。宮を御供申されよ。跡を構な〳〵」と呼はれば、尤と淸貫宮を負參らせ、己が館に落らるゝ。其隙に早廣後の垣を押破り、直姬を引立大地に踏付拜打に振上る。「南無三寶」と、入道橫間に丁ど受け、火を散らして切結ぶ。太郎は父を討せじと、討て懸れば入道隔て、「父が命を庇ふな。姬君を討せなば、七生迄の勘當」と、云ふ聲に力なく、母と姬とを兩脇に、搔込で上の山へと落行きける。入道は面も振らず、追行く敵を防しが、早廣苛て打太刀に、左手の肩先打込れ、七十一歲春の夜の、敢なき夢とぞ消にける。忠光「父は如何ぞ」と取て返して、「ハア、口惜や討せつる。目前親の敵ぞ」と、退く敵を蓋に乘、蜘手に追立追返し、半時計駈

祝着―喜び思ふ事

さもしく―卑劣

靑侍―若侍

請じける。淸貫人々に對面し、「甲斐々々敷も御隱匿、我身にとつて祝着」と、禮義細に相述べ、「先以て御息女不慮の最期、御愁傷察したり。去乍ら此敵は知れ申す。本望遂させ申さん」と有ば、忠光悅び、「夫は何國如何なる者にて候ぞ」淸「ヲヽ此淸貫こそ敵なれ」入道親子仰天し、「一圓に心得ず。何樣仔細候はん、承らん」と眉を顰て申ける。淸貫淚を潸然とこぼし、有し段々心底を精しく語り、「宮此所に坐すとは存ぜず、御行末の仇と思ひ、不便乍らも討たりし、忠は返つて不忠と成、仇は情と成たりし。短慮と云ひ粗忽と云ひ、面目も候はず。今は恨みを晴給へ」と、太刀を逆手にずばと拔き、既に自害と見えける時、親子左右に取付き、「なふ淸貫殿我々も侍なり。一家命を抛つ上は、さもしく悔殘るべきか。大事を抱へて是式に、死んとは狼狽しか。但しは狂氣か。さあ死なれふば死で見よ」と、樣々宥め止むれば、思ひ切たる淸貫も、理に詰られて死れもせず、生ても居られず殺しもならず。三人目と目を見合せて、淚を流ぞ道理成。早東雲に及びし時、右大辨早廣、靑侍ばらに物の具させ、直姬の老母同じく若君奪取り、陣頭に引立、千手が屋敷を取圍み、早「御勘當の蟬丸を隱匿し段、逆鱗斜ならず。太平の君が世に事を好むは痴人なり。疾々蟬丸直姬を渡せ。異議に及ば先づ一番に彼奴らを殺す」と、刄を胸に

覺なし―不覺の至り

く潛みおはしける。母は縋りて悲しめば、入道親子も敗亡し、盜人の所爲なんめり、追駈んとは仕たりしが、宮の御事氣遣しく、立もやらず居もやらず。蟬丸も直姬も、周章狼狽給ひける。今を限りのばせをの前、宮を倩々見參らせ、苦しげ成息を次ぎ、玄「ムヽ夫成蟬丸樣、直姬御前とは御身の事か。怨めしや恥かしや。僞り多き御一言、誠と思ひ身を焦し、戀に心を惱まして、有れぬおもひに狂ひしも、只一筋におもふゆゑ。君が戀路の障碍ならば、をもひ切れとはの給はで、誑かり殺さん御計策か。餘まりに酷き御心。情の道は左はなきもの。なふ憎ふて人には惚れぬぞや。果敢なの戀に朽果ん名こそ惜しけれ。去乍ら我里に、お宿を召すも他生の緣。草の蔭にて君が爲、惡かれとは祈まし。詞の由緣と思しなば、餘の人千度百度より、君が一度の手向草、露の命は惜からず。なふ父上樣兄上樣、宮の御事偏に賴み奉る。名殘惜の母上樣、南無阿彌陀佛」と、云ふ聲も、眠れる花の夕べの秋、十七歲を一期として、終に果敢なく成にける。親子は夢とも辨まへず、縋り付いて泣ければ、蟬丸直姬聲を上げ、「去り迚は覺なし。恨を晴よ免して吳よ。不便の者の心や」と、抱き付縋り伏、泣ど叫べど甲斐ぞなき。物の哀の限りなり。清貫案に相違して、今は堪兼案內し、「斯樣々々」と云ひければ、忠「聞及びし淸貫殿か。先此方へ」と

一樹の宿云々―一樹の陰に宿り一河の流を汲むも皆是他生の緣
引手あまた―多くの人に慕はる古今集の大幣の引手數多の歌による
念力岩を云々―諺、彼の熊渠子石を虎と見て射込みし話（韓詩外傳）
面伏―面目なし

んとす。清「アヽ〳〵是々苦からず。我は田舍の旅人成が、雨を淩て罷有。承れば大内方の人樣とや。拙者共は田夫野人の遠國者、殿上の交際夢に見た事も候はず。國元の土產に語り聞させ給へ」と有。ばせを打笑ひ、「田舍のお衆は何も左樣にの給へ共、さして變りし事もなし。糸竹詩文和歌の道、取分流行は濡事」と、莞爾と會釋し申しける。清貫佯爲た顏付にて、「エヽ野でも山でも廢らぬは戀の道。定めし上﨟樣もさう仕た色候はん。さあさあ聞たし〳〵」と云へば、女「一樹の宿も他生の緣」と、包まず語る無心さよ。「恥し乍ら自らは、禁中一の美男蟬丸樣に思ひを懸け、樣々心つくし舟、引手數多の殿なれど、酒の一夜の玉霰、轉び寢んとの約束を、由なき女に支へられ、遂に思ひの晴間なき、淚の雨に身は朽る。念力岩を通すとの、譬に僞りなきならば、死る共生る共、此無念は晴すべし。エヽ面伏口惜や。や、よしなの問はず語り、穴賢こ。人にな洩し給ひそ」と、又むせ返りせき上て、袖は時雨に爭そへり。清貫篤くと聞からに、「なふ恐ろしの一念。終に蟬丸直姬の仇とならんは必定。如何成事をか仕出し、御命に障碍あらば、後悔に甲斐あらじ」と、近頃不便千萬乍ら、太刀拔潛めて取て引寄せ、心元を刺通す。女「なふ悲し人殺し」と、呼はる聲に親子の者、門を開き飛出る。惡かりなんと清貫は、篠の小藪に走入り、暫ら

宿所に三重歸りける。既に其日も暮過て、左衛門の督清貫は、蟬丸落失給ふと聞き、京近邊を尋廻り、木幡の里に着けるが、草鞋切れて行暮し、村雨しきる今宵しも、宮坐ます共知ばこそ、千手が門の茅葺に、晴間を凌ぎ立れけり。雨にこもれる夜半の鐘、霧の絶間を透し見れば、女の姿振袖も、最忍びたる氣色なり。木影に立退見給へば、彼女門の扉を忙しげに、「物申さん」とぞ叩きける。千手親子は「すは追手よ」と走出、「夜中の案内何者」と云ふ。女「なふ然の給ふは兄上か父上か。ばせをの前にて候が、傍輩の讒に合、御所を紛れ出候。爰開給へ」と云ふ聲に母は驚き、「扨は我子か懐しや」と、開んとすれば父の入道、「アヽ暫く〳〵。大事は油斷より起るぞかし。宮を隱匿奉り、夜中に門を開ん事不覺の至り。是々ばせを、仔細有て夜中に門を開く事は叶はず。今宵は夫にて明せ。明なば内へ入れん」とあれば、女「こは心得ぬ仰かな。如何成憎み候ぞ。是非開て給べ開給へ」と、搔口說てぞ歎きける。父「いや〳〵憎しみはなけれ共、今宵門を開きては親兄が侍立ず。仔細は明朝語るべし。はや夜明迄程もなし。是を片敷明せ」とて、内より小袖を投出せば、ばせをは力なく〳〵も、衣引被き臥居たり。清貫ばせをと聞くからに、彼奴こそ彼丑の時參りござんなれ。大内の有樣尋んと、徐り〳〵と傍に寄、作聲して「申」と云ば、女「アヽ恐」と云逃

若草に云々—武藏野は今日はな燒きそ云々の歌による
賭鞍—競馬
妹—芭蕉の事
立つく—抵抗
左もさうず—左もありなん

「ヲヽ我は當今第四の宮蟬丸と云ふ者よ。是成女は直姫とて踏も慣はぬ若草に、妻もこもれり追風の、追手も急に來るべし。萬事は賴む」と宣て、又御涙にむせ給ふ。忠「ハア扨は蟬丸の宮にてましますか。某は千手太郎忠光とて、古は賭鞍にも乘し者。殊に某が妹は女院樣のお末の奉公仕る。然れば大内緣と申し、數ならぬ某を、斯る高位の御賴、一命も惜からず。父は千手入道とて、年罷寄たれ共、甲斐々々しき覺の者。一先私宅へ御供申、仔細は靜に承はらん。去來させ給へ」と云ふ所へ、右大辨早廣、兵仗二三十爰彼處と搜索し來り、早「彼れこそ蟬丸直姫よ。搦捕れ」と喚て懸る。忠光面に立塞り、「是々これ〳〵扨方々は追手よな。宮の御誤は卒知らず。某は千手太郎と云ふ者よ。苟くも賴れ參らせし。疾々歸れ」と呼りける。早廣大きに怒り、「宮は不義の誤り故、召捕との勅諚成が、綸言に立つくは、扨は己めは朝敵か」と云へば、忠「いやさ朝敵にもせよ。とん敵にもせよ。武士の一言綸言より重し。賴るゝと云ふからは、命は君に奉る。惡く寄らば蹴殺さん」と、力足をどうと踏む。早廣怒て「何の二歲奴、討取れ」と、群り掛を、飛退り矢束くつろげ矢續早、差取り引詰め空矢もなく、雨の如くに射懸れば、早廣も叶はじと、皆散々に落失けり。忠「ヲヽ左もさうず是迄」と、直姫を肩に掛け、宮の御手を引參せ、己が

そこはかとなく―いづこともなく

由々敷―勇ましき
尾花靭―鏃形の靭
はぶくら―矢の羽の所

げしうはあらぬ―賤しからぬ

虚空に向つて吐く息は、只火の雨の如くなり。人々これに恐怖れ、「わつ」と云ふて迯げ散れば、大蛇は川瀬に飛入て、生かはり死かはり、「生々世々に恨みを爲さん。あら恨めしや口惜」と、云ふ聲計り水底の、そこはかとなく流れゆく、宇治の川霧たへ〴〵に、明け行く空と消へてんげり。おそろしし凄じし。尤も果敢なし哀なり。さて戀路は切なるおもひぞや。

第二

爰も戀路に名を立し、情の峠程近き、木幡の里の片傍に、千手太郎忠光と云ふ者あり。元來由々敷弓取成が、今浪人の身乍らも、飢ず凍ぬ芝の庵、明暮殺生を樂み、尾花靭に弓取添へ、今日も狩場に出にける。深草山のすゞ原より、兎一疋追出し、弓矢取て打番ひ、弓手もぢりに放つ矢を、手先さがりに射損じて、誰が刈積し稻村に、はぶくら込てずばと立、兎は逃れ失にけり。「弓矢八幡射損ぜし、いで矢を取らん」と、稻引退ればこは如何に、廿計の殿上人、二八餘の上臈の、左の袂に矢を受て、涙に萎御在ます。忠光はつと驚き、「知ぬ事は是非もなし、見奉ればげしうは有ぬ御有樣、怪しや語おはしませ」

たちばなの小島岬―宇治川の岸、立ちにかく

笠木―鳥居の上にわたす木

聞けば餘所ならず、肝を潰して居たりしが、ばせを手を打、「扨奥樣か。知らでお恨み申したり。戀の敵は直姫一人。いざ打殺し、共に本意を遂げ申さん」北「ヲヽ、尤」と神木に立並び、「鬼とも蛇ともなし給へ」と、肝膽くだき釘取出し、「これは直姫が兩眼にうつ釘、早つぶれよ」と丁と打、「これ首の骨胸板五體腐れ」と礑と打、四十四本の釘の數、「筋骨節々つがひつがひ、打て思ひを晴せよ」と、踊り上り飛あがり、てう／＼はた／＼丁とうてば、釘目より血ながれて、左しもの大木動ぐにぞ、清貫もゆら／＼と、漂ふ舟のごとくなり。餘りゆられて目眩き、枝蹈外しどうと落る。二人は驚き飛で遁るを、北の方の小腕とつて立歸れば、その隙にばせをの前、行衞も知らず迯げ失せけり。清貫今は堪られず、「これ御臺樣、人にこそよれ、はしたなき御振舞。明ぬ先にさあお歸り」と申せ共、聞き入ず、北「人に知られて此大願、空しかるとも一念は、死して報ひを知らせん」と、戀の浮名やたちばなの、小島がさきは大紅蓮、逆捲水に飛入て、哀果敢なくなり給ふ。清貫あはて「松明々々」と、云ふ聲に里人ども、松明灯燈星のごとく、爰かしことぞどよめきける。時に小波岸をたたき、あら恐ろしや北の方の遺骸むつくと起上り、角は忽蛇身と成り、鱗を振ひ炎を降らし、浪を蹴たてて三重捲上り、鳥居の笠木をくる／＼、くるり／＼と引纏ひ、

倉橋山—暗きにかく

上童—女院の召使

せいたう—政道、締り

山。くら〳〵〳〵〳〵湧き返り、玉ちる川瀬浪の音、梢を渡る小夜嵐、どう〳〵さらさら〳〵どう〳〵〳〵。とんどろとゞろと踏鳴し、世を宇治橋の橋姫の、宮居を拍き祈りしは、身の毛彌立計りなり。清貫今が見始め、何とやら氣味悪く、枝に取付き見る所に、又向ふより同じ姿の人影見ゆる。清「ヤア是も丑の時。さて澤山や天狗の所爲か。但狐や魅しぬ」と、睫毛を濡して居たりけり。二人の女も見交して、互にぞつと仕たりしが、初の女小聲になり、「なふ和上臈は何人ぞ」とあれば、「左言ふ御身は何者ぞ」「ヲヽ御身にかはらぬ姿なれば、祈りも同じ嫉妬よの」「されば我も悋氣ごと。扨も世の中に性のよき男はなし」「扨々合たり叶ふたり。いざ立ながら悋氣講をはじめ、語りてうさを晴さん」と、先傍に立寄れば、清貫恐さも打忘れ、「急な所の悋氣講」と、可笑どうも耐られず、ふつと吹出す計りなり。「扨も妾は女院の上童、芭蕉と申す者なるが、及ばぬ戀とは申しながら、幼き時より蟬丸樣に思ひをかけ、斯くと口說申せしかば、一夜は思ひを晴させんと、堅き約束候へ共、奥樣せいたうつよきにや、お約束も夢となる。一人焦れ死なんより、斯く祈り申す」と、云ひもあへぬに初の女、「我こそ宮の北の方。妾を恨むは僻事ぞ。直姫と云ふいたづら女郎ゆゑ自も捨られし。憎い奴は直姫」と、牙を鳴して語らるれば、清貫

はしひめ―一人の女嫉妬の爲に宇治川に沈みて鬼となる茨木童子是也
さゝがに―蜘の枕詞にて次の章に續く

蜘のい―蜘の巢、「蜘のいに荒れたる駒は繫ぐとも二道かくる人は賴まじ」の歌によるもの
ものうし―憂しと丑とかく
鐵輪―三本の蠟燭立の事
つげ―告と黃楊
あまの逆手―人を咒ふさま
うけへば―祈れば
あらなん―あれかしと也

南都を忍び巡りしが、一まづ都に歸るさの、長池より日はくれて、物すさまじき宇治橋の、宮居にこそは着きにけれ。今宵はこれにて明さんと、笠を取て向ふを見れば、怪しき姿、「南無三寶。此社は嫉妬を守るはしひめの、丑の時詣でこれなんめり。窺ひ見ばや」と神前の、松の古木に攀躋り、身を細めたる振舞は、宛然梢にさゝがにの、

きふね詣で

蜘の圍に、あれたる駒は繫ぐとも、ふた道かくる仇人を、思ふはつらし思はぬも、アヽアヽ〳〵ものうしの時參り。仇と情と怨念と、三の鐵輪に燃る火に、嗔恚の燒木こりもなく、煙りくらべん夕闇の、空もとゞろに浮舟の、けうとく立し宮柱。人になつげのつま櫛も、おどろの髮も、七つ八つ夜半の鐘の物すごき、心にこもる願事に、あまのさかてをうつてうけへば、驗あらなん。あら〳〵〳〵恐ろしや。心の角の枝高き、かげろふの森昧爽し。淺くな明そ朝日山、山吹の瀨に影見へて、峯のいなづまちら〳〵〳〵、星の光りかアヽ螢火か。憧れ出る我魂か。實にや外面如菩薩内心如夜叉。たとへ其の色白くとも、無間の猛火に黑むべく、涙に戀に紅の、裙踏しだき闇きより、女心の倉橋

つくば川—蒋くにかく、陽成院の歌をとれり

せうと—兄

眞紅云々—赤筋の縱横にある

みと偽り、妻の傍にもぬる夜なき、我をばむげに此誓紙、灰になせとは曲もなや」と、嘆ち給へば直姫も、袂に抱きつくば川、積る戀しさ逢ふ時は、心おくれに胸さはぐ、そゞろぶるひの姿なり。爰に北の方の御せうと、右大辨早廣此體をきつと見て、早「今宵の衛士は蟬丸密通の女なり。あれ吟味せよ」官人舍人我も〳〵と駈出る。聲に恐れて人々は、築地が隈に迯給ふ。早廣誓紙を拾ひ取り、「さあ證據は握つた。奏聞せん」とひしめけば、人目も恥ず北の方、「なふはしたなし宮の御名の立つ事ぞ。穩密にしてたべ兄上樣」と、涙にくれての給へば、早廣眼に角を立、「エヽ言甲斐なし。結構だても事による。宮を聟に持てこそ、一門親類榮花もあれ。兄が鼻迄ひしぐるか。夫を寢とられ口惜ふは思はぬか。これ證據を見よ」と誓紙を出せば、北の方披見あり。宮の御手跡紛れなし。くわつとせき立顏面に、血筋は眞紅の網を張り、髮さかしまに立のぼり、嗔恚の身ぶるい齒をならし、北「エヽたらされし口惜や。恨めしや妬ましや。思ひ知らずや此恨み、思ひしらせん思ひしれ」と、天地を睨む兩眼に、血の涙をはら〳〵〳〵、「はら立や」と、ずん〳〵に喰ひ裂きすて、衛士の燒く火はものかはの、胸の煙りはくる〳〵〳〵、狂ひわなゝき出給ふは、恐ろしくも又三重憐なり。いでや其頃蟬丸の御乳人左衛門督淸貫は、直姫を尋ねんため、

一生不犯—一生女色を斷つ

お氣の云々—氣を利かして下さる

よどみ—懷妊、經水の滯る義ならん

にほひ墨—筆の跡、誓紙をいふ

淸貫—三善淸行をさす

り出家を望み、一生不犯の願を立て、佛に誓言たてしゆへ、是非なき事と斷念たまへ」と、共に涙をながさるゝ。北の御方涙を止め、「ムヽ扨は左樣に候か。然らば妾も出家をとげ、此世はわづか永き世の、心が誠の夫婦ぞや。今より自も誓文立て、互に心を恥ぢしめて、身を汚さず淸淨に、目出度く發心とげ申さん。しかし今宵は誓文がため、一世一度の色床は、佛もお氣の通らめ」と、膝にもたれての給へば、さすが亂るゝ花すゝき、詞に露を慕はせて、簾中三重ふかく入り給ふ。月かあらぬか茜さす、衞士は篝を焚きさして、さめ〴〵とぞ泣き居たる。蟬丸御覽じ、「目出度き御遊の折から希有の落涙、心得がたし」との給へば、烏帽子かなぐり、「是御覽ぜ。なふ御見忘れ候か。我は一年春日の里にて、假寢のお情候ひし直姬にて御座候。有しあふ瀨の川水の、よどみ〳〵て月かさなり、君の御子を生み參らせ、不思議の事にて御父帝樣に、老母諸共拾はれ候へ共、君の浮名を憚り、夫は死せしと僞はり、希世の卿に侍かれ候が、せめてお姿見まほしく、衞士の男に出立し、迚もいやしき此身にて、添ひ奉るは叶はぬこと。血判を染て給はりし、誓紙も今はよしなし事。只今やきすて奧樣とは、おなかよし野の初櫻、火花も薫れ」とにほひ墨、くべんと爲しを引留め、蟬「明暮忘るゝ隙もなく、乳人の淸貫を尋ねに出し、出家の望

二つ違ひ—蟬丸は廿歲なれば云ふ

渡殿—廊下

若しや逢瀨—夫に逢はれぬを歎くさま

釋迦—女色を遠ざくる釋迦

成敗—お仕置

も此姫君は右大辨早廣が妹にて、はや十八の秋風も、ふさがで通す振袖や。二ッちがいの爪琴は、似合比とのしらべかや。月出なば、管絃を始むべしとの御沙汰にて、衞士は烏帽子を傾けて、月待つ程の篝火も、ゆうに目出度き景色なり。蟬丸は唯一人、月や出しと欄干の、奥の渡殿見たまへば、琴を枕に女の寢聲、斯くこそ謠ひ出しけれ。「ゆふべ〳〵のわが涙川、もしや逢瀨の波枕、それを頼みにうき身をおくるゑ。此年月をゑ」宮驚き御覽あれば、北の方にておはします。お傍によりて、「是々、今宵の管絃はれがまし。琴を枕の假寢は、調子もや狂ひなん。誰か有るそれ〳〵」との給へば、「はつ」とこたへて女房達、御枕參らする。北の御方つゝと寄り、宮の御太刀ずばと拔き、御長枕引きよせ、二ッに丁ど切り給へば、宮は驚き縋り付、「こはそもいかに狂氣か」と、呆れ果てぞおはしける。北の方聞き給ひ、「全く狂氣に候はず。お主樣と自は、夫婦と成て二年の、幾夜を重ね候へ共、あはぬ緣かや但はお氣にいらざるか。ついに一夜も肌ふれて、枕かはせし事もなし。釋迦でもさうはならぬ物。男持つたも名計りぞ。益もなき長枕、科はなけれど成敗」と、恨み詫つゝ泣き給ふ。宮うなづかせ給ひ、「ヲヽ恨み左もあらん。云出すべき折もなく、今までは打過し。親の命そむかれず、夫婦とは成りつれど、我幼少よ

乳房を云々—乳にて母を養ふ例二十四孝にあり

目元云々—顏や素振

初霜に云々—凡河內躬恒の歌をとる

むといへ共、子を捨る邪見の者、我國に有る事、朕が不德の誤り」と、忝けなくも龍顏に、御涙をぞかけ給ふ。然る所へ十八九なる女房、あはたゞしく駈來り、「なふ其子返させ給へ。返し給へ」と泣き叫び、「まつたく捨子に候はず。妾老母を持候ふが、今は老きのはも落て、物參らせん樣もなく、乳房をふくめ養ひ候。此子が爭ひむつがる故、暫時外方にすかし置て候。聊捨は致さぬなり。返してたべ」とぞ泣き居たる。主上御手をはたと打ち、「扨は捨子にてはなかりしな。子にかへて母をいたはる孝行、賢女とも云ひつべし。して汝は夫は無か」女「さん候夫は去年の秋霧と、消へても殘る俤の、形見は此子」と計りの、涙もいづれ由あつて、目元のくらゐ褄はづれ、育床敷女なり。主上感じ思召し、中納言希世を召れ、帝「窮民を養ふは昔の道。彼が老母諸共、汝に預け與ふる條、大内に誘引し、よく〳〵養ひいたはるべし。ついては斯る豐年の悅び、天に訴ふる兆ぞや。初菊の宴を催し、紫宸殿にて音樂を奏し、五穀豐饒を祝ふべし」と、世に畏る御勅宣、仰ぐもおろか三重なりけらし。初霜よ初霜に、おらばやをらん花の宴。菊見の御遊糸竹の、其役々を別たれし、中にも當今第四の御子、蟬丸の宮と申せしは、天性美男の御器量、天皇御寵愛淺からず、琵琶に妙を得たまへり。扨又琴は蟬丸の、北の御方と定めらる。そ

諫鼓云々―堯帝の政を述ぶ即ち諫の鼓を掛けても訴ふるものゝなければ鼓に苔を生じ罪人を打つ笞を蒲の鞭に換ふれば皆過に感じて犯さぬ故蒲朽ちて螢生ずとなり（和漢朗詠集）
もさ〳〵―偏へに
をりはへ―引續いて
警蹕―天子出御の時先拂の聲
五ツ緒―御車の簾にかゝれる緒
禁野―河内の交野
八束穗―稻穗の房々と長きもの
管籥云々―民が王の樂を聞き王の羽毛の旗を見て喜び迎ふる體なり（孟子）

蟬丸

第一

諫鼓苦深ふして鳥驚かず、刑鞭蒲朽て螢空しく去るとは、今此時よ秋津君、延喜の帝の御盛德、申すもおさ〳〵有がたし。治まる國や民草の、猶其榮へ衰へを、直に叡覽有るべしとて、唐土の聖代の巡狩になぞらへ、交野のみ野の櫻狩、今日の紅葉とをりはへて、月卿雲客供奉せしめ、はや警蹕とよばふなる、御狩車の五つ緒も、五ツの常の道芝や、惠の露に轟きて、御幸有こそ目出度けれ。禁野を過ぎて波瀲院、賤が門田の八束穗に、竈の煙りほの〴〵と、戸ざさぬ御代の民百姓、管籥の聲羽旄の美、欣々然と悅びて、君が御狩を待顏に、空飛ぶ鳥も御車に、群り慕ひ囀りしは、實に賢王の慈愛、鳥獸にも通じけん、民安全のしるしなり。時に行く手の松が根に、幼なき者の泣く聲す。藏人を以て召るれば、まだ乳ばなれぬ捨子なり。主上御涙ぐませ給ひ、「我國民を憐み育

いきりきる—勢をつくる

願はどき—祈願の叶ひし御禮參り

思召すが定ならば、御夫婦心を全ふして出世を見せて下されば、踏殺されても大事ない」と、二人顔を差寄せて、聲をばかりに泣き居たり。斯る所に八幡の神主紀太夫より、御吉左右の早飛脚いきり切て案内す。「そりや吉左右とは悦ばし」と、狀箱開くも疾し遲しと封〆切つて拜見す。何々江戸屋勝二郎事、家來新七數年の歎き感じ思召され、關白左右の大臣御憐愍に依て、八幡の本地舊の如く返し與へらる。追付歸宅あるべき」と、讀も終らず八拜九拜悦び踊り飛上り、跳上りたる淀鯉の、瀧の壺より涌出る、白銀黄金の鷄寶、ときは勝鬨悦びどき、五畿内五ヶ國神々に、先願ほどきに三重悦びの、幣帛をあげ神樂をあげ、詣り納むる八幡山、此浪花津の惠方神、民安全こそ目出たけれ。

せましたい心ざし。御奉公の仕納と存じ立たる所に、藤五郎は吾妻殿の手にかゝつて死んだか。でかいたく。此新七はお主の爲心ざしの奉公は仕たれども、一命の奉公は其方に劣つた。兄に優つた忠の者。是々御亭主只今申す通りに虚言はない。兄が言分ないと云ふ證文を致すからは別條はあるまい。夫とても是非處の作法下手人を取るならば、水いらずに此新七、女房は死ぬる親はなし。一人の弟は相果る。雲のうちを尋ねても、お主より外世の中に大事の人はなきものを、隔てて下さる旦那殿恨めしう思ひます」と、どうと伏して泣きければ、吾妻を始め亭主親子、町内近所の者迄も、誠の心を感じつゝ、皆皆涙を流しけり。勝二郎飛で出、「アヽ過つたく。斯樣な身と成果たも其方を踏んだ下人の罰と、かねぐ悔み歎いた。藤五郎を弟と知らいで吾妻が殺したも我ゆへぞ。主故に身上潰し其體となつたを見て、此勝二郎がいかに畜類なればとて、見ても聞てもゐられふか。死ぬるにも死なれもせず、とてもの情に其方が此足にかけ、以前そちを踏んだ樣に、勝二郎を踏んでくれ。一ッの罪も脱るゝ爲。さりとては新七某を踏んでたも」と、足の下に背中を向け、手を合せて泣きければ、吾妻は縋つて、「弟御の仇は私。刺殺して下さんせ。どうも生ては居にくい」と、歎き悔む聲々。新七は飛退り、「アヽ勿體ない冥加ない。新七と

氣病―氣鬱病

布子―綿入

中、勝二郎赤面し、「面目なや耻かしや。其方に顏は合されぬ」と、兩袖顏にあてうづくまりてぞ隱れける。新七恨の兩眼に淚を浮め大聲あげ、「エ、聞へませぬ旦那殿、我等に顏を隱さるゝは面目ないか耻しい。コレその耻しがりが遲かつた。五年以前に新七を耻かしいと思召さば、御身代は潰れませぬ。まづ斯有らふかと存じた故樣々の强意見。新町橋でお足にかけられ踏れながらも御意見は、親旦那の御恩の報りたさ。女房お半はお身の上を苦に致し、氣病を煩ひ去年の春終に空しうなりました。彼めも元は御家來、お主を苦にして相果るは、下人たる者の本望、聊か悔も致さばこそ。親旦那のお蔭で少のもとで家屋敷、在所龍田の親共も飢凍へぬ程なれども、いや／＼お主は流浪の身、家來の安樂道ならずと、家屋敷田地まで賣代なし、有銀十八貫目、御覽の通り我身には碌な布子も着ぬ體ながら、親旦那の十七年忌は內證でお前から遊ばすと申なし、恐らく江戶屋の追善と笑はぬ程の法事を致し、御出世の願ひの爲京都公家方、折々の付屆油斷もなく、殘る金二百兩いとしや吾妻殿、新町の殘金ゆへ此所に勤と聞き、御兩人の氣を思ひやり、弟の藤五郎が請出す分で沙汰なしに、お二人一所に置ましたらば、貧苦の中のお樂、高いも低いも親たる身の悅びと云ひ子の悅び、お前の御機嫌よい顏を、草葉の蔭の親旦那に、見

寒さ―恐ろしさ
のり返る―仰のけにそる
器用な―立派な
もやつき―ごたごた

れば、得心やしたりけん、叶はじとや思ひけん、目を塞いで返事もせず。「サア只今」とぐつと刺し、止目までは手も弱り、其儘捨て懐中の小判を兩の袂に入れ、階子下れば後より、摑み立つたるその寒さ。寒風肌も縮み胴ぶるひ、半死半生の手負、のり返つてうんといふ、聲に驚き階子より、ばた〳〵どうど落緣の、隅に屈んで慄ひ居る。手負は惱み苦みて、續いて階子轉落ち、うめく聲に妙慶親子、家内の男女我も〳〵と駈出々々、「ハア南無三寶藤樣を切たは、切手が有らふ」と、爰彼處尋ね探して緣端に、人こそと引出せば「是は〳〵吾妻殿、それ取放すな縛れ括れ」と立騷ぐ。吾「いかにも切るも私が切り金も私が取たからは、氣遣しやるな遁はせぬ」と、尤も器用な白狀。「先々龍田の一門衆兄御の方へ、注進をぬかるな」と追々人を走らせける。勝二郎は約束の時分過ると紙子に股引、直に丹波の旅出立にて來て聞けば、吾妻が客を切たと町のもやつき。つつと入て勝「是々亭主、身は江戸屋勝二郎と云ふ吾妻が男。何科なりとも同罪にしてくれ」と、座敷にどうと座しければ、吾妻は泣いて目も明ず、「無分別なことをして、思ふが仇となりました」と、顏をさげてぞ居たりける。町の役人龍田より走り歸つて、「手負の兄御只今是へ御出」と、いふを見れば古への手代新七、木綿布子も物さびて、「御免あれ」と座敷に入り、主從顏を見合せ互に「はつ」と驚く

鹽茶―醉を醒する力

背中に腹―諺、夫にはかへられぬ意を含む

樣とは女夫になり、明日請出さるゝ今宵となり、心中はせまいしその儘置ていかんせ」と、云へどもふら〳〵居睡りながら、七「はて一夜でもお客の中は弓矢の禮儀はづされぬ」と、云ふ中に脇差の柄を膝に押へて、「いかふ更たに寢まんせ」と、云へども柄には氣もつかず、「明日御見なりませふ。鹽茶を飲で寐てくれふ」と、脇差の鐺を持て立つ程に、柄は殘れど下は見ず、目はそら鞘をぶらさげて、ぶら〳〵勝手へ入にける。吾「アヽ〳〵有難い神佛の宛いか」と、戴き〳〵ひつそばめ、立て見ても後より、又誰ぞ來る樣で危さ恐さ右ひだり、足もすはらぬ行燈の我影に愕りして、わな〳〵慄ふ箱階子ぎし〳〵ぎし〳〵鳴る音も、耳にこたへ胸にしみ、氣を押へ息をのみ、やう〳〵惱み登りつき、溜息吐たる女業、我身ながらも興醒る、藤が臥たる北枕、「いとしや科もない人を」と、恐しながら背中に腹、胸先に打跨ぎ、切先差あてどうと乘る。乘られてふつと目を寤す。吾「これ〳〵聲立まい。御身に恨も罪もない。假にも惚てくれた人。殺したふはないわいな。殺さるゝ御身より殺す我身が悲しい」と、淚は刄に傳ひしが、「なふ生て置ては請出して、女夫になるが情ない。私には大事の男が有る。その男と緣切れる戀路の仇となる故に、今刺殺す懷中の小判を貧な男に遣たい。殺生の罪盗の罪、男の爲につくる心。少しは恨を晴れてたも」と、又はら〳〵と泣きけ

いとしらしい―可愛らしい
いはれぬ口上―要らざる口上
渡並―普通一遍

ふか。いや緩りとする間はあるまい。煙草で燻べ殺そふか。醉て先へ此方が死ふ。何として能ろふぞ。鋏刀でも剃刀でも鐵物がな」と、座敷中を差足し、うろ〳〵尋ね廻り、吾「ヤ思ひ付たぞ火燵の火箸、火に燒て喉笛を貫さば、刀も同然」と蒲團をあげて手を入れ、「熱や〳〵」と懷中の服紗に持ち添へ、陸奥の韓紅の錦木や、枝珊瑚珠と燒付たり。「嬉しや冷ぬ間に」と立上らんとする所へ、仁三郎が母妙慶、「吾妻樣まだ起てか」と、によろ〳〵來れば肝潰し、袖の影に押隱し 吾「ハァかみ樣か。私も早寢みまする。冷ぬ間にこな樣も、目の寤ぬ間に暖かに、熱ふして寢やしやんせ」と狼狽挨拶跡先なり。妙慶更に氣も注ず、「お前は果報な妓樣や。曲輪で繁昌仕つめて間もなふ根引の松樣。千年も萬年も藤樣との御中さめぬ樣に遊ばせ。其いとしらしいお氣立ではさめまい〳〵。明日お目にかゝりませふ」と、辭義を陳て立歸れば、火箸は水と成りてけり。吾「ヱヽいはれぬ長口上燒直さん」と、蒲團あげても火燵も冷たし。「ヱィ阿呆らしいなんぼうさめぬと云やつても、炭火まで冷きつた」と、吹つ煽いづ氣をせく所に、二階より仁三郎醉覺の長あくび、客の脇指持なら、が目をすり〳〵階子をおり、「ヤァ吾妻樣爰にか。扠醉ました」と下に居る。吾妻脇差に心づき、「それは藤樣の腰の物。こなさんも先氣の通らぬ。客の刄物預るとは渡並の客のこと。藤

八ツ―午前二時

丹波越―駈落の事東海道名所記にあり

不道化―おどけ

だく〳〵―ドキドキする

仕濟いた―しめた

は氣を嗜み、死を先立て涙を隠す歎きの色こそ哀なれ。吾妻死身と胴を据へ、「これ申し勝二郎樣、死ぬる覺悟に極まらば、死なずに免るゝ思案あり。こなさんは先お歸り、内を仕舞て夜中過、八ツの時分に又ござんせ。金調へて置ませふ。其金持て丹波へ退き、來年私が年前に迎ひに來て下さんせ。心安ふて出らるゝこと。早ふ去でござんせ」と、呀けば勝二郎、「それは至極の才覺。其金は借か貰ふかどこから出る」吾「はて夫は構はんすな。惡い樣には仕ませぬ。早ふ往でござんせ」と、せがめば頷き悦んで勝「是ぞほんの丹波越」と、不道化云ふて忍び出る、氣の愚さも育から憂事知らぬ證かや。吾妻はほんの出來心、ふつと云ふたは云ふたれど、是からが大事の思案。火燵の櫓を談合柱。腹のつかへだく〳〵と胸に踊るを按りさげ、「二階の客を刺殺せば明日の難儀を脱るゝ德。金を取れば勝二郎樣のお爲になる是が德。是程よい事有るものか。足元によい思案、こけて有るのが見へなんだ。殺して退ふ」と思ひ立、目の前ばかり背中を知らぬ、女の智恵こそ果敢なけれ。夜は何時ぞ臺所は夜中を告る鼾も有り。更行く儘に恐氣立、膝の慄ふを踏締々々、階子の口から覗ひて見れば、客は醉て前後も知らず。仁三郎がうはき酒いき倒れては性根つかず。吾「サア仕濟いた」一階子三ツ四ツ上つて見て、「ヤアこりや何で殺そふ刄物が無い。帯を解て絞殺そ

天赦鬼宿日一段上吉日

の芝居へ竹本が弟子が下つて重井筒を語つた。サア是から夕霧代つて重井筒火燵の段。

セリフ北濱邊のよい衆は火燵に水を入れまする。紙子一枚の我等は迚もの事に、火焙になりたい」と蒲團とつて引被る。仁三郎二階より障子をあけて、「申し〳〵吾妻樣、只今暦を詮索すれば明日は天赦鬼宿日、萬事揃ふた大吉日。銀はお身に附てなり、何に不足ない上は善は急げ明日の朝、目出度ふ曲輪を出します筈。その用意なされませ。飲ふぞ〳〵、大きな物で飲でくれふ」と障子引立て入にけり。火燵よりむく〳〵起勝「今のはなんぞ、曲輪を出すとは善か惡か氣遣な。聞きたい」と氣をせけば吾「サアされば夫故胸を痛めること。先度の文にも云ふ通り龍田の藤が事いの。作病發しつ振つて見つ、色々飽るゝ工面して、退く樣に仕掛ても煩惱の犬かして、爰の妙慶挨拶にて請出す談合極まると、聞くから胸が騷ぎ出し今に心が落付ぬ。どふした物で有らふやら、最早智惠にも能はぬ」と、泣くばかりこそ力なれ。勝二郎も泣出し、「扨も〳〵惡い事も續けば續くものかな。五年以前に在所を出で、無量の憂さに遭ふたれども、諦らめつ慰めつ心で埒を明けたるが、命かけた和女を人の物になす悲しさ。二百兩といふ大敵には、弓鐵砲も叶はぬ」と、齒を咬しばり歎きしが、「左右云ふ間に夜が更る。もふ分別は無い所。和女も死や己も死ふ」と、若い同士

一度は榮え云々―謠曲杜若の文句にて末の句より吾妻につゞけたり

うりへぎ―高賣したる儲高

賣らさいでも云云―賣らでも大事なかりし

坂田藤十郎―當時の名優

夕霧―夕霧の手芝居

子を傳ひけり。通ふ心や格子前、耳にこたゆる謠の聲、「一度は榮へ一度は衰ふる理りの、誠なりける世のならひ。 住所求むとて吾妻の方に吾妻の方に、吾妻〱々」と謠ひ忘れた顔つきで、 我名を呼ぶは知た聲と、行燈の影から表を見れば、戀し床しの勝二郎。 飛たつ樣に懷しさ。表には人目あり、夫から廻つてかう〱と、指で教へて招かれて、小暗がりをばそつと拔け、つつと通れば縋つき、吾「なふ能ふ來て下んした。逢たふてならなんだ」と、しつかと抱締め泣き居たり。よい衆の果の流石にて貧苦を貧苦と思はばこそ。勝「此形を見てたも。思へば〱不算用。和女の身を賣する程ならば、三百兩もして遣て、うりへぎの百兩も手に持たがよい筈。 大坂の親方へ二百兩渡さねば、 井筒屋の太郎左衛門と約束の義理が外るゝ迚、差も引もなふきつと堅ふ二百兩に賣らさいでもだんないこと。 此鈍さから此つら。何にも得は無れども、坂田藤十郎が夕霧を、ま一度見たいと思ふたが、此紙子で手夕霧を仕る。 セリフ太夫又逢に來たはいの。サア和女も爰で泣や」と云へば、吾「アヽ泣く分は夕霧に負はせまい」と泣きければ、男も心しほ〱と、可愛や〱、物眞似に誠の涙を紛らかす。 奧二階より手を拍き 仁「禿衆、吾妻樣呼ましや」吾妻樣々々と呼ぶ聲す。吾「それ人が來るアヽしんき、どこへがな。是々火燵へ隱れさんせ」と、蒲團をあぐれば勝二郎、「此夏爰

取しづめ―取りとめ

先に飲込ないー藤が聞入れぬ

ぞ」と、二階降るも勇まねど、表面ばかりの笑ひ顔、云ふて泣くより猶憂し。藤も彌々機嫌よく、「今日は嬉しい事揃。第一和女の氣色もよし。仁三親子の働きで身請の埒が明たぞ。懐中した金子を里に殘いて、和女の身と兩替して、一兩日に吉日極め龍田へお供仕る。サア〱二階で酒々。吾妻はこれのお母へ能ふ禮云ふて跡からをじや。仁三此方へ」と手を引て奥の二階へ上りける。吾妻「はつ」とけでんして「夢見た樣な事どもやな。根引にするの請出すのと、取しづめもない濟上は、十人が十人で思はれたさに云ふこと。何處で帶さへ解ぬ身によもやと思ひ、賴みまする と僞りしを、先は正直喜んではや談合が極まつたか。扨も胸をついたこと誰にどふと談合せん。勝樣からは便宜もなし。サア今でも出ると云ふ時には、泣き口說ても叶ふまい。其際にならぬ先、とんと打明け云ふたらば、義理詰に詰られて、思ひ切るゝことも有る」と、階子半分上りしが、「いや〱ひよつと言出し先に飲込ない時は、勝二郎樣のお爲まで取返しのならぬこと。アヽ云ふも厭なり、言はねば悪し。罪深いことながら今の間にあのお人の、身に妨げも出來よかし。此病が募れかし。今夜の夜が常闇と明ずにあつてくれよかし。身請の時が延したい」と、咎なき天にも難をつけ、歎き恨むる世の憂さ。我身ながらも淺間しやと、とんと伏て泣き沈む、涙も階

ちよく〳〵—猪口にちよつとを掛く
口が上る—惡口が上手になる
午房—八幡の名產
夫も大事か—夫も一向構はぬ

な山城屋、算用だても申にくし。母妙慶を遣まして、割つ砕いつ言はせて、さらりつと埒を明け、只今お知らせ申さん」と、硯引よせ墨をすり、鹿の巻筆妻戀鹿、鹿は春日の藤樣め、果報者め金持め、あやかり者めと騒ぎける 勝「それは大慶先吾妻に逢たい。呼でたも。何所にぞ」与「いつもの二階に御座ります。これ林之介、吾妻樣呼びましや。吾妻樣、太夫樣、林之介」と、呼つても返事もせず。与「是はどふじや。又例の勝二郎といふ淀鯉を、思ひ出して泣いてかな。鯉が付て居るそふな。鯉なら煎餅まいて見よ。いや手拍子を打て見よ」心得たん〳〵たん〳〵たん」と手を拍ば、心浮ねど身の勤、悲しい顔を見せまいと、わざとにこ〳〵わさ〳〵と、二階の口に立つを見て「そりやこそ鯉が現はれた、盃をさしみにせふ。爰へちよくと御いり酒、甘いことじや」と喚きける。吾妻二階に腰かけて、「是仁三樣、たんと口があがつたの。あんまり鯉々言はんすな。鯉も瀧へ登つめ、今ではどふも下はがない。惣じて鯉と云はんすは勝二郎樣故かいな。彼樣は八幡の人、八幡に鯉は有るまいが、合點がいかぬ」と云ひければ、与「それならば今日よりごんぼ樣と申そふか。妓樣にごんぼはいかゞ。ヤア夫も大事か。かがのごんぼと云ふこと有り。そんならいつそう毛ごんぼ樣、追付旦那の引抜ごんぼ、目出度いごんぼ」と座をもてば 吾「エ、憎い口や敲ごんぼに仕たい

しんきのわく―業が沸く

しらが―知らずにかく

起縁―えんぎのよき

ぶせい―精出さぬ事

んすか。男の心の一筋に他へふれぬは、傍から見ても憎ふない物なれど、こなさんと吾妻様とはあんまりで小腹が立つ。しんきのわく程浦山しい。見ぬが増じや。戀のめん〳〵稼ぎじや」と、ばら〳〵立てぞ入にける。仁三郎忙しげにしよこ〳〵と立出、「ヤア藤様いつから爰に御鎮座。手でもお拍きなされいで、夢にもしらがの母者人、藤様の お出じや。吾妻様の御氣色も今日はお快よさそふな。申し醫者の名も起縁の物。始は西の京の道偏と申す醫者の薬で、どうへんに有た所を、昨日から三條の元喜と申す醫者で、めつきり元氣が見へました。御祈禱を本服院息災法印を頼みませふ。銚子々々」と手を拍く。藤「是は〳〵吾妻が氣色快いとは、あたまで善事聞初た。去ながらあの病氣は、彼の江戸屋勝二郎が昔を忘れぬ物思ひ。根引に此方へ取たれば氣がかはつて達者になる。そこには氣遣ないこと。是に付ても一刻も早ふ請出したい。四年の年を三年遣ひ今一年の所を、元金の貳百兩で請出そふと云ふからは、親方も不足ない所。エヽ親子の衆がぶせいな。餘所へ取られて此藤が一分立ず、死なねばならず。今日は金を突つけて是非とも詫て貰ふ思案。耳を揃へて懐中した。是袖口から手を入れて、虚か誠か是見や」仁「どれ〳〵、ホウ〳〵〳〵可愛らしい小判女郎。是はきつい詮索。扨油斷とお恨みなさるれど、前髪もある私が親程

木辻—奈良の遊廓
中年四年—年長けて四年の勤
命がらり—命ぐるめ
しなだれ—はなれぬ
諸分—色の道もよしと掛けたり
沖津白波—伊勢物語の歌をとりて、盗人の如き帮間も連れずとの意をいふ

ひ、袂を覆ひ笠覆ひ、空を覆へば冬の日の、最ど短かくはや暮て、夜は長池の水の泡、水の淀に我もとて、よどみ息らひ明さるゝ。

下之巻

奈良坂や木辻も戀の札所にて、女郎屋揚屋三十三間昔の京の八重櫻、九重薫るこむらさき、小藤を爰の四天王、續く勢こそ無りけれ。哀や吾妻は義理合の金の契約もだされず、此里一番名の高き山城屋といふ忘八へ、中年四年二百兩、命がらりに身を賣て、大坂の埒は明たれど、又傾城とならざらし、竪横沙汰を聞きふれて戀の大和の色好、吉野の花も振り捨る三わの索麪喰付て、買ふ人餘れど賣る日は足らず。中にも立田の藤と云ふ、しなだれ男纒ひ付、揚屋も諸分吉田屋の、仁三郎を定宿にて二階を一間宛がはれ、命有たけ首尾有たけ、金有たけと勤むれば、四天王の名取をも、今の吾妻が下に見て獨り武者とぞ流行ける。藤も在所に稀男、吾妻に深く染附の、龍田や沖津白波の太鼓も連れず今日も又、通ひ木辻の吉田屋の藤「仁三内にか。ヤァ妓様達歷々のお寄合。おてき様の待合、我等が座敷へも少貸して下されかし」と云へば薫小紫、「珍らしい藤様の外の女郎をから

寶寺―山崎にあり
女郎花―吾妻をさす
りんき云々―悋氣辛氣
男山―勝二郎をさす
光る君―源氏物語の主人公
六十帖―源氏物語の卷數
十帖―宇治の卷
はんま千鳥―濱千鳥
ゑひもせず―乾もせぬに寄す
初名月―九月十三夜の月

は若草身をうらみ草。なんの和女に飽たではなし。飽も飽れもせぬ中の戀と命が寶寺。昔の里の寢窟には、伽羅で暖む床の内、起別れゆく曉の、袖から袖に手をいれて、出口の風の寒からず。今の憂身の旅寢には、じつと寄せたる肌と肌、吹わけて吹く山おろし。麓に立る女郎花、りんきしんきと艶きて、くねる心の男山、いとし男を古への、世に引返せ弓八幡。神に暇と伏拜み、東を見れば名にも似ず、月こそ出れ朝日山。山吹の瀨に影見へて、渡つたく〳〵光る君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡り詰十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若ばへ。二に香たきしめて浮舟にかけろふ。紅梅竹川橋姫に手ならひ、我名床しきあづま屋でこれ樣の忍び寢。世も忍ぶ人目も忍ぶ道芝に、駕籠かるすべも白妙の晒干すてふ槇の島。はんま千鳥も友を呼ぶ。我は伴なふ人とても、なき顏隱せ笠取山。隱すとすれど心なや。宇治の河霧たへ〴〵に、あらはれ渡る網代木の、河瀨の水に袖ひぢて、互に影をみづ鏡。吾「やつれさんした」勝「やつれたぞ」唄離れ〴〵のあの雲見れば〳〵、明日の別れが思はるゝ。憂き我が身はいろはの文字よく〳〵。袖に涙のゑひもせず。木の葉散りぬる木幡の里、徒歩で是ほど行くことも、はつめい月や一口、堤づたいの長繩手、續く里々山々も、皆近付の山なれど、今日の憂身は心から、さぞ見ぬ顏と袖覆

供もなき、紋日の夜床引かへて、禿もつかぬ草蒲團。夜見世の太鼓音たへて山寺の鐘の聲、早こう〳〵と響けども、我迎ひにはいつ來ふぞ。「お二人まめで中ようて随分無事で御座舟で、迎に参る男山八幡の弓の弦きれず、便を待つぞ」勝「待るゝぞ」「さらば〳〵」と泣く聲ばかり、耳に殘りて面影は雲に消へけり。

あづま初もめん

勝二郎

春の夜の夢驚かすくだかけの、其しだりをのむすぼほれ、とくる思ひはいつかはと、いはで心にかこち草、根引にせんと言替す、身は捨草の捨もせで、浮名は流れの淀河や。何をたよりに水鳥の、波にゆらるゝ世の習ひ、疎きは人の情なり。廣き世界は廣けれど、京や浪花の住居さへ、せき留られし水車、月の影さへくる〳〵と、彼方此方に汲わけられて、行けば丹波路戻れば大和、行くも戻るも二人連、女夫烏のとぼ〳〵と、昨日のねやの花紅葉、今朝ふる霜に朽そめて、身をこがらしの森の下道。憂しほ踏むもあじきなき、馴れし古郷の草も木も、今の名殘をとゞめかね、まて〳〵と啼く吉原すゞめ、よしみ〳〵の言の葉に、誑され渡る狐河、空に暮せし年月の、榮花は夢の盃の、醉醒枕、それ

春の夜云々―松の落葉六にある歌をとりたり

くだかけ―鶏

心にかこち草―心に不平を起す

木枯の森―地名、身を枯すにかく

吉原雀―よしきり

手ぶり—手ぶちと云ふに同じ

あぢな—變な

五尺いよこの—松の落葉五の卷にある歌、いよは拍子

さまがみやげ—此歌も松の落葉四の卷にあり

のする事は今生で思ひ切たぞ。先の事は知らねども、先は此世の暇乞と、思ふて損のいかぬ事。何れも去らば」と立出る。井筒屋袖を引とめて、「何方へお出なさるゝにも當分の御入用、路銀の餘り少分ながら御懐中」と差出す。手を付け一寸戴いて、勝「志は千萬兩金子は申受まい。親祖父の貯へを冥加も知らず遣捨て、金の罰があたつて金銀に疎まれ、手ぶりになつたる我なれば、此度佶と身を懲し、一錢得難しと云ふことを、我魂に思ひ知らせ、貧苦の修行の稽古の爲、金銀とては貰ふまじ。去ながらはつとり煙草煙草入、煙管の餘計あるならば、一本所望申したし」太「アヽ、お安いこと〳〵。煙管のらうは細くとも、お心を太ふして心中などあそばすな」勝「いやるがくどい。不足なふて死ぬることそ、ほんの誠の心中なれ。金に詰つて心中する勝二郎でない證據、藥も少々貰ひたい」太「實に是は御尤、懐中至寶の一包。藥屋は命堅い石見の掾」と祝ひければ、遣手の杉が太夫樣へ花色繻子の前巾着、人參いれてお餞別。仲居の初は延紙二折、「ちよつと假寢もあるもの」と、あぢな所へ氣をつくる。駕籠の衆の仲間から、三尺手拭抱帶とて進上す。是はかの「五尺いよこの手拭」と歌に謠ひし手拭か。是れは又加賀菅笠締緒あらくと召ませとよ。げにも誠の志、「さまが土産の菅笠」と、踊に踊りし笠よなふ。それは吾妻の花嫁子、是は吾妻が身請の果、腰をよぢらす

堪能—十分

それは定か有難い。胸が些とはひらけた」と、伏拜みてぞ泣き居たる。時に向ふの堤の上、大勢人の喚く音。追放人の作法とて、八幡公文所の役人數多、手々に割竹大地を叩き、勝二郎を先にたて兩手を引ぱり、聲をかけて追拂ふは、忌々しくも三重凄まじし。憂事知らぬ和子樣の、氣を奪はれ性根をとられ、起つ轉んづ足たゝず、橋本の宿はづれ、三國境の板橋にこそ着にけれ。荒けなき聲々にて、役人「サア此所より追放す。京大坂淀伏見境をそへて住居叶はず。背くに於いては見逢次第打捨、何方へも失おれ」と、口々罵り歸りしは、硫黃が島に捨られし俊寛僧都も斯くやらん。往來の人も目を明て、泣ずに通る人もなし。役人歸れば駈付て、吾「是れ私じや吾妻じや。不慮な難儀が出來ました。去りながら大事ない。命が寶袖乞非人の身となつても、二人一所に居る上は堪能ではあるまいか。忘八への出入も叐なお人の男氣故、御苦勞かけずに埒明く筈。樣子は靜に物語る。哀しむこともなんにもない。けくで浮世が面白い」と、笑ふて見せて力をつけ、涙を隱せば顔をあげ、勝「委しい樣子は聞ねども、太夫が殘金埒あくとは井筒屋殿の親切、生中禮は申さぬ。ヱヽ面目ない此勝二郎は下人の罰が當つた。大賢人の新七が意見を用ひず勘當し、身の仇となる惣兵衛めに誑され、新町橋で新七を足にかけて踏だる罰、忽ちあたつて此仕合。身の先行

忘八―揚屋
風呂屋―湯女のある所
じめんづく―面と向きあつて
雫、微塵―共に少しもの意

たのを聞きながら、身の首尾を思ふ様な傾城じやと思ふて下んすは、曲がない情ない、忘八の譯が立ぬとて、兩度曲輪へ立歸り、身の恥は扨をいて、勝二郎様の恥辱は是が何と雪がれふ。こなさんの請合は私が命有る限り、みぢんも難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町であらばこそ。京の島原奈良伏見、茶屋風呂屋へも身を賣て、美事に譯は立ませふ。世に落やうが何様しやうが、勝二郎様の女房になる程の吾妻じや。じめんづくに頼むからは、雫も是に僞りない。再度新町の勤をのがれ、勝二郎様の一分立て下さんせ。是手を合せて頼みまする。ほんに〳〵此よな事降湧ふとは夢にも知らず、伊勢兩宮へ太々神樂、愛宕清水住吉様へ金燈籠、八幡様へ萬燈、其外神々宮々へ、鳥居立ての何のとて、金のいる事厭はずに、神佛への約束も今では違へる身と成果て、人間どしの遠契約は騙りの様にも思はんしよ。夫が悲しうござんす」と、歎き詫たる口説言、眞實見へて哀れなり。揚屋もさすが只者ならず。太「よい〳〵二言と御意なされな。義理詰になつてきた。茨木屋の手前は此太郎が請取た、手形一枚なされいでも、今の涙を手形にして、お前を爰で手放します。お身をどこぞへ片づけて二百兩お立てなされませ。契約お違へなされても此方からは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ。是から互の心底づく」と、切放れたる詞の末、吾「

よみ人志らず—公卿は歌詠む故云ふ

しやうど—先途、目あての事

むげない—無茶な

様の姫君を、勝二郎が嫁に呼ぶ其物入との言ひ立。その公家様のお袖判を僞判し、金の取手はよみ人知らず、大内方より御穿鑿、科人は惣兵衛一味のあひずり十人あまり、粟田口にて獄門にかゝる筈。手代の業とは言ひながら、名指所は勝二郎、存ぜぬとは言譯立ず、金銀財寶山田畠、京大坂方々の家屋敷迄取上られ、着の儘での御追放。何所をしやうどにござらふぞ。腹の内から今日迄、荒い風にも當らぬお身、さぞや途方があるまいと、思へばいとしう存じます」と、語れば一度に手を拍て、惘れ果たる其中に、吾妻一人の物思ひ、「兎角私が不仕合」と、餘の事言はず泣き居たり、井筒屋も溜息つき、「お笑止とも氣の毒ともいふた計りで爲ふ様なし。太夫様は先お歸りなされませ。殘金二百兩八幡の馬おりに請取る筈。惣兵衛とつうくつ致し、茨木屋をば私請合、手形の上で今日お供仕り、斯様の御難儀出來の所、うか〱八幡へ參つても、貳百兩の金子誰から請取り申さんやら、お笑止ながら太夫様を茨木屋へ渡しませねば、我等が手形消へませず。世間にぱつと知らぬ内、早ふお歸りなさるれば、私が爲と申し、太夫様もお首尾よし。サアお歸り」と言ひければ、吾妻わつと泣出し顔をも上ず居たりしが、「むげない言分して下んす。歸れなら歸れで濟む。歸れば吾妻が首尾よいとは、左様した吾妻じやないはいな。可愛ひ男の流浪し

中持ぬ我等しき寢覺が樂じや」といふ跡から、乙「科は何じや知れぬが、勝二郎は追放で八幡は熱る己や見て來た」甲「百兩や五十兩は彼でも取て退ふか」乙「何のいの編笠さへ被せぬもの。請出された吾妻とやらどふなる事ぞ。可惜物安ふて此方へ貰ひたい」何の彼のとの惡い沙汰、口々言ふて通りけり。吾妻ふつと耳に立て「太郎樣今のはどふぞいの。いやな沙汰でござんす」と、氣遣がれば、供の下女駕籠の者まで色違へ、辨當もちもくひさげぢう、喉に詰りし餡餅の案に相違の顏付なり。井筒屋も氣にかゝれど、氣落させじと、「これ／＼粹の樣にもない、あれは人の法界悋氣。太夫樣を見知て、氣遣かけて面白がる嫉で皆云ふ事。ぎふん直しに酒にせふ。毛氈敷け」と勇んで見ても、どこやら體が明樽の、底の心は澄ざりけり。吾「あれ／＼彼處へ泣き／＼走つて來る人は、勝二郎樣のお草履取佐五介ではないかいの」と、言ふ所へ、佐五介息もきれ／＼、「なふ太夫樣、ひよんな事が出來ました。私やなんと致しませふ」と、泣て詞も無りけり。吾「扨こそ噂に違ひはない。ちやつと樣子を咄してたも。泣て居てすむ事か、佶と性根を附やいの」と、叱られて涙をとめ、佐「事の起は皆惣兵衞め、旦那をいとしい／＼と吐いたは己が慾。お金には御一門の封が付て自由にならず。結構な茶入懸軸お家の寶黄金の鷄まで、京で質に置くとて、なんとやら申す位高いお公家

くらはす―なぐる

夢食ふ―獏は夢食ふ獣ゆゑ博労町に續けたり

守口、佐太、占野、枚方等―京街道の驛名

太郎―井筒屋の亭主

皮切―灸のすゑ始めにて事の爲始めにいふ

うんだ―倦だと灸の跡膿んだとかけたり

いとしぼや―いとほしの轉

聞きたい」新「いや是れ計りは儘にして放せ〳〵」「思案聞ねば放さぬ」「くらはするが放さぬか」と、男思ひの女房と、主思ひの男と、誠餘りて摑みあひ、女夫爭ひ犬くはぬ、犬の悋氣に威されて、辻の番太が夢くらふ、ばくろふ町をぞ三重歸りける。請出すといふ其日より、衣裳をも皆町風に、縫はりの茨木屋より嫁入とて、婿は八幡の岩清水、あびせませんと井筒屋の、亭主は送る傍輩の太夫天神餞別を、持せ遣手の杉重に樽の名酒をもり口や。さだの煮賣を見る事も曲輪で成ぬたのしめ野に、紅葉たけ〳〵なべが茶屋、枚方樟葉是も又、吾妻請出す山崎見ゆる、そつこで乘物たてにけり。吾妻乘物の簾をあげ、「是太郎樣、最早八幡も近いげな。兼て鯉樣道まで迎ひに出やんす筈。そこを此方から先越てによつと押かけてはどふござんしよ」太「八幡太夫樣是はずんど洒落ませふ」吾「そんなら頓と菅笠で供やら主やらごちや〳〵は面白」かる〴〵飛おりて「ア丶氣が晴れた、わつさりと嬉しや。そばで山見たも、勤の皮切こらへた故。憂汐うんだは身のやいと」十四の冬より今年迄、夫に染たる風俗は、いかな家にも走り出て、お山見じと目をつける。上から下る魚荷の戻り、歩き〳〵の高咄し。甲「扨々浮世は知れぬもの。江戸屋勝二郎と云ふては、石火矢でも崩れまい長者の家と云ふたれ共、咸陽宮も亡び時、一時の間にいとしぼや。彼も言はば金故。生

はかり—限り

あま逆ま—天地反覆

しやまだるい—しやは罵聲、ぐづぐづするな

傍輩も見ぬ顏し、目をかけて引廻した丁稚小者飯焚まで、詞をかける奴等もなく、馴染とて可愛や、白犬が見知て尾を振てしなだれる。犬に劣つた畜生共恨むまいとは存ずれども、凡夫心の淺間しさ、無念でならぬ女房共」半「エヽ口惜い新七殿」新「但し我々僻言ならば、親旦那の魂魄冥途から蹴殺いて下されかし」と、夫婦は橋に平伏て聲をはかりに歎きしは、不便なりける心なり。醉醒の氣は上る、ぐつとせいて勝二郎、「オヽ親父迄もないこと。身が蹴殺いて見せんず」と、飛懸つて引伏せ、胴骨をさん〴〵に踏付る。女房「是はお情なし」と取つけば新「其儘をけ、手向ひすな。お腹の愈る程蹈せませ」勝「オヽ踏いでおこふか。重て斯樣な慮外をせば、下々に打殺さする、用心せよ。駕籠持て來い」と打乘るも、腹立紛れ譯もなく、後向くやら前向くやら縱に乘るやら横堀を、「急げ〳〵」と走らせし若氣の程ぞ笑止なる。新七は齒嚙をなし、「エヽ〳〵口惜い無念な。あま逆まの事にても、主に踏れて恨はない。傍輩の言なし故踏れたと思へば、腸が燃かへる」と、橋板毆き欄干も握り挫ぐばかりにて、涙に眼も昧みしが、「よい合點じや。思案有り」と、駈出るを女房縋つて、「思案とはどふぞいの。短氣を出さずと待しやんせ」と、引留れば、新「しやまだるい。最前に惣兵衞め斬損なふたも女房故。短氣も短慮もいることか。思案は此胸にある」半「サア其思案が

冥加—引合と云ふ程の意

奉公御恩を送らふ樣はない。律義を我身の奉公にして、お爲にならふと存ずる一念、五臟六腑に染込でお主を大事に存じまする。茂庵樣の御臨終、勝が事を賴むぞ。お氣遣をなされなと請合た甲斐もなく、斯樣にお身を持くづさせ、佛へ言分何とせふ。お墓所へ參つても、顏ふりて戒名を碌に拜みも致されず、涙に沈み居まするわいの。夫さへあるに此盆から、お前からの言付か惣兵衞めが、私が若旦那の勘當の者、お旦那の墓へは參らすなとお寺へ急度言付け、挿た花も取捨て、手向の水迄打明けて、未來に在す旦那にさへ疎ませふといふ事か。お爲を思ふ新七が左程お氣にいらぬは、水と火との合性か、餘りと云へば曲がない。そふではない若旦那」と、主の意見の恨泣、詞を過し推參云ふ、涙は主の藥ぞや。勝二郎大酒の上猶々氣にや觸けん。「ヤア意見云ふも所がある。途中に駕籠より引ずり下し、耻かゝせて意見せよと親者人の遺言か。サア此慮外の言譯があるか聞ふ」と怒らるゝ。新「是申し勝二郎樣、密かに御意見申さふも、門詰も踏されず、取次申す者はなし。よしお屋敷へ伺候して六尺共が手にかゝり、打殺されふば殺されふ、主從の冥加は忘れまいと、朔日廿八日には御門に禮して罷歸り、さもなき時にも月の中に二度三度臺所の口まで參り、傳手さへあらば内證から申上んと存ずれども、さりとは人はつれないもの、古への

名物云々—後にある金の鶏

あ。おけよ、尤も初は惚て居た。けれども今新七めが喰汚して、裏までかやして喰さがいた物を、此方所望にござらぬ。アヽ慮外ながら新七めが口故に、揚屋の屆けも無沙汰になり、若い者の一分を捨ふとした此恨は盡きせぬ。勘當の上の勘當じや。サア駕籠やれ」と、乗んとするを新七飛出縋り付、「お情ない旦那殿、何とて左樣に邪にお聞きなさるゝぞ。新七が御一分を捨たとは恨しい。捨まい爲の御意見。金の事は申さぬ。千兩が萬兩でも金程づつの、お身につくお慰みが有るにこそ。惣兵衛めが計ひにて、もがり共を太鼓につけ、十兩の物入を百兩に附たて、九十兩は分取にして阿房にして笑ひまするが、こなたは御存じござらぬか。吾妻殿の身請の金も、私お家にある時分七百兩と申す金惣兵衛に渡した。其上に此度名物のお家の道具、京三界質に置き、二千兩餘の御借金が出來たげな。旦那には借金させ手代の惣兵衛屋敷を求め、お出入の醫者浪人田地買ふたり銀かして、分限になるが御存じないな。御念比の醫者はあれど、善惡をかぐ鼻がきかぬ鼻缺醫者が、入殘しの目藥でもお目が明ぬか情なや。此新七めが親は大和の貧乏人、幼少の時藤田小平次と申した狂言役者へ、奉公やら養子やらに參つて女形を致したを、親旦那のお蔭でお家へ參り、手代並になされしが、さすが育ちが恥しい。算用算勘存ぜねば、何を

熊手—慾深き女をさす

忝けない—反對に云ふ

お家で新七ばつかり、御身上のがいをなす惣兵衞めと新七と、思ひ替て下さんすはお馴染とも思はれぬ。其上忘れはなされまい。前方私御奉公致した中、お寢間へ來いのお傍に寢よのと人頼み迄あそばした。私は一ツも年重なり、若いお主を唆かす、熊手よ慾よと言はるゝも口惜し。奥様お呼なさるゝ時のもじやくじやも如何と、お暇を乞ましたれば、心ざしを感じた、さりとは女子に奇特者。あの新七といふ者は、親茂庵不便をかけ、我子の如くせられて、兄同然の新七と夫婦にして、一生見捨ぬお約束。其新七を追出し、仇の樣になさるゝは、其時から私を憎さに夫婦にあそばしたか。憎まるゝ覺はなけれども、お心に從はぬ恨を、杵であたり、杓子であたる御仕方か。但は今にお心殘り、悋氣故の憎しみか。夫なれば猶汚い氣。何が惡ふて新七が御意見は御意にいらぬぞ。賴もしうないお主樣や」と、涙を溢さぬばかりなり。實に酒の醉本性忘れず、お半を突退け、勝「因緣咄をきをらう。新七めが意見聞きたふない。己が親父はな、一年に八千兩九千兩宛、三十年遣はれたれども遂に浮名は立なんだ。こちが身代で五百兩や千兩遣ふたら何じや。ナア慮外ながら夫を新七めが、遣ひ潰すの身持が惡いのと、一門一家町年寄庄屋まで觸歩いて、藏々に封を附けさせて阿呆者にしてくれた。忝けないことの。何じや和女に心が殘つて悋氣じや

息杖―息をつく杖

世小路迄お歸りじや。きつう醉て御座んすゆへ、斷り云ふて內からお駕籠にめさせます。氣を通して下んせ」と、云ふより早く門番「皆迄云ふな合點じや」と、窓開いて目を眠るも、日頃の金の威光ぞかし。夫婦すはやと橋詰にて、駕籠の後前しつかと捉へ、「お駕籠待て下され」と、引留れば駕籠の者、「ヤアこりや狼藉して、息杖の胸打をくらうか」と振上る。新「狼藉は致さぬぞ。旦那のお爲に致す事。擲ば擲て毆かば毆け。旦那へ一言申さぬ中は、駕籠をやらぬ」駕「いや放せ」新「いや遣ぬ」と捻合ふ勢ひ、駕籠を横に打明けて、鼾ながらの勝二郎、橋板をころ〳〵〳〵、川へ落んとする所を、お半ちやつと引起し後を抱へて膝の上。一昨日からの醉醒ず、女郎の小袖を打かけながら、舌も廻らぬ夢半分、勝「太夫爰まで送つてか。エヽかたじゆけなんきんの八幡酒には醉はぬ。今のは兼平の能の手、木曾殿が泥田へ踏込れた所。謠「末しら雪の薄氷、深田に馬を駈落し、引ども揚らず打てども行ぬ望月の、駒の頭も見えばこそ、こは何とならん身の果。いやはァなんと面白い事か」と、ひよろひよろ正體無りけり。半「申し旦那樣、是はどふしたお身持ぞ。お前のお影で榮耀する今夜の人も大勢あるに、お駕籠に一人附く者ない。是れが江戶屋の勝二郎樣のお行儀とは言はれまい。私が男の新七にお暇を下され、お出入さへ止められたれど、眞實お爲になる者は

でんど―出る所、お上の事

あつさ―困しさ
ふみかぶる―罪を身に負ふ

浮世小路―駕籠の立場

を、旦那へ吹こみ、まくし出してのけたが、聞けば大坂に狼狽て、此惣兵衛と公事のみやのと吐すけな。あはれでんどへ出やれかし。五畿内をせいて見しよ。今の間にごきさげて心からの非人仇討。どこぞそこらの橋の下新七は居やらぬか」と、口合悪口潜上はり、どつと笑ふて通りけり。新七どふも堪へられず、胸を按り沈めて見ても、律義一偏に眞直に、一筋な若い者、末の事も思はれず、切てくれふと飛で出る。女房抱つき、「是こゝな人、女夫の者が世話やくは、勝二郎樣へ御意見申す爲ではないか。あいつ一人切たとて、お主の爲には何がなる。新七が言分なく身のあつさに切たと、皆手前のふみかぶり。無念を堪へてお爲になり、親旦那樣の御恩をおくる心はないかいの。其樣に短氣では私や心元ない」と恥め止れば、新七「夫も皆合點理が非になるとは知たれども、今の惡口聞ぬか。彼奴が此前親旦那の惡性金を、十四貫目横取して曲事に遭ふ筈を、兎や角己が精力で沙汰なしに事濟んだ。其時には命の親と手を合せて拜んだ。夫から十年たゝぬ間に、少しも爲になりそふな古い手代を嫉み出し、恐くすゞしい此新七に無い難つけて暇出させ、旦那の身代空にして今の樣な雜言。仲上つた頬見れば火に入る事も思はれぬ」と、涙を流すぞ道理なる。時に揚屋の上する女子下男、門番起いて、「少門を頼みます。是は此方の大事のお客、浮

手ぐすね―待構ふる所作
佐渡島傳八―ゐどけの役者
しんぞ―眞に
八十末社―數多の幇間
かさとつて―一番になりて
つゝを―田にこぼれたる籾、使ひ餘しの事

北へ走れば新七夫婦、なむ三枚肩見送りて、口を明てぞ惘れたり。新「それ〳〵そこへ又提灯、今度はよもやはまるまい」と、絫くどるを手ぐすね引、女房しかと引捉へ、見れば色は眞黒に、横肥つたる菊石頰、道頓堀の佐渡島傳八、はつとしらけて立退ば、傳八も膽潰し、「是は君何し給ふ。人違へとは存ずれども、色に袖を引れて、しんぞ忝なふ思ほゆる。ホヽホヽ〳〵、賤も昔は戀を磨き、年中曲輪に入びたり、太夫天神に引づり引張れ、夫で顏が引つつた西瓜の樣な顏なれど、色は黑實ずんと風味のよい男、しんぞ一切振舞たい。ホヽホヽ〳〵」笑ひて南へ歸けり。暫く有つて、井筒屋の能が濟だと出入の者、兵法遣ひ座頭茶の湯者古道具屋、大酒食悅お影を蒙る八十末社、流石の曲輪駕籠されて、雪駄片足の醉潰れ、遙かの後よりのさ〳〵と、彼奴は手代の惣兵衛め、同道は佞人組、能の師匠の富川め、京の浪人軍四郎、醫者はすれども本道守らぬ目藥師なんど、中にも惣兵衛かさ取つて、「なんと何れも旦那のはばを御覽じたか。あれみな我等がさする事。兎角此惣兵衛と肌を合せ、羽翼に付て廻らつしやれ。一期の身代固めて遣ふ。はて旦那の身上で、一年に千兩二千兩はつゝをでも有こと。旦那を名代に立てはどう瞞めふとも自由なこと。かの新七のいきずりめ、お爲顏で旦那をひづめ、家久しい我等を押退け、一人威勢を振はふと仕居つた

蛇—大酒家

鵲の橋—男女相逢ふ事

まじくら—共にの意

遣手のつな—渡邊源次綱にかく

呑と聞たが、今夜も酒であらふの」駕「ア、〳〵ならびもない呑拔。親茂庵といふたも命を酒に替られた。鯉殿の母御ぜも元爰に勤めた人。どちらへ似ても蛇の子孫。夫でもよい衆のしるしには、萬事に達した器用人。能の脇師を手いけにして、九軒で主の座敷能、常住酒で足ひよろつき、三番叟も高砂も、皆猩々の亂れかと、思ひ升」とぞ笑ひける。女房お半も手分をして、見外すまいの目もきよろ〳〵、鼬堀邊吟行來て、夫を小影へ咳きばらひ、招き寄すれば新七合點、そつと寄れば耳を寄せ、半「なふ今迄西口につけて居ましたが、爰へはまだ見へぬか」と呼けば、新「ム、よい〳〵樣子は知れたぞ。まだ井筒屋に居らるゝげな。程は有るまい、ぬかりやんな。人が見れば不審が立つ」と、一ッ所に立もせず、橋を越たり渡つたり、忍び佇む女夫の姿、夜見世戻りが氣を付て、甲「ヤアこつてりと味な事、妓狂ひよりあの方の實入が能ろふ」と云も有り、乙「時分から心中の下地か。又義太夫が口の端に、新町橋をかさゝぎの橋」と語りて行く人も、絶て其夜も更にけり。新「なふあれを見や、中から提灯引舟交くら、禿が謠ふて客送る。そりや是に極つた。和女は駕籠に取つきや」半「こつちへ任せて置しやんせ」と、大門際に待かくれば、「遣手のつなじや羅生門あけてたも」と云ふ。茨木屋の大盡鯉にはあらで雜魚場の人、「すゞ木樣明口駕籠の衆頼む」駕「合點」と

かたむくろ―堅意地

せいだう―政道にて取締の義

一くらあかう―一藏をあけて空にする

とも片づけて思案に落ぬ風俗。新町橋の橋の上、橋辨慶が薙刀の、鞘拾ふたる如くにて、うろ〳〵として立たりしが、ちよこ〳〵と立寄て、「是駕籠の衆、卒爾ながら物問ひませふ。今宵九軒の井筒屋の客は、何處衆の何とした人、まだ爰に遊んでかどふでござる」と尋ねける。駕「アヽされば井筒屋のお客は、隱れもない八幡の住人江戸屋の勝二郎殿、替名は鯉樣、拾萬兩遣ふても、こちとが百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども、新七とやらいふ手代かたむくろにせいだうし、一門衆町所まで頼んで、土藏々々に封をつけ、一分の金も遣はせなんだけなを、惣兵衛といふ相手代、若い旦那の氣を詰させ、煩はせてはならぬと新七を追出し、氣儘にぐはんぐはと遣はせる。鯉が欒を飛で出て、日比馴染の茨木屋の、吾妻をとんと請出し、明日は直に八幡へ、今宵曲輪の名殘じやと、井筒屋で大振舞、何じやは知らず井筒屋の、庭から門まで長持で通られぬ。今夜の物入ざつと積つて二百兩。扨も金は片いきな。有る所には有るものか。私等は夜晝あがいて三百は儲けかねるに、能ふ飲だとて一歩取り、よふ笑ふたとて二歩取り、兩肌脱でこそぐられ、鼻の穴へ胡椒入れて、くしやみしても一角。いかな鯉でも鮒でも一くらあかう」と語りける。新七扨はと恨しく、腹の立つにも主思ひ、「ムヽ夫は聞及ふだ富限者、ずんど若い人じやげな。仰山な酒

ふつゝ云々—客をふり又客にふらるゝにかく
霧は不斷云々—平家にある霧は不斷の香を燒き云々の句の作りかへ
朱雀三谷—京の島原、江戸の吉原
みつ—見にかけて三津の新町を云ふ
野良鳥—阿波座鳥とて錢なき客
瓢簞町テ々—瓢簞の根付を腰に下ぐる
威權ふる手—威權振ると古手とかく
大木戸—新町橋の入口
夫れつら〳〵—謠曲安宅勸進帳の作りかへ
小傳—禿の名
三番太鼓—廓の終りの太鼓にて亥の刻
亥猪餅—十月之亥を食へば病を治すといふ

淀鯉出世瀧德

上之卷

唄 曲輪住居は時雨の雨よ。ふつつふられつ、むら〳〵さめの、まだひぬ露もまだ乾ぬやよや。アヽ霧はふだんの伽羅をたき、晝にもまさる燈火は、月常住の夜見世かや。朱雀三谷もいかなこと、直下にみつの浪花の里、戀も所の氣につれて、萬手廣き大曲輪。色に擲つ金銀は、土か砂場の西口や。思ひほころぶ袖口を、九軒阿波座の野良烏、月夜はなをか闇の夜も、瓢簞町を腰付に威權ふる手の印籠の、底に焚がら吸がらの煙に油煙たな引て、霞が關か東口、爰ぞ浮世のだての大木戸、あけぬは銀のとがしの關。夫つら〳〵おもんみれば、大盡客衆の秋の月は、小判の雲に光り、小傳よびましや長へんじ、驚かすべき夜半もなし。三番太鼓つてんてん、天下は夜なか八ッ過、曲輪は戀の晝中や、駕籠やろばかりぞ寢聲なり。頃しも初冬亥猪餅、小豆織のべんがら縞、羽織の上に手拭おび、頭巾鼻まで顏隱し、女郎買ふべき風にもあらず、さながら用なき體にもあらず、どちらへ何

放し斷入て、「やれ女の腹切自害よ」と、組中年寄月行事、町代夜番が棒ちぎり木、ばつたくさばにをく霜の、墓なき命南無阿彌陀、南無阿彌陀佛疑ひなき、西方極樂淨瑠璃に、語りて哀を留めける。

疵改め―疵改めの時人が切つたとあれば夫の言譯立たずと也

死ぬれば科は一人に極つて、脇指は上り物、外に御詮議は殘るまい。刄物の祟も三代濟む。行末目出度く出世して、親祖父の名字を繼や。サア早ふ往や〳〵」と、深手に息もきれぎれの、血汐に落る涙の體。花は「わつ」と咽返り、半七は猶涙にくれ、「伯母伯父は親同前。張付にかゝるとて、一寸も退ませぬ」と、取つけば甚五郎、「ヱヽ不合點な。其方が爰に狼狽て、伯母に犬死さするか」と、二人を取て突出し、鉤鐵樞しつととおろせば、「なふそんな ら退ませふ。ま一度逢せて下され」と、夫婦は門に打凭れ、聲を揚てぞ泣き居たる。伯母は苦む息づかひ、「ナフ甚五郎殿。人立のない前に早ふ死にたい。止目はどこじや〳〵」と悶ゆれば、涙ながら甚五郎、「女なれども武士の切腹。止目とは勿體なし。介錯せん」と立寄れば、伯「いや〳〵人の切つたと我切たは、疵改めに顯れて、此方の言分むづかしい。急所を教へて下され」と、男增りの自害の體。夫はいよ〳〵心くれ、「爰を〳〵」と我喉笛を、指せば頷き振上る、手も弱りはつたと落て太股に突立る。又振上れば突外し、肩先がばと突き込だり。左手へはづれ右手へはづれ苦しむ顏色。夫は悲しむ南無阿彌陀、南無阿彌陀佛の聲を力に、喉のくさりを一刀、うんと計り目もくれなゐの薄もみぢ、夜明の嵐に散失せし、墓なき最期ぞ是非なけれ。「歎きの聲は何事か」と、向ひ隣裏借屋、潛戸蹴

帶一筋—此下に與へし事なくの語を入れて見るべし

惜ます歎きしは、理り過て哀なり。甚五郎も男氣の、一夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存ぜぬと云ふて此甚五郎が立ものか。見ず知ずにも義理に依て命を捨るは男の役。氣遣するな首切れふが、牢へいらふが皆我科に引うけ、半七に憂目は見せぬ」と、心は利發に逸れども、差當つて相手づく、思案にくれてぞ見へにける。女房は手を合せ、「アヽ情の末とて忝けない。侍衆は斯樣の事を皆御存じ、脇指の因緣を申し、伯母一人の科に落し、こなたにも半七めも、罪を脱れて下され」と、脇指取てするりと拔き、「本のは信國是は下阪。作は替れど燒刄寸尺一對なれば、一家に崇るは同じ事、是故に父樣が人を打て、其刀でまづ此樣に押肌脫ぎ、逆手にとつて左の脇ぐつと立て」と云ふ詞、直に突たて右へさつと引廻す。「是はいかに」と、甚五郎縋付ば、半七夫婦飛で出、「伯母樣狂氣か情ない。身に覺ある故に死に來た半七」と、脇指に取付を突除て、伯「ヤイたわけ者、汝を殺す程ならば、なんの伯母が長口上。自害もする物か。手の惡い事仕たれども、欠落して身も隱さず。伯母婚の難儀を思ひ身を捨に來た心。さすが筋目程あつて、切ても是はでかしたな。汝が父御は我兄樣。最期の時に預りし甥なれど、着替一ッ帶一筋、何を優しき事もなく、預りし甲斐もなかりしに、大事に替る命其方には遣ぬ。皆兄樣への奉公ぞや。伯母さへ

出入の門、盜人は女房の甥、此甚五郎が存ぜぬと云ふ言分ならず。京へ詮議に登つては欠落者と町內へ、付屆にあふては人中で口利れず。死ぬるより外文珠の智惠にも能はぬ」と、脇指かららりと投出し、溜息ついたる計りなり。伯母ははつと胸塞り、扨は半七が身に覺ある詞のはし、思ひ當つて途方にくれ、暫し返答もせざりしが、半七元より覺悟の前。長持の蓋押あけ出でんとするを、睨みつけ〳〵、脇指取あげ、伯「なふ甚五郎殿、私は女子の物の道理は知らねども、ついて廻る身の因果は、大名高家智者學者も免れず。是は正しく半七めが業なれども、半七がして半七はせぬ心。何を隱さん元彼の信國は、常々語りし我家に、三代迄は祟ると云ふ、性にふさはぬ脇指。一目で是はと思ひしが、武士の上こそ刄物の相性、町人職人に成果て、何の咎の有るべき。親もない一人の甥。是をつてに一國のお細工の得意つけたさに、私がさもしい心から、律義またい半七に、惡根性が付そめ、身の大事仕出したも、往廻つて三代目の手に觸しその祟、知つて居ながら此伯母がをし事仕たる其咎め、因果とほかは思はれぬ。恥かしゆござる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る。廿年足ず連添て何を男の爲もせず、身の難儀をかける事、恨にあらふ憎からふ。それが悲しい面目ない。許して下され甚五郎殿」と、夫の膝にどうと伏し、聲も

なし事―惡い事と知りつゝ、働かせたる事

世話やむ—世話やいて苦に病む
あぶ〳〵—ヒケヒケする
今日が暮て云々—今、日が暮れたる計りに門締むるは早し
かやはかくるゝ—色こそ見えね香やは隱るゝの古歌をとり、香やに蚊帳をかく
今の世の廢物—青江下阪の刀は祟りし事あれば用ゐぬ故

の連合甚五郎殿は、武士附合して堅い人。半七も侍筋、行儀強い若い者と、常々自慢し置しに、夫にお山を同道し、初めて對面させられふか。一町北はみな宿屋。二人ながら早ふ往て、甚五郎殿に逢たくば、半七ばかり明日をじや。夫婦にも成果せ、首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此躰見せ、大事の甥を連合に、見限らするが口惜い。此世話やむも大切さ。サアはや〳〵」と氣をせけば、半「お憐みの忝けなさ、涙が溢れ有難し。然らば伯母御へ、一寸内證申す事あり」と、にじり寄れば伯「マア待や。歸られふかと思ひあぶ〳〵する」と、庭におりて耳門の懸金をしやんとかけ、「サア何事ぞ氣遣し。語りや聞ふ」と云ふ所へ、甚五郎遽だしく門叩いて、「今日が暮て門鎖る。明よ〳〵」と云ふ聲に、そりや情なや歸られた。如何せん。借屋の路次へも廻されず。押入には夜着布團、何所へ隱さんかやはかくるゝ。帷子入れて夏過し、明長持に秋の鹿。つまも憧れて諸共に、押隱すこそ哀なれ。蓋を押へて聲立てまいと欠伸ながら、伯「アヽとろ〳〵と假寢の、寢耳にけはしい叩きやう」と、耳門明れば甚五郎、せきにせいたる顏色、血眼になつて駈上り、「ヤイ女房共、甥のとのに掛つて、此甚五郎が身代破滅。命の大事になつてきた。此脇指折紙付正銘の信國を、今の世の廢物下阪にすりかへ、銘を似せて突つけた。先は武家方

り渡しの云々ー刀が出來て持つて行けば御悦の御祝儀有り

に精出しや」と、聞くより二人は手を合せ、半「ヱヽ有難い忝けない。天道のお助け命拾ふた。お花悦びや」花「嬉しうござる胸の痞がずつと下つた」伯「ヲヽ道理〳〵。武士を相手の商賣、大事に思ふその冥加、今日又俄にお屋敷から、脇指について何やら急なる御用とて、甚五郎殿を召に來て、晝過から參られ、今にをいて歸られぬ。定めてお悦びに刄渡しの御祝儀。お振舞が有るそうな。定めし醉て戻られふ」と、云へば半七色違へ、「ムヽ脇指につい て急用とて又呼に來ましたか。サアお花、京から道中云ふ通り、こふ有らふと思ひし事、我は是に待うけ、甚五郎殿に對面し、脇指の御祝儀身に引受て祝ひ、運に依て今夜中にお屋敷へ、召出されふも知れぬこと。和女は此邊旅籠屋に一宿し、明日はそう〳〵親元へ」と、云ふ聲付も悄々と、半「そふしては半七が一分は立たねども、アヽなんとせふ暇乞じや」と、胸に手を組み俯向て、涙を隱す計りなり。お花も涙に聲慄ひ、「聞へぬ事云ふてくだんする。悦びも悲みも、二人が身に引受る約束じやないかいの。甚五郎樣に逢まして、有無の事を聞く迄は、私や爰を動かぬ。伯母樣も女子じやが、男の一世の大事の時、見捨られふかコレ半七樣、むごい事云ふお人や」と、恨み託ちて泣きければ、二人の顔をつくづく見て、伯「其方衆が云ふ事は、何の事やら此伯母は、すつきりと合點がいかぬ。此方

長町—難しにかく
殿當—伽羅甚(沈)に縁あり探り當つる事。
つがもない—譯もない

急ぐとすれど秋の日の、短かきあしの難波潟、京橋より暮かゝり、問ど隱れも長町の、伯母の家作常々の、咄に大方殿當て、半「伽羅細工の甚五郎樣は此方か」と、案明れば、「アヽいかにも是が甚五郎。何方からぞ」と云ふ伯母の聲。半「イヤ京の半七下りました」と、お花諸共つゝと入り、伯「ヤア是は〳〵珍らしい。文の來たは一昨日、間もなふ何の用あつて。ヤ連も有るそふな。誰樣じや是へ」とあいしらふ。花「伯母樣お久しうござんす。いつぞやお目にかゝつた花と申す者。御無事で目出度御座んす」と、腰打かくる二人の躰、心得がたくや思ひけん、伯「ハアよふこそ」と計りにて、不思議そうにぞ見へにける。半七色を曉られじと、「お花こととも奉公の年明、和泉の親元へ歸る道、幸ひ同道致しました。イヤ先づそれはそふ。誂への脇指。先樣は侍衆、お氣に入つたかいらぬか。萬一お氣にいらいで、甚五郎殿や伯母樣に、難儀のかゝる事あらば、其難を私が身に受けふと存じ參つた。其次第が氣遣な。どふで御座る」と言ひければ、伯「アヽ妄な人つがもない。細工がお氣に入ぬとて、何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其上悅びや。一昨日下ると其儘、お屋敷へ持參めされしに、柄まはり緣頭鞘の塗、萬事殊の外御意に入、甚五郎が女房はよい甥を持た仕合者。後々はお屋敷の御用も仰付られ、出入させとの御念比。いよ〳〵細工

の口癖や。今日は姿を町風に、扮すとすれど隱れなき、帶のひらかた近くなる。松原過て河邊を見れば、あれ〳〵〳〵五ツばかりの子を眞中に、乘合舟の女夫づれ、思ひなき身の高笑ひ、餘所のつまごと浦山し。流れわたりの情であろと、網の目にさへ戀風が溜る。おぎの〳〵上風身に染々と、切て一夜は虛なしに、ほんの女夫といつの世に、いはれつ云はん情なやと、抱き締たるそぎ袖も、淚にひたす計りなり。間夫で逢ふたも一昔。それ覺へてか一昨年の、十七日のおぼろ月、宵の我酒にほの〴〵と、二人火燵のじやらくらを、憎や烏に起されて、あかぬ別れの朝より、日文ちぶみの付屆け、いよしごげんと書たるは、ほだしの種か花すゝき、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結びぶみ。方樣まいる花よりと、思ひまいらせ候べくの、わけの酒盃色見へて、わきていづみの思はくは、只逢まして〳〵、又の御見をまづかしく。その言の葉も昨日といひ、今日と暮して飛鳥川、流れの里ははる〴〵と、跡にながらの夕あらし、髮のおくれのはら〳〵はら、共に亂るゝ我心。曇ある身は恐ろしの、お城も近き難波江の、よしあし知つてはまる身を、意見は釋迦に京橋の、此方の森を隱家と、暫く勞を二重晴しける。

帶の枚方—枚方の地名に平きをかく
流れ渡り云々—遊女は無情なれども中にはまゝ實情あるもあり
そぎ袖—角立たぬ袖
我酒—無理酒
日文—常の文
血文—男を恨むる時女の血にて書く文
いよし御げん—戀〳〵お目にかゝつて
京橋—今日にかけたり

下の卷

そら誓文―約束を履行せぬ事

大阪―逢ふにかく

じみな抱帶―質素な風にて扱帶する

山崎―山程有にかく

賢き雁云々―雁は寒を避けて南に行けど我は雪を誘うて山巡りすと也

ども、無いか聞ぬか耳塚の、西に錢座の名のみにて、小錢なければ草鞋も、一足を小判一兩で、買ふて穿身ぞ二重哀なり。

お花半七道行

いくよ〳〵の憂勤、七枚起請そら誓文、日本國の神さんを欺した罪か欺された、人の恨のねたみぐさ、ついに我身の下り舟、乗をくれたる淀堤。淀の河水行く末は、いかなる罪に大坂の、道がどこやら何里やら。身は初雁よ初霜に、寢亂れ姿忍ばしと、前垂とつて丸ぐけの、襷をじみな抱帶、しやんと結んで引締て、歩むとすれど行き馴れぬ、道はかどらぬ女旅。これも何ゆへ男山、作りし罪は山崎の、麓はあれよあはれげに、いつか都へ歸る山。春は梢にいろ〳〵の、花咲く山にと山巡り。となりは靑し夏山の、かしは散るてふ卯の花や。山時鳥山あひの、景色の花に顔つくる、笠を傾むけ山めぐり。秋はさやけき月影の、いたらぬ山は無れども、わけて名高き山うけの、月見る方へと山めぐり。扨又冬は遠山の、霙もてくる雲のあし、賢こき雁は南向、北を後に山をこす。山又山や峰白し。雪を誘ふて山めぐり。巡り〳〵て山姥の、山衆交りの淨瑠璃も、夕べ限り

下阪―刀匠、江州下阪に居る孫六の家筋

圓栗辻―建仁寺の東
だらり―陀羅尼の鐘

れ、卆「ヤア半さんかいの、逢たかつた」と抱きあひ、兎角は涙ばかりなり。半「コレ泣て居ては濟ぬ事。今宵中に大坂迄退ねばならぬ。サアおじや」と手をひけば、卆「マア待たんせ。先刻の小判どふしての才覺ぞ。詮方なさに恐い事などさんせぬか。有樣云ふて落付せて下さんせ」「云ふ迄もない事。此身になつた半七を、粉に叩いても一歩一ッ誰が貸う。先度の脇指三十二兩に賣拂ひ、銘なしの下阪、寸も燒も替らぬを、八兩で買ひ替へ、貳兩で銘を彫せ、拵へ濟して大坂へ下し、其賣へぎの廿兩、たとへ首になるとても、もふ取返しのならぬ事。此上ながらも罪に遇ば我一人、伯母婿伯母にも難義をかけず、和女の行末頼むため、心ざすは大坂。誠に和女の繼父が、盗人と云ふたも虚でない。我身で我身が恐しい」と、語ればお花も身を振はし、「サアそんな事であらふと推量に違はぬ。いとしや私ゆへ種々にお身を狂はする。詮議の時は皆私が業にして身を逃れて下さんせ」半「ハテ罪に遭ふとも逃るゝとも、分隔はないはいの」卆「ほんにそふじや女夫じやもの」と、又締寄せて泣く中に、跡の二階に、「花樣遲い。こりや豆腐に買れてか。迎ひに往け」と聲々の、南無三寶見付られては足元暗き、いせきの石に踏くじき、長き緋絹裏足纏ひ、走るとすれど夜中の太鼓、どん／＼ぐりのつじを出れば建仁寺。「だらりが鳴ぞだらつくまいぞ。駕篭よ／＼」と呼れ

十文―十文錢の裏に波型あれば云ふ

買におかう迄―迄は強辭にて意なし

はぎさん―娥の名に剝ぐをかく

そりやこそ云々―それ見たか

てんぼの皮―ままよ

かり橋―借るにかけたり

姿樣方いかに」と云へば「ヲヽ、是は珍しい。早ふ〳〵」と紙押廣げ、蜘のす御光延紙引さいて錢の高、傳「もみ鬮は惠方果報、後に無理云ふまいぞ。サア今が大事の所」と、鼠なきしてしめあけに、「さよ樣どふじや」「十六文」「お仕合〳〵」「藤さまは」「三十六文」「小めろの林は」「十文」「夫ははまなみさゞ波や、しが樣たつた二文か。お杉はなんぼ」「悲しや己は三百じや。ヱヽ儘よ前垂質に置ふ迄」傳「ヲヽ云やる迄ない錢がなくば布子を、はぎさん島さん是も如來ははづれた。サア是からは花樣、きり〳〵もみ鬮明さんせ」花「アヽ忙しい何ぞいの、私が樣な因果人が、なんの阿彌陀になるものか。これ見さんせ」と押開けば、傳「そりやこそ云はぬか。サア花樣が阿彌陀じや。名代は叶ひませぬ。花姿樣に豆腐買して、居ながら田樂喰ませふ。きつう座敷が晒落て來た。サア面白い」と笑ふにぞ、お花は何がなかこつけに、出たいは心一杯。猶も色目を曉られじと、「アヽ迷惑。そんな事に今まで歩いた事なけれども、てんぼのかは往て除ふ。其間に用意してをかんせ」「ヲヽ用意擂子鉢刷題擂子木しやに構へ、待て居ます早ふ〳〵」花「ハテそこらは合點じや」と姿も下女に、二世かけし男の爲や徒歩跣足、ついに被なれぬをき手拭、急げばまはる、小褄ほら〳〵杉が前垂かり橋を、足もしどろに行過る。半七は番屋の影ちらと見るより、「コレ〳〵爰に居る」と招か

ほうろく頭巾―丸頭巾

庭掃く人―白人に言ひかく、白人は藝なき遊女

紋紗―ものぢやに掛く

歌流金子―俳優中村歌流と金子吉右衛門

長範頭巾―山法師の被る頭巾

前にうけ、芝居の櫓暗き夜も、行かふ人の灯燈は、月もおろかと照渡り、見おろす〳〵、おろす駕籠からぬつと出た。ほうろく頭巾の醫者殿は、藥師如來の引合。つぼ屋の客と脉をとる。妓「それ〳〵花車も亭主も槌で庭掃く人よびに、走る足元おかるじやないか。お玉じやないか。お玉やあい」坊「はて是から呼で屆くものか。わけもない事云はん」妓「紋紗の衣着て、ぞめき姿ののら坊主。後姿見た樣な」坊「ヲヽそれよあれは愚僧が五人組、萬年寺の同宿、忍び戀路の摑みどり」深緑屋の小丁稚が、一中節の川風に、聲も廣がる扇屋の、仲居のまんが供して通る。あれは澤村長十郎。あつたら男を頓て大坂へ下り舟。歌流金子も難波津へ、咲くや此花其花の、噂も戀の種ぞかし。苦のない女郎の仇口を、聞くにも增る涙の露。お花は一切氣も浮ず、四條の河原幾萬人、ぞめきの中に彼の人が、若やと目をも花色の、長範頭巾しよんぼりと、番屋の陰に佇立しは、慥にそふじや。アアちよつと逢たい、云ひたい事も山衆の手前、客の手前も量りかね、床柱に打凭れ、念佛申して紛らかす。料理人の傳介盃を下に置き、「ヤア花樣の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌も古めかし。町方に流行る阿彌陀の光と云ふ事して、御一座の花姿樣方、誰樣にても阿彌陀如來に當つた者が、豆腐と酒と買に行く役人。色里に無いづな騷ぎ。花

親仁を中の―半七とお花との間に新居れば云ふ

茶瓶天窓―藥罐天窓、茶を呑むに言ひかく

皆迄云な云々―そんな事いはずともよしと也

忝け有馬の云々―小唄の意をとつてお花を僧に渡す

仕たが能い。門には大勢人だかり、客の邪魔して貰ふまい。それ男共追出せ」心得太兵衛長兵衛五介、ばら〳〵と立かゝり、無理無體に引出す。お花はわけも正體も、涙ながらに取付を、「どこへ〳〵」と押分る、親仁を中の關守の、雪駄片足にならぬ草履、足にはたらぬ半七が、髻を摑んで引立しは、目もあてられぬ次第なり。太「サア親仁も先づ歸つて、諸事談合は明日の事」九「ハッアそれもそふ。然らば明日參りませう。申すまでも及ばぬが、花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者、汝明日來てなんとする待ておれ。エヽ息せい張て喝が渇く」と、ごぶり〳〵と熱ばなの、茶びん天窓を振立て、河原を西へと歸りける。斯る哀の最中、二階の階子ぐわた〳〵〳〵、藪から坊主の佛頂顏、坊「お花そこに何して居る。先の押への盃は、いつの世に戻る事。惣體今夜は和女が顏、浮々せいで酒が呑ぬ。氣を替て西石懸の關東屋で騒がふ。太郎山衆貸してたも」太「ハア殘りの子供は西石懸が天竺へも御同道。お花一人は我等が內、手放しては內證に氣遣ありまの」坊「いふな〳〵。皆迄云ふな湯のだんこか。湯治するなら遣ひ錢、見事な事か」と金三兩、衣の下より取出せば、太「是こそほんの忝け有馬の湯のだんこ、やれゆのだんこゆのだんこ。今はありまのゆのだんこ、しよんがゑ。西石懸へ」と騒ぎける。同じ所も西側は、祇園丸山

しゆす鬢—鬢を出して固めたる鬢

天窓付云々—頭付金持風に見ゆれど內證は貧乏

べかこ—目赤うの轉にて赤目ぢやとなり

房。すべい奉公仕舞ふては、繼父殿でござらふが、もがり殿でござらふが、主のある女房、分別して物を云へ」と、せきくる顔の青疊、叩き散して詰かくる。九「ムヽウ刀屋の半七とは其方か。どれ顔見よう。はれよい男の、江戸元結にしゆす鬢、天窓付は兩替町、內證は曾我殿、見せかけ力身をいてくれ。此年迄敗毒散一服飲ぬ此親仁、ゆすりはたべぬ。アヽ慮外ながら、親も許さぬ女房とは、粟田口へ往きたいか。此娘女房に持てば小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへない態で、なんじやお花を女房じや。いきがたりとは其事。いつそ手を能ふ巾着か、屋尻切れ」とぞ喚きける。半七ぐつと急あげ、「ムヽウよふ云ふた。小豆粒は持ねども、小判と云物持て居る。來年の給分廿兩渡すからは、お花は身が女房」と、紙入より金廿兩取出し、「サア金でした小判と云ふ物、近付になつてをけ」と、眞向に投つくる。九「ヤイ半七、あの娘はまだ五十年が百年が、顔に色氣の有る中は、奉公さして喰ねばならぬ。千兩道具の娘な、廿兩の目腐金で、女房に持ふや。べかこ、まあなるまい。何所で盜んでうせたやら、後の詮索喧しい。汝に呉る」と投つくる。半「イヤ金貰ふは好みがない。汝に呉る」と投返し、投つけ打つけ摑みあひ、お花は「わつ」と泣出す。太郎左衛門つつ立、「コレ半七、お花はこちの奉公人。親仁とのせりふなら、何所ぞ外で

盗人の晝寢—謎、晝寢るは夜働く爲

がんどう—強盗

もがり—かたり

を言はんする。勤する身の親達は、どの口聞ても可愛や親ゆへ苦勞をする。定めの年も近づく、屆いた男を見定め、末の片附心がけ、身を安樂にして見せいと、云はぬ親は御座らぬ。節季々々にせびらかし、足いで又年を切まし、男に迄添せまいとはあんまり酷ふござんする。ほんの親より繼父は猶大事と嗜み、隨分孝行盡せども、こなさん私にみぢんも憐れみはござんせぬ。殺しなりと何樣なりと、分別次第にさあんせ。半七樣と挨拶切り、勤はせぬ」と計りにて、人目も恥ず大聲あげ、身を悶へてぞ泣き居たる。傍若無人の繼父冷笑ひ、「よふ吐すな。盗人の晝寢も當がある。汝が母に何の見込はなけれども、汝を賣て喰ふ爲女夫になつた。今の詞は誰が教へた。半七のすりめにならふたか。べり〳〵しやべる頰げた、蹴放いて仕舞ん」と、武者ぶり付を井筒屋夫婦、「年の内はこちの物。疵付させぬ」と捥放す。花「思ふ男に添れぬからは殺しや〳〵」父「ヲ、殺しかねふか」と、擲合捻合大喧嘩。破れかぶれと半七、裾引括げ井筒屋の、庭へつか〳〵つか、「柄卷屋の半七」と聲をかけ、九兵衛を取て突のけ、眞中にどつかと座り、半「コレ親仁、其方はお花が繼父、すにつけ紛につけ憎いのも理り。此半七をすりの騙子のがんどうのとは、いつ騙りした盗みした。半七が目には其方を人賣と見たもがりと見た。よし夫は兎も角も、お花は己が女

打みしやいでも—打ち潰しても
壁に馬—諺、火急に云ひてはの意
孤被り—乞丐
つこど聲—尖り聲
さもしい—淺ましい

りの拂ひさへ埒明ず、東ふさがりになつた者、打みしやいでもつぶ三文ないは知て居る。あの樣なごくどうと腐り合た、お花が行末流浪は知れた事。少さいからの馴染なれば、よい事聞く樣にはござらぬ。どふぞ意見でも召れぬか。壁に馬乘かけては明べき埒も明ぬもの。前びろに手形しやう爲に、呼に遣た」と語りける。門口には半七、聞けば悲しさ無念さの、格子の柱噛ひしぎ、齒を喰しばり泣居たる。親仁は橫手ちやうど打て、「扨々苦々しい。親方殿にお世話をかけ、不孝者と申そふか。その刀屋め知て居る。無賴者の大將孤被りの下地。イヤ花めはどれに居る。爰へ來い用が有る。引ずりに往てお客の前で恥かゝそうか」と、昔作りのつこど聲。お花は人目の恥かしく、「アイあの盃藤さんさよさん預かつて下んせ」と、言すて降る箱階梯。花「ヤア父さんか。夜更て何しにごんした」と、傍へ寄るを突倒し、父「ヤイ不孝者、親方殿お話しで一から十迄聞届けた。半七めと云ふ騙子めと夫婦にしては、年寄た此親が鼻の下が干あがる。廿兩と云ふ金が天から降るか地から湧か。かたりめが挨拶はらりしやんと切てしまひ、年切增て奉公するか。否と言へ分別有り。サア〳〵どふじや」と腕捲り、摑み付くべき顏色なり。お花は「はつ」と胸塞がり、暫し泪にくれけるが、「なふ父さん、朋輩衆は內證、客さん達の手前もあり。さもしい事

心の水もかへ干す―道樂をしつくす

きんか頭―禿頭

たつみ上り―居丈高

すの蒟蒻―何やかや

二貫目云々―金一兩に六十目替の處物價騰貴故廿兩に二貫目も出す

おだまり。あれは我等に甘へるの。腹立所が猶うまし。嚊衆二階へ連ておじや。今夜は妓衆の惣揚見事な事か。古手の肴取をいて蒲焼一種で呑明す。鰻四五本さかせに遣や。南無阿彌陀佛」と騒ぎ立、皆々二階へ上りける。既に傾く宵月の、夜もはや四ツ。半七は銀の才覺ならず者と、茶屋にはせかれ、親方に見限られつゝ筒井筒、心の水もかへ干て、流れ歩きにとぼ〳〵と、格子の影に身を潜め、お花が便を待居たる。爰に誰とは白髪まじり、きんか天窓に無用の灯燈、門口にてふつと消し、「ハァ太郎左衛門樣お宿にか。花めが父西陣の九兵衛でござる」と、たつみ上りに言ひければ、亭主夫婦、「ヤァ親仁來てか。こちへこちへ」と茶釜の前。太郎左衛門顔顰め、「此頃段々云ふ通り、そなたが娘お花が事、そもそも小めろの時分から、手形の表丸七年、親方に損をかけず、追付年季も明くぞや。なれども勤のならひ、小間物屋の煙草屋の紙屋で候、呉服屋で候の、すのこんにやくのと借錢が今の金で七八兩。その上親仁も長者ではなし。あの子にかゝる身でないか。がらり廿兩ま一年切まし、居なりに居れば借錢も先其分。賣買高い此節貳貫目ぢかい廿兩、其方が手取に濫まれば兩爲と思ひ世話やけども、かの柄巻屋の半七と云ふ蟲が差て、何の彼のと入性根、お花が一切呑込ぬ。是からは勝手次第。半七と云ふ職人の弟子、爰らあた

名は堅く—石懸の名は堅けれど遊廓故人は和ぐ
ぽんと町—ポンと沈むるにかくなす
半—半七
やつち—八つ乳房ある猫皮の三味線
光滿寺—來んにいひかく
撞木杖—丁字形の杖
山葵おろし云々—おろし金にてむき玉子を摩る如し
花車—青樓にて諸事周旋する女

中の卷

名は堅く、人は和ぐ石懸町。前には戀の底深き、淵に憂身をぽんと町。都の四季の月花を、爰にとゞめて通路や。馴染々々の色遊びの、中にお花は忘れても、忘れがたなや刀屋の、半と深きつま戀に、なつくやつぢの繼三味線、心くらべの連引に、思ひの色を忍び駒、忍ぶに餘る涙かな。浮氣烏とそやされて、月夜も闇も此里へ、光滿寺と云ふ坊主客、お花に馴し鶯の、ほけきやうとも念佛とも、知らぬが佛の戸帳ぞと、井筒が暖簾撞木杖にてひらりと上げ、「太郎内にか。四五日お目にぶらさがらぬ」太「ヱヽ珍しいどつち風が吹たぞい」坊「イヤ〳〵どつち風でもない。今夜はしよざいの無常風。沙汰はない事葬禮の戻り、ちよつと寄たし心はせく。どふせふか斯ふ燒香場を、りゝに遣てすて、引導も何云ふたやら。不便や今日の亡者も、碌な所へ往くまい。是もお花へ心中」と、雪の頰さき遠慮なく、髭口寄せて頰ずりは、山葵おろしにぬきの玉子、痛そな顏の痛々し。お花が浮ぬ顏付に、花車も亭主も氣の毒がり、「コレお花どふぞいの。お寺ならば大黑、爰ではわつさり惠比壽顏して見せましや。サア笑やいの」と迫立れば、坊「アヽ太郎おだまり

見世さし時―夕暮
お秡―蛭子講の祭日、商家は十月廿日、正月十日
緣でがな―緣もあらば
しんこ―糝粉餅、お花に振舞へと也

逢ふも此の不思議。武士羨しと思やんな。一言の咎より、親祖父の命を絶ち、子孫まで零落しは、前世の業とは思へども、愚痴な心に淺ましい、此脇指がないならばと、科ない刄物に恨が殘り、折ても捨たい氣なれども、今では大名のお腰の物、家の敵の此脇指、主人の樣に撫擦る、その時々の身過ほど、悲しい物はなきぞとよ。子にも甥にも唯一人、奉公大事に勤めてたも。いとしの身や」と搔口說、膝に凭れて泣きければ、半七も伏沈み、お花ものかぬ身の上と、語るも聞くも主の內、頷き合つ呫きの、忍び泪ぞ哀なる。伯「ヤアうかく\咄してあれ見世さし時。伯母は直に伏見まで、夜中でも船はある。來年のお秡には必らず下りや。此脇指の拵、注文の通り隨分急いで下してたも。旦那殿內方樣へ能樣に賴むぞや。お花女郞にも緣でがな、又頓てや」と出ければ、花「イヤ私も東、道までお供致しましよ」伯「ア丶折角來て素戾りか。これ半七伯母は粹じや。跡でしつぼりと咄しやいの」半「イヤく\別に咄す事もござりませぬ」伯「そんなら祝ふて口濡して去しや」半「イヤ最早お茶も飮ました」伯「ハテ茶ばかりで濟むものか。しんこの樣な物なりと、茶の子甥の子、のこく\振舞や半七」と、二人引寄せ寢所の、障子の中に押入れて、伯母は氣とほり堀河通り、二條通りの高瀨舟、直に大坂へ 三重 下りける。

すけん尺―刀の長さ

木殿と張合て人中で恥辱うけ、あれでも武士かと言囃す。此脇指を買いでは、一分立ぬ祖父様の、武具馬具衣裳夜の物まで代なして、三百貫の折紙代一倍まし、二百拾兩に買求め、直に中心に一字銘、高木に勝との心にて、風と云ふ字を彫記し、明れば九月十五日、登城の道に待うけ、高木遣ぬと聲をかけ、尋常に討おほせ、屋敷へ歸つて祖父様は、娘子供に暇乞、命に替し此信國、必らず人手に渡すなと、お腹へぐつと押立て、右の脇まで一筋に、唯一言の義に依て身上を果されたり。其方の父様は、伯母が爲には兄様、その折しも江戸番、直に江戸より浪人あり。永々の憂苦勞、悲しい暮しが病となり、彌憂き其中にも、遺言にて此脇指、乞食するまで離すなと、藥も飲ず、祖父様の第三年同じ月に病死ぞや。悲しいとも憂いとも、情なやお袋も又歎き死。跡に殘るは伯母と其方、まだ九ッの頑是なし。伯母が心を推量あれ。三年に三人まで、同じ月に死ぬる事、不思議と思ふ氣が付て、刃物の相性見る人に、目利して貰ひしに、祖父様父様同じ火性、刀は水の流れ燒、以ての外の不吉の脇指、寸は一尺四寸五分けん尺は災難、是を其儘持ならば、三代迄は祟るとある占に驚いて、捨賣に賣放し、廻り廻つて十三年め。お屋敷方より此脇指拵へ仰付られて、孫子の其方の眼にかゝると、はや親方の打擲の難儀に

親は泣寄―諺、親は泣寄他人は食寄

お持砲―將軍の鐵砲を預り旗本を警むる役

とりうり―取次いで賣る

齒も立ぬ―柄にもなき

人の命は有るまいもの。有難や忝なや。愛宕參りの一驗、佛神のお蔭ぞ」と、意見も親は泣寄の、二人が肝に堪へつゝ、泣くより外の事ぞなき。伯母は重ねて、「やれ半七、泪ついでに今一度、泣ねばならぬ此脇指、見知てゐるか」と差出せば、半七棒鞘の柄引ぬき、中子を見れば信國、裏目釘の穴際に、風と云ふ字の一字銘。横手を拍て、「是は扨、我家の重代ぞや。親の秘藏が年を經て、巡り來るも不思議なり。二度武士に立返る、瑞相なり嬉しや」と、推戴く脇指を、伯母引とつてからりと投げ、「なふ情なのさぶらひや。武士になれとて見せはせぬ。此脇指故、家筋のかう零落た因緣咄、小耳にも聞きつらん。お花とやらも繫がる人、悲しい咄の一通りを聞てたも。もと我々は伊勢の龜山者。先祖は猪瀨文平とて、あの子が爲には祖父樣、お持砲の鐵砲大將百五十石取た人、おなじ家中に高木宮内とて、八百石取る旗頭、互ひに無二の中なりしが、上方のとりうりが、此脇指を賣りに來て、諸朋輩の附合に祖父樣も望みにて、買求めたい心ざし。彼の高木も望をかけ、代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興、とは云ひながら高木が麁忽、文平お身の身代では、高い物じやがお買るかと、ふつと云ひしも互ひの不運。苦笑ひにて一座は濟み、その取沙汰の國一杯。いはれぬ猪瀨が齒も立ぬ、刄物好して高知行の、高

みしらした—悲惨な目に逢はせた

ちと行つまつた—分別の道なく辛い

厄體もなき—埒もなき

身をうつ—身を棄つる

け。むつかしからふ己は出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ勢ひ口に、伯母をも知らいでみしらした」と、足早にこそ出にけれ。跡見送つて半七は、伯母の前に手を支へ、「何にも態と申しませぬ。面目ないと有難いと、胸は二ッに裂ます」と、悔み歎けばお花も涙に染々と、「私は四條石懸町、井筒屋と云ふ茶屋に花と申す勤の者。半七様とは末々まで面倒見あふ契約に、ちといき詰つた憂ふしの談合に、逢いで叶はぬ事あつて横着な此有様。伯母様なら大事の甥を、唆かすとのお憎しみ、そこも許して下さんせ。いとしいが只因果ぞ」と、共に嘆ちて泣きければ、伯母も同じ涙にくれ、「そう見たく〱。連合は大坂で伽羅屋といへば、町によい衆屋敷方、人に知られて世の憂無情、此伯母とても知つて居る。色事は若い役、此上にどのやうな、生る死ぬるの場になりても、厄體もない氣を持つまいぞ。世間多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて、悲しい事酷い事、そこを死ぬが心中ぞや。眞實男可愛くば、五度逢ふものを三度逢ひ、二度を一度になす時は、親方も機嫌よく、戀に身をうつ事もない。二親もない半七、伯母一人甥一人、元は知行も取た筋、職人の弟子と朽果れど、可愛ひとも不便とも、思ふ者は此伯母一人、末かけて頼みます。今日伯母が登らずば、二

合點せず―了解せず

ついど―とんと

まんまとくひ―甘く欺かれ

けんどん―慳貪に蕎麥の名を掛けていふ

かふする間に思案して、伯「ヤア、こりやお吉か。そなたは此所へどふして來た。コレ申し旦那樣。あれは私が妹」と、云へば旦那は興さめ顔。半七は猶合點せず。花はきよろきよろ狼狽る、袖を扣へて、伯「コリヤ妹、ヤイお吉是姉じや。姉が顔を見忘れたか。狼狽者」と、睨つけ、目まぜで知らすれば、やう〳〵と心附、花「ハアほんに姉樣。姉樣々々じや」と、云ふ聲慄ふ計りなり。伯母は色目を曉られじと、「五條の木賃宿へ行きはせで、姉さへついど來ぬ内へ、騙子らしいこと云ふて來た故にこんなこと。旦那樣のお出じやと御覽じたも御尤。今日も愛宕で私をお袋とはか云ひませぬ。それも道理じや。あの人は腹がはりの兄弟で十五違ひ。半七が爲には伯母なれど、年は甥より二ッ下。伯母甥の好とて、親うするを知らぬ目で、女夫と見るに咎はなし」と、非の入りそふな事どもを、云くろめたる情の程、二人はあつと嬉しさも、夢に夢見る如くぞや。主の石見まんまとくひ、「ムヽウ二人ながら伯母御か。よい年して不調法。過まつた免してもらを。伯母御怪我は無つたか」と、脊中按れば彼方向く。主「ヲヽ若い人の道理々々。そちらな伯母樣頼みます。機嫌取て下され。是半七、言分してくれ」と、もじ〳〵と勝手へ出、「皆の奴等うつかりと、なぜ茶漬でもして出さぬ。腹の立た揚句じやに、けんどんを取りに遣れ。マア盃を出してを

いきずり—いきは罵詈、ずりは拘泥

御禮申—覺えて居れを反對に云ふ

「是は此方の商賣。心得た」とずつと立て、「是伯母御、戀しがらるゝ甥がざまを見せませふ。暫く其處に」と云ひ捨て、思ひ掛なき一間の障子、蹴破つてつゝと入る。二人は「はつ」と驚いて、狼狽廻る胸ぐら兩手に摑んで、圭「ヤイ半七のいきずりめ、よふも〳〵親方を踏附たな。あの女が來た時からござりんすが呑込まれぬ。りんすの正躰顯れた。お山やら惣嫁やら、厚皮頰な晝日中、大坂の伯母で候と、目利の家へ似せ物を、ぬく〳〵と寢所へ迄手引させ、主に一杯、汝めは甘い所を喰ふたな。親代々の刀屋を太鼓持にするのみか、座敷を揚屋に仕くさつた。お禮申す」と突倒し、えさし箒追取て、さん〴〵に打敲く。伯母は此躰聞くよりも、はつと人目の恥かしさ。憎うもあれど甥子が難儀、思ひやられて何とがな、此場の首尾をと氣を碎く。半七花は身の科を、云ひ晦めんと眞顔にて、半「申申旦那樣、お氣が違ひはしませぬか。私は兎も角も、伯母者人を打擲あり。必ず後悔なさるゝな」と云はせも果ず、圭「ヤア盗人猛々敷く、其姿になつてさへまだ惣嫁めを勞はるか。主の身代空になし天道をかすめをる。ヤイ天罰と云ふもので、大坂の伯母が登られた。目の前へ連ていて、敲き殺して腹をいる。サアうせぬか」と杖振上、はた〳〵と打つ音に、伯母は悲しく走りより、「旦那樣暫らく」と、取附ば振放し、縋りつけば突倒し、と

ひの上云々—樋の上の名物昆布

いはれぬ—いらざる

信國—初代山城の刀匠名は了戒

内にも伯母、騙子か狐に極つた」と、不審がるやら怖がるやら、中にも亭主は一理屈、「ざはざはと囂しい。奥へ聞へりや詮議がならぬ。默れ〳〵」と小聲にて、「表の伯母御通らしやれ。爰へ〳〵」と云はるゝにぞ、綿帽子取て從容に、伯「是はまあ〳〵結構なるお内方。ついしか御出入申さねば、何方樣が誰樣やら、コレ其所な前髪殿、盆一枚貸つしやれ。私が事なりや心迄、奥樣へ上まするひの上の切荒布、花の都へこんな物、お恥かしや」と差し出す。伯母の年ばい格好を、見ればどこやら面相も、半七によく似たり。扨は奥な似せ物めと、思へども念の爲、主「是は〳〵いはれぬこと。女房共は寺參り、戻つたら見せませふ。してつきも鹽もなふ半七に、何用有て登られた」と、云へば伯母は打笑ひ、伯「いや半七にさのみ用もなけれ共、旦那樣へ少しお頼み申事。連合甚五郎登らるゝ筈なれ共、お屋敷方の御用は多し、飛脚でも如何とて、扨私が登りし」と、下人に持せし風呂敷より、棒鞘の一腰を取出し、「是は是信國とや。去大名の若殿へ藏屋敷から上らるゝ、大切な拵物、大坂にも彼是と職人衆も多けれど、京細工と申甥子が爲、内方へ頼みます。注文は此通り。さぞ方々の請取、御忙しいは存じながら、どうぞ近々に頼上まする。此次手に半七めが顏も見たさ。何やかやに登りました」と差出せば、石見は脇指注文見合、

おこゞ—御飯、俚言集覽にごごと二字濁云々
しんどう—せつない、中國方言
色さらしな—姨捨山の歌と渡邊綱の伯母とを寄せたり

下地は好—諺、逢ひたきお花が我側に來るを云ふ

山を一息に、嵯峨へ下たりや仕合と、釋迦樣の開帳の、相伴やらおこゞやら、旅籠屋で支度して、直に是へ」と出次第の、口は手管に馴々しく、「皆樣御免ァ、しんどう」と腰かけて、煙管取手も粗略に、「皆樣半七の朋輩衆か。しんくな仕事で御座りんす」繻子の肌着に色さらしなの、伯母と名乘て刀屋に、見するは迂散物なりし。主「ソレ喜八伯母が逢に登られたと、半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進ぜぬか。幾人をつても氣が附ぬ」と、云ふ内に半七は、そつと起て障子のすき、覗けば馴染のお花なり。半「南無三寶扨は内々苦勞にした、慾づらの繼父めが、年切增のもがりごと、急々にせがむと見へた。其工面に來たそふな。何にもせよ出過ぎたこと。逢も危なし逢はぬも又、仕舞の附ぬ我身ぞ」と、夜着引被り生たる心地はなかりけり。親方は正直一ぺん、「半七はなぜ出ぬぞ。頭痛でまだ起られぬか。他人では無し、なふ伯母御、寢所へいて逢はつしやれ。お山狂ひで酒やら何やら過る故、煩ひ暮して物も喰はぬ。少意見して下され。そりやそこへ案内せい」と、下地は好に据る膳、甘ひ首尾とぞ成にける。やゝ時過て是も又、愛宕參りの花お札、風呂敷包下人に持せ、女「刀屋の石見樣とはこなたか。大坂甚五郎が女房半七に逢ひたい。伯母が來たとおつしやれて下され」と、云ひ入れば家内の上下愕然して、「ヤァこりや何じや。門にも伯母

愛宕詣に—松の落葉に有る句を取つてお花の身の上を說く

よ盛り—若盛り

中ごと正銘—眞實深い中と云ふを刀の中身にかく

ぼんぼり綿—綿帽子の薄く透したるもの

ひねくろし—老くらし

御座りんす—ござりますの里詞

忌月—九月は忌み愼むべき月

山崎—山程あるにかく

叱る心も拍子ぬけ、笑ひ暮せし秋の日の、西山近き染浴衣、愛宕參りに袖を引れた、是も仇なる世の勤め。四條の水に名を流し、身の憂數を積あげし、石懸町の井筒屋のお花、よ盛り戀盛り、身を賣品はかはれども、刀屋の半七と深い中ごと正銘の、互の誠とぎ入れて、締た心のもろひねり。其柄糸のほつれそめ、我親ざめの情なさを、問ひ談合も中絶へし、いとし男も親方がかり、首尾はどふぞと案じほれ、顔の見たさも遣瀬なく、駕籠舁雇ふて草鞋がけ、浴衣を假の旅出立、ぼんぼり綿もひねくろしく、背中に皺の寄るべなき、石見の見世へ花「頼みませふ。ハヽこりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七殿に、一寸逢ひたふ御座りんす」親方ぎよつとし、主「はていかふりんす〳〵と云ふ女子じや。和女は半七が女房か」花「ハアつがもない私は大坂者、半七が伯母で御座りんす」主「アレまだりんすじや。ムウ大坂の伯母御とは、伽羅細工の甚五郎の内儀か」花「アヽ伽羅々々何かのお禮にとふ參る筈なれ共、主は細工の人だから、貧な世帶の隙なしで、今日迄の御無沙汰。大事の甥が出世の門、忌ひ月を心掛、愛宕かけての登舟、乘合の窮屈さ。とろ〳〵と寢よとすりや、後からせゝるやら、前からは毛の生へた、大きな足を突出すやら、齒切をするやら寢言やら、可笑いことの數々は、山崎から連もあり、あがつてお

月の御用じや合點か。黒鞘が出來たらば、烏丸殿へ渡しておじや。一口屋のはみ出し、猪熊の革づか、なぜに遲いと毎日二三度使が走る。醒が井の親粒もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下細工菖蒲作りの拵も、五月からの誂へ、何として出來ぬぞ。長刀直しを硏だらば、辨慶山の町へ持て往け。兩替町の銀作り、御池の町のふち頭、小川通りのせかいらぎ、今日明日に持たしてやれ。さつきに來せた下の町の酒屋のかみ、入婿が入る引出物にしたいが、娘が望む道具じやと、大切先の大刀物、身ばかり買ふて去れたは、後家鞘に極まつた」と、堅い親仁の輕口も、刀屋とてや古身なり。重手代の忠二郎、旦那の前に帳面控へ、左介喜八は算盤の、さどんの九月節句前、算用の高見合して、主「ヤア此半七の大のらめ、帳面も埒明ず、今朝から爰へ頬出しせぬ。何所へうせた。又祇園狂ひか宮川町か繩手か、朋輩共が知つておろ。詮索せい」と喚かるゝ。手「イヤ半七は昨日から頭痛するとて鉢卷で、小座敷に寢て居まする」主「なんじや頭痛じや。若い身で又しては、頭痛のつかへの何のとは、皆茶屋酒が過るから。粥でも炊いて喰はしたか」手「アイ粥の事は扨置き、おも湯も咽へ通らぬと云ふて、やう／＼と今朝酒の燗して飲んで見て、どふでも色のない酒は飮まれぬと、苦い顏しながら中椀にたつた三杯」と、云へば主も興さめて、

黒鞘—黒の緣に烏丸

はみだし鍔—楕圓形にて小柄をさす處の栗形、食むにかく

醒ケ井—鮫にかく

三條小橋—橋の下、五月は菖蒲の緣にて菖蒲革の誂を云ふ

せかいらぎ—蝶鮫の革

後家鞘—刀の身なく鞘計りなるをいふ

宮川町—嬉遊笑覽に、男色は京師にては宮川町とあり

色のない酒—妓の居らぬ酒

長町女腹切

上之巻

例の童—京童が大阪にて心中せんとせしお花半七の事を噂する

落首—洛中にかく

繪双紙—下立賣と續けて繪双紙賣ときかす

一條の御所様—御所の御紋十六菊なれば云ふ、九月も其緣

例の童の言の葉に、言よる品もよし蘆の、難波の京の物語、今の狂歌の取りなせし、京童の口吟、落首洛外とり〴〵に、その一節を繪双紙や、下立賣を堀河へ、引廻したる角屋敷、刀屋石見何某とて、諸役御免の受領職、折紙太刀の御用迄、御所は勿論屋敷方、男たる身の魂の、御刀脇差拵請取所と大看板、見世は弟子に打任せ、誰が下人やら頭やら、咄し目貫の性よしも、つい燒つけて惡性に、身を研ぎへらす奉公や。跡のこじりの帳面の、つばめ合せと親方が、鞘鳴するぞ道理なり。主人石見は禪門の、白い天窓に黑眼、仕事場を見廻つて、「ヤア己が足音聞たやら、皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事じやないぞ。彼岸過ぎたりやめつきりと日が短かい。夜仕事さしよにも此油の高さでは儲ける程皆戾る。ヤ戾る次手に戾橋の鍔は戾つたか。一條の御所様の菊鍔も、九

太々神樂―伊勢大神宮にて行ふ神樂

誠を以て云々―神は正直の頭に宿るの諺

小忌衣―狩衣に似て袍の上に着るもの

れ此御社。擁〱〱〱〱護より、めい〱れき〱さつ〱と、五十鈴川に立浪の、音も靜に君が代を、千代萬歳と守らせ給へと、八拜九拜三重爲し給ふ。然る所へ盛長は、關東勢を引具して、「御迎がてら參宮の望にて、夜を日に續で參りし」と、ざよめいて來りける。牛若御喜悅まし〱て、兩宮の御師を召し太々神樂を三重捧げらる。神も納受まし〱けん、社壇の屋根に三光現はれ、音樂瞋恚の濁を淸め、辰巳の方の神杉より、源氏の白旗雲となり、光を添てたなびきける。人々あつと禮拜あれば、旗雲の中よりも、伊勢岩淸水住吉の三社の御神あり〱と現じ給ひ、「神は神なり。神人を離れず。誠を以てやどりとす。神は人の尊敬に依て威をまし、人は神の惠に依て運を添ふ。源氏の末は萬々歲。五穀豐饒民安全、國土豐に守るべし」と、彌陀釋迦觀音三躰の、御本地を現し給へば、牛若歡喜の思ひをなし、百拜千拜幣帛を飜へす小忌衣、東の勢を催して怨敵を追伐し、源氏繁昌國繁昌、治る御代こそ久しけれ。

相殿―一つ社殿に二柱以上の神を祀る

月讀―諸州の御子、爰は月と日とを云ふ

姪―蛭にかく

難陀跋陀―釋尊降誕に象る

及び―素嗚盞尊の語尾「を」にいひかく

上賀茂―神にかく

吉備―黍にかく

あひに相殿の太神宮。末社は四十末社なり。雨の宮風の宮、風雨隨時の御空の雲井、月よみ日よみ國は豐に、民榮へさせ給ひけるは、誠に目出度候ひき。天の岩戸の暗き世も、爰は姪子の御社、御誕生の折柄に、難陀が口より熱湯を出し、跋陀が口より溫湯を出し、産湯をひかせ奉り、綾が千反錦が千反、金襴緞子の産着を召せ給ひしかども、三年足起給はねば、天の岩樟葦分の、手ぐりぐり〳〵〳〵舟に乘せ奉り、青海原へ流し給ひて、海を讓に請取給ひ、西の宮の惠美須御ぜん、命長棹最も賢き釣針下し、あら目出鯛を釣つり釣た、姿のやれ扨しほらしや。此方は素盞の及びなき八雲立との御歌は、大きに和ぐ日の本の、和歌の初の御神にて、是ぞ祇園牛頭天皇。扨又此方は藤原や、天兒屋の春日の宮。弓手は八幡岩清水。斯程淸しき御社を、誰か熱田と名付けん。爰は住吉生玉や、稻荷は五穀の上賀茂や、又下賀茂に貴舟松の尾平野の神、北野に續く梅の宮、昔に變らぬ今宮も、太神宮と伏拜む。五靈八社山王は、廿一社ふきおろしに、白髭の神なみは、さら〳〵〳〵〳〵ゐいさらゐい、さら〳〵颯と漣や、漣や、滋賀唐崎の御神は、是も八岐の蛇ぞと、伊吹颪にたがの神、鹿島香取諏訪三島戸隱神田の大明神。惣じて日本國中に一萬七千餘社の神。又吉備の大神は、上には一まん下には粟、三石の數々の祖神はこ

源家の嫡流として平家に世をせばめられ、悒憤き配所の御住居。中々末の御出世も、覺束なふ覺へ候ぞや。口惜の御所存や」と、涙に咽び申しければ、君を初め人々も、「實忠臣の金言。心有ける諫や」と、皆感涙をぞ催しける。頼朝あく迄感じ給ひ、「此上は萬事を止め、平家を亡す軍慮こそ肝要なれ。聞ば牛若は伊勢參宮したるよし。北條が侍共を驅催し、汝は迎ひに登るべし。疾々」との給へば、盛長仰を蒙りて、御坂迎と 三重 聞へける。

牛若宮めぐり

是は扨をき御曹子牛若は、しのゝめを誘ひ、さも美麗にて參宮有る、御威勢こそは勇々しけれ。よの木綿垂ちらす神風や、伊勢の宮立物ふりて、外宮の森はしん〲と、神寂渡るたゝずまひ、昔覺へて安かなるこそ殊勝なれ。扨遷宮の御祭禮、數の奉幣事終り、是こそ伊弉諾伊弉册の尊御國讓を仕給ひし天照大神、事も愚や御本社は、餘の御社に事變り、丸木柱に茅の屋根。供物は三杵きねが神樂を參らする。實古への木の丸殿を准へて、土堦三尺茅茨剪らずと聞へしを、宮遷し給ふこと、民を憐み玉鉾の、道の道たる御惠、世界國土を守らせ玉ふ。末社は八十末社なり。扨又外宮の御社は、此神の第一王子

たゝずまひ—有様

きね—巫女

土堦云々—至極質素なるを云ふ
堯堂高三尺土堦三等茅茨不剪采椽不刊(墨子)

ふしづけ―集讀

「骸は島の水底にふし付にせよや」とて、下部に下し行はれ、御悦びは限りなし。此事北條へ聞へければ、時政の北の方より、女房達を使にて、色々の絹八重がさね御祝義に進上有。賴朝御覽じ「時政夫婦の志、返す〴〵も嬉しさよ」と、若松摺たる小袖を、肩に打かけおはしまし、鏡臺取寄せ我御顏、つく〴〵と打視り、「抑某淸和天皇の臺を出、六孫王經基より、滿仲賴光に相續いて、代々天下の權をとる。我其血脉を續べき人相、尋常に變り、こんこつの生れ有り。雙の眉は八幡の八の字、兩眼の瞳には月日の光、額の黑痣は屬星木曜星、頭の辻には天照太神五躰を守護しおはしまし、一度天下の將軍と仰るべき相現れたり。如何に〳〵」との給へば、土佐坊を初め、使の女房若黨等、「實も仰に違はじ」と、一度に頭を傾けける。盛長は返答なく、事笑しげに顏しかめ、空嘯いたる其風情、鏡に映れば賴朝氣色を損じ、「後ぎたなし盛長。只今の頰つきは、全く賴朝を侮つての振舞、近比奇怪千萬なり。左程賴みなき賴朝に仕へんより、賴みある人に奉公せよ。罷り立て」との給へば、盛長涙をはら〳〵と落し、「こは口惜き御諚や候。末賴み有る主君とて御奉公仕るを、忠節と思召さるゝか。賴みなき主君を守立て、忠を勵こそ臣下の道とは申べけれ。然らば君の御心には、賴みなき下人とて見放し給はん恨しさよ。其御心ゆへにこそ

豐旗雲―雲の旗に似たるを云ふ
伊豆―出づに掛く

こぼるゝ―餘ればこぼるゝの諺

北枕云々―北枕すれば毒の入ると云ふ諺

君が代は千代に八千代に榮へます、豐旗雲や伊豆の國、蛭が小島におはします、右兵衛の佐頼朝は、盛長一人配所の伽、密に平家追討の御企頻にて、關東の諸大名内々志を通じ參らすれば、軈て武運も開くべき蕾める花の匂ひ有り。然る所に、「上方より澁谷の金王參上」と申しける。頼朝悦び、「珍しや金王丸、汝は法躰しけるよな。法名は何とか言ふ」と宣へば、金「さん候。昌俊と申す名乘字を其儘に、土佐坊昌俊とついて候」頼「して上方に別條なきか。九郎は如何に」と仰ければ、土佐坊承り、「されば候。上方は平家の驕奢十分にて、こぼるゝ水の源の、君御出世を松の葉と、萬民祈り奉る。御舍弟九郎殿も御供致せし所に、幸なれば伊勢太神宮へ、御參詣有るべき由。拙者は君への御土産に、生肴を持參致せし故、損せぬ内に一刻も早く御覽に入べき爲、先づ御先へ下つて候」と申せば、我君も盛長も、「土産の肴は何ならん。疾々」とぞせめ給ふ。昌「近比輕微の至りながら、野間の内海大網にて取漏したる大惡魚、御賞翫遊ばせ」と、長田の庄司を引出せば、頼朝大に御悦喜あり、頼「父義朝の命を取りし北まくらの毒の鰒、今我爲には目出鯛々々、釣た所は心地よし」と、咄と哄き給ひける。頼「時刻移さず料理せよ」と御長刀を賜ければ、「承る」と土佐坊長刀取のべ小跏して、首ふつつと搔落し、宙に上てちやうど受け、切先に貫き見參に入奉り、

ひつしき―不辞

義經―よしに掛く

得たり」と、元の鳥居に飛戻り、梢の猿の枝移り、振舞蜘の如くなり。雷玄今は堪り兼、「愚僧が思案候へば、鳥居も松も掘倒さん」と、土民の家なる鍬追取り、柱の根際に打立る。牛若かさ木に兩足かけ、宙に下つて雷玄が、眞向をしたゝかに切給へば、「南無三寶」と逃て行く。續いて飛をり取て引据、牛「御坊にくどい敎なれども、釋迦に經と言ふ事有り。生て恥を洒さんより、牛若が引導にて、成佛せよ」と拜打、頭よりひつしき迄、左手右手へぞ捌ける。大將賴方怒を爲し、「女わらはに是程迄、切立られし口惜さよ。一騎も殘らず討死せよ。かゝれやかゝれ」と恥しめられ、むら〳〵と寄懸る。牛「夫こそ望む所よ」と、又三人が引返し、捲り立〳〵息をも次せず追立れば、四十餘人薙伏て、生殘る者迄も、半死半生叶じと、田村川に飛入々々、浮ぬ沈みぬ漂ひける。牛若御覽じて、「おゝ面白し〳〵。人筏ござんなれ」と、三人手に手を取くみて、流るゝ武者の頭を踏み、肩を蹈へて、飛越々々向ふの岸に駈上り、「ヲ、骨折々々御辛勞。關東勢を引率し、重ねて一禮申すべし。門出よし吉凶よし。天氣もよし道もよし。萬世の中義經が、天下を治ん瑞相」と、悅び東に下らるゝ。

第五

すこびーすは發語一夸毗の義（倭訓栞）

笠木ー鳥居の屋根

す大惡僧。ヲヽ結構な御出家。サア口惜くば寄て見よ」と、長刀をひらめかせば、雷玄甚だ怒を爲し、「惡心却て大善根。事も知で出家を悖く己こそ罪人よ。塞の河原の石子詰」と神前のくり石を、追取々々飛礫打、雨や霰と投かくる。しのゝめ長刀むねに爲し、飛來る石をはら／＼、はらり／＼切拂ひ、八方に打拂へば、身には當らず飛返り、敵の眞向額口鼻筋首筋頭の鉢、さん／″＼に打割れ、「わつ」と言てぞ逃散ける。白妙少換んと逃行く敵を追懸しに、頼方が郎等占部の新七取て返し、渡合て切合しが、太刀を捨てむずと組む。白妙莞爾と打笑ひ、「女と思ひ侮るな。盛長が妹宗清が妻なるぞ。主有る女に抱付は、すこびたる徒者。生ては我が道立ず」と、言より早く掻潜り、褄取して跳返し、隙なく首を討たるは、瞬きならぬ早業なり。討殘されたる兵共、喚いて懸れば牛若丸、「もの／＼し葉武者共、一人も餘さじ」と、獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手を摧き、隱れ現れ陽焰稻妻、水の月手にもたまらず防るゝ。雷玄頼方左右より、隙間なく攻ければ、華表の笠木に飛上り、から／＼と打笑ひ、牛「なふ追手の人々、其方は大勢、味方は僅三騎なり。暫休み申すぞ」と、左り煽で在しける。頼方急つて悶掻ども爲べき樣のあらざれば、遠矢に射取と打つがひ、よつ引てはたと射れば、傍なる松にひらりと移る。二の矢を放せば「心

有明―ありに掛く

しらんで―色になつて

一子出家云々―盂蘭盆經にある句

宗清道にて長物語を仕出さん、其間に一足もはや〳〵」と言ければ、牛若實もと悦び、宿を出放れ給ひしに、比しも春の雪氷、解て流れて田村川、水嵩增つて波早く、越すべき樣のあらざれば、牛「よし此上は如何せん。運は天に有明の月のよすがら爰に」とて、田村の宮の拜殿に暫く休らひおはしける。監物太郎賴方は宗清が長話、由なき隙をいれけると、足をも付ず打ければ、早土山に着けるが、賴「田村川の水高し。此邊にこそ在つらめ。鬨をつくつて刼かし、捜して討や者共」と、十方に入亂れ、鬨の聲をぞ揚にける。今は脱れぬ所ぞと、牛「源の牛若丸爰にあり」と駈出給へば、白妙しのゝめ諸共に、弓手馬手に引添て、面もふらず走向ふ。賴「彼奴は兵術天狗の弟子、殊に荷擔人有りけるぞ。侮つて負傷するな」と、八十餘人の追手の勢群つて掛りしを、三人飛鳥の身も輕く、飛追跳越踊越、花を亂して二重戰ひける。女わらはと言ながら、一人當千の剛の者。入かへ〳〵追立れば、平家の兵切立られ、戰しらんで見へにけり。雷玄法師堪り兼、「牛若は兎も角も、親伯父に逆ひたる女めこそ頬憎けれ。摑殺してくれんず」と、大手を擴げて駈廻る。しのゝめ長刀追取のべ、「是伯父坊樣、衣の手前も有ぞかし。一門の悪心を、教化こそせられずとも、人の訴人は何事ぞ」。一子出家すれば九族天に生ると言ふ。御身は引かへ六親を地獄に落

くどうも―九度とくだく〳〵しと掛く

泣く子も云々―辨へなき者も場合を見て氣を利かせよと云ふ諺

腰ををる―中を切る

り給へ。幸酒を持ちあはせたれば、門出祝はん。先一ツ」と腰の瓢簞取出せば、賴「是は誠に氣がついたり。然らばお辭儀申さぬ」と引受々々〳〵、「我も三盃、雷玄も三盃、御亭主も三盃、合せて三々くどうは御禮申さぬ」と又駈出るを、宗「はて扨監物呑迯するは手が惡し。此比久敷參會せず、暫時は積る物語、今少」とぞ引留る。監物重ねて、「時も時折も折、大事の落手に行く者に、咄せんとは譯も無い。爰を放せ」と引放す。宗「はてさう堅う言な。新しき咄あり。ちよつと咄さん。聞け」と言。監物少腹を立て、「泣く子も目あけ、咄所か其方が樣な隙ではなし。重ねて聞ん」と逃てゆく。宗「いや咄掛つて話さでは置ぬぞ」と、捻合引合留むれば、監物殆ど持飽み、「さあちやく〳〵と咄さば咄せ」と、不請顏にて聞居たる、心意氣こそ笑しけれ。宗淸どうと座をくみ、「是は大事の物語。夫なる御坊も軍兵達も聞給へ。武士たる君は後學」と子細らしく聲作ひ、「昔々或所に爺と姥と有けるに、爺は山へ柴刈に、姥は川へ洗濯」にと聞きも果ず、賴「エヽ爰な者はあまり人を阿呆にする。酒に醉たか宗淸。相手になるな軍兵共、急げ〳〵」と振切て跡をも見ずして走行く。宗淸聲をあげ、「大事の咄の腰ををる。先さきを聞け監物。猿の頬は眞赤な」と、笑ひてこそは別れけれ。御曹子牛若は、江州土山まで落延給ふ所へ、白妙しのゝめ追付て、「雷玄法師が訴人にて、監物太郎追駈申すを、

帽子折の五郎太夫が娘、しのゝめと申す女なるが、親にて候五郎太夫、慾に目くれ訴人せしを、澁谷の金王入道土佐坊の働きにて、若君も恙なく、長田も生捕給ひしを、父の太夫が弟、妾が爲には伯父坊主、吉峯の雷玄法師重ねて平家へ訴へ、監物太郎頼方が手勢を以て、雷玄法師が加はり、東路へ追手をかくる由、妾は君が一夜の情、我牛若と名乘追手に出合討れなば、其隙に若君樣、一足なりとも落給はん。親伯父の惡心も妾が露の志」と、語りもあへず泣居たり。宗清夫婦感じ入、「其義ならば女房、そちは此姫と同道にて、隨分追付御供せよ。某は爰に殘つて追手の大將監物太郎に出合、長話を仕かけ邪魔をいれん。其間にはや〳〵落せ」と言ければ、白妙悦び、「然らば妾も身を扮さん」と、夫の羽織に編笠被き、しのゝめを先に立、跡を慕ふて追駈る。案の如く追手の大將監物太郎、手勢引具し走來る。宗清急度見、「これ〳〵〳〵、監物太郎頼方にはてなきか。遽しき體何處へ往ぞ」と言懸る。頼方顧り、「ヤア宗清か。我は今日源の牛若が追手の役を蒙り、是なる訴人は、烏帽子屋の五郎太夫が弟雷玄法師。則ち彼が案內にて、只今急に追駈る。其方は病氣とて樂をする浦山し」と、言捨て駈出るを、「先待て」と押留め、「夫は近比大儀千萬。去ながら侍は息災にて奉公するこそ手柄なれ。隨分ぼつかけ牛若を討留て、御加增に預

生中に—愁ひに

しげ縫—繁く縫ひたる大口袴

園生に云々—人に勝れたる者は必ず顯はるゝ、譬に紅は園に植るても隱れなしとあり（毛吹草）

彌平兵衛宗清は、妻の白妙源氏の由緣有ゆへに、賴朝兄弟の命を助け參らせしが、其身平家の譜代なれば、生中に事むづかし、源平わかち立迄は暫く身を退き世上を見んと、去年の秋より病氣といひて奉公ひき、養生の氣晴しとて夫婦諸共京近く、野山廻れば自然、心浮るゝ瓢簞に、酒など入て腰に付、觀音巡り寺社の緣、花の下影行暮る、其所を其日の極樂と、物に構ぬ身の樂は、命も延る姿なり。斯る折から十五六なる君達、しげ縫の大口に左折の小結着て、直垂の袖にて顏隱し、忍ぶ振にて通りける。夫婦急度目くばせし、直と寄て袖をひかへ、宗「是申し、御姿紛ふ所は候はず、源氏の大將牛若殿と見掛たり。某は平家の兵彌平兵衛宗清。申すべき子細あり。名乘せ給へ」と、小聲になつて言ければ、少人聞も敢ず、「ヲヽ、某こそ牛若よ。定めて我を探すらん。今は脫るゝ所なし。はや首討て淸盛に見せ、高名にせよ」と、淸しげにして居られけり。宗淸手を拍、「園生に植ても紅の流石なる御擧動。全く君を討ち奉る心ならず。是なる者は我女房白妙と申して、御家來藤九郎盛長が妹。其由緣に依て先年御幼少の時分、伏見の里にても御兄弟を見脫し助け奉りし。今とても某世間の唱も候へば、御味方こそ叶ずとも、などや討取申すべき。心易く落し申さん」と言ば、少人聞き給ひ、「然らば明て申すべし。我牛若にて更に無し。烏

五枚兜—錣の五枚あるもの

三番さ—三番叟

り。太夫奥にうろ付しを、飛掛て確と挿れば、長田表へ逃んとす。同く取て伏する間に、牛若姫諸共に奥より立出給ひける。太夫聲をあげ、「我等は何も科は無し。烏帽子が御用に候はば、おまけ申さん。召ませひ」と、慄ひ〳〵言けるを、牛「チヽサ某が烏帽子は、黒鐵の五枚兜鍬形うつて龍頭、錣の付たる烏帽子が所望ぞ。己助くる者ならねど、娘が心を察し命計りは助る」と、腰骨どうと踏をれば、泣々ゐざり助りぬ。金「是長田、某は今法躰し土佐坊昌俊と名乘ども、金王丸と言し時、己奴を漏せし無念さに、其時の姿を殘し、四十になる迄此前髪。今こそ落せ是見よ」と、附髪假髪を取しより、土佐坊とこそなりにけり。金「今殺すは可惜物。關東へ連下り、頼朝の御前にて弄殺にすべし」とて、高手小手に搦付、「扨源氏御出世。今日の御祈禱に千秋萬歲所繁昌、一指舞ふ目出度や」と、三番さの烏帽子を着し、袖を簪して、「ハヽ、アをさへて〳〵、思ふ敵を取て押さへて、源氏の御代より外へは遣じとぞ思ふ」と、若君を祝ひ參らせ、「疾々東へ御下りおはしませ。扨某は都の樣躰聞つくろひ、跡より追付奉らん」と、勇に勇む有樣は、只樊噲も斯やらんと、恐れぬ者こそなかりけれ。

第四

襖袴に大太刀佩き、殊に勝れて見へたるは、是も三浦の一黨ならめ」三「實に能御覽じ候ひし。我義盛が三男朝比奈の三郎義秀、色黑く手足あれ、疊觸の荒男、茶の湯連歌は不得手なれども、朝比奈が癖として敵と見て勇む事、荒鷹が雉子を見て鳥屋を潜るに異らず。假令平家黑鐵の城を構へ石門に籠るとも、片手に捕て押破り、淸盛父子を初とし、撫斬胴斬拂ひ斬、將棊倒しに攻亡し、源氏の御代と爲し申さん」と、辯舌によどみなくそれ〴〵に答へしは、潔よくこそ聞へけれ。爰に長田は五郎太夫が注進にて、長「其小冠者何事かあらん。拔駈して討取ん」と、いきりきつて來りしが、障子の隙より遙に見れば、烏帽子直垂着流して大の男數十人、和田よ佐々木よ朝比奈よと云ふ聲に、長田の庄司はつと戰慄氣を失ひ、空恐しく胴慄、足も腰もわなく〳〵と、前後を忘ずる計なり。太夫きつと見、「怯れ給ふか庄司殿。踏込で一討に遊ばせ」といへば、長「那を見よ鎌倉勢が雲霞の如し。此方が細工にならぬ」と云ふ。太夫驚き覗きて見れば、案の如く兵數人列座せり。五「あつ」と言ふより慄出し、二人はひよろ〳〵うろ〳〵と、慄ひて何の埒もなし。何處にてか金王丸、此由を聞出し、飛が如くに駈付、「案内まう」と呼はつて、二王立にぞ立たりける。長田味方と心得、駈出て見れば金王なり。「ハア南無阿彌陀佛」と地に俯伏、穴へも入たき風情な

梨打烏帽子—ナヤシ打にて柔きもの（貞丈雜記）

龍車—隆車なるべし

天地を動し—古今集の序文により文武の文に續けたり

り。牛「實に珍しや面白や。頼もしや東路は源氏好の梓弓、取傳はりし武士の假名は如何に」との給へば、姫は烏帽子を打被き、「是は伊豆國北條の四郎時政。一門榮へ類廣し。數ならねども某が御味方と申さんに、凡そ近國に殘る武士は候まじ。手勢は限り知れず」と、謹んでこそ申しけれ。牛「次に座せしは梨打烏帽子、直垂着流し太刀佩て、さも大樣に見へしは如何に」夫「さん候。某は畠山のなにがし秩父の庄司重忠。若武者の昔より力業を好んで、大船を跳返し龍車を留むる勢有り。四相を悟る自然智は、我さへ卒や白露を、玉と欺く謀、座乍ら萬里の敵を察し、戰はずして勝利を得、天地を動し、鬼神を感ぜしむるなる、文武を雙の翼の臣、手勢合せて六萬餘騎、御先手」とぞ答へける。牛「續いて并居し人々は、懸烏帽子に大紋の袖たぶ〳〵と搔合せ、左も勇々しげに揃ひしこそ、土肥か小山か梶原か。其名懷し」との給へば、夫「抑是は宇多天皇の後胤佐々木の太郎、同姓次郎三郎盛綱、四郎高綱、五郎吉清候なり」牛「次に伺候す風打烏帽子、後高に着なしたる、本國假名はいかに〳〵」夫「是こそ三浦の旗頭、和田の左衞門義盛、年積つて六十六、軍に逢ふ事十五か度、一度も不覺の名をとらず。老木の枝は撓めども、心の櫻華美に、榮へん君の御出世を、千代萬年と壽きて、九十三騎の一類ども、召具し參上仕る」牛「末座に扣へし懸烏帽子、素

八男牛若丸。平家を亡し源氏の代となし、此恩は報ずべし。去とても世にあらば、日本國の諸大名、悦びの色をなすべきに、口惜の次第や」と、御落涙ましませば、ゑ「扨は左様に候か。御悼しうこそ」と許りにて、共に袖をば絞りける。牛若重ねて「我先祖義家は、八幡にて元服有り。八幡太郎と名のり給ふ。我も是を形取て、烏帽子親は正八幡、鞍馬の大悲多門天、太刀と刀を八幡多門」と觀念し、床の柱に立置て、我と烏帽子を取て戴き、太刀の前にも三々九度、刀の前にも三々九度、直に土器頂戴し、牛「扨名は何と付べきぞ、ヲヽ九郎冠者源の義經と付申さん。源氏の御代は千秋樂萬歳樂」と繰返し、獨言して言るゝ御有樣こそあはれなれ。

烏帽子折名づくし

しのゝめ倩々見參らせ、御元服を祝はんと、奥の一間につゝと入り、兼て用意や仕たりけん。數多の烏帽子掛に樣々の烏帽子を着せ、色々の裝束を打掛々々、人の如くに拵へて御前に並べさせ、ゑ「なふお目出度や。關八州の諸大名御味方申さんとて、手勢々々を引具して、御祝に參りたり。末繁昌の其兆、御酒一ッ」とぞ祝ひける。牛若殆ど御悅喜あ

雙眉—帽の前の中尖りたる皺の下に少し出てたる所（以上貞丈雜記）

取はやす—取持つ

牛のした—クッゾコと云ふ圓き魚

小結—烏帽子の後方尖りたる所に結ぶ紐

しますす牛若殿とやらんこそ、左折は召れふずれ。平人は及びなし。但し少人は由緒ばし候か、牛若笑しく思召し、「身には系圖の無れども、若も咎むる人あらば、都の宿に古き烏帽子の有つるを、所望して着したり。左折も右折も、此冠者は知ぬなりと、ぬぎ捨て通るならば御身の難も有るまじ。童が科も脱るべし。平に所望」と仰せける。五郎太夫は「仕濟たり、牛若に紛ひなし」と心の内に悦び、五「其義ならば出來合は候はず。今宵の内に折立てさせん。一夜は是に」と云けれども、牛「いや只明日參らん」と立出給ふを、しのゝめ袂を引留て、「父もお宿と申さるゝこそ幸なれ。烏帽子も折て御祝儀も、取はやして參らせん。是非に」とあれば、牛若も情の糸に繫れて、岩木に有らぬ風情なり。太夫彌々笑を含み、「でかいた、しのゝめ、年の始の商旦那、隨分御馳走申せや」と、口には云て心には、「たつた今搦捕、牛若殺して牛のした、大判小判の摑取」と、山も見えぬ胸算用、六波羅指てぞ急ぎける。いつの間にかは誰掛橋の思ひ川、早宵の間に深くなり、漏さぬ水は合惚の、淵も磯とぞ契らるゝ。其夜も深て、しのゝめは、左折に小結をゆひ、志「御烏帽子出來たり。自は殿始、おの樣は烏帽子始、目出度く閨にて御祝儀あれ」と、瓶子に盃取副て、御前にこそ直しけれ。牛若御覽じ、「扨々嬉しき情の程、今は何をか包み申さん。某は左馬頭義朝が

ぎごつなの人―ごつ〳〵と無愛想なる人
現なや―打つとかく
むづをれ―俄に折るゝ
大鏽―烏帽子の皺の粗さを云ふ
ひながた―烏帽子の前額の皺
くしがた―烏帽子の中央三角形の下の半圓形

色に出、忠「なふぎごつなの人々や。商賣といふ物は、賣にも買にも品ぞ有。御用あらば妾に」と、ちよこ〳〵とお傍に寄り、「烏帽子は何が御所望ぞや。御容色はよし、風はよし、見る人我をや折烏帽子、戀に意氣地を立烏帽子、此お姿に譯知ぬ、我も心を懸烏帽子」と、脊中をとんと現なや。「しんき」と計り言差て、顔差入る襟深し。牛若君も色馴ぬ、鞍馬の山の深山木の、花珍しくむづをれに、くわつと赫らむ顔をあげ、「誠に優しき詞の縁。今日が情の初冠り。あはれ人目のすき額、風折烏帽子折もがな」と手を取給へば、しのゝめも、魂も揉烏帽子、懸緒の紐の双結び、解ぬ思ひとなりにけり。斯る所へ五郎太夫立ち歸り、五「こは何事」と問ければ、娘は慌ててうろ〳〵と、「烏帽子召れよ父上」と、太夫が頭に被かせて、狼狽廻る笑しさよ。太夫牛若を一目見て、「して遣たり」と腹をも立ず莞爾と笑ひ、五「ムヽ、お若衆は烏帽子が御望みか。好はなきか」と問ければ、牛若聞き給ひ、「扨は御亭主候な。此童が着よふずる烏帽子は、大鏽の顆を荒らかに一くせみくせませ、ひながたに間をあらせくしがたを嚴々と、雙眉付て左折が所望」と有る。太夫案に違ずと思ひながら、猶も試見んと思ひ、「あら似合ぬ好事や、當代左折を召れふずる人は、一年野間の内海にて失給ひし左馬頭義朝か、其御子惡源太義平、二男朝長三男頼朝、扨は鞍馬におは

烏帽子―御にかく

しよさい―所在、閑居無事なる事（俚言集覧）氣もいたり―氣立もすぐれ居る

つくばね―つく羽子に筑波根の峯より落つるの歌をかけたり

蚊もくはぬ―羽子つけば夏瘦せず蚊も食はぬとなり（世諺問答）

しほ―愛想

ならず、油斷なく穿鑿し某迄知されよ。此者共を注進せば御褒美に與り、一代浮み上る事、長者になるぞ精出せ」一五「エ、何が扨〳〵、身の爲といひ、御奉公、油斷は致さず候」と、御請を申し罷立、宿所にこそは三重立歸れ。春の光を烏帽子折、五郎太夫が一人娘にしのよめとて十五歳、職人なれど烏帽子屋は、お公家交はり上びたる、しよさいに連れ氣もいたり、都は戀の名所とて、自然なる伊達心、町には惜き姿なり。今日は吉日商よし。今棚飾らせて賣物に、細工の仕初祝儀すぎ、乳母下女を招き寄せ、春の遊びも今少し、今日は羽子突遊ばんと、腰元呼て遣羽子や、彼方此方へつくばねの、峯より落る瀧の白玉、一二三よう舞ふ小羽子、外へきるゝな、反ゆくな。羽子さへも袖に留りて、情は厚き羽子板の、緣に似たる我中よ。夏瘦もせず蚊も喰ぬ、年の數々面白や。住む甲斐もなき夜は辛し。牛若君十餘年の霜雪を、鞍馬の山に踏分て、十六歳になり給ふ。秀衡を賴み奥州へ下らんと覺せしが、「童とあらば平家より搦め捕との沙汰きびし、元服して男になり下らばや」と思召、都三條烏丸、太夫が店に立寄りて、牛「烏帽子買ふ。なふ烏帽子買ん」と仰ける。女子共聞もあへず、「飾りたる烏帽子の內、何れか所望候ぞ。能も惡きも空價なし。望次第に召れよ」と、しほも無く答ゆるにぞ、早しのよめは牛若に、曳れて廻る戀車、わりなき思ひ

路指して飛鳥の、飛が如くに下りける、心は流石大鵬の、千里一翔源氏の運、末たのもしうぞ聞へける。

第　三

實や三百六十日暦々と卷盡し、既に承安三年と、移る月日は程もなし。平家の驕奢日に榮へ、淸盛既に太政大臣を經て入道し淨海と法名ある。嫡子重盛内大臣、二男宗盛中納言右大將、其外末子末葉殘らず稀有の官職、攝家華族に異らず。爰に三條烏丸烏帽子屋五郎太夫とて、烏帽子折の上手を召し、位々の烏帽子冠言付れば、則ち出來致せしと西八條に持參する。一門喜び着し給ひ、御喜悅事終り、五郎太夫に祿給り、淸盛入道仰けるは、「先年義朝が子供討て捨べかりしを、池の禪尼の申すに依て命を助け、今若を伊豆の國、蛭が小島に流せしが、密に元服し右兵衞佐賴朝と名のり、當家追討の院宣を乞望む由風聞す。又弟牛若も成人し、京近邊に忍び居て、院宣を望むと聞く。然ば賴朝も牛若も、法皇より密に位を賜はり、烏帽子冠求めんは必定なり。隨分氣を付、見馴ぬ者烏帽子買んと云ならば、早速に注進せよ」と宣へば、長田の庄司進み出、「これ五郎太夫、苟の事

大鵬―大鳥、鵬之背不ㇾ知₂其幾千里₁（莊子）

烏帽子折―烏帽子を作る職人

狩人―平家の追捕嚴しき事
古栖云々―牛若等を奉じて義兵を擧げよの意
會稽云々―合戰して恥を雪ぐ
夕告―いふにかく、鷄の事
鳥がなく―東の枕詞

なり。又おの樣に逆ひても本望にも候はず。如何と案じ頽をれしに、有難き御了簡、斯計深き御恩賞、親にも子にも兄弟にも、七萬寶の寶にも、男一人は換ぬぞや。若君達も常磐樣も、此恩忘れ給はじ」といへば、宗「アヽ〱暫く。常磐と云る名を聞ては、清盛公の御前にて某が誓文立ず。いつ迄も雀々。見ぬが佛聞ぬが花」と、頷き合し弓取の妹脊のわけぞ頼母しき。藤九郎盛長は人々に行逢しが、宗清が放つ矢は妹が二心か不審と、庵に立ち事の樣を聞屆け、横手を打て涙をはら〱と流し、「爰明け給へ宗清殿。是は白妙が兄源氏の郎等藤九郎盛長にて候。心底に依て妹を刺殺し、御邊と勝負を決せんため是迄は來りしが、只今の志、生々世々に忘れがたし。一禮の爲對面せん」と云ば、宗清からからと笑ひ、「又斑替の雀が來つて、由なき事を囀るよな。某平家の扶持を蒙りながら、源氏方の禮を請、此宗清が立つべきか。エヽ狼狽たか羽拔鳥、左手も右手も狩人の、おひ鳥狩の網高し。鷹に捕るな餌差にさゝれな。古栖の雛を飼育て、初音揚よ」と云ければ、盛長悦び合點し、「頼母し田面の雁、春は越路に立歸り、源氏一味の友千鳥、大將軍の羽翼の下、揚たる旗は白鷺や。群居る鳥の翼を鳴し、會稽の巢立して、上見ぬ鷲の譽れを見せん」宗「尤々急げや急げ。山鳥の尾の長尾の」盛「長居は恐れお暇」と、夕告の鳥が啼く、吾妻

裏問―心中を伺ふ

心氣を沸し―氣を苛ち

左右云々―彼是口に申されぬ位

とならば、如何し給はん」と、他ながらこそ裏問けれ。宗清扨こそと思ひ、「ヲヽ云ふまでもなし。主君清盛の仰なれば、如何に汝が主なるとて用捨はならず。眼に懸らば搦め捕て六波羅殿へ引立る。只何事も見ぬが佛、聞ぬが花」と答へしが、親子の人々物ごしの手に取る樣に聞へしを、女房はつと思ふ顏。宗清氣をつけ、「やれ、小鳥共の軒に宿りて囂しきに、あれ追拂へ」と云ひければ、白「なふ情なや。ふくら雀の羽を惱み、雪に折れ伏す篠竹の、笹に一夜の假の宿。左のみに太くなの給ひそ。はや夜も更ぬ床寒し。音せでお寢れ」と勸めける。宗「いや〱某は殺生好。鳥の聲を聞ば捕ではおかず。是非追拂へ」と云ひけれども、女房更に合點せず、「夜な〱泊る小鳥なれば、追ても打てもたゝぬ」といふ。宗清心氣を沸し、「エヽ不合點な。いで某が追退ん」と弓矢取て駈出る。女房は人々の影隱さんと引留る。振放し突退て、空矢四五本差詰め〱射る音に、常盤驚き、兄弟を前後に搔抱き、はふ〱遁退き給ひける。宗清篤と見送りて、「あれ見よ女房、雀共が遁つるは。其儘置て某が殺生し、あの雀を殺させて、汝が忠節立つべきか。只何事も見ぬが佛、聞かぬが花、今合點いたか」と云ば、女房左右の事もなく、「あら賴母しや」と計にて、袂に縋り歎きしが、白「扨過分なる御心、左右詞に及れず。連添ふ男に目がくれて、主殺と云れんも一門の名折

着せまいらせ、手足も悴ひ凍ゆれど、其色見せず齒切し、拳を握り耐ゆる體、母は氣も絕へ目も眩み、「ア丶情なや淺間しや。百萬餘騎の大將軍とも、仰るべき若共に、一重の衣を着せかぬるは、如何なる神の咎ぞや。可憐の人達や。御身達が志綾錦より厚ければ、母は着ねども溫なり。不便の者よこち寄れ」と、三人一所に掻寄せて、抱き伏してぞ泣給ふ、道理とこそ聞へけれ。月も夜半に更行ば、彌平兵衛宗清、女の庵に忍びしが、雪に映ろふ人影は、何者か怪しやと傘かざし能見れば、常磐親子に紛ひなし。「網代の魚ござんなれ。餘さじ」と身づくろひ、猶も事を窺ふにぞ、慈母の哀憐孝子の振舞、流石源氏の根ざしなり。悼しさよ憐さよ。今人々を助けしとて、源氏の運の末ならば、終には捜し出さるべし。假令搦捕たりとて、盡んず平家の御果報の、長久にもよもならじ。情知ぬは匹夫のよう。殊に我妻の爲には主君なり。彼是助けて落さんと思ひしが、いや待て暫し。主君淸盛の御眼鏡を以て仰を蒙むり、助けては道立ず。搦め捕ては情なしと、とつつ舞つ思案して、左あらぬ體にて戶を叩けば、女房待かね柴の戶の雪打拂ひ、草鞋もとく〳〵庵へ伴ひける。宗「今宵は殊なふ冷さふらふ。先づ盃」と溫めて、暫く差つ差れしが、女房申しけるは、「なふ宗淸殿、自は源氏、御身樣は平家、若只今にも義朝の所緣

うはがへ―着物の擢合の上
翠帳紅閨―翠の帳、紅に飾りたる美しき閨
ならはし―苦樂伴ふならひ

は戻られず。とても此上は運に任せて兎も角も、今宵は爰に明さんと、少し風避軒蔭に、小袖の褄のうはがへを、敷寝の床と片敷せ、笠を並べて屛風とし、昔は翠帳紅閨に、隙間の風も寒かりし、身はならはしと身を捨て、兄弟に降る雪を打拂ひ〳〵、憐訪ふ小夜千鳥、泣て其夜を更さるゝ。間なく隙なく心なく、雪は溢すが如くにて、寒風颯々と烈しくて、人の肌骨に染渡り、肌を刺す事鋭き刄の如くなり。悼しや母上は、勞れたる身を寒氣に破られ、惡寒五躰を苦むれば、「アヽ堪がたや」と伏轉び、前後不覺に見へ給ふ。今若乙若驚き「喃如何にせん悲しや」と、額を押へ手を按り今「いかに乙若、母上の寒からんに、物着せません」乙「尤」と兄弟帶解き身狹なる、小袖を脱で母上の、裾や枕に取重ね打重ね、我は厭はで埋もるゝ、雪の裸身哀れなり。母は苦き枕を上げ、「扨悼しの子供やな。斯ばかり母を大切に、いかに孝行なればとて、和御前達を凍へさせ、親も冥加に盡るぞとよ。子は息災に生立て、見するぞ深き孝行なり。風邪ばし引な衣着よ」と、着すれば脱で母に着せ、今「いや我々は寒からず。侍のならひには、如何なる雪にも戰して、能き敵と組ん時、寒し冷たしなんどとて、敵に背を見すべきか。寒いと云ふな乙若よ」乙「寒いと覺すな兄上」と、甲斐々々しげにいふ聲に、牛若目醒し這出て、見るを見眞似に衣を脱ぎ、同く母に

八幡山—矢にかく
さそう—吉相の訛
深草山—深草少將にかく
伏見—臥すにかく
しどけなし—だらしなし

ば、如何に悦び給ひなん。類なき若共を、母が袂の下にのみ、埋木となすべきか」と、昔を慕ひ行末を、思へば盡ぬ憂涙、我身一つの雨ぞかし。古へ人の浮名たつ、戀の百夜の深草山、あまぎる雪に雲暗く、まだ朝明の心地して、三里に足ぬ玉鉾も、草鞋凍り足こゞへ、雪にもおなじ墨染の、櫻の寺の晩鐘に、宿はなけれど里の名は、伏見に行くれ 三重 給ひけり。降る雪の音聞く程に靜なる、竹よりをくの一つ庵。猫の通路跡付し、唯一筋の道細く、油火ほのかに搔立て、女の業かしどけなき、引さき紙を結びつぎ、半上たる伊豫簾、嵐ぞ雪をもて來る。常磐御前は灯火の、影を便りに尋寄り、「大和へ下る女なるが、幼き者を召具して、雪に道を失ふたり。一夜の情」と有ければ、十八九なる女房の、紙燭かかげて縁に出、親子の人をつく〴〵と打まもり、「悼しの有樣や。お宿申したうは候へども、此比平家の沙汰として、義朝の所緣をつよく詮議の候が、人々の有樣咎めんは必定なり。自は白妙とて藤九郎盛長が妹、源氏譜代の者なれども、不思議の縁にて平家の侍、彌平兵衛宗清の忍妻になり候。今にも夫の宗清殿來り給はば、憂目をこそ見給はん。情なしとな思召そよ。妾がつらきは可憫さゆへ。何國へなりとも落給へ」と、いと念比の詞の色、紙燭吹消し入にけり。常磐も今は頼みきれ、力も落て先へも行れず、後へとて

しのびつけたる―隱れ忍ぶと忍の緒とかく

諸國の秋―秋の收穫

穗長―齒朶

ありけう―愛嬌か、爰は萬の唄

一つ身―背に縫目なき小兒の着物

蘇民將來―神代の忠臣にて貧ながらも武塔神を饗みしといふ（釋日本紀）

の、木の下闇に蹈迷ふ、夜深き空や世にあらば、今ぞ妹脊の寢入ばな。今朝はつれなくむく起に、抱き賺して牛若の、夢をば母が懷に、泣寢入せし可愛さよ。今若はおとなしく、吾妻からげに脚袢締め、乙若の手を引て、先に立たる歩みぶり、小太刀佩たる腰付も、宛ら父の御影かと、涙に涙果しなく、しのびつけたる顏くせや、最ど傾ぶく笠の雪、打拂ひつゝ見渡せば、賤が門田に薺摘む、東寺よつ塚鳥羽繩手、諸國の秋を積のせて、御世の貢の牛車、京の名殘に轟かば、我が心も打乘せて、送れ見送れ呼返せ。返らぬ水の泡沫に、初歌謠ふ初蛙、梅に年とる鶯の、翼は雪に疊まれて、まだ片言の初音鳴く。をのがさま〴〵春なれや、人の姿も若緑、竹田の里に來て見れば、藁屋が軒も飾繩、穗長楪ゑぼしにわけて、門松かげの小鼓や、〽ありけう有ける新玉の、年も若やぐ旦より、水は和ぐ柳は芽む。里も榮へまします」萬歳、鳥追とり〴〵に、春は賑ふ折からの、厄神參厄除、參る氏子は二ツ三ツ、まだ一ッ身の縫あげに、蘇民將來子孫繁昌、神堅かれと石の華表の二柱、二人の親の家土や、小弓に添し八幡山、道すがらの參詣を、今若は御覽じて、「是ぞ源氏の氏神に、我門出の吉相」と、御手を合せ給ひければ、兄を見まねに乙若も牛若も、母君の乳房の上に手を合せ、「さそう〳〵」と愛らしき。常「父義朝のましまさ

亢龍悔あり—昇り詰れば降るべき悔あり

ときしらぬ—解くにかく

前の安藝守清盛の御前には、嫡子重盛宗盛を始め一門殘らず伺候有り。未だ源氏の末類ども、方々に忍び居て、常磐親子を奪ひ行き、剩さへ長田の太郎を討取る事、如何なる大事か仕出さんと、評定眉をぞ顰らる。時に重盛申さるゝは、「たとへ源氏の末類神にもせよ、大將義朝を亡す上は、日蔭者ども寄集り、たやすく平家を亡す事及びがたし。されば易に曰く、亢龍悔有り。滿れば缺く。此殘黨を討れん事、事を好むに似て候。只義朝が三人の子供を、密に捜し出されて、流罪せらるゝ迄に候」と、穩便に宣へども、清盛怒甚だしく、「常磐の前は女なり。子供は幼少、遠くは往じ」と、難波妹尾を大將にて、三百餘騎の追手を方々へこそ差向らる。扨又彌平兵衛宗清に仰付「不思議の者を搦捕」と、在々鄉鄉町小路、殘りなく觸ければ、當時平家の威勢に、靡く草葉の蔭にだに、隱るゝ方は 三重 なかりけり。

常磐御前道行

頃は正月の末つかた、春めきながら冴かへり、袂の氷柱とき知らぬ、常磐御前は常磐木

切結—逢うては離るゝことを露の縁にて結ぶといへり

鍾馗—鬼を拉ぐ勇士にて玄宗帝の夢に見えしといふ

一生の思案所いかに〱」と言ければ、常磐涙の隙よりも「ヤア自らは女なれども義朝の妻なるぞ。狼狽事ばし言ずとも早く首打て。彼長田めに喰付て本望を達せん」と、艶に氣高き外眥にてはつたと睨み、はら〱と涙は玉を貫けり。瀬「今は是非なし首打て」長田「承る」も慄ひ聲、膝わな〱と後に廻り、太刀振上んとせし所を、盛長金王飛で出、長田が胸板蹴倒し、「主君の冥罰思ひ知れ」と、首掻落せば警固ども「狼藉者」と立騒ぐ。槍長刀を押取押取、朱雀の野邊の草の原、露を亂して切結び、切解き追むすび、數十人に手を負せ、八方へ追散し、立ち返つて、金「さあ〱〱、常磐御前は子供を具し大和路へ落給へ。日本國は平家方。此金王は姿を變へ、土佐坊昌俊と名乘、密に勢を集むべし」盛「出來た〱。某は關東へ馳下り、武藏相摸伊豆駿河、上野下野安房下總、源氏譜代の兵ども、それにても叶ずば、八丈大島蝦夷松前鬼が島へ押渡り、猛虎猛威の鬼を集て軍勢とし、平家を易く亡さん」金「ヲヽ尤々」と、約束堅き石塔に暇申して立ち歸る。風神雷神厄神も、取りひしぐべき威勢は、鍾馗大臣獅子王の、暴たる姿も斯くやらん。

第二

獅子王—獅子の事。師子王ニ无所長（無量壽經）

雜色—雜兵

を出し、ゑいや〳〵と捻あへば、腕骨膝骨腰の骨、つがい〳〵は唐紅、血ばしつて節あがり、額の筋は脛へ下り、脛の筋は頭へ上り、五百五十の力瘤、九重の藤葛、松をからんで苔むせる、巖に生し如くにて、二人踏だる足の下、土五六寸窪み入り、左手もぢり右手違ひ、吽と云ふて捻ければ、四方八寸の角卒都婆、中よりふつつと捻切て、小踊してばつと退き、雙方睨んで立たるは、人間業とは見へざりけり。暫時詞もなかりしが、一度に涙をはら〳〵と流し、「ヲヽ、頼母しし金王丸、心底現れたり。嬉しし〳〵。疑ひし口惜さよ。許してくれよ」と言ければ、金「そちが心も見屆たり。頼母しし〳〵。最前の雜言も忠節の餘り。許せ〳〵」盛「此上は心を合せ平家を亡し、頭の殿の欝憤を休め申さんが、思へば拙き源氏の御運、口惜くは思はぬか、無念には思はずや」金「口惜や」盛「無念や」と、卒都婆投捨直と寄り、袖と〳〵に縋り付、怒れる顏面引かへて、悲嘆の涙は堰あへぬ、眞の姿ぞ哀れなる。然る所に六波羅の方より雜色警固邊を拂ひ、「囚人」なりと罵り來る。人々木影に立隱れ、能く見ればこは如何に。常磐御前に牛若抱かせ、敷革に引据へ、武士四方を取廻し、長田の太郎は太刀取にて、瀬尾の七郎檢視と見へて、七「コレ〳〵常磐、最早最後は極つたり。去ながら清盛公の御心に從ひ給はば、三人の若を助け御身の望も叶ふべし。

腹の皮—腹の皮よるゝの略、をかしき事

居合腰—片膝立てゝ坐したる姿

博多王—不詳

言腹の皮。逃吠の犬侍臆病々々」とぞ笑ひける。盛長今は堪へ兼、「犬侍とは誰が事ぞ」金王聞きも敢ず、又「最前より其方が人外とは誰が事ぞ」盛「ヲ、澁谷の金王が事よ」金「ヲ、犬侍とは御分盛長が事よ」盛長腹に据かね、「侍を捕へて犬侍とは如何に。今一言云て見よ」と、太刀に手をかけ言ければ、金「ヤア侍とは人がまし。無益の太刀を拔んより、犬に似合た尾を振れ」と云ふ。盛「ヤイサおのれ侍ならば、など主の敵長田は討ぬ。五穀つぶしの娑婆塞げ、末を大事に思はずば、おのれと爰で死ぬべきに、命が二ッ欲いな」金「ヲヽ我も源氏の御末を貢ぐ者の有るならば、御分と爰で死ぬべきに、命がも一ッ欲いな」盛「イヤ悴め美事我と死ぬべきか」金「ヲヽ死にかねふか。ヤア討かねふか」盛「誰を」金「己奴めを」盛「討たいな」金「切りたいな」盛「無念さよ」金「口惜や」と、兩方りきむ居合腰、太刀の柄も摧けよと、握りひしぎ身を慄はし、互の心探りあひ、兩眼に血筋をはり、歯を鳴して睨み合、擬勢の程ぞ頼もしき。盛長かッら〱と笑ひ、「ア、言甲斐なき狼狽者と死して益なし。名將の御墓を腰拔共に囘向させ、勿體なし」と云ふ儘に、一丈有餘の高卒都婆、押取て出ければ、金王續いて飛掛り、「君の標は渡さじ」と、確と取て引留る。日本中古兵揃に選れて、大力と名にふれし藤九郎盛長、博多王の怒をなせば、源平の其中に剛力の聞有澁谷の金王昌俊、獅子王の力

當言―あてこすり

ふりずんばい―埒あかぬもの

巣もり―かへらぬ卵

爭論過て云々―乳切木は乳迄の高さに切りたる棒、喧嘩過ぎて騒ぎても益なき譬

ゆへ、「不覺の御最期是非もなし」と、堪忍ならぬ當言し、尻目に睨む眼より涙を流し申しける。金王丸むつとせしが、左あらぬ體にて香花を捧げ、卒都婆に向つて、金「口惜の御有様や。某が諫を御承引なく、長田に心を許し給ひ、果敢なく討れ給ひしよな。當座に腹切て冥途の御供と存ぜしかども、いや〱死は易し、存生へて今一度、源氏の御代と飜し、御恥辱を雪んと斯の體には候へ共、若君達は御幼少、御家人どもは散々に成り、有る甲斐もなき藤九郎盛長と云ふ素丁稚、浪人して魂くだり、口先の廣言計りにて、臆病者の大腰拔、何の役にも立ち申さず。源氏の御運の拙さよ」と、同じく尻目に睨付々々詞を荒し申しけり。盛長又御墓に向ひ、「石塔に耳なく卒都婆物言ねばとて、拔ぬ太刀の高名、腕なしのふりずんばい、草の陰にて左こそ可笑く覺されん。死を易しと申せども、命を捨つる程ならば、長田奴に羽はあらず。討に討れぬ事や有る。然ながら武士と思へば恨みも有る。牛馬に劣りたる人外と思し召せ。本意は某遂げ申さん。未來の妄執晴れ給へ。アヽ南無阿彌陀佛」と云ひければ、金王又御墓に向ひ、「玉子の中にも巣もり有は尤かな〱。親兄弟の兵に似たる方なきそんはづれ。夫程心剛ならば、さんぬる合戰に、今の口ほどなど高名はせざりしぞ。合戰と言ば逃足早く、爭論過ての棒乳切木、後の廣

一つは云々―助くれば汝の供養になると也

寺友達―寺小屋友達

主を殺し婿を討つ非學非道の罪人よ。汝は鬼畜か木石か。妾は命惜からず。子供を助け得させよや。一ッは其身の祈禱ぞ」と、前後不覺に泣き給ふ。長田打笑ひ、「尤も帝より妻子は宥免との仰なれども、清盛公より根葉を枯せとの御意を蒙る。サア今若乙若を出せ。然なくば命を取るぞ」といふ。常「チ、己が心に引當て卑しくも云たりな。自己も牛若も殺さば殺せ。今若や乙若が行衛は言じ」と、叫ばるれど聞き入もせず搦め行く。神や佛も無き世かと、淺間しくこそ見へにけれ。是は扨置、爰に比企の藤九郎盛長とて、源氏重代の勇士なりしが、去ぬる保元の合戰に父を討たせ、幼少より流浪して此國に漂へしが、力强く脊高く今年旣に十九歲。源氏亡ぬと聞くよりも、夜を日に繼で都に上り、七條朱雀義朝の御墓所に參らるゝ。向ふを見れば我年配なる若者の、直垂袴に太刀佩て編笠傾ぶけ、盛長をじろ〳〵と熟視るゝ。盛長不思議と能く視れば、古への寺友達、義朝の膝元去ず、澁谷の金王丸幼顏疑ひなし。「彼奴は義朝の御最期迄御供と聞きけるが、長田を討ずして逃來る卑怯者。詞をかくるも無益なり」と見ぬ顏して、御墓に花奉り水手向、生たる人にいふ如く、盛「口惜き御有樣や。人らしき侍が切て一人御供せば、斯く闇々とは成給はじ。金王とかや云ふ粕丁稚、臆病者の腰拔の人でなしと知り給はず、頼みに召連れ給ふ

二葉―幼少、今若は僧全成乙若は義圓の事にて頼朝範頼にあらぬを態と作りかへたり

つめ〳〵―抓ること

頭の殿―左馬頭義朝

討取は今の事。源氏の大將今若が武者振御覽候へと」庭の面を二三遍乘廻して立給へば、乙若小弓に小矢を矧、赤き絹を細枝に掛け、乙「彼こそ平家、餘さじ」と、よつ引て兵と放ち、「嬉しや平家を射留し」と勇み給へば、牛若は母の膝より這下りて、彼赤絹をずん〳〵に引さき喰さき、兄弟三人打喜び、「平家の赤旗討取たり。勝鬨揚よ。ゑい〳〵おう」と、手を拍いてぞ笑はるゝ。此人々の二葉より斯成こそ道理なれ。成人の後六十餘州を靡かせ、源氏の光を輝かせし、右大將頼朝、蒲の冠者範頼、九郎判官義經とは此兄弟の生先なり。常磐夢とも辨へず、「なふ恐しや壁に耳。弓手も馬手も平家方。源氏の一家は皆亡び、有るに甲斐なき世の中に、若も平家へ漏聞へ、如何なる憂さか重ぬべき。今日より左樣の惡戯せば、コレ、つめ〳〵するぞ」とたいじよだて、牛若を搔抱き、常「今若も乙若も今日は何とて手習せぬ。未だ手本はあげざるか。早々寺へ」との給へば、二人「あつ」と答へて悄々と編笠被き手を取交し、立出給ふ後姿、常磐御前は見送りて、「可憐の有樣や。頭の殿の在まして、世が世ならば供人よ、馬よ輿よと云ふべきに、一僕をだに伴させぬ、彼が源氏の惣領の、成る果か」と計りにて、伏沈みてぞ歎かるゝ。然る所へ長田親子大勢引具しどつと入り、「夫こそ常磐餘すな」と、牛若諸共引立る。常磐御前は聲を上げ、「長田とは己が事か。

參上仕る。義朝が首は穢を憚り、源氏重代の太刀物具白旗を切取て、是淸盛が御年玉、國安全に治るも、一張の弓の勢ひたり。東南西北の敵を易く平げん」法皇大きに御感あり。淸盛を中納言、長田は六位の主將に補せられ、重ての院宣には、「義朝が事は先祖滿仲より、累代忠勤の功篤しと雖も、此度思はずも朝敵信賴に與し、不覺の最期不便なり。内大臣の正二位を贈官し、朱雀の寺に標をたて追善有るべしと」の御氣色にて、猶も長田を御階近く召れ、「汝朕が命を重んずと雖も、正しく主人と聟を討事天罰輕きにあらず。其罪を償はんには、義朝が思ひ者、常磐の前と云ふ女、幼き子供有りと聞く。尋出し守育て、切ての恩を報じなば、妻子を勞る志、草の陰なる義朝も、讐を忘れて自然、汝が冥加と成べきぞ」と、漏る方なき院宣の、惠は賤が伏屋迄、實に明王の盛德に譬へて言ば、此春の民こそ御代の心なれ。つま木には取殘されて有ながら、憂は變らで常磐木の、浮世の力落葉ふる、下の醍醐にしるよしよて、忘れ形見の涙の種。義朝公の俤は三人の子になぐさみ、今若は九ッ乙若は六歲、扨牛若は三歲にて、未乳離れぬ懷に、包む涙の世も狹く、宿も葎に埋れり。悼しや今若、父の別れの涙の隙、竹馬取て打乘り、「歎き給ふな母上樣、追付某平家追討の院宣を蒙り、まづ此如く馬に乘り大軍を引率し、父の敵淸盛を

思ひ者―妾

賤が伏屋迄―貧家に迄

つま木―薪と夫

義朝にかく

しるよしして―領地を持ちて

源氏烏帽子折

第一

曉風云々—冬寒からず春も長閑なる狀をうつす
四の夷—四夷八蠻にて邊鄙迄もの義
立浪—春立つにかく、浪は白河の緣
表じ—表るし

曉風ゆるく吹て、冬日おごそかに輝やき、春雨なゝめに洒いで、清豔花を粧ひす。今此時かや四ッの夷八ッの隅、春も閑に立浪の、後白河の法皇こそ、別て目出度き賢王なれ。天津御國を二條の院に讓り與へおはしまし、玉體安く仙洞に、遁れおりさせ給ひながら、萬機を後見政事聞へさせ給へば、道ある御代と百敷や、袂豐に初ぎしき、治る國の兆なる。既に平治二年正月七日、武臣安藝守平の淸盛院參し、先新春の御慶を奏し、「別して當年は目出度き事のみ候べき、御喜悅の表じ御座候。其故は源氏の大將左馬頭義朝、藤原の信頼に與し、天下を傾けんと爲し所に、舊冬淸盛待賢門の戰に打勝、義朝は野間の内海長田を頼み罷下り候所に、長田譜代の下人なれども勅命を重んじ、當月三日に終に義朝並に聟の鎌田を討取候段、神妙に存じ、長田の庄司忠致、同じく太郎忠澄、召連れ

水にすむかはづのこゑ、何れか歌をよまざるや。神も佛もをしなべ納受有は此道なり。ヤア弓馬の家に生るゝ共、歌の道をもたしなむべし」と、一々次第にかたらせ玉ひ、すぐに還御なされける。今にたへせぬ大日本、王法佛法國法は、萬劫ふる共よも盡じと、貴賤上下押しなべて、悅びの眉をぞひらきけり。

かづらきの神―容貌醜しとて夜のみ出て象の岩橋を作りし神

みしめなは―見ると注連とかく

おきな―說くにかく

花に鳴鶯云々―古今集の序にある句

んとぞ思ふ、とよみけん歌の心こそ、ことに優れて哀れなれ。むかしの花の一盛り、世におちぶれし行末は、水のうへなる浮草の、さだめかねたる身のほども、思ひやらるゝことばかな。こゝに左の十六に、藏人左近と聞ゆるは、是も女の歌仙なり。いは橋のよるのちぎりもたへぬべし、あくるわびしきかづらきの神。と詠るこゝろは、いにしへの役の行者の、かづらきやくめぢにかけし岩はしの、渡しもやらで中々に、神にうきめをみしめなは、ながきうらみをむすびける、夜のちぎりぞ哀なる。大中臣の能宣が、千とせまでかぎれる松も今日よりは、君にひかれて萬代やへん。と子の日の松の行末も、久しかるべき例しぞと、君を祝ひし名歌なり。十八ばんのをはりには、左に平のかね盛が詠歌を見れば、くれて行秋のかたみにをく物は、我もとゆひのしもにぞありける。と老をいとひてよむ歌も、たゞ我々が身のうへに、思ひしらるゝことはりの、むかしにかはる黑髪は、霜のおきなと衰ろへて、過る月日はあづさゆみ、ひくにとまらぬ世の中の、生老病死の有さまを、悟れとよめる心なり。右のとまりは中務、是こそ伊勢がひとり娘、母にをとらぬ名人なり。つらねしうたは、黃鳥のこゑなかりせば雪きへぬ、山里いかで春をしらまじ。と實に心なき鳥類も、時を忘れぬ初こゑに、四方の春をやしらすらん。されば花に鳴鶯、

しるしの杉―古今集、我庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門の歌によれり

たつき―たより

尋ぬる人もあらじと思へば。歌のしさいを尋ぬるに、是は批把の左大臣仲平と申せし人の、心がはりをうらみつゝ、大和の國へおもむく時、よみて送りし歌なれば、偖こそ所も三輪の山、しるしの杉のふる事を、我身のうへによそへたり。偖左の第三は中納言家持。春の野にあさる雉子のつまごひに、をのがありかを人にしれつゝ。とは春の狩場にすむ雉子の、草葉に身をばかくせ共、妻こひかぬるをり〳〵は、けい〳〵ほろゝとなく聲に、よその袂もぬれぬべし。右のかたの第三は山の邊の赤人のつらねしうたは、和歌の浦にしほみちくればかたをなみ、あしべをさして田鶴なきわたる。實に此浦のならひとて、女浪はたゝで片男浪、蘆邊の田鶴の立さはぎ、行衛もしらぬこゝろなり。在原の業平の歌のことばは、世のなかにたへてさくらのなかりせば、春の心はのどけからまじ。と花に心を染川のふかき情をあらはせり。僧正遍照の詠歌には、すゑの露もとのしづくや世の中の、をくれさき立ためしなるらん。實に世の中の有樣は、今日は人のうへ、あすは我身を白露の、風まつ程の命ぞと、思ひしれとのをしへなり。猿丸大夫は、遠近のたつきもしらぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥かな。とたよりなき身をおく山の、鳥の心にたとへたり。小野の小町が、わびぬれば身をうき草のねをたへて、さそふ水あらばいな

弘誓―衆生を濟度する佛の誓
狂言云々―歌の事

ナヾしめ―和ぐる

三位を經たり。一代の詠歌の數、五千三百八十首、みな眞言の祕密なり。中にもこゝに書れたるは、ほのぐ〳〵と明石のうらの朝ぎりに、しまがくれ行く舟をしぞ思ふ。此歌の口傳樣々なりと申せ共、是は神道の根本佛果菩提のめうもんなり。人間生死の有樣を浦漕舟になぞらへ、弘誓の海をわたり涅槃の岸に至るべき、其行末を思ひやる、深き心をよまれしなり。狂言綺語のたはぶれも讃佛乘の因緣とは、よくこそ是をつたへたれ。扨右の第一は紀の貫之の詠歌に、櫻ちる木の下風はさむからで、空にしられぬ雪ぞふりける。此貫之と申すは、延喜のみかどの御時に、歌のほまれ世にたかく、御書所を承り、住吉玉津島蟻通しの明神にも、あひ奉る歌人なれば、是又凡人ならずとて、かの人丸ともろ共に、和歌の祖師とぞさだめらる。歌の心を尋ぬるに、嵐のさそふ山ざくら、こかげの雪とつもれ共、てる日のひかり曇らねば、空にしられぬことはりの、實にたぐひなき名歌哉。左の二ばんは是も又、同じ延喜の御宇に有りし凡河内の躬つねなり。詠る歌には、住吉の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つ白なみ。歌の心ははま松の、こずゑのひゞき沖つ風、立白浪もおとそへて、神の心をすゞしめの、さつ〳〵の聲とやきこゆらん。右の二ばんの歌人に、伊勢といへるは女なり。書れし歌は、みわの山いかに待みん年ふとも、

めしぐ―召具する人々

重陽―九月九日

曾我菊―承和菊にて黄菊の一種

安堵―本領に安堵せよとの御教書

木瓜―曾我の紋所、沓にかく

歌の歌仙―三十六歌仙の額

曾我兄弟の神靈に、御手を合させ玉ひければ、近習外樣のめしぐの人、殘らず法施をさゝげられ、取わき今日は重陽の、折に幸ひ曾我菊や、種たやさじと若共に、河津の本領三萬町、安堵の御判のすみ色も、ふかきめぐみに取そへて、御恩をになふ木瓜の、紋も再び榮へける。目出度かりける三重しだいなり。

歌仙

さて其後頼朝公はいでんに立出で給ひ、數の歌仙を御らんじて、「いかにかたぐ〵聞玉へ、何れの宮社頭にもみな萬民の宿願にて、繪馬歌仙をかけ奉る。中にも此三十六枚の歌仙と申すは、是ならびなき名歌たり。あるとのみ計りにて事の心をよもしらじ。いでく〵此歌のしなぐ〵を、あらまし說ひて聞すべし。こなたへ參れかたぐ〵」と、一々次第にのべ給ふ。「そもく〵、此歌仙といつぱ、中比四條の大納言公任といひし人、選びをかれし人々なり。歌仙と書てはうたのひじりと是をよむ。されば三十六人の歌人は、世にたぐひなき名人なり。先左の第一ばんは柿の本の人丸。此人丸と號すは、忝くも大聖文珠の化身たり。和歌の道をひろめんため、かりに人間とあらはれ、奈良の帝にみやづかへ、位正

勧請―せうめい荒神現人神の御魂を移して祭る

もし〳〵。必粗忽せらるゝな。某は頼朝公の御近習大友の一法師、元服して大友の左近の將監に任ぜられ、若君へ付られ、只今は頼家公につかへ申すよ。然るに祐成時宗前代未聞の勇士とて、君御感まし〳〵、せうめい荒神あら人神と齋ひ、富士の裾野に社を立、兄の宮弟の宮勸請有、近日御社參との御事なり。其節兄弟の忘れ形見のをさなき者共、所領を下され頼家公の御伽に、召出されんとの御內意なり。然れ共かた〴〵久敷沈淪流浪の家、俄に用意見苦かるべし。沙汰なしに此黃金手に入れをけと、忝なくも頼家公御建設の尊意なり。必粗忽し給ふな」と、いひもあへぬに禪師坊、「あつ」とかうべを地につくれば、老母をはじめ虎少將、鬼王兄弟まろび出で、「世に有がたき御惠、いつの世にかは忘るべき。是に付ても祐成や時宗が浮世にながらへ、此仰を同じ樣に承る程ならば、いかに嬉しかるべき」と、先き立つ物は涙なり。大友重ねて、「御內意なれ共此首尾にて、斯樣に顯はし申す上は、此通りを披露いたし、追付御社參有べき間、其節罷出でむかひ、御目見へ候べし。委細は和田殿秩父殿より申さるべし。先づおいとま」と有ければ、禪「只御前をば宜敷樣に」と禮義をのべ、いとま乞つゝ用意有。歎きはうせて目出度さの、曾我の出世の悅びも、太平の代の秋津君。仁義の道や白旗の、裾野の社に御參詣。忝なくも大將御父子

かう成者云々―斯様に敵討ちたる人の子孫

うとひつすへ、禪「いづくの誰とはしらね共、慮外千萬なる奴め哉。身こそ貧なれ伊東が孫、曾我兄弟が追善ぞや。但しをのれは茶をうる出茶屋と見たか。先祖より此かた曾我一家が、物を賣て商賣したる例しなし。をのれ誠の心ざしならば、たとへ一紙半錢成共、寺へ持參し三寶を供養すべき事。たとへ千金萬金にもせよ、群集の中にて茶のあたひを取て、日本無双の五郎十郎が、潔よきしかばねに泥をぬるか、推參者。殊に鎌倉中の大名が奉加してあつめたと、ヱヽ胸わるや穢らはしや。左程曾我を大切に思ふならば、兄弟が存生に心ざしも有べし。など時宗が一命をも申し受けてたすけざりしぞ。祐經がゐせいに恐れ世間をはゞかり、見ぬ顏せし腰ぬけ共が、なんじや此めくさりがね。兄弟の者共には忘れがたみの子供等あり。若もの事の有ならば、甥共に腹卷せさせ、此法師が衣の上に鎧なげかけ、坊主あたまに兜をいたゞき、瘦たる馬に打乘て、太刀脇ばさみ一陣にすゝんで、能敵と引くみ討取一方を切やぶり、かう成者の子々孫々と後代に名をとゞめんと、朝暮念ずる我々が、諸大名の奉加を受、生たる甲斐が有ふと思ふか。うき世も命もすて坊主、いつの時をか待つべきぞ。鎌倉中の大名の惣名代には不足なれ共、をのれが相手じや逃さぬ」と、腕まくりし怒りしは、すさまじかりける勢ひなり。彼者笠をとつて捨て「ヲヽ賴

をうくべしと、鬼王兄弟水薪おりくみはこべば、虎少將母上も諸共に、取茶杓柄の回向の念佛。往來の僧俗男女貴賤をわかず聞及び立ちどまり、「是廣大の功德ぞ」と、皆々茶をうけ手向をなし、一杯に喉を霑し、二杯にくらきしんをあきらめ、三杯にかれたるたましひをさぐり、四杯にかろき汗をおこして平生不平のきを散じ、五杯には肌潔よく、六杯には自づから仙靈に通達し、七碗喫する其の中に、清風に乘じて不退地の雲に遊ぶと、みな禮拜して念佛す。妙なる功德と聞へけり。かゝるところに編笠にて、顏かくしたる侍一人、茶をのみて回向をなし、くわい中より黃金一包取出し、「近頃殊勝千萬。たゞさへ不勝手の曾我殿。御兄弟にはなれさぞ不自由に候はん。貧者の御茶たゞのみ申すはいかがなり」と、膝にをいて立たんとす。老母御らんじ、「お心ざしは嬉しけれ共、子共が追善にほどこす茶、あたひを受ん樣はなし。返辨いたす」とかへさるゝ。彼男小ごゑになり、「イヤ是は我一人の金子にあらず。鎌倉の大名衆かた〴〵をみつぎのため、少しづつ奉加をいたされ、集められたる金なれば、恩に被玉ふ事でもなし。平に取て置給へ」と、虎にわたせばじたいする。少將にやれ共手にとらず。「然らば御兄弟聖靈に參らする」と、さし置て迯て行。禪師坊外より歸り、つゝみし黃金を取つて彼ものになげ付、襟元つかんでど

みつせ川―瀬と三途川とかく
あはれ―泡にかく

新田朝比奈どつと笑ひ、禪師坊おや子の人に禮義をなせば、人々も、「朝比奈の心ざし新田殿の御情、敵にてはなかりけり。草のかげなる兄弟も、さぞ悅びのみつせ川、かへらぬ水のあはれ世に、ながらへて一所に有ならば、いかゞはうれしかりなん」と、なを繰言のくやみ草。むかし戀草しのぶふく、ふせ屋にいざなひ歸らるゝ。實にやたのしみかなしみは、定めがたなき人界なるはと、今こそ思ひしられたれ。

魂を祭る―曾我兄弟が亡父の魂を祭る
新精靈―在ちずにかく
思切る―思切って髮を切る

第五

數ならぬ身にも宿にもくる秋は、折もたがへぬ風の音。去年迄魂をまつりし身が、今年はかげも新精靈の、たなに折しく蓮葉の、盂蘭盆祭哀れなり。いたはしや母上は、虎少將がくろかみの、思ひ切たる姿を見て、「おもかげに立つ我子の顏、物忘れする老が身になど是計りは忘れぬぞ」と、日のくれ夜半のあくるにも、折ふしにますなげきなり。もとより貧家の曾我の末、なを御勘氣はつよく成、世間ひろき弔ひを、すべき便もなかりけり。誠や菩提の知りやうは、法界の回向にしくはなしと聞ぞとて、祐成や時宗の最期場に、日覆ひかまへ竈をまうけ、接待に天台乳花の茶を煎じ、往來の人にほどこし、一遍の回向

ぬ事ながら、是れは餘り興がつたり。さりながら、和田一家にめんじてとらするなり」と仰せける。朝比奈かうべを地に付、「有がたし〳〵」と御禮申し、「扨こりや新田、おぬしは近比でかいたり。あの禪師坊が命は、日本國が御訴訟しても叶はぬ所、まづかうせふと思ひ、扨此馬をぬすんだり。朝比奈と同腹中、でかいた〳〵。サア此馬を朝比奈が引出物に和殿にやつた。是でどこもまるう成。名は朝比奈となのれ共、智慧はふかひな分別義秀。ほめてくれよ」と、どつと笑へば、我君も伺候の人々一どうに、興に入てぞ感じける。かくて大將簾中に入給へば、海野太郎行氏役所よりかけ來り、海「コレ朝比奈殿、御邊の仕方、新田は悅び成べきが、此海野は立申さず。御へんが馬を盗みし故、某召取たる禪師坊を忠常に助けさせ、あらそひの有る此馬を新田にやるは何事ぞ。それでは海野が一分たゝず。了簡しなをせ朝比奈」と、いへば義秀ゑせ笑ひ、「イヤこしやくな一分だて、じたいあの馬は御へんなどには似合ず。お主たちには牛がよし。其うへあの馬は手がら三度したる者に給はらんとの御ことばに、ろくな手がらを一度もせいで、御馬を望むは、經もよまずに布施とるか。今でも手がらにサア此朝比奈をなげて見よ」と、大手をひろげをひまはせば海「我まゝ者の無法やぶり、かまひはせぬ」と口の内、ぶつくさ〳〵つぶやきて、表をさして迯出る。

ても望め」と有る。新田かぶりをふり、「イヤ馬は四足有る物に、足も手もなき御太刀はいやにて候。ぜひ禪師坊を給はらずば、但はじめの通り松島月毛を給はるか。二ッに一ッの御返答承はらぬ其内は、まつたく此處を立ち申さじ」と、どうと座をくみ居たりけり。頼朝思案につき給ひ、「此うへは詮方なし、禪師坊をとらする」と御詞もをさまらぬに、忠「こは有がたし」と罷立、繩きりほどき塵打はらひ、「是々曾我の母御、疾々つれて歸られよ」母「ハッ」ト計りに手を合せ、「神か佛か新田殿、生々世々の御慈悲成は」と、忠常をおがむやら禪師坊をさするやら、行つもどりつ泣つわらふつ、うれしさ足も地につかず、暫しどよめき悦びし、心ぞ思ひやられたる。かゝる所へ朝比奈の三郎、松島月毛の口をとり、御白洲にはせさんじ、朝「義秀めは盜を仕り、直に立のき候へ共、思案を仕り、我と我身を訴人に罷出候。盜んだ所は罪ふかけれ共、自身そにんの御ほうびに、此馬は朝比奈が拜領致し申べし。若御聞入なくばそにん致して益もなし。いつさう元の盜人なり。和田の一門九十三騎、三浦の一黨同類をくみし、盜みを致す程ならば、恐らく鎌倉中東八ヶ國をぬすみ立、後には何を盜まうもしれ申さず。時にはかへつて我君の御損たらん。理をまげて義秀に拜領仰せ付られかし」と、恐れなくこそ申けれ。頼朝わらわせ給ひ、「朝比奈が我儘にはじめ

報身となつて現はれ給ふ
諸行無常云々—涅槃經の四句の偈
ひざう子—大切な子
あぐむ—もてあます

討てすてよ」と有る。然る所へ、新田の四郎忠常、「言上のこと有」と、簀戸をひらかせ伺候する。人々は涙ながら「あれ祐成討たる敵。人こそ多きにあの者が討たるか。うらめしや面にくや。腹立や口おしや。食殺してのけたや」と、歯がみをなして歎かるゝ。忠常御前に向ひ、「曾我の十郎を討とめ、高名三度の都合あふて候。御契約の御馬給はらん」とぞ申しける。君聞召し「それは沙汰にも聞ぬらん。しんがいを使にて汝が方へ引せし所に、朝比奈が狼藉にてぬすみ取、行がたしらず。それ故義盛を初め三浦一黨閉門をせさせ、しんがい迄も出仕をとゞめ置つるは」と宣へば、新田大きに不興し、「いや是は御諚とも覺へず。以前君の仰には、三度の手柄仕つれ。それ迄は頼朝が預かつたりとの御意なれば、ひつきやう我らのあづけ物。ぬすまれしとは大將の御意共存ぜず。馬を得ん計りに祐成を討て候間、是非に於てお馬を、後共いはず、たつた今、給はらん」とぞねだれける。垣の外には母上、「にくきやつが詞やな。たとへ龍馬千疋万疋にもせよ。人の大切のひざう子を、馬にかへて討たるとは、人でなしの畜生め」と、聲を上げてぞなき給ふ。頼朝もあぐませ給ひ、「其義ならば外の物を何にても望め」と有。新田あたりを見まはし、「然らばお馬のかはりに、此禪師坊を申しうけ候べし」頼「いや〳〵彼は大事の囚人、かなふまじ。頼朝が重代、ひげ切ひざ丸に

首陀―印度の農人

提婆、不輕―何れも法華經に詳なり

一心三觀―吾人の心を空と假と中との三樣に觀念する意

圓頓―化儀四教の中の圓經頓經

止觀―圓頓の教解

隨緣―不變

とうかく―貪覺にて思財思色之欲

二乘作界―聲聞と緣覺とが佛になる事

無作三身―佛は空なれども或時

利も首陀も、かはらざりけり。己心の彌陀、唯身の淨土なれば、本來無東西何處、有南北と觀ずべし。提婆達多は前生にて佛の師匠たりし身が、阿鼻に墮して苦をうくる。不輕菩薩は打擲せられ、憎まれながら妙覺の、佛のくらゐに至り玉ふ。皆是一念信解のとく。それ六字の名號といつぱ、華嚴經にて南の字をあらはし、阿含經にて無の字をせつし、方等經にて阿の字をひらき、大般若にて彌の字をつゞめ、法華經を以て陀の字を皆會し、南無阿彌陀佛と申すなり。妙樂大師の御釋に、諸經諸讃だざいみだ緣深厚故とのべ玉ふも、深き心や有明の、一心三觀のむねの月は、圓頓止觀のそらにかゝる。隨緣眞如のはつしほは、同一かんみの岸にみつ。中道實相の車は、無二無三のかどにとゞろき、一乘菩提の駒は、平等大惠の園に嘶ふ。とうかく瞋恚の時鳥は、妙覺究竟の峰になき、二乘作佛の鶯は、無作三身の谷にさゑづり、諸行無常の春の花は、是生滅法の嵐に散り、生滅滅已の秋のしぐれは、寂滅爲樂の紅葉をそむ。一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟りを得、韋提希夫人の無生恩にあやかり給へ、母うへ樣。禪師が素懷是にあり。思ふ事もいふ事も是迄なり。人々サア我首を召されよ」と、目をふさいでぞ居たりける。賴朝重ねて、「學問といひ武勇の法師、近頃惜しき者なれ共力なし。此うへは罪なつくらせそ。早々

十神力―法華經科註に爲付囑深法現十種大神力とあり
自受用―自力にて現身の儘成佛する事
五時―華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃の五時敎
八敎―化儀四敎と化法四敎
薩達磨云々―妙法蓮華の梵語
超八醍醐―五味中最上味にて四味の權敎より法華の實敎を說くに喩ふ
鷲の峯―靈鷲山
顚倒―心の亂れ
娑婆分段―衆生界を云ふ
刹利―印度の王種

三ぶきやう

やゝあつて禪師坊、「ア、愚なり母うへさま、疾病におかされ劍にふし、火に入水におぼるゝも前世の業。品こそかはれ生死の緣、のがるゝ道の有べくば、世尊入滅有べしや。十神力をあらはせば、一日も百千ざい。まよいの衆生は以如半日。あかず惜しと思ひなば、千歲の夢の心ぞや。母も姉も聞給へ。禪師坊がさいごに、自受用卽身成佛の、御法をといて聞かすべし。御前伺候の人々も、なりをしづめて聞玉へ。それ、世尊一代五千七千の經卷は、そも華嚴寂滅とうじやうにはじまり、法華涅槃に書をはる。其中間の五時八ツきやう、中にも薩達磨芬陀利花、妙法蓮華と飜じたり。三世の諸佛出世の本懷、衆生成佛の直路、超八醍醐の鷲のみね、うへなき法ととかれたり。こゝにしばらく、緣なき衆生を度せんがため、方便の門をかまへて妙法蓮華の、五字をかくして南無阿彌陀佛の六字に攝す。五戒十善の窓の前には、顚倒の霧立ちのぼり、座禪の床には、煩惱の眠り深く、修行の天地にいたりがたき愚痴の凡夫は、六字を誦じて極樂に往生す。娑婆分段の凡身には、恩あり仇あり貧福あり。ぜんあく上下のしな〴〵も、冥途の道に入ぬれば、刹

たり。よつく御思案候へ」と、なを憚からず申しけり。御前伺候の諸大名、「誠に河津が子なりし」と、舌を卷ぬはなかりけり。君も感涙押へかねさせ給ひ、賴「あつぱれ猛き勇士どもや。彼等兄弟召つかはば、賴朝が一方の用にも立たんず者なれ共力なし。時宗が最期の所へ引出し、うつていとまをとらすべし」侍「畏つて候」と、引立んとする所へ、老母二の宮とら少將、警固も番もおぢばこそ、外垣二かはをし通り、御白洲の內がきにひし〳〵とすがり付、母「やれ母こそきたれ禪師坊、淺ましの有樣や。やれ可愛の者や」と泣きさけび、「なふ我君も聞召せ。老中達も聞給へ。そも出家は佛子とて、衣を墨に染むるなり。釋迦如來の御子となり、此世の父母兄弟とは、他人になつたるあの法師に、何の科の候ぞ。侍の子の敵うつたが不思議かや。時宗が切れしさへ世に御恨に思ひしに、遠國波濤のすみ〴〵迄、さ程にさがし曾我一家を、絕さで叶はぬ事なるか。あの子計りは助けてたべ。なふ御慈悲なるは人々よ。申しなをして玉はれ」と、理非をもわかず聲を上げ、垣にすがり伏まろび、きへ入りたへいり泣き玉ふ。今まで勇む禪師坊、母の歎きを一目見て、朝日にきゆる初霜の、たゞしほ〳〵と心くれ、前後もわかぬ其有樣、君を初め參らせて、滿座の諸武士下々迄、袖を絞らぬものはなし。

に逗留ある。かゝりし所へ海野の太郎、禪師坊を召とつて御前に引据る。君御覽じて、「和法師は河津が末子よな。兄共が敵討ちしを知りつるか。但し知らせざりつるか」と御諚ある。禪師居丈高になり、「恐れながら大將軍の仰せ共覺へぬ物かな。一ッ腹一生の兄が親の敵をうつと申すに、しらぬ貌する人間や候べき。但法師なれば しつても討まじき奴と御覽ぜられて候か。我君天下をしろしめすも文覺と申す法師の力。此ばうず文覺ほどこそ候はず共、一寸の蟲に五ぶの魂。かくとしらする程ならば、祐經を兄共にをし向、ぐそうは御座近く推參いたし、おほぢ伊東入道が御恨をも申すべかつしものを、殘念や本意なや」と、はゞかる氣色はなかりけり。賴朝なをも心ざし引見んと思召けん、賴「チヽさもこそあらめ。汝はさせるとがもなし。伊東が所領をあたふべきが、げんぞくして賴朝に奉公してんや」との給へば、ぜんじ眼に角を立聲をあらゝげ、「よつく某を腰拔と御覽ぜしな。兄共は誅せられ、三衣になはをかけられて、所領がほしい命がおしい、還俗いたさんと申さふか。但それもお心次第。去ながら愚僧を助けをかれふならば、あつぱれ御身の一大事。明くれ君を見る度に、うらめしや先祖のあだ、恨めしや〳〵と思ひつもつて何處ぞでは、御首ほしくなり申さば、粗忽いたさんは必定。然れば虎の子を飼にに

三衣―僧衣の稱、大衣、七條、五條

押へ―えんがり

ひだりまへ―思ふ儘にならぬを云ふ

く、松江の里くれゆけば、暫らくやすらひ、三重たち給ふ。日も暮行ば人々は、宿をからんとやすらひ給ふに、「曾我一類の囚人此所のとまりにて、外の旅人は一人もこよひの宿は叶はぬ」といふ。二女「南無三寶」と膽を消し、「曾我一るいの囚人とは誰成らん」と問ひければ、里人「五郎十郎が弟、越後の國くがみの寺禪師坊といふ法師を、海野太郎行氏殿が承り、召取て御通り、用心かたく仰出され、旅人の泊はかなはぬ」と、云ふうちにはや牢輿の前後嚴くとりかこみ、御家人さきを打ちはらひ、海野の太郎は押へを乘つて、弓に矢つがひ長刀のさやはづし、朝敵むほんの生捕なんどの如くにて、驛路のなかへかき入しは、見る目もあはれに淺ましし。虎「聞給ひしか少將樣」少「こはいかにせん虎樣なふ」虎「せめて御兄弟のうつりにもなれかし、又は母御の御なぐさみ、便りをだにもと心ざし、はる〲下る甲斐もなく、はや召捕られ給ひては、なき人の御形見も、誰人にかは渡すべき」少「お二人の御最期にも、一足ちがふて逢もせず、わすれ形見に禪師樣を、見んと思ひてはる〲ときたる甲斐なき旅衣。ひだりまへなる世の中や」と、なげくも心たよりなし。虎「此上は越後に行きて益もなし。曾我に歸りて母御樣に一先知らせ申さん」と、今きし道を立ちかへる、心の内こそわびしけれ。去程に右大將頼朝公、「曾我一類の落著は、ふじ野にて御沙汰有べし」と、いまだ假屋

滔—揺々と揺附とにかく

夏の蟬—夏の蟬の命短き事、蟪蛄不レ知二春秋一(莊子)

ことゝゝ—啼聲

聞紛ひ—亡夫の歸りしと紛ふ

なげそ—な投げそなり

辛苦—眞紅に掛く

あらし—あらじにかく

ぬりうちわ。羨やましきは高砂の、夫婦いもせのとも白髮。我になけとや箔うちわ、風をあきなふ其身さへ、空の暑さはしのがれぬ。しのの石原日にやけて、蝶も翼をやすめかね、千鳥鶺鴒足ひやす、清水がもとのやなぎかげ、風を見つけて走りつき、立やすらへばさらゝゝ、さつと時雨の雨かとて、こゑにかさきる夏のせみ、春秋しらぬ可惜世を、よそに聞しも身のうへと、是も涙をそへぬべし。ならはぬ旅の憂宿り、夢さへ薄く間遠なる、蚊帳のつり手のみじか夜を、來ては水鶏のことゝゝと、格子たゝくに聞きまがひ、思ひまがひつ見まがへて、雲まにさはぐ稻妻と、行ゑもしらぬ思ひぞや。身はならはしの假寢にも、あひなれし夜のくせわるく、ひとり寢られぬ露の床。こちよれ枕ひきよせて、寄てもしめても又うらみても、抱ぢからなき草枕。なげそ枕にとがもなや。「いざ」とて二人よりそへど、女子同士の徒臥や。我は辛苦のヨウヤヨヤヨ結ぼれいとの、解ぬこゝろが辛ござる。トヨヱいよつろござる。とけぬ心の氷室もり、夏の氷もあればある。團雪の扇雪なれど、消てものこる世のなかに、アヽいかなれば我々は、戀のせごしをいくせとも、越て甲斐なきなゝせ川、四十八ヶ瀨うちすぎて、こしのしらやま白雪の、つもるは富士に似たれども、裾野の原に我おもふ、たまの在所はあらしふ

戀といふ—戀の字は言が二つの絲に挟まりて下に心あれば云ふ
越後—得にかく
月を招きし扇—源氏橋姫の卷大姫の故事
白地—知らじにかく
墨繪—住みにかく
扇—逢ふにかく
それます—增すと十寸鏡とかく
武藏野—大盃の名(西鶴織留)

とら少將道行

戀といふ、文字の字形を判じもの。言葉しがらむから糸の、解くにとかれぬしたごころ。いとをしや虎少將、母の歎きをいさめかね、慰さめかねつせんかたも、涙のうちに思ひつき、すこしちからを越後なる、禪師の君に告ばやと、旅だつ姿此儘は、人や見しるとさしかざす、扇あき人團扇うり、昔しのぶの戀風を、よそに吹せてやつしゆく、世のならはしこそ果敢なけれ。人は兎もいへ我身には、三國一の殿もちて、富士さへつぎに見し山の、今は上なき雲のみね、月を招きしあふぎにも、見しはかへらで面影の、なをなつかしみ御影堂。きどのがあふぎ召すまいか。夏をわすれて涼しさは、秋と白地や淺黄地や、さつとくまどる一筆がらす、なにをうらみに仇し世を、墨繪彩色いろ〳〵に、情の種をまき砂子、すかし扇にたうあふぎ、あふぎ〳〵、あふぎ召せ〳〵。あふぎとは空言よ。あはでぞ戀は、どれ〳〵それます、それます鏡團扇や奈良團扇。扨繪團扇のしなじなは、武者繪のたけき武士も、心やはらぐおやま繪や。浮世おところゐたて髪に、ながい刀をさすぞさかづき奴の〳〵、奴がうけし武藏野の、くさ花づくし青によし、丹や綠青

をもらふならば、保元平治より源平の合戰迄、高名有る者數をしらず、此朝比奈もお耳にたつたる覺えあらん。高名づくにてもらはるゝ御馬ならば、新田迄やらせうか。此朝比奈が拜領申した。ふしやうながらしんがい殿、お取次よい樣に頼み申す」とにぢかけける。しんがいほうどもてあつかひ、新「所望ならば御前にて直に訴訟候へ。某はお使なれば罷通る」と行かんとす。朝「どつこい〳〵、扨はしかとなるまいか。朝比奈はわるいくせ。あるひは敵の首でも城でも、ほしいと念をかけてからは、取ずに置たるためしなし。是非におよばず此所で山賊してぬすみ申す。後日に盗人とあつて、切腹仰付られんは必定。馬と朝比奈とは頼朝こそ換ぞんなれ。サア盗んだ。渡せ」といへば、新「ヤアこいつ男を見ちがへたか。しんがいなるぞ盗んで見よ」と氣色する。朝比奈くつ〳〵とふき出し、「イヤ見違ひはせぬ。なるほど〳〵、曾我兄弟に出合小柴垣をおしやぶり、たかばひして逃たるしんがい見しつた〳〵。サア馬をぬすむ留て見よ」と、取て突のけ馬とり中間けたをし、手綱かいくりひらりとのる。主從「やらじ」とよる所を、馬引かへし八方へ、ふみちらし〳〵鞭うちくれてかくをいれ、雲をかすみに飛せける。しんがいは力なく、童の手を切たる如くにて、恨しさうに打ち眺め、「待て己覺へてをれ」と、御所の假屋へ 三重立ちかへる。

にぢかける―つめかくる
ほうど云々―とんともて餘す
かくをいれ―鐙のふちの四角なる所にて馬の胴を打つ（貞丈雜記）

金覆輪—鞍の山形のふちを金にて嵌めたるもの

しやらくさし—出過ぎたる話にて腹筋がよるゝと也

明王は一人の爲に其法をまげずとかや。されば賴朝、曾我兄弟が有樣甚だかんじ思召し、時宗が死罪を宥めまほしくおぼせしかど、國法もだしがたくして、明る廿九日に誅せらる。扨又新田の四郎には、高名三度の御契約相違なく、松島月毛に金ぷくりんの鞍あぶみ、五色のあつぶさ馬よろひ、新開のあら四郎御使を承り、新田が假屋へひかせける。朝比奈の三郎義秀は、曾我兄弟の墓まふでして歸るさに、此體を見て無益しくや思ひけん、つか〳〵とより朝「ヤアしんがい殿、見申せば君御ひざうの名馬をひかせて、どれへがな」といへば、しんがい聞いて、「わ殿は御存知ないと見へた。新田の四郎忠常拜領なり」とこたふ。朝比奈とぼけた顏にて、「ムウめづらしや。此馬は池月磨墨にもまさつたりとて、秩父北條我らが親父をはじめ、此義秀さきとして、皆々願ひ申せしかど、下されぬ御ひざうを、新田には何として。チヽウがてん〳〵。價がよさに賣せらるゝの」といふ。しんがい重ねて、「ハテ惡口を申さるゝ。新田は富士の人穴へいり、希代の猪をのりとめ、曾我の十郎をうちとめ、高名三度に及びし故、御契約にて拜領なり」と、いはせもはてず朝比奈から〳〵と笑ひ、「イヤしやらくさし腹筋千萬。三度の高名を珍らしさうに何事ぞ。日高名して印馬

たさふものか、宵にはや御兄弟の危き所をたすけ參らせ、こよいの御本意とげがたかりしを、わらは心のはたらきゆへ、扨みづからにくみとめよとの御契約候」と、よひの次第をあらましに、語るも聞もいそがはしく、「サア此うへはこゝの勝手を案内して、御兄弟に今生で今一度あはせてたべ。はや今のまもお命しれず。はや尋ねん」といふ所に、夜廻りの本田の二郎馬上ながら大音上、「曾我の十郎祐成は新田の四郎が討ちとめ、弟の五郎時宗は五郎丸がくみとめて、はや事はをさまりぬ。御所の假屋は安全たり。鎭まり候へしづまれ」と、館々をふれまはる。人々「はつ」と耳にたち、「あれ聞給へ」と魂も、きゆる計りに身にこたへ、「若しや〳〵のたのしみの、心の綱もきれはてたるか情なや。同じ道に」と走り出、かけ出〳〵歎かるゝは、目もあてられぬ計りなり。龜菊やう〳〵慰めて、すかしいさむる詞のつゆ、「共にきえては誰人か、ながき來世をとぶらはん。此世計りはみじかよの、その明ぐれにほしきへて、澤の螢やなくかはづ、昨日のこゑにかはらねど、今のあはれを忍び音に、とぶらひかはす八聲のとり〴〵、野寺の鐘のひゞき迄、又まつ宵にいつ聞ん。これや限りのきぬ〴〵ならん」と、泣く〳〵つれてぞ歸りける。

同じ道―同じ死出の道

とぶらひかはす―蛙と鷄と二つにかけて云へり

ぐんでうづよ―組んで見るがよい、此句謠曲實盛にもあり
天魔波旬―波旬は梵語にて惡と譯す、恐ろしき惡魔を云ふ
あまさじ―逃がさじ
底るなく云々―包まず心の中をあかしあふ
女子のざい―女の分際

つぱれをのれは日本一の剛の者をぐんでうづよ」と手をまはすを、高手小手にからみ付、大音あげて、「天魔波旬と呼ばれたる曾我の五郎時宗を、御所の五郎丸がいけ取たり。をりあへやッ」とうすぎぬ取れば童なり。時「南無三寶、はやまつて搦捕られし口惜や」と、はぎりをなし地團太ふみ、かゞみの樣な兩眼に、涙を流すぞ哀れなる。是非なく大勢をりかさなり、千筋の繩を四方へ取、引立行こそ無念なれ。かくとはしらで、きせ川の龜菊は、曾我の五郎に契約有、くみとめんと顏かくし、繩をかいこみ此處彼處目をくばつて尋ねける。とら少將も「兄弟はまだ討れ給ふまじ。此さはぎの其の内に、ちらと也共顏を見て、冥途の契りを結ばん」と、同じ所を行きかへり、立まふ揚羽のひたゝれは、宵に見たりし時宗なり。あまさじと飛びかゝり、「きせ川の龜菊ぞや。時宗やらぬ」としつかとくむ。くまれて少將振放さん〳〵ともだゆれども、龜菊ははなさじと捻あふ所を、虎御ぜん兩方へをしわくる。顏を見れば少將なり。龜菊「あつ」とおどろきて、暫し呆れて詞もなし。やゝあつて虎少將「つれないぞや龜菊殿。昨日今日迄かう三人は、兄弟よりも底るなく、あかしあひたる中ぞかし。時宗やらぬのがさぬと、女子のざいにあんまりな。そうしたものではないぞや」と、云捨て行くを引きとゞめて、龜「御恩をうけし皆樣の、殿御とある御兄弟に、そもや如才をい

なし。河津殿の御子なりけるぞ。勇力孝行仁義の道、か程たつせし祐成を、いかに契約なればとて、新田などがむざ〳〵と御首を給はるは、天の咎め弓矢の罰。ゆかりの人の歎きの程、思ひやられて今更に、いづくに太刀をあつべきぞ。忠常討ればうたるゝ迄よ。うんに任せ勝負あれ。なふ祐成殿十郎殿」と、なをせきかぬる感涙は、理りせめてあはれなり。十郎も涙にくれ、「嬉しき人の詞や候。年月ねらひし敵を討ち、御へんの様な弓取の、手にかゝつて死なん事、祐成はなんぼう果報のもの、成佛迄も疑ひなし。はや首を取給へ」と、涙をとゞめいひけれ共、忠常は目もくれて、討つべき氣色はなかりけり。祐成いかつて「エヽ曲もなし忠常、雑兵の手にかゝつて名をくだせとの事成か。ぜひに及ばず自害せん」と立ちあがれば、忠常「ヲヽ誤つたり御免あれ。南無阿彌陀佛」と諸共に、水もたまらず打おとし、きつさきに首つらぬき、忠「鬼神とよばれたる曾我の十郎祐成を、むさしの國の住人、新田の四郎忠常討取たり」とぞ名乘ける。無慙やな、時宗はにぐる敵をおつかけしが、「今は何をか期すべき」と、御所の假屋へはしりこむ。簀戸のかげより女の姿、うすぎぬかづいて「時宗を捕た」といふてしつかとだく。時宗ふり返りきつと見て、扨は龜菊ござんなれ。今少し死ぐるひに、よき侍二三百も切りとめたくは思へ共、契約なれば 時「ヤア搦めよ。あ

運づく—運だめし

あいろ—あやめ

頻伽　云々—如₂歌羅頻伽鳥在₁₂殼中₁未₁發₁聲已能勝₂諸鳥₁（大論）

子路—孔子の弟子

戰かひける。多勢とは云ひながら、曾我殿原が死狂ひに、手負討死四百人、足のふみどもなかつし所に、新田の四郎忠常「祐成にけいやく有り。是をとらん」とかけ出しが、「イヤ新田の四郎と名告なば首さしのべんは必定。然れば武士の本意ならず、運づくの勝負せん」と、祐成にわたしあひ、切むすび切ほどき、たゝかふひまにも祐成は、「本望はたつしたり。おしからぬ命なれ共、新田の四郎忠常に、預かつたる我首を、人手にはわたさじ物を」と、つぶやきながら打合たり。新田是を聞くよりも「やさしき者の心ざし」と、なをはぢ入て名乘もせず。物のあいろも見へざれば松明出だせとよばはるこゑ、祐成「はつ」と飛しさり、「さいふわ殿は新田殿か」忠「ヲヽ忠常」とこたふ。祐「南無三寶こはいかに。それ共しらず最前より、太刀を合せしくやしさよ。厚恩といひ契約の誓文たがへし面目なさ。サア契約のくび取玉へ」と、太刀を投すて座をくみて、首さしのべてぞ待ゐたる。新田涙をはら〳〵と流し、「扨も〳〵やさしき今の振舞、賴もしや神妙や。蛇は一寸にして兆あらはれ、頻伽は卵の内にて其聲諸鳥にすぐるとは、殿原達の御事よ。幼少よりひかげの身、武士の參會も絶、百姓土民に打まじはり、弓馬の道もとり失ひ給ふべきかと侮りしに、異國の子路が勇にもまさる。只今御扶持を下さるゝ、鎌倉武士はおほけれ共、誰か殿原にまさるべき人は

一眼云々—逢ひ難き折を得る、佛難ﾚ得ﾚ値如ﾆ優曇波羅華ﾉ又如ﾆ一眼之龜値ﾆ浮木之孔ﾆ（法華經）

弦なき弓云々—慌てたるさま

らぬ其有さま。「一眼の龜の浮木にあひ、優曇はらげの三千年の、春にあひたる心地ぞや。うどんげのさく時はおがみて枝を折とかや。まれにあふたる親の敵、おがみ打にうてや」とて、につこと笑ふて立たりし、うれしさ類ひはなかりけり。兄弟刀をぬきはなし、祐經がむないたに、あてては引ひいてはあて、大音上て、「河津の三郎が嫡子十郎祐成、次男五郎時宗なり。おきあへや祐經、左衞門やッ」といふ聲に心得たりと枕の太刀、とらんとするを祐經左手の肩より右手のわき、衾をかけて切付る。「五郎是に」といふまゝに、腰のつがひを板敷迄、きれもきれたり年月の、あだとうらみと一時に、今打ちとくる氷の太刀、折もせよくだけもせよと、寸々にこそ切付けれ。そばにふしたる大藤内、太刀風に目をさまし、「狼藉有出あへ」と、裸身ながらかけ出て、あなたこなたとわめきまはるを、兄弟左右よりもろすねなぎ、四つ五つに切ちらし、門外さして切出れば、侍「すは夜討こそ入たれ」と、つるなき弓に矢をつがひ、つなぎ馬にむちを打ち、太刀のつかをこしにさし、上を下へと三重かへしける。たいらくの平馬のぜう、「祐經が討れしうへは、らうぜきものは曾我殿原。いで〳〵きやつらを討とめて、狩場のしよの恥辱をすゝげ」と、愛敬安西海野うすきが、いれかへ〳〵打ち出る。兄弟は事ともせず、小柴がきを小だてに取り、もみにもふでぞ

小枕―かもじの根に用ゐる木

の立かへる。一言たがへな」時「たがへじ」と、左右へわかるゝ雨のあし、行かたくらく風さはぐ。虎少將は寢がての、枕に殘る書置を、見るよりおどろき年比の、契りはこゝぞ冥途まで、遲れじ物とかねてより、思ひそめおく蝶千鳥の、裝束引かけ太刀かたな、髢小枕取てすて、地髮計りをはちまきし、假屋まぢかく忍び入、出立小がらにりゝしくて、女とさらに見へざりけり。勝手はしらず雨夜なり、一人手をくみ隈々を、虎「祐成やおはする」少「時宗やまします」と、小ごゑに呼でうそ〳〵と、尋ねまはるは過し夜の、手くだに似ても事かはり、胴慄はるゝ計りなり。かくとはしらず兄弟は、袖打かざし松明に、足もと計りてらさせて、はるかに見ゆるを虎少將、「アレ夜廻りか番衆か。見付られてはあしかりなん。一先づのけ」と一村の、森を目あてにはしりすぎ、逢でわかれし本意なさよ。兄弟は祐經が假屋の外がき切やぶり、中門につゝといれば、郎等若黨悉く、晝の狩には仕疲る、雨を頼みのゆだん酒、みな高いびきして伏したりけり。所々のともし火をふきけし〳〵、そろり〳〵と差足して、なんなく敵祐經が、ひとまの寢所に忍びつき、溜息ほつとついたりし、心のうちこそうれしけれ。「サア是迄はしすましたり。今暫らくぞ、南無八幡、はこね兩所伊豆三島、力をくはへ給へや」と、近付よつて見てあれば、祐經沈醉高枕、ぜんごもし

うつり―緣
ならびて―手引して
中―途中

くさふ。こよひ祐經を打つかくご。それに賴朝入給ひては、本望とげぬのみならず、仕損ぜんは目前なり。何とぞ思案し、賴朝公こよひの御成をとゞめてたべ。生々世々の厚恩、曾我兄弟が一生に、人をおがむは是が初め」と、手を合せてぞ賴まるゝ。龜菊しばしいらへもせず、「是はよぎなき御賴み。虎樣や少將樣の、うつりといひお二人を、如才に思ふ心でも、祐經かばふ心でも、誓文くされなけれ共、親分を討つ人に、ならびてなどとの後日のさた、傾城のはては道しらず、尤かなといはれん事、妾計りか勤めたる身の總恥なり。どうもお返事なりがたし。わるうは聞てくだんすな」と、あぐみし色ぞ道理なる。時宗聞て「ヲヽ、至極したり〳〵。日本一の思案有。兄弟祐經うつての後、御所へきつていらん時、百萬人がかゝつても、事共せぬ我々なれ共、御身むかつて此時宗をくみとめ給へ。女と見たらば某がやす〳〵と搦められん。時には御身も親分を討たる者を、女の身にてくみとめしと名をとれば、身一ぶんの道は立、我々も本意を遂ぐ。ひらに賴む」と手をすれば、龜菊も恐ろしながら、「おいとしや其義なら、祐經病氣と申にて御所へお返事申し、今宵のお成をとめ申さん。御本意とげられ其後は、みづからにくみとられ、我が一ぶんを立ててたべ」と、いへ共さすが女心の、身もふるはれて聲こもり、龜「あれ供人

だんないー大事なし

あは〱ーはあはあと也

杉ー仲居の名

攤銭ー采の目にて後世地に置して銭を投入れ勝負するもの（嬉遊笑覧）

忽に「あつ」共いはれぬ仕儀。兎角の思案もなきうちに、女はせいて「ア、辛氣。なふお二人樣、だんないはいなあ。きせ川の龜菊じやはいなあ」兄弟ほつと力をえ、「ヲ、いかにも五郎十郎なり。シテ龜ぎく殿のかうした事は合點ゆかず」といふ、聲をしるべに近より、龜「先お久しや、なつかしや。扨わし事は、虎樣や少將樣の御くらうになされし故、舞の一手もまひならひ、上手でもないものを、私が仕合せにてまた跡の月、祐經に請出され、即ち主の親分にて、只今は賴朝樣へ御奉公に出され、御酒宴のお肴の、舞やうたひや琴琵琶にて、御前をつとめ候が、最前おかほはちよつと見る。供の者が見付しが、刀のさきでも當ましてはと、よきちゑを出して下部共を去せしが、さだめし日頃の御望ならん。さりとてはあぶない。首尾はあは〱と思ひし故、是痞へが上つた。御無事なかほ見てられしや。とら樣はまめなるや。少將樣は赤子うまんしたか。杉の疝氣はおこらぬか。猫の子はどうしたへ。かぶろ共は今に攤銭しますか」と、急な所に取まぜし、女郎はあどなきならはしなり。兄弟氣はせく耳へもいらず、「一だんのお仕合せ。シテ先づこよひはいづく〱」とあれば、龜「さればとよ鎌倉殿、さみだれの夜のつれ〴〵に、祐經の假屋へ御成なされんと有お使に參る」と、いひもはてぬに時宗「イヤ是、日頃しつての事なれば何をか

庵に木瓜—祐經の定紋

しどろ—狂亂

物ごし—詞つき

事とはぬ草も木も、雲水空のなごり迄、今をかぎりのわかれとや」祐「いつも風はふきけれ共、こよひの風ぞ身にはしむ。虎少將が書置を、あけなば歎かんふびんさよ」時「鬼王や團三郎、さいごの供にはづれたる、くやみの歎き是れ一ッ」祐「二の宮の姉禪師坊、彼是つきぬ思ひの涙、敵を討て本意をとげん」うれし涙も樣々の、雨にあらそひ袖と袖、しぼりかねたる計りなり。時宗涙の隙よりも、「彼れ御らんぜ十郎殿。御所の假屋のかたより、供人ぐしたる乘物の、庵に木瓜付たる挑燈こそ、祐經と見しはいかに」祐「ヲヽうたがふ所なし。こゝにて待受本望とげん」時「もつとも」と、松ふみしめし、天にもあがる嬉しさに、足のたてども覺へばこそ。漫ふるひて待かけたり。程なく近付左右方より、二ッの挑燈ばた〱と切り落す。「あは狼藉」と夕やみの、さす共つく共しらぬ夜に、中間若黨縱橫に、打物ぬいて薙まはれど、二人は小わきに身をひそむ。危うかりける有樣なり。輿の内には女のこゝろにて、「必定夜盜と覺へたり。大道へ出つらん。此處を捨てそとがきより、山ぎはを搜索されよ」と、あらぬ方へ敎ゆれば、おろかの下人「尤」と、しどろになつて追かくる。やゝあつて女輿より出、小ごゝろになつて、「十郎樣五郎樣、是なふ申し、最前ちらと御兄弟と見付たり。大じない時宗樣、祐成樣」とよぶこゝろは、きいた樣な物ごしなれ共、粗

かげろふ—陽炎にて日が暮るればなくなる故曾我夜討の最後にかけたり
虎が涙—五月廿八日の雨を云ふ
蝶千鳥—兄弟の着物の模樣

よし〳〵今日はたすくるとも、明日までいけては置まじきぞ。此富士山は死出の山、富士川は三途の川、兄弟せぶみのかど出の、酒宴せん」と笑ひたはふれ立かへる。そろひにそろひしものゝふの、手本なりかゞみたり、をしへなるはと後の世まで、つきぬは曾我のはなしなり。

第三

身はかげろふのうき命、うき命、暮るゝや、かぎりなるらん。頃しも五月二十八日、空さみだるゝ黄昏の、虎が涙や少將の、よるの雨さへしきりなるに、兄弟最期のはれ小袖、母の手づからぬひ仕立、請し五體の胎内へ、歸る心に本來の、經帷子と觀念し、あげ羽のてふや村ちどりも、翼しほるゝ風情にて、松明かゝげ、笠ふりあげ、兄弟かほを見合せて、涙ぐみたる哀れさよ。祐「いかに時宗、和殿三歳祐成五歳、竹馬のむちを打しより、片時はなれぬ兄弟の、六度契りて兄となり、七度むすびて弟となるとつたへしが、今宵裾野の五月雨、くさの雫ときえはてて、未來の逢瀬はさだめなし。今ぞ此世の見をさめぞ。御身が貌をよつく見ん」時「母上見奉ると思ひ、祐成殿の御かほをも、今一度見せ給へ。

鞍心―乗心

へだてし岡のべの、小松の中を乗まはる。祐成「あはや」と谷ごしに、馬引よせ打のれば、不思議や此馬身の毛をたて、四足をちゞめて立すくむ。「南無三寶」と、うて共〳〵あをれ共、ちつ共動かずはねあがり、前足折て祐成を、眞顚倒にはねおとせば、祐成は枯ぐゐに、弓杖ついて下たつたり。おとして馬はかろ〴〵と、谷をくだりにかけてゆく。「折しも時宗はるかに見付け、はしりかゝつて馬の口、しつかととめて引來り「扨よき所へ參りたり。鞍心しらぬ馬主をきらふと覺へたり。鐙を踏しめしつかとめせ」祐「心得たり」と翻然とのれば、又此馬高いなゝきし、躍りあがつて祐成は、屛風がへしにどうと落、岩角にむねうちあて、氣をうしなひたる計りなり。時宗兄をいだきあげ、時「エヽにくや、此馬は、目前のかたき刺殺さん」ととびかゝる。祐成はつと心づき、「やれまて時宗、まつたく馬のあやまりならず。花野が新田にあたへつる、虎のいきづめ懐中せしが、怕れたるに紛れなし」と、守りよりとり出し、はるかの谷へ投すて、駒引きよせうち乗て、引立見れば不思議やな、元の如くにあゆみゆく。「つゞけや時宗來れや五郎」と、谷を乗こへ乗おろし、岡の茅原ふもとの松原、追つ返しつ尋ぬれども、はや祐經は見へざりけり。兄弟目と目をきつと見合せ、こぶしをにぎり牙をかみ、「寶の山にいりながら、むなしく歸る口惜さよ。

ひたぢ―直路

またもの―陪臣

兎角は云々―何しろ人目もあれば詞少なにと也

しておとしける。秩父の家臣本田の二郎近經、「天のあたへ」と弓と矢つがひ、駒をひたぢに歩ませよせ、すでに矢ごろと見へし所へ、工藤左衞門祐經一さんにあをりかけ、祐「コレコレ本田あのしかは祐經が見付射とむるぞ。粗忽すな」とこゑをかくる。本「御諚にて候へ共狩場のならひ、目がけし鹿を人に渡す法はなし。はづれんまでも近經が、射とめて御らんに入れ申さん」と、なを引しぼれば祐經いかつて、「ヤァをのれは緩怠者。秩父が下郎またものの分として、此祐經に慮外をなし、主の爲もあしからん」と、廣言はいて乘出す。近經無念に思へ共、慮外といへば力なく、「エヽをのれ祐經め、矢印になのりなくば、遠矢に射落しくれん物」と、こぶしをにぎつてひかへし所に、曾我の十郎祐成、祐經をはるかに見、竹笠引込み弓をふせ、しげみをわけて忍びよる。本田きつと見、「是々申し祐成殿、忍んで御狩の御供のよし、主人重忠聞及ばれ、御用あらば承れと申し付られ候。貴公數年御ねらひの鹿こそ見へて候。去ながらかれは馬上、貴公は歩行。幸ひ近經も當座の遺恨候へば、此馬をかし奉る。召れて鹿のまつたゞ中、うらみの矢壺ははづれ申さじ。人目あればおいとま」と、おり立馬をあたふれば、祐成手綱をおしいたゞき、「兎角は詞多からず」と、ふもとをさして近經は、我かりやへぞ歸りける。祐經鹿を見うしなひ、谷を

うま〳〵と云々—うまく欺きおほせたり
なまぶし—なまくら武士
いきぼね云々—口をたゝかすな

ける。時宗あたりを見まはし、「海野ははるかに行過ぎたり」鬼王に眴せし、二人を左右へばた〳〵とけたをせば、「コハ狼藉者」と起あがるを、鬼王團三郎つゝとよつてしつかと取る。時宗から〳〵と笑ひ、「我を誠の町人と思ふか。河津が次男曾我の五郎時宗といふ者。此入道は鬼王團三郎が父、津藏の入道といふ者。我々をかばひ、辨けい親辨眞と僞りしを、鎌倉中の大名小名のひげ口へ、うま〳〵ときこしめしたるおかしさよ。何とぞ奪ひ返さん爲、和田殿へ參る折から、海野殿の運のつき、よい所で出くはせ、時宗にたらされてお預りの大事の囚人、ふか〳〵と渡さるゝは、猫にかつを、武士に似合ぬあまい事。是こゝななまぶしたち、うぬらが首よりつまさき迄、みぢんにけづつて兄祐成が、手がひのとらに悦ばせん。それ〳〵」と引起し、口に込藁、時「いきぼねたゝすな。山ぎはにて討て捨よ。入道妹は古郷へをくれ。某は祐成の、狩場の出立きづかはし。追付て本望とげん。門出よければ行さきの、仕合せは手に取たり。吉左右しらせん」鬼「待奉る」と、につこと笑ふ貌とかほ、主從此世の見をさめとは、後にぞ思ひ 三重 しられたる。其日の御かりも列卒をあげ、息をやすむる午の刻。「お辨當」とふれければ、狩場も暫ししづまりける。こゝに富士の根がたより、七年物の牡鹿八またの角ふり立て、險阻苔路をのさ〳〵と、北をさ

起請誓紙に身の内の、血をばおしませ申すまじ。ゆびは切損、かみも切損、申しぶん候まじ。其外浪華のよしあしに付、後日のための傾城奉公、請狀の趣くだんの如し」と、天もひびけとよみ上たり。海野の太郎疑ひはらし、「扨は子細もなき者なり。疾々通れ」と許しけり。時宗しすましたりと思ひ、「御聞分有がたし。扨さいぜんより承はれば、判官殿のゆかり御尋ね候とや。我らが本國奥州には、其末々の多く候へ共、今日迄手をおき誰かまふ者もなし。あの辨眞めが我々を、打擲致せし憎さも憎し。拙者に預け下されかし。からめて國へ罷下り、辨慶が親をとらへしと、國中に風聞せば、義經のゆかり共、堪忍せずあつまらん、所を皆々かりもよほし、搦取て參らせん。一ッは旦那の御奉公」と、誠しやかにさゝやけば、海野ほつかりとたらされ、海「イヤ是はできた。きやつは某我君より、預り申せしやつなればくるしからず。人をそへて汝に預けん。かれをお鳥にからめ取つて、我に手がらをさせてくれよ。それ〳〵角田兵五兵六、兄弟かれに付てゆけ。隨分ぬかるな。沙汰ばしすな。判官の末類を、おほくもいらぬ一兩人、生取てくるゝなれば、コレヤ此海野は手もおろさず、かませてのんだる大手がら、急度禮は重ねて〳〵、急げ〳〵」と別れしは、愚かにも又あさまし。角田兄弟「是はふしぎの同道。いざ參らん」とぞ申し

ほつかり―うつかり

始めて出世―たえもの（色道大鏡）
きせもが露―きしもぐさの露ときすに掛く
人性根―入智慧
端―国より一段低き女郎
くずのは―屑にかけ裏見葛の葉をとりたり
戀ぞ積り―陽成院の筑波根の歌による
誘ふ水―小野小町の誘ふ水あらばいなんとぞ思ふの歌による
横波―横鎚
指出の磯―差出口に掛く
もがり―踊り
秋―剝ぎにかく

影も丸年十年きつて、金子百兩たしかに手取の身は籠の鳥。親は他國の死に目なりとも、年の間は花街のほかへ、一あしにても蹈もかよはぬ、遠國波濤へ賣てやりてや姉女郎の、をきてそむかず勤させもが露ほども、奉公に如才なく、客をばふらず心にかけて、まはる紋日を一日も、おこたらせ申すまじ。第一には間夫狂い、浮名ほくろに入れ性根する男あつて、勤麁末にいたすにをいては、着の儘ながらの端におろされ、又はみづしの下女にせられて、竈の火を焚き湯殿の水くみ、門はきせどはき、庭の掃除のちりや芥や紙くずのはの、恨みとぞんじ候ふまじ。萬一此者年のうち、花街をにげて走り井の、水に身を投刄にふし、心中して死したり共、御難はかけじ何方迄も、請人出てさばきがみ、油もとゆひ紅はな紙、あしだせきだにいたる迄、仕着の外は身の入立てとの定めなり。もし又ふかき緣のあり、戀ぞ積りてみなの川、さそふ水とて請出す、あたひ千金萬金なり共、それは主人の得分たるべし。もし誰人ぞ流れの身に、よこ波かけてさまたげの、さしでの磯のもがり舟、推ていとまを取ならば、衣裳残らずはぎすゝきの、奉公かまひ給ふべし。總じてつとめの其間、下戸なり共酒のみ習ひ、文には虚をかき習ひ、とこにて人をやきならひ、ねぶたく共ゐねぶらず、泣ともなく共後朝の、わかれに泣せ申すべし。

てうつ杖も、外れよかし反れよかしと、打ばこなたはさとられじと、用捨もなく身にうくる、互の心ぞあはれなる。海野我をおり、「ヤレさなせそ辨眞。殺してはいかゞなり。もうよいは」と引きとむる。入「いやたゞき殺さん」と、猶振上ぐるを棒もぎはなせば、入「エヽ殘念や口惜や。草のかげにて判官殿、さぞや悲しくおぼされん」と、義經にかこつけて、胸にたもちし淚をぞ、わつと泣出す其こゝろ。鬼王兄弟時宗も、思ひやりたる忍びねの、歎きをかくしてうつぶけり。海野重ねて「是々若者、以前汝はあの者が主人といひしが、いづくの町人、商賣は何ぞ」時宗聞もあへず、「さん候某は、奥州伊達の郡の傾城屋にて候が、あれなる女を金銀出し、傾城にめしかゝへ、只今つれて下り候」海野なをもうたがひ、「エヽ然らば定めて請狀あらん。それにて讀め。聞ん」といふ。

けいせい請狀

もとより請狀あらばこそ。懷中より時宗が、夏書しかけし普門品をとり出し、請狀と名付、たからかにこそ、讀上けれ。「傾城奉公請狀の事、一此なみと申す娘、ながれの道に身をしづむ、建久四年癸の丑、五月十五夜突出し女郎。何所のくもさはりなき、

夏書―夏九十日間に信ずる經を書寫する事
突出―月にかく、新造と同じく傾城となりて

入道云々—此章は安宅の關にて辨慶が義經を打ちたる處の作りかへ、後の傾城誦状も勸進帳の燒直し

れば、いふても天下の御大事。誰をか憚かる事あらん。こいつは辨慶が親熊野の別當辨眞。それにしたしきものなれば、熊野そだちの鈴木龜井が一族ならんと、咎むるが僻事か。彼奴を下人といふからは、扨は汝は義經の、おとし子の有りと聞しが、それ成るよな。こゝでの論はむやくの事。あやまりなくば御前にて、すみやかに云ひ分せよ。御所のかり屋へ同道せん。早あゆめさあ來ひ」と、云はれてさすがの時宗も、御前へ出てはあしかりなんと、返答遲々して見へにける。入道是ぞ一大事と思ひ、大ごゑ上て氣色をかへ、「扨々をのれらは何者なれば、何の用もなき事を、仔細有げに云ひなすゆへ、科もなき判官殿、彌々御とが深くなる。勿體なくも御骸に、苦患をかくる後生のまよひ。いか樣かたりか物取か。エヽ腹立やにつくいやつ。暫し御免」と郎等が、ついたるより棒をつ取て、つゞけ打に時宗を、「ちやう／＼」と打たりける。「是は」と云て鬼王兄弟立よる所を、「ヤア己等とても唯をこふか」と、はらひ打にたゝき付／＼、「つたへ聞く判官殿御存生の折から、東下りの忍び路や、安宅の關にて、我が子の辨慶、判官殿をうつたるとや。それは富樫をたばかりの、智略の棒のゆがみなき、此辨眞が心底を、海野殿への云分に、たゝき殺して見せ申さん」と、口にはいへど心根は、主君なり我子なり、思ひの色をはら立の、涙に見せ

小歌比丘尼―勧進比丘尼の事、歌念佛に解けり

はりごくら―賦り競べ

立越えしに、それは小歌比丘尼とて、尼にするよし承り、逗留もせず歸りしが、ヲヽそれよ今思ひ合すれば、熊野山のどこやらにて、一寸見たる御坊にて候。サア御通し候へ」と、つゝと行かんとする所を、「どつこへ〳〵、エヽ己めらは痴者かな。要もせぬ長口上、まぎらかして通らんとや。熊野山にて見たるとて、につこらしく云ひまはす。察する所、己は義經の家來、熊野の住人、鈴木龜井が一族よな。此辨眞めと心を合せ、鎌倉殿へあだをなす、御敵の張本、からめとつて高名にせん。ソレ脱すな」と、ひしめく所へ五郎時宗、編笠取て大手をひろげ、「ヤア權柄な御侍。あの者共は某が、大分の給銀にて召かゝへたる下人ども。最前より何れもの我儘、はらわたがもえ返り、胸の蟲がむかく〳〵と耐へかねて候へ共、無事にすまば濟さんと、齒をくひしばり控へし所に、理非もろくに聞とゞけず、なんじや搦捕んとは、いか樣のとががある。さあ承らん。もし科もないに下人をしばりからめさせ、主人の身にて堪忍ならず。町人なれば太刀かたなの、お相手にはかなはず共、腕やすねの力は御侍にも負申さぬ。はりごくら踏みごくらは、此膝骨のくだくる迄」と、すね打たゝいて睨め付る。海野ちつ共ひるまず、「イヤこりや若い者、たとへ其方が下人にも主にもせよ。是は賴朝公の御敵。判官殿のゆかりを尋ねもとむる穿鑿な

女孃―掃除點油等を司る女官
お末―女孃の次に列する女官
頭中將―藏人頭兼近衛中將
頭辨―同じく辨官と兼官
儀同三司―准大臣
衣の棚―京都の町名、衣にかく
ひさきめ―物賣女
御影堂―五條橋の西にあり寺中に尼多く住し薄弱を折りて作業とす(萬葉記)

にいへ。さなくばいつかな後へも先きへもやらぬ」といふ。鬼王兄弟つゝと出、「御尤千萬、我らは上方の貧者にてござ候。是成は妹。老ひたる親を養育みの爲、奉公かせぎに方々召連まはりし時、何かたにてやらあの御坊見たる樣に候故、扨只今の通り」といひ捨て通らんとす。海野眉をしかめ、「どこへ〳〵、シテ其見たるといふは何所にて見たるぞ。胡論ならば通しはせぬ。勿論もどしもせぬ。搦めをくが、いかに〳〵」と一めんにとり廻す。鬼王兄弟大事と思ひ、「是は近頃不祥なる所へ參りかゝつて候物かな。妹が奉公かせぎの爲、方々まはりし事なれば、何方とは覺え候はね共、先上方の女のならひ、大内がたを望むゆへ、中宮女院仙院十二の對の局々の女孃お末、内侍所への刀自采女、公家に松殿すすき殿、近衛關白政所、一條殿や九條殿、久我菊亭に花山院、頭の中將頭の辨、儀同三司女三の宮、おひ〳〵に御所迄かせぎしが、御所の風にはあはずとて、兩六波羅のやしきがた、武家は行儀むづかしく、こゝもありつき緣うすき、衣のたなや珠數屋町。めぐりめぐりて室町の、糸屋組屋ひさき女に、御影堂の扇折、ほね身をくだきかせけ共、都の奉公口もなく、西國がたへ身をしぼる。豐後の國の染殿や、そこをもすでに立わかれ、因幡丹後の紙すき奉公。それより紀州熊野には、能き奉公の口ありと、聞くをしるべに

給人―扶持米を與ふる雇人

つこうど―尖聲

藏の入道を、鬼王が親とは夢にもしらず、和田に預け置かれしを、工藤祐經取成にて、暫らく申し預かり、此辨眞を目印にて、狩場の見物群集の中を、東西南北引通り、もし見知りたる者あらば、それぞ義經のけらい筋、鎌倉殿の御敵と、召取て高名し、新田が功名をふみつけんと、たくむ思案もまはりどをき、野山を引てぞめぐりける。曾我兄弟は聞き及び、「譜代の下人を囚人となし、なからん後迄恥辱なり。人も多きに和田殿の、御預りこそ仕合せなれ。密かに歎き申して見ん。去ながら祐成は人見しれり。昨今の元服にて、五郎は見しる人なし」と、鬼王兄弟妹の花野、和田の假家へ急ぎける。海手山手をかぎりにて、大垣亂ぐゐ逆茂木引き、東海東山三十三ヶ國の大小名の、假家のしるし所々に木戸を打ち、御家人給人商人見物、行かふ人にまぎれても、時宗は此夕べ、敵討たんと思ひこみ、眼を四方に見くばりて、案内うかゞひ通りける。所こそあれ海野が持ちの木戸口にて、覿面にはたとあふ。花野父の入道を見付、「あれよ」といへば鬼王團三郎「是はいかに」と仰天す。入道いかつて、「やあ某は見知らぬ奴等。何者なればうろたゆる。此の入道に知られては穿鑿がむつかしい。早く通れ」とつこうどにいひはなす。海野さとき男なれば、「イヤまて〳〵、かれらがしかた、兩方見知たるに紛れなし。サア何者ぞまつすぐ

蝸牛云々—極めて小なる爭に喩ふ、蝸の左角の觸國と右角の蠻國と爭ふ事莊子に出づ

千騎万騎が防ぐ共、我々兄弟、ものの數とは存ぜね共、新田の四郎忠常と御名乘を聞ならば、くびさしのべて討れ申さん。然れば我等も本望とげ、貴殿は三度の高名なり。聞分てたべ新田殿」と、理をつくしたる詞の末。忠常うなづき、「チヽできた〳〵面白し。さあらば祐經討ち給へ。和殿が首はもらふたぞ」祐「いかにもやつた、忝ない。それ迄隨分御健固に」忠「そなたも御無事に」祐「お暇申す」忠「御ざらふか。」祐「首をとつたりやる迄の、」忠「先是が」祐「お暇乞」と、たがひの一禮こま〴〵と、ふる五月雨や袖がさの、竹笠取て打かづき、新田はかりや、曾我はふせやに立歸る。のべも述たり、こたへも答へた、もののふの、詞の末は神妙、神妙々々なりとて、後に聞人かんじけり。

第二

己が人に及ばざるをうらみず、人の己にすぐるゝをねたむは小人のならひ。されば海野小太郎行氏、新田と武功のあらそひ、蝸牛の角のつのめ立、いどみはげむといへ共、新田が猪に乘つたりし、功名につゞく手がらもがなと、心は強情に手も立たず、空しく氣根をついやしける。もとより祐經緣者といひ、中よしなれば、彼辨慶が父辨眞となのりし津

かはせ―かへこと

もり合ふ―大勢寄合ふ

名三度ある者に給はらんとの仰せなるに、たとへ鳴雷と組めばとて、三度の都合も合ざるに、忠常に賜はりては、海野の太郎に腹きれよとの仰せかや。先づ此度は御無用」と、たつてとむれば力なく、頼「先々休息仕れ」と、御本陣に入給へば、大名小名人数をまき、皆々かりやに入給ふ。新田の四郎忠常、本意なげに見送り、「エヽにつくい祐經、海野とをのれと縁者故、彼奴にほまれを付けん爲、度々我に恥辱をあたふ。出頭一の祐經が首取て、高名三度の都合にせん」と立あがる所へ、若者一人木蔭よりつゝと出、「申し〳〵新田殿、前代未聞の御手がら、目をおどろかし候。拙者は曾我の十郎祐成と申す者、先刻くるわにて、虎が難儀を御身に受、救はせ給ふ御懇切、生々世々の御厚恩、御禮申上候」と、かうべを地につけ禮義をなす。忠「扨は承り及ぶ十郎殿か。其猪をとめたるも、御家來鬼王が妹、虎の爪をあたへし故。其契約に虎御前を助け候へば、お禮はかはせに仕つる。此爪返辨申す間、花野とやらんに返してたべ。某は祐經めを討たでかなはぬ意趣あり」と、とんで出るを引とゞめ、祐「是申し重々の御無心なれ共、祐經は我々が大じの親の敵。御じぶんに討れては曾我兄弟が侍立ず。しばしの無念をやすめられ、彼奴を我等に討せてたべ。やす〳〵と討おふせらり、切入ん時近所く御には、狼藉入たりと、おり合んは必定。

三頭―馬の背の尻の方
王良―此人の馬術に達せし事孟子に出づ
さしもの―刺にかく
荒卒―列卒

おふ」と聲をかけ、二丈あまり飛あがり、向ふざまに乘うつれば、倒にこそ乘たりけれ。猪は乘られていかりをなし、土をけたて木の根をうがち、雲と霞にわけ入て、飛びこへ跳こへ、駈のぼりかけ下り、虚空を飛んでまはりしは、周の穆王法の爲、八疋の龍馬に乘じ、萬里を刹那に至りしも、斯やらんとぞ見へにける。新田は馬上の名人にて、樂天が三つ頭、王良がひみつの鞭、尾筒を手綱にしつかとゝり、腰も切よとしめつけ〳〵、くつ行縢は山おろしに、さら〳〵さつと斷れてのけば、大童に亂れなつて、只落じ〳〵落まじとぞこらへける。小笹茅原巖石枯木、打ちつけ〳〵吠りをかき、落ばかけんとあがきしが、仁田は虎の爪をもつ、其威勢にや恐れけん、とあるふし木につまづきて、よはる所を誤またず、差添ぬいてあばらぼね、四五枚ばらりとかき切れば、四足を土にふみ入て、立竦縮になる所を、頓てひらりと飛んでおり、數のとゞめをさしもの猪、しとめて新田はゆう〳〵と、扇を遣ふて立たれば、大將軍を始めとし、大名小名列卒かり人、足輕荒子一同に、「のつたり新田、とめたり四郎、でかいた〳〵手柄々々。いや〳〵」どつとわめく聲、山もくづるゝ如くなり。賴朝御感限りなく、「新田が振舞、千度百度の高名にもまさりたり。松島月毛をとらするなり」と宣へば、祐經すゝみ出、「松島月毛の事は、高

あをり―障泥

ちが〳〵―蹴引く

物々し云々―さもなきものに騒ぎ立つる

にぐるひ、ひらりと飛んではかつしとはね、くるりと廻はつてちやうどかけ、くるり〳〵はた〳〵、蝶鳥なんどの如くにて、退縮けしきの見へざれば、二人もあぐんでさつと引。猪は巌根に身をちゞめ、鼻の嵐にたけりをかき、息つぎしたる有様は、すさまじかりける次第なり。新開の荒四郎、「憎し、きたなし、かたぐよ。鬼神にてもあらばこそ、あの畜生を恐れては、誠の合戰なるべきか。某が打ころし、皮引剝いであをりにせん」と、つく棒取のべ打てかゝる。猪はにらんで牙をならし、只一かけと唸りけり。此いきほひに恐れをなし、突棒からりと投捨て、鹿垣を推破り、高ばひして逃ければ、數萬の狩人聲をあげ、一度にどつとぞ笑ひける。海野小太郎行氏、眞一文字にかけ來り、「この猪を組留めなば、高名三度にたらず共、御馬を拜領いたさん」と、小太刀をかいこみ躍りかゝれば、猪はすかさず一足に、飛ぶとぞ見へしが小太郎が、膝口よりくろぶし迄、まつくだりにかけ通せば、片足立つてちが〳〵と、列卒の中にぞ逃入ける。今はをりあふ者もなく、いたづらに守り居る所へ、新田の四郎忠常、おくればせに驅つき、「あら物々し、仰々し。漢の李廣は石虎を射る。明の金氏は女なれ共、猛虎をうつて夫をたすく。たとへ鐵石をまろめたる猪なり共、しや何事か有べき」と、箙竹笠かなぐりすて、「うゝ、ら

高股―高しに掛く

ながら、近づく者を斫倒し、おちあふ者を蹈ちらし、大きに呀つて巖窟を、こだてにかまへ鼻をふき、寄らばかけんず其勢ほひ。人々馬を立かねて、列卒も亂れてたゞよひける。養由が術、きよりくりうが神變も、かなふべしとは見へざりけり。君團扇をひらめかし、「誰かある。あの猪とめ高名せよ」と呼はり玉へば、武藏の國の住人太樂の平馬の丞、「某とめて御酒ゑんの御肴に」と、夕日にかゞやく大太刀かざし出たりける。猪はいはほに身をふせて、飛びかゝらんとする氣色、たゞ牛鬼ともいつつべし。詞には似ざりけり。面もふらず迯てゆく。平馬が姉むこ、愛敬の三郎、熊手引さげかけ向ふ。猪は身をふり飛びかゝり、左手の腕をかけきれば、熊手を捨てぞ入つてけり。安西の彌七郎、「かへせ返せ」と聲をかけ、長刀かまへかけ向ふ。猪はいかつて牙をみがき、唸りてかゝる其聲も、高股をひつかけて、三げん計りふり上しは、鞠の曲ともいつつべし。臼杵の八郎景信、つゞいてかゝれば隙間もなく、眉間を二つに引きかけられ、眼くらんで引たりけり。御所の九郎彌五是を見て、大の尖り矢打つがひ、暫しかためて切てはなす。矢よりも早く飛來り、腰のつがひをよこがけに、さつふとかけてぞおとしける。岡部の三郎原小二郎、鎗ひつさげて兩方より、上段下段のつゝみ突き、はつしと突かゝる。猪は一期の死

此場をさまし―此場を遁れて
生爪―傾城の心中に生爪剝ぐ事實山大鑑にあり
むさい―穢い
白癩―自誓の詞（俚言集覽）
みじかし―短氣
しゝや―征矢に對していふ、狩

發さよ。海野かぶりを振て、「おいやるな〳〵。此場をさまし重ねて曾我がゆかりとて、一人の手柄にせんたくみ。當座のでき合。但虎となじみの有る、證據は〳〵」とひどく問れて、忠「ムヽシテ證據あらば宥免あらふな。後に否とはいはせぬが」と、詞をつめても證據はなく、心をくだき思ひ付、花野があたへし猛虎のつめ、守りより取出し、「コレ此書付を見玉へ。虎の生爪と書て有、はなしくれたる虎が爪、守りにかけたる間夫おとこ。疑ひめさるは合點〳〵。今朝の遺恨に胎内の、せがれを殺さふのむさい心底。白癩きかぬ」とぎしめけば、誠とや思ひけん、いきほひにや恐れけん、海「アヽみじかし忠常、證據あれば疑ひなし。帳面もむづかし」と、虎は病にかけ付ける。新田が思案なかりせば、あやうき曾我の運命なり。かゝる所へ海野が方へ、祐經よりはや使、「富士野の御狩まつさい中。然るに只今いく年經るともしれぬ猪あれ出、列卒四五十人かけ殺し、各々あぐんで見へ候。御詮議早く御しまひ、此猪とめて高名し、望みの御馬拜領あれ。事急なり」とぞ告げたりける。海野は「あつ」と云よりも、挨拶もなくかけ出だす。をくれじ物と新田の四郎、一散にかけ出で、後になり先になり、足もためず走りしは、さながら競馬の三重如くなり。案の如く狩場こま、いく手ふりし猪の、牙は劒の如くなるが、[illegible]と尺二三寸四つ負

めいよ一面妖、不思議

身をすててんある〳〵、或人の申されしは色もかほも、腹も脈も唯ではない。さだめて〳〵あん、青梅好やらば悪阻でござろ。めいよなふしぎや中戸の豫言が、はや七月」とぞ答へける。扨其次は虎御前、おめる色なく二人の前に立ちながら、「お尋なれ共みづからは、懐姙にては候はず。勤めのうさが支へとなり、かゝる病を受候。よし又懐姙なればとて、夜な〳〵かはる男の數、どれがどれやらなんの其、夫に覺への有ものか」と、云すて歸れば海野の太郎、「ヤイ〳〵賣女奴待をろふ。ヤアのぶとい奴め、をのれと曾我の十郎こと、知るまいと思ふか。祐成が子に極まつた。サア吐さぬか」とぞおどしける。新田曾我といふこゝろに、花野がけいやく思ひ付、忠「イヤ海野殿、浪人なれども祐成も侍、推つけてさうもいはれず。病とあらば病にして、帳面をすまされよ」といへば、海野聞も入れず、「宥免するも事による。曾我は君の御仇、不吟味には成がたし。腹をさかん」とひしめきける。忠常ちやくと思案を出し、「ヱヽ是非もなし。今は何をか包み申さん。あれは拙者が子にてあり。某虎に通ひしかど、世間をはゞかり、曾我と云ふかり名をして、遣手かぶろ花街中、懐姙する迄かくせしが、手詰なれば打あける。沙汰なしに頼み申す」と、いへば虎は嬉しく、「ハテ卑怯千萬な。たとへ今死ばとて、夫を今云ふことか」と、詞を合する利

胸高―昔は帶の幅も狹く胸高なりし故尻小く見え云々と嬉遊笑覽にあり

闇の夜や―闇の夜に逢ひしと闇の夜の烏と續け次は烏帽子折と連ねていへり

ふくよか―膨れたる

四の二―合せて六になれば云ふしのに物思ふは深く物思ふ様

敷、「何事やらん御詮議とて、新田殿海野殿、御出なり」とふれありく。町の年寄五人組、ねほれ髪に袴肩衣、土にひれふし居たりける。程なく兩人入來り、「此度仔細有て、孕みたる傾城の父親を御せんぎある。少しも僞るにをいては、腹を切さき吟味する。懐姙の傾城共殘らず出せ」と申しける。町人共承り、「懐姙と申しても三四人ならでは候はず。それ先藤屋の竹とり出よ」と云へば、戀には恥ぬ傾城も、包む色にや胸高の、帶でかくすもしほらしく、海野新田詞をそろへ、「汝がはらみし子の親は何者ぞ。帳にしるし鎌倉殿御らん有るぞ僞るな」竹「さればとよ、此子の親は京の衆。偶々とは云ながら、勤めであはねば眞實の、人めを包闇の夜や、烏丸の烏帽子屋、折樣」と云ければ、海野帳にぞとめにける。次に出しは「井筒屋の、ひがきと申す新造」と、傍からいふも恥かしく、打かけの褄打合せ、見せじとすれど振袖の、下よりもるゝふくよかさ。「其子が父は誰なるぞ」問はれて顏もあかくなる、「紅葉が谷の客なるが、ひよつと變るなかはらじの、其言の葉ではらみ句や、連歌師の山樣」と、同じく帳にぞ付けにける。其次は眉目わるく、歩きぶりさへよこ町の、「靑柳と申候なり」「扨汝が胎内の子の親は何者ぞ」靑「誰と申して我身には、二人の客も荒磯の、荒井の宿の馬かた、本名は六藏、かへ名は四の二物思ふ、流れのうき

奇代—奇代にて世に稀なる義

聞捨てゝ云々—時鳥は啼けばすぐ場所を轉ずる故にいふ

別路—忠常花野の別るゝと遊女が客と別るゝと兼ねていへり

朝顔—化粧したる朝顔と牽牛花とを掛く

一つゝみ取出し、「是は韃靼國より、渡りたる虎の生爪にて候。死したる虎の爪はあれ共、生爪は稀なる物。誠や虎はけだものの王にして、地を走るけだものおぢ恐るゝは必定。わらはが在所、三河國阿部山の狩人、此虎の生づめを守りにかけて狩に出るに、いか成あら熊あらじしも、やす／＼手取にいたす事、猫のねずみを取る如し。是を只今參らせん。御身につけて御狩場にて、猪とも熊とも引くんで、人の及ばぬ手がらを遊ばさば、海野が先はよも越じ。いで／＼證據を見せ申さん。隨分御馬に鞭うち給へ」忠「心得たり」と乘出す。娘はさきに立ふさがり、追戻せばたぢ／＼／＼、とゞろ／＼と千鳥足、四足を折つて恐れしは、不思議なりける次第なり。忠常も我ををつて悦び、「奇代の重寶手に入るからは、御狩にて高名し、海野が望の御馬を拜領して名を上ん。此うへは曾我兄弟、いかなる狼藉ありとても、子孫迄も見のがしなり。弓矢八幡大菩薩、此詞に僞なし。お事が父も和田殿と、内通してたすくべし。人見付てはいかゞぞ」と、「去ば／＼」もよそ事に、聞捨て行く時鳥、五月のそらの雨曇りに、まぎれてこそは 三重 別路の、宵のうつり香燻きしめて、晝まで寢るを作法にて、他ともんちの揚屋町、くつわの亭主下々迄、それをならひに朝寢する。大磯小磯化粧坂、朝がほしらぬ里ぞかし。町のばん太あはたゞ

どうこけて―どう轉がつて

尾筒―馬の尾の根もと

り、父親しれぬ子のあらば、懐妊成とも腹をさき、詮議せよとの御諚を、承り玉ふとかや。頼み申すはこゝの事。曾我兄弟の人々は、浪人のつれ〴〵に、折々の色里通ひ、なじみのかたも有と聞ば、遊女のはらに情のたねのやどるまい物でなし。よし其事はかまはね共、それからそれがどうこけて、御兄弟の御身に、萬一お祟り有る時は、もとみづからが親入道が、仕損じより事おこる。是をあはれと思召し、御聞とゞけ候ひて、もしも曾我殿の子だねなど候はば、御了簡頼み奉る」と、理をつくし事をわけ、手を合せてぞなげきける。新田聞もあへず、「扨はお事はきゝ及ぶ鬼王が妹。今朝の入道も辨慶が父とは僞り、鬼王兄弟が親なるとや。扨々餘儀なき頼み事、心得たりといひたいが、こゝに一ッの難儀あり。海野と某御前にて、松島月毛と云ふ名馬をあらそひ、三度の功名ある者に、賜はらんとの御諚を蒙り、兩人が我さきに何をがな功名にと、意地をはる最中、曾我は伊東の末なれば、我君の御あだ、海野に先をこされ、彼御馬をとられては、某腹を切る計り。此事にをいては成がたし。外の事は何成とも、無心あらば聞べし」と、云捨て乗出す。女「なふお情なし」と尾筒を取て引もどし、「御ことわり至極致したり。誠にお侍の手がらにせんと、思召すを止むる不調法。その反禮に進ずる寳の卷一ツ、守りぶくろより

をなご力云々—かよわき女の力にても馬行きかぬる

遊君はいふに及ばず、其父分明ならぬ子は、懐姙たりとも腹をさき、きつと詮議を加ふべし」と、仰せきびしき御狩場の、番手々々の槍印、御馬印の日に高き、富士の裾野に出玉ふ。新田の四郎忠常は大事の仰せを承り、「あはれ然るべき御敵の末を詮議仕出し、高名三度の數を合せ、松島月毛を拜領し、海野工藤に手がらを見せん」と、駒をはやむる大磯の、波こゝもとや並木のかげより、わかき女のつゝと出、「是申し新田樣、お侍と見受たり。少頼み度事あり」と、轡づらしつかと取る。をなご力も駒なづむ。郎等共立さはげば、新田もとよりさる者にて、「さなせそ〳〵。見かけて頼むと有からは、聞屆では通られず。シテ女郎仔細によつて頼れふが、無心とは何事」とあれば、女「先以て忝なし。其お詞は違ふまいな」忠「ハテ疑はしくば誓文立ふか」女「イヤもうそれ迄も及ばず。さあらば語り申すべし。みづからは、今朝御狩場にて海野殿にとらはれし、入道が娘花野と申す者にて候。そも其入道が、むさし坊辨慶が父辨眞と名乘しは僞り、實は曾我の兄弟の下人鬼王團三郎が父、津藏の入道と申す者。御主の敵祐經に、一矢と思ひ忍び入、思ひの外に召とられ候を、御前にて「鬼王團三郎が親」と、有のまゝに名乘なば、御勘氣の曾我殿の大事と思ひ名をかくし、辨慶が父辨眞と、あらぬ事を申せしと存ずるなり。夫につけて鎌倉殿よ

愛宕白山—弓矢八幡といふ如く神に誓つて決心する詞

無念—無思慮

經が取持にて、海野に拜領せさせんが、して御分が思案とは、どふした思案聞ん」といへば、忠「いや只思案迄もなし。彼御馬を胴中より二ッに切り、先は某頭の方、海野にはともの方、御ぜんにて半分づつ、切取なり」といかりける。海野もせいて膝立をし、「某が拜受の御馬半分づつ切取とは、愛宕白山ゆびもさゝば、堪忍せぬ」とつめかくる。忠常も刀に手をかけ、「チヽサ拜領したくばしても見よ。すは八幡も照覧あれ。馬人共に一うち」と、三方論議の意地づくは、あやうくもはれがましく、をの〳〵手に汗にぎりし時、大將扇を上玉ひ、「新田も海野もしづまれ〳〵。是は双方道理にて、頼朝が無念なり。先彼馬を只今は頼朝が預りたり。二人共に今迄に、一度づつのほまれあり。是より後兩人のうち、二度づつの手がらをして、以上三どの高名あらん者に、相違なくとらすべし。此詞いつはらば、氏の神の御罰をえん」と、忝なくも御大將、御誓言有ければ、二人はあつと頭をさげ、恐れ入たる禮儀のてい。大將軍の御了簡、をの〳〵感ずる計りなり。重ねて仰出さるゝは、賴「今辨眞が詞によつて案ずれば、平家の餘類を始め義經の家人等、錦戸が一族、伊東入道が末葉なんど、頼朝に恨有者多かるべし。敵の末は根をたつて葉を枯せ」と傳へたり。新田海野にいひ付る。「父親しれぬをさなき者を、尋ね出して今未さ上よ。大磯小磯の

されよ」と、返答すゞしく申しける。頼朝聞き玉ひ、「是一應の事ならず、後日に評議有べき條、先それ迄はいたはれ」とて、和田の義盛に預け置かれけり。時に工藤左衛門祐經すゝみ出、「誠に彼法師其まゝ置かば何ごとか仕出し、御遊興のさまたげならんに、いしくも仕つたる海野の太郎、御ほうび下され然るべし」と取なせば、君御悅喜の餘り、「ヲヽ、尤々。何にてもほうびを望め」と仰せある。海野面目ほどこし、「御諚冥加に叶ひ候。然らば御ひざうの御名馬みちのくより召されたる、松島月毛を賜はりなば、千町万町の御加增にも、まさりて悅び奉らん」と、申しもはてぬに祐經、「ヲヽ何しに御意に異變あらん。誰か有、馬引け」と取持所へ、新田の四郎忠常、はゞからずつッと出、「暫らく〳〵、工藤殿。彼御馬にはいひぶん有。某先年富士の人あなへ入り、御褒美望めと有し時、松島月毛拜領を願ひしかど、御出陣の召料とて、某願ひかなはぬ所に、老ぼれのやせ法師召とつたる御ほうびとて、只今海野に賜はつては、忠常が武士道立がたく、且は上の御依怙にあたり、よしそれとても工藤殿の御取持にて、是非海野に下されなば、某も思案候が、御返答承らん」と、色をちがへて申ける。祐經ゑせ笑ひ、「緩怠なり忠常、以前は以前今は今。御邊が望みあればとて、日本の武將として、誰に恐れて御詞をたがへらるべきぞ。此祐

ちんじなば—詐りて申さば

皆具のきらかざり、花と紅葉をむさしのに、一どに詠むる如くにて、御感は斜ならざりけり。こゝに信濃國の住人海野の小太郎行氏、八十計りの老入道を御前にひつすへ申す様、「たゞ今御狩屋へ參勤仕る所に、此入道弓矢たづさへほのぐらきに、御かり屋の邊忍んで徘徊いたす體、さながら山賊强盜とも見へず、必定平家の餘黨と存じ、早速召とり候。きつと御糺明有べし」とぞ申しける。頼朝聞し召、「先年大佛供養の時、悪七兵衛景淸が、頼朝を狙ひしためしもあり。いか様をのれ仔細有にまぎれなし。まつすぐに白狀すべし。ちんじなばがうもんせん。いかに〳〵」と仰せければ、此入道ちつ共おくせず、「今は何をかつゝみ申さん。某は一とせ奥州衣川にて、御はら召れし九郎判官義經の家臣、武藏坊辨慶が父、くまのの別當辨眞が生殘りたる身のはて候。忝なくも我君今天下の武將とあふがれ玉ふは、全く判官殿の戰功なるに、讒人の口によつて、一日も安堵の思ひなくうしなはれさせ玉ひ、子にて候辨慶も、めいどの御供仕りぬ。せめて無念をはらさん爲、討死したる御家人共が、うみすてし子にても候はば、幼少成共かりあつめ、心計りのとぶらひ軍、仕らんずる血まつりに、先讒者を一矢と心がけ、忍びよつたる甲斐もなく、海野とやらんに見付られ、白狀無念の至りなれ共、[illegible]すつる老の命、[illegible]首[illegible]

百日曾我（一名團扇曾我）

第一

文宣王は大野に狩して麒麟を得。韓退之が獲麟の解に曰、麟は德を以して形を以てせずと云々。麟は仁獸にして生るをくらはず、生草を踏まず共いへり。道ある君が御狩場や、麒麟を得ずといへども、農業をさまたげず。民をたすけて山田もる、火串の光り明々として、斐たる君子の一遊一豫。國をなびかす旗棹の、直なる捉樂しめり。維時建久四年仲夏下旬、征夷將軍賴朝卿、富士の御狩の當日を、待つも程なきみじか夜や、御發向は寅の一點。かり屋の木戸も明がたに、御出馬の御ふれあり。昵近外樣の大小名、狩裝束に美をつくし、列卒の人數は所領の高下、面々持の場所に、まとひを立て組子には、思ひ思ひの笠印袖印。扨御鷹はつみゑつさいさしばしやう隼このり、鷲、鵰、はくてうとりの朝鮮鷹、そろへて三千餘居なり。逸物の犬唐犬、是も同じく三千疋。馬くら

文宣王―孔子の謚
大野―地名、哀公十四年西大野に狩し麟を獲し由左傳に見ゆ
火串―燈火
斐たる君子云々―文明の君子の遊獵を云ふ豫も遊ぶに同じ、一遊一豫爲諸侯度、孟子
明方―明くにかく
列卒―人足
まとひ―陣所の目標
笠印―兜の後につくる旗
袖印―袖に付くる布帛
つみ云々―皆鷹の種類、つみ雀鷂ゑつさい雀鷂さしば鵜鶘せう兄鷹はやぶさ鶻このり兄鷂
三千餘居―三千餘羽

法聚地、分爲十也（大藏法數）

諸惡莫作—諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸佛教（增一阿含經）

を屈し、慕ひ歎き奉れば、恒河の魚鱗野邊の蟲、鳥類畜類五十二類、涅槃の庭に泣沈み、梢草葉も色變り、歎きの色をあらはして、佛の別れを慕ひしは、實に道理とぞ聞えける。斯る處に摩訶迦葉、人々打連れ、走着き給へども、はや佛は御入滅。二人の比丘尼、羅睺羅尊者、「はつ」とばかりに伏轉び、歎き給ふぞ道理なる。悟りきつたる迦葉尊者、歎きに堪えかね大聲上げ、「生者必滅は佛法の根元、世尊の入滅驚くべきにあらねども、此迦葉には、世尊如何なる御憎しみ、せめて今一度御聲も聞せ給はぬぞ。情なの御佛や。名殘惜しの我本師」と、人目もわかず身を忘れ、狂氣の如く泣亂れ、聲も惜まず泣き給へば、耶輸多羅比丘尼親子の人、六道の衆生同音に又歎きにぞ沈みける。實にや、現有滅不滅。世尊破顏微笑あり。「善哉迦葉、我法に二つなし、諸惡莫作衆善奉行」と、衆生引導結緣利益、深達罪福相、紫摩黃金の光明と、肉髻の光明に、孕まれ浮ぶ涅槃の衆生、五十二類も佛果を現じ、龍燈天燈挑げ添へ、佛法守護の諸天神、國を守り世を守り、民を守つて民安全、悟り開けて身もやすく、心も廣き天地の、あらん限りは盡せぬ衆生、末法萬年萬々年、無上の榮華を極めける。

四苦―生老病死の苦惱
八苦―四苦と愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛

頭北面云々―頭を北にし面は西に向うて入滅し給ふ
十地―菩薩所證之地位、一切佛法依之發生也自歡喜地至於

邊誓願度の御機縁盡き給ひ、諸行無常の氣をあらはし、是生滅法の御肌枯れ〴〵に、賴み少なく見え給ふ。娑婆くぢうごうじやの菩薩、ぶんしんたはう八十萬億の大菩薩、十大御弟子、十六羅漢を先として、二萬八千の羅漢達、諸天龍神、天人阿修羅、御名殘を惜み異口同音、「我們衆生逢ひ難き佛に逢ひ奉り、うけ難き御法を請け、四苦八苦を免れし、御恩德をも報ぜず、別れ奉る悲しさ。盲目の杖を失ひ、幼稚の乳房に離れしも、是には爭で勝るべき。仰ぎ願はくは世尊神變力を現じ、御慈悲を垂れ給ひ、千歲の御壽命全ふして、末世末法の迷ひの衆生を度し給へ。御名殘惜や」とて、「わつ」と叫び給ひしは、天にも響くばかりにて、月日も光失へり。佛示して宣はく、「生は死の始め、無常は佛も逃れずと、衆生にこれを示さん爲、我れ慈悲心の入滅なり。我此詞を尊み、信心怠りなき輩は、來世に至つて我本土、寂光淨土に必ず來れ。逢ふべきぞ。生死の二法は一心の、めうようじやうちうしせつぽふ」と、梵音聲高らかに、頭北面西右脇臥、御年八十一歲にて、二月十五日、涅槃の雲に隱れ給ふ、御名殘こそはかなけれ。十地の菩薩五百羅漢、人界の國王大臣、貴賤男女、上は帝釋四天王、下界の龍王、他方の衆生、「わつ」と叫ぶ其聲は、坤軸も折れ碎け、翻す涙は四大海。魂失ひ氣も亂れ、大地に身を投げ手足

摩訶衍—大乘經を云ふ
法身法性眞如—本性平等にして變易あることなく眞理に向つて進む

ら御僧様は、釋迦如來の御弟子と見受參らする。みづからは耶輸多羅女、稚き人は胎内に、見捨て給ひし羅睺羅太子、生れて父を見給はず。涅槃に入らせ給ひなば、歎ても甲斐あるまじ。是は叔母君憍曇彌、昔の罪を懺悔の爲、拜みたきとの御願ひ。烏陀夷は早や先立て參詣する。賴む方なき折柄なり。あはれ羅漢の御情に、今生妻子の暇請ひ、せさせて給べ」とばかりにて、歎き給ふぞ哀れなる。迦葉聲をあらゝげ、「ア、思ひも寄らぬ事。凡僧我們の上にさへ、臨終には恩愛の羈を斷る。況んや三界の獨尊、佛涅槃の砌、昔の妻子が名殘惜むなんどとて、御對面有べきか。三人此處にて剃髮し、比丘比丘尼の容となり、佛弟子の願ひならば、佛も御悅びの御對面あるべし。我は則摩訶迦葉、戒授け申さん。如何に〳〵」と宣へば、耶「それこそ望む處なれ。戒授けましませ」と合掌あるこそ殊勝なれ。迦葉重ねて、「善哉々々。昔の罪障消滅して、本來空の都路に、皆立歸る友達ぞや。摩訶衍法身、摩訶衍法性。摩訶衍眞如」と、三行附屬の秘文を授け、憍曇彌を摩訶波者波陀夷、耶輸多羅比丘尼、羅睺羅尊者、皆佛弟子となり給ふ。末代に至るまで女房出家の始めとかや。すはや御法もかいひやくの、ほうけいの聲告渡る。松の嵐に誘はれて、沙羅双林へと三重急がるゝ。あら有難や釋迦牟尼佛、御齡八十一歲、衆生無

わく〳〵云々ー心いそ〳〵と落付かぬ事

しと、御記念の御説法、四天下の人民名残を惜み、參詣袖を連ねける。悼はしや耶輸多羅女、若宮誕生まし〳〵て、未だ對面ましまさねば、せめては會座に列り、後世の緣をも結ばんと、羅睺羅太子を誘ひて、疾しや遲しの途次、心わく〳〵せきかくる、跋提河にぞ着き給ふ。只ある畦の小蔭より、身は菅菰に纒はれて、齡も共に傾きし、笠の下より耶輸多羅女の、裾を慥かと控ゆれば、耶「アヽ怖。物をも言はずに誰ぞいの。用有て急ぐもの。放してたも」と振切れども、猶纒ひ、「イヤ卒爾いたすものならず。佛御最期の御說法、聽問の志、沙羅双林へ參詣の者なるが、如何なる因果の咎めにや、跡へ戾れば足輕く、先へとては足立たず。御情に手を引て、御涅槃拜ませ給はらば、今生の御慈悲」と、淚もいたく漏る笠の、隙より見れば憍曇彌、耶「ヤア叔母御樣かいの。形なき御有樣や」と、縋り歎かせ給ひける。憍曇彌淚にくれ、「面を見せんも恥しや。提婆が惡に誘はれ、よしなき仇をふくみしぞや。罪障を懺悔して如來の敎化を受ん爲、是までは來りしに、今まで立たる此足の、一足も先へ引れぬ身の、罪科を許させ給へ。結緣してたべ耶輸多羅女」と、昔を悔む御淚、道理せめてあはれなり。斯る處に摩訶迦葉、御涅槃に參りあふべしと、取る物も取敢ず、雞足山を立出、息を切て急ぎの道、耶輸多羅女走り寄り、「卒爾なが

は光を放ち、晏如として立ち給へば、劒は宙にて微塵に碎け、御身に觸る刃もなし。提—假し通力には適はずとも、腕の力に打殺さん」と、十丈餘りの大石、一羽より猶輕々と、引抱えて左足を蹈み、「曳やうん」と投げつくる。釋尊左の御足にて蹴返し給へば、此大石海山越えて、蒼黎山の巓に落とまる。此時御足の御指損じ、佛身より血を出す、八逆罪ぞ恐ろしき。提婆大きに怒をなし、「ヱヽ通力もまだるし。捻殺して捨てんもの」と、大手を擴げてかゝりしが、俄に震動雷電して、大地二ツにさつと裂け、阿鼻大焦の猛火の火焰、燃上り〳〵、提婆が五體を渦いたり。遁れん逃んと叫べども、煙に咽んで眼も眩み、四顚八倒狂ひ死、眞逆樣に打反し、奈落の底にぞ沈みける。大慈大悲の佛性に、怒りなく恨みなく、仇なく敵はなけれども、迷へば佛敵、悟れば味方、善惡不二のしるしはこれ。天王如來の方便力、提婆が惡も觀音の慈悲、末世の衆生に蒙れり。

第五

大乘五十年の御法の聲、三乘五乘七方便、四衆八部二十五有、普く利益の甘露を甞め、既に狗尸那城跋提河の邊り、沙羅双樹の下にて、三界の導師、涅槃に入らせ給ふべ

[illegible]し、母を殺し、佛身より血を出す等の八大罪
天王如來—提婆懺悔して後天王如來となる
大乘—煩惱即菩提、生死即涅槃を立て諸法の根柢を推せる教法
三乘—聲聞、緣覺、菩薩
五乘—三乘と人、天
七方便—煖位、頂位、忍位等の證果に赴く七方便
四衆—比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷
八部—天、龍、夜叉等の八
廿五有—六道を分くれば廿五有となる
沙羅双林—冬凋まぬ木が釋尊入滅の時四隅に二本づつありしより名づく

又殘りし一燈は、汝が家にありし瑠璃仙女夫婦が供養、則ち此槃特が父母なり。油の價に髮を切り、眞實信心の功德、一子槃特が智慧の光りとなつて、風にも消えず水にも消えず、上は佛界、下地獄界の底までも、此光通ぜずといふ所なし」と示し給へば、林丹夫婦も立出て、佛を禮し奉る。長者は夫婦を三拜し、「斯る信者と夢にも知らず、侮り苦しめ恥しめし、慳貪罪を許してたべ。現世貧女の一燈も、未來にては如意寶珠。我が長者の萬燈は、未來の糧に盡果、來世は極貧無財餓鬼。許してたべ夫婦の人。助け給へ釋迦如來」と、御衣の裾に縋付、罪を悔みて泣叫ぶ。一念懺悔の其功德、萬燈一度にばうく〳〵。光明四方に耀きわたり、貴賤男女一同に二度あつとぞ禮しける。斯りし處に向ふより、千乘の車引く如く、陸地をとゞろに踏鳴し、提婆達多、婆將軍を引立て、一文字に駈來り、山も裂る大音上、提「ヤアく〳〵須達、祇園精舍を建立し、某に得させんとの契約、其使は此婆將軍。何んぞや詞を翻へし、我外道の仇敵、釋迦を尊み、說法の道場となしたるは、奇怪千萬。サア釋迦が神力と、此提婆が通力と、比べて邪正を知らすべし。先兩舌の婆將軍、汝們が死骸の下積」と、兩足摑んで二つにさつと引裂き、虛空を白眼んで吹く息に、山河草木鳴動し、降來る雨は百千の、劍となつてぞ三重落かゝる。されども如來

中有の云々—死後七々日の迷闇を照して貰ふ願

ふくる夜—吹くに掛く

汝が信心—汝が自分の信心を天下に知らせんとて也

婦傳へ聞き、「須達長者を御利益あり。御報恩の爲にとて、長者の万燈供養とや。せめて我も、中有の闇の結縁を」と願へども、一燈の油の價なく、瑠璃仙女が髪押切り、銀錢一錢に代なし、燈籠しつらひ、道の邊りにたてけれども、折ふし風もふくる夜の、油は引て燈火の、光も細き志、萬燈に比ぶれば、晴れ行く月に螢火の、影消押されて淺ましょ。既に御説法事終り、祇園精舍の玉の架橋、如來御幸ましませば、老若男女群集して、佛を禮し奉る。長者の萬燈目を驚かし、「現世も後世も金次第。羨しの果報や。此中に彼の一燈、何んの功德になるべきぞ」と、見る人指し手を拍き、笑はぬ者こそなかりけれ。刻限もはや丑寅の、空かき曇り、黑風俄に吹來り、梢を鳴し塵を上げ、どう〳〵と吹く風に、萬燈の影ちら〳〵、ちらり〳〵と瞬く間に、萬燈一度にパッと消え、長夜の闇となりけるが、一燈ばかり消殘り、猶赫奕と光りまし、忉利天まで暗からず。譏り笑ひし貴賤群集、あつと感ずるばかりなり。長者一家泣叫び「惡魔の所爲か身の科か。世間の聞えも恨めしょ。因果を示したび給へ」と、口說き歎くぞ淺ましき。世尊聞召し、「いや〳〵。此風外より吹くにあらず。汝が信心一天下に知らせんと、我慢に灯す萬燈なれば、汝が一念、らんば、びらんばの惡風となつて、萬燈を一時に打消し、慢心を挫く。

八萬の法藏―八萬四千の略にて一切の經論

にかは免れん。今までの邪法を棄て、子々孫々まで、不惜身命の大信者となつて宮仕へ奉らん。罪を許してたび給へ」と、頭を叩き五躰をなげうち、罪障懺悔の血の涙、暫し前後にくれけるが、須「我等祇園精舍を建立し、提婆を請ぜんと存ぜしに、如來の御教化受くる事、三世の諸佛も未だ捨させ給はぬかや。あはれ祇園精舍に入御なつて、猶々示したび給へ」と、隨喜の思ひ淺からず。世尊歡喜の御容顏、「善哉々々須達長者、此槃特は愚痴愚鈍、一句一偈の行者なれども、信心の誠萬卷の書論に優り、覺えず我身に自在を得たり。提婆達多は八萬法藏を讀覺え、三千世界にあらゆる學問つくすといへども、邪の道に走り菩提心なきゆゑ、砂を蒸て飯にせんといふ如く、終に三途の闇を出ず。身の佛性を暗ませば、愚痴の槃特に劣て、地獄に落る事矢の如し。恐るべし〳〵。我れ今宵忉利天に昇り、母の爲に說法す。それまで少時此處にて、汝が爲に說法せん」と宣へば、長者額を土に付け、「有難や忝なや。然らば今宵萬燈を立て、如來天上の道を照し、須達長者が佛に歸伏し奉る、しるしを天下に見せ申さん」と、御足を取て押戴き、渴仰なせば釋迦如來、羅漢達を御供にて、祇園精舍に三重入り給ふ。法の燈火明けき、須達長者の萬燈會、星も此土に下るかと、生死無明の闇晴れて、宛がら晝の如くなり。林丹夫

出すと計り―出すとすぐ腕がずるずると延びて白紐を引けるが如しと也

一念發起―懺悔

と袋片手に引掴み、引上れども上らばこそ。須「ヤア見かけより重い物」と、兩手をかけて力を出し、引上げ〱、引ても上らず、押ても動かず。下人大勢手をかけて、引てもしやくつても、岩の狭間に年經る木の、根をさしたるが如くにて、有繋の長者も空恐ろしく、心迷ひて見えければ、世尊重ねて「見よ〱。平等大慧の佛性、一度び佛に供ずれば、法界に遍滿して、僅か袋一ッの米、法界一切の力と一致して、顚倒の汝們が、例へ須彌山は動かすとも、其袋は動くまじ。懺悔せよ」と宣へども、長者猶も疑念晴れず、「然らば佛、此米取て見せ給へ。但し門へは一足も入る事かなはず。何んと〱」といひければ、目連尊者聞も敢ず、「ヲヽ我が神通にて取て見せん」と、進み出るを、世尊微笑まし〱、「神通もよしなし。施物は鉢に受る法。如何に槃特、鉢に受けよ」と佛勅に、槃「あつ」と應へて鐵鉢を、出すとばかり我腕、我も覺えず白糸の、打緒を引たる如くにて、伸て行くこそ不思議なれ。槃特門の外にあれば、手先は長者が目の前に、鐵鉢を指上たり。人々奇異の思ひをなせば、袋おのれと口開け、米は御鉢にさら〱と、筧の如く一粒も、散ず翻れず盛上ぐれば、肱は則ち舊に歸す。神力不思議ぞ有難き。長者一念發起の涙、「ハアヽ淺ましや、過去の業障深く、斯る微妙の御法を知らず、疑ひ誹りし破法の罪、何時の世

闡提―一切善根を焚燒するもの

請ふてぞ立ち給ふ。長者佶と見、「ム丶聞及びし檀特山の水汲小僧釋迦如來よな。佛者となれば一切の天人供養して、食物厭充ると教へながら、なんぞや、提婆達多の大法を尊み、佛法を破る長者が門に物を請ふは。ム丶合點たり。天人もはや佛法に懲果、今は供養をせざるよな。如何に〳〵」といひければ、ふるな尊者突と出、「天人の供養に付て、義理多し。耳を欹て能く聞け。誠の天人天降つて供養する事あり。又人間の心に托して供養せさする一義あり。又佛を信じ供養する人間は、其人則ち天人なりとの一義あり。汝が門に立てばとて、外道闡提の施物を受れば、三惡道に落つ。此の屋の内に瑠璃仙女といふ天人の施物を請けん爲め、世尊來臨ましますなり」と仰ける。長者から〳〵と笑ひ、「さては汝們が眼に、下司女が天人と見えたるか。下司天人奴、只た今暇くれて追出せしは」と、言はせも果ず舍利弗尊者、「いや〳〵〳〵、信施の功德廣大にて三世に通ず。施主は此處にあらずとて、施物に施主の佛性あり。其袋これへ渡せ」とありければ、須「いやならぬ。尤も彼が扶持なれども、それは奉公の內の事。長者が與へし扶持米にて、奉公せねば長者が米。汝們に施すいはれなし」とぞ爭ひける。世尊晏如として、「止みね〳〵須達長者、其米汝が米ならば、袋を持て上て見よ」と宣へば、須「我物を我が取るに何事かあらん」

終に奉公云々—是迄奉公したる事なき奴なれば作法を知らず

夾侍—脇立
庠々序々—次第正しく

生世々に盡もせず、百倍百倍にして、黄金の肌となるゆゑに、此女は事缺ぬ。もと受た扶持なれば、サア返す長者殿。一生に覺えぬ肌懐を探され、盗人の名はついたか」と、袋をハタと投付て、撲と伏してぞ泣居たる。下部「ヤアお主に投打つ慮外者」と、犇く處へ林丹驅出、「アヽこれ、手を合せます拜みます。幾重にもお詫」と、長者の前に畏り、「私は彼が請人。終に奉公いたさぬ奴。お主朋輩の作法を存ぜぬ我儘、申上げん様もなし。兎角お慈悲は上より御免あつて、召遣はれ下されかし。一ッは現世の御祈禱、後生の爲めの御善根」と、手を束ぬれば、長者大きに不興し、「ヤイ其現世後生とは何の事。斯る下司女、長者が内に數百人、何れを孰れ面をも知らず、終に詞もかけねども、我が正法を蔑し、釋迦を尊む曲者、さてこそ直に穿鑿す。暇をくれた出て失せふ。佛法ゆゑに追出され、ヲヽ結構な佛の利生、是でも未だ尊いか。それ家來ども、佛法を信ずれば目前に彼の有樣、能く見て置け」と嘲哢す。夫婦外面はあやまり顔、遁れて出る鰐の口、邪見の罰は佛の慈悲、これ御利生と有難く、覺えず翻す感涙を、迷惑涙にもてなして、打連てこそ出にけれ。やゝありて門外に、出る日の如く光さし、忝くも釋尊は、目連舍利弗ふるな尊者を夾侍として、槃特沙彌は御鉢の役、御容端正に、庠々序々と歩み寄り、頭陀を

はとびー米が涙にぬれて膨るゝ

朝喰へば云々ー朝食へば夕食はず夕に食へば朝の米だけ殘す

を誑かす、邪法僻見の惡僧共に、一粒一錢も、長者が家より施せば、其罰長者が身に受る。家の法度を背く曲者、懷に珠數もあるべし。それ探せ」「承はる」と下部共、突と寄れば、瑠「これは又あんまりな。悲しや何んにも無いはいの」と、泣けども無體に兩袖振ひ、肌を探せば小袋の、口もほどけて翻るゝ米、こぼす涙にほとびては、餘所の見る目も恥かしし。「こりや朋輩の面汚し、米盜人奴、撲て縊れ」と、口々に罵れば、瑠璃仙猶も涙に咽び、瑠「恥しや情なや。御奉公する身が、何乏しうて盜まふぞ。釋迦如來の御弟子達、毎日頭陀の御修行、其日の烟立てかねて、身を賣り妻子を賣る者までも、現世後生の罪を恐れ、志の供養はする。此館で出家といへば、山の猪、猿追ふ樣に、門にも立てぬ慳貪邪見、現世は長者殿なれど、如何なる過去の惡業で、佛に緣の無い事や。見て居るも罪科、兎に角未來が恐ろしく、此米は妾が扶持、朝喰へば夕を延ばし、夕を喰へば朝を殘し、水を飲でお腹を充て、御修行の羅漢達へ手の内の供養米。佛とも法とも知らぬ衆に、隱さうと思ひ肌に着け、盜人といはれて口惜い。手鍋提て世を渡り、辛い世帶は經たれども、塵一筋盜みはせず。恥かしけれど五穀の類、肌に隱した事はない。是非盜み物ならこれ返やす。長者殿の七珍萬寶も、未來では皆盡果てる。一紙半錢粟一粒、佛界へ擲てば生

手の内—自分へもの
頭陀—抖擻と譯す、行脚僧
辨へ—辨償
嬬子—妾

假へ一句は覺えずとも、信心さへあるならば、未來の爲と思召せ。それよりも悲しきは、此主人長者殿、提婆を深く信仰あり。佛法の名字をいふも法度にて、これほどの家なれども、出家の眞似して袈裟衣着たものは、門にも立たせず。下々我等風情まで、手の內でも施さば、曲事なりとの言渡し。釋迦如來の御弟子達、毎日頭陀にお出なれども、屋內が通りや〳〵とて、叩かぬばかりに追出す。人の見ぬ間に、自が、隨分手の內參らせ、槃特が事問はんとすれど、傍輩の鵜の目鷹の目。奉公の辛苦は身を碎いても構はねど、後生を知らぬ邪見の家、此處ばかりに日が照るか。世界に主には事缺ぬ。暇取らふと思へども、給分の辨へが、身の皮剝でも叶はぬ」と、歎けば夫も打萎れ、「ヱヽ暇が取らせたい。主と病に勝れぬといへども、主には金さへあれば給分立て埓明る。勝れぬものは貧苦ぞ」と、夫婦手を取り泣居たり。時に奧より上下の家來、「長者殿のお出」と、ざはめけば、林丹は門の蔭にぞ隱れける。須達長者、童子嬬子に圍繞せられ、七寶の床にどうと坐し、須「瑠璃仙女といふ下司女、召出せ」とありければ、家來共小腕取て引出す。須「ムヽ汝は、長者が家の法度を破り、毎日釋迦の弟子を供養するとな。某提婆達多の正法を尊ぶ事、五天竺に隱れなし。何んぞや、有もせぬ三世因果を立て、地獄極樂なんどとて人民

さても問ひたり云々―サア又問うて問詰めて困らすかと也

思ふて居や」と、いへども諄ふ問かけられ、「これ兎唇はの、ぶだしなみな口中で、無性に女子の口吸ふた報ひじや」朋「イヤ是は尤。又聾は何の報ひじや」瑠「さりとは根問する衆じや。聾も偸みした報ひじや」朋「ム、偸みして聾になるいはれが聞たい」瑠「さても問ふたり問ひ殺すか。これ前の世で、金を盗んだによつて、其金氣が殘つて、朕になるはいの」朋「ムヽ是も理屈は聞えたが、又朕でもなし、些と聞える聾は、如何した報ひじや」瑠「これ是はの、其方衆の樣に根問して、聞たがる報ひじや」と、いへば皆々色違ひ、「なふ怖や。最う問はぬ」と、逃て退けば、瑠「これ〳〵柊揆頭、鑓頤の報ひを問ふて聞やらぬか」朋「いやいや最う何んにも問はぬ。勿體ない〳〵」と、各々奥に入りにけり。林丹は打絶えし、妻の便の覺束なく、門に佇み窺へば、瑠璃仙見付走り出、「なふ懐しや。して槃特はいよ〳〵出家にしたまふか」林「ヲヽされば〳〵御身が給分にて袈裟衣調へ、緣を求め、釋迦如來の御弟子にはなしけるが、愚鈍は始めに替らず。舍利弗尊者、富留那尊者、目連、須菩提迦旃延、歷々の羅漢達に、二十日三十日程づつ預けられ、物教へらるれども、一句の喝をも覺へず。指南達もあぐみ果、此頃は有難い、如來直の御指南と聞けるが、慈悲圓滿の御心にも、御見限りあるべきが是非なさよ」とぞ語りける。「アヽ悔みても返らぬ事。

野良かはく—まける
仕べい—爲すべき

ば、朋輩は悦ぶ。御主様には褒らるゝ。朝も緩りと寢らるゝ。此處が佛、極樂世界じやあるまいか。又野良かはいて仕べい役を投らかし、終其日は暮て來る。明日は朝疾うから叩き起され、昨日の仕殘を仕舞ふとする、今日の役は支えて來る。叱られ廻つて物損ひ、何故破たとて頭をクワン。怪我で御座ると分疏すれば、未だ口答へ仕居るかと、握拳が棒になる。それからが地獄の責。悔んでも歎いても、昨日が今日に返らぬは、なんと後生といふ事あるまいか。サア言ふて見や〱」と、當座の道理に朋輩ども、「言へば實に尤らしい。去りながら、後生は死んで後の事、此世で又旦那の樣な長者もある、此方徒が樣な者もある、未だ是より下もある。同じ人間にいろ〱の、次第のあるは又如何じや」瑠「ハテ知れた事、皆前生の報ひ。前の世で慈悲深ふ、出家沙門を供養し、人を憐み、施した者が長者に生れる。慈悲を知らぬ慳貪者が、此世へ生れて貧乏する。盜みした者は、手無い坊に生れて來る。前生で嘘つけば、啞ごろに生れる。火に入り水に沈むも、皆前の世の報ひじや」と、いへば皆々恐しがり、「さても〱怖い事。和女はいかい物識じや。それなら彼の兎唇は何んの報ひじや」瑠「ハテそれも何んぞの報ひであらうまで」朋「サア其處が聞たい。何んの報ひで兎唇には生れるぞ」瑠「さても根問ひする衆や。何ぞの報ひと

三界―欲界、色界、無色界

子の出家成就と、祈る心ぞ哀れなる。朋輩共立寄て、「これ瑠璃仙、和女は奉公も能ふする、憎氣もない氣なれども、珠數とやらいふ物、ぐわり〳〵いはせて、何やら𠵅々囈語が聞ともない。上に嚴いお嫌ひ、聞えたら追出されふ。先それ言ふて何になる。措てくれ」とぞ笑ひける。瑠「ヲヽ〳〵此世では可笑かろ。遲いか早いか皆一度は死ぬる身、此珠數のお庇で、此方や金色の佛になり、蓮の臺に天人菩薩に敬まれ、三界を見晴し、優々として居る時、後生嫌ひの其方衆、内方の旦那樣始めて、牛頭馬頭の鬼共が、火の車に打乘せ、地獄の底へ引立て行く時、構へて、助けて下されこれ昔の朋輩で御座る、拜みますといふて、泣やるなや。但し地獄が好きなら、何うなりと。此方や先づ怖い」といひければ、朋輩一度に哄と笑ひ、「何時の間に習ふて來た。此頃釋迦とやらいふ人が、靈鷲山で說法とやら、談義とやら、死んでから後の事をいはるゝとて、參りが群集するげな。其釋迦が猶内方のお嫌ひじや。此方徒は死ねばそれ切、後生といふて何處にあらふ筈がない。サア其所在いふて見よ」瑠「いや言ふまでもない鼻の先に、現世後生がぶらついてある。知りやらぬか。昨日は前生、今日は此世、明日は來世。一日でいふ時は、今朝は前生、今は此世、晩は來世。明日爲る仕事を今宵の中に仕舞ふて、人の仕事も手傳ひすれ

四八の云々—佛三十二相八十種好身色紫金（法華經）

他生劫—强に死し彼所に生れて永久

片行—かたまはり

五天—五天竺

三寶—佛法僧

心地、隨喜の感涙せきあへず、窟の前に身を擲ち、罪障懺悔ぞ殊勝なる。微妙淨音鮮かに、釋「我無量劫の昔より、無邊の衆生を度せんが爲、娑婆往來八千度、十九出家三十成道、苦行六年と見るは迷ひの凡夫の眼、一日に一千歳の修行に開く大智慧門」共に開くる窟の門、出山の釋迦牟尼佛、四八の相好八十種好、白毫の光明は、山河草木六道四生、人の面しろ〴〵しろと見ゆる。二人は信心歡喜の思ひ、「夫と結び君と呼ぶ、結緣は他生劫、賴もし嬉れし有難や。是につけても後の世を、願ふぞ誠なりける。砂を塔と重ねて、黃金の肌濃かに、花を佛に手向つゝ、悟りの道に入らうよ。悟りの道に 三重 入帳や、昔より、ある處にはあらがねの、金銀は寶の最上、一切無間の望みを叶へ、金に優る物なけれど、片行といふ癖ありて、無い處にはなかりけり。五天第一の須達長者、八方八萬の藏々に、あらゆる財寶充餘り、月の會花の宴、歡樂を事とし、下人被官の男女の數々、七百餘箇所の臺處、十六萬の竈の烟、夜晝立たぬ隙もなく、天人天女の榮華も、是には過ぎじと聞えける。林丹が妻瑠璃仙女、槃特が資緣貢ぎの爲、緣をもとめて下司奉公、下僕下婢、朋輩づきも睦しく、人の仕事も引取て、椀拭き膳拭き菜大根、洗ひ揃へも一人して、頭掉る間もなき中に、襷の下に三寶の、御名を唱へて繰る珠數は、我

四つの馬―影、毛、肉、骨に觸れて驚く馬の喩、法は乘るにかく（增一阿含經）

月も袂云々―濡れた袂に月の映るを上るに云ひ掛

禪定三昧―專一に心を靜むる

諸法從本來云々―諸法は本より實體なき者にて初より常に寂滅の相なり。

十方佛土云々―十方世界には成佛すべき一法あるのみにて他に法なし（二句法華經方便品）

后「打るゝ杖の心は何と」太「打るゝ杖は折れて知る。鞭の影に驚く馬、皮を打れて駭く馬、肉を打れ骨を打れ、始めて驚く馬あり。無常に驚く譬へにて、四つの馬に法の水、三界流轉の濁江は、何時か汲盡さん。底澄む水を汲ふよ」だんぶ〳〵と汲めば、雫に影落て、月も袂を上り坂、たどろ〳〵の御難行、涙に桶の水增て、肩重げにも悼はしし。師の仙人跳出、「見よ〳〵。青山は青く白雲は白し。汝が水は水にあらず。古鄕の妻子の影を映せし愛着の洗ひ汁。月宿れば月を汲む、山映れば山を汲む。山月を偸む偸盗罪。六十棒打を與へん」と、續け打に丁々〳〵。拄杖も折れよと打つ音は、谷にも響くばかりなり。打れながらやゝ暫し、禪定三昧に入り給ひ、起上つて桶の水、大地にがばと打あけ、窟の內に入かはり、定印正しく坐し給ひ、「諸法從本來、常自寂滅相、十方佛土中、唯有一乘法無二亦無三」と高らかに、成道正覺の悟りの金言、窟戶をはたと鎖し給ふ。仙人退去て禮をなし、「善哉々々。釋迦牟尼如來天人師佛世尊、昔の所願滿足して、もろ〳〵の迷ひの衆生、皆佛道に入れ給へ。我は大通智勝佛却成世界の契りを違へず、阿羅々仙人と現じ來れり」と、宣ふ御聲薫しく、光りを放ち失せ給ふ。此光明に照されて、窟に立たる菩提樹の、枝榮え葉を繁み、佛座を覆ふ若綠、佛天蓋と翻飜たり。后も烏陀夷も夢

大紅蓮―八寒地獄
無間―阿鼻地獄にて苦の絶間なき意

谺も響く大音にて、「清淨水を汲來れ」と、言捨て洞の中、窟戸引立て入り給ふ。漸々として瞿曇沙彌、起直り給へども、打れ給ひし杖暴く、御衣も寸々に、破れ亂れし玉葛、藤にて結へる水桶を、又御肩に打ちかけて、九十九折なる谷道を、よろり〳〵と御幸なる。昔は五天の御主、金華帳の内にして、月卿雲客に傅れ玉ひし身の、御手足に胝きれて、御爪も缺損じ、あるにもあらぬ御有樣、勿體なくも悼はしし。后も烏陀夷も忍びかね、「如何に御修行なればとて、御身に過ちある時は、此胎内の御子には、何時見えつ見えられん。薪も水も我々が、汲運んで參らせん」と、泣々流れに立寄れば、太子御涙を浮べながら、「水汲み薪樵るばかり、憂苦と思ふ淺ましさよ。無常の刹鬼身を離れず、煩惱業苦に日を送らせ、日數積て月となり、月重つて行く年は、嶺より落る車の如く、繋ぎも留めぬ玉の緒の、一生の樂み飜て、無數の苦患となる。大紅蓮の水を汲み、無間の薪を樵運ぶ、苦しみに比ぶれば、此難行は數ならず。其處立去れ」と宣へば、后「それは御身の菩提心。胎内の御子を見捨給ふは、慈悲心なしとや申すべき」太「いや胎内の種ばかり、我子とは思はれず。一切衆生は此沙彌が、最愛し悲しの思ひ子ぞ。無上道を悟り得て、漏さず濟度せん爲の、修業は大慈大悲ならずや」后「菜摘み水汲む難行は」太「衆生に代る難行苦行」

法性無漏—佛法至極の眞理

わぐため—綰める

六根淨—眼耳鼻舌身意を淸淨にする

は誰が染けるぞ。風にもあてぬ大事の御身、重き薪を肩に置、そも御命もあるものか。淺ましや悲しや」と、伏轉び〳〵、「せめて彼の御苦勞に、少時なりとも代らん」と、谷に下りんとし給ふを、烏陀夷袂を引とゞめ、「御發心の御底意、凡夫の智には量り難し、御修行の妨げもや」と、いへども變る御姿、見れば心もかきくれて、留むる袖も諸共に、絞りかねたるばかりなり。瞿曇沙彌は、仙人の窟の前に頭を下げ、「法性無漏の智慧の火は、石にあるか燧にあるか。何を以てか焚く薪、師匠如何」と宣へば、寂寞の扃を押扉き、顯はれ出し阿羅々仙人、木葉衣に肌荒て、ばつと亂れし髪髭は、金銀の針線を、わぐため亂せし如くなり。瞼の骨立て、巖に鏡かけたる如き兩眼にて、はつたと睨み、「本覺大悟の智慧の火は、一切の煩惱を燒盡す。汝沙彌迷ふたり。古郷の妻子の緣に依て、一念愛慾起りしゆゑ、修行却て罪障。その業に引かれし薪、枯れても元の生木となる。生木を伐たる殺生罪。汝に與ふる三十棒」と、拄杖振上げ、丁々々。「覺つたるか瞿曇、棒に耳あり舌あり」と、押取直してまた丁々。打つ杖は師の心法、打るゝ弟子の六根淨、御目も眩み御息も、はや絶々に見えければ、谷を隔てて耶輸多羅女、詞の色は見えねど、目に遮りて閃く杖の、影に手を上げ拳を上げ、焦れ合へど[illegible]甲斐[illegible]、師の[illegible]の杖の音、

伏柴の―暫しの序におけり

玉鉾の―道の枕詞

百敷―朝廷

の朝は、草木の花を師匠に供養あり。又巖々たる山路に木實を拾ひては、父母孝養の御手向、谷の牡鹿梢の蟬、一聲の松の風、池水に映る月影も、上求菩提下化衆生、皆觀念の便りぞと、荷ひて通ふ伏柴の、暫し休らひ立給ふ、御有樣こそ殊勝なれ。同じ哀れや、耶輸多羅女、烏陀夷一人を力にて、嶮しき嶺々谷々を、尋ね迷ひ給へども、草引結ぶ庵もなく、問ふべき人の跡もなく、疲れ果たる玉鉾の、道なき岨の巖陰に、人影見えしは山樵か。耶「なふ物問はん。淨飯大王の御太子、世を遁れて山住し給ふ御庵室は何處ぞや。敎へて給べ。なふ敎へて給べ」と、叫び給へど御聲は、谷を隔てし谷の風、谷の嵐の吹きつれて、餘所の梢も歎くべし。太子はそれと聞召し、思ひ離れし御身にも、有繫恩愛不能斷、飛立つばかりの哀れさに、振返らんとしたまひしが、「アヽ〳〵無明の惡魔、我心を誑かす。はかなやな愚やな。笛に寄る鹿火に入る蟲、愛欲ゆゑに苦しむる。我れ百敷にありし時は、太子とも言ば言へ、身は墨染の山烏、瞿曇沙彌には妻子もなし。園に植ては花紅葉、深山にあれば柴薪。暇惜や少時も」と、柴取て肩に掛け、木々の下露木の葉の雫、打拂ひ〳〵、奧山深くぞ入り玉ふ。后は遙に見送りて、「なふあれこそ御太子。さても窶れし御姿、おいとしや、何時の間に、玉の飾を剃落し、綾錦の花の袖、墨に

終に羅漢の果を得たり。

第　四

風破窓を射て、燈火消え易く、月疎屋を穿て、夢なり難し。秋の夜すがら處がら、物凄じき山陰に、岩木を友と墨衣。北に小深き高嶺より、麓にあたつて流れあり。耆闍崛山に雲覆ひ、西は又鷲の御山、峨々と聳へて連れり。雪山に打續き、積る雪は嶺に滿ち、心も澄て頼もしし。御悼しや悉達太子、御法の爲に御身を捨、御命を擲ち給ふこと、破れたる藁沓を、脱棄つるより猶惜からず。檀特山の山籠、瑠璃の御髪剃こぼし、御名を瞿曇沙彌とあらため、阿羅々仙人の弟子となり、無想有想を學ばせ給ふ。師を尊みの宮仕へ、難行苦行苔衣、裾を結んで肩にかけ、肩を結んで裾野の澤の、菜摘み水汲み谷に下り、峻しき峰に上りては、薪を樵らせ給ひつゝ、三伏の熱き日も、坐しては足を伸べ給はず、秋の夜の長きにも、一日に胡麻一粒、供御とて聞召されず、冬の夜は寒しと申せども、衣を重ね給はねば、御肌膚をさし通す、風は劍の如くにて、窶れ果させ給ひけり。されども、御心物憂と思召れねば、怠り給ふ事もなし。さればにや、蕭々たる雨

風破窓を云々—貧家の侘住居を云ふ、風射破窓燈易滅、月穿疎屋夢難成（百聯抄解）
墨衣—住むにかく
無想—無心無相にて想は佛行を説いて心不依行を云ふ
宮仕—奉公
裾野—裾に垂れにかく

愚鈍の扉開く―愚鈍がなほる

をかける秤はない。針の先で突てさへ、五尺の身を苦むる。我身で知らぬか鬼奴們」と、或は怒り或は嘲ち、恨み悲しみ地空を叩き、聲も惜まず泣きければ、烏陀夷も、夫の林丹も、奥に忍びし耶輸多羅女、一ッ思ひにかきくれて、歎き給ふぞ道理なる。されども倶伞波羅心強く、聞分くべき氣色はなし。父母の歎きに槃特が、愚鈍の扉や開けけん、勃然と起て、「ヤイちよこ〳〵切てはやかましい。此身を秤にかけて見て、要る程取て、あとを返やしや」と躄寄て、秤の皿に足をグッと踏込だり。倶「ヤア此秤でおのれが身がかからうか。臑を引け」と睨付る。槃「ム、懸らぬ秤何故持てうせた」と、ばた〳〵ばたと蹴散せば、秤微塵に折れたりけり。「そりや秤折た曲者」と、哄と寄るを、烏陀夷、林丹突支え、「物の懸らぬは贋秤、打折るが大法。國法破る罪科人、無事で歸るを手柄にせよ」と、捲り出し追拂ひ、門の戸ハタと鎖ければ、此猛勢に恐れてや、皆散々に逃失せけり。人々悦び、「ヲヽ槃特出來た〳〵。一生の智慧始め、鳩の秤にかゝる智慧、例しなし類なし」申すばかりはなかりけり。智慧と愚痴とは秤の棹、智慧重ければ僞あり、愚痴重ければ迷ひあり。智慧に進まず愚を捨てず、正直自然は秤の衡、おもりん〳〵、りんとかけては、厘も違はぬ天の道、誠を以て身の寶、さてこそ末世の譬種、槃特が愚痴も文殊が智惠、

僅の露の命―多くの寶にても露の命を買はれぬ

凹い處へ―云々―不祥の集り來る諺、君子惡居下流、天下惡皆歸之焉（論語）

かり、「彼の子が肌に刃を立て、そもや見て居られうか。ア、惨らしや」と目を塞ぎ、歎き沈みて分ちなし。烏陀夷は、「出來した〳〵」と、劍を拔きは拔いたれど、痛いも痒も譯知らず、思ひ切たる顏を見て、目も眩み手も顫ひ、弱る心を鬼になし、足引寄せて五六寸、がばと殺げば反り返り、足手を悶き泣き呻く。「ヤレ可哀や」と、父母が抱寄すれば、「なふ痛や、痛い〳〵」と苦しむ聲。抱ゆる袖は血に染て、玉を翻せる夫婦が涙、紅葉に置ける白露の、消えも果つべき親子の態、目も當られぬ次第なり。烏陀夷肉を提げ、「鳩の代り、サア請取れ」と投出す。俱「いや目をあらためて請取らん」と、秤の皿に打込で、衡繰寄せ目を數へ、十、二十、五十、百、「さてこそ〳〵、只た百八匁。大分足らぬ。剩つたら返やす分。欲には取らぬ。足を切て渡せ〳〵」と喚きける。母は憧れ大聲揚げ、「エヽ言へば言るるな。子といふ子は只一人、三界を探しても、我子といふては是ばかり。須達長者、月蓋長者、五百の長者の寶を一ッに集めても、僅の露の命一ツ、賣手がなければ買れもせぬ。刄で人の身を切裂く事、生やふと思ふてなるものか。假令提婆の名に恐れ、人は詞の義に逼り、言ふて勝れぬ相手ゆゑ、凹い處に水溜る。搔破つてさへ痛い身を、惨らしうも切裂せ、未だ其上に足らぬとや。若も彼の子が死で見よ。如何程の剩餘が來る。命

あぐみ―もてあます

請取らん。渡せ〳〵」と投付る。女房は只泣くばかり、烏陀夷も今はあぐみ果、了簡知らぬ無法の相手、詮方盡て見えけるが、林丹涙押拭ひ、「よし〳〵親子は同じ肉身、某が太股切裂て渡さん」と、庖丁押取り、股押卷れば、烏陀夷押へて、「暫らく〳〵、血を分し親子こそ同じ肉身なるべきに、元は他人の身を切裂せ、彼の子が行末、慈悲心却て仇なるべし。此處は我に任されよ」と、槃特を引寄せ、顏つれ〴〵と打眺め、少時涙に暮けるが、「不便や愚鈍に生れつき、父母四人持ながら、知らねば持たぬ同然。汝を產し誠の親、某能く知たれども、名は言れぬ仔細あり。それは產だるばかりにて、今の親の大恩、鷲の餌食を免れし命の恩、養育の恩、代々の家業を捨、おことが爲に貧者となり、身を苦しめし數々の恩を、一ッも送らぬのみか、有難しと思ふ氣も付かず、不孝の罪は爲らねど、不孝の子となる可哀やな。それさへあるに子の身代り、親の身を切裂せ、其罰誰に當らうぞ。天には梵天帝釋の、おことを睨み給ふらん。悲しさは遣瀨もなし。こりや此太股を切らせよ。時には親の孝も立ち、恩を送る一ッぞや。痛い事は些との間。合點したか」といひければ、有繫骨肉の誠の詞、聞分てや、夫婦に對ひ一禮し、太股を押捲り、「此處を〳〵」と潔く、卑怯もせぬ心の中、思ひやられて哀れなり。林丹夫婦は「わッ」とば

童も同じ云々—年とつても童にかはらぬ愚鈍者

主人遁れぬもの—主人と關係あるもの

ためつすがめつ—縦からも横からも注目する

に這奴めを殺す。是へ出せ」といひければ、女房泣く〳〵突と出、「人間を殺してさへ、道理が立てば助かる慣ひ。鳩一羽の代りに、人の命を取るならば、浮世に人種あるべきか。童も同じ愚鈍者、何の辨へあるべきぞ。眞平御免」と手を合せ、平伏てこそ歎きけれ。武「ハテ姦しい。何時まで言ふとも叶はぬ事。一刺殺さん」と寄る處を、烏陀夷押隔て、「我們は主人遁れぬ者。鳩も人も、命は同じ命なれども、體の大小拔群の相違。鳩を秤にかけたらば二百目もあるべきか、彼の者は痩せたれど十四五貫目、算用なしには渡されず。秤目屹度差引し、不足は御邊の太股でも胴でも切て、剩餘を取るが合點か。如何に〳〵」と理窟詰。林丹夫婦も力を得、「サア剩餘を出せ〳〵。約束屹度堅めよ」と、ねだれ返して詰かくる。倶舍波羅ほうと詰りしが、「いや〳〵、差引もむづかしし。此鳩をかけて見ろ、這奴が身の肉切殺で、秤目に合せ請取らん。それ〳〵秤」と罵れば、有繋の烏陀夷も理に詰り、林丹夫婦は「わッ」とばかり、消入り〳〵泣居たり。如何してか下人共、紫檀の大秤取出し、鳩押取て目を試す。秤の棹は一尺五寸、人は五尺の身の命、生死二ッの中緒にかけて、各立寄り、ためつすがめつ、「未だ輕い〳〵。サア如何程あるぞ。二百十錢三分五りんとある」とそのゝめきける。武「こりや鳩を渡すからは、代りに身の肉、屹度かけて

殺生の外、朝夕の煙を立ん樣もなく、貧苦の病に身を責る、此貧乏を讓らうかと、明暮れ不便に存ぜし餘り、耶輸多羅女は提婆より后にせんとの御觸れ、命を取る事でもなし、渠が果報の付時と、悅ぶ處に思はぬ無益の殺生、大願も破れんかと、悲しむも子の可愛さ。腹の立も子の可愛さ。罪爲るも子の爲。善を爲すも子の爲。親でない親、子でない子、如何なる緣を結び置、斯程に思ふは何事ぞ。夫婦が命は取らるゝとも、彼の子が爲には厭はず」と、撲と伏て泣きければ、烏陀夷も扨は我子の桀特、咎めかゝつて哀れさの、我身にかゝる涙の露、拂ひかねたるばかりなり。時に武士數十人、狩裝束にて哄と入り、「此家へ山鳩入たり。はや〳〵出せ」と犇きける。林丹子聞も敢ず、「如何にも其鳩、是にあり」と投出す。武「ヤアこれは何故殺した。我を誰とか思ふ。提婆達多の御內倶牟波羅といふ者。君魔醯修羅天を祭り給ふによつて、每日獸物千疋、鳥類千羽、犧に供へらる。今日やう〳〵九百九十九羽捕て、今一羽にて御用を缺き、此倶牟波羅分䟽なし。殺人出せ」といひければ、林丹はつと驚き、「御尤も千萬。此者は我們の一子、長病にて正氣拔け、過つて此仕合。狂氣同然の致せし事、何分にもお詫」と、膝を折り手をつけば、武「いや詫言で濟ぬ事。默止れ〳〵」と睨付る。林「ム、詫言叶はずば、何としてお氣に入る」武「ヲ、サ鳩の代り

心底見て取たる此顔色に驚き、愚痴愚鈍の子を打擲し、我身は慈悲ある結構人になつて、我々に氣を緩させん智略の杖、極重悪人とはをのれが事。誠彼奴が打ちたくば、某撲て取らせん」と、箒に縋れば、圭「先づ暫く」と、箒を遙にからりと投げ、瓦破と伏て泣きけるが、圭「極重悪人とは情なや。善も悪も嚙分て、情も慈悲も存ぜしが、只離れても離れぬは、子に迷ひての欲心なり。某は林丹子と申す代々の獵師、多くの鳥類畜類を殺し、世を營み報ひにや、夫婦の中に子は育たず。歎きながらも殺生は渡世、十九年以前卯月上旬、摩訶陀國鷄足山に巣籠る鷲、十歳許の子を摑み、既に引裂き、服せんとせし處を、大墓股にて射て落し、子は安穩に抱留て、十九年育てしが、則ち此愚鈍者。父を問へども覺えねば、國里は勿論、我名をも覺えず。腰に付たる木札に槃特とありし故、今に其名を用ひて槃特と呼候。當座は鷲に魘ての物忘れかと、藥など與へしに、鷲の事も覺えず、次第々々に愚痴愚蒙、耳あつて聞くばかり、目は明て見るばかり、魂は聾盲。持て益なき子なれども、過去生々の因縁か、可愛いとも大切とも、死したる實子が一時に、蘇生ると申しても、槃特一人に替はせず。渠が息災延命の大願、梵天帝釋に誓ひを立て、ふツつと殺生止まり、十九年以來、蚊を一疋殺さねば、代々の獵師が、商賣の道知らず。

疊かけて—迚りに

飛鳥云々—窮鳥懐に入る時獵夫捕へずの諺

は、我們に酒を飲せて見よ。酒といふ名を聞ても、はや拔度ふて手が痒い」と、劍拔きかけ鍔打鳴し、膝押立て見せければ、主人さては氣取られしと、女房に目配し、詞を控へて居る折節、何處よりかは北窗に、山鳩一羽飛入りたり。「あれよ〳〵」と立騷ぐ、聲に恐れて梁傳ひ、棚に止りつ飛下つ、彼方此方に飛廻る。烏陀夷鳩は見もやらず、夫婦が起居に目を放さず、劍に手を掛け、耶輸多羅女に引添ふてこそ控へけれ。主人は捕へて放さんと、追かけ〳〵騷ぐを見て、天性愚鈍の悲しさは、親の教へは此處ぞと心得、箒取延べ、はつたと打て打落し、疊かけて打つ程に、命も脆き双翼、縮めて敢なく死してけり。主人怒つて持たる箒引たくり、はつたと睨んで、「エヽ憎や腹立や。百日千日いふ事も、跡方もない態をして、殺すといふ事何時覺え、此慘い目はしたるぞや。飛鳥懐に入る時は、狩人も是を取らぬとは、情を知れとの世の示し。情は慈悲の替名にて、慈悲あるものは智慧がある。慈悲知らずの智慧なし。愚鈍の花が咲たよな。此箒で敲かれて、味いものか、苦いものか、撲れて見よ」と振上る。烏陀夷飛蒐り、主人が小腕取て捻上げ、「ヤイ飛鳥懐に入る時は狩人も是を捕らぬ、情といふ事、汝も見事知たよな。彼の上臈を耶輸多羅女と心得、奪取て、提婆方へ訴へんといふ所存は、情か慈悲か。汝が

同道の武士は何者か。彼の子に果報の人相ありと、間に合ながら言當たり。耶輪多羅女を訴人して、大長者となる瑞相。人を語らひ奪取らむ。耶輪多羅女一人引抱えて、奪取は手間も隙も入らねども、隨者奴が氣ぶさいなり。おことは御馳走に酒買うて參るとて、在所で強い若い者六七人雇ふて置け。こりや其處な愚鈍者、物覺えの無い癖、途でもない口叩くな。彼の男がばた〳〵とするならば、杖なりと箒なりと、手に障る物押取て、撲て〳〵撲据へい。此世話病もをのれが可愛さ。必ずぬかるな。皆莞爾と笑顏して、目色ばし悟られな」と、密めく聲の端々、漏れ聞ゆれば耶輪多羅女、魂消えて恐ろしさ。烏陀夷にひつしと取付き、「早ふ迯たい〳〵」と、膽を冷しておはします。烏陀夷もむねを衝けるが、「斯くなるからは不覺は取らじ。何十人あればとて、土民風情片手にもよも足らじ」と、劍の鍔元拔き寛ろげ、四方に目をつけ居る處に、主人夫婦會釋して、「貧しき我々、御馳走申さん樣もなし。されども此里の銘酒の候。これを少とお慰み」と、言せも果ず、烏陀夷頭を掉て、「いや〳〵〳〵酒は御無用。我們に惡い癖あつて、一滴にても飮むとひとしく醉狂して、腰の劍をするりと拔き、八方を切て切廻り、男女の嫌ひなく、亭主であらふが、女房であらふが、眞額胸板向ふ臑、參合ふたが浮世の名殘。命に懸替ある人

氣ぶさし―氣塞がる意にていぶせき事
世話病―世話やく事
胸をつく―ハッと驚く
不覺―ひけ

親の打つ云々―親身には誰も及ばぬ謎なれども愛は親の許に置くは愍しとの意
江南の橘―晏子春秋にある語
のつとり―すなは

や」とぞ應へける。烏「我々は旅人、一宿の御無心にと、軒に佇み承はり、御心底尤も至極。親の打つ拳より、他人の擦るが痛いと申す世の譬。後藥とは申しながら、江南の橘、江北に植れば枳となるとかや。所も替へて育て給はば、大智慧者とも成り給はん。昔より智あるものは貧にて、愚痴なる者は富貴なり。此人相、鷹揚にしてのつとりとした果報の相、追付出世の親達にあやかりもの」と、宿かる爲の詞の因み、口に任せて言ければ、亭主大きに悦び、「彼奴は夫婦が血を分ねど、命にかけて祕藏子、果報あるとのお見立有難し。これ女房、彼の上﨟は凡人ならず。お宿申せ」と悦べば、女「見えし通りの貧家の泊、お心安いを取得にて、いざ先お通り。これ智慧なし。彼のお客が目に見えぬか。箒持て掃出せ」子「あつ」と答へて箒押取、二人を戸外へ掃立々々、耶輸多羅女の顏をも身をも掃廻す。耶「愚痴が心の塵埃、かゝる宿も浮世ぞ」と、笑ひて庵に入り給ふ。烏陀夷は思廻らす程、槃特に紛れなし。如何して存命へけんと、問まほししと思へども、よしなき事を問懸り、身の上を知られては、耶輸多羅女の御大事と、主人夫婦が詞の端に、心を付てぞ聞居たる。主人斯とも心付かず、女房を戸外に招き、主「彼の上﨟を目利した。提婆公より御詮議ある、悉達太子の后、耶輸多羅女に極つた。空の月は見外すとも、是ばかりは見違えぬ。

「エヽ愚鈍者。腹立や」と、杖押取て立上れば、「わつ」といふて逃廻る。女房周章縋付、「性質の愚鈍が、撲叩きで直らふか。怪我でもさせて、愚鈍の上不具にせうといふ事か」夫「其甘やかしが毒になる」と、振放して追廻れば、泣く〳〵奥に逃込むを、夫婦も續き追かけて、皆々奥に入にける。烏陀夷つく〴〵見るにつけ、「我子の槃特が、存生へあらば彼の年頃。丈長伸て子供に劣り、阿羅波を覺えぬ愚鈍にて、親に憂苦をかけんより、世に亡きも優なるか」と、不覺涙を浮べし處に、子「あ痛く〳〵。最う怺えて下され」と、走出るを、烏陀夷袖に押圍ひ、「泣くまい〳〵、詫言して遣る大事ない」と、能々見れば面相の、槃特には似たれども、髭黒々と定ならず。烏「あれは和郞の父母か」「いや知らぬ」烏「ムウ但兄弟か」「いや覺えぬ」烏「して和郞の名は何といふ」「いや覺えぬ」「これはさて、若又昔誠の親はなかりしか」と、何を問ふても、「いや知らぬ、いや覺えぬ」とばかりなり。「アヽ淺ましや。取所もなき愚鈍者、是非もなき生れ性。さては何も覺えずか」「いや覺えて居る。敲かれて痛い。覺えて居る。あ痛〳〵。痛さを癒して下され」と、背中敎へて泣顏に、付ふ藥は無かりけり。耶輸多羅女は可笑さながら、「見る目も無慙に笑止なり。親の心を言宥め、詫言あれ」と宣へば、烏「實に〳〵宿かる緣にも」と、手を引て内に入り、案内すれば夫婦立出、「誰人ぞ

付ふ藥云々―烏鹿に付くる藥なしの諺をとれり

世話をかく―世話やく
せは〳〵―せはしく
鼻毛の延た―人に翻弄せらるゝも知らざる諺
手本を上げ―手本を書終ふる

筆の持様童しく、師匠か兄か手を採て、教ゆる人の年配も、四十餘りの文字一ツ、覺えぬ癖にあて字書く、教ゆる人は頭搔く、世話をかくとぞ見えにける。女房見る目に堪えかね、「あの子が不器用は知れた事。此方の様にせわ〳〵いへば、器用な者でも狼狽て忘れる。少と休ませたが好いはいの。ア丶そこな子もそこな子、時々鏡で顔を見て、髭にも恥よ」といひければ、夫「髭より鼻毛の延たを見よ。四邊隣に子供も多い。七歳八歳で手本を上げ、四十二字を宙で書く。をのれは此あらはしやならだ手本只つた一行、文字なら七字、十年餘り教へて、一字碌に覺えぬ。篤くりと飲込んで覺えるか。又忘るゝとこりや是じや」と杖振上れば、子「ア丶飲込んで覺えましよ。御免々々〳〵」と泣き居たり。父「サア泣程性根に入りたらば、口移しに素讀から覺えて見よ」と、手本披げて、「阿」「あ」「囉」「ら」「波」「は」「飲込んだか」「飲込みました」「飲込んだら一人讀んで見よ」「ハアウ何んとやら彼のなに。此頭の字は何んとやら」「さて不器用な。最う忘れたか。阿」「ハア眞に左様じや。阿」「其次は何んと」「ハアウ此次は何んとやら」「エ丶愚鈍な能ふ飲込め。此次は囉」「エ丶ウ〳〵ま一度言ふて下され」「エ丶只た今教へる詞の下から忘れるか。此次は囉」「ま密と小さい聲で飲込せて下され。餘まり大きふて、咽に詰つて飲込まれぬ」といひければ、

岩間水―いはむにかく

本來出づべきテ云―無始無終にて佛法の奧儀

四十七字云々―いろは四十七字なれども悉曇は四十二字にてあらはしや云々といふ

郞の身なりとも、爭か見捨奉らん」と、又さめ〴〵と泣ければ、太「愚の者の言語や。獨生れて獨死す、誰をか友と岩間水。疾々歸れ」と宣へば車「獨入らせ給ひては、衆生濟度の血緣は何と」太「出入る月の光こそ、我無始無終の伴侶よ」車「いや月には友もなきぞとよ」太「衆生を照ば月は友」車「曇る衆生は、さて什麼」太「曇らば曇れ其儘に、月は昔の友なれや。言じや聞じむづかしや。本來出べき家なければ、山とて入るべき山もなし」と、是ぞ示しの御詞。欹つ巖蹈分て、猶山深く入り給ふ。車匿は主の御別れ、留めかねたる憂淚、伏沈み〳〵、金泥駒も諸共に、諸膝折て身振ひし、三度嘶き行なづみ、見返り見送る主從の、山路の名殘ぞ哀れなる。別れ〳〵に三重成にけり。花鳥の、聲も姿もかはらねど、名のみ異る西天竺、呉竹をしちといひ、ひつたきやとは靑柳の、翠は同じいろはにほへと、四十七字を四十二字、あらはしやならだと手習の、一字々々の讀聲の、漏てほの〴〵聞ゆれば、賤の藁屋の內までも、心ありげに物床し。御悼しや耶輸多羅女、賴むは烏陀夷只一人、檀特山の途次、提婆が方より詮議嚴しく、草木も心許されず、脇道廻り道を替え、波羅那國の片原、こうふの里にぞ着給ふ。在所離れの一ッ庵。烏陀夷が、我身も疲れたり。御休息の宿もがな」と、覗けば貧女の針仕事。机に手習ふ髭男、二十八九と見えながら、

戒定惠―三學にて煩惱を斷ち心を靜め惑を破するを云ふ

常樂我淨―四顚倒の事

彼岸云々―浮世にさ迷ふに譬ふ

南枝云々―成道正覺に喩ふ

妻子珍寶―妻子珍寶及王位臨命終時不隨者（大集經）

一佛乘―如來の方便を以て唯一の佛乘に歸せしむるを云ふ

下り、一千三百五十餘里、迷へば遙に隔つれど、思へば近き悟りの道、檀特山にぞ着給ふ。

悉達太子御馬を乘放し、太「あら面白の山水や。峯に戒定惠の梢を並べ、谷には常樂我淨の川波に、架れる橋は西東、彼岸此岸の柳の髪は長く亂るれど、南枝北枝の梅の花、開くる法の我師は是、住むべき山は此處なるぞ。汝は歸れ」と宣へば、車匿承り、「思ひ寄らざる仰や候。假の御遊の御幸にも、御供は離れ參らせず。人跡絶たる山中に、捨置き歸り明日よりは、御太子とも若君とも、誰をか指て宮仕へ、御顔も拜すべき。如何なる深山の奥までも、唯御供」とばかりにて、聲も惜まず泣居たり。悉達太子も憐みの御涙を浮べ給ひ、「優しき今の涙やな。さりながら是を別れと悲まば、妻子珍寶及王位、親しき友も隨はず、土となり灰となる、無常の別れは如何せん。我成道して主從の緣盡ず、不退の友となるべきぞ。アヽ此駒よく〳〵。汝は法のみちしるべ、撻れし鞭の影までも、一佛乘の緣ぞかし。未來を伴ふしるしぞ」と、玉の冠石の帶、御衣諸共に脫かけて、「名殘は盡ず」と宣へば、畜類ながら聞分てや、頭を垂首れ耳を伏せ、御足に舌を付け、黃なる涙を流せしは、日も當られず哀れなり。車「あれ御覽ぜよ、畜類とても心あり。心賤しき下

袖笠—袖を被うて雨を防ぐ
月をさらす—月光をうつす
摩靈山—稀なるにかく
ほろゝ—雉子の鳴聲
迦頻闍羅鳥—雉子を云ふ（飜譯名義集）
耳を洗へる—許由巣父の故事
霧は云々—霧は不斷の香を燒くにかく（平家物語）

ん哀れさに、留めかねたる涙ぞ」と、重ねて絞る袖の雨、一村雨に暫しとて、被く袖笠肱笠や、森の雫に染なして、同じ緑の苔衣、霞を縦に霧の緯、瀧の糸筋織かけて、月をさらすかさら〳〵〳〵、更に人音摩靈山、阿私陀、しゆくた、せつたら山、谷より谷に横はる。野面の石に事問はん、誰が世に架し橋柱、露滑かに玉葛、九十九曲纏るゝ駒の足、かつしと踏ば山彦が、我より先に行く人の、啼て木傳ふ鼯鼠や、猿の三叫び斑鳩の聲、よひ〳〵毎に獨澄む、月は汲むやと問ふ人も、無き山の井は水寂居て、浮萍茂る花の色、鴛鴦の番の羽は濡て、嘴振る露の假の世に、ばつと立ては又飛集り、伴ひかはす其風情。太「エイ何時まで長き契りぞや。怎地車匿、やれ彼れを見よ。彼の茅原にほろゝうつ、迦頻闍羅鳥が求食して、雛に餌を飼ふ雛は又、親鳥慕ふ優しさよ。されば生とし活る物、夫婦を憐み父母の、惠みは猶も彌高き」峯は木深き象頭山、麓に靈河漲りて、深淵瑠璃を湛えたり。道なき岨を下りては、金輪際かと過たれ、峻き坂に差懸れば、雲を歩むに異らず。岩割れ水に肱を曲て、耳を洗へるよすがとなり、高嶺の嵐に襟を開きて、塵を拂へる種となる。じやうぞん妙法の旅ならずば、誰かは通ふ深山路の、露よ雫よはら〳〵〳〵、拂へど袖に振かゝる。霧は不斷のこうろく山、雪山そま山靈鷲山、峰を越え谷に

愛別離苦—愛する人と離れ難く別れ苦し
輪廻—生死の境を常に廻りてゐる
五濁—劫、見、煩惱、衆生、命の五つの汚濁（阿彌陀經）
水泡—果敢なきを云ふ
出小舟—出られんやとかく
欣求大法—大法を希ひ求むる
あやしの云々—見苦しき貧人の仕業

會者定離、愛別離苦の理も、分で輪廻の宮の中、宮も藁屋も凡べて、假の宿を何時までと、五濁に迷ふ水泡の、轉た迷ひを導きて、忝くも悉達太子、十善王位を振捨て、王宮を忍び出給ふ、御慈悲心ぞ有難き。實に宵までは錦の褥、玉の床、思へば夢の樂みと、逝れ行衛は法の道、金泥駒の諸手綱、車匿舍人は御供を、現ともいざ白雲の、山又山に埋れて、暮ぬ日影や夕陽山、訶羅陀の池に駒駐て、青龍山を眺むれば、松より落る松風の、松は散さで生憎の、花吹き散らす花の仇。これを見、彼を見るにつけ、熟々物を案ずるに、無爲の故郷を離れ出、何を頼まん娑婆世界。法の教へにあらずんば、苦海に沈みし衆生はさて、何時か生死を出小舟、乘後れては誰が渡さん。立昇る春の霞の幾七重、また十重二十重千重百重、今日に近き梢々も、時の間に萬里の餘所に隔たれば、今朝も千歳の昔ぞや。「我王宮は何處ぞ」と、振返り〳〵、御涙にくれ給へば、車匿も共に涙に沈み、車「斯迄世の中を、思召切し上にさへ、恩愛妹背の御名殘、御衣を濕す御涙、況てや殘る人々の、御歎きは如何許。先此度は還御もや」と、御馬の口を引返す。太「いやとよ車匿、欣求大法の修行には、戀しき人もあらざれば、何に名殘の惜からん。歎きても〳〵、父大王を始め參らせ、あやしの賤のすさみまで、仇の火宅の樂みと、知らで過な

笑止―氣の毒
恆河―業にかく

ふて亡くなり、最期に申し置し遺言ありて駈付たり。其遺言は先づ此通り」と、鉞押取り、左倍軍が眞額に、「曳やつ」と聲をかけ、打付れば頭の鉢、西瓜を割たる如くにて、くわつとさばけて死してけり。提婆大きに怒りをなし、「彼奴等夫婦は推參者。彼れ討取れ」兵「承る」と喚いてかゝるを、烏「左知たり」と鉞取伸べ、八方無盡「杣が持たる鉞は、木を伐る木を割る枝下す。烏陀夷は敵の頭割る。骨斬碎く。これ見よ」と、押立られて堪りかね、皆川水に飛込み〳〵、浮ぬ沈みぬ流れ行く。立歸つて柳の大木、きり〳〵きつと捻起し、耶輸多羅女を抱下し、肩に引かけ奉り、「ヲヽ哀れなり笑止なり。いとをしや敵の軍兵、火に入るも業、水に入るも恒河の川瀬、罪の深さと川水と、渡り競べて瀬蹈して、命の瀬蹈瀬滅し、思ひ知れや」と高笑ひ、川風の音どう〳〵〳〵、渦く淵はごう〳〵〳〵、恒河の砂蹈分て、跡白波とぞなりにける。

第　三

悉達太子道行

毘嵐婆風―世界壊亡の時吹く大風

泣く―鳴くにかく

さゝがに―蜘の枕詞、衣通姫の歌の句をとる

貴面に云々―遂に對面すること能はず

音。耶「我に如何なる罪ありて、斯く恐ろしき責なるぞ」と、前へ走ればらんばふう、後へ戻れば毘嵐婆風。烟は咽に息切れて、泣けども聲の出ばこそ。袖に拂へば袖燃る。「如何なる罰か報ひかや。火に燒れ死んより、底の水屑」と思ひ立ち、欄干に手をかけ給ひしが、「思へば胎内に大事の胤を持ちながら、勿體なや淺ましや。遁るゝだけは遁れん」と、見廻せば青柳の、岸より橋に枝垂れて、風に靡ける柳の糸。「斷れて落ば落るまで」と、兩手を伸て手繰寄せ、慥かと取付欄干踏へ、向ふへふはと飛給へば、柳の枝に雪折れは、泣く泣く手繰る力草、重きは深き思ひの念力。前後は猛火下は淵、遁れ難なき玉の緒の、柳の糸にさゝがにの、蜘蛛の振舞宛がらに、糸より細き命の中、危かりける三重有様なり。提婆どつと現れ出、「命冥加の女め、例へ火を遁れしとて、そもや生けて置くべきか。彼の柳伐倒し、川中へ押ぱめよ」と、焦つて下知をなしければ、左倍軍承り、大の鉞提げ、「エヽ死に手間の入る罪人。火が嫌ひなら水飲せん」と鉞振上げ、柳の根本どう〱〱と、打つけ〱、今は斯よと見えし處に、烏陀夷大汗になつて走着き、左倍軍が持たる鉞、無手と摑で、「ムヽ提婆達多とやらん、終に貴面に能はず。我們が女房吉祥女、只た今婆將軍が郎等伯了頓と戰ひ、伯了が首を取りは取たれども、深疵を負

守る世とならば、我們が魔境の滅亡目前なり。殊に耶輸多羅女が胎内に、佛の胤宿りたり。はやく〵女を打殺し、娑婆世界の佛種を絶ち、魔界となして倶泥劫の本懐を遂給へ」と、言ふかと思へば、其姿、雲井に翔り失にけり。提婆寛々と打首肯き、「さては某人間の種ならぬ、魔醯修羅王よな。面白し〵。悉達太子が佛法修行、何程の事か仕出さん。此上は摩訶陀國にも望みなし。王位に上つて何かせん。佛法を滅却して、上天下界六道四生、三千世界を領知して、月を手に取り日を握り、四天下を魔界となし、大魔王と仰れんは掌の中にあり。ヲヽ心よし面白し」と、大地をどう〵〵〵、どうと踏鳴し、天地を睨んで立たるは、誠に外道の變身やと、見る人身の毛を立てにける。提「此處に現れ居るならば、恐れて人も寄付まじ。暫く隱れて待べし」と、一叢茂る木隱に、皆々忍び待居たる。斯とも知らず耶輸多羅女、命一ツは遁れても、跡に殘りし吉祥女が、身の上如何にと覺束なさ。太子の行衞を何國とも、訪ふべき人も涙に暮れ、足に任せてたど〵と、恆河の橋にぞ着き給ふ。「此橋渡れば他國とかや。所の名殘も是まで」と、半ば渡り給ふ時、仕懸置たる埋火の、橋板赫と燒されて、火焔烟を捲上たり。耶「なふ悲しや」と、歸れば後の欄干より、猛火熾んに燃出たり。折節魔風砂を揚げ、川波岸を叩く音、焔硝の音、風の

じ」と、哄と寄れば薙拂ひ、馳寄れば追拂ひ、髻を口に首引喰へ、劍を杖によろ〳〵、起つ轉んづ立歸る、所存の程こそ二重勇々しけれ。提婆は豫て憍曇彌婆將軍が案内にて、所々に軍勢を置けるが、悉達太子王宮を出給ひ、耶輸多羅女も行方知らずと注進すれば、此上は自身道に待伏んと、中天竺の咽頸、恒河の川邊に向ひける。抑此恒河といつぱ、岸と岸との間十由旬、藍を浸せる川水に、架れる橋は弓の如く、宛がら天の梯とも、又は龍宮の通路かともあやまたる。提婆奇計を廻らし、橋の行桁に埋火をしたゝめ、橋板蹈めば燃出る樣にしつらひ、「悉達太子を燒討にし、耶輸多羅女を奪取るべし」と、我に劣らぬ左倍軍右倍軍、二人の郎等相具し、今や〳〵と待程も、古たる梢に黑雲さつと棚引渡り、夜叉の如き異形の者、忽然と現はれ、提婆の前に跪坐「我々は欲界に住居をなす、狗蓍耶利外道、伽毘羅外道。君人界に生じ給ひしゆゑ、前生を忘れ給ふかや。忝くも我君は、欲界の魔王魔醯修羅王の再來なり。然るに今人界に交り、色に耽り、耶輸多羅女を奪ひ后とし、王位を望み給ふ事、歎かしょ勿體なし。君樂みに耽り給ふ間に、悉達太子成道正覺成就して佛法を擴め、五天竺は申すに及ばず、是より東震旦國、又大日本と申す神國あり。斯る粟散邊土まで佛法流布し、一切衆生善心に入り、慈悲を

由旬―六町一里にて三十里乃至四十里

魔醯修羅―大自在と譯し三目八臂白牛に乘る色界中の獨尊

粟散―小國

言甲斐ない—姆あかぬ

穗首—鉾の鋌

を取直し、後歩みに蹌々と、高塀に背中を付け、「サア最う叶はぬ后樣、肩を蹈へて築地に上り、何卒彼方へ傳ひ下り、太子の御跡慕ひ給へ。早ふ〱」と苦しむ息繼ぎ。耶輪多羅女も遣方なく、「いや我ばかりは助からぬ。死ぬるも生るも一所ぞや。みづからを捨置て、遁るゝだけは遁れて見や」吉「いや左樣でない〱。お命一ツは輕けれど、天にも地にも二ツとない、大事の胤が胎内に、宿り給へばお命二ツ。エヽ、言甲斐ない。早ふ〱」と諫むるも、共に涙の耶輪多羅女、伸上てうで木に取付、肩を蹈へてやう〱と、築地を轉び落給ふ。危かりける次第なり。吉「サア今は心安し。をのれ能ふ突たなア。報ひを見よ」と突れたる、鉾の穗首を弓手に摑み、ぐつと引拔き、柄をする〱と手繰寄り、伯了が左の肩先、胸板かけて截込だり。反仰に返して起上り、吉祥が高股を拔打に丁と切り、兩方半死半生の、惣身は朱に染みながら、蹌踉寄ては礑と截り、打付ては瓦破と伏し、兩眼に血は入つたり。聲を知邊に打合せしは、修羅の街の三重如くなり。運の盡ぬる伯了頓、立砂に蹣跚込み、反倒打つ處を吉祥女、這寄り〱乘懸り、思ふ樣に刺通し、腦押上げ、「やア曳」と首掻落し、「ハア、嬉しや〱。當座の敵は討取たり。身は寸々の深瘡、命の内に此首を、良人に見せて今生の暇請せんもの」と、提げて立上れば、殘る武士餘さ

舌の延びたる—出過ぎたる口上
五輪—地水火風空
五體—頭、兩手、兩足
大童—髮振亂したる形

番頭大音上「寢に來たかとは女奴。悉達太子を態と落さん爲の客寢人、耶輸多羅女を奪取、提婆達多の后に備へ、摩訶陀國の大王と仰ん爲、憍曇彌婆將軍の仰を蒙り、郎等の伯了頓、番衆に紛れ忍んだり。サア耶輸多羅を渡せ。否といはば、手も足も引もいで取るが、サア如何じや」と、鉾先並べて突かくる。吉「ハァ、詐られた、口惜や。見損ふたか此女。烏陀夷が女房吉祥女。耶輸多羅女を渡せとは、どれ何の口で、舌の延たる奴們。官女達はおはせぬか。男も女も、五輪五體に違ふたる處は三寸四方、魂に違ひはない。みづからに引添ふて、防げや禦げ」といふまゝに、番所の手鉾押取れば、若年の官女手に障る刄物提げ〳〵、群る大勢弓手になし、馬手に支えて 二重 防ぎしが、女の働き甲斐もなく、散々に截立られ、吉祥女も大童に戰ひて、耶輸多羅女を楚と負ひ、拔身を片手に提げ、隙間を窺ひ、落行かん〳〵とぞ眼を配る。背後より武士共、「后共に討取れ」と、鉾先並べて哄と寄れば、くるりと廻つて、吉「ヤア手の悪い。女の背後へ廻るとは、何時の世にある事ぞ」と、突蒐る鉾の柄を、片手拂ひにひら〳〵、はつし〳〵と切拂ふ。敵は背中の后を目蒐、背後へ廻るを寄せ付じと、我身を捻つて前に受け、横に開いて 三重 拂ひしが、伯了が鉾を受外し、胸前ずつばと貫かれ、眼も眩みくら〳〵と、消入る性根

邪正一如—如は眞如の理也、首楞嚴經に、魔界如佛界如一如无二如」とあるを云ふ

いざさせ玉へ—サア御出であれ

御足に犇と抱付、咽び入りたるばかりなり。太「アッア遲れたり。汝知らずや、煩惱の强敵、惡業の軍兵を引率し、輪廻の城に楯籠り、瞋恚の鋒先愛着の鏃を揃へ、迷ひの凡夫を惱せり。此大敵を攻滅し、現世安穩、後生善所の大果報を與ふる大將軍は我なるぞ。降魔の出陣此時たり。不思善不思惡邪正一如」と、鞭を上げ乘出し給ひける。末法今の我們まで、闇路を導き給ふこと、此一足の御門出、有難かりし大恩なり。耶輸多羅女は夢覺て、御座の邊りを見給へば、殘るは茵御枕、御行方はなかりけり。耶「やれ太子落させ給ふぞや」と、叫び給へば吉祥女、數多の官女目をする〱、御殿の隈々、あらぬ方なく探せども、面影だにもあらばこそ。耶輸多羅女聲を上げ、「豫々斯と見えし故、夜の目も寢ず、朝夕心をつけけるに、何時なき今日のお情に、心も解て氣も緩み、熟睡みしは何事ぞ。尋てくれよ」と伏轉び、憧れ給ふぞ悼はしき。吉祥女力を付け、「御門々々の詰番。天を翔り給ひしか。よもや遠くは落給はじ。いざさせ給へ」と御手を引き、北を指て出ければ、這は如何に、丑寅の小門開け、番衆四邊に横偃し、舁て行くをも知らぬ體。吉祥女地團太踏み、「ヱヽこれじやもの、道理こそ。皆此處へ寢に來てか。一々に奏聞する。首の用心して居や」と、言捨出んとする處を、各々一度に勃然と起き、弓手右手に取圍み、

平等大惠—佛智の用能く衆生の結縛を解し化益平等にして能く證果を得しむるをいふ

流轉—生死に迷ふ

押かけ三繋—馬の頭、胸、尾より鞍に繋る組緒

いしくも—よくも

時も離れず。只目前の境界に迷ひ、來世を知らざれば、翼なけれど鳥類に等しく、毛を着ねども獸に同じ。「ハァ南無三寶。生死の大海に漂へる一切衆生、我平等大惠の船を浮べ、大悲の棹を取らずんば、流轉の波路は任意越さじ。時こそ來れ」と局々を過給へば、春の夜ちと短ふして、宵寢熟睡の后達、前後も知らず寢入端、誰咎むる人もなし。「東門よりや出べき。南門よりや出べき」北も西も篝火晝の如く、數千人の番衆、目を怒らし鳴を靜めて守居る。丑寅の小門一ツ、柵はあれども錠空しく、番も心や疲れけん、互の膝を枕とし、袖を片敷く高鼾。「出離の門は此處なり」と、數多の番衆が枕の上、氷を歩む御差足、虎の尾を踏む心地にて、やう〳〵過行き御厩近く、「車匿やある〳〵。金泥駒に鞍置て、引て來れ」と、忍びやかに宣旨ある。車匿寢耳に「ハッ」と驚き、取物も取敢ず、黄金の轡珊瑚の鞍、押かけ三繋、腹帶搖締め引立たり。太「ヲヽいしくも仕たり」と引寄せ、ゆらりと召すまゝに、「是より丑寅の山、檀特山まで駒進めよ」と宣へば、車匿夢とも辨へず、御馬の口に縋付、さめ〴〵と泣けるが、車「夜は丑滿に更渡り、御遊御狩の時にもあらず、朝敵退治の日にもあらず。これは正しく御出家の、浮世の名殘の御幸かや。軈て御卽位の御馬の口、目出たく取らんと存ぜしに、思ひの外の御有樣。思召留り給へ」とて、

四顛倒—淨、樂、我、常の四の慾望也、顛倒とは心の錯亂する意

んとする如く、中々思ひも寄らぬ事。殊更、人界の羈絆といふは妻子なり。耶輸多羅女が胎内に我子あり。生れぬ先より子に羈絆され、出家とは思ひも寄らず。皆々心安かれ」と、誠しやかなる御方便。吉祥悦び、「ヤア耶輸多羅樣の御懷姙、それは先ア御眞實かいの」太「ハテ何しに僞らん。あれ花園に」と宣へば、夫婦は勇んで御供し、后に近付き參らせて、吉「お身が重うなつたとや。目出たい〱。去ながら、日頃お床も別々で、何時の間にやら油斷のならぬ。どれお腹」をと、吉祥女懷に手を入れて、「ヲヽ眞物じや〱。是から御身持猶大事。お風があたる。先奥へ。サアそろ〱」と手を引けば、耶「眞に一夜もしつぽりと、面白い事も無ふ、姙娠になつて苦しむは、いかい損じや」と御戲れ、生れ給ひて御名をも、羅睺羅尊者と三重聞えける。されども烏陀夷は心許さず、十二の大門、六十六箇所の小門、築地の端れ、堀の橋にも心を付け、其身は宿所に歸りける。猶も宣旨重くして、夜にもなれば百人組の番手を替え、五十人宛寢ずの番、御門々々に屛風折の錫鋑、取置の柵をふり、鳥も通はぬ御殿の樣、宛がら科人の禁獄なんども謂つべし。頃は二月七日の夜、悉達太子は欄干に、はや入る月のあと暗き、空を見るにも人間の、月をば月と愛る故、入るさの闇に迷行、世間の榮華を樂むといへども、四顛倒の憂ひ少

出離―俗界を出てはなる

言成―然らざるをそれらしくいふ

須彌山―梵語にて妙高と譯す七山七海環列して其高三百三十六萬里とあり

寄てさつと散り、じつと寄つては又染々と、好い中々の思はせ振、花の眞實人間の、妹背の道も餘所ならず。少時眺めて三重おはします。胡蝶は空にて羽と羽、打重ね打覆ひ、耶輸多羅女の御袖に、飛入るよと見えけるが、子胤宿ると覺しくて、胎内重く苦み給へば、二人の官女抱きかゝえ、御身を擦り勞りける。太子は今ぞ願成就。后の心宥めし上は、留むる人はよもあらじ。出離の時こそ來つたれと、白虎門に出給へば、陳正千、曾啼君、二人の宰官突と出、「何處への御幸や候。君御出家の御望みある由、御父大王深く歎き思召、我々御門を守つて、忍びの御幸を屹度止め奉れとの勅諚、默止難く候へば、通し奉る事は叶ひ難し」と申し上る。太「ムヽ我出家の望みとは誰人か奏しけん。皆世の中の噓言よ。何を託に出家せん。王宮の樂みに優る事のあるべきか」と、左あらぬ體にて青龍門に出給へば、烏陀夷夫婦出迎ひ、「これは何處への御幸にて、馬車にも召されず候。情なや君十善の寶位を捨、御出家の御志、御父大王を始め奉り、我々は申すに及ばず、百僚百官、下民間に至るまで、天下の歎きに候。何御不足の御發心。御心に適はぬ事あらば、我々夫婦密に仰を蒙らん」と、世に染々と奏ずれば、太「それは人の言成しよ。斯る凡夫の身を以て、浮世の覊を離れんとは、蠡にて海を浚え、燈心にて須彌山を引寄せ

芬陀利花—白蓮華にて花中最勝の妙色
穗に顯る—顏に出づる
薄紅—薄きにかく
栴陀羅—爲んにかく
倶蓮—吳れよにかく
千々の金法—千金
栴應—せんにかく

ね肌觸れて、愛慾に溺るゝばかり、妹背の契りにあらばこそ。一つ心に月を愛で、同じ梢の花を眺め、心の合ふこそ誠の夫婦。彼の花に舞ふ胡蝶、番々はありながら、子とて生たる事はなし。番が同じ露を嘗め、心を通はす契にて、花の中より子を生す。人間とても其通り、誠の心ぞ夫婦なる。雌蝶は御身、雄蝶は麿と觀念し、花に心を留めたまへ。必ず懷姙あるべきぞ。是を夫婦のしるしにて、色に執着し給ふな」と、御戲ぶれも世の敎へ。耶輸多羅女は打笑ひ、「終に覺えぬ染々としたお詞は、雨夜に月を見付し心、三歳が内の初花ぞや。いざ〳〵花に擬へて、思ひを問ふつ問はれん」と、袖打かくる八重籬、寄れば露散る香散る、匂芬々分陀利花、摩訶分陀利花咲亂れ、咲しなだれてしな〳〵と、品好く慕へ慕ふとて、誰か悋もじ輪丁花。花の睦言これ見よ顏に、戀ぞ積りて穗に顯れて、蕾が孕む波羅蜜花、我身は甚麼に如何なれば、他生の緣も薄紅の、濃紅に色見せて、何栴陀羅花甲斐もなき、仇の枕の起臥を、花も推して倶蓮陀花、戀といふ字に誠のあらば、替じや千々の金法花、浮名は何と栴應花、ある名あし名のいろ〳〵に、摩訶曼陀羅花、曼珠沙花、匂はば匂へ咲かば咲け、稀の情の言の葉は、我身に開く優曇花と、詠め譬ふる詞の花に、金銀二色の揚羽の蝶、飛連れ〳〵飛纏れ、露を含みて口と口、戲れ

貪瞋痴の餌—此三毒にかゝりあふを餌に譬ふ

比翼—雌雄合體の鳥（三才圖會）

立がらし—立てかひなき事

て除ふ」と、走寄らんとしたまへば、周圍に色々の籬の名花咲埋み、道を隔つる花の關、「蹈分越て往かふか。いや御祕藏の花蹈散さば御機嫌損ね、彌々御縁も斷れやせん。風も吹け嵐もせよ。花吹分て自が、思ひの道を開けかし」と、花を恨みの御姿、花も色には恥ぬべし。悉達太子は、花にも人にもお目もやらず、「淺ましや一切衆生、貪瞋痴の餌にかかつて、生老病死の網に入り、無量劫より終に生死の闇を離れず。我大慈大悲を起し、此苦みを拔て、永き樂みを與へんと欲す。歡喜々々」と唱へ給ひし、御容顏の優艶さ。姫は猶しも憧れて、耶「左程まで一切衆生憐み給ふ御心にて、自が此憂思ひ、憐とも思召されずや。但みづからは、一切衆生の外なるか。其お心では今此處で、死んだら定てお嬉しかろ。死ねなら死ねと宣旨あれ。死に兼にやしまい」と宣へば、宣「ヱヽもどかしい。これ眞に太子樣も餘りな。高いも卑いも女の習ひ、良人に添へば、晝は側に吸付き、夜は比翼の枕を竝べ、問ふつ語つつ打解てこそ、子生るゝ鹽梅なれ。おいとしや耶輸多羅樣、綾錦で身を飾り、后といふ名ばつかり、御夫婦のしるしもない。精進の立がらし。寧そ女夫かけ向ひで、瓔珞より安樂に、手鍋提て天冠より、藥鑵が優じや」と喚きける。太子も發心の色目を人に悟られじと、籬に立寄莞爾と笑ひ、「恨みは道理。去ながら、枕を重

遠山櫻―疎遠に譬ふ

あの丶もの丶―何やかや

餓鬼の目―傍にあるを氣付かずして他に求むる諺

射徹し、十歳にて白象を城外に擲ち、一切智を兼ね給へば、悉達太子と名號奉り、十九歳にぞ成り給ふ。輝くばかりの御容貌、天上の御榮華、何不足なき御身にも、出離生死の御營み、三時殿の高樓に、花落鳥の啼音にも、無常を觀じましませば、數多の后も遠山櫻、餘所に散行く其中に、耶輸多羅女は十七歳、阿私大臣の一人姫、五天竺第一の、美人の名取心まで、戀に我の張る御氣質、氣を揉み焦り玉ひても、終に一夜も肌觸れで、未だ紐解ぬ初花に、何時濡初し露の玉、ころりと側に寢たばかり、夢にも逢瀬なかりけり。蘭香蘭志二人の官女もどかしがり、「アヽ〳〵お詞ほどにもない姫君樣。何程太子樣、外面は引締た顔遊すとも、お床の內では詑語させずば置くまいと、御意なされたはドレ何處に。女子仲間のひけになる。人目を忍ぶ戀ではなし。所も時節も何のその、去嫌ひが入るものか。あれ〳〵悉達太子樣、あのゝものゝ臺詞なし。ひつたりと抱付て、一度手並を見せ給はば、後はずる〳〵此方の物。アヽ辛氣や」と言ひければ、耶「いや〳〵騷がぬ〳〵。何しに太子樣此處へはお出あるべきぞ。みづからが戀焦るゝを可笑がり、後で嬲つて遊ばんとや。いざ歸らん」と宣へば、官「ハテ嬲るとは勿體ない。あれ彼の高樓に」耶「眞に左樣じや。餓鬼の目に水見えずとは妾が事。嬉しや今日は聞えぬ事も何もかも、言ふ

平緒―裝束の前に垂るゝ緒

だや〱馬―驛馬

善惡不二―迷の本は妙理ありて悟りと同じ故に不二といふ

如意寶珠―諸願意の如くなる珠

風は虎―雲從龍、風從虎(易)

六十四部―印度に行はるゝ外典一切の書

馬取、御奉公の手始め」と、劒引たぐつて首を搔んとする處を、烏陀夷遥に聲をかけ、「アア〱殺すな〱。御誕生の大吉日。助けて歸せ」と呼はれば、引起して、車「ヱ、をのれは果報者。去ながら目見え奉公しるしの爲、御厩の車匿が口取る樣はまづ此通り」と、袖引斷つて婆將軍が、口に捻込み捻込んで、平緒手繰て頭をかけてくる〱卷、餘る處を手綱に控え、「サア轡心の好きお馬。鞭の鹽梅覺え置け」と、杖振上て礑と撲てば跳上る。「跳ね馬じや〱馬放れ馬、心任せに跳ね廻れ」と、打立て〱追放つ。善惡不二の御産の紐、卯の花染の産衣を、末世の凡夫に打着せて、天上天下の初聲は、我們が爲の如意寶珠。無量の寶を得る事も、只一佛の慈悲深く、三千世界惠みあり、感應あり利生ある、信心の德有明の、西にかくれて入る月の、東に出るが如くなり。

第二

風は虎の嘯くに隨ひ、雲は龍の上るに廻る。天の感應時を得て、月日重る御太子、習はずして諸々の技藝に達し、傳へずして六十四部の諸論に通じ、七歲にて鐵の的七重を

より人形—夫人
身代りの人形

あらうと覺悟して、今か〳〵と待たるに、さて〳〵遲ふて待兼たり。それ官女達、用意の御馳走合點か」「心得たり」と手ん手に捧げし花の棹、押取り〳〵鉾を仕込し寒竹に、掻投り捨たる花軍、花を散してかゝりける。「ヤア事をかし女業。大地に劍を植ゑ、刄を雨と降せばとて、婆將軍が片腕、片端打折捨んずもの」と、飛蒐らんとする處に、烏陀夷馬を乘放し、車匿諸共突と入り、「太子御誕生、御母夫人薨去といひ、早速參る筈なれども、臑を些と怪我致し遲參は御免。承はれば彼の太子を親殺しとの御評定、いかな〳〵、夫人は別に殺人あり。いで其證據」と、車匿に持せし藁人形、取て突立て、「これ摩耶夫人調伏のより人形、生れ年御名を書、封じこめしは覺えあらん。祈り處は健陀羅山。願主は提婆達多、憍曇彌。是此願書が物をいふ。ヤイ婆將軍、汝們が人を殺すは藁人形にて迂遠し。近道の殺し樣敎へてくれん」と、劍拔放せば飛退去り、「ヲ、其方から敎ゆるか、此方から敎ゆるか。太子諸共討取れ」と、數萬の官兵喚いて蒐る。「物々しや」と入亂れ、歡喜園の南門を、捲立てぞ三重追拂ふ。隙間を見て婆將軍、東門より忍入り、吉祥女を取て引伏せ、太子を奪ひ取らんとす。車匿童子取て返し、婆將軍が髻を摑んで、眞逆樣に跳反し、馬乘に撑と乘り、「此小童を誰とか思ふ。柴賓の車匿童子、今日より太子の御

七覺—七法の眞理を云ふ、爲ニ顯ニ七覺ニ故行ニ七步ニ（佛祖統紀）

獅子吼—所ㇾ言不ㇾ怯名ニ獅子吼ニ（勝鬘經寶窟）

と宮女達、抱き起し呼助け、御藥種々の、看病更に甲斐もなく、終に縡斷れ給ひけり。太子は圓智明らけき御顔、七覺を表して七步み、左右の御手を獅子吼して、天地に指し微妙の御聲、「天上天下唯我獨尊、無量の生死今に於て盡せり」と、宣ふ御聲の中よりも、難陀跋陀の二龍王、雲を凌ぎて天降り、口より溫湯熱湯を吐き、産湯を灑ぎ奉つる。宛がら甘露の瀧津波、流れの末の童男童女、酌で掬んで額に灑ぎ、口に含めば口香り、無病延命なりとかや。旃檀鷄舌沈水香、丁子香安息香、五ッの香まじはつて、四河の流れも芬々たり。今の世までも嬰兒の五香の良藥、是此佛の方便力、有難し〳〵。龍王は金色の鱗を垂て卷下り、摩耶夫人の尊骸を頭に戴き、光と共に忉利天へぞ 三重 迎へける。斯る處に憍曇彌婆將軍、官兵引具し産屋の内に亂れ入り、大音上げ、「摩耶夫人は難産にて死したるとや。道理かな〳〵。濕生化生はいざ知らず、體を受て生るゝ者、人間も畜生も、出生の門は只一ッ。出所を取失ひ、母親の横腹を引裂て生るゝとは、惡魔の所爲か狼狽者か。親殺しは五逆の第一。五天竺の王位に立つべきか。能ふぞ自が提婆を養子にしたるよな。彼の生れ子は姪ながら妹の敵。あれ捻殺せ婆將軍」「承る」と大勢が、一度に哄と取廻す。「心得たり」と吉祥女、太子を抱き奉り、莞爾と笑ふて、「定て御兩人御出

卯の花月―四月八日と因果經にあり
漿―天の甘露
こうがい―光貝
花供養―灌佛會とて花を捧げ水を灌ぐ（公事根源）
絹―緻密に織れる絹布
三十二相―足下平滿の相、足下輪形ある相、身毛上に靡く相等三十二ありて佛陀の相なり

山川谷川跳越え駈越え、飛ぶが如くに三重年月の、行足迅き甲寅、御產にあたる卯の花月、耆婆の教へに隨ひ、歡喜園に產屋を構へ、百花を以て飾葺き、夫人の御座は、百重の錦八百重の綾、吉祥女を先として、數千人の官女達、天の漿、かうがいの杯、千顆万顆の寶を捧げ、月卿雲客殘りなく、賤山樵にいたるまで、長棹にいろ〳〵の花を翳の捧げ物、夫人を慰め參らする。末代三國凡べて、卯月八日の花供養、佛法流布の因緣なり。御快げに摩耶夫人、「なふ方々、世の人の懷姙は、十月の苦み種々なりと聞けるに、不思議や我胎内に、王子宿らせ給ひても、常より心涼しくて、身も輕く覺ゆる上、一天下の万民の慰め勇むる嬉しさよ。殊に此花の、色香すぐれて咲たるは、無憂樹といふ木にて、文字には憂ひ無しと書く。一枝折て王子の無憂を祈らん」と、右の手を擧げ、枝に取付き給ふ時、八日の朝日御身を照し、天に音樂異香薫じ、夫人の右脇、蓮の開く如くにて、降誕あるぞ三重有難き。五色の蓮華湧出して、太子を居ゑ奉る。天津絹の妙色衣、御腰に纒はれて、三十二相の御容。三千の官女、五千の侍從聲々に、御產平安、世繼の太子御誕生、萬々歳」と呼はる聲、王宮響き渡りけり。御母夫人は嬉しさの、餘りて心の疲れかや、無常を示す方便かや、「あつ」とばかりに御色變り、萎める花と消え給ふ。「これは〳〵」

尾筒―尾のねもと

有頂―九天の中の最上

取て來る綱の前、躄寄て無手と取り、鳥「此馬借た。重ねて屹度返禮せん。サア〳〵柴を下せ」といへば、「ヤレ〳〵味い和郎がある。駄賃取る馬でない。今日の市に外れて、此柴賣らねば咽が乾る。是非借たくば雨降か雪降、隙な時貸てやろ。それまで此處に待て居や」と、引立るを猶扣え、鳥「必定是でも貸まいか」と、劍を拔て閃かし、振廻せばハッとばかり、怖れて四邊へ寄付ず。其隙に安々と柴切解き、木の根を蹈へゆらりと乘、一鞭くれて乘出す。山「どつこい遣ぬ」と飛蒐り、尾筒を取て、「何處へ〳〵、晝中の馬盜人、サア遣て見よ。尾筒が拔けるか、小童が腕が離るゝか。仕上を見よ」とぞ引たりける。鳥「ムウ盜賊と思ふは道理。淨飯大王の臣下烏陀夷とは我事。后御懷妊に妨げありて、健陀羅山まで急ぎの公用。延引して大事に及べば、五天竺は闇となる。下郎ながらも王土に住で、天下の大事を思はば、此馬貸て得させよ。太子御誕生あるならば、汝を寮の御廐に召置べし。如何に〳〵」といひければ、飛退去て頭を垂れ、山「さては一天の君の御用かや。慮外申せし勿體なや。馬は愚か草も木も國王の物、王土に生ぜし柴を苅、今日まで命を繫たる、御報恩は此度。小童が在所は流沙の川邊、車匿童子と申す者。上は有頂、下は大地の底までも、君が爲には御供」と、馬の口に引添ふて、鞭打くれてハイ〳〵〳〵、嶮岨嶮山岩石岩壁、

橫折伏―橫たはる事、橫折伏せる小夜の中山（古今集）

たぢ〳〵―よろめく

月毛―白に赤味を帶びたる毛色の馬、月にかく

東西を辨へて、物の道理は知るぞかし。甚麼愚痴に生れしとて、摩訶陀國の一の臣下、烏陀夷が子にてはあらざるか。をのれ十歲に餘つて、主君の大事、國の大事、親の一世の大事とも、辨へ知らぬ愚鈍さは、不便も失せて憎いぞや。子を持て辛いとは我身の事よ」と齒嚙を爲し、不覺の淚に暮けるが、烏「ハア愚痴の子に絆されて、忠義を忘るゝ我こそ愚痴よ」と斷念り、橫折伏せる松が根に、取て引据へ、足迅に、立去らんとせし處に、巢籠る鷲の氣も猛く、一文字に落すと見えしが、槃特を引攫み、梢を分て翔り行く。父は憧れ木の根に縋り、枝に手をかけ飛上らん、馳上らんと焦る處を、番ひと覺しく又一羽、矢を射る如く落來り、兩の膝節太股かけて、はた〳〵撲たと蹴爪に懸け、反仰に撻と蹴反して、劍を拔く間もあらせばこそ。ひらりと飛で立上り、雲間高くぞ翔り行く。烏陀夷は夢見し心地にて、立上れば兩足朱になつてたぢ〳〵〳〵。烏「エヽ如何に上見ぬ鷲なりとも、言はば鳥類、爪鐵石にもあらばこそ」と、蹈立れば蹌々〳〵、歩めば骨も碎くるばかり、五體に應え一足も引ればこそ。烏「扨しなしたり〳〵。一代一度の大事の瀨戸、目前死する子を振捨て、忠を勵む烏陀夷が身を、天も見放し給ふか」と、撻と坐して大聲上げ、恨み歎くぞ道理なる。天も誠の心を照す、月毛の馬に柴負せ、十五六なる山樵の、口

調伏—人を咒詛すること

賣人—商人

此樣に下して見せん」と劍拔放し、馬の太腹ぐつと刺す。刺れて馬は跳上り、跪きを打て立程に、眞逆樣に跳落され、岩稜に胸打當、谷底に轉び落、草押分て身を隱し、行方知らずなりにけり。烏「思ひがけなき無禮者に出逢ひ、科なき馬を殺せし」と、四邊を見れば一通を落したり。拾上れば、提婆の方より憍曇彌へ送る文。「ヤ、心得ず。甚麼樣仔細あらん」と封引斷つて、烏「扨こそ〳〵此文章」「健陀羅山に調伏の壇を構へ、摩耶夫人の形を藁人形に作り、梵迦羅、摩迦羅といふ二人の道士を語らひ、胎内の王子を封じ、夫人が壽命を七日に縮め、忽ち本懷達せん事、踵を廻す可らず」と、讀も終らず、烏「南無三寶、さては婆將軍提婆に與し、大王の御位を簒はん爲、憍曇彌を勸め、養子と號し誑しを、我妻吉祥に言伏られ、詮方盡て調伏とや。人こそ多きに此烏陀夷が、此文を拾ひしこそ、彼奴們が運の極め。直に山へ馳上つて、調伏の壇を破らふか。先立歸つて奏問せうか。いや〳〵半時も調伏させては、懷胎の御身の大事。さりながら彼の健陀羅山は、雞足山、象頭山を打越え、其道遙に百由旬、假し何萬里あるとても、忠節の念力、翼となつて一飛」と、冠の纓引締め、沓の緒を堅め、裝束の襴高々と絞上げ、馳出れば槃特が、足に取付裾を曳き、無念無想の振舞。烏「エヽ淺ましや。賣人土民の子にてさへ、七歳八歳より

御利生―御利益

空佪―打つにかく

水突―手綱をつくる轡の孔

またもの―陪臣

汝が身に酬しか。如何なる病災難にも、換て親の身に引き受け、せめて嬉しい悲しいを、辨へる智慧を與へて給べ。不便の者や」と泣ければ、父の泣顔つく〴〵と、瞰上瞰下しわつとばかり、兩袖にて顔を覆ひ、瓦破と轉び伏沈む。「ム、父が歎くが悲いか。左程の智慧の付けるも、帝釋天の御利生。我信心の納受有難し〳〵」と、感涙猶もせきあへず。烏「いざ參詣せん。サア來れ」と、抱起せども伏轉ぶ。能々見れば歎くにてあらばこそ、腹を抱えてくつ〳〵〳〵、笑ひ入りたる其顔付、親も呆れて愛相盡き、物をも言はず居る處を、飛蒐つて握拳、父が額を丁々と、烏「空佪の所爲と思へども、又此罰の増すべきか」と、最ど不便ぞ優りける。斯る處に谷の岩稜蹈鳴し、轡の音の聞ゆるを、誰と見れば婆將軍が郎等伯了頓、烏陀夷親子を見ぬ振にて、手綱掻操り乘過る。烏陀夷聲をかけ、「ヤアヤア伯了頓、摩訶陀國にて某を見知らぬか。淨飯大王の左の司、烏陀夷の臣。乘打は推參なり。下馬をせよ」と呼かくる。伯「ヲヽ左いふ御邊は左の司、我主人婆將軍は右の司。殊に提婆達多の公用にて、憍曇彌の御方へ急ぎのお使。鐙にかけて蹴散そふが、ぐツとなりとも言ふて見よ」と、乘出す轡の水突慥と取り、烏「憍曇彌でも提婆でも、おのれは婆將軍が家來又者。下ずは下して見すべきか」伯「しや小癪なり。下まいが何とする」烏「ヲヽ先

子故に迷ふ人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（後撰集）

弟心不和にして、世繼の太子誕生、國太平を祈るべし。提婆は一先づ本國に立歸れ」と、三時殿に入り給ふ。摩耶夫人は姉后の氣を取り兼て、何事も風に順ふ青柳の、嫋々として起給へば、憍曇彌は嫉妬の恚り、胸にふくみし蝮の針、有繋色には出さねど、目に稜立て露はるゝ、悋氣述懐戀無常、善惡共に人間は、何國も同じ心にて、詞かはると聞ゆれど、文字にうつせば天竺も、日本も同じ世話詞、筆につらぬる御佛の、國の教へぞ

三重 道遠き、鷄足山の三ツの峯、峨々たる岩根踏分て、帝釋天の窟まで、其間十由旬、常に參詣稀なれば、道は棘に閉られて、諸木茂つて日影を隱し、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなく、麓の萱原眞葛原、所得させし虎狼、梢に巣をくふ鷲鵰、人を威せば自然、人跡絶えて物佗し。烏陀夷は一子槃特が、智慧を祈りの大願に、供をも連れず徒歩跣足、槃特を誘ひて、日參十日に及べども、今に其驗もなく、親の顔さへ覺えねば、右をいふ間に左を忘れ、火を摑んでは指を燒き、水を歩んで身を沈め、我名を忘れ親の名も、知らぬ愚鈍の闇よりも、子ゆゑに迷ふ父母の、心の闇ぞ哀れなる。烏陀夷木蔭に立休らひ、髪掻撫て涙を浮べ、烏「同じ生を受ながら、何とて斯くばかり愚鈍には生れしぞ。此世へ出て未だ十年、罪科爲りし身ならねば、天罰受ん樣もなし。親の受くべき天罰の、

言はれぬ—要らぬ
梵天—色界の天主
三世—過去、現在、未來

の子には繼されず。況んや五天竺の主、萬一誕生の御子に失あつて、御世繼にかなはぬ時、汝們夫婦は國の滅亡を悅ぶか。御子孫の絕ゆるを悅ぶか」と詰蒐る。耆「ア、言はれぬ氣遣、良人烏陀夷宣旨を蒙り、典藥耆婆を召しけるに、耆婆御脈を伺ひ、御相好を考へ、百福圓滿、目出度太子宿らせ給ふ。斯る御代には第六天の魔王、必ず妬んで障碍を爲す。四種の花にて產屋を葺き、萬民共に長竿に花を飾り、梵天を祀り給へ。御壽命八十一歲と、三世を見通す名醫の耆婆が申す上は、追付太子御誕生。此方には御養子入らず。提婆とやら申す稚いお人、姉后の御養子ならば、あれ養母御の憍曇彌、お膝に抱れて乳參れ」と冷笑ふてぞ居たりける。提婆飛蒐り、吉祥女が首筋片手に摑んで、足を宙に提げ、提「憍曇彌の仰といひ、婆將軍を悖く白物たる女、サア同心せずば、直に大地へ打込む」と、くるり〳〵と振廻せば、目眩き、見る眼も何と生瓢、風に搖めく如くなり。耆「オヽ打付ふが、引裂ふが、命に替ても義は背かず。殺さば殺せ」と張合ふたり。大王錦の几帳を搔け、「止なん〳〵。あれ引除よ」と御氣色變りし綸言に、流石の提婆もあつとばかり、女を撻と投付て、上を敬ひ蹲踞る。大王猶も諸人の心を宥めん爲、大「提婆達多は我姪なれば、養はねども我子なり。又摩耶夫人平產あれば、憍曇彌は姪にして、是猶產の子同然なり。兄

蚓といふ蟲云々—いらぬ心配の譬

帝釋天—忉利天の主にて喜見城に居て三十二天を統領す

我良人烏陀夷は左の司、天下の政道兩人一同の沙汰なるに、斯る大事を一人の計ひは何事ぞ。惣じて高きも卑きも人間の習ひ、懷姙とあるからは、取上て養育せんと用意するは父母の道。湯とも水とも知れずとて、懷姙を見かけ養子して、生るゝ子の懸替を、豫て用意し置くとは、さて〳〵御念の入りし事、彼の蚓といふ蟲が、世界の土を喰盡さば、何を喰んと歎くといふ、蟲同然の深用心。憍曇彌のお好みか、但御身の勸めか。御世繼は懷胎の王子。御養子はかなはず。サア此輿早く舁出せ」と、轅を叩いて演にける。提婆輿より跳出、雷の如き大音上、「ヤア憚りなる女奴、麿が輿に腕をさすは、稚きとて侮るか。言ふ事あらば汝が良人烏陀夷を出せ。一言と吐かば舌の根引拔て捨んず」と、はつたと睨む兩眼は、宛然日蝕月蝕の、影を一度に見る如く、心も眩むばかりなり。女房はつと身も顫はれ、怖ろしながら猶憶せず、「ヲヽ召さずとも我良人參內致す筈なれども、夫婦の中の一子槃特と申す者、如何なる罰にや、心愚鈍に生れつき、はや十歳に及べども、父母をも見知らぬ鈍根にて、烏陀夷が家を繼されじと、鷄足山の帝釋天に、智慧を祈りの日參故、良人の代りの此女、睨まれても怖からず。御所望ならば、此方も目は細くとも一睨み」と、事もなげに言なせば、婆將軍突と出、「それ〳〵汝們如き臣下の家さへ、愚鈍

のゝめき―罵りさわぐ

生れぬ先の云々―早計に過ぐる諺

れば、大王の御悦び、皇太后宮の宣旨下つて、第一の后に立昇り、威勢といひ位といひ、優るを猜む姉后、素面は清き心の水、底に逆巻く瞋恚の波、起居に募る悪心に、上下の臣下、三千の女御、思ひ〳〵の贔屓々々に、摩耶夫人方、憍曇彌方と、御殿二つに片破れ月の、光りを挑み競ひけり。爰に右の司婆將軍、七寶を鏤めし、玉の御輿庭上にかき据させ、婆「さても君の御齡、五十に餘らせ給へども、世繼の王子ましまさず、群臣これを歎く處に、摩耶夫人御懷胎とて宮中のゝめき、未だ湯とも水とも知れざるを、五天竺の主定まりしなんどと、夫人を皇太后宮の位にすゝめ、第一の后との勅諚。恐れながら粗忽千萬の御計ひ。若し難産にて流産か、又姫宮か、假令男子にても、萬一五體不具にて、一天の世繼かなはぬ時は、今の催し徒に、生れぬ前の襁褓定めと、國民の笑種。夫人までも御恥辱。御姉后憍曇彌是を悲み、目出度き世繼の太子を御養子候。則ち迦毘羅國斛飯王の王子提婆達多、利根聰明、御年十二歳とは申せども、其丈一丈五尺四寸、大象をも取挫ぐ御力、古今に秀でし人相、大王の御爲には正しき姪君、天晴五天竺の世繼、此上や候べき。はや〳〵親子の御對面」と、簾を捲んとする處に、左の司烏陀夷の臣の女房、吉祥女、中門より走出で、小腕取て押退け、吉「ヤア我儘なり婆將軍。御身は右の司、

釋迦如來誕生會

第一

如是我聞く。九土區々に別れ、四生俗を異にす。長へに火宅に遊び、共に苦海に沈む。故に能仁大師、法界を總て我智とし、虛空を悉して我身とし、一切種智の光明に、蠢々たる懷生喁々たる生類、草木國土、悉皆成佛の氣を與へ、六通自在の神足に、魔軍筵の如く捲て、現世安穩の益を施し、三千世界三世の衆生、惠日に照す大恩教主。ヲロシ「福量なしとかや。天の羽衣まれに來て、撫とも盡ぬ大石の、住劫の末西域の皇帝、民主王より八萬餘代、師子頰王の御子、淨飯大王と申し奉り、五天竺に君として、萬機を御心に任せ給へども、御卽位あつて三十餘年、世繼の太子在さず。善覺大臣の姫君、姉に憍曇彌、妹に摩耶夫人、一二の后に立給ひ、媚を爭ひ艶を粧ひ給ふ。中にも御妹の摩耶夫人、去年七月十五夜の夢の瑞、白象胎内に飛入ると御覽じて、御懷姙の月重

九土―土は州也天子以九州爲土皇極經世
四生―胎、卵、濕、化
火宅―三界無安猶如火宅（法華經）
能仁―釋迦の譯名
一切種智云々―佛智の光明に有情無情皆成佛の氣を與ふ
魔軍云々―佛が菩提樹下に坐せし時魔軍妨げせしを通力をもて軍兵を捲上げし事
住劫―成、住、壞、空の四劫の一
天の羽衣―劫の長き形容

を見よや」とて、大地に打付け蹈付れば、骨は微塵と蹈碎かれて、朝敵亡び失せてけり。猶君が代は萬年の、龜に契りし浦島が、千歳の姿舞鶴の、舞ひ悦ぶや松竹の、家も千年名も千年、壽命も千年三千年、松に花咲く御代の民、富貴の宿こそ嬉しけれ。

立上りて棚を見よ。やれ天から寶が天降つて、にんみやう草木増長すれば、東表の泉水ぢに、積だる寶はどれ〳〵ぞ。綾が千反錦が千反、唐物を積たゝえて、はんや、ハッアこりや〳〵。此方の庭を今朝こそ見たれ。黄金の花が咲や亂るゝ〳〵。夜さの泊りは何處泊りぞ〳〵。那波か佐古志か室が泊りか〳〵。船の中には何とお寢るぞ〳〵。苫を敷根に舵を枕に〳〵。汲だる清水に影見れば〳〵、我身ながらもしほらしや〳〵。松の葉越に月見れば〳〵、暫し曇りて又冴える〳〵。一の幣建て二の幣建て、三に黑ごましなのをとれ。船頭殿こそ勇健なれ。泊り〳〵眺めつゝ、かのまた獅子と申するは、百濟國より普賢文珠の召されたる、猿と獅々とはお使者の役。猶ほ千秋や萬歳の、俵を重ねて面々に、俵を重ねて面々に、俵を重ねて面々に、樂ふなることそ目出たけれ」舞納むると見えし時、猿の役人面押取て棄ければ、恒寂僧都顯れ出で、行平を取て伏せ、「汝知らずや、我はもと他方界の惡龍なり。娑迦羅龍王の威勢に押され、五衰三熱歇む事なし。故に、日本五常の寶を奪ひ、我威を振はんと欲し、障碍を爲せし力なく、今俳優に紛れ、汝に仇を報ずる」と、細首取て引抜んとせし處へ、浦島太郎足輕々と馳來り、敵を摑んで差上げ、「我れ仙宮に入り、生ながら神となり、國土を守り惡魔を攘ふ神力の、神變自在

にんみやう―人命か

那波云々―何れも播磨の名所

黑ごま云々―不詳

勇健―法華經に獅子王勇健とあるより獅子と續けたり

五衰三熱―五衰は天人にありて漸々衰滅の兆を示し三熱は龍蛇にありて毎日三度づゝ熱き目に逢ふ苦あるを云ふ

五常の寶―仁義禮智信を寶劍に象る

ましよ―猿よ
こふだ―込んだ

てといふは、未だ猿の皮を惜むさうな」ツレ「いや左様では御座りませぬ。其大墓股で射殺されましたらば、猿の皮に疵が付て役に立ますまい。此處に猿の一打と申して、只た一打で死にまする灸所が御座ります程に、皮の疵のつかぬ様に打殺いて上げませうと申す事で御座る」シテ「しかと左様でおじやるか。急いで打殺いて渡せ」ツレ「畏つて御座る。やいましよ、小猿の時から飼置て、明暮其方が庇で、世を樂々と暮した處に、又只今打殺す。成らぬと申せば殿様の、某をも大墓股で、射殺さうと御意なさるゝ。不便に思へども一打に打つほどに、恨みと思ふてくれるなよ。サア只た今打つぞ。あれ〳〵あれを御覧なされ。打殺さるゝ杖とは知らず、常々教へこふだ事かと存じて、打るゝ杖を押取て、船漕ぐ眞似をしますはいの」シテ「何んといふぞ。打殺すとは知らいで、杖さへ上げれば藝をすると心得て、船漕ぐ眞似をするといふか。哀れな事じやな」ワキ「あはれな事で御座ります」シテ「やい畜生さへ物を知て歎くに、殿が物のあはれを知らぬといふは、鬼畜木石に劣つた。命を助けた。早々連て歸へれ」ツレ「はアヽ有難ふ存じまする。然らば目出度ふ御家御繁昌、息災延命富貴萬福の、御祈禱いたして歸りませう。猿が參りて能仕る。御知行増る目出たき踊るが、手元小腰をゆり合せて、舞ふたる風情の面白さよ。突

大蟇股—鏃が股になりたる矢

て、猿皮靭になされふとある。其猿皮おこせといふて、取て來い」ワキ「御意では御座れども、おこせと申した分ではおこしますまい」シテ「おこせといふておこすまいな。然らば少しの間、猿の皮を貸せといふて借て來せ」ワキ「貸せと申してもなか〳〵貸はいたすまい」ツレ「しさりおろ。大名の借るといふに、何んの貸さぬといふ事があらふ。いかい大名じやといふて借て來い」ワキ「畏つて御座る。なふ〳〵猿引、たのふだ人のおいやつた事をお聞やつたか」ツレ「なか〳〵是で承つて御座る。お大名と申すものは、我儘なもので御座る。皮を貸しますれば猿が死にまする。貸す事はならぬとおつしやれ」ワキ「はア申上まする」シテ「むゝ扨は後を返すまいかと思ふていふと見えた。又往ていはふには、大名のいふ事には違ひはない。五年か七年靭に懸たらば、後は返やす程に貸せといふて借て來い」ワキ「畏て御座る。なふ〳〵お聞やつたか」ツレ「なか〳〵承つた。兎角貸すことも遣る事もならぬとおつしやれ」シテ「やい〳〵聞た〳〵。さては大名でないと思ふて侮るさうな。其義ならば、此大蟇股を以て猿引共に只一矢に射殺いて取る。やらぬぞ」ツレ「はア待て下され〳〵。成程、猿の皮を上ませう」シテ「慥と左樣でおじやるか」ツレ「上げませう」シテ「左樣もおじやるまい。さアおこせ」ツレ「お待なされませい」シテ「待

めで太鼓—目出度にかく
のさもの—例の氣儘者の義
念なう—殊の外
存じまする—さやう存じます
なか〳〵—いかにも

明日よりと呼ばふなる、人の聲までめで太鼓、勇める音に勇みあひ、老若男女貴賤都鄙、袖ぞ滿ける。三重 シテ八幡大名「劒は筥に納め、弓は袋に收るといふ、太平の御代に生れ逢うて御座れば、何暗い事は御座らぬ。幸ひ今日は空も麗々と長閑に御座れば、慰みに出やうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出して申しつけふと存ずる。のさ者あるかやい」ワキ「はあお前に」シテ「念無ふ早かつた。汝呼出すこと餘の義でない。今日は空も長閑な空じや。慰みに出やうと思ふが、鞠の會か、弓の會か、但しは舟遊びか。又野遊山などは何とあらふ」ワキ「御遊山と御座れば、何れもお慰みにならぬことでござりませぬ。其中でも今日は空も長閑に御座れば、野遊山が能ふ御座りませう」シテ「汝も野遊山が好からふと思ふか」ワキ「存じまする」シテ「野遊山か」ワキ「野遊山」シテ「野遊山ワハア、野遊山とは出來いた。氣が晴れりつとして好からふはいや。サア斯う往かふ。汝も供をせい」ワキ「畏つて御座る」ツレ「罷出たる者は、此邊の猿引で御座る。今日は天氣も好ふ御座る程に、旦那方の家の内の御祈禱に廻らふと存ずる。先づ斯う參らふ」シテ「やい〳〵太郎冠者、あれへ來るは猿ではないか」ワキ「なか〳〵猿で御座る」シテ「あゝ大きな猿じやな。はてさて大きな猿じやな。ヤイ汝あれへ往て言はふには、たのふだ人の靫が殊の外損じたに就

惠美壽の社に急がるゝ。

第五

昆吾溪の寶劍は、人を照すこと水を照すが如しとかや。在五中將業平は、御劍歸座の趣内奏し、行平夫婦、僧正遍昭、浦島、由良太相具して、朝參あるこそめでたけれ。御劍を玉の床にするゑ、淸凉殿の日の御座に還御なし奉り、則ち業平は藏人の頭、行平は還任の中納言兼民部卿、二人の蜑をも四位に叙し、播州一國の鹽濱、殘らず知行すべしとの宣旨なり。さて浦島の翁が昔、日本紀を引せられ、「更に疑ふ可らず。生ながら神に祝ふべし」と、網の明神と神號を賜はり、丹後風土記に載せられ、由良太には菅川の庄、三百餘町を宛行はる。行平中納言進み出、「臣等此度天恩の榮耀にほこること、全く龍神の加護。僧正遍昭導師にて、廣澤の池にて龍神を供養し、彼處に芝居を構へ、狂言師を集め、某も立混り、俳優の狂言を仕り、龍神を慰め申したし」と奏せらる。天氣ますく麗はしく、「五穀豐饒萬民快樂、君も行幸なるべし」と、吉日良辰吉方を、選みて芝居の柱立て

目出たいも云々—鯛を釣つてとりし西の宮の惠比須とかけたり

するりと拔て手に手を取り、刺違へんとする處を、北の方走り入り、二人の兩手に縋付き、北「何しに御身を殺さん。なふ留めてたべ人々」と、涙に咽び給ひしが、「揃ひも揃ひ似も似たり。心たけたる姉妹や。恥しの心底や。みづからも亦方々を、退せて添んといふでもなし。行平樣に廻り逢ひ、嬉しき一言聞くならば、それを此世の樂みにて、殿御は御身と夫婦にして、妾は其場で何時も、首を縊めんと常々に、心かけたる其しるし。これ疑ひ晴れ給へ」と、肩押脫で見せ給へば、これも肌には煩惱の、絆の細引罠にして、首に纏ひし其風情。松風も村雨も、「いとほしの御有樣や。我も人もこれほどまで、男思ふは何事ぞや。可愛は因果かや。味氣なの我々や」と、三人わつと抱き合ひ、聲をはかりに行平も、供の人々心なき、出女下部に至るまで、皆々袖をば濡しける。斯る處に雛形右衞門尉、由良太諸共、赤になつて駈來り、雛「只今敵と出合ひ、恒寂めは討漏しぬ。副將軍と仰がるゝ健宗を討取候。早々御歸洛遊ばせ」と、太刀に首を刺貫き、勇みにいさんで申しける。行平喜悦淺からず、「御劒返らせ給ふといひ、一方ならず浦島が、孝行の德慈悲の德、雛形が忠義の德、遍昭が和歌の德、松風の戀の德、とく〳〵都の門出に、先吉方の神參り」皆々徒歩にて乘物も、駕籠もつゝたり目出たいも、つッてとつたる西の宮、

嫉妬深き云々ー嫉妬深き女は去るべき一つなればと云ふ
はしたなきー不都合

斯と語れば行平卿、「今一曲所望して、見物せん」と出給ふ。司の前はつと驚き、「なふ行平様か我夫か」と、人目も恥ず縋付、涙に咽び給ひしが、行平とつて突退け、はつたと白眼み、「何の面目に面を合せ、夫よ良夫よとは推參ならずや。惣じて嫉妬深きは三女の一ツ、娶ることなかれといふ本文あり。斯く逆鱗を蒙り、一度び御劒を失ひしも何故ぞ。科なき松風を粗忽に妬み、大惡人の葎丸に告しこと、短慮といひ、はしたなき振舞、民の女に劣たり。行平一家が恥をさらし、天下に浮名を流せしも、皆をのれが一心の僻より起つたり。此松風はな、賤しき浦の蜑なれど、嫉妬を怺え、妹の村雨と、某夫婦になしたるゆゑ、鰐の口なる露命を助かり、殊に姉妹、夫を思ふ夢中の一念、龍宮に入て御劒を取り、只今歸洛することも、二人が蜑の厚恩ぞや。形は人間、心は鬼女。妻にてはなく敵なり。誰かある引出せ」と、切歯をなして宣へば、松風奥より駈出て、「なふ奥様お久しや。御恨みは道理なれども、御本妻を押除て、賤しき我等が勿體なや。只古への御情の、御恩をどふぞと附添ひし、念力通つて御劍を取り、此世の望み適ひし上は、行平様を奥様へ渡し參らせ、みづから姉妹一日も、生て居まいと言合せし、僞りならぬ其證據。サア村雨、日頃いふたは此處の事。合點か」村「合點じや」と、二人が肌より九寸五分、

獨樂。さて又夏に縒糸の、はづみ强しと夕立の、とう〳〵どろ〳〵舞ひ轟くは、空に知られぬ雷獨樂。蟬の鳴音や寒蟬獨樂。秋はさやけき金貝の、影を數へて一ト二夕三イ四ウ、十二十三十四十五十千鳥の、千は幾千二千里を、越す名月獨樂。番々を立分て、其勝負を爭ふも、秋の季を取る相撲獨樂。冬は冴えゆく時雨獨樂。音の荒きは霰獨樂。獨樂と心との共摺れは、からりん〳〵、かんらからとよ、豐の明りの神樂獨樂。しやんとすはつて音たてず、搖ぎもせぬは釋教の、觀念獨樂や座禪獨樂。無常の獨樂は早や消えて、あだしの獨樂とは名付たりけり。それより戀の山越て、ゆらり〳〵と搖めくは、歸る晨の通路獨樂。袖のうちなる引獨樂は、餘所に漏さぬ玉章獨樂。二ッ竝んで舞ふ獨樂の、ちよつと障て退たるは、人目忍んで接吻獨樂。心すはらずぶりしやりの、いぶりぶり獨樂そりやひぞり獨樂。又打合て口說獨樂。來ぬ夜積りの恨みては、突出され獨樂振られ獨樂。中むすぼれぬ縒糸の、今日も昨日も晩もくる〳〵明日の夜も、又くるり〳〵、くるりくる〳〵、廻し心の好い中は、枕竝べて床入獨樂。幾夜契りを重ね獨樂。車にめぐる盃獨樂。數を揃へて踊獨樂。手品は面々かはれども、舞ふと舞はぬは心の沙汰。戀にかたどる此獨樂の、其名限り知られず」と、語りてこそは廻しけれ。村雨は奧に入り、

金貝―獨樂の廻るを見れば金色の貝の如し

豐の明り―節會、禁中の酒宴

早消―すぐ止まる

ふりしやり―拗ねて怒る

いぶる―無理する

くる〳〵―來るにかく

字—不詳、俗音にて「あし」の略か

曲舞—曲藝

歌くどき—歌曲に合せて踊す事

追從—へつらひ

うねどり—蜿蜒と舞ふ

うぐるぐや〳〵—獨樂の歌

くるおあしならん」とありければ、司の前聞給ひ、「いや〳〵字にて候はず。獨樂と申して都には、上は雲井の君を始め、公家武家、町人色里の、色は素より山賤の、賤が伏屋の妹背まで、玩弄びの流行物。さて獨樂の威德には、久しう廻ふが手柄にて、或は曲舞ひ歌くどき、又一とまはしの其中に、一ィ二ゥ三ィと數よみて、何千舞といふ獨樂あり。御出家衆は一舞に、阿彌陀經を三遍讀み、俳諧師連歌師は、百句の間舞もあり。勤めの妓は長客の、一切半や二切は、物の見事にゆるりつと、床の濟むまで舞ふて居る、粋な獨樂もありと聞く。我らもさま〴〵ある中に、斧柄といふ獨樂を、宿の借たい追從に、廻してお目にかけん」とて、疊紙を押廣げ、総糸しごく手品よく、手玉も優に獨樂廻し、「これは優しきすさみや」と、四邊の男女旅人も、我も〳〵と集りて、立かゝつてぞ見物す。

當世獨樂盡し

司「先づ獨樂の種々は、歌書の部立をかたどりて、四季の獨樂を始めとし、神祇釋教戀無常。春の獨樂とは舞出しの、聲長閑かに響き出、彩り飾る花形は、宛がら梅の鶯獨樂。すはりもやらずうねどりて、うぐるぐや〳〵、うぐるぐつとも鳴たるは、苗代小田の蛙

長良川—乍らにかく
菅垣鹿踊—三味線の手
かいらう—鹿の鳴聲に偕老をかく
とけしなさ—弱る狀にいふ
出女—驛妓(俚言集覽)

にも併し長良川、ふかいに沈む尼が崎、はや大物の浦松や、遠山松の、松の響きか、ざゝんざ、ざんざらめけば、風の菅垣鹿踊、あれ妻戀の雄鹿雌鹿、さをしかが焦れ〳〵、御影の森に鳴く、其かいらうの聲までも、我身の契何時〳〵と、其果しなさとけしなさ、心の疲れ戀疲れ、旅の疲れに足立たず、宿を惠美壽の神垣や、西の宮にぞ三重着き給ふ。前の中納言行平卿は、松風村雨姉妹が、戀慕の夢の念力龍宮に通ひ、御劍不思議に返らせ給へば、馬よ輿よと出世の歸洛、急ぎて行くも秋の日の、影も傾く西の宮に、御宿をこそめされけれ。司の前は僧正遍昭。女と法師の相泊り、人の惡口姦しし、別に今宵は泊らんと、別れて宿をもとめしが、いたはしや司の前、行平とは知り給はず、本陣に立寄て、司「連もない一人旅。宿は貸さうといふ人あれど、皆生男の合宿。氣遣でなりませぬ。女子衆と一所に、どふぞ寢させて下さんせぬか」と仰せける。出女ども不審を立て、「よしありげにて供も連ず。お錢はあるか」と訊ひければ、司「金銀はちと用意あり。おあしとては持ねども、是非におあしとあるからは、これなりとも」と管にさし、綾錦にていろ〳〵に、飾りし錢をぞ出さるゝ。女子ども手に取て、「さても〳〵美しい。斯んな錢はついに見ぬ。お泊の女郎樣のお慰みに」と取囃す。折しも村雨立出て、「これは楊弓雙陸の、勝負にか

そぐはぬ—釣合はぬ

御達—女の尊稱、御女中方

夫婦塚—昔小野賴風の妻怨れて放生川に投身したれば夫も遂に身を投げたりと云ふ舊蹟（萬葉記）

埴生—いぶせき小屋

鶻—逸るにかく

氷山—郡山の事

朝もよひ—麻裳よしの意を朝に用ゐたり

神崎江口—名高き遊女町

世にまい〳〵と、何時まで一人舞ひくらす、身は憂きことの司の前。殿に退かれて此三歳、一本だちの木に竹や、そぐはぬ連も便りには、僧正遍昭伴ひて、志ざしゆく須磨の浦、明石縮のちり〳〵と、上る朝日の東山、北山松の嵐を聞けば、昔の秋の茸狩に、玉蕈初茸紅茸や、御達腰元女の童、夫婦見つけて嬉しさの、奪取勝の我袖に、殘る匂ひの松茸の、松としきかば歸り來んと、詠じ給ふも如何なれば、我が待宵にはつれなかるらん。西に傾く有明の、月の中なる名取川、其名木も紅葉して、落葉の筏さし下す、末は淀のや男山、麓に立る夫婦塚、其二道に賴風の、悋氣爭ひ理をもちて、霜に更たる女郎花、蘭も桔梗も苅取て、賤が埴生の冬籠、屋根葺く苫ふく秋の鴈、人やかけたる網の、繡眼鳥眉畫鳥鶫鵯、山雀小雀四十雀、また百舌鳥の鳥、音して君は反れて行く、氣が鶻の高槻や、同じ思ひの思ひにも、思はぬ人を思ふこそ、思ひの塵の芥川、向ふに高きは武士の、名に傳へたる甲山、高き心も忍ぶには、誰が忍びの緒結び初め、解にとかれね氷山、池田伊丹の朝もよひ、賤の山人打連て、さんさ露にしほるゝ眞柴採る、笹の小笹をかき分け〳〵、入るや箕面の山の奥、身の置處何處とも、さして定めん泊船、神崎過て音に聞く、此處ぞ江口の色湊、讀みすて見捨て口吟みすて、書捨て文の數〳〵の、中

渚―無にかく

難陀龍王―以下八大龍王の名

恆沙―印度の恆河の沙、多き譬

村雨と聞し云々―謠曲にある句にて爰は人に關せず

縋らんとするに便なく、取らんとすれども水玉の、湛りつべうは渚の千鳥、啼て妻呼ぶばかりなり。松「夫ゆゑならば命を捨ん」村「我も捨ん」何か恨みの有磯海、龍宮の中へと飛入て、七重の樓門、八重の築土、九重の壇にひらりと上り、安々利劍を取たりけり。海上俄に震動するは、八大龍の怒りかや。難陀龍王、跋難陀龍王、娑迦羅龍王、和修吉龍王、德叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王、恆沙の眷屬引連れ〳〵、冥火の潮を吹かけ〳〵、火焔の嵐さつ〳〵〳〵〳〵と、須磨の高波劇しき夜半の、夢に取たる劍の刄、渡るも深き戀の道。傳はる國の御寶の、お供申して歸る波の、須磨の浦かけて、吹や後の山嵐。關路の鷄も聲々に、夢もあとなく夜も明て、村雨と聞しも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん。

第四

司の前道行

出て行く我は京獨樂、彼の人の心の内は獨樂の心。つらや尖りてつまばらみ。安からぬ

磯鮑―鮑の片思の謎を含む

親を地獄と―親を地獄に墮す法もあれ熊野の神に誓ひし我詞に僞なし

實相無漏―煩惱を離れて菩提に入る

潮界―勝負の界ひ目

空背貝―貝殼

し月の桂こそ、浮名に立し戀男よ」村「實になふ忘れし。別るとも、待たば來んとの言の葉を」松「此方は忘れず松風の、立歸來ん玉章の、文の便を黄楊」の櫛、さし來る潮をかき分て、見れば月こそ波にあれ。松「底まで月のさしたるや」村「うれしやこれも月あり」月は一つ影は二つ。滿潮の、夜の枕に月を寢せて、憂とは思はぬ假寢かなや。片割れ月の片われも、廻り〳〵てまんまるに、逢ふ夜有磯の磯鮑、思ひつくより離れじと、任せたる此三熊野や、神といふ神證據にて、親を地獄と血に染し、筆の數〳〵文枕、引寄せ抱て囈語にも、忘れぬ中を死なば死ねとや。生て甲斐なきいきの松原、生き畜生恥知らず。恨めしや、實相無漏の大海に、五塵六慾の風は吹ねども、猶執心の戀慕の石の火、嫉妬の火燧、燃たち〳〵起請は烟。灰は霞か夕霧か。暗む眼にせきかくる、涙は潮袖も身も、浸すばかりの沖の石。松「彼の波の彼方にぞ、龍宮城はあるらめ」と、思ひさだめて飛入れば、村「後れじもの」と續いて入る、底には惡魚惡龍の、鰭を並べ腮を揃へし、鯨の餌食とならばなれ。今こそ一生一代の、互の戀の潮界ひ。さし來る潮には突流され、寄せ來る波には押流され、肌を劈く岩石巖。磯の藻屑は五體をからみ、上には海渡る空櫓の音、下は此世も忘れ貝、浦の鹽貝空背貝、刄を蹈むが如くにて、足寸々に切れわたり、

大海を手で堰く—車の叶はぬ謎
たく繩—たぐる繩にかく
あらくと—あらくとも
蜘手—繁き喩
海松—見るに掛く
ゆたのたゆたに—大にたゆたひて
須磨—爲るにかく
あら嬉しや—是より又謠曲の句をとる

ぎあへず泳ぎゆく。おろかなりとよ大海を、手で堰の戸の關守も、通ふ心はよもとめじと、手繰苦しき蜑のたく繩、蜑の呼聲蜑小舟、ぐれり〳〵とかはり行く、男心は頼みなや。波のたちゐるも何故ぞ。餘所に引く手の網はあらくと繁くとも、潜ればくゞる戀の蜘手も柵も、脱けつ潜りつ、焦れ烏の啼かぬ日は、あれども逢ぬ日とてなく、思ひ忘るゝ時もなく、三年は此處に須磨の浦、何時の間に誰がかいほして、我が逢瀬を飛鳥川、干潟となりし袖を見よ。袖濡るゝともかはくとも、我が一道は澪標、思ふ目的は違へじの、波をきつたる波の紋、巴に廻れば巴に追蒐け、車に廻れば車に慕ひ、引て留むる寢くたれ髪を、底の玉藻と海松め和布に身は纏はれて、解にとかれぬ涙の海の、ゆだのたゆたに漂ふ有樣。一つ迷ひの我が心の蜘蛛の巣に、我とかゝりし名も數ならぬ、身に及ばぬ此憂戀を、須磨のあまりに罪深し。夢を覺してたびたまへ。三瀬川絶ぬ涙の浮瀬にも、亂るゝ戀の淵はありけり。松「あら嬉しや。あれに行平樣のお立あるが、松風と召され候ふぞや。いで參ふ」村「淺ましや淺墓の、其心ゆゑにこそ。あれは磯邊の松に映りし月影よ。行平は御入もさふらはぬものを」松「うたての人の言ごとや。彼の月こそは行平よ。假へ少時は分るゝとも、まつとしきかば歸り來んと、つらね給ひし松が枝に、映り

かけまくー掛けと畏くもとかく
璫ー垂木の端
瓔珞ー玉の飾り
址ー甕
乾かぬー涙に乾かぬ
わけてーあけて
藻に栖む云々ー蝦に似たる小蟲をわれからといふ、古今集、蜑の刈る藻にすむ蟲の云々の歌による

紫雲の廻廊、霞に聳えし樓門に、天慶山宮、第二の門には梯仙皇宮、遙の奥の唐門には、大龍王宮といふ三つの額を、かけまくも轉輪王の都かや。心詞も及ばねば、筆にも繪にも寫されじ。水精輪の地をならし、七寶七重の玉垣に、金銀の壁をつけ、玳瑁の甍に四季の萬花を彫付て、琥珀の欄干瑪瑙の璫、瑠璃玻璃彩る扉を開き、硨磲の瓔珞眞珠の華鬘、玉の簾を捲上たり。紫磨黄金の大床に、美妙莊嚴の壇を構へ、日の御座の寶劍を、注連引廻し籠置しは、恭しくぞ見えにける。岩を疊みし岩倉には、潮滿珠汐干珠。紺瑠璃の址に青海波といふ文字を金泥に記せしが、「すは人界の蜑乙女、寶劍を奪はん爲龍宮城へ來るぞ」と、波の鼓を亂調して、址の蓋の開くと見えしが、俄に早潮涌出て、八方に滿渡れば、天地を動かす沖津波、海水を飜へし、雲を浸して夥し。見せばやな、幾夜逢での浦の蜑、しほたれぬ間も兩袖の、乾かぬは其も誰ゆゑぞや、辛きにも猶懲ずまの、姉と妹が悋氣の波の、底の利劍を取梶も、艪櫂も及ばぬ戀の海、押分けかき分け、わけて言れず語られず。藻に栖む蟲のわれからと、焦れあこがれ、思ひ餘りし蜑の逆手を現か夢か。たゆたふ波のうね〳〵に、浮つ沈んづ苦しみの、恨みの底は底もなし。あとより寄せ來る波頭に、漂ふ姿は村雨に、負じ劣らじ後れじと、浮洲の岩を飛下て、息つ

木の葉云々―要に木葉と思ふが波に變じ檐端が岸となり遂に大海に入る狀

晉子―常に白鶴に乘る昔の仙人

富貴草―牡丹

玉京云々―皆仙人の棲む所

龍神風流

夢路あやしき海原や、底の草木は引かへて、磯の玉藻と亂れ合ひ、木の葉は波と立騷ぐ、沖の鷗濱千鳥、檐端は岸と鳴尾潟、果は渺々漫々として、際もなく涯も知らぬ水底は、五色の波のたちまちに、龍宮世界となりにけり。瞰上れば、青天蒼々として白日空に輝き、又瞰下せば、麗水湛々として金の砂鮮かなり。山は金色巖は瑠璃、園には玉の梢を連ね、西王母が桃枳椇が梨、不老の櫻爛漫と、不死の柳を混雜て、錦をたゞむ木々の色、栴檀木や反魂樹、常磐の森の初紅葉、千代を血潮と染なして、葉がへぬ梧桐玉柏、三ツ葉四ツ葉に榮ふらん。孔雀鳳凰晉子が鶴、松と竹とに舞遊べば、比翼の鸚鵡迦陵頻、瑠璃の巴旦杏、琥珀の梅、珊瑚の葡萄を養りけり。花の八重菊富貴草、赤きは旭紫は、夕日に照て光さす、蝴蝶も綾の翼を揚て、甘露の露に眠るとや。山田に四季の穂に穂を出し、畑には一年三熟の、瓜茄子累々たり。玉京崑閬藐姑射の山、蓬萊宮とはこれなんめり。夏は涼風冬は暖風、さつ〳〵ゆう〳〵と吹渡り、峰の木枯、笙篳篥を奏すれば、谷の嵐は琵琶琴の、調べをなして明暮に、耳を悅び娛めり。宮殿樓閣建續き、虹の架橋

はためく―鳴響く

百錬―よく鍛錬する、要は烈しき形容

女人地獄云々―女人は地獄の使にて能く佛種を斷つ（唯識論）

嵐―あらじにかく

夢路云々―之より松風村雨が夢の中に龍宮に入りて寶劍を取返す話

て歸れ」と叫びしが、村雨の懐より、恚の焰爛々と顯れ出で「世にゆるされし我契り、かなふまじき」とはためき渡り、打ち合ふては二ツに別れ、又打寄せてはさつと散り、屋鳴震動夥し。爭ふ聲に行平卿、起上て見給へば、形は臥してありながら、姉妹嫉妬の恨みの魂、百錬の雷雲を破つて電光の虛空にさへぎる其猛勢、恐ろしなんども類ひなし。其時行平大音上げ、「エヽ淺ましゝ〳〵。女人地獄使能斷佛種。此世からなる地獄ぞや。假へ生々附添ふとも、行平が流人のうち夫婦には成難し。よしなき契を慕はんより、龍宮に分入りて、日の御座の御劍を奪返さば、其人こそ二世までの夫婦なれ。如何に如何に」と宣へば、松風が聲として、「チヽ我は素より蜑人の、夫の爲に捨ん命、露程も惜からじ。龍宮城に分入て、寶劍を取るべきぞや」村「いや村雨も蜑ぞかし。妾がそもや負くべきか。百尋入らば千尋入らん。千尋入らば八千尋入つて、御劍の所在を尋ぬべしや。尋ぬれば〳〵、隱れは嵐」の波にのりて、火焰は松風が聲を顯し、村雨が一念は、井戸の青波燃立ち〳〵、井筒は夢路の龍宮世界。天に群り地にわだかまりて、池水をかへして入りにけり。

ひんづる―干水の活用にて干上る意か、又は引取るの音便ならん

玉の盃云々―色好まざらん男は玉の巵の當なき心地ぞすべき（徒然草）

樣も小差出た。どうぞ差配の仕樣もあらう。たまたま逢ふた男を餓鬼の物をひんづる、小猿の頰を押すやうに、餘り出來ぬ御差配」と、口の内にてぶつくさと、身を捻寄てぞ恨みける。行平盃傾け、ずつと干て差し給ふ。垣の外にて松風は、夫の盃異女に飮することの、口惜や妬まし。手だに屆かば打毀さん。取て飮んと息を張り、拳を握る垣間見の、念力や通じけん。村雨いたゞく盃に、銚子の酒をかたぶけて、注げどもく雫さへ、湛らぬ玉の盃の、底の拔けたる如くなり。若し盃に疵ありやと、四邊を見れども溢れもせず。換て見んと盃を、取かえく注ぐ程に、銚子の酒は注ぎ干して、露にも濡れぬ盃は、干潟に照りし空背貝、現ともなき風情なり。松風は執着の、無明の酒に醉沈み、顏は入日の紅に、足もたよくよろくく。うんとばかりに蹾ひ臥し、前後も知らずぞ寢入ける。村雨身の毛も慄と立ち、「何とやらん空怖ろし。早や臥し給へ」といひければ、行「いざ」とて結ぶ手枕の、逢ふ嬉しさに恐ろしさ、打忘れて諸共に、とろりくと寢入らるゝ。既に更闌け凄じき、磯の小夜風鹽嵐、軒を穿つて松風の、袂をさつと吹開けば、胸の裡より一團の、心火たちまち燃出て、夫婦臥たる閨の上、四邊を照して燐たり。光の中に聲あつて、「アヽ腹立やく。姉の夫に枕を並べ、見苦しきぞ村雨。起

降る—振るにかく
行様—雪にかく
世の憂不祥—松風の不幸なる身の上を云ふ

着にけり。褄戸を叩けど音もせず。如何はせんと四邊なる、小石を搔寄せ手に溜て、座敷の檐へばら〳〵〳〵と、宛がら雨の如くなり。行平轉た眼を覺し、耳を澄して庭に下り、誰が音信の判じもの。こひしと知らする村雨と、解て明たる此褄戸。此方へ〳〵とありければ、村「雨には降ると聞くも嫌、根から消えたい行様」と、とんと手を懸け靠れ合ひ、閨の一間に入給ふ。世の憂き不祥憂き中は、鼻の先なる我夫を、いつ松風の名を卿ち、身を卿ちても詮方なく、せめての事の念晴し、夜な〳〵門に立忍ぶ、心の中こそせつなけれ。斯とも知らで村雨は、今宵の霜夜勇めん爲、汐汲む體にもてなし、村「これこれ斯うしたふりなり」と、桶の中より樽盃、肴とり〴〵取出せば、行「誠に上なき心ざし、何時の世にかは忘るべき。とても御身と某は、長ふは添はれぬ中なるに、かゝる情は如何なる緣。此恩は報じ盡されず」と、しみ〴〵と宣へば、村「ゑゝ氣の滅ることいはしやんすな。御世に出させ給ひては、松風樣の殿御なり。弟子樣の御差配で、今の間は我らと夫婦。男に勤める奉公を、恩に被ることかいの。燗の好いうち先づ一つ」と、氣輕にこそは笑ひけれ。垣の外にて松風は、「ヲヽ〳〵それや又言やるが愚であろ。今の内こそ貸ておけ。やんがて此方へ取返す。借物は大事ぢや。疵が付たら聞はせぬ。エヽ業平

在原—有にかく

鹽汲車—鹽汲みたる桶を載する車、之より謠曲松風にある句

僅なる—輪にかく

關吹越ゆる—旅人の袂涼しく成にけり關吹越ゆる須磨の浦風、續古今集、行平

片荷づり—我戀の重き故に云ふ

て奈落に墜ち、諸神諸佛の知見の矢、只今頭に落來るか。許させ給へと心中に禮拜し、涙を包む涙の色。松風は怺えかねわつとばかりに聲を上げ、五體を擧て泣きければ、村雨は行平を抱起し撫摩り、聲も惜まぬ人々の、歎きの體こそ哀れなり。鬼畜に劣る健宗も、疑ひや晴れたりけん。健「ム、此上は行平にてはなかりしな。去ながら念の爲、いかに鹽谷のあさうやある。事の實否を糺すまで、汝に屹と預け置く。をのれが下女の村雨と夫婦と聞く。若し松風に通じなば、行平に極つたり。心をつけて注進せよ。罷立て」といひければ、松風は詮方なく、「言へば夫の命のかい。言ねば夫を妹に取らるゝか。淺ましや」と、又繰返す涙の糸、亂るゝ體をさま〴〵に、宥め給ひし業平の、辯舌といひ謀、實に花も實も在原の、優し男の情には、鬼も柔らぐ實男。口健宗も打解て、旅宿に引くや「三重鹽汲車、僅なる浮世に廻るはかなさよ。心盡しの松風に、海は少し遠けれども、關吹越ゆると眺め給ふ、浦曲の波の夜々は、實に音近き蜑の家、里離れたる通路の、月より外は友もなし。友も親子も同胞も、一つに寄て團めても、殿御一人の愛しさと、擔ひ比べし鹽桶の、片荷づりなる我思ひ、鹽燒衣引換て、人戀衣濡衣、ころも違へず宵々は、泊りに來るつま烏、かはい〳〵の念からや、夜の道さへ怖からず、そともの戸口に

古い格—辨慶勧進帳の語をとりたればなり

浅沓—漆塗の桐の上履

影をも云々—師の陰は三尺の諺による

よしなき所へ徘徊し、兄弟の名を下す。エヽ腹だたし」と弓押取り、丁々と打給へど、健宗更に承引せず、「これ中將殿、弟の身にて兄を打つは左のみ手柄にもならぬ事。古い格をなされな」と、心を許す氣色はなし。業平此處ぞ大事の場。猶も陳じて見んと思ひ「これ健宗殿、口惜き事を承る。彼奴誠の行平に極らば、陳ずるまでもなし。我も近衛の武官をかけ、弓箭を帯するからは、御邊が只中、鏑矢一つ射かけ、奪ひ取んに何事かあるべき。其上弟の身には、兄を打つなどとは如何に。假へ命を助かるとて、兄を打ては助けても本望ならず。弟に打れては助かつても一世の恥辱。重ねて御邊が口留に、兄にあらざる證據を見せん」と、情なげに行平の、髻を取て引伏せ、履たる浅沓砕けてのけと、腰の番をさん〴〵に、踏付給ふ心の中、遣る方もなく哀れなり。業「我ばかりは誠しからず。これ〳〵松風、夫でない證據の爲、踏めや〳〵」と宣へば、松風わつと仰天し、途方に暮しをはつたと睨み、業「業平行平兄弟が一代一度の大事。狼狽るか」と怒り給へば、泣く〳〵も足を上は上たれども、夫は神にも譬しものを、如何なる過去の因果ぞと、思へば足も顫はれて、一足踏では「許して下され」二足踏では「御免あれ」と、聲をかくして泣叫ぶ。業平は又位といひ、影をも蹈ぬ兄親を、沓にかけたる此冥罰、大地も裂

いふにこそ―いふにはあらずと反語に用ふ
形見こそ―古今集にある歌

つておはします。「はつ」と心は騷げども、左あらぬ體にて莞爾と笑ひ、業「ムヽ此者を行平とは、そも誰が見知たるか」と宣へば、村雨進み出、「これは妾が夫なるを、姉にて候ふ松風狂亂いたし、行平樣と呼しゆゑ、斯樣に捕はれ候を、詫言なされ下されかし」と、泪ぐみてぞ申しける。業平千々に思案を碎き、「さては音に聞く松風とはおことが事か。夫を慕ふて狂氣となるはならひなれども、有繫賤しき蜑のしるし。夫の面を忘れつる、淺しさよ墓なさよ。狂氣の上の狂氣ぞや」と、恥しめ教へ給ひければ、松風兎角の返事もせず、暫し涙にくれけるが、松「狂人とてな笑ひ給ひぞ。筋なき事をいふにこそ。顏も形も行平樣に、餘り能く似たるゆゑ、形見と思ひ慰みしものを、形見こそ今はあだなれこれなくば、忘るゝひまもありなんものを。あゝら戀しの行平樣や」と、敵を見る目は空淚、夫を見る目は誠の淚。其二筋を一筋に、平伏し焦れ泣居たり。業平御覽じ「これ健宗殿、狂女の詞用るもひが〳〵し。彼奴助け返されよ」と、いへども健宗合點せず、「助けるも助けぬも某が胸中。面々の役の外要らぬお構ひ。それ引け」と、苦々數言切たり。中將騷がず「道理々々。憎きは此下郞め。狂女にいはされ、我こそは行平といふ顏色の見苦しさよ。兒行平は、忝も平城天皇の孫王正三位の中納言。をのれ如きに似るべき歟。

くなる事（說法明眼論）

そんなもの—人目ある故いふ

新しい—珍々し

れども、構ひなくば夫婦になり、互の面倒見る樣にはなるまい事か」とありければ、行平は何をがな暫しの寄邊を願ふ折に幸ひと、行「始よりのお心ざしに、ほだしを打れ候ぞや。殊に我等に障もなし。二世かけし女房ぞや」村「未來までの我殿」と、見初め言初め紅染の、赤前垂の褄結び、竹「とてもの事に奥座敷へ、通りたい」とぞ引被ぐ、裾もほらく〳〵しどけなし。門の影より松風は、それと見るより走出、「なふ行平樣か」と取付く處を、行「アヽ姦しい。そんな者では御座らぬ」と、逃て行くを引留めて、松「あれは妾が妹の村雨といふ者。はてさて大事ないはいの」と、縋付ども振切て、行「出方に無ふても此方には大事がある」と、又駈出るを村雨は、「これ姉樣、これはわしが只た今、夫婦の契約した男。粗相なことをいふまい」と、抱きついてぞ留めける。松「ヤアこれは新らしい。此憂苦勞は何故ぞ。廻り逢ふ爲ばつかり。一寸も放さぬぞ。サア此方へ」と引立る。村「何のどこへ放さう」と、引合引留競合し、二人の心ぞ道理なる。健宗が郎黨此聲を聞付、「アレ行平よ」と注進す。「それ餘すな」と健宗は大勢打連れどつと出、眞中に押取籠め、二人の女を取て突除け、敵なくも行平の、諸手を取て捻伏しは、妻戀ひ雉子音を啼て、鷲の摑し如くなり。業平斯と聞も敢ず、走出て見給へば、案の如く行平卿、擒とな

宿札―之にて健宗の居るを知る
まで―例の助辭
先達て―前に死んで
ものごし―言葉つき
一樹の蔭―ふとした事より睦じ

もない者がある。ちよつと置て下されよ」と、手を措てことはれども、下人「いかな／＼此うちはお公家衆のお泊。行衛も知らぬ旅人が、腰懸ることもならぬ」といふ。行平は涙ぐみ、「然らば是非に及ばぬ事。殊の外息切れたが、何と茶でも湯でも所望したい」とありければ、下人「いや／＼火の吟味が強ふて、飲する事はかなはぬ」と、猶胴慾にいふ處へ、内より村雨斯と聞き、村「旅の人ならいとしげに、これ茶一ッ」とすゝめける。行平茶碗を取もせず、宿札をちらりと見て、「南無三寶」と村雨が、前垂上て顔さし入る。村「アアこれ此處な人はいの。近頃聊爾千萬な。女子の裾へあられもない。出て往きやらねば打ぞや。しや眞にをかしい」と引出せども、行「アヽ申し／＼。全く卒爾に候はず。いかふ人を忍ぶもの。お家を見かけて駈込ました」と、兩脚にしつかと抱付く。村雨ときめきて、「いかさま見かけが上方衆。憎からぬ風俗。殊に見かけて頼むとあるを、引れはいたさじ。去ながら、お連はないか一人身か。此處の處が聞たいまで」行「ヲヽいかにも能い御念。連は女一人、はやそれは先達て、これ此處の植込の、松原に屈んで居られまする」とて、猶身を添て抱しむる。村雨の心のおさめ、姿ものごし業平樣に、微塵ほども違ひなし。及ばぬ人より此人を、近道にと分別すえ、村「一樹の蔭のふりがかり、ほんに粗相な事な

ける程に—戀が深くなりける程にの略

藥飲む—男を持つ譬

昔の情云々—行平の身の上を說く

隣—柴屋

や知る人ではなけれども、これは人に隱す事、兄御の行平樣と此我らと、鳥渡したもやもやが互に深ふなつて來て、上る程にけるほどに、まんまと京まで上りつめて、散々首尾が違ふて、又それから、下る程にけるほどに、飯焚迄に成下つた。弟御程はあるまいが、行平樣のお藥も、呑では口が放されぬ。甘い事じや」といひければ、村雨聞もあへず、「行平とやらいふ公家樣と、名の立ちし人ならば、さては松風樣かいの」松「ヲヽ我が本名は松風なるが、和女は誰ぞ」村「なふ自こそ、少さい時明石へ養子に參りたる妹の薄雲ぞや」松「さては身は薄雲か。二人の親の形見ぞ」と、縋付ば村雨は、「誠の親は覺えもせず。親にも姉にも松風樣、何とてか今までは、尋ねも訪ひもしたまはぬ。お懷しや」とばかりにて、嬉し泣にぞ泣にける。松風も悅びて、松「一期に逢はぬ姉妹に、廻り逢ふも互ひの力。去ながら、構へて藥など飲やるな。姉も餘り呑過して、藥惱みで此仕合」と、打笑へば村雨も、差合言し恥しさ。顏に火を焚く臺處、「忙しや」とて入にけり。

昔の情忍ぶ草、忘れぬ須磨に零漂來て、見れば數多の都人。氣も魂も消ゆるばかりに行平は、鹽屋が門へ走入る。業平の御内衆、「何者じや慮外な」と、追出せば隣りの門、「御免」といふて駈込むを、健宗が下人ども、杖棒持て追出す。行「眞平々々、些との間、逢と

んの糸瓜の皮も身も、痩る程な戀ならば、ずんとする氣ぢや男の目利、教へてたも」と姉妹、知らで語るも緣ならん。松「エイ何いやる。それに師匠が入るものか。されども先は男振、それが好いとて一心の下り坂、石車に乘て仇惚するは、男の屑の葛餅、皆一口は食ふけれど、あとから剝る生壁の、釘ごたへせぬ戀ぞかし。心が粹で、殿好うて、寢た譯よしの三ツ拍子、それは鬼に鐵棒の、鐵で作つた身なりとも、逢ふ夜繁いは病者になる。そこらの懸引味やつて、心砕かず氣を研く、此碓の臼と杵、陰陽和合の濡のお師匠、二人が中の挨拶は、撓歪みない鉉懸の、桝で量る戀路でも、心で惚たは氣の毒な。只戀しいが因果骨、沁渡る」とぞ笑ひける。村「あれ業平樣のお出ぞや」松「鳥渡覗いて目を肥さう」と、二人が肩に手を打かけ、門を見入て、松「好いぞや」村「イヤ好いといふ段ではない」松「去ながら如何にしても冠がかたい。しやんと取らせて月額が、剃せて見たいじやないかいの」松「いや〳〵何があれがかたからう。此方に大事の書物がある。其繪を見れば冠着て、裸體になつた公家樣が、書てある」とぞ私語ける。松「いやまだ器用なお人で、醫者心もあるかして、業平袖の下といふ手合の萬病圓、殊に女子に能ふ利くげな。一服貰ふてやらうか」といへば、村「ムヽさては和女は、業平樣と近付か」松「い

ずんと云々—たんと戀をする氣
下り坂—男に實なくして見劣りする譬
壁に釘—豆腐に鎹の諺に同じ
撓歪—不平均
二人が肩—二人が互に肩に手をかく

得もの―得手

臼になりたや云云―當時の流行唄、之より兩宿に下女となれる松風村雨の身の上を說く、米に妓、俵に舂くをかく

三俵―俵の蓋

あつたら―有と可惜とかく

尤御尤。我々は天上にて初冠し、終に下態の業を知らず。御邊は昨今の公家まじり、今まで下部育ちなれば、科人の繩取、搦め縛りに得ものならん。兎も角も」と苦口の、鹽屋が邸に入り給ふ。健宗は中將を烟たさうなる眼付、睨みふすべる柴屋が門、旅宿々々に

三重 別れける。唄「臼になりたやよやよやよ、臺碓に。米とうなづき逢ふものをとよへ。いよあはふものを」米とうなづき招きあひ、隣同士に此季から、置れし露や下女子、彼方の仕事もしてやれば、此方のも亦手傳ふて、漏さぬ底の心まで、とんと開たる三俵、これ公家様の御膳米、踏むとは罰があたろかも。いざ白搗や白き肌、骨柔かにうら若き、足を竝べてあしたゆく、唄「あふてならずば、思ひもきろが、文もやられぬ中は憂や」うしとないひそ色に染む、其唐錦碓の、男柱も妬し。松「なふ村雨や、其方にお宿召されしは、業平様とて御嫖致よしの殿ぢやげな。此方の客は、名から怖い健宗、根性惡さうな顔付、膳立するも手が痿へる。和女はほんに果報ぢやや。好い男の飯焚やる。あやかりものや」と羨みける。村「ヲヽさればいの。お松聞きや。我も生れは須磨の者、赤兒の時から明石へ養子に往たれども、二人の養ひ親に離れ、姉様もありと聞く。今此須磨へ歸りしが、何のをかしい事もなし。聞けば和女は京へも上り、深ひ戀もあつたら月日、な

銀筈云々—矢の筈を銀にて作り鷲の羽にてはぐ（和訓栞）

陰陽の神—戀の神

麗はし—麗にてゆきわたる事

闕官—官をやめらる

上の袴は着し給はず、金色の奴袴裾を曳て、銀筈の眞羽の矢負ひ、蒔繪の弓を持れたる、宿直姿に弓箭は、例し稀なる扮裝を、直衣布袴と知る人ぞ、知られて末の世々までも、ゑに書寫す陰陽の、神といはれし器量なり。伴の大弼健宗も別勅を蒙り、相伴ふて下向せしが、兼て寄宿の鹽屋のあさう、柴屋の輿次御迎に罷出、御宿冥加にかなへる條、頭を地につけ言上す。業平仰せけるは、「目出度き君がいさをしの、草木までも麗はしく、今年大内の御籬の松に花咲て、三千年の色をあらはし、上下悅びの思ひを爲す所に、又此處の一木の松に、花咲くよし叡聞に及ぶ。夫れ堯舜は命を天に享け、松柏は命を地にうくる。國に松あること人に堯舜あるが如しと、古き書に見えたり。されば賢王の砌には、松にも花の咲くべき事。此須磨の浦曲に帝王も在さず、松に花の咲きけるは、此波の底は龍宮にして、龍王のみぎり疑ひなし。兄行平卿思はずも、龍宮へ御劍をとられ、闕官の身となり給ふ。斯る折から、寶劍を取返す便もと、望みて下る御使ひぞ。思ひ寄ることあらば、方々賴む」と宣へば、伴の健宗突と出、「某は又行平を尋出して搦めよとの、院の廳の下し文を承つて向ふたり。汝等も存じながら、隱し置ば曲事ならん。コレ業平殿、見知ごしとな思されそ。綸言なれば見遁しには成り申さぬ」と、武骨にいへば中將も、「御

有磯海—有りにかく
松風—待つにかく

昔男ありけり—伊勢物語の書ぶりを眞似たり
おほやけ—朝廷
やぶしわかざる—藪陰をも分ず照す恵、古今集日の光やぶしわかねば云々の歌をとれり

子の倖丸、宙に摑んで曳やつと差上、大地にかつぱと打付くれば、微塵になつてぞ失せにける。猶も寄來る雜兵の、手元に寄るを取て投げ、邊りへ來るを踏散し、大手を廣げ此處彼處、八方無隅に追廻す。此猛勢に恐れをなし、嵐の木の葉群雀、むら〳〵ぱつとぞ逃げ散りけり。立ち歸つて一息つぎ、手負の看病、庄司が回向、心遣ひに身も疲れ、手を引れたる浦島が、七世の孫に愛敬の、有磯海より猶深き、龍女が戀の誠の玉、思ひの玉、奇緣の玉、通ふ心の玉手箱、二人の心かはらずも、末の契りを松風と、慰め須磨へぞ送りける。

第三

昔男ありけり。おほやけおぼしてつかふ給ふ。同胞多き其中に、左近衛の中將業平の朝臣となまめかし。仁明天皇の御字かとよ。須磨の一木の松が枝に、五色の花咲出しと奏問す。やぶしわかざるめぐみのしるし、見て參れとの勅をうけ、かりにいにける裝束は、常に一際こゆるぎの、老繫したる冠に、重ねの袖も紅の、花田の直衣太刀平緒、

子よりも孫云々―孫を愛する念切なる諺

三しめなは―御注連にかく

姿も衰へて、身は百年の老木の柳、風に縮める古木の力も、折れて敢なく下になりてけり。由良太も今は堪られず、「微塵になさん」と討てかゝれば、葎「かなはじ」と表をさしてさつと退く。立歸つて引起し、由「こは抑も如何なる事やらん」と、呆れ果たるばかりなり。其時翁泪を流し、「今は何をか包むべき。おこと等が遠つ祖、昔の浦島太郎とは、此翁にてありけるぞや。三百餘年の齡を經て、玄孫鶴の彥を見る。子よりも孫はいとほしければ、猶其彥の孫までも、次第々々に可愛さが、彌增るぞや、いとしいぞや。龍宮の神通にて、八千歲の壽命を封じ與へられしを、汝等に轉じかゑて授けんと、深く包みし甲斐もなく、明て悔しき玉手箱、我さへ年も傾きて、孫子に添ふべき間もなし。暫しなりとも抱かん」と、庄司を膝に抱寄すれば、早や息斷て身も冷たり。浦「南無三寶淺ましや。逢ふも別れも一時かや。今一度爺かと呼べ。先立つ我は留まりて、孫の孫なる其孫の、死目を見るは何事」と、聲も惜まず泣きければ、由良太夫婦、松風も、共に平伏し泣叫び、少時正氣を失へり。葎丸は新手を召具し、又引返し、喚き叫んで切入たり。浦「ヤアをのれ孫の敵。浦島太郎が老耄の瘦力、試よ」と無手と取てしつかと組、「八大龍神、大海神、力を加へたび給へ」と、一しめ、二しめ、三しめなは、神力にや通じけん、大の男

箝る—欺かる

白丁—木綿の白張を着る仕丁

南蠻流—今いふ外科術

さしつたり—オイ合點

擾々—亂るゝ貌

討取て奉らんと慥に勅答申しながら、助くるは何事ぞ。早く松風が首討て捧ぐべし」と、大音上て怒らるゝ。松風今は覺悟を極め、「人に歎きをかけんより、我命を捐んには」と、旣に出んとしたまひしが、勅使の顔を屹度見て、松「なふ彼こそは僞りもの。行平樣の小舅三位葎丸といふ大惡人。必ず孰れも箝るまい」と、いふを聞て葎丸、「それ松風よ。搦め取れ」「遁すまじ」と白丁ども、一度にどつと込み入りたり。浦島「得たり餘さじ」と、込み入る仕丁片端より、取ては投げ〳〵、葎丸に突支ゑ、浦「これお公家樣、我等は庄司が下人ながら、行平爲にも下人分、何方らへも附く内股膏藥。此膏藥で手負は癒らず。南蠻流に人の脂。うぬめは脂がありさうな。刀目入て括し上げ、脂搾つて搾粕の、粕公家にしてくれん」と、左足を蹈で打てかゝる。葎丸は强力者、太刀を弓手に受流し、すりちがひにしつかと抱く。浦「さしつたり」と無手と組み、半時ばかりぞ捻合ける。「由良太はなきか。あれ防げ」と、呼はる父が今はの疵、妻の深手を見捨かね、心を配るぞ道理なる。葎丸は組ながら亂れ入りて、「松風を搦めよ」と下知すれば、此處彼處と馳廻り、瀬見の九郎といふ郞等、玉手箱を見出して、「さて結構なり美しゝ」と、封捻斷て蓋明れば、不思議や紫雲擾々と、棚引出でて浦島が、上に置たる眉の霜、頭の雪の白髪と、忽ち

捨て走り寄れば、下人共、提灯燈火晝の如く、周章ふためくばかりなり。由良太大きに驚き、「さては此下郎奴が所爲よな。樣子は知らねど主殺し、親の敵に極つたり。討て捨ん」と飛蒐れば、今はの庄司、「やれ待て由良太はやまるな。我勅諚にしたがひ、家の願を破り、人を害ふ先祖の罰、必ず人ばし恨むるな。孝行ならば留めを刺し、早く殺せ」とばかりにて、世に苦氣に見えにける。女房も息の下、「舅君にも我夫にも、難をかけじと思ふより、松風どのを落さん爲め、是まで忍び參りしが、誠の松風討れ給はば、夫の武道の瑕瑾のみか、舅君の浮名も立つ。取違へて自が殺されしは家の幸ひ、露恨みとは存ぜぬぞや。殺して苦痛をやめてたべ。なふ由良太殿、可愛ゆくば殺してたべ」と、涙も息も絶々に、目も當られぬ風情なり。浦島も涙を流し、「某は行平卿の御厚恩の者なるゆゑ、命の親の主君をあやめ、天道助け給ふべきか。申す事も候へども、言ふ程因果を晒すに似たり。はや〱首を召されよ」と、思ひ切たる其氣色。由良太も今はあぐみはて、親を討つは下人なり、我妻を殺すは一人の親、敵と味方を分きかねて、前後にくれてぞ見えにける。此事近邊にかくれなく、與謝の社に逗留ありし、「勅使山路の右中辨、御入りなり」と、いふより早く突と通り、「いかに庄司、行平一家に於ては助くる事能はず、

篠竹云々―篠に忍ばれず、不思議に節をかく

とめき―衣にたきこめたる香

なはらば松風の、敢なく討れ給はんかと、跡引戻すぬき足に、二人の側を摩違ふ、心は揉る身は顫ふ、胸もさはつく小笹原、足に疵あるたゞずまひ、壁に縋りて息をつく。案の如く由良太眼覺し、「女房の臥床になきは心得ず。新參の和田松が宵の面相物ありげなり。見居けて首二つ、竝べんものを」と寢亂髮、枕の刀押取て、有明しめし出ければ、一間々々の戸は明いたり。「さてこそ」と夕闇に、迷ふ四人の息づかひ、忍ぶとすれど篠竹の、不思議と思ふ顏相も、互ひにそれと知らばこそ。由良太は次へそつと出、戸口に支え待伏たり。何とかしけん由良太が妻、袖のとめきの薫をば、庄司が鼻にきゝ咎め、「これぞ松風。氣取て逃る合點ぢや。落しは立てじ」と太刀拔そばめ、衣の薫を聞もらさじと、香をもとめてぞ引添行く。浦島は二人が追風そよと聞き、「すはや」と耳を欹て、取逃さじと慕ひ行く。それぞと知るを最後にて、只一討の勝負なる、心の刄鋭くも、危くも亦哀れなり。無慘や女房、跡より庄司が慕ふも知らず、松風の臥し給ふ、枕にそつと立ち寄る處を、庄「これ松風ぞ」と打頷き、引寄せて胸元を、一刀にぞ刺いたりける。刺されてうんと喚く聲。先越されしと浦島は、庄司が髻を押取て、膽先をぐつと差徹す。庄司騷がず、「狼藉あり出合やつ」と呼はれば、由良太は父が聲と聞き、「火を出せ」と言

子の刻—寢にかく
七十路—無にかく
白杉戸云々—白に知らず、庄司に障子をかく
悪な事—開くにかく

せう。いや〱いふては親子の間を割く。舅君に意見をせうか。いや彼の年まで我を立詰め、言ひ出いて戻さぬ人、よも承引はし給ふまじ。夫にや知らせん、舅をや宥めん。兎やせん角や」と女子氣の、了簡更に定らず。「ムヽ思付たり。松風に密に語り、何方へも落すべし。時には夫の一分立ち、舅にも難つかず」と、思ひ定めて女房は、更るを待つも長き夜の、鐘も聞ゑて人もはや、子の刻半ばになりにけり。庄司は素より古兵、勅命を蒙つて、かほどの事を仕損ぜば、何面目も七十路に、生過たりや此命、官位を賜り子孫の名も、雲井に揚れひばり骨、痩たる膝節高褰げ、鉢巻しめて屈んだる、腰も勇める心より、ぐつと反たる長刀、我宿なれど忍ぶには、心も暗き奥座敷、老の足元わなわなと、薄氷を踏む心地して、身を縮めたるばかりなり。浦島太郎は現在の、六世七世の孫子なり、今は主なり命の親、一方ならぬ恩愛も振捨て、庄司を害し、松風を助けんと、思ひつめたる鞘口も、抜かけてさす一本刀、奥の勝手は白杉戸、庄司が傍に突立て、鼻息をさめさし足の、ふくむ心は敵と敵、知らぬ闇こそ危けれ。山良太が女房、夫の寢入を待受け、添寢の床をそろりと脱け、松風を落さんと、是れも一間に忍びしが、思へば女の大膽な。夜半に男の閨の戸の、悪な事かと疑はれ、何と言譯あら恐ろしや。又遲

> 後詰―あとおし
> 風くはる―様子を知って逃げらる

太も道ある男子なり。親の詞を立んとて、よも松風は殺させじ。此庄司めも七十まで、一生人に嘘つかねば、人の嘘も聞て居ず。我子の義理があればとて、彼の松風を助け、一天の君を僞つては、子々孫々の瑕瑾なり。今宵由良太が目を忍び、松風を討取るぞや。汝庄司が恩を思はば、もし由良太が聞付け出逢ふ時、命を惜むな防ぎ討て。此事頼むばかりなり。親は殺す、子は助くる、道は二筋立たれども、親子の心の隔たるは、家滅亡の運の極め。七代まで續きし家を、此時に滅す事の口惜や」と、返らぬ老の繰言に、不覺の涙せきあへず。和田松も涙に咽び、さては彼等は我爲の、六世七世の孫子かや。我ぞ先祖浦島と、名乗らんと思ひしが、いや〳〵松風討んといふ者に語ては、行平卿の厚恩は報じがたし。所詮此庄司を某が手にかけ、松風を助けんと、一圖に思案極めしが、思ひの色を悟られじと、和「義理にせまつたお詞、拙者も涙を流して候。御心やすく思召せ。いづれもお主と申しながら、親旦那にはかへられず。松風をお討なされ。後詰は私」と、誠しやかに申ける。庄「オヽ左様なふては〳〵。宵の中に酒呑で、風くはるゝな、覺られな。しづまれ〳〵往て休め」和「お休みなされ」と首肯き合ひ、奧口へこそ入りにけれ。由良太が女房立聞し、「南無三寳、松風を殺させては、助けた夫の一分立たず。此事早ふ知ら

こいよ—濃いと來いよとかく

ひんず—干水の義（俚訓栞）

てぞ休みける。浦島太郎は庄司の情に命を繼ぎ、名を和田松と名乘り、足手惜まぬ奉公に、主も一入目をかけて、暮に及べば煎じ茶の、こいよこいよと呼れねど、たてて庄司に羞めける。庄司顏を打戍り、「こりや和田松、庄司が身の上一大事出來せり。なんと賴まれてくれふか」といふ。和「口惜い御意を承はる。拙者は一度死ぬべき身。御情にて今迄存命たるがひんずの命。何處に由緣かゝりもなし。一命を投出しての御奉公、何に違背の候べき」と、誠を盡して答へける。庄「オヽ滿足せり〳〵。左あらば語つて聞せふ。能く聞け。そも我先祖は當國水の江の浦島太郎。三百年以前の事」と語りも敢ぬに、和田松ぎよつとせしが押默止、「さては我が孫彥の其末の子にてありしよ」と、心も濁る水の江の「浦島殿の御子孫か」と、餘所に言なす昔人、此處にありとは知らずして、詳しく語る墓なさよ。庄「先祖浦島慈悲心深く、龜を助けて龍宮の蓬萊山に入り給ふ。其子其孫彥玄孫、某は六代の鶴の孫、一子由良太は浦島の、七世の孫といふものよ。世々放生の願あつて、さてこそおことも助けたれ。然るに其方も知る如く、一天の帝の勅諚を蒙り、行平一家は助けまじ、目にさへかゝらば討とめて、叡慮を安んじ申さんと、白髮をいたゞく此庄司が、勅答を申せし處に、倅由良太が松風を助け、此處に圍置く。由良

代々終に願を破らず。助けぬ事は候はず。去りながら勅諚の趣なれば行平は逆心者、朝敵とや申さん、謀反人とや申べき。殊に先達て、重き宣旨を蒙る上は、某こそ年寄たれ、倅由良太と申す者、私用ありて攝州へ罷上り候。只今にも歸り候はば、行平が縁由一人なりとも討とめさせ、宸襟を安め奉らん」とぞ申しける。勅使悦び斜ならず、「オヽ其義ならば親子心を合せ、一人なりとも討ちとめなば、官位に申し進むべし。我は當所與謝の社に一宿し、明日歸京すべきぞ」と、立出たまへば門外まで、送りてこそは別れけれ。かくとは知らで子息の由良太、攝州より立歸る。庄司も嫁も出迎へば、若き女の色深きを駕籠より下し、由「先以て留守の中御堅固にて悦ばし。さて此女中は在原の行平卿の思ひ人、松風と申す御方なるが、行平人の讒によつて帝都を開き、妻子方まで散々の有様。敵追詰め危き折に行かゝり、少々働き、漸々と助け參らせたり。それ女房奥へ伴ひ、慰め申せ」といひければ、松「誠に不思議の御事、良人様の御庇にて、難を遁れしばかりかは、いかいお世話になります」と、挨拶あれば女房は、「ハア何のお辭儀の入ませう。野でも山でも女子の身は、我人辛苦の多い物。先づおぐしでも梳しやんせ。鐵漿でも召しませい。御用の事は私へ。いざ先づ奥へ」と馳走する。由良太も父には暇乞ひ、勝手へ立

伸―陳べにかく

天氣―勅命

刑部省―訴を正し罪を行ふ官

の願破れず。悦び入たる心ざし、乏少ながら御酒一ッ」と、其身は老の徒步跣足、嫁に引るゝ手の皺も、伸てぞかへる禮義の程、頼もしかりける 三重 宿も身も、萬年榮ゆる龜彦の、庄司と國にかくれなし。斯る處へ都より、「山路の右中辨、勅使として御入」と、高らかにぞ呼はりける。遠國者の下部共、甲「勅使とは何事ぞ」、乙「内裏樣の御使よ。門掃け庭の塵取れ」と、上を下へとかへしける。庄司袴肩衣あらため、上段に迎へ奉る。勅使笏取直し、「天氣の趣餘の儀にあらず。そも〳〵汝代々仁道を尊み、物の命を助くる大願怠らぬ由、感じ思召され畢んぬ。然るに今度中納言在原の行平、御誕生の若宮を害し參らせ、あらぬ下劣の子をもつて若宮に取かへ、上を欺く私の至り。剰へ松風といふ賤しき蜑の色に溺れ、日の御座の御劍を失ひ、罪科重疊によつて勅勘を受け、京都を立ち去り行方知れず。是によつて刑部の省に下知を爲し、行平が類屬見合次第に討ち捨てとの仰なり。汝其期に出合ふて、必ず助勤はるべからず。若も家の願なるとて、助けだてして違勅に及ばば、同罪たらんとの宣下なり」とぞ述べ給ふ。庄司謹んで承り、「誠に邊土に生れたる此爺めが、勅宣を承ること、長命したる甲斐ありて、子孫までの面目、申上るに詞なし。然るに我等が先祖より、生ある者の死に及ぶを、見捨ず助くる願を起し、

事ながら、乗物には妾が舅、病本服の御禮參り。又ちと願ひも候へば、見過しがたき樣子なり。返禮は何なりとも、身の祈禱とも思召、其人助け下されかし」と、手を摺り貰ひかけらるゝ。田夫ども聞も入れず、「盗人助けて何の慈悲。構ふな退け」と引立行く。「乘物立ていく／＼」とて、七十餘りの老人、「ヤア／＼これ在所の衆、盗人か人殺しか、科なふては搦めはせじ。去ながら某は、當國與謝の郡龜彦の庄司といふもの、身が家先祖代々より、子孫までの大願にて、人間はいふに及ばず、鳥獸物蟲螻蛄まで、斯樣の者を見捨ず、助ける家の願なるゆゑ、方々承引召されねば、命を代りにやるばかり。男だていふ身でもなし。地頭代官一村を、這つくばふても此者を、是非共に貰ひ申す。これ是れぢや」と手を合せ、額を地につけ詫にける。心なき田夫さへ、義理にせまれば合點し、「ハテ放火强盗したでもなし。癈疾づく程撲はする。助けて遣れ」と繩を解き、「サア立上れ」と引起せども、鋤鍬に强く打れて足立たず。浦「御恩情は有難けれど、親なく子なく妻もなく、緣者一門知人も、一日暮すたつきもなし。お慈悲ならば死せて給べ」と、蹌ひ伏て泣き居たる。生「オヽ猶以て見捨難し。養生させて召使はん。奉公して此恩を送りかへせ」と、我乘物に抱き乘せ、鳥目一貫取出させ、「在所の衆の御芳志にて、代々家

鰥—老いて妻なき者
寡—老いて夫なき者
朱—死骸の腐蝕せぬやう朱詰にする
切戶—與謝の海

浦島が兩腕しつかと取り、「此頃山々の古塚を發き、納物を盜むといふはおのれよな。此塚は往古より、一在所として守奉る、壽命神の浦島塚。荒すは曲者、サア吐せ」と、先理不盡に打擲す。浦島眞直に言んと思へども、まてしばし、宮の御骨凡人の手にかけさせんも勿體なし。陳じて遁れんと思ひ、浦「仰の如く某は、鰥寡孤獨の浪人者。渡世に詰り候へども、左ながら袖乞押入も成りがたく、主なき古墳を掘返し、太刀、鎧、朱などを盜賣候。此塚掘は掘たれども、取る物は一ツもなく、手間が損になつた分。御免なれ」と駈出るを、「どつこい」と取て押へ、引伏せ引立穿鑿し、玉手箱をちらりと見て、「すは盜み物是れなり」と、取付くを挐放し、抱ながらかつぱと伏し、浦「全く盜みし物ならず。重代の箱なれば、假令命は取らるゝとも、箱はいつかな渡さじ」と、我身を覆ふてことはれども、田夫ども聞入れず、鋤鍬もつて散々に、骨も折れよと打叩けば、眉間先を打割れ、兩眼も血に暗み、足も漂ふばかりなり。「口惜や。名乘て猶も子孫の恥」と、齒をくひしばつて包み泣き、目もあてられぬ風情なり。田「最早科は極つたり。夜に入て切戶の沖へ、簀卷にして沈めにかけよ」と、高手小手に縛め、引立んとせし處へ、賤しからざる女房の、老人の乘物に、供人引具し來りしが、走り寄て、女「これ申し、近頃粗相な

元服者か

に、やう〳〵尋ね着にけり。荒にし野邊を來て見れば、誰が標とも文字消えて、苔に埋るゝ古塚に、往來の人の立ちどまり、花を手向て拜しける。浦島里人に近付、「此處は丹州水の江の浦候な。此處に於て、浦島太郎と申す人の、ゆかりばし候はば、敎へてたべ」とぞ申しける。里人共打笑ひ、「興がる事を問ふ人かな。浦島太郎といふ人は、何百年か以前の事、子孫もありとは聞たれども、何處の誰とも知る人なし。緣由といふは此塚よ。彼の浦島の子の代に、此標を築置たると、古い衆の言傳へ。浦島塚とて壽命を守るげんぶくしや。參りの絕ゆる事もなし。一拜みで十年づつは生延る。旅の人なら四五十年、延して通りや」と、笑ふてこそは通りけれ。浦島は我ながら、我身と更に思はれず。我龍宮に入りし時、四歳になる子を殘せしが、其子が後に成人して、父が爲とて此塚を、築置てやありつらん。我ぞいにしへの浦島太郎と名乘て、我子孫を尋ぬるとも、誠とは思はず、却て人に咎められ、憂恥を見んよりも、もとの海に飛入て、底の水屑となるべきと、思ひ定めて立ち出しが、「いやまて、これに若宮の御骨あり。龍宮の慣ひに死人を忌めば、海中へは持ちがたし。此我塚に納めん」と、指添拔て草切拂ひ、塚を穿て安々と、御骨を納め奉る。向ふの方より田夫ども、「そりや盜人よ」と聲をかけ、ばら〳〵と飛蒐り、

閒界は我執深く、疑惑に迷ひ汚らはし。親子諸共歸るぞ」と、猶も形は百ひろ澤の、池に蟠る大蛇の猛勢。岸には僧正降魔の姿勢、顏の赤いは猩々遍昭。蛇と猩々の力に治る、名も盃の、月の名所の池には波風、陸には松風、ざゝんざの聲悅びの顏、見せるも見るも諸共に、樂しかりける御代とかや。

第二

移行く、月日ばかりはかはれども、かはらぬは世の憂節や。浦島太郎は若宮の、亡き御骸を烟となし、一條大宮行平の、館に尋ね寄しかども、いたはしや行平は、恒寂僧都が讒言にて、龍女の子を若宮と僞り給ふ、忠が不忠の逆鱗。殊に日の御座の御劒を龍宮城へ取られし事、皆一人の落度とて、勅勘の身とばかりにて、其行方も知れざれば、賴みも月日の影ならで、草木の名さへ忘れ果、他人にも緣にも、六十餘州に一人とも、知る人持ぬ身となれり。我身に添ふる物とては、龍女が與へし玉手箱、宮の御骨ばかりにて、あはれ昔の音信は、未だふみも見ぬ橋立や、丹後の國は古鄕と、思ひ寄邊の水の江

盃—猩々と月の緣
ざゝんざ—陽氣に騷く聲
月日—續きにかく
まだふみも見ぬ—小式部の歌によりて踏と文とかく

猿の腰掛—靈芝の類にて痛氣の妙藥（俚言集覽）

智慧氣がない。人でなしの犬坊主。犬と猿との腕競べ、頬も眉間も掻破り、猿縛りに絡げつけ、猿の腰懸にしてくれん」と、かんらからとぞ笑ひける。恒寂騒がずゑせ笑ひ、「エヽ推參千萬なり。四相を悟る恒寂が、そも見知らじと思ふか。汝は廣澤の僧正遍昭よ。ヤア誰かある。蹴散せ」と下知すれば、郎等共打てかゝるを、僧正遍昭忍辱慈悲の利劍を提げ、火水になれとぞ三重防がるゝ。入亂れたる戰ひに、雛形深傷に身も疲れ、蹌ふ處を雀丸、難なく宮を奪ひ取り、引伏せんとせし處に、廣澤の波逆卷上り、龍女は美女の姿を顯し、水を行く事陸地の如く、さら〳〵さつと走り上つて、我子を取て掻抱き、紅葉が枝に傳ひ上つて、莞爾と笑ふて息つぎし、神變こそは不思議なれ。敵「殘る奴們餘すな」と、僧正遍昭押取込め、既に斯うよと見えける時、龍女が袴の裳裾は延て、二十尋餘りの青蛇の尾筒、僧正を卷上れば、僧正遍昭太刀拔翳し、下なる敵を指下しに、眞額肩先切散し、打てかゝれば卷下し、鱗の嵐太刀の音、草木一度に震動して、逐ふつ捲つつ戰ひしは、前代未聞の三重神力なり。さしもの強敵踏もためず、皆散々になりてけり。龍「あゝら嬉しや是まで」と、夕波高く飛入て、美妙淨音鮮かに、「そも〳〵この日の御座の寶劍は、龍宮城の靈物にて、假に人王に傳はりし。今我本土に歸すぞや。人

記錄所—公事訴訟を取扱ふ所

風折烏帽子—立烏帽子のさきを折りたるもの

帆柱立—仁王立に同じ

取圍む。雛形今は詮方なく、草押分て突と出、「ヤア非禮非道の癡人よつく聞け。帝都を騒がし剰へ、儲の君を燒討にせんなどとは、目前の勝利に後度の天罰受けんより、疾く歸れ」と呼はりける。恒寂から〳〵と笑ひ、「儲の君とは事をかし。それぞ松風といふ蜑の産だる行平が子よ。證據には背に七枚の鱗ありて、産屋より魚肉を食む、蟲に劣りし畜類を、宮と僞る行平が逆心、召捕て記錄所へ訴へん。あれ搦取れ」兵「承る」と、尾花の如く拔つれて、鯨波をつくつて取捲たり。右衛門尉只一人、子を抱いての片手討、防ぎかねて見えし處を、恒寂後をかい潜り、松風の小腕取て引伏せ、繩をかけんとせし處へ、風折烏帽子に紋紗の布衣、顏色紅葉として、桔梗苅萱蹈散し、十文字に駈來り、松風を取て引除け、帆柱立に突立しは、只木像の如くなり。ばん〳〵たる大音上げ、遍「我れを誰とか思ふ。和歌の聖柿本の人丸の脇立、頰の皮の眞赤いな猿丸太夫が神體ぞや。歌と戀とは同じ道。行平歌人の身なれば、戀を重んじ情を基とする處に、一旦佛の弟子と名乘、衣を墨に染ながら、人の善を猜み、徒黨を集め、王法を傾けんと謀る大惡人。歌人の加擔人致すべしと、住吉玉津島の神勅に任せ現じたり。サア此猿丸太夫を猿と思ふて侮るな。猿は人間に毛が三筋足らぬといへど、おのれにも三筋足らぬは、情と色氣と

ひ、あつと感ずるばかりなり。時に雛形右衛門尉、若宮抱き馳來り、雛「ヤア松風これに御入か。申し僧正様、あれこそ主君物語の須磨の浦の松風、不思議に館へ參りしに、龍女の魂松風につき、親子夫婦の因縁の詞、北の方聞違へ、嫉妬の餘り、舍兄の惡人葎丸に告知せしを、恒寂僧都に内通し、上をかすむる證據に、若宮を奪ひ奏問せんと、館に押寄せ騷動に及び候ゆゑ、松風を落し、宮を具足し參らする、御計ひ賴み奉る」と、大息ついて申しける。僧正騷がず、「何事かと思ひしに、恒寂坊が手並の程、さては安平御座んなれ。さりながら生拔つて侮られな。坊主頭が隱したし。烏帽子は無いか」松「幸ひ」と、松風が身に添し記念の裝束取出す。遍「オヽ、珍重々々。顏も是ではなまぬるし。眞赤に塗たし、紅はなし」波に色ある廣澤の、岸の紅葉を露ながら、袖にこき入れ手に搾り、立ちかゝつて揉付れば、顏にも秋の初時雨、僞もなき紅なり。遍「南無三寶、彼へ群立つ大勢は、正しう敵。先づ暫し」と、一村茂る松が根の、薄高萱引覆ひ、身を密めてぞ忍ばるゝ。程なく恒寂、鹿毛なる馬に打乘て、五十騎ばかり哄と寄せ、駒を控へ、恒「ヤアヤア健宗、松風親子の者こそ北嵯峨へ落たれと、斥候の者の告けるが、此野邊にぞ隱れつらん。風上より草に火をつけ、燒討にせよ。火打付燒け、團扇よ」と、おめき叫んで

はないが、御所方に御大事の御祈禱請取しに、明王の御告ありて、胸騷ぎ心得ず、馳參ずる時節、遲なはつては上つ方の御命の障あり。こゝを放せ」と乘出すを、女「ハテ待しやんせ。斯ういひかけて放しはせぬ。わたしも大事の命づく。高い卑しい隔てはあらじ。おむづかしい事でもなし。些との間こな樣の、大黑にして下さんせ」と、猶舌たるく引とむる。洞「いや是れ大黑は我寺に、傳敎大師の作もあり。春日の作も安置せり。左樣は要らぬ」と馳出す。女「アヽ辛氣、さては御存じ候はぬか。內裏樣のお后樣、お公家樣のは北の方、武家は奧樣御前樣、町では內儀おか樣とも、洒落ていふにはこちのやつ、お寺方のを梵妻と、晝は隱して長持に、入れて二股大根や、夜は抱れて子祭の、寢は致すまじ名計りに、命助けて下さんせ。左樣ない內はいかな事、やりやしませぬぞ、否ならば、殺して置て行んせの。平に賴む」と留めにける。僧正是ぞ天魔の所爲と、返答もせず、駒立直せば尾筒を取り、乘出せば鐙を控へ、右へしやくり左へ戾し、手綱に縋て引るれば、馬はけしとみ跳上り、力革を蹈切て、馬よりどうと落てけり。馬も怺ゑず高嘶きし、北嵯峨差して馳去たり。流石名を得し歌人とて、僧正遍昭取敢ず、「名にめでてをれるばかりぞ女郞花、我落にきと人に語るな」と、詠じ給へば松風も、戀ゆる歌も聞なら

春日―奈良朝の佛工

二股大根―畜にかく

名計りに―名計の夫婦となりて

我落にき―女に墮落する事にかけたり、古今集の歌

明王―王法を守る天の神

嵯峨野―さすに掛く

胸分―馬の胸部

狂氣の顔にて、「今は討ではかなはじ」と、守刀をひつそばめ、駈寄給ふを女房達、「這ははしたなし暫く」と、引留むるを振切り〳〵引放し、枕近く立ちかゝれば、此處彼處より數千の小蛇、頭を竝べ二人を圍ひ、寄せじとこそは睨みけり。北の方も怖ろしさ、「さて凄じき女めや。夫を取られし我こそは、蛇とも蛇ともなるべきに、逆恨みこそ安からね」と、飛でかゝればパッと寄り、裾に喰付き纒付き、彼方此方へ追廻すを、龍女の所爲とはそも知らず、あれよ〳〵と逃惑ひ、「なふ怖ろしや口惜や。仇と情の敵味方、汝と我が戀爭ひ、假し今こそは負るとも、行平卿は定まる夫。邪のおのれに生をかえても添はせうか」と、追戻せば這ひ集り、弓手を拂へば馬手に片寄り、後を拂へば前に這出、くるり〳〵さら〳〵〳〵、千筋百筋繩簾の、裳裾に纒ふ如くにて、門外さして追出すは、怖ろしかりける三重有樣なり。爰に僧正遍昭は明王の御つげあり、若宮の御事、行平卿も氣遣はしと、緋の衣袖裾まくり、野飼の駒を引寄せて、我法の道和歌の道、三十一文字引かえて、三尺一寸の大太刀、嵯峨野の草になづむ駒、鞭をくれたる胸分の、尾花かき分け走り來る、二十歳ばかりの女房の、轡面しつかととり、「これ坊樣、出家と見かけて頼みまする。遣ませぬ」とぞ申しける。僧正聞給ひ、「ホヽウ出家侍頼まれて引くで

へば、亟「なふ恥しや顯れし」と、子を押除てすつくと立ち、くる〳〵悶ゆる身の中より、小蛇飛出し失せければ、物の怪除きたる其風情、かつぱと臥て寢入しは、酒に醉臥す如くなり。ことはりや司の前、くはつと妬みの額の筋、目も角立たる聲を上げ、「ヤア空鼾れすな空寢入すな。其子は正しく行平殿とをのれが中に產したる子よ。エヽ曲もなきは我殿御。龍王の乙姫と浦島太郎が子と僞り、外妾の子を館へ入れ、剰へ其母めを、乳母と號て呼込んで、妾に恥を見せんとや。我も公家の娘なり。如何に外妾が可愛いとて、賤しき蜑の產だる子を、親王様の宮様のと、抱崇めたる口惜しや。貴いも卑いも男のならひ、數居一ツをこゆるぎの、傅に附ても居られねば、外のいたづら餘所妻は、知らぬ花よ折らば折れ。身は奥山に散る紅葉、蹈附にする男鹿。女子畜生惡心の、針が喉に立たるとや。其針とは妾が事か。チヽ針ともいへ釘ともいへ。針ならば蝮蛇の針、汝が五臓に分入るべし。釘ならば神木に打つ金鎚の、重き恨みはをのれにあり。夫にもあり。あり〳〵」有明の、月蝕欺く眼の曇、翡翠の下髪はつと亂れ、怒れる唇せゝ笑ひ、閃く舌は緋縮緬の、服紗をふくみし如くなり。司「サア女返答せよ。男を誑せし其癖の、狸寢入の見苦しさよ。憎くし辛し腹立や」と、我と我身の袖を喰裂き袂を喰切り、宛がら

飛で入るこそ不思議なれ。有繋親子のしるしとて、遂に他人の乳を呑まぬ、此の若「わつ」と目を覺し、抱きつくを抱き上げ、乳を哺めてぞ泣居たる。此聲に司の前、何事やらんと走出、屏風の影に身を密め、立聞給へど恩愛の、ちりにまじはる神力も、きれて知らぬぞ哀れなる。積る歎きを包みかね、魂「能も〳〵此母を、見忘れもせず抱かれし。愛しの者やヲヽ愛し。乳離れしての昨日今日、父は男の大よそに、他人の手にて育つゆゑ、顔も細つて身も痩て、有し形はなきぞとよ。音信せぬとて此母を、辛しと嘸や泣つらん。夜晝心は通へども、我淺ましき姿を見せば、夫の恥辱我子の恥と、押へて怺ゆる戀しさの、身の苦しみはいかばかり。阿波の鳴門の荒波も、物の數とは思はねども、人目の海は超がたし。四大海は汲干すとも、人の心はくまれぬぞや。稚心に聞置きて、必ず人に油斷すな。母さへ附添ひあるならば、危き事はなけれども、人の猜みの惡心の、針を喉に立られて、今日をも知らぬ命の内、見るも語るも限りぞや。母が膚に手を入れて、抱附てたも締てたも」と、抱き寄すれば聞入れて、乳房に喰附縋合ひ、聲の限を泣叫び、聞く人ありとも白玉を、貫きあへぬ涙なり。北の方は興覺て、「あら不思議や。彼女が新參の身で親子の歎。馴染の乳をさへ呑まぬ子の、慕ひなつくは心得ず」と、屏風押除け出給

が喉につまり、出入の息の通ひに横はり、身を苦むる此思ひ、九萬九千の鱗も立ち、口より咯く血は紅に、千尋の海を染むるなり。今宵も知らぬ命の內、我子の顏の見ま欲しく、是までは來れども、恐ろしや僧正遍昭、蛇形退散の守をかけさせ、帝よりは日の御座の寶劍を、枕刀に置かれしゆゑ、龍畜の悲しさは近附事なり難し。御身の形を借て我魂を移し、我子を見せて、生涯の名殘を惜ませ給はれ」と、淚に咽ぶ五音の色、此世ならざる氣色なり。松風は哀れにも亦恐ろしくもそゞろにて、松「例しなき御願ひ、否び申すにあらねども、みづからにも思ひあり。一歲行平樣播磨守にてお下向あり。御徒然の御船遊、苫を數寢の御情、三歲馴染の印の烏帽子、御狩衣を證據にて、京より迎を下さんとの、誓文誓紙何枚やら、皆僞りとなりし契り、紀す間は我魂、亂す事は致されず。許し給へ」と逃行く足も、物にまつはる如くにて、乙姫「アヽこれ松風、我も時待つ命なり。暫しが程は是非からん」と、夕暮深き井の水の、波とう〳〵と卷上り、中より小蛇跳出で、松風の下がいに飛入れば、其儘に五體も痿れ氣も暗み、うんとばかりに反返り、暫し性根も附ざりしが、入變つたる龍女の魂、「あゝら嬉しや我子に逢ん」と、褄戸を上り長押を傳ひ、對の屋の長緣を、さら〳〵〳〵と這ひ轟かし、お方の障子を蹴破て、

の顔、きよろ〱眺めておはします。北の方を始とし、「魚鱗好みの若宮に、幸ひのお乳の人」是も海邊に磯馴女の、蜑のうけなは請人や、宗旨の、年紀の、宿のとて、問ふもなか〱鬼宿日、大明日の鷹揚に、今日は最上吉日とて、直に勤むる新參り、誠に戀も奉公も、緣のものなる緣傳ひ、司の前に誘はれ、三重宮の御方に出にけり。元來松風、奉公はかこつけに、行平に逢ん爲なれば、宮樣抱いた抱心、味へ往かぬも理りや。お側をそつとすり脫て、見ぬ顏したる辛い男め、記念の烏帽子狩衣を、出して恥をかゝせうか。いや〱包む間は賴みあり。言ふてしまふで秋の田の、かり〱ばつと腹立ても、主ある男の因果さは、勝て負になるものをと、胸を冷する玉水の、庭の板井に立凭り、手繰り車の釣瓶の內、誰とも終に水色に、瑠璃玻璃綾どる衣踏しだき、美女の形ぞ顯れたる。松風はつと袖打被き、面隱しするばかりなり。女戀々たる聲を出し、「恐れ給ふな松風。みづからは龍宮城、善如龍王の乙の姫にてあるぞとよ。昔語に傳へたる、浦島太郎と我中の、思ひ子を日の本の、王子に立しも行平の、情を猜む惡人共、毒魚を以て亡はんと、數の釣針下せしに、なふ海の底にも戀の道。それから知たる親子の恩愛、我子の命を助けん爲、此身を大魚の形に變じ、三つの釣針一口に、食切取は取たれども、三本の釣針

稚櫻。惜しや父御の顔と、瓜を二つにわりなくも、養子に遣しそれよりは、朝な夕なに此乳房、搾り捨ても猶脹て、漏て飜れて襟ぬれて、お恥しや」と打掩ふ袖詰て未だ間もないと、見えし脇腹膨やかに、肌の白妙顔の艶、一夜添乳の手枕は、兒より親に許せかし。此色に目が行平卿、「使ひ頃好し乳も若し。若宮のお乳の人、長點なり」とありければ、北の御方非言して、「彼の乳母置て抱て寢る、其乳呑子の子や産ん。エヽ癖の悪い」と太股を、抓らせ給へば戯れて、抓りかへしつ擽りつ。行「それはそもじの狷氣よ」まはらば廻れ御所車、御所は悋氣も物優し。工「是は都の月限りに、隱し置かれし手せんじや、鍋取り公家の子は産ど、後腹病ずの片破れ船、啣つ方なき浮身なり」と、頼りなき事いふもあり。雛「これは又田舍とも、京とも分て白雲の、上人にも恥ざるは、元は如何なる人やらん」戊「問はれて何とお返辭も、覺束波の須磨の蜑、松風と申す者なるが、都の人に馴れ參らせ、神かけて逆鉾の、思ひの雫結びとめ、産流したる嬰兒や、松とし聞かば歸り來んと、契りも今は僞りの、憎い男の面打ちなれば、如何なる水仕下女はした、身を鍋釜の相住しても、男に見せたき念一ツ。外に望みも候はず」と、睫の底のうろ〱眼、睨むも相手ありげなり。行平はつと胸轟き、顔に紅梅身には汗。氣も注かぬのに人

甲乳母「奉公する身は始より、氣が弱ふてはなら坂や、春日の禰宜の妻なるが、夫は社の宮奴の、其すき〳〵の骨仕事、家は五人の朝夕や、勸進能の地謠に、雇はれ戻る留守の中、暮しかねたる春の日の、微かな世を經る中々に、妹背はわりなきならひとて、子は三人めで候へども、乳は今でも瀧の糸、長ふ御緣もあれかし」と、莞爾と笑ふて申しける。雛「實に格好は好けれども、三人までの產巢とは、難じて言はば子過腹。薄き乳の緒は如何ぞ」と、帳には點もかゝらざりけり、乙「自は又婿鳥、夫は弓取駒鳥の、懸鞍に腰も懸け帶の、本締役や國元の、御用勤めに京住居。京は遊びの山吹の、色の仕過し染過し、身は墨染の櫻咲く、初瀨にあらぬ隱口の、子守奉公望めども、其名は包む袋乳。乳筋は兩方十二筋。今一筋で琴にはならず。三味線の皮八乳にも、負はいたしませぬ」とぞ申しける。雛「チヽ、誠に武士の妻琴と、聲の調べの風の音、峯の老松口松や、詞多きは馴染む程、朋輩づきも訝し」と、是にも點をかけられず。雛「其次出せ」とありければ、「あいく〳〵」といふ聲附も、愛嬌ありける新玉や、年端も往かぬ子持態。丙「振分髮の時よりも、さる奥方に宮仕へ、お寢間の床の上下し、お主に袖を引れ初めたる阿漕が浦、御かもじ樣悋もじに、先お暇といふ籬、圍ひ置かれし下邸。過し彌生の花の紐、解て生れし

其情の好さ隱れなく、聞て羨む辛氣瘦せ、此君ゆゑと洛中に、肥た女や絶えけらし。御家の諸大夫雛形右衛門尉罷出で、「御預りの若宮樣、奥樣の御乳を嫌はせ給ひ、御好みなればとて當歲子の若宮、魚類にて育て申し、萬一の事候はば、上よりの御咎め、君御一人の御過りと覺え候。人の性によつて乳の合はざる事もある。哺附くまで何時までも御乳を替て見んと存じ、乳持の奉公人數多呼寄せ置き候。御覽ありて召置れ然るべし」とぞ申しける。行平卿聞召し、「尤も〳〵去ながら、女は女の道なれば、北の方諸共に見て極むべし。それ〳〵」と奥へ使立ければ、色と情の司の前、子持の世話の氣配りに、身にも構はぬ髮容、人のたしなみ作るより、猶艷かに媚ありて、夫婦身を寄せ物蔭に、覗き囁き給ひしは、秋の紅葉と春の花、一度に見るが如くなり。右衛門尉罷出で「惣じて上つ方のお乳の乳人は、とり親といふ事あり。氏素性にも構ひなし。身元成立ち僞らず、具さに申せ」と一々に、由緒書にぞ記しける。

今樣うばぞろへ

ら、關白冬嗣が計ひにて、斯く淺ましき芋堀坊主。明月地に墜ず、白日度を失はず、天運の秋來れり。そも〳〵海中に鯸鮧といふ毒魚あり。味の甘きこと、西施乳とて美女の乳房に譬ながら、其肝腹中に入て人を害す事、博物志に記せり。背青く腹白く、無鱗にして見悪しとあり。我朝の河豚なるべし。是を與へば美味に愛で、若宮を始め行平一家鏖殺し、魚一疋で天下を奪るは、麥飯で鯉を釣」竿や。手々にをろす釣針の、さきをめぐらん報ひの程、淺ましくも亦恐ろしゝ。俄に波風岸を洗ひ、潮をたゝく劍の鰭。尾は赤銅の扇を廣げ、利劍の牙ある大魚の形、小舟の走る如くにて、一文字に飛蒐り、三筋の釣針一口に、呑で引を引かれじと、三人竿を伸べ控へ、附て廻れど堪ゑずして、一度にふつつと嚙切たり。蓮「我本望の門出惡し。網にかけよ」「承る」と、浦人下部大網をろし、逸勢網の功者にて、網先取つて四方を圍み、ゑいや〳〵と引寄する。大魚は怒て波を渦き、潮荒汐吹かけ〳〵、網を沖へと引たりけり。逸勢磯に下浸り、「引けやしやくれ」と下知すれども、岩も劈く怒れる魚、さしもの逸勢踏もためず、波に漂ひ數十人、網の手繩に引立られ、又引汐に押し流され、「救助船〳〵」と呼はる聲も八重の汐、波の幾重や

三重　九重の廣き都に二人とは、よも在原の行平卿、美男藝能色好み、情の露の奧樣と、

御。お供の衆御輿參れ」と山どよむ。「あつ」と應へて供奉召具、枯れたる葉に甘露の雨、岩に花咲く悦びは、まさるめでたき山王の、神を仰ぐや三重敷島の、和歌の浦曲に墨の袖、恒寂僧都は王子を出で、遠からぬ身も遠つ國、賤しき漁父の友鶴も、などか雲井に歸らざるべきと、いとど都を忘れかね、念佛してぞ在しける。爰に花室の三位律丸といへるは、行平の北の方司の前の兄なりしが、公家の身ながら歌鞠學問手蹟に疎く、兵術博奕の逸遊に身を委ぬ、文盲不仁の惡黨ゆゑ、先途の官職にも進まず、我名を汚すばかりなり。相伴ふ伴健宗、千釼逸勢、釣竿擔げ下部共、網具取持せ來つたり。僧都御覽じ、「珍らしき下向、殊に漁人の容にて何の爲ぞ」と仰せける。律丸承り、「さん候。都には若宮誕生ましく〳〵、某が妹司の前、中納言行平に嫁し、當春初子をもうけしゆゑ、御乳の人に附られしに、此宮ついに人間の乳を呑ず、鮮らけき魚を好んで、魚の脂に育ち候ゆゑ、大内にも置れず、行平が館に預り育て申すにつき、諸國の浦〳〵申すに及ばず、當國は我々勅を蒙り、網引釣垂れ候が、此宮位に卽き給はば、日本惡王の國となるのみならず、妹聟の行平め、小舅の某さへ蔑に仕る、驕り甚だ超過せり。年來の御企、時節到來仕る」とぞ申しける。恒寂袈裟衣取て捨太刀脇挾み、恒「我れ先帝の太子と生れなが

させよ。當分の返禮望みに任せ、老後の榮華たるべきぞ」と宣へども、此男茫然たる顏色にて「ムヽ此處は日本か。某は丹後の國水の江の浦島太郎と申す者、思はず龍宮に到り、乙姫に契り、一歳の間に此の子をもうけ、古郷ゆかしく、暇と申し候へば、此の玉手箱に八千歳の壽命を封ず、必ず開く事なかれと、與へて送る雲の波。彼のはしに浮み出、夢とも分ぬ古郷の道、教へてたべ」とぞ申しける。行平横手を打て、「其浦島は雄略天皇の御宇、今既に三百四十餘年なり。人界の一年は蓬萊の一日とや。忝くも神武天皇の御母玉依姫は龍神の娘、我國の皇統御母方は龍女ぞや。幸ひ其子を我に得させよ。十善の太子にそなへん」と始終を語り給へば、浦「アヽ誠。一歳に三百餘年を經て候。世變り人更り、頼む方なき身の上を、御憐み仰ぎ奉る。さて龍女の胎にやどりし此子、背に七枚の鱗ありて人間の乳房を呑まず、魚肉を食する異相の凡夫。御免あれ」と辭しけれども、行「いやとよ應神天皇は、鱗の尾筒永き世まで、御衣に裾を曳く始めぞや。少しも恥る事なかれ」と、宮の御衣を召させかゝる、御骸は引包み、「おこと密に葬り參らせ、都一條大宮、行平が館に尋來れ」と暇乞、又神前に立歸り、斯と語れば北の方、歎きの中に御悅び、僧正遍昭聲を上げ、「行平卿の呪ひにて、若宮御蘇生ましくて、めで度還

古例を引て御輿の先、金錢銀錢撒米や、白ゆふ波の濱傳ひ、山王の社に著き給ふ。神前にて初聲上げさせ參らせ、行平幣を奉り、天を父とし地を母とし、御心に天つ神入かはり、聖壽無窮と祈念あり。神子覡は神樂を捧げ 三重 神慮をすゞしめ奉る。神樂をさまる太鼓の頭、笛のひしぎに若宮は、わつとばかりに御目を見つめ、御息絶入給ひけり。人々驚忙、「這は如何に」と勸る隙もあらばこそ、はや縡切させ給ひしは、詮方もなき有樣なり。行平思案を廻らし 行「しばらく〳〵。是はまさしく急驚風。行平希代の呪ひにて、蘇生らせ奉らん。御供社人等、一人も殘らず神前を立去り、案内するまで歸るな」と、仰せ給へば上下の男女、皆々麓へ下りける。さて北の方遍昭を招き、行「此宮御早世は、是ぞ天下の大事たり。和歌の浦の惡僧恒寂僧都は先帝の王子。宮亡せ給ふと聞くならば、一味を集め、王位を紊亂らんは必定。人知らぬ其内に、然るべき子を取替へ、宮蘇生り給ふと披露し、世の靜謐をおこなふべし。如何あらん」とありければ、司の前は養君の別れの涙に應へもなし。僧正遍昭打首肯、「君の爲世の爲、宜しく計ひ給ふべし」と、行平遍昭坂本の、人家民家殘りなく、尋ねもとむる嬰兒や。七本柳の木蔭より、若き賤の男産兒を抱き、暗然として佇めり。兩人天の賜と、「これ〳〵男子、卒爾ながら其子を我に得

松風村雨束帶鑑

第一

仙家の日月本長閑なり、臘を送り春を逐ふ、豈又然らんや。聖皇親ら長生殿にましませば、蓬萊王母が家に向たらずとは、是此時の天皇や、五十餘りの代々の君、天のなせる賢王、地に報ぜる明君と、すべて仰がぬ隈もなし。後宮數多侍ひし、中に色ある紫や、藤氏の御方に、日嗣の玉の男子親王、やす〳〵と降誕あり。産屋の儀式桑の弓、蓬の矢事七夜の御賀、今日百二十日の御忌明き。殊に山王權現に、御母方の御願ぞと、齡千歲の坂本に、産神詣と聞えける。御乳の親には中納言行平卿の北の方司の前、明て十九の初子の乳。氏位よし氣質よし、此人をとて内よりも、それとさしぢの乳袋も、はるや錦の輦に、宮を抱きてあひごしの、前驅は華族の公達、在原の行平は、御乳母のよしみとて、春宮の傅になぞらへ、御後見にて扈從ある。加持の師には元慶寺の座主遍昭僧正

閃いて、旗竿に掛ると見えしが、小袖の模樣旗の手は、はらり〳〵と落散て、忽地源氏の白旗に、藥師の梵字あり〳〵、有難し〳〵。藥師は東方源氏も東國、日本固より東の國土、西海四海の敵を滅し、源氏一統御代萬歲、五穀豐饒の日の光、君が威勢の惠みに據て、光輝を添る淨瑠璃の、魂の德こそ目出度けれ。

卵塔—五輪塔

婆品—龍王の女八歳にして成佛せし由を述べたる經文

忽然之間云々—提婆品に、龍女忽然之間變ニ成男子ト

兄弟見參—義經黄瀨川にて始て兄頼朝に對面の由盛衰記に見ゆ

は、解て亂れて斷切の、哀れ悲しき有樣に、義「扨は實か不便やな。切て今般の遺物ぞ」と、二人の尼に縋附、聲も惜まず泣給ふ。痛はしかりける次第なり。程有て義經、「切て亡人の記念成とも、見せてくれよ」と宣へば、女「彼卵塔こそ御墓所。亡骸を灰となし御骨を納め一年君と同衾の夜の、御肌著を幡に縫ひ、土中に籠置候ふなり。いざ御案内申さん」と、泣々谷を分過て、卵塔開かせ水手向け、暫時御回向有りけるが、義「如何に方方、思へば淨瑠璃は御出陣の、守護神と覺るぞや。人間の習ひ恩愛執著に命を惜み、思はぬ卑怯も取事あり。聞ば兄頼朝が妻、伊東が娘も死したるとかや。兄弟浮世に執著なく、一命を輕んじて、平家をやすく亡ぼさん、天の示命有難し」と、女人成佛の提婆品、高音に遊ばし、忽然之間變成男子と、讀上給へば、不思議や五輪飛碎けて、光明赫々たる其中に、衣裳の幡翩翻して、成佛の相を現せしは、重々有難かりける經力なり。斯る處に武藏坊辨慶、龜井片岡伊勢駿河、追々に馳來り、「右兵衛の佐殿は、浮島が原に御著陣の由、早御旗を立られ、御發向然るべし」とぞ申しける。義「扨こそ唯今申しつる、吉左右は是成ぞ。兄弟見參始めてぞや。いざ聲花に出立べし」と、御馬牽立御弓張り、御旗竿を押立、御旗附んとせし處に、あら有難や墓に掛りし佛の幡、翩りくと

妾が君―淨瑠璃姬

蒲原宿―義經卿に此所にて煩ひしを淨瑠璃に助けられし時實名を明し追て平家追討に上るよしを告げて別れし事十二段に見ゆ

嵐吹―あらじに掛く

斯る處に年の齡、三十餘りの尼二人、花の帽子に五條袈裟、濃墨染に身を窶し、左手には花籠、右手には珠數を爪繰りて、御曹司の御前間近く參りつゝ、涙に物を語らせて、差伏面てぞ居たりける。御曹司は御覽じて、「彼なるは冷泉か。十五夜にては非ざるか。扨も久しの冷泉や。扨淨瑠璃は」と問せ給へば、二人の比丘尼承り、「目出度は東の殿。扨拙きは妾が君にて止めたり。御身東へ下向の時、まだ音も馴ぬ蟬折の、一よ重ねし妻琴や又は駿河の國、蒲原宿の約束が、伊豆の伊東へ洩聞へ、日は五十人夜は百人の番衆を附、何國へ成とも、紛れ行や淨瑠璃と、日に幾度か使立。今は爲方嵐吹、峯の藥師の篠谷とて、人も通はぬ谷陰に、竹の柱や松葉垣、柴の編戸に引籠り、里の便も聞ざれば、池の眞菰を片敷の、肌を隱す苔衣。澤邊に降ては根芹を摘み、山田の畔に落穗を拾ひ、繋ぐ命の憂三年。今や音便、今や便宜と待宵の、夢の通路絕果て、御曹司戀しやと、其戀風が積り來て、無常の風の病ふの床、遂に果敢なく成給ひ、彼篠谷の苔の下、若木の花は散果て、跡には名のみ有明の、十五夜冷泉が身の有樣、是御覽ぜ」と計にて、岸波と伏して泣ければ、有明更科師のすけ、其外の女房達、「何を隱さん我々も、君を祝ひ參らせて、斯は扮裝候へ共、變し姿を御覽ぜよ」と、裲襠脫れば墨の袈裟、柳の鬘入髮

平が唐衣きつゝ馴れにしの歌をよみし話

引著られし—矢を引くに掛けていふ

淵瀨—世の中は何か常なる飛鳥川の歌による

土器、蓬萊の島臺携へ、「母の長者御上洛を待受、御首途を祝ひ申せとて、迎ひ參らせ候。日出度聞召れよや。千秋樂」とぞ祝ひける。義經聞給ひ、「唯今其方へと思ふ折柄、義經が好物とて歴々色ある女房達、御使に給はる段返す〴〵滿足。追附參つて淨瑠璃にも對面せん。各先へ」と宣へば、有明更科承はり、「扨は御存知候はぬか。關東の目代山木の判官地頭なれば、伊東の祐親より吟味嚴しく、源氏方の緣組を、堅く改め申す故、淨瑠璃樣は先暫時、御遁世と披露して、彼谷陰の庵室に、忍びて御入候らへば、此度の御下山は、御愼まし〳〵て、頓て目出度平家を亡し、御凱陣の時分は、世間廣ふ御對面。夫を心のお力にて、戰に打勝給へや。先御銚子」と言ければ、義經驚き、「否々夫は誠しからず。行末知れぬ源氏なれば、時めく平家の大名に、引著られし矢矧の姫。一夜に變る淵瀨こそ、大和に有ると聞けるが、何時東路の飛鳥川、底意の程の惡さよ」と、恨み頽墮給ひける。

冷泉節

伊達小袖―はでやかなる小袖
繻子びん―繻子鬢とて安永年間に行はれし鬢なるを當時のものにしたり
六つ武藏―十六武藏ともいふ子供の遊戲
押へ―しんがり
紫のゆかり―三河の八橋にて業

眼を凝視齒を切り、ぎやつと計を最期にて、同じ枕に臥しければ、ものに動せぬ弟子師匠、二人の死骸に抱附、前後不覺に取亂し、大聲揚て歎きしは、道理とこそ聞えけれ。法「アヽ我ながら狼狽たり。伊東が方へ聞えては、君の御爲如何なり。先死骸を葬むり佐殿を密に落し參らせ、北條の四郎時政を憑み、御謀反勸め奉らん」と、忍び〳〵の謀。扨こそ頼朝御代の後、此師弟に恩賞深く、法眼は醫道を以て忠有迚、醫法と召れ、弟子は義を以て誠有とて、義法と召れし、頼朝の膝下去らず、醫法義法の法師武者、名を千歳にぞ 三重 揚にける。其白幡に從ひて、坂東八箇國、頼朝の御手に屬し、討て登り給ふ由奥州に聞えしかば、九郎御曹司義經、秀衡が催しにて、奥勢十萬餘騎を參らする。義經御悦喜淺からず、頼朝の見參に入、御代官を蒙るまでは、物の具憚り有るべしと、御供の上下殘りなく、鎧の上の伊達小袖、兜を脱で太髻結、鬢附繻子びん天鵞絨脚半、駒も嘶ふる轡の音、しやん〳〵〳〵と振出す。七つ道具に六つ武藏、辨慶は押の役。八つ鑓持挾箱、持鑓持弓梓弓、引もちぎらぬ行列は、柳を手折門出や、花の都に 三重 登らるゝ。彼紫の由緣求て杜若、三河の國に御陣を召され、峯の藥師に御參詣立歸らんと仕給ふ處へ、淨瑠璃御前の女房達、有明更科師の典侍、空冷月淸千壽の前、長柄の銚子御

夕霧ーいふにかく

しは法眼。源氏の恥辱雪ぐからは、今生の思出。主君の妻に毒を盛り、其罪科を弟子に塗る、法眼にてはなき物を。冥途のお供迄もなし、先走致さん」と、突込まんとする手に取附て、直「有難き御心。去ながら夫は師匠の道立て、我等が弟子の孝行立ず。此上の御恩に、春甫に死なせて下され」と、師弟心を感じ合、不覺の涙はせきあへず。今を限りの藤の前、苦しき息の下よりも、藤「頼母しの人々や。假令自ら千年百年存命ても、所天に恥辱を取せて、何の生甲斐有るべきぞ。山木へ縁に附くならば、一日も生きまいと、豫て死身に極めたれば、此毒害に怨はなし。自害を思ひ止りて、賴朝樣をみついでたも、淨瑠璃御前と義經樣と、中斷れしも父の所爲、自ら故の事なれば、此二つを賴み置く。賴朝樣へも言度こと數々ながら最う耐らぬ」氣も遠うなる眼も眊む。漸々に聲弱り、「死んで給んなたもんな」と、夕霧闇き短夜の、宵の夢とぞ滅給ふ。痛はしかりける最期なり。師弟は猶も義を重んじ、法「いざ此上は一人殘つて遺言守り、一人は是非死なん」直「實に我死ん」と死を爭ふ。女房涙に眩ながら、「御遺言重ければ、お二人を百人にも、仕度程なる大事の身。死なで叶はぬ義理ならば、在て益なき女の身。妾こそ」と言も敢ず、餘りし毒藥突と呑む。師弟「是れは〳〵」と言間も、あら苦しやと身を悶え、五體變じて紫に、

親子の所爲—親子が敵味方となるは致し方なし

に御經口に涙、「すはや〳〵」と待つところに、姫君藥を戴きて、喉に通ると見えけるが、「あら心惡や眩暈や。胸痛や喃苦しや」と顚倒ある。女房驚き懷抱へ「法眼樣春甫殿、ちやつと〳〵」と呼はれば、甫「ヲヽ、春甫は是に在り六道の御供」と、匕首腹に突立んとせし處に、法眼馳出「否御供は某」と、匕首捻取突立んとする所を、又縋附「毒藥の匙執は此春甫。我ぞ死ん」法「否我こそ」甫「我こそ〳〵」と捻合々々〳〵、終に師匠に捻取れ甫「喃お師匠樣まだ腹立が止ぬか。我ぞ死せて御厚恩、報らせて給たまへ」と、撞と伏して泣きければ、師匠は弟子の心を感じ、暫時涙に暮けるが、法「欲に耽つて法眼が、毒藥をもつたと思ふかや。恥かしや、繼母の賴みと言も僞り。忝くも源氏の大將賴朝公、枕を竝べ御子をなせし、最愛の姫君を、平家の侍山木輩が、奥よ妻よと言はせん事、末代の謗氏の瑾。御父義朝の御臺常盤御前も、清盛が妻と成てこそ、憂恥を見給ひし。我等が先祖も源氏の御家人。骨髓に徹つて無念なれども、親子の所爲は詮方なし。僅の女性一人に、源氏の名を流さんより、御自害を勸めんとは思ひしかども、御心を度かね、扨こそ毒藥もりしなり。然れども藥方相傳の時、匙を執て調合せば、生々の父母を、永劫奈落に沈んと、誓いたる誓詞の兩親の、業苦の程の悲しさに、匙は汝に執せしが、毒害せ

春甫ははつと氣拔して、夢現とも辨へず、茫然として居たりしが、甫「誠や人の恩を受け、此世にて報ぜざれば、未來生々五百生、筋を脱れ皮を剝れ、取返さるゝと傳聞く。師匠法眼の廣大の御恩は、唯今命の用に立、百が一つも報ずべし。先年石橋山にて討るべきを、賴朝公の情にて、空洞に命を助りし、此御恩を報ぜぬのみか、最愛の姫君に、毒藥を盛る此惡業。仇を恩にて報ずるとこそは言へ、恩を仇にて報ずるとは、何の道にか有べきぞ。一百三十六地獄、地獄々々を尋ても、此罪科に對用する、地獄とてはよもあらじ。淺猿しの罪業や」と、思へば心遣瀨なく、身を揉歎き沈みしが、「アヽ由なき悔み言。身を助からんと思ふにこそ。姫君の御藥、飲込給ふを合圖に、此匕首腹に突込、冥途の旅の御供し、生て師匠の恩を報り、死して賴朝の御報恩に供へん」と、目を押拭ひ匕首拔持、障子の隙より差覗けば、痛はしや姫君は、今殺すとは知り給はず、花見小袖の雛形を、手自畫て御座ます、御有樣ぞ哀れなる。女房藥を煎じ上げ「是は法眼と妾が夫、師弟談合の加減のお藥。いざ御飲ませ」と出すにぞ、嬉しげに莞爾と、姫「此御藥にて本復し、春は花見に往うぞや。其方と我が小袖の模樣、對に揃へる是見や」と、藥賴みに未計畫、是ぞ冥途の呼使と、知り給はぬぞ痛はしき。春甫は「御最期唯今ぞ」と、口

知音―知己、鍾子期死伯牙絶し絃の故事に基く

生姜云々―生姜は毒消なり、又鑵の口を北向にするは病氣重くなる咒なり

悲を知らぬか。親類も知音もなく、行方もなしと云ふ故に、弟子となして醫道を教へ、數年使ひし侍婢と、夫婦になして其の如く、腰の周、身のまはり、是此法眼は何く違ふ處がある。年來の御恩德、此世にては報じ難し。御一生の御大事御命に代らんと、幾度か吐せしぞ。汝に禮を受んとて、懸たる恩には有ね共、慈悲心なしと云ふ故に、事新しき繰言。サア法眼が慈悲を知らぬか。汝が恩を知らぬか。根性に問へ」と言捨て、突と立て入んとする、師匠の羽織に縋附、甫「アヽ眞平謝罪奉る。御恩は更々忘れねども、惡事の御意見申さん爲、言葉過せし勿體なや。御赦しあれ御免あれ。身は八裂に截裂れ、八萬地獄に落るとも、毒藥調合致すべし。免させ給へ御師匠樣」と、羽織の裾を顏に當、しやくり上てぞ歎きける。法眼も聞入て、「ヲヽ尤々其筈」と、又一箱の錠を開け、藥種數品取出す。春甫は書物に引合せ、毒の品々調合し、甫「思へば此匙は劍よりも怖しき。罪科なき人を殺すぞ」と、涙も共に包紙、「女房々々」と呼出し、「是姬君の加減のお藥。生姜入ずに藥鑵を北向に、頭煎じ計を、早々上よ」と言ひければ、女「アヽお目出度や。追附御快氣なるべし」と、何心なく走り行く。法眼見送り、「サア仕濟した。毒藥五體に浸渡らば、苦痛有ん其時に、報せを待ぞ、ぬかるな」と、調合の間に入にけり。

業人―業晒し者

さん爲、調合を申し附く。扨こそ師匠の奉公、頼むとは言つるが、但我身をかばふか」と、面色變て言ひ募る。弟子は泣々聲を荒らげ、「彌情ない師匠やな。師弟は親子と申さぬか。弟子の難儀に代る程の、心こそはなくとも、我科を弟子に塗る無得心や候ふべき。箇程慈悲心なき師匠に、孝を盡して面白からず。毒藥の調合は斷然と叶ひ候はず」と、申し切てぞ泣居たる。法眼溜息ほつと吐、「ハァ世俗の譬に言ふごとく、咽元過て熱さ忘るゝとは此事。汝が口から法眼を、慈悲心なしとは畜生め。五年以前を忘れたか。一年某下總へ、療治に立越歸るさに、石橋山を通りしは、極月中旬而も大雪、切程寒き寒天に、汝は襤褸を身に纏ひ、空洞木の中より、よろり／＼と這出、世にも人にも捨られ、便りもない業人、長々脚氣を煩ひ、其上此寒濕に腹を痛み、今を限りの命なれ共、雪より外に口を潤す物もなく、今生よりの餓鬼道。お醫者樣の御慈悲に、軒の下にて死する樣に、御憐愍頼み奉ると、泣叫びしが不便さに、持せし著替の小袖を着せ、乘物には汝を乘せ、老體の某は、雪の中を徒跣足。宿へ著ては看病人を附置き、衣類食物起臥まで、我子の如く勞り、千貼計の藥に、朝鮮人參三斤半。二年目に本復して以前より達者に成り、鬼とも組んと悦びし、其間の心遣ひ。法眼は慈悲を知らぬよな。ヤア是でも慈

汝を取て云々ー汝を罪に落さんため

ることは叶はず。其方には誓詞も書せねば、匙を取ても苦しからず。調合せよ」と言ひければ、春甫は猶も不審顏。「して姫君には、何恨み何罪有て毒害は遊ばすやらん」法「ヲヲ不審尤。某に對し恨も罪科も更になし。姫君の母は繼母なるが、山木の判官兼高は、大名と云ひ當國の目代。彼に繼子を緣に附、世に在せんは嫉しよ。毒害して呉ふならば、金銀財寶倉庫一箇所を、打上んとの賴なり。老衰の此法眼、朝から晩まで乘物に搖れ、夜とも言ず引起され、雨にも風にも國中を駈廻り、苦勞をするも本望ならず。此姫君を失ひ、其禮物にて療治を止め、永からぬ一生を、樂に暮す思案にて、請合たる毒藥。師匠の奉公此時ぞ。早々調合頼むぞ」と、細々とぞ語りける。春甫涙をはら〳〵と流し、「情なや御心に、天魔が入て候ふな。尤老後を安樂の、御望みは尤ながら、醫道に限らず世の中の、人の爲になるものの、苦勞せぬは候はず。人の爲かと存ずれば、却て我身後世の爲、善惡共に報の囘來ること、藥の廻るより猶早し。天罰と申し、母御こそ繼母なれ、伊東殿は實父なり。洩聞えて伊東殿の、御咎遁れ有べきか。とつくと御思案候ふて、思止まり給へかし」と、咽び入て教訓す。法眼はつたと睨んで、「汝が言分皆法眼が知つたる事。天罰當らば匙を執たる、汝にこそ當るべけれ。伊東の咎有るとても、汝を取て落

萬の病云々―以下三句皆諺にて何れも世を樂觀する意

に沈めたまふ。是よりは方々の、子の無いこそは増ならめ。此上に山木の判官兼高へ、縁組との事なれ共、斯様に氣色重ければ、何時までか法眼や、方々の苦勞ぞ」と、打萎れてぞ仰せける。春甫は氣輕に打笑ひ、「アヽお氣の弱ひ。子の五人や十人は、地輻さへ能ければ年々にも出來る事。兎角畑の荒ぬ様に、氣を爽然と成次第。萬の病は心から。一寸先は闇の夜、浮世は一分五厘づつ。人參入て上たらば、御本復」とぞ申しける。斯る處に「法眼御歸り」と呼はれば、春甫が女房迎へに出、乘物蒲團藥箱、床に直しつ衣桁に掛け、姫君のお供して、奥の一室に入にけり。法眼四邊を見廻し、春甫を招き、「藤の前の御容體、如何有ぞ」と問ければ、甫「然れば御顔色物ごしまで唯當分の物思ひに、氣の滯ほりと存ずれば、香附子抔にて血を開き、順氣の御療治然るべし」とぞ申しける。法眼首を振て、「否〳〵輕症にてなし。某家傳の名法有」と、簞笥の内より、二重箱の一巻を取出す。法「是ぞ祕密の藥法。此通りに一貼調合せよ」と、差出す。春甫熟々披見して、「ヤア此藥味は殘らず石藥韓藥に、毒蟲などの處方は、毒藥にては候はぬか」と、言せも果ず、法「アヽ音高し音たかし。如何にも毒藥、即ち藤の前に與へて、失ひ申す毒なれ共、某は師匠より、毒藥調合致すまじと、堅き誓詞有るゆゑ、法は傳授受ながら、匙と

大成論云々―皆漢法醫の用ふる醫書

對の六尺云々―見掛の良い醫者もあてにならぬをいふ

藪に功者―藪は藪醫者、之は誤にて豈知野夫有功者也より出でたり（三國志）

吹屋―銅を吹きわくるを業とする者

伏漬―石を附けて水底に沈める

り、代脈にも出る樣に、學問をさつしやれたら、宜りそふな」と言ひければ、重「ヤイ學問ばかりで濟はせぬ。醫者は機轉が第一じや。學問の事なら言て來い。大成論、格致論、素問靈樞、十四經、入門、難經、脾胃論、脈論、運氣論、萬卷の書に眼を曝した此坊主。醫者は見掛に依らぬぞ。對の六尺乘物が、煎じて飲るゝ物でもない。一僕連ぬ我々でも藪に功の者。何な大病でも仰附られし。活すか殺すか何方へぞ驗は見せふ」と自慢する。女「ハァ措て貰ひましよ。彼の賴朝樣とやらは、醫者心はなけれ共、藤の前樣と假初の契りに、まんまと孕せ、物の見事な若君が生れた。此方と妾とは旦那樣の媒妁で、頓て三年添けれど、何とやうな療治やら、姙娠する事もならぬは、定めし如才も有まいが、地體良人の匙先がゆがんださうな」と言ければ、重「やれ子の娠ぬは和女が科よ。芋や牛蒡を見をらぬか。何程種が能うても、畠に鐵氣の有る所は、何ぼう蒔ても生熟ぬ。此方も牛蒡同然、蒔ても〳〵熟ぬは、和女が何處ぞに、銅の吹屋が棲んだそふな」とて、夫婦どつとぞ笑ひける。此聲に藤の前、障子押開出たまひ、藤「聞ば御身達、子が望いとの願かや。自らが身と代りたや。法眼のお陰にて、玉の樣なる男兒を、安々と分娩せしに、平家の聞え有ばとて、父の爲にも孫ならずや。最愛盛りを情なく、松川の水底に、伏漬

正氣散—粉藥の名にて仕やうに掛く

灸も云々—三里の灸にかく

國を療治—春欒は人を療するのみならず賴朝を助けて國をも治める、國語に上醫醫國云々

べば、春「ヲヽ人を助くる道なれば、是も療治の中なり」と、我乘輿に抱き乘せ、「舁夫共」と呼はれども、皆喫飯に歸つて草履取の三平ばかり。春「能々汝先肩舁け。後肩は此法眼」と、坊主天窻の舁夫被、手先を揃へて、「おつ」と肩を正氣散。腰を据ては「はい〳〵」排毒散の風藥。是ぞ發汗乘物舁。裾を搦げて行足の、灸も道も三里半、飛ぶが如くに歸りけり。

下之卷

國を療治の流行醫者、法眼が藥飲む人は、長生不老門前に、藥代禮物持せきて、藥調合暇もなく、弟子の春甫が藥研の音、轟然賑ひ忙はし。春甫粉藥掻回し、「女房共は放恣と、何處にのらをかはいて居る。醫者の女房に成からは、篩ふたり刻んだり、藥擦へせねばならぬ。粉藥が急ぐ。來て篩へ」とぞ喚ける。女「ハテ何ぢやいの、姦しい。藤の前樣の御用がある。是も御主の御奉公。此方は醫者の女房、此方は直に醫者でないか。何時がいつ迄藥研おろしつ碓挽つ、それで埒が明ますか。お師匠なり御主なり、法眼樣の手助

を放さず。姫君は「神佛醫者の心に入換り、憐み給へ」と氣も亂れ、脈も狂へば法眼は、右を取替左へ替、「只ハアウ〳〵」と時間取て、心を摧く危さよ。父の伊東突と立ち法眼を突退、「汝は姫をかばふよな。此事平家へ聞えては、伊東が家の滅亡、娘が大事か國が大事か。いで〳〵實否を糺さん」と、娘の袖に手を指入腹帯摑んで、父「扨こそ〳〵懐姙に極つたり。片時も是には叶はぬ。産月までは法眼に預け置く。其方にて平産させ、其後山木の判官兼高に、緣邊組み世間の口を閉ぐべし、我娘さへ斯くする上は、領内の矢矧の長者、義經を聟に取る事平家の咎、某が言譯なし。使を立て淨瑠璃姫とやらんを、急と追放せさすべし。法眼は一先づ藤の前を連れ歸れ。頼朝がせがれ胎内に有る中は、局は勿論侍婢の一人も附事は叶はぬぞ。サア女郎め其處立ぬか」と睨視られ、「あい〳〵」と云ふ聲よりも、涙ぞ先に出そめて、親の名殘も身の憂も、「何のまゝよ」と流せども、佐殿の御事のみ、心の底に滯ほり、暇乞さへ叶はねば、他事に託けて、娘「母樣へも何方へも、宜樣に頼むぞや。唯さへ産は女の大事。心に苦を持つ自らが、よも生んとは思はれず。今日が此世の名殘ぞと、申して給や」と計にて、聲をも立ず泣給ふ。二人の兄も妹を、不便とは思へ共、苦り切たる親の顏。侍婢局聲々に、「法眼樣頼みます」と泣叫

捌く—振舞ふ

浮中沈—脉の浮くと常と沈むと

心肝腎—以上三臟は大切にて命の門

合口—匕首也、醫の脈を診る時は刀をさゝず

るとも、胎内の兒の親は、右兵衛の佐頼朝なり。陳ずる丈は陳じて見て、叶はぬ時は佐殿の、御名に疵は附まじき。卑怯は捌くまい物」と、思ひ詰ても便なく、女房達に手を曳かれ、父の前にぞ出給ふ。伊東は眼色を見て取て、父「サア法眼假令御邊が勞つても、外に醫者も有るもの。後に知れては其方が首を取るぞ。僞なしに早々脈」と詰掛る。姫も爰は大事ぞと、姫「幼少から自らが、地脈は其方が覺えてぞ。疎忽を言うては、頼朝樣に首取らるゝ。能う分別して脈取りや」と、苦々敷宣へば、流石の法眼手も戰ひ、浮中沈の三考も、心肝腎も命門も、右に有るやら左やら、病人よりも醫者殿の脈打斷るばかりなり。然れ共心を押鎭め、春「何と御頭痛の氣味有て、冷々と惡寒などは參らぬか」姫「否別に左樣の事もなし」春「ムヽウ御食に變る事もなく、酸い物などをお好はないか」姫「否否そふした事もなし」春「ムヽウ胸先へ時々ぬつと突上、臍の邊を滑々と、ぬらつく儀などは御座なきか」姫「チウ痞は持病の事なれば、苦にも成ず」と宣へば、春「然れば先御懐胎とも申されぬ。然らば御脈」と合口脫ぎ、揉手をして、「ハアウムヽウ」と目を閉ぎ六脈靜に考ふれば、浮大にして活々と溢れたり。「南無三寶懷妊」と、言んとせしが「待暫し、言へば姫の恨あり、言ねば後の不調法」と、頭を傾くれば伊東親子、片唾を呑で目

ゐんげん—未詳

配劑仕かね—處置をしかねる

年長者めが、年頭八朔藏納、百姓並の禮式も、無禮なりと聞けるが、牛若とやら猿若とやらんを、聟に取たるゐんげんな。彼の賴朝は昔の交誼、我が慈悲心にて隱匿しに、聟よ嫁よと綽名を立られ、平家の咎、山木が方への聞えと云ひ、皆長者めが言觸す。田地を取上げ知行所を追拂へ。證人なれば法眼、お手前も科は遁れぬ。早々矢矧へ使を立よ」と、氣色變つて見えければ、嫡子の祐重進み出で、「仰には候へ共、若し姬と佐殿と、夫婦のかたらひ實にて候はば、世間の沙汰も僞ならず、却て此方の疎忽なり。先暫く御穩便然るべし」と制すれ共、父「否々夫叶ふべからず。賴朝を聟にせば、長者輩と緣者に成る。一門の參會にも、彼奴等と膝を組ん事、伊東の家の瑕瑾なり。我娘から穿鑿せん。局はなきか。姬を是へ連來れ」と、討ても捨べき顏色に、歸られもせず折惡く、參り係て法眼も、配劑仕かねて見えにける。局奥より走り出、「姬君樣の御行儀の、惡いと申すも妾が科。氣の細い上﨟の、御氣合に障れば一大事。先重ねての御詮議」と、事を解て詫けれ共、父「否々姬が身の難義ぐ事、臆するは心得ず。ムヽ扨は賴朝と忍び會しに極つたり。病氣と云ふも懷姙ならん。法眼に脈察らせよ。早ふ〳〵」と責附られ、局も今は爲方なく、奥に入れば姬君も、「スハ死ぬる瀨か生る瀨の、産より怖き親兄の、假令不興は受く

渡らいでは―行かざらんや

十文盛―飯一杯の價

藥師如來―衆生の病患を救ひ給ふ佛なれば自分によせていふ

代取ると見附たら、琉球へも渡らひでは。領内に住むと思ひ、道中の十文盛掻込だばかりで、宿へ著ても藥師如來ぞ。茶も喫ずに駈附た。此上のお恨みは、せうことない」とぞ呟きける。伊東眼に角を立て、「ヤア辯舌過た法眼。醫者の慣ひ遠國他國へ行は尤。祐親が用とならば先を振捨立歸るべき道ならずや。使を受て十日餘り、逗留せしは祐親を、疎略にするにあらずや」と、席を叩て怒れども、春樂少しも謝辭ず、春「ムヽ扨は御存知なさそうな。此度は三河の國矢矧の長者の一人娘、淨瑠璃御前の氣色療治に參りしが、伊東殿より急なる御用、歸らねば叶はぬと、達て斷り申せ共、母の長者合點致さず。伊東殿は大名でも、押もおされもする身でなし。源氏左馬の頭義朝の八男牛若君、今奧州にて九郎義經と云ふ人を、聟に持たる長者なり。伊東の姫君藤の前は、賴朝と夫婦と聞く。互に源氏の相嫁、伊東の姫が大事なれば、長者が姫も大事なりと、理窟詰に止められ、夫故の逗留。いかな〳〵此春樂、不調法は仕らぬ。アヽ言ても下さるな」と、張肘してぞ居たりける。祐親濶と腹を立、「ヤア子供あれを聞け。何條矢矧の長者めが、伊東と相嫁なんどとは、緩怠過たる言分。惣じて遠州濱名、三河の矢矧此兩所は、平家より御加增あり、十年以來祐親が知行にて、長者も我が百姓ならずや。此一兩

四枚肩―舁手の四人つける駕籠

長羽織―氣の長いにかく

一圓に―全く、とんと

日餘り相待共今日まで歸らず。他の醫者に掛られ然るべし」と云ければ、祐親大きに氣色を損じ、「我儘千萬なる醫者め哉。我領内に住からは、三日路五日路遠方に、如何なる病人有りとても、打捨て歸る筈。十日に餘つて遲參するは、言語同斷の慮外者。元首に繩附て引摺寄よ」と云ふ所へ、門外に四枚肩、「春樂お見舞」「扨宜處」と祐清は玄關に立出、祐「ヤ法眼御出か。遲しとて父祐親、以ての外の不機嫌。早ふ〳〵」と促ても急ぬ醫者の心の長羽織、炮烙頭巾の縮緬皺、伸々と座敷へ通り、春「此中は度々御使下されてござれ共、寒天の時分なれば、彼處には疝氣が發つたは、此處には子が産れるは、此方の婆が二階から落られた事の、隣の嫁に子の妊る灸點してくれのと申して、一圓に寸暇を得ず。其上に五日路程、遠方へ療治に參り、唯今罷歸つた」と、言へども伊東返答せず。春「姫君の御病氣とは、如何樣にかな」と尋ぬれ共、猶顏搖て應對はず。春樂元來一徹者、「伊東殿のお召と聞き、とつかはとして參つたが、人違さうな」と、佛頂顏にて立んとす。祐清見かねて、「仔細を聞かずば道理々々。父祐親は貴殿の御出遲しと有る當座の恨、其斷申さるれば濟事」と云ひければ、春「是祐清殿、慰みに醫者は致さぬぞ。春樂が匙一本で、照ても降ても十二人口糊ねばならぬ。伊東殿に我家内養ふては貰はず。藥

瓶子限り—德利のあるだけ

和ぎ初し—古今集の序文をとる

木共に狐の所爲、人を誑すも知難し。今日の殺生は賴朝が申し受るぞや。麓に降つて今一獻。疾々」と宣へば、侍「實にも可惜醉醒たり。瓶子限りに飮續け。御供せん」と獻酬す、若侍の血氣酒、上戸の腹の石橋山。賴朝は空洞木に、軍理の工夫を得給ひて、扨こそ山木が合戰に、命を免れ給ひしも、此空洞木に隱れたる、一時の慈悲も善心の、終には朽ぬ石橋山。雪も心も二重色深く、戀の道には鬱れ易き、伊東祐親が乙娘、藤の前は仁義を知り、忠節深き生れ附。佐殿は古への、御主筋ぞと傅きに、影をも踏ず後にせず、膝も直さず慇懃に、堅い女の何時の間に、和ぎ初し大和歌、言葉のてには緣と成り、御寢室近く賴朝の、胤を身に持つ青梅や、心鬱病縶帶の、廻る日數も重なりて、七月にこそ成にけれ。父祐親は斯とも知らず。嫡子河津の祐重、二男祐淸を招き、「妹藤の前が事當國の目代、山木の判官兼高より望まれ、早速婚禮有たき由、度々使に預れども、姫が病氣捗々しからず、延引に及びしが、此比は取分起居も重く見えたれば、急に快氣も有るべからず。生田法眼春樂は姫が合醫者、殊に領内の住人、内外共に心安し。療治をも見立て、祝言を急ぐべし」と言ければ、祐重承り、「さん候。我々も左樣に存じ、法眼を召し候へば、遠方へ療治に參りし由、飛脚を以て呼返させ候へ共、先も大事の病人とて、十

朝は聲を掛、「ヤレ狼狽者、此隙に何國へも、逃て助かれ〳〵」と、呼はり給へば手を合せ、非「ア、御恩徳有難し」と、喜びても隱所なく、七抱餘りの古木の楠の、空虚の洞にやうやうと、這ふ〳〵助かり入にけり。賴朝空洞を差覗き、「扨深山の奇特とて、何千年にか成ぬらん。斯る古木も有るものか。此空洞の深き事、假令ば十人二十人、五日七日隱れんに、誰れ知る人は有まじ。某一度義兵を擧ば、軍の習ひ敗軍すまじき物でもなし。是第一の隱所、敵を搜す便も有り。祕密の空洞木正八幡の御神託。伊東を始め近國の武士迚も、心未だ一致せず、昨日の情今日の仇、今日の味方は翌日の敵。彼等にも猶匿まん」と、四邊の雪を掃寄て、空洞を埋む頓智の程、人君の器量備つて、六十餘州を掌の内に握り給はん常々の、心掛こそ啻ならね。斯とは知らず谷々より立歸り〳〵、侍「御獲物は」と問ければ、賴「然れば〳〵。既に追詰捕て伏、一討にとせし所に、忽ち年老狐と變じ、峯を越て飛失せたり。流人となれば口惜や、源の賴朝が狐抔にも魅さるゝ」と、實しやかに宣へば、伊東會澤竹の下藤内藤五齒噛をなし、「エ、古狐の骨張め、最前に打殺し、皮引剝でくれんず物、無念千萬。ヤア此空洞木は心憎し。いで〳〵入て搜せや」と、罵り騷げば賴朝重て、「ア、狐の出入洞の口、雪の埋まん樣もなし。神通の獸なれば、空洞

小竹筒—竹筒の食器

交野—河内にあり、雉しにかく

の土民なるが、永く脚氣を煩ひ、僅少の田地にも離れ、妻には飽ぬ別れを致し、何を生たる甲斐の國、少しの縁者を尋ねて、是迄膝行參りしが、山道の大雪に持病の痛骨も碎け、一足も曳れず凍死する口惜さ。御推量遊ばせ。アヽ痛々」と顔顰、涙を流すぞ不便なる。若者共打笑ひ、「然れば何國の咎もなし。むだ〳〵と凍死なんより、源氏右兵衛佐殿の、御手に掛つて成佛せい。サア御慰みに大袈裟を遊ばせ。我々は一の胴二の胴、毛脇提燈八枚目。雪を土壇の試物、珍らしからん」と聞くにぞ、頼朝は仁心深く、無益の事とは覺せども、今は彼等が情にて、世を諂らふ頼朝なり。氣に背きては惡かりなんと、莞爾と笑ひ、「さる事なれ共去りながら、熊猪の代ならば、彼奴に小竹筒の食事を與へ、力一杯逃させ追詰て討取るこそ、狩の學びの遊興ならめ。それ〳〵」と有ければ、侍「實に御尤。サア今が最後ぞ。腹は裂ふが破れふが一生の喰德。先餓鬼道は氣遣ひなし」と、酒飯口に押入々々、「走れ〳〵」とどよみをつくり手を叩く。無慙やな遁れても、遁れ交野の疲の雉の、逃るとすれど足立ず。這ふつ膝行つ搔分けて、雪をば口に息繼の、潤す咽も渇き果、叫ぶに聲も出ばこそ。頼朝は唯助けんと、態と雪に踏込々々、追附難て見へ給へば、侍「取逃しては不覺なり。お先へ廻つて打ち留めよ」と、皆々谷へぞ降たりける。頼

合子—蓋のある食器

つらゝゐて—氷がはりて

歡樂に、暫時御座をぞ召されける。伊東が三男九郎祐清盃受持ち、「如何に方々、數ならね共父祐親、我君を隱匿參らせ、御浪人の御徒然を慰奉る處に、各近國の交誼とて、今日の御馳走、身に取ての大慶、君も甚だ御滿足。去りながら春の雪間の比ならば、猪熊などを狩出し、物頭に馬合つけ、鏑の遠鳴させざるが殘念なり」と言ひければ、竹の下の孫八聞も敢ず、「否豫て催す鹿狩こそ、馬をも卒子をも頼むべけれ。一座一興の御遊覽、卒や面々雪の下伏す兎狸、手捉に引摑み熊猪を拔打にして、熊膽の苦味を肴に、一盃づつは如何に」と云へば、藤内藤五會澤の彌五郎、「ヲヽ美くも申されし。鳥獸の血に染て、紅葉の山に爲すべし」と、一盃機嫌の阪東武者、雪を踏立氷を蹴割、谷に降り尾上に登り、えい〳〵聲して 三重 狩けるが、雉子の一羽も立たずして、楢柴茂る斑消に、齒朶の葉被き折敷て、蠢き出るを、「スハ伏猪よ、我仕留ん」と馳寄れば、非人と覺しく二十許の瘦男、鬢も棘につらゝゐて、唇寒き呼吸の下、「唯御憐み御助け」と、凍臥てぞ泣き居たる。情も知らぬ田舍武士、「是れ珍重の御慰、瘦ても人間鹿熊よりは勝なり。首討は常の事、胴切か縱割か斜斷か」とぞ立騷ぐ。頼朝御覽じ、「須臾候。山中と云ひ雪中に、非人の在べき樣はなし。抑も汝は如何なる者ぞ」と宣へば、此男頭を擡げ、「我等は相州

松の雪云々―松の雪のみ緑かげにて云々（源氏末摘花）

東方朔―漢文帝に仕へて寵あり或時西王國の桃を竊み食ひ仙人となれりと傳ふ

名に立つ末野―我袖は名に立つ末の松山か空より浪の越えぬまぞなき（源氏末摘花）

海の幸―兄火闌降命自有海幸、弟彦火火出見命自有山幸云々（日本書紀）

は、咲ぬ梢も有つべし。槇も檜原も押靡て、咲きも殘さぬ花の雪、折らでも袖に掻入て、歸る家路も入る山も、白妙匂ふ空の色、朝日夕日の影までも、共に凍りて松の雪、暖氣なると書たるも是ならん。峯の梢の滴りは、氷柱と成て谷陰に、音無き瀧の白糸に、群集る鳥も埋れて、皆白鷺と山の井の、氷の鏡と己れさへ、影に驚く翥や、はつと掃へば色々に、鷺も烏も現れて、雪に繪を描く風情かや。雲居る方は何國ぞと、土肥の杉山奥深く、爪木の道も杣人の、通行も絶て是や此、東方朔が沓の跡、誰炭竈の薄煙、横斷る風に簇々と、消て亂るゝ幾條の、末は結びて靡合ひ、折臥岡の偃蓋松、己と枝の起反り、さら〳〵颯と翻るゝ其景色、名に立つ末野と言置し、末摘花の閨の雪、花に擬へて吉野山、月に譬て更科を、更に見るよと見下せば、伊豆の海面遙々と、漕來る舟の數々の、苫も艫板も埋れて、雪に聲あるから櫓の音の、からりころ〳〵やらんやら。お目出鯛釣る海の幸、雪は貢の山の幸、彼山海の幸がへせし、神代を今に見る事は、再び頼朝が秋津島の海山を、手に握るべき兆ぞ」と、數獻に廻る御盃。「曉梁王の園に入らざれども、雪群山に滿。夜廋公が樓に登らねども、月千里に明なり」と、朗詠を遊ばせば、御馳走の若侍今樣を唄ひ舞、辨當合子の足利椀、盞を變ての雪見酒、寒風却て春風と、左扇の

源氏冷泉節

上之巻

下行く水云々—零落せし源氏が段々と名高くなるをいふ

花の朝云々—春秋の景色につけて

紛はぬ花—夕日影さすかと見えて雲間より紛はぬ花の色ぞ近づく（續拾遺集）

見渡せば松の葉白き石橋山、幾世凍りし雪ならん。年は安元二年の冬の日數も積る雪、下行水の音までも嵐に咽ぶ源の、右兵衛佐頼朝は平治の亂に流人と成り、伊豆の配所の憂住居。伊東の次郎祐親は、當國一の大名とて、深く賴み在ませば、伊東が一族本間澁谷、大場糟谷曾我岡崎、「今こそ平家の郎從なれ。昔の恩を忘れじ」と、花の朝に霞汲、紅葉を焚月の暮、時に隨ひ折に觸御心を慰むる、人の情に佐殿も、打解月日をおくり給へば、近國の若侍吉川船越佐越の十郎、天野の藤內狩野の藤五、竹の下孫八抔を始として、「卒や殿原、流人右兵衛佐殿の、御冬籠の徒然を慰め申さん」「尤」と人別に一種一瓶して、冷る野掛の暖め酒、竈に焚む石橋山、拂はぬ雪も盃の、醉に解つゝ吹下す、峯の吹雪も御酒宴の、ざゝんざ調る計なり。佐殿興に入り給ひ、「實にも榮ある景色やな。紛はぬ花と詠ぜし

尾籠—無禮

かくて我君御座を立たせ給ひければ、大名小名つゞいて座敷を立ち給ふ。景清君の御うしろ姿をつく〴〵と見て、腰の刀をするりと拔き、一文字に飛びかゝる。おの〳〵「是は」と氣色をかへ、太刀の柄に手をかくれば、景清すさつて太刀を捨て、五體をなげ打ち涙を流し、「あゝ南無三寶あさましや。何れも聞て給はれ。かく有がたき御恩賞を受けながら、凡夫心の悲しさは、昔に返へる恨の一念、御姿を見申せば、主君のかたきなる物をと、當座の御恩は早や忘れ、尾籠の振舞面目なや。眞平御免をかうぶらん。誠に人のならひにて、心にまかせぬ人心。今より後も我とわが身をいさむる共、君を拜むたびごとに、迚も此所存は止み申さず、かへつて仇とやなり申さん。とかく此兩眼のあるゆゑなれば、今より君を見ぬやうに」と、いひもあへず差添ぬき、兩の眼玉をくり出し、御前にさし上て、かうべをうなだれゐたりける。賴朝は甚だ御感あり、賴「前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬごとく、又賴朝が恩をもわすれず、末世に忠をつくす事、仁義の勇士、武士の手本は景清」と、數の御褒美淺からず、鎌倉差して入り給へば、なほ景清は觀音に、三萬三千三百卷の、普門品を讀誦して、日向の國を本領し、悅び〳〵退出す。「なほ〳〵源氏の御繁昌、國靜謐の始めなるは」と、みな萬歲をぞとなへける。

物々しや云々―小癪なと云ふに
夕日を掛
うち物―薙刀、
案の内より打に
言ひ掛く
錣―兜の鉢の後
方にありて頸を
被ふもの

なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に分つて、互に勝負を決せんと欲す。能登守教經宣ふやう、去年播磨の室山備中の水島、鵯越にいたるまで、一度も味方の利なかつし事、偏に義經が謀いみじきによつてなり。いかにもして九郎を討取る謀こそあらまほしけれと宣へば、景清心に思ふやう、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ、命をすてばやすかりなんと、教經に最期のいとまごひ、陸にあがれば源氏のつはもの、餘すまじとぞかけむかふ。景清是を見て、物々しやと夕日影に打物閃めいて、切てかゝればこらへずして、刄向たる兵は四方へばつとぞ逃げにける。さもしやかた〳〵よ。源平互に見る目もはづかし。一人をとめん事はあんのうち物小脇にかいこんで、なにがしは平家の侍、惡七兵衛景清よと、名乘かけ〳〵手取にせんとて追うて行く三保の谷が著たりける兜の錣を取はづし〳〵、二三度逃延びたれ共、思ふ敵なればのがさじと飛びかゝり兜を押取り、えいやとひくしほに、錣は切れてこなたにとまれば、ぬしはさきへ逃げのびぬ。はるかにへだてて立かへり、三重さるにても汝おそろしや。腕のつよきといひければ、景清は三保の谷が、首の骨こそ強けれと、笑つて左右へのきにける。昔をわすれぬ物語お恥かしう候」と、語り給へば人々は一どにどつとぞ感じける。

經に、大神咒を以て乾枯樹を咒せしに尙枝柯花果を生ず

いで其頃云々ー以下謠曲景清の文句

り、佛の御ぐしをつぎ參らせ、宿坊に入らせ給ひける。時に佐々木畠山景清夫婦を伴ひ御前に出らるゝ。賴朝御覽じ、「珍らしや景清、我を平家の敵とて狙ひ討べき心ざし、神妙神妙。尤も武士の憤げにさふも有るべけれ。然れば賴朝がためには御邊又敵なれば、うつて捨つべきものなれど、汝が身には觀世音の入替りましますゆゑ、二たび害せば觀音の御頭を二たび打つ道理、もつたいなし〱。もし又賴朝運盡きて、御邊に討たるゝ物ならば、觀世音の御手にかゝると思ふべし。此上は助け置き、日向の國宮崎の庄を宛行ふ」と、御懇誠の御詞に御判をそへて給はりける。景清涙をとゞめかね、「誠に身に餘りたる御諚の段、生々世々に有難き、魂に徹つて覺え候。かくなさけある我君と知らで、狙ひ申せし景清が、所存の程こそくやしけれ」と、御前をも打忘れ聲を上げてぞ泣きゐたり。さて御土器給はり、諸國の大名殘りなく、皆々さかづきさし給ふ。重忠仰せけるは、「斯るめでたき折といひ、かつは我君御なぐさみのため、和殿八島にて功名のやうす語て聞せ給へ。内々君も御所望ありしぞ。平に〱」とありければ、賴朝公をはじめ參らせ、滿座の人々一同に、「早とく〱」とのぞまるゝ。景清辭するに及ねば、袴の裾をたかく取り、御前に色代し、過ぎし昔を語りける。「いで其頃は壽永三年、三月下旬の事

歷劫不思議—萬劫を歷て思議すべからざる御法（法華經）

枯れたる木に云云—千手陀羅尼

と仰せける。重忠なほ不審晴れず。諸大名立かゝり、よく〳〵見れば今迄景清の首と見えけるが、忽ち光明赫奕として、千手觀音の御首と變じ給ひける。歷劫不思議ぞ有難し。然つし所へ清水寺の大衆、我も〳〵と馳せ參じ、「抑も一昨日の夜中に佛前の蔀おの〳〵あきて候ゆゑ、もし盜人のわざにやと御戶をひらきて候へば、觀世音の御首斬れて失させ給ひ、切口より血流れて、禮盤長床朱に染み、勿體なき御風情に拜まれさせ給ひ候故、驚き入て御注進申上候」と、事の次第を申上れば、君を始め奉り、畠山も高綱も、供奉の上下おしなべて、「あつ」と感ずるばかりなり。君信心の感涙をながさせ給ひ、賴「誠や景清、年來清水寺の觀世音を信じ奉り、十七の春より卅七の今日迄、毎日卅三卷の普門品を讀誦懈怠なく修行せしと聞けるが、疑ひもなく觀世音、兵衞が命にかはらせ給ふ有難さよ」と、御手を合せ給ひければ、僧俗男女下々迄、皆々禮拜恭敬して、涙を流さぬ者はなし。重ねての御諚には、賴「かくては如何勿體なし。急ぎ千人の僧を供養し、一萬座の護摩置かせ、御ぐし繼ぎ奉れ。法事の上にて景清にも對面致すべし。いざ賴朝も參詣せん」と御身を淨め、佛の御ぐしを直垂の袖にうけ入れて、清水寺への御參詣、例まれにぞ　三重

聞えけれ。枯れたる木にも咲く花の、千手の誓ぞ有難き。かくて賴朝御法事も事をは

寢惚れ―ねぼける

物かな。景清は佐々木の四郎に申附け、一昨日の暮程に首を打せ、卽ち其首頼朝が見參して獄門にかけさせしが、僻事成るか」と仰せける。重忠重ねて、「其段は存ぜず候へども、重忠は今朝景清が生顏をたしかに見て參り候」と、いひもはてぬに佐々木の四郎つつと出で、「いや是畠山殿、筋なき事な申されそ。其景清は某仰を承り、高綱が手にかけ首を刎ね、我君の實驗にそなへ、三條畷に獄門にかけて候物を、景清がふたりあるべきか。近頃粗忽千萬」と、嘲笑うてこそ申さるゝ。重忠聞給ひ、「尤々御分が手にもかけつらめ、又重忠も確に見て候はいかに」高綱色を違へ、高「はて埒もない事、一度切たる景清が、蘇生るべきやうもなし。それは定めて血迷ふて何がな見つらん。但しは寢惚れて夢をばし見たまふか」重「いやさ御分ば狼狽て、よしなき者を景清と思ひ、切たるか」高「夢を見たるか」重「慌てたるか」高「是日を覺して思案せよ」と、氣色かはつて爭ひける。頼朝だん〳〵聞召し、「いか樣佐々木畠山粗忽ある人にてなし。不思議千萬晴れやらず。是より取て返し、頼朝直に見分くべし。おの〳〵鎭れ〳〵」と、御馬の鼻を立なほし、都にかへらせ給ひける。去程に三條畷に景清の首を切かけ、平家の一族謀叛の頭領、惡七兵衞景清と高札を添へられたり。頼朝立より御覽あり、高綱重忠を招き、「是見られよ」

なば、又大宮司やをのの姫、憂目を見んは必定」と、思ひ定めて立歸り、もとの牢屋に走り入り、内よりくわんぬきしとと締め、千筋の繩を身に纏ひ、さあらぬ體にて普門品、讀誦の聲はおのづから、卽身菩薩の變化ならんと、皆感ぜぬものこそなかりけれ。

第五

かくて其後、右大將賴朝公、南都の大佛御再興ましまし、既に成就と訴ゆれば、供養の報謝に急ぎ大赦を行ふべしと、天が下の科人京鎌倉の牢を開き、殘らず御免なされける。中にも悪七兵衞景淸は大事の朝敵重罪なれば、助くるに所なく、佐々木の四郞に仰せ附られ、終に首を刎ねられ、今は四海太平なり。大佛供養御聽聞有るべしと、諸國の大名御供にて、南都に御下向なされける、路次の行列三重花やかなり。すでに我君、小倉堤にさしかゝり給ふ時、畠山の重忠息をばかりに馳せ來り、御馬の前に蹲づき、重「扨も惡七兵衞景淸は御成敗のよし承り候へ共、未だ恙なく牢の内に罷有り候。一大事の囚人なれば、早々首を刎られ然るべく候はん」と謹んで申し上る。賴朝聞召し、「不思議の事を申す

小倉堤―巨掠池の堤、山城宇治のほとり也

振づんばい—振擲也、手なくして擲を打つ如き叶はぬ事にいふ（俚言集覧）

痃癖—頸より肩へかけて引きつり痛む病

切れてのいた—切れて仕舞うた

摑みひしいで捨てんず」と、はつたと睨んで申さるれば、十藏から〳〵と笑ひ、「其縛にあひながら、某をつかまんとは、腕なしの振づんばい。片腹いたし事をかし。幸此頃痃癖痛きに、ちつと摑んで貰ひたし」と、空うそぶいてぞゐたりける。景清はらにすゑかね、「いでものみせん」といひもあへず、「南無千手千眼生々世々、一聞名號滅重罪、大慈大悲觀音力」と金剛力を出し、「えいやつ」と身揺すれば、大釘大繩ばら〳〵ずんと切れてのいた、閂取て押ゆがめ、扉をかつぱと踏倒し、大手をひろげて跳り出で、八方に追廻すは荒れたる夜叉の三重ごとくなり。むらがる若黨中間はらり〳〵と蹴倒し、十藏を掻摑み取て追伏せ、脊骨も折れよとどうとふまへ、景「何と景清を訴人して御褒美にあづかり、榮花といへるは此事か」と、二つ三つふみ附れば、十「なふかなしや。骨も碎けて息も絶え入り候。御慈悲に命をたすけ下され」と、聲を上げて泣にける。景清手を叩き打笑ひ、「ヲヽ某が褒美には、廣い國をとらせん」と、兩足取て逆さまに引上げ、肩をふまへてえいやつと裂きければ、胴中より眞二つに、さつと裂けてぞのきにける。「エヽ心地よし氣味よし」と、左手右手へからりと捨て、「さあ仕濟たり。此上は關東へや落行かん。いや西國へや立退ん」と、行きつ戻りつ戻りつ行きつ、一町ばかり走りしが、「いや〳〵此度落失せ

しなしたり―しくじったり
偏執―恨み嫉み
いきぼね云々―壁ても立てぬか
いかつはいで―いかめしげに

けてぞ泣きゐたり。物の哀れの限りなり。かくとはしらでいばの十藏、梶原がとりなしにて、少々勳功に預かり、若黨小ものあまた連れ、遊山より歸りしが、此體を見て肝をつぶし、伊「是は扨しなしたり〳〵。不便の事を見る物かな。これ侍共、我此如く御恩賞を受け、榮耀榮華に榮ゆるも、きやつ等を世にあらせんため。この頃方々尋ねしかども、行方のなかりしが、扨は何者ぞ偏執を起し害せしか。たゞしは大宮司がはからひと覺えたり。よし何にもせよ。なほ景清に言分あり。先々死骸を取おけ」と、傍らに葬ぶらせ、牢屋にむかつて立はだかり、伊「是さ妹むこ殿、いかに怨あればとて、現在の妻子を殺させ、腕かなはずば、などいきぼねでも立ざるぞ。ない〳〵は某御邊が命を申しうけ、出家させんと思ひしが、最早ほつてもならぬ〳〵。侍畜生大だはけ」と、いかつはいでぞ申しける。景清くつ〳〵とふき出し「こりやうろたへもの、あのもの共はおのれが貪慾心をかなしみ、自害したるが知らざるか。それさへあるに、うぬ奴が口から侍畜生とは誰が事ぞ。命惜しむ程ならば、かゝる大事をたくむべきか。また生樣と思ふ程ならば、べろべろ柱の五十や百、此景清が物のかずと思ふべきや。心靜に觀音經どくじゆする嬉しさに、なぐさみ半分に牢舍して有るものを、くわんたい過ぎたる嚙言つき、一二言と吐かば

息を計り――息の限り

寄せ、守刀をずばと拔き、「南無阿彌陀佛」と刺し通せば、いや若おどろき聲を立て、「いやいや我は母樣の子ではなし。父上たすけ給へや」と、牢の格子へ顏を差入れ〳〵、にげあるく。阿「エヽ卑怯なり」と引よすれば、「わつ」といふて手を合せ、若「ゆるしてたべ。こらへてたべ。あすからはおとなしう月代も剃り申さん。灸をもすゑませふ。扨も邪見の母上樣や。助けてたべ父上樣」と、息を計りに泣きわめく。阿「チヽ理りよ去ながら、殺す母は殺さいで、助くる父御の殺さるゝぞ。あれ見よ兄もおとなしう死したれば、おことや母も死なでは父への言譯なし。いとしいものよ、よう聞け」と、すゝめ給へば聞入つて、若「あゝそれならば死にませふ。父上さらば」といひ捨てて、兄が死骸に寄かゝり、打あをのきし顏を見て、いづくに刀を立つべきぞと、阿古屋は目もくれ手もなへて、まろび伏してぞ歎きしが、「エヽ今はかなふまじ。必らず前世の約束と思ひ母をばし怨むるな。追附行くぞ南無阿彌陀」と、心元をさしとほし、「さあ今はうらみを晴し給へ。迎へ給へや御佛」と、刀を咽に押あて、兄弟が死骸の上にかつぱと伏し、共に空しく成り給ふ。扨も是非なき風情なり。景淸は身をもだへ、泣けどさけべどかひぞなき。「神や佛はなき世かの。去りとてはゆるしてくれよ我が妻よ」と、鬼をあざむく景淸も、聲を上

獅子身中蟲―仁王經に出づ

もな、今のくやみをなど最前には思はざりしぞ。されば天竺に獅子といふ獸あり。身は畜生にてありながら、智慧人間に超えたれば、狩人にもとられず、却つて人を取食ふ。されし共腹中に蠹毒といへる蟲あつて、此蟲毒を吐くゆゑに、體を破つて自滅すなり。されば女の嫉妬の仇、人を恨むと思へ共、夫婦はおなじ體なれば、皆是わが身をせむることわり。和御前がやうなる我慢愚痴の猿智慧を、獅子身中のむしに譬へて、佛も戒しめ給ふぞや。汝が心一つにて、本望とげずあまつさへ、恥辱の上の恥辱を取り、今いひわけして妻子がなげくを、不便よとて日本一の景清が、再び心をかへすべきか、何程いふても汝が腹より出でたる子なれば景清が敵なり。妻とも子とも思はぬ」と、おもひ切てぞゐたりける。阿「扨は何程申しても御承引あるまじきか」景「チヽくどいく。見苦しきに早々かへれ。思ひ切たぞ」阿「なふもはやながらへて何方へかへらふぞ。やれ子供よ。母があやまりあればこそかく詫言いたせども、つれなき父御の詞をきいたか。親や夫に敵と思はれ、御主等とても生きがひなし。此上は父親もつたと思ふな。母ばかりが子なるぞや。みづからもながらへて、非道の浮名ながさん事、未來をかけてなさけなや。いざもろ共に死出の山にていひわけせよ。いかに景清殿、わらはが心底是迄」と、いや石を引

誓落―非に落つる

さりとては―左様にお腹が立つとはいへ

いたすほど皆言落にて候へ共、今迄の好しみには、道理一つを聞分けて、唯何事も御免あり、今生にて今一度、詞をかけてたび給はば、それを力に自害して、わが身の言わけ立て申さん」と、地にひれ伏してぞ泣き居たる。無慙やな、いや石父が姿をつく〴〵見て、「なふ父上程の剛のものが、なぞやみ〳〵とは捕はれ給ふぞ。いで押しやぶつて助け奉らん」と、柱に手をかけ、「えいや〳〵」と押せ共ゆるがばこそ。ふびんなりける所存なり。弟のいや若は、ほだしの足にいだき附、「いたいかや父上様、なふいたむか」と、撫上げ撫さげさすり上げ、兄弟わつと叫びければ、思ひ切たる景清も不覚の涙せきあへず。ややあつて涙をおさへ、景「やれ子供よ。父がかやうに成たるはな、皆あの母が悪心にて、縄をも母が掛させ、牢にも母が入れけるぞ。邪慳な母が胎内より出たる者と思へば、汝ら迄が憎いぞや。父とも思ふな、子とも思はじ。はや〳〵帰れ」と叱るにぞ、子供は母に縋り附、「なふ父をかへしや、父上かへしや」と、ねだれ嘆きし有様は、目もあてられぬ次第なり。あこやは餘りたへかねて、阿「よし此上はみづからは兎も角も、可愛やな兄弟に、優しき詞を只一言、さりとてはかけてたべ。なふ子は可愛いうは思さぬか」と、又せき上げてぞなげかるゝ。景清重ねて、「おことがやうなる悪人に返事もせじとは思へど

先途―なりゆき
あられぱこそ―反語、あられず

期の先途を見とゞけ、兎にも角にもなり參らせん。一日も一時も御命のあらん內は、往生の御營みを心にかけて何事も、定まる事と思召し、人を恨み給ひそよ。いつ迄も是にありたく候へども、人目しげう候へば、明日又參り申さん」と、泣く〳〵歸り三重給ひける。是は扨き置き、阿古屋の前、いや石いや若もろ共に、山ざき山の谷陰に、深くかくれておはせしが、景清牢舍と聞くよりも、我身もあるにあられぱこそ、六波羅に走り付き、此體を一目見て、「なふあさましの風情やな。やれあれこそ父よわが夫」と、牢の格子にすがりつき、泣くより外の事ぞなき。景清大の眼にかどを立て、「やれ物知らずめ、人間らしく言葉をかくるも無益ながら、かほどの恩愛をふりすて、夫の訴人をしながら、何の生面下げて今此所へ來りしぞ。おのれ、指一つかなひなば、摑みひしいで捨ん物を」と、齒がみをしてぞゐられける。阿「實に御うらみは理りなれ共、わらはが事をも聞き給へ。兄にて候十藏、訴人せんとせしを、再三留めて候所に、大宮司の娘をのの姫とやらんより、親しき御ふみ參りしゆゑ、女心のあさましさは、嫉妬の恨みに取みだれ、あとさきのふまへもなく、當座の腹立やるかたなく、ともかくもと申しつる、後悔さきに立たばこそ。さは去ながら嫉妬は殿御のいとしさゆゑ、女のならひ誰が身の上にも候ぞや。申譯

山出し―山育ちのあらくれ人足

文王は云々―二者共に罪なくして咎を得たる例

世間口を閉づ―世事をいはず

重に取ておし入れ、髪を七把にたばねて、七方へこそつたりける。足を牢より引き出し、左手右手へ取ちがへ、山だし七十五人してひいたる楠にてあげ、ほだしをうたせ、しつ鋌詰金、たう〳〵くるゝ千引の石材木を積み重ね、首には根堀の大筒を、二本迄かづかせたり。「諸人に見せて恥かゝせよ」と、番も警護も付けざれ共、なか〳〵五體働かず。されば文王は羑里に捕はれ、公冶長は刑戮にかゝれり。君がため名のため何ぞかつて討たれんと、觀音經の讀誦のほか、世間口を閉ぢたれば、聾聞耳に閉せり。はたらくものは兩眼のみ。見るめもかなしくあはれなり。いたはしやをのの姫、不思議のいのち助かり、牢屋ちかきに宿を取り、酒菓物をとゝのへて、牢屋の格子に立寄り、いたはり給ふぞ哀れなり。やう〳〵として景清、心地よげに酒をのみ、景「今日は一しほ骨髓にとほつて候。まことに御身の心ざしいつの世にかはわするべき。扨かりそめながら某は天下の朝敵、さだめて最期も遠からじ。今景清が生きたる顔をかたみにて、疾々御身は尾張へ下り、後世弔ふてたび給へ。これに付けても阿古屋めが心底のうらめしさよ。二人の子供も今は早や、殺してや捨てつらん。思へば〳〵景清が運のつきこそ口惜しけれ」と、恨みかこちて泣き給ふ。姫君も涙をながし、「御仰せはさる事なれども、とてもみづからは御最

神妙―感心なり

ば、重忠大宮司を同道にて、六條河原に馳せ來り、重「さても景清人の難儀を救ひ、我身を名乘りて出らるゝ段、近頃神妙、尤もかうこそあるべけれ」此上はをのの姫、大宮司共に御赦免なさるゝ條、景清に繩をかけ、急ぎ引立申すべし」畏て人々、「繩よ綱よ」と犇けば、景清よろこび、「それこそ望む所よ」と、おのれと千筋の繩をかゝり、先にすゝめばをのの姫、「なふみづからも諸共」と、駈出で取付き泣き給ふを、大勢中を押隔て、あたりを拂つて引立て行く。彼の景清の心底、勇あり義あり誠あり、前代未聞の男なりとて、皆感ぜぬものこそなかりけれ。

蜘手―棒の多く十字に打違ひたる形

裏を返さず―釘の尖端を曲げず

第四

かくて其後、實にや猛將勇士も運つきぬれば力なし。不便やな景清、鎌倉よりの評定にて、六波羅の南おもてに、始めて牢を立させらる。櫟白樫楠の木栂の木、長さ一丈にとらせ、地へは七尺掘入れ、上三尺の詰牢にし、この木を以て蜘手格子に切組んで、一尺二寸の大釘の裏をかへさず打たれば、劍をうゑたる如くなり。七尺ゆたかの景清を、二

見參―お目にかかる

仰々しい―大層らしい

つみかさね、團扇をもつてあふぎ立て〳〵、天をかすめし黑煙は、焦熱地獄といひつべし。すでに責めんとせし所に、惡七兵衞景淸、いづくにてか聞たりけん。諸見物の其中を、飛び越え跳ね越え垣の中に躍り入り、「こりや景淸ぞ見參」とはつたと睨廻し、仁王立にぞ立たりける。姫君はつと肝潰れ、立寄らんとし給へば、人々取て引するゝ「すは景淸をのがすな」と、一度にはらりと取まはす。景淸から〳〵と笑ひ、「エ、仰々し。此景淸が隱れんと思はば、天にもあがり大地をも潛らんずれども、妻や舅が憂目をみるかなしさに、身をすて出たれば、もはや氣遣ふ事はなし。さあよつて繩をかけ、六波羅へ連れて行け。妻や舅を助けよ」と、手向ひしてんず氣色なし。姫君淚をながし、「口惜しの有樣や、みづからや父上は、生きてかひなき憂身なるに、御身は存らへ本望遂げんと思さずして、何とて是へは出で給ふ。あさましの御所存や」と、又さめ〴〵と泣き給ふ。景淸も淚をおさへ、「ヲウ賴もしの心底や。人は素性が恥かしゝ。子中をなせし阿古屋めは、夫の訴人をしたりしに、御身は命にかはらんとは、賴もしや嬉しやな。去ながら、父大宮司の御事、心もとなふ覺ゆれば、御身は是よりとく〳〵かへり、菩提をとふてたび給へ」と、鬼をあざむく景淸も、不覺の淚をながしける。理りせめて哀れなり。この事六波羅に聞へしか

津瀬の如くにて、目もあてられぬ景色なり。むざんやなをのの姫、息もはやたへ〴〵に、心も亂れ目くるめき、既に最期と見えけれども、いや〳〵武士の妻となり、心よわくてかなはじと、さあらぬ禮にもてなし、姫「いかにかた〴〵、夫の景淸つねに淸水寺の觀世音を信仰し、我にも信じ奉れと、深く敎へ給ふゆゑ、今とても尊號を、たえず唱へ奉れば、此の水は觀音の甘露法雨と覺えたり。今この水にて死する命は惜からじ。夫の行方は知らぬぞや。千日千夜も責め給へ。南無や大慈大悲のくわんぜおん」と、苦しき體をおしかくし、いさぎよくは宣へども、さすが強き拷問に、聲も濁りて身もふるひ、よわよわとなり給ふは、扨も悲しきしだいなり。源「此分にてはおちまじきぞ。やれ古木責にせよや」とて、細首になはを付、松の枝に打かけて、「えいや〳〵」と引あぐる。下せば少し息をつぎ、引あぐれば息たゆる。あはれといふも餘りあり。源「たとへいかなる鬼神も是にてはおつべし」と、二三度四五度責めければ、今はかうよと見えけるが、又目をひらき、姫「なふ梶原殿、此木の上に吊上られ、世界を一目に見おろせ共、夫の行方は見え申さず。かた〴〵もなぐさみに、ちつと上つて見給はぬか。是へ〳〵」と有ければ、景時腹にすゑかね、「扨々しぶとき女かな。此上は引おろし、火責にせよ」と、炭焚木を

落ち―白狀する

に、此ていをきつと見て、源「きやつが有樣たゞものならず。何ものざふ」ととがめける。姫君聞召し、「さん候。みづからは、尾張の大宮司が娘なるが、ゆゑもなきに父をとられ候ゆゑ、我命にかはらんため、是迄參り候」と、いはせもはてず景季、「ヲヽ、皆迄いふな。おのれが親の大宮司に、景清が行方を云へといへ共知らぬといふ。おのれは夫婦の事なれば、よも知らぬ事は有まじ。すでに清水坂の阿古屋は子のある中をふりすてて、一度注進申せしぞや。ありのまゝに白狀せよ」と、小腕取つていかりける。姫「なふ恨めしや。命をすてて是迄出る程の心にて、たとへ行方をしつたればとて申さふか。此上は水ぜめ火ぜめにあふとても、夫の行方は存ぜぬなり。唯父上を助けてたべ」と、聲もをしまずなき給ふ。源「ヲヽいふ迄もない事さ。おのれ落ずばたゞ置かうか」と、高手小手に縛りつけ、六條河原に引出し、種々に拷問したりしは、なふなさけなふこそ　三重　見えにけれ。梶原親子が奉行にて、方一町に垣をゆひ、つく棒さすまた鐵の棒、兵具ひつしと竝べしは、さながら修羅の獄卒が、八逆五逆の罪人を、苛責にかくるごとくなり。いたはしやをのの姫、あらき風にも當ぬ身を、はだかになして繩をかけ、十二の梯子に胴中を縛つけ、哀れもしらぬ雜人ども、湧桶に水をつぎかけ〳〵、「おちよ〳〵」とせめけるは、たゞ瀧

桑名―桑の弓にかく、桑弧蓬矢は悪魔を掃ふ

めざし―子供の額髪、めざしぬらすな沖になれ波（古今集）

青海苔云々―青海苔は逢ふ、かだのりは難し、相良布は不祥、神馬藻は名告るなにいひ掛く

土山―槌に掛く

悪魔はらへと取る弓の、桑名のふねに梶枕、敷寝の苫の荒席、肌に荒てつらけれど、戀する海士の鴛鴦の、夜の衾と見るめかや、かづく苅藻はなに〳〵ぞ。歌によまれしひじき藻や、かだめ甘海苔春もまた、和布まじりのめざしなす、鹽屋が軒に竹見えて、おさな鶯音をぞなく。花にまがひの櫻海苔、天をひたせば雲のりに、月を包みて刈るとはすれど、手にはとられぬ、桂男のアヽいぶりさは。いつ青海苔もかだのりと、身の相良布を神馬藻や。あら珍らしと荒布刈る、二見の浦ははる〴〵と、松のむら立色の濱、蒔繪にかくも似たるよな。あとは白雲とばかりを、故郷の夢と空さめて、庄野に續く龜山は、誰がため永き萬代と、嘆つ涙は堰もせで、何をか關の地藏堂。せめて未來をたのまばや。のぼりくだりてさかの下、谷の川瀬にからころと、なるは海鹿のなく聲か、小石流れて行くおとか。いや水のあはちる、玉でないよの、駒のひざぶしちんがらが、ちりからからりの、鈴鹿山、賤が草鞋の營みに、更てわら打つ土山や、だての旅路に行くならば、買ても給れ水口の、葛籠に笠に露もりて、おのがまゝなる鬢水は、櫛にたまらぬ亂髪、とく〳〵ゆけば洛陽や、六波羅にこそは二重著かれけれ。扨父上のおはします牢舍はいづくなるらんと、こゝかしこに彳み給へば、をりもこそあれ梶原源太、町まはりしてかへるさ

たつては—是非吟味しては

あこや云々—あこやや子供の愛に引かされて我懸中を裂かれんかと也—くひ〳〵—くよくよ、代に掛く

はず。土も木も源氏一統の御代なるに、一旦陳じ申すとて隠しとげられ申すべきか。聟に取りしを曲事とて誅せられんは力なく候。行方に於ては存ぜぬ」と、詞すゞしく申さるゝ。重忠仰せけるは、「尤も〳〵。たとひ行方を知つたればとて、聟の訴人はいたされまじ。たつては此方の不調法。いかに梶原殿、かの景清は仁義第一の勇士なれば、所詮大宮司を牢舎させしと傳へ聞かば、舅の難を救はん爲、己れと名乘りて出ん事は目前に見え候。此儀はいかに」と有りければ、おの〳〵「評定尤も」と、六波羅の北の殿に新造の牢を建て、大宮司を押込めさせ、巖しく番をぞ三重せさせける。人につらくはあたらねど、何の報や袖の露、涸もはてなでをのの姫、いたはしやこぞの春、つまは都へ去しより、あこやの松の夕しぐれ、染著られて若紅葉、こひや散らんとあけくれに、人目包のくひ〳〵と、案じ煩らふ身の上に、父は都の六波羅へ、擒となりてあさましや、憂目に逢せ給ふとの、その音づれをきゝしより、思ひに思ひ積み重ね、切てはうきにかはらんと、乳母ばかりを力にて、旅の衣手涙冷たきくれなゐに、紅絹裏濡れて夕ざれし、空飛ぶ鳥のかへるさに、物忘れせぬ故郷の、風もわが身にふきかへて、今の門出をはりぞと、國のなごりもつゝましく、身のたねまきし産の神、熱田の宮居伏拜み、父と夫とを安穩に

陳ぜば―僞を申さば

と景清は、さいもんを小楯に取り、入かへ〳〵大勢を左右にうけ、眉間眞額鎧のはづれ嫌はずあまさず三重打たつる。「こは叶はじ」と軍兵共、十藏を引つゝみ、六波羅さしてぞ引にける。景清「今は是迄」と、音羽の山の峯を越え、梢をふみわけ巖をおこし、飛びこえはね越え、刹那が間に飛ぶが如くに、あづま路さして落行きしは、誠に稀代の武士やと、扨感ぜぬものこそなかりけれ。

第三

かくて其後、悪七兵衛景清行方しれずなりたれば、もつとも天下の御大事と、諸國の所縁を詮議ある。中にも熱田の大宮司は現在の舅とて、千葉の小太郎搦め取て警護厳しく打つれさせ、六波羅に引据ゆる。梶原源太大宮司に對面し、「汝は當家の大敵平氏の落人景清を、聟にとるのみならず、剰さへ行方もなく落しける罪科甚だ輕からず。いづかたへ落しけるぞ。まつすぐに申せ。すこしも陳ぜば拷問せん」とはつたと怒つて申しける。大宮司聞給ひ、「仰の如く景清とは縁を結び候へ共、去年の春、國もとを立出で今に便も候

さうなく―一もニもなく、たやすく
しろみ―弱る
にへこむ―滅入る
でつく、丁稚、ぐし〳〵―双六詞の重五、重一、五四に對く
愚人云々―愚痴多者如燈蛾赴火（大智度論）

を空しく討たせては、觀音の誓願はいかならん。防げや〳〵法師ばら、支へよや下僧共」「承り候」と衣の袖を絞り上げ、獲物々〳〵を提げて、三十餘人の荒法師、五百餘騎につつさゝへて、命を惜まず二重戰ひける。五百餘騎が四方に分つて、隙をあらせず防げども、景清は飛鳥の術をえたれば、さうなく討れんやうもなし。雙方しろみて控へたり。景清緣端につつ立て、「今宵の訴人は妻の阿古屋、おなじく兄の十藏と覺えたり。おのれ數年の恩愛を振捨て、大慾にふける愚人共、勿體なくも此御寺に血をあやす奇怪さよ。とても世になき某が、おのれらが身のためならば、何條命をしからん。人おほく打たせんより、女房兄弟をりあひて搦めとれ」とぞわめきける。十藏が下人二三太といふもの、分別もなく飛んでかゝる。景清につこと打笑ひ、側にありける雙六盤、片手に取て投げつくれば、二三太が眞甲に、響き渡つて發矢とあたれば、首は胴にぞにへこみける。景「ヲヽでつくともせぬ丁稚めが、手柄しさうに見えたれども、ぐし〳〵となりけるは、誠に愚人夏の蟲」とたはぶれて立つ所を、十藏つゞいて切てかゝる。景清長刀押取のべ、「蟲同然のこつぱ武者、婆婆の訴人は是までぞ、閻魔の廳にて訴人せよ」と受つ流しつ切りむすぶ。江間の軍兵是を見て、「訴人討すな加はれ」と、どつと連ておし隔つる。「心得たり」

驗回したる—執念深い

直兜—揃ひて甲冑を著けたる兵

を晴してたべ」十「げによき合點」と立出れば、又「暫く」と引とゞめ、阿「とはいひながら、如何にうらみがあればとて、夫の訴人はなるまいか。いや又思へば腹も立つ。にくいは女め。エヽ是非もなや」と、或ひは止め或ひは勸め、身をもだへてぞ歎かるゝ。十藏袂をふり切て、「エヽ輪廻したる女かな。そこ退け」と突のけて、六波羅指して急ぎしは、了簡もなき三重しだいなり。斯くとは知らで景清は、清水寺に參籠し、とゞろきの御坊に通夜申し、同宿達に双六打たせ、助言してこそゐられけれ。頃は卯月十四日夜半ばかりの照月に、直兜五百餘騎、江間の小四郎大將にて、訴人の十藏まつ先にかけ、とゞろきの御坊を二重三重に取まはし、鬨の聲をぞつくりける。元來こらへぬ荒法師、門外につつ立て、御坊「そも此寺は田村將軍此方守護不入の靈地なるに、狼藉は何者ぞ。夜盜人なんどと覺えたり。あれ小僧共打とれ」と聲々によばはれば、江間の小四郎駒かけよせ、「さないはれそ法師たち。御坊に咎はなけれ共、平家の落人惡七兵衛景清今宵こゝに籠りしよし、伊庭の十藏訴人によつて、義時討手に向うたり。異儀におよばば寺ともいはせじ沙門ともいはすまじ、かたはし切て切ちらせ」といひもあへぬに、景「惡七兵衛是に有り」と切て出る。常陸の律師叡範此山を見るよりも、「慈悲第一の此寺にて信心の行者

いなせの便―善惡の音信

らはが二世の夫ぞかし。さ程に思ひする給はば、子供もわらはも害して後、心のまゝになし給へ。やあ生らん内はかなはじ」と、縋りついてぞ泣き給ふ。しかる所へ、飛「熱田の大宮司よりの飛脚なり。景清樣の御旅宿所はこれにてや候らん」とやがて文箱を出しける。十藏出であひ、「いかにも〳〵是は景清殿の旅宿にて候が、宿願あつて兵衛殿は淸水參詣いたされ候。御ふみを預り置き、歸られ次第見せ申さん。明日御出候へ」と飛脚を返し、兄弟ふみをひらいて見れば、をのの姫のふみにてあり。文「かりそめに御のぼりましまして、いなせの便もし給はぬは、かね〴〵きゝし阿古屋といへる遊女に御したしみ候か。未來なかけし我契、いかゞ忘れ給ふか」と、こま〴〵とぞかゝれける。阿古屋は讀みも果て給はず、はつとせきたる氣色にて、阿「うらめしや腹立や、口惜や妬ましや。戀にへだてはなき物を、遊女とは何事ぞ。子のある中こそ誠のつまよ。かくとは知らではかなくも、大切がりいとしがり、心を盡せし悔しさは、人に恨はなきものを、男畜生いたづらもの。アゝうらめしや無念や」と、文ずん〳〵にひきさきて、かこち恨みて泣き給ふ。ことわりとこそきこえけれ。十藏悦び、「それ見たか。此上は片時も早く訴人せん。最早思ひ切たか」といへば、阿「チ、何しに心の殘るべき。せめて訴人してなりとも、此恨

兵衞—景淸

遁れふ—身を引く

女さかしう云々—女が出過ぎて失敗する意の諺

は望次第との御制札を立られたり。我らが榮華の瑞相此時と覺えたり。兵衞はいづくに有けるぞ。はや六波羅へ訴へて、一かど御恩にあづからん。いかに〳〵」と申しける。阿古屋はしばし返事もせず、涙にくれてゐたりしが、「なふ兄上、そもや御身は本氣にて宣ふか。たゞしは狂氣し給ふかや。わらはが夫にて候へば、御身のためには妹聟。此子は甥にて候はずや。平家の御代にて候はば、誰かあらふ景淸と、飛ぶ鳥迄もおちし身が、今この御代にて候へばこそ、數ならぬ我々を賴みて御入候ものを、たとへば日本に唐土をそへて給はるとて、そもや訴人が成るべきか。飛ぶ鳥懷に入る時は狩人も助くるとよ。きのふ迄もけさ迄も、隔てぬ中をそもやそも、遁れふ物かさりとては、人は一代名は末代、思ひわけても御覽ぜよ」と、泣いつくどいつとゞめける。十藏から〳〵と打笑ひ、十「やれ名ををしみて德をとらぬは、昔風の侍とて當世は流行らぬ古い事。其上御邊が夫よ妻よなんどとて、心中立てはしけれ共、あの景淸はな、大宮司が娘をのの姫に最愛し、御身が事は當座の花、後悔する共叶ふまじ。女さかしくて牛賣れぬとは御分が事ぞ。諸事は兄に任せよ」と、とんで出れば又引とゞめ、阿「いや大宮司のむすめは人のいひなし惡口ぞや。景淸殿にかぎりさやうのことは候まじ。よし人はともかくも、わ

うらぶる―物憂くある、裏にかけたり
をかしい迄―迄は無意義の強辭
八幡―誓詞
犬が食ふ―夫婦爭は犬も喰はぬの諺を當時は食ふと云へり

聞けば大宮司の娘、をのの姫とやらんに深い事と承る。尤かな、みづからは子持筵のうらぶれて、見る目にいやとおぼすれども、子に絆されて御出か。悋氣するではなけれども、浮世狂ひも年による。しや、眞にをかしい迄、よい機嫌じや」と有りければ、景清打わらひ、「是は迷惑。其大宮司の娘をのの姫には、しか〳〵物をもいはばこそ。八幡々々さふした事で更になし。そちならで世の中に、いとしい者が有べきか」と、なほこそもたるる袖枕。阿古屋も心打解て、思ふあまりの戀いさかひ。犬が食ふとや是ならん。銚子盃たづさへて、いや石に酌とらせ、三とせ積りし物語、かたらひあかし給ひける、契の程こそゆかしけれ。景清のたまふやう、「我久しく尾州に蟄居して、觀音參詣怠れり。在京の間は一先日參の心ざしあり。さりながら是より毎日往來せば、人の咎めも如何なり。とゞろきの御坊にて、一七日は通夜申す。やがて歸り對面せん」と、編笠取て打かづき、おもてを指して出給へば、いや石門迄送り出で、「さらば〳〵」の小手招き、しほらしかりける生先なり。こゝに阿古屋が一腹の兄、伊庭の十藏廣近は、北野詣をしたりしが、大息ついでわが家にかへり、妹の阿古屋をかたはらに招き、「是を見よ、誠に果報は寢てまてとや。惡七兵衛景清を討てなりとも、搦めてなりとも參らせたる物ならば、勳功

しほ—機會

ずんど—最の意（俚言集覽）

より遊女なれ共、妹脊のなさけ細やかに、世になき景淸をいとほしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家督をつがせんと、ならはぬ女の身ながらも、兵法の打太刀し、武道を敎ふる心ざし、たぐひ稀にぞ 三重 聞えける。かゝる所へ、惡七兵衞景淸は重忠を打損じ、やう／＼として淸水や、あこやが庵に著給ふ。女房子供を引連れ、阿「こは珍らしや何として御上り候ぞ。先こなたへ」と請じける。景淸申しけるは、「ない／＼御身も知るごとく、我平家の御恩を報ぜんため、鎌倉殿を狙へ共、其かひなくて一兩年は、尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ、空しく月日を送りし所に、此度畠山の重忠東大寺再興の奉行に上るをよきしほと、先重忠を狙はんため、我身を卑しき下郎にしなし、すでに間近く附寄しが、運强き重忠にて、我らが智略現はれ、本意なくも打損じ、一向に重忠と刺違へ死なんとは思ひしが、思へば御身がなつかしく、子供が顏をも見まほしく、無念ながらもながらへて、扨唯今の仕合せなり。誠に久しく逢ぬ間に、子供もいたう成人し、御身もずんと女房をし上たり。なんでもこよひはしつぽりと、積るつらさを語らん」と、しとゝよれば、阿「ゑゝ榮耀らしい。かく浪人の憂身といひ、殊更敵を持つたる身が、せめて一年に一度の便も仕給はず。ヲ、それも道理よ。此ごろ

薪を云々ー無骨者も花を慕ふ、景に蔭をかく

拂うて落ゆかん」と番匠箱をおしひらき、大鑿小鑿手斧鋸鉋、屈竟一の手裏劍と、おつ取りおつ取り打立れば、さしもに勇む軍兵共、わつといふてはさつと引。なほも寄來るもの共を、小屋の小柱引拔て、八方無隅に三重ふりまはれば、秋の嵐にちる紅葉、むら〳〵ぱつとぞ逃げにける。景「チヽさもさふづさもあらん。此たびは仕損ず共、此景清が一念の劍は岩を徹さんものを」と、跳りあがり飛あがり、齒がみをなして行く雲の、月の都に上りける。悪七兵衛が力業、早業輕業神通業、唯飛ぶ鳥のごとくなりとて、恐れぬものこそなかりけれ。

第二

去程に、誠や猛武士も、戀に窶るゝならひあり。薪を負へる山人も、たちよる花の景清も、つねに清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂の片ほとりに、阿古屋といへる遊君に、假初伏のかり枕、いつしかなれて今ははや、二人の若をぞまうけける。兄のいやいし六才、弟のいや若四才にて、世におとなしくぞ見えにける。阿古屋はもと

餘すな—逃がすな

尾羽云々—浪人者の窶れし貌（俚言集覽）

しおき、迷惑さうにもみ手をして、表にこそ出らるれ。重忠幕の内より御覧じて、重「しばらくしばらく。いかにかた〴〵、平家の落人こゝかしこに忍びゐて、君を狙ふと聞きけるが、唯今の人足は、まさしく惡七兵衛と見しはひがめか。彼餘すな。いふても是は一大事の柱立の淨めの庭。穢らしてはいかゞなり。前なる野邊に追出し打て捨てよ」と宣へば、もとよりはやる關東武者、我も〳〵とかけむかふ。景清是をみて、になひ棒に仕込みたる件の痣丸するりと拔いてさしかざし、大ぜいを左手にうけ、頭を叩いてから〳〵と笑ひ、景「是お侍、某は尾羽を枯せし鎌倉の浪人者にて候が、朝夕に迫り、かゝる侘しきいとなみを仕る。さすが人目の恥かしく、顏をかくして有ければ、なんぞや某を惡七兵衛とは、眼がくらみてありけるか。たゞしは其景清が恐ろしさに面影に立けるか。よし何にもせよ。是程まで雜言せられ、堪忍罷ならず。景清程こそあらず共、そつと手なみをみせんず」と、例の痣丸小脇に搔込み、多勢が中に割て入り、火水になれと 三重 切合ける。時刻もうつらぬ其内に、十四五人切ふせ、「重忠に見參せん」と、此處のつまり彼處のくまに駈入り〳〵さわげども、大勢にへだてられ、景「今ははや是迄なり。深入して雜兵共に手負ふせられては、景清が末代の名折なり。またこそ時節あるべけれ。いでおつ

色代—挨拶
緩怠—横着、失禮
ぞんざい—粗忽
推參—無禮
かだ—ずるい事

ら〳〵、えいさら〳〵てう〳〵と、打始め取始め、三々九度の御酒をさゝげ、千たび百たび祈念して、重忠に色代し、棟梁座をぞ下りける。手斧はじめも事すぐれば、數千の番匠下々まで、皆々小屋にぞ　三重　入りにける。はるかの跡より、四十ばかりの男なるが、人足とおぼしくて、晝餉の櫃をになひ、頬冠りして通りける。秩父の執權本田の二郎きつと見て、「ヤア是成下郎めは、かゝる晴いの庭なるに、頬冠は緩怠なり。色代せよ」と咎むれば、かの男小聲になり「作法もしらぬ下々なれば御免」と云ひてつつと通る。本「どこへ〳〵。扨々ぞんざい千萬なる奴めかな。頬冠を取ずんば、誰かある、それ打て擲け」と下知すれば、中間共承り一どにはらりと取まはす。番匠の棟梁此よしを見るよりも　棟「いや是本田殿、彼奴は其日雇ひの人足にて、差別も知らぬ下郎なれば、さぞ推參も候べし。去ながらかゝる目出たき折なれば、たゞ何事も穩便にはからひ給へ」と申ける。本田聞も入れず、「いやさ、彼めはちと人に似たるものの候」といへば、棟「扨めづらしや本田殿、人が人に似たるとは事新しう候。いかに下郎め、おのれ大分の錢を取りながら、かだをして働かず。横著ひろぐゆゑにこそ人々にも怪まれ、祝儀に邪魔をなしけるよ。價を損にする迄ぞ。罷り歸れ」と叱りければ、「よき幸」と景清は荷ひし櫃を下

兜率天—六欲天の第四にて彌勒の法を說かるゝ所

ふきたて—瓦に葺き入る

こまる—垂木の端

庾—米倉

と、濱の眞砂と君が世は、かぞへつくさじおもしろや。しかるにこの大伽藍と申すは、聖武皇帝の御建立、三國無雙の靈場なり。兜率天の內院を、さもあり〳〵と移さるゝ。塔の高さが二十丈、佛の御丈十六丈、雲につゞけばおのづから、月を後光と三笠山、柱のかずは天台の、一念三千の機をあらはして、三千本と定まれり。軒の樋は法華經の文字のかず、六萬九千三百八十四本なり。山門には獅子の狛。さて正面より四方四面の、とびら〳〵の彫物には、松に唐竹牡丹に獅子、豹と虎とが威勢を爭ひ、百千萬のけだものをほつたて〳〵、くるり〳〵と巖に追上げ追下し、風に嘯ぶく波間より、紫雲を卷て登り龍叉くだり龍、玉をつかんで虛空にさゝげ、鱗を立たる其いきほひ、手をつくさせて彫りつくし、扨棟瓦檐瓦、金銀瑠璃玻璃、硨磲瑪瑙、珊瑚琥珀水晶をふきたてふきたて、珊瑚樹のこまるをひつしと打たる臺には、金襴錦に柱を包んで黃金の鋲を輝かせん。棟木を負ふの柱をして、南畝の農夫よりも多く、梁を架するの椽は機上の工女よりも多く、釘頭の磷々たるは、庾にあるの粟よりも多く、日暮の說法讀誦の聲は、市塵の言語よりも多からしむ。佛法繁昌四海鎭護の大伽藍、如意滿足のはしら立。めでたし〳〵、ヲヽめでたしと、手斧おつ取りてう〳〵〳〵。槌おつ取てはつしてい〳〵。鉋取延さ

松にも云々―謠が松にも花を貸すの言掛け
横目―見張り役
柳櫻を云々―靑白を交へる、古今集の歌を引く
むべも云々―此殿は宜も富みけりの歌をとり屋棟が三つも四つもあるを云ふ
つきせぬ―月にかけて西方淨土を利かせたり

年春過ぎて夏きにけらし白旗の、源氏の大將賴朝公は、南都東大寺大佛再興の御願にて、畠山の重忠奉行職を承り、松にも花を春日野や、飛ぶ火の野邊に假屋をうたせ、横目帳附勘定方、大和大工に飛驒匠、杣人木作り事をはり、今日吉日の柱立。我身は棧敷に一だん高く、村濃の大幕打せ、つゞいて見えしは本田の二郎、其外のさぶらひども、帳場々々に標を立て、弓鎗長刀ふきぬきに、やなぎさくらをこきまぜて、花やかなりける御ふしんなり。かくて番匠の棟梁、木工の頭修理の頭、おのがしなる出立、吉方にうちむかひ、まづやがための、祭文を唱へつゝ、御幣を振て再拜し、手斧はじめのその儀式、嚴重にこそつとめけれ。むべもとみけりさきくさの、みつば四つばの大伽藍、手斧はじめの壽に、千代をかためて柱立。春は東に立そむる、是萬物の初めなり。夏は南にめぐる日の、あやめが軒やかほるらん。秋は又西の空、盡せぬ契かたどりて、天の河原に橋柱、しらげたつるや擣鉋、雲をそなたに遣鉋。冬は北にて筒井筒、水こそ家の寶なれ。めぐれやまはれ井戸車、かまど賑はふへつい殿。先づ陰陽の二ばしら、二本のはしらは女神男神を表したり。三本のはしらは、三世の諸佛、四本のはしらに四天王、四海泰平民安全と祝ひこめたる墨壺の、いとの直なる國なれば、寶や宿に三目錐。鋸屑のかず〳〵

四相―我相、人相、衆生相、壽者相

ござんなれ―こそあるなれの約

構へて―注意して

空しき月日を送り候。然る處に今朝屈竟の事を聞出し候。其故は、鎌倉殿は南都東大寺大佛殿を御再興あるべしとて、秩父の重忠かの奉行を承り、きのふの暮ほどに此處をうつて通り候よし。たとへば頼朝七重八重の城廓に取こもり、天地に黒鐵の網を張つて用心きびしく候とも、此景清が一念にてなどか狙はで候べき。去ながら重忠常に頼朝の側を離れず、神變不思議を兼ねたれば、其身は都にありながら、心はなほ鎌倉殿の側にあり。かう申す景清は二相を悟り候へ共、重忠は四さうを悟る。頼朝に出合既に討んとせしこと三十四度に及べども、彼の重忠に隔てられ、終に本望遂げ申さず。然れば先重忠をさへ打取らば、頼朝を打ん事踵を廻らすべからず。重忠此度東大寺の奉行にのぼる事幸かな仕合哉。天の時來りたり。忍びやかに南都に下り、重忠が首ひつさげて參らんに早お暇」と申さるゝ。大宮司聞給ひ「實に屈竟の時節ござんなれ。構へて人に悟られ給ふな。急いて事を仕損ずな。片時も早く」とありければ、北の方も悦びて、宗盛公よりたび給ふ、痣丸といふ名劍を景清に給はり、北「首尾よく仕果せ給ひなば一日も逗留なく、早く御歸りましませ」と門出の盃出さるれば、たがひに千秋萬歳と、獅子の勢龍の勢、いさみいさみて行く虎の、尾張の國を立出て、奈良の都へ三重上らるゝ。いで其頃は、文治五

出世景清

第一

普門品―法華經廿五章觀音經

大乘八軸―實敎を說ける法華經八巻

わりなし―隔てなし

扨も其後、妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第廿五は大乘八軸の骨髓、信心の行者大慈大悲の光明に預り奉る觀音智力ぞ有難き。爰に平家の一族惡七兵衛景清は、西國四國の合戰に討死すべきものなりしが、死は輕くして易し、生は重くして難し、所詮命を全うして平氏の怨敵、右大將賴朝を一太刀恨み、平家の恥辱を雪がんと落人となり、尾張の國熱田の大宮司に、いさゝか知るべありければ、深く忍びて居たりけり。素より大宮司は平氏の重恩の人なれば、深くいたはり、ひとり姫にをのの姫と聞えしを景清にめあはせ、子とも聟ともかしづき給ふ心ざしこそわりなけれ。景清大宮司の御前に出で、「誠にそれがし無二の御懇志に預り、ながく在居仕り、身は埋木と朽果ん、末賴みなき身ながらも、せめて賴朝を一太刀うかゞひ、君父の恨を散じ、その後は腹切て兎も角も罷りならんと

近松淨瑠璃集 上卷 目錄

を配し、振假名を正したる外、語格假名遣の普通の用法に違へるものに至るまで、一字一句も苟もせず、唄、三重等記號の必要なるものを存置し、地の文と詞とを區別し、語句の解を要するもの成るべく出典を擧げて之を鼇頭に註せり。

明治四十五年六月

校註者　忠見慶造

百日曾我	元祿十年十月	四十五歲
源氏烏帽子折	同十二年正月	四十七歲
長町女腹切	同十三年正月	四十八歲
淀鯉出世瀧德	同　年四月	同
蟬丸	同十四年五月	四十九歲
最明寺百人上臈	同十六年三月	五十一歲
曾根崎心中	同　年五月	同
薩摩歌	同十七年正月	五十二歲
心中重井筒	寶永元年四月	同
雪女五枚羽子板	同　二年七月	五十三歲

今本書を公にするに當りては、一々七行本十行本等の木版本に基き、漢字

る心中物「曾根崎心中」を出すに及びて、益々其戲曲的天才を發揮して世間の大喝采を博せり。爾來或は世話物に、或は時代物に、年々述作の筆を絕たず、其作前後通じて百十數番の多きに上れり。彼が文學史上の地位につきては、既に世評の動かすべからざるものあり、改めて玆に贅せず。

本卷に收めたるは左の諸篇にして、其題名、登場年月、年齡等を表示すれば左の如し。

出世景清	貞享三年二月	三十四歲
源氏冷泉節	貞享五年正月	三十六歲
松風村雨束帶鑑	元祿七年三月	四十二歲
釋迦如來誕生會	同　八年四月	四十三歲

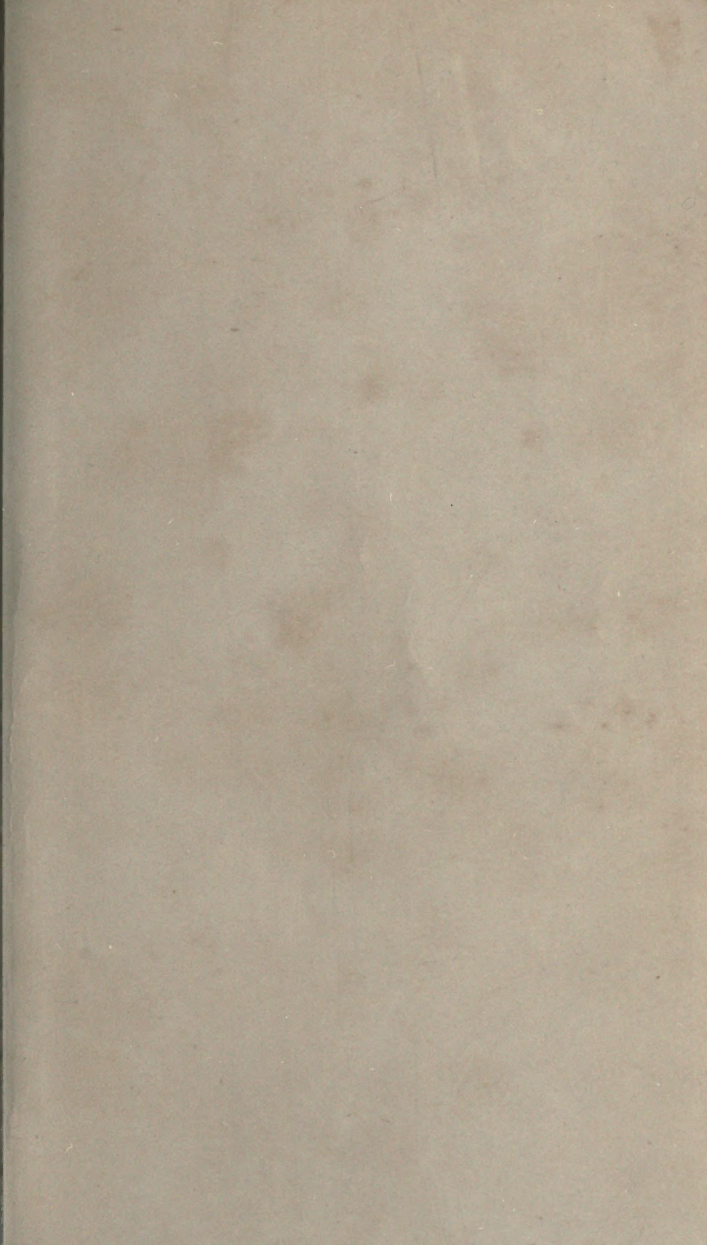
緒言

近松門左衛門、姓は杉森、名は信盛、平安堂巣林子等の號あり。承應二年に生れ、享保九年十一月二十二日七十二歳を以て歿せり。産地につきては異説紛々たれども、就中、長州萩の産にして、肥前唐津の近松寺に遊學し、因つて近松と稱したりとする說と、京都に生れ三井の近松寺に在りきとする說と、廣く世に傳へられ、近來後說を信ずる者多し。初め京都の堂上方に仕官せしが、やがて仕を辭し、近松門左衛門と稱して狂言淨瑠璃の著作に從事し、延寶五年、二十五歳の時には、既に狂言作者として名聲を馳せたり。後元祿四年大阪に轉住し、專ら竹本筑後掾の爲めに淨瑠璃を著はせしが、其作物次第に老成圓熟の域に進み、元祿十六年、初めて當時の事實を仕組みた

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

近松淨瑠璃集

上卷

Chikamatsu, Monzaemon
Chikamatsu joruri shu